鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XIII

大島遺跡

（川内市）

２００５年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



弥生時代の土器（32号竪穴住居跡）



風字硯



968



970 969 971 975 972 973 974 978 976 977

緑釉陶器

序　　文

この報告書は，九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って，平成11・12年度に実施した川内市（平成16年10月12日から薩摩川内市）に所在する大島遺跡発掘調査の記録です。

大島遺跡は薩摩国分寺跡と川内川との中間の位置にある自然堤防上に立地しており，縄文時代から近世までの複合遺跡です。弥生時代では竪穴住居跡や終末期の土器，石庖丁・磨製石鏃などが出土しました。さらに，古墳時代では大刀・剣あるいは金環が副葬された土坑墓が検出されました。

遺跡の主体となる古代では竪穴住居跡，掘立柱建物跡，各種の土坑，溝状遺構などの多様な遺構が発見されました。また，遺物では土師器や須恵器などの多量の食器のほか，越州窯系青磁や緑釉陶器など出土例の少ない資料も出土しており，さらに風字二面硯や石帯も出土していることから，薩摩国府と関係の深い貴重な遺跡であることが明らかになりました。

この調査成果が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり，日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ，ご協力をいただいた川内市の関係部局，関係諸機関，そして，調査に参加された方々に対し厚くお礼を申し上げます。

平成17年３月

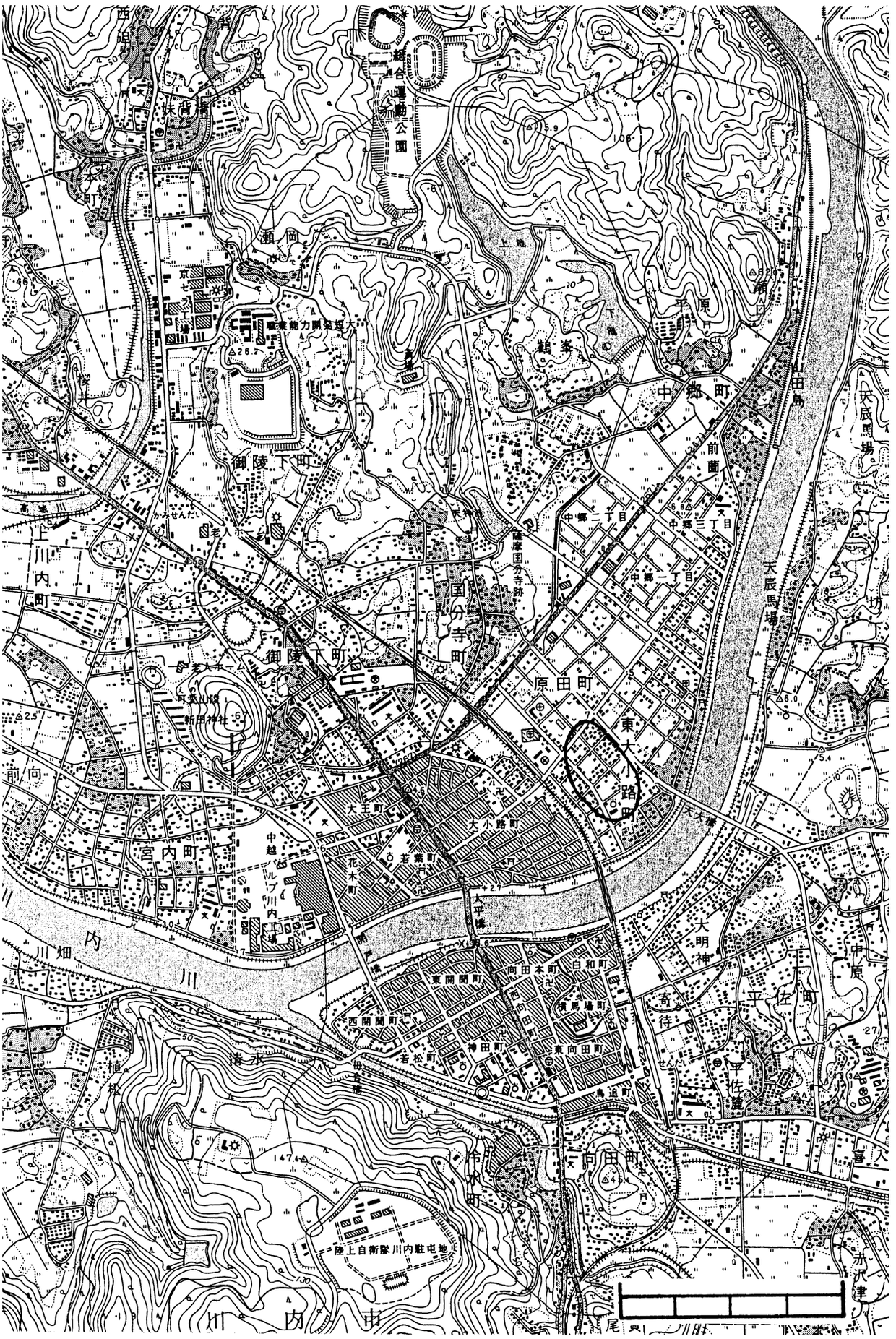
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　木　原　　俊　孝

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおしまいせき
書　　名	大島遺跡
副 書 名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅻ
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	８０
編 著 者 名	宮田栄二，平木場秀男
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899-4461 国分市上之段1175-1　TEL0995-48-5811
発 行 年 月 日	2005年 ３月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °’”	東経 °’”	調査期間	調査 面積	調査起因
大島遺跡 （おおしまいせき）	鹿児島県 （かごしまけん） 川内市 （せんだいし）	462021	6-201-0	31 ° 49 ’ 18 ”	130 ° 18 ’ 43 ”	19981126 19990506 ～20000324 20000507 ～20010319	1,960㎡	九州新幹線鹿児島ルート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大島遺跡 鹿児島県川内市		縄文晩期 弥生	住居跡，溝状遺構	黒川式土器，石鏃，石斧，高橋式，入来式，黒髪式，松木薗式，中津野式，石庖丁，磨製石鏃，磨石	
		古墳時代	土坑墓，土坑	大刀，剣，鉄鏃，金環，須恵器，土師器（高杯，甑）	
		古代	住居跡，掘立建物跡，土坑，ピット群，溝状遺構	土師器（坏，皿，甕，鉢），須恵器（蓋，坏，甕，壺），緑釉土器，越州青磁，風字二面硯，猿面硯，土錘，紡錘車，砥石，刀子，鉄鏃，石帯，鈴，玉，竈形土器，製塩土器	
		中世	掘立柱建物跡，畠跡，配石遺構，土坑	土師器，瓦質土器，陶器，中国陶器，白磁，青磁，土製品，滑石製石鍋片	
		近世	方形竪穴状遺構，井戸状遺構	薩摩焼，染付け，羽口	



総合運動公園
妹背橋
瀬岡
京セラ工場
職業能力開発短大
鶴峯
平原
中郷町
前薗
中郷二丁目
中郷三丁目
中郷一丁目
天辰馬場
御陵下町
上川内町
国分寺町
薩摩国分寺跡
原田町
東大小路町
大王町
大小路町
若葉町
花木町
宮内町
中越
ルプ川内工場
大明神
平佐町
平佐麓
向田本町
白和町
東開聞町
西開聞町
横馬場町
神田町
若松町
東向田町
鳥追町
向田町
陸上自衛隊川内駐屯地
川内市

大島遺跡の位置

例　言

1　本報告書は，九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う川内地区大島遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は鹿児島県川内市東大小路町に所在し，県遺跡台帳の川内市6－201－0に該当する。

3　発掘調査は，日本鉄道公団九州新幹線建設局からの受託事業として鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は，平成12年度から平成13年度にかけて実施し，整理作業は平成15年度に実施した。

5　本書の遺物番号は時代ごとの通し番号であり，本文，挿図，図版と一致する。

6　出土した石器の実測・トレースの一部は㈱九州文化財研究所に委託した。また出土種子の同定については㈱パリノ・サーヴェイに依頼した。

7　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

8　本書で使用した方位は，すべて磁北である。

9　現地調査に関する実測及び写真撮影は，それぞれ各調査年度の調査担当者で行ったが，一部の実測については㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

10　土器の実測・トレース，遺構図の製図・トレース等は，宮田栄二，平木場秀男が中心となり整理作業員の協力を得ながら行った。

11　本書の執筆分担は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ章と第Ⅳ章２節，第Ⅴ章３節を宮田栄二が，第Ⅳ章1節を相美伊久雄が，第Ⅴ・Ⅷ・Ⅸ章と第Ⅶ章２節３～７を平木場秀男が行った。第Ⅺ章まとめについては，宮田，平木場のほか，石庖丁について永濵功治の分析も掲載した。

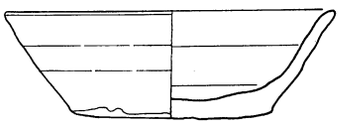
12　本書に掲載した遺物写真の撮影は鶴田静彦，福永修一，横手浩二郎，西園勝彦が行った。

13　本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，宮田栄二，平木場秀男が担当した。

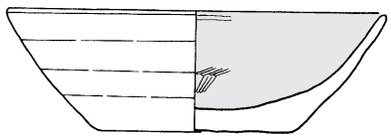
14　出土遺物及び発掘調査・整理作業に関わる図面・写真等の記録類は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

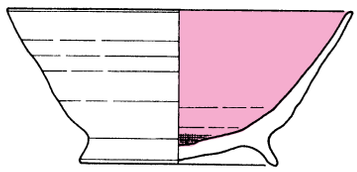
1.古代の土器のうち，普通の土師器，内黒土器（黒色土器），内朱土器，須恵器，緑釉土器，越州窯系青磁については，アミかけ，二色刷り，断面の黒塗り等を使用して下のように区別した。



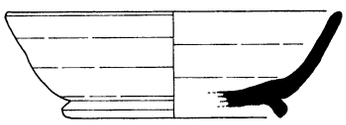
土師器



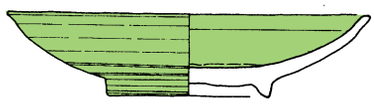
内黒土器



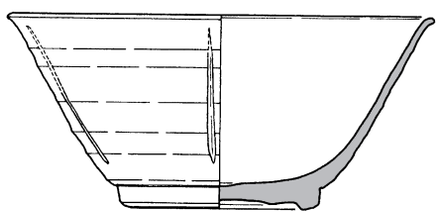
内朱土器



須恵器

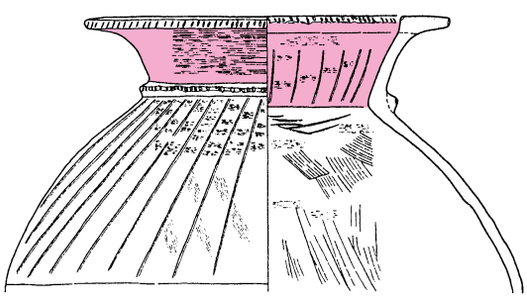


緑釉陶器

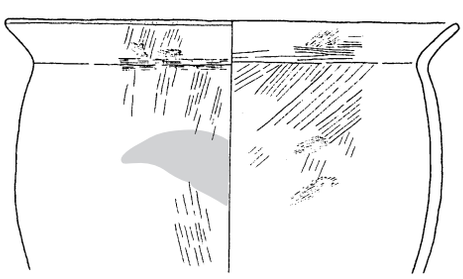


越州窯系青磁

2.弥生土器の赤色顔料とスス付着については，下のような二色刷とスクリントーンで区別した。

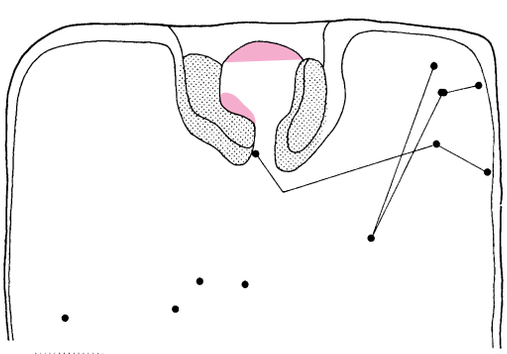


赤色顔料

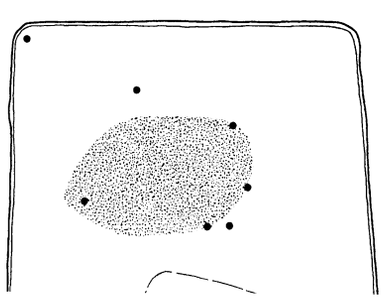


スス付着

3.住居跡内のスクリントーン，アミかけは次の通り区別した。



黄色粘土　　焼土



炭化物集中

目　次

第Ⅰ章　調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の概要と調査経過 …… 3
　第４節　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要 …… 5
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 8
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 8
　第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 8
第Ⅲ章　遺跡の層位…… 12
第Ⅳ章　縄文時代の遺物…… 17
　第１節　出土土器 …… 17
　第２節　縄文時代の石器 …… 21
第Ⅴ章　弥生時代の遺構と遺物…… 27
　第１節　検出遺構 …… 27
　　１ 弥生時代の竪穴住居跡 …… 27
　　２ 弥生時代の溝状遺構 …… 46
　　３ 弥生時代の土坑・ピット群 …… 50
　　４ 弥生土器集中区 …… 52
　第２節　出土土器 …… 62
　　１ 甕・２ 大甕 …… 62
　　３ 壺・４ 鉢 …… 79
　　５ 高坏・器台・蓋型土器他 …… 98
　第３節　弥生時代の石器 ……115
第Ⅵ章　古墳時代の遺構と遺物……124
　第１節　検出遺構 ……124
　　１ 古墳時代の土坑墓 ……124
　　２ 古墳時代の土坑 ……125
　第２節　出土遺物 ……125
　　１ 土師器・須恵器 ……131
　　２ 鉄器 ……132
第Ⅶ章　古代の遺構と遺物……134
　第１節　検出遺構 ……136
　　１ 古代の住居跡 ……136
　　２ 古代の掘立柱建物跡 ……171
　　３ 大型竪穴状遺構 ……171

4 古代の土坑……177
5 古代の溝状遺構……193
6 炉跡……198
7 焼土遺構・8 ピット群……199
第2節　出土遺物……207
1 土師器……207
2 須恵器……239
3 緑釉陶器……261
4 越州窯系青磁・5 焼塩土器……264
6 土錘・7 紡錘車……270
8 古代瓦……278
9 鉄器･鉄製品……278
10 青銅製品……283
11 古代の石器・石製品……285
第Ⅷ章　中世の遺構と遺物……292
第1節　検出遺構……292
1 中世の掘立柱建物跡……292
2 配石遺構……292
3 畠跡……296
4 中世の土坑……296
第2節　出土遺物……296
1 土器……296
2 磁器・3 土製品･滑石製品……299
第Ⅸ章　近世の遺構と遺物……306
第1節　検出遺構……306
1 方形竪穴状遺構……306
2 近世の溝状遺構・土坑……306
第2節　出土遺物……309
第Ⅹ章　分析・同定……310
第Ⅺ章　調査のまとめ……313
第1節　弥生時代について……313
第2節　古墳時代について……317
第3節　古代について……318

挿 図 目 次

第１図　大島遺跡周辺の遺跡…… 10
第２図　遺跡の基本土層柱状模式図…… 12
第３図　遺跡内各地点の土層　…… 12
第４図　土層図１…… 13,14
第５図　土層図２…… 15,16
第６図　縄文時代の土器１(晩期土器①)…… 18
第７図　縄文時代の土器２(晩期土器②)…… 19
第８図　縄文時代の石器１(石鏃,スクレイパー他)
…… 22
第９図　縄文時代の石器2(石核他)…… 24
第 10 図 縄文時代の石器 3(打製石斧他)…… 25
第 11 図 弥生時代の 15 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 28
第 12 図 弥生時代の 16 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 30
第 13 図 弥生時代の 19 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 31
第 14 図 弥生時代の 26 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 33
第 15 図 弥生時代の 27 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 34
第 16 図 弥生時代の 28 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 35
第 17 図 弥生時代の 30 号竪穴住居跡と
出土遺物…… 37
第 18 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡１　… 38
第 19 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡２
(出土遺物①)…… 39
第 20 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡３
(出土遺物②)…… 40
第 21 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡４
(出土遺物③)…… 41
第 22 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡５
(出土遺物④)…… 42
第 23 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡６
(出土遺物⑤)…… 43
第 24 図 弥生時代の 32 号竪穴住居跡７
(遺物出土状況)…… 44
第 25 図 弥生時代の 35 号竪穴住居跡１　… 45
第 26 図 弥生時代の 35 号竪穴住居跡２
(出土遺物①)…… 47
第 27 図 弥生時代の 35 号竪穴住居跡３
(出土遺物②)…… 48
第 28 図 弥生時代の溝状遺構と出土遺物… 49
第 29 図 弥生時代の土坑,ピットと出土遺物 51
第 30 図 弥生土器集中区１(遺物出土状況)… 53
第 31 図 弥生土器集中区２(出土遺物①)…… 54
第 32 図 弥生土器集中区３(出土遺物②)…… 56
第 33 図 弥生土器集中区４(出土遺物③)…… 57
第 34 図 弥生土器(甕)分類模式図　…… 63
第 35 図 弥生時代の土器１(甕Ⅰ類)　…… 64
第 36 図 弥生時代の土器２(甕Ⅰ･Ⅱ類)　…… 66
第 37 図 弥生時代の土器３(甕Ⅲ類)　…… 68
第 38 図 弥生時代の土器４(甕Ⅲ類)　…… 69
第 39 図 弥生時代の土器５(甕Ⅳ･Ⅴ･Ⅵ類)… 70
第 40 図 弥生時代の土器６(甕Ⅶａ類)…… 71
第 41 図 弥生時代の土器７(甕Ⅶｂ･Ⅷ類)　… 72
第 42 図 弥生時代の土器８(甕Ⅸ類)　…… 74
第 43 図 弥生時代の土器９(甕 Ⅹ･Ⅺ類)…… 76
第 44 図 弥生時代の土器 10(甕 底部)…… 78
第 45 図 弥生時代の土器 11(大甕Ⅰ～Ⅳ類)　80
第 46 図 弥生時代の土器 12(大甕Ⅳ,Ⅴ類)… 81
第 47 図 弥生時代の土器 13(胴部Ⅰ･Ⅱ類)… 82
第 48 図 弥生時代の土器 14(胴部Ⅲ･Ⅳ類)… 83
第 49 図 弥生時代の土器 15(壺Ⅰ～Ⅶａ類)　85
第 50 図 弥生時代の土器 16(壺Ⅶｂ～Ⅸ類)　87
第 51 図 弥生時代の土器 17(壺Ⅹ類)…… 89
第 52 図 弥生時代の土器 18(壺Ⅺ,Ⅻ類)…… 90

第 53 図 弥生時代の土器 19 (壺Ⅻ , ⅩⅣ類 , 小型丸底壺) …… 92
第 54 図 弥生時代の土器 20(壺底部Ⅰ～Ⅲ類) 94
第 55 図 弥生時代の土器 21(壺底部Ⅲ～Ⅴ類) 95
第 56 図 弥生時代の土器 22 (鉢Ⅰ～Ⅲ類) … 97
第 57 図 弥生時代の土器 23 (鉢Ⅳ・Ⅴ類 底部) 99
第 58 図 弥生時代の土器 24 (高坏) …… 101
第 59 図 弥生時代の土器 25 (器台, 蓋他) … 103
第 60 図 弥生時代の遺構配置図
弥生時代の土器 (出土分布①) …… 105
第 61 図 弥生時代の土器 (出土分布②)…… 106
第 62 図 弥生時代の石器 1 (磨製石鏃と未製品)116
第 63 図 弥生時代の石器 2 (石庖丁) …… 117
第 64 図 弥生時代の石器 3 (磨石) …… 119
第 65 図 弥生時代の石器 4 (凹石) …… 120
第 66 図 弥生時代の石器 5 (棒状敲石他) …… 121
第 67 図 弥生時代の石器 6 (石皿) …… 122
第 68 図 古墳時代 土坑墓 1 …… 124
第 69 図 古墳時代 土坑墓 1 の出土遺物 … 125
第 70 図 古墳時代 土坑墓 2 と出土遺物 … 127
第 71 図 古墳時代 土坑と出土遺物 …… 127
第 72 図 古墳時代 遺物分布図 …… 128
第 73 図 古墳時代の出土遺物 1 (土師器①)… 129
第 74 図 古墳時代の出土遺物 2 (土師器②)… 130
第 75 図 古墳時代の出土遺物 3 (須恵器) … 131
第 76 図 古墳時代の出土遺物 4 (鉄器) …… 132
第 77 図 古代 遺構分布図 1…… 134
第 78 図 古代 遺構分布図 2…… 135
第 79 図 古代の 1 号住居跡と出土遺物 …… 137
第 80 図 古代の 2 号住居跡と出土遺物 …… 139
第 81 図 古代の 3 号住居跡と出土遺物 1 … 140
第 82 図 古代の 3 号住居跡出土遺物 2 …… 141
第 83 図 古代の 3 号住居跡出土遺物 3 …… 142
第 84 図 古代の 4 号住居跡と出土遺物…… 143
第 85 図 古代の 6 号住居跡 平・断面図 …… 144
第 86 図 古代の 6 号住居跡 出土遺物 1…… 146
第 87 図 古代の 6 号住居跡 出土遺物 2…… 148
第 88 図 古代の 6 号住居跡 出土遺物 3…… 149
第 89 図 古代の 6 号住居跡 出土遺物 4…… 150
第 90 図 古代の 10 号住居跡平・断面図…… 151
第 91 図 古代の 10 号住居跡 出土遺物 …… 152
第 92 図 古代の 8 号住居跡とカマド…… 153
第 93 図 古代の 8 号住居跡 出土遺物 …… 154
第 94 図 古代の 5 号住居跡と出土遺物…… 155
第 95 図 古代の 12 号 ,9 号住居跡と出土遺物
…… 156
第 96 図 古代の 11 号住居跡平・断面図…… 157
第 97 図 古代の 11 号住居跡 出土遺物 …… 158
第 98 図 古代の 7 号住居跡と出土遺物…… 159
第 99 図 古代の 21 号住居跡と出土遺物 … 161
第 100 図 古代の 13 号住居跡と出土遺物 1 162
第 101 図 古代の 13 号住居跡出土遺物 2 … 163
第 102 図 古代の 13 号住居跡出土遺物 3 … 164
第 103 図 古代の 31 号 ,36 号住居跡と出土遺物
…… 166
第 104 図 古代の 34 号住居跡と出土遺物 … 167
第 105 図 古代の 29 号 ,23 号 ,24 号,
25 号住居跡と出土遺物 …… 169
第 106 図 古代の 33 号 ,37 号住居跡と出土遺物
…… 170
第 107 図 古代の掘立柱建物跡と出土遺物 172
第 108 図 古代の大型竪穴状遺構 …… 173
第 109 図 古代の大型竪穴状遺構出土遺物 1
…… 174
第 110 図 古代の大型竪穴状遺構出土遺物 2
…… 175
第 111 図 古代の大型竪穴状遺構出土遺物 3
…… 176
第 112 図 K15,K13 の土坑と出土遺物 …… 178
第 113 図 K9 古代の土師器集積土坑と出土遺物…… 179
第 114 図 K9 古代の土坑 1 ～ 4 と出土遺物 181
第 115 図 K9 ～ 10 古代の土坑 5・6 及び K6
土坑 1 と出土遺物…… 182

第 116 図 K6 ～ 8 古代の土坑出土遺物…… 184
第 117 図 K6 ～ 8 古代の瓦入り土坑と出土瓦
…… 185
第 118 図 K11 ～ 12 古代の土坑 1 …… 187
第 119 図 K11 ～ 12 古代の土坑 2 …… 189
第 120 図 K11 ～ 12 古代の土坑 3 …… 191
第 121 図 K11 ～ 12 古代の土坑 出土遺物 1
…… 192
第 122 図 K11 ～ 12 古代の土坑 4 …… 194
第 123 図 K11 ～ 12 古代の土坑 5 …… 195
第 124 図 K11 ～ 12 古代の土坑 出土遺物 2
…… 195
第 125 図 K16,K14 古代の溝状遺構と出土遺物
…… 197
第 126 図 K12 古代の溝状遺構と出土遺物 198
第 127 図 古代の炉跡 , 焼土遺構と出土遺物 200
第 128 図 古代のピット群と出土遺物 …… 201
第 129 図 古代の遺物 1 (土師器 坏①) …… 208
第 130 図 古代の遺物 2 (土師器 坏②) …… 209
第 131 図 古代の遺物 3 (土師器 坏③) …… 211
第 132 図 古代の遺物 4 (土師器 坏④) …… 212
第 133 図 古代の遺物 5 (土師器 坏⑤) …… 213
第 134 図 古代の遺物 6 (土師器 充実高台) … 214
第 135 図 古代の遺物 7 (土師器 埦①) …… 215
第 136 図 古代の遺物 8 (土師器 埦②) …… 216
第 137 図 古代の遺物 9 (土師器 蓋･皿)…… 218
第 138 図 古代の遺物 10 (土師器 高台付皿) 219
第 139 図 古代の遺物 11 (土師器 内黒坏･埦) 221
第 140 図 古代の遺物 12 (土師器 内黒埦他) … 222
第 141 図 古代の遺物 13 (土師器 内朱坏・埦) 223
第 142 図 古代の遺物 14 (土師器 甕①) …… 226
第 143 図 古代の遺物 15 (土師器 甕②) …… 227
第 144 図 古代の遺物 16 (土師器 甕③) …… 228
第 145 図 古代の遺物 17 (土師器 甕④) …… 229
第 146 図 古代の遺物 18 (土師器 鍋) …… 230
第 147 図 古代の遺物 19 (土師器 鉢①) …… 231
第 148 図 古代の遺物 20 (土師器 鉢②) …… 232
第 149 図 古代の遺物 21 (土師器 甑) …… 233
第 150 図 古代の遺物 22 (土師器 把手) …… 235
第 151 図 古代の遺物 23 (カマド形土器①) … 236
第 152 図 古代の遺物 24 (カマド形土器②) … 237
第 153 図 古代の遺物 25 (その他土器 , 土製品)
…… 238
第 154 図 古代の遺物 26 (須恵器 坏) …… 240
第 155 図 古代の遺物 27 (須恵器 蓋 , 皿) …… 241
第 156 図 古代の遺物 28 (須恵器 甕①) …… 243
第 157 図 古代の遺物 29 (須恵器 甕② , 鉢) … 244
第 158 図 古代の遺物 30 (須恵器 壺①)…… 245
第 159 図 古代の遺物 31 (須恵器 壺②) …… 245
第 160 図 古代の遺物 32 (須恵器 小型壺他) … 248
第 161 図 古代の遺物 33 (風字硯 , 転用硯①)… 249
第 162 図 古代の遺物 34 (転用硯①)…… 250
第 163 図 古代の遺物 35 (転用硯②)…… 251
第 164 図 古代の遺物 36 (緑釉陶器)…… 262
第 165 図 古代の遺物 37 (越州窯青磁①) …… 266
第 166 図 古代の遺物 38 (越州窯青磁②) …… 267
第 167 図 古代の遺物 39 (焼塩土器)…… 269
第 168 図 古代の遺物 40 (管状土錘)…… 271
第 169 図 古代の遺物 41 (双孔棒状土錘①) … 274
第 170 図 古代の遺物 42 (双孔棒状土錘② , 紡錘車)
…… 275
第 171 図 緑釉 , 越州窯青磁他 出土分布図 277
第 172 図 古代の遺物 43 (軒丸瓦 , 軒平瓦) … 279
第 173 図 古代の遺物 44 (丸瓦) …… 280
第 174 図 古代の遺物 45 (平瓦) …… 281
第 175 図 古代の遺物 46 (鉄器 , 鉄製品) …… 282
第 176 図 古代の遺物 47 (銅製品) …… 283
第 177 図 古代の遺物 48 (砥石①) …… 287
第 178 図 古代の遺物 49 (砥石②) …… 288
第 179 図 古代の遺物 50 (砥石③) …… 289
第 180 図 古代の遺物 51 (軽石製品 , 玉類) … 290
第 181 図 中世の遺構 1 (掘立柱建物跡) …… 293
第 182 図 中世の遺構 2 (配石遺構，土坑)…… 294
第 183 図 中世の遺構 3 (畠跡)
中世の遺構配置図…… 295

第 184 図 中世の遺物 1 (土師器·須恵器他) … 298
第 185 図 中世の遺物 2 (磁器)…… 302
第 186 図 中世の遺物 3 (土製品·滑石製品) … 304
第 187 図 中世の遺物出土分布図 …… 305
第 188 図 近世の遺構と遺物 1(方形竪穴状遺構 , 井戸跡)…… 307
第 189 図 近世の遺構と遺物 2 (土坑) 近世の遺構配置図…… 308
第 190 図 大島遺跡弥生土器一覧 …… 316
第 191 図 石庖丁光沢斑分布図 …… 317
第 192 図 古代遺物出土一括資料 …… 321

表 目 次

第 1 表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(1) …… 5
第 2 表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(2) …… 6
第 3 表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(3) …… 7
第 4 表　周辺の遺跡一覧表 …… 11
第 5 表　縄文土器観察表 …… 20
第 6 表　縄文時代石器計測表 …… 26
第 7 表　弥生土器観察表 1 (遺構内出土①) … 58
第 8 表　弥生土器観察表 2 (遺構内出土②) … 59
第 9 表　弥生土器観察表 3 (遺構内出土③) … 60
第 10 表 弥生土器観察表 4 (遺構内出土④) … 61
第 11 表 弥生土器集計表 1 (遺物総数)…… 62
第 12 表 弥生土器集計表 2 (実測点数)…… 104
第 13 表 弥生土器観察表 5 (甕①) …… 107
第 14 表 弥生土器観察表 6 (甕②) …… 108
第 15 表 弥生土器観察表 7 (甕③) …… 109
第 16 表 弥生土器観察表 8 (甕④, 大甕) …… 110
第 17 表 弥生土器観察表 9 (壺①) …… 111
第 18 表 弥生土器観察表 10 (壺②)…… 112
第 19 表 弥生土器観察表 11 (鉢)…… 113
第 20 表 弥生土器観察表 12 (高坏 , 小型土器他) …… 114
第 21 表 弥生時代石器計測表…… 123
第 22 表 古墳時代鉄器計測表…… 133
第 23 表 古墳時代耳環計測表…… 133
第 24 表 古墳時代土器観察表…… 133
第 25 表 古代遺物観察表 2 (遺構内出土①) … 202
第 26 表 古代遺物観察表 2 (遺構内出土②) … 203
第 27 表 古代遺物観察表 3 (遺構内出土③) … 204
第 28 表 古代遺物観察表 4 (遺構内出土④) … 205
第 29 表 古代遺物観察表 5 (遺構内出土⑤) … 206
第 30 表 古代遺物観察表 6 (土師器①)…… 252
第 31 表 古代遺物観察表 7 (土師器②)…… 253
第 32 表 古代遺物観察表 8 (土師器③)…… 254
第 33 表 古代遺物観察表 9 (土師器④) …… 255
第 34 表 古代遺物観察表 10 (土師器⑤) …… 256
第 35 表 古代遺物観察表 11 (土師器⑥) …… 257
第 36 表 古代遺物観察表 12 (土師器⑦ · 須恵器①) …… 258
第 37 表 古代遺物観察表 13 (須恵器②) …… 259
第 38 表 古代遺物観察表 14 (須恵器③ · 転用硯) …… 260
第 39 表 古代遺物観察表 15 (未実測転用硯) 260
第 40 表 古代遺物観察表 16 (緑釉陶器) …… 263
第 41 表 古代遺物観察表 17 (越州窯系青磁) 264
第 42 表 古代遺物観察表 18 (焼塩土器) …… 269
第 43 表 古代遺物観察表 19 (管状土錘) …… 272
第 44 表 古代遺物観察表 20 (双孔棒状土錘) 276
第 45 表 古代遺物観察表 21 (紡錘車)…… 276
第 46 表 古代遺物観察表 22 (古代瓦)…… 284
第 47 表 古代遺物観察表 23 (鉄器·鉄製品) … 284
第 48 表 古代遺物観察表 24 (銅製品)…… 284
第 49 表 古代石器計測表…… 291
第 50 表 中世掘立柱建物跡計測表…… 292
第 51 表 中世遺物観察表 1 (土師器·須恵器他) 299
第 52 表 中世遺物観察表 2 (磁器) …… 303

第 53 表 中世遺物観察表 3 (土製品·滑石製品) 304
第 54 表 近世遺物観察表 …… 309
第 55 表 大島遺跡出土種実同定結果 …… 312
第 56 表 遺構別弥生土器出土状況一覧表 … 314

図 版 目 次

巻頭カラー 1　弥生時代の土器 (32 号竪穴住居跡)
巻頭カラー 2　上 風字二面硯
下 緑釉陶器
カラー図版 1　上左 古墳時代の土師器 …… 325
上右 石製丸鞆
下 緑釉陶器
カラー図版 2　越州窯系青磁 1 …… 326
カラー図版 3　越州窯系青磁 2 …… 327
図版 1　上　調査風景 (K6 ～ 8 調査区) …… 328
中　調査風景 (K9 ～ 10 調査区)
下　土層 (K6 ～ 8 調査区)
図版 2　縄文時代の土器 …… 329
図版 3　上　弥生時代 15・16 号竪穴住居跡
検出状況 …… 330
中　弥生時代 16 号竪穴住居跡
遺物出土状況
下　弥生時代 19 号竪穴住居跡
完掘状況
図版 4　上　弥生時代 26 号竪穴住居跡
遺物出土状況 …… 331
中　弥生時代 27 号竪穴住居跡
完掘状況
下　弥生時代 28 号竪穴住居跡
遺物出土状況
図版 5　上　弥生時代 30 号竪穴住居跡
遺物出土状況 …… 332
中　弥生時代 32 号竪穴住居跡
遺物出土状況
下　弥生時代 32 号竪穴住居跡
完掘状況
図版 6　上　弥生時代 35 号竪穴住居跡
遺物出土状況 1 …… 333
中　弥生時代 32 号竪穴住居跡
遺物出土状況 2
下　弥生土器集中区遺物出土状況 1
図版 7　上　弥生土器集中区
遺物出土状況 2 …… 334
中　弥生土器 (壺) 出土状況
下　石庖丁出土状況
図版 8　弥生時代の土器 1 (15・16 号住居跡) …
…… 335
図版 9　弥生時代の土器 2 (19・26 号住居跡)
…… 336
図版 10　弥生時代の土器 3 (27・28・30 号住居跡)
…… 337
図版 11　弥生時代の土器 4 (32 号住居跡①)
…… 338
図版 12　弥生時代の土器 5 (32 号住居跡②)
…… 339
図版 13　弥生時代の土器 6 (32 号住居跡③)
…… 340
図版 14　弥生時代の土器 7 (32 号住居跡④)
…… 341
図版 15　弥生時代の土器 8 (32 号住居跡⑤)
…… 342
図版 16　弥生時代の土器 9 (35 号住居跡①)
…… 343
図版 17　弥生時代の土器 10 (35 号住居跡②)
…… 344
図版 18　弥生時代の土器 11 (溝状遺構·土坑)
…… 345

図版 19　弥生時代の土器 12（土器集中区①）
…… 346
図版 20　弥生時代の土器 13（土器集中区②）
…… 347
図版 21　弥生時代の土器 14（土器集中区③）
…… 348
図版 22　弥生時代の土器 15（甕Ⅰa・Ⅰb類）
…… 349
図版 23　弥生時代の土器 16（甕Ⅱ類）　…… 350
図版 24　弥生時代の土器 17（甕Ⅲ類）　…… 351
図版 25　弥生時代の土器 18（甕Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類）
…… 352
図版 26　弥生時代の土器 19（甕Ⅶ・Ⅷ類）… 353
図版 27　弥生時代の土器 20（甕Ⅸ類）　…… 354
図版 28　弥生時代の土器 21（甕Ⅹ・Ⅺ類）　… 355
図版 29　弥生時代の土器 22（甕 底部）　…… 356
図版 30　弥生時代の土器 23（大甕 口縁部）… 357
図版 31　弥生時代の土器 24（大甕 胴部）　… 358
図版 32　弥生時代の土器 25（壺Ⅰ～ Ⅶa）… 359
図版 33　弥生時代の土器 26（壺Ⅶb・Ⅸ類）
…… 360
図版 34　弥生時代の土器 27（壺Ⅹa類）…… 361
図版 35　弥生時代の土器 28（壺Ⅹb～ ⅩⅣ類）
…… 362
図版 36　弥生時代の土器 29（壺 底部①）　… 363
図版 37　弥生時代の土器 30（壺 底部②）　… 364
図版 38　弥生時代の土器 31（鉢 口縁部）　… 365
図版 39　弥生時代の土器 32（鉢 底部，高坏）
…… 366
図版 40　弥生時代の土器 33（器台，蓋，小型土器）
…… 367
図版 41　弥生時代の石器（磨製石鏃・石庖丁）368
図版 42　上　古墳時代土坑墓 1…… 369
中　古墳時代土坑墓 1　遺物出土状況
下　古墳時代土坑墓 2　耳環出土状況
図版 43　古墳時代の遺物 1（土坑墓 1 の太刀・剣・鏃）　…… 370
図版 44　古墳時代の遺物 2（土坑墓 1，土坑墓 2，土坑）　…… 371
図版 45　古墳時代の遺物 3（剣・鏃）　…… 372
図版 46　古墳時代の遺物 4（土師器）…… 373
図版 47　上　K6 ～ 8 区 古代調査状況　… 374
中　古代 5 号住居跡調査風景
下　K11 ～ 12 区 古代 土坑調査風景
図版 48　上　K15 区 古代住居跡検出状況　375
中　古代 1 号住居跡
下　古代 2 号住居跡
図版 49　上　古代 3 号住居跡 …… 376
中　古代 6 号住居跡
下　古代 10 号住居跡
図版 50　上　古代 6，8，10 号住居跡 …… 377
下　古代 8 号住居跡 カマド跡
図版 51　上　古代 5 号住居跡 …… 378
中　古代 12 号住居跡
下 古代 7 号住居跡
図版 52　上 古代 11 号住居跡　…… 379
中 古代 11 ～ 13 号住居跡
下 古代 7 号，11 号，13 号，21 号住居跡
図版 53　上 古代 31 号住居跡　…… 380
中 古代 34 号住居跡
下 古代 29 号住居跡
図版 54　上 古代 33 号住居跡　…… 381
中 古代 33 号住居跡のカマド
下 古代 37 号住居跡
図版 55　上 古代 掘立柱建物跡…… 382
中 古代 大型竪穴状遺構 調査状況
下 古代 大型竪穴状遺構 完掘状況
図版 56　上 K9 区 古代 土師器集積土坑 … 383
中 K9.5 区 古代 土坑 1
下 K9.5 区 古代 土坑 2
図版 57　上 K10 区 古代 土坑 5 検出状況…384
中 K12 区 古代 土坑検出状況
下 K11 ～ 12 区 古代 土坑検出状況
図版 58　K11 ～ 12 区，K15 区古代土坑検出状

況 …… 385
図版 59 上 K6 ～ 8 区 古代 土坑 2 …… 386
中 K6 ～ 8 区 古代 土坑 3
下 K6 ～ 8 区 古代 土坑 10
図版 60 上 K16 区 古代 溝状遺構 …… 387
中 K14 区 古代 溝状遺構
下 K12 区 古代 溝状遺構
図版 61 上 古代 焼土 1 検出状況 …… 388
中 古代 焼土 2 検出状況
下 古代 焼土 2 調査状況
図版 62 上 古代 3 号住居跡 須恵器 …… 389
中上 K10 区 古代の土師器
中下 K 9 区 古代の土師器
下 古代 風字二面硯出土状況
図版 63 古代 1 号 , 2 号 , 3 号 , 6 号住居跡
の出土遺物 …… 390
図版 64 古代 6 号住居跡の出土遺物 …… 391
図版 65 古代 10 号 , 8 号 , 5 号 ,12 号 ,11 号 ,
7 号住居跡の出土遺物 …… 392
図版 66 古代 21 号 ,13 号 ,31 号 ,34 号 ,24 号 ,
25 号住居跡と大型竪穴状遺構の出土
遺物 …… 393
図版 67 古代 大型竪穴状遺構と土師器集積
土坑の出土遺物 …… 394
図版 68 K9 ～ 10 区 ,K1 ～ 6 区 ,K6 ～ 8 区 ,
K11 ～ 12 区 古代土坑出土遺物 395
図版 69 古代の土師器 1（坏 1 類～ 5 類） … 396
図版 70 古代の土師器 2（坏 5 類～ 9 類）…… 397
図版 71 古代の土師器 3（坏 10 類～ 11 類と埦 1 類
～ 4 類）…… 398
図版 72 古代の土師器 4（高台埦・蓋・皿・高台付皿・
内黒土師器）…… 399
図版 73 古代の土師器 5（内朱埦・甕・鉢・須恵器蓋）
…… 400
図版 74 古代の須恵器 1（ヘラ描き蓋・皿・甕・鉢）
…… 401
図版 75 古代の須恵器 2（壺・水差し・風字二面硯・
獣脚及び転用硯）…… 402
図版 76 古代の土製品 1（管状土錘） …… 403
図版 77 古代の土製品 2（双孔棒状土錘・紡錘車）
…… 404
図版 78 上 古代の鉄器・鉄製品 …… 405
下 古代の石製品・玉類
図版 79 上 中世掘立柱建物跡 …… 406
下 中世掘立柱建物跡ピット
図版 80 上 中世の配石遺構 …… 407
下 中世の畠跡
図版 81 中世の遺物 1（土師器・須恵器） …… 408
図版 82 中世の遺物 2（白磁・青白磁・青磁）… 409
図版 83 中世の遺物 3（瓦器・土製品・滑石製品他）
…… 410
図版 84 上 近世の遺構方形竪穴状遺構 … 411
下 大島遺跡調査区遠景

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は，九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し，事業予定区内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（当時，平成８年４月以降文化財課）に照会した。それを受けて文化課は，平成４年12月に事業予定地内の分布調査を実施し，21か所の遺跡を確認した。

また，西鹿児島駅舎の予定地に所在する武遺跡については，協議の結果新幹線鉄道駅緊急整備事業として遺跡の確認と全面調査が進められた。

その後，分布調査の結果に基づいて日本鉄道建設公団九州新幹線建設局，県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センターの三者でそれらの遺跡の取扱いについて協議し，平成８年度から用地取得等条件の整った遺跡から確認調査を実施することとなった。

平成８年度は，出水市鳥越平遺跡及び川内市大原野遺跡の確認調査を行い，平成９年度は，大原野遺跡の全面調査と川内市前畑遺跡の確認及び一部全面調査を実施した。

平成10年度は，前畑遺跡の全面調査の継続と他12か所の遺跡について確認調査及び全面調査を実施した。

大島遺跡の確認調査は，平成11年度に計志加里・薩摩国分寺下（京田）・鍛冶屋馬場・春田遺跡の確認調査と並行して実施した。しかし，用地買収が未了の場所が多いため，大島遺跡の橋脚部分の全面調査に一部手をつけた。本格的な全面調査は平成12年５月23日から平成13年３月19日まで実施した。

整理及び報告書作成作業は平成15年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第２節　調査の組織

事業主体者　　日本鉄道建設公団　九州新幹線建設局
　　独立行政法人　鉄道建設運輸施設整備機構（平成15年～）
調査主体者　　鹿児島県教育委員会
調査企画調整　　鹿児島県教育庁文化財課

【平成11年度（確認調査・一部全面調査）】

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神次郎
調査担当者	〃	文化財主事	宮田栄二
	〃	文化財主事	平木場秀男
調査事務担当	〃	総務係長	有村貢

	〃	主　　査	今村孝一郎
	〃	主　　事	溜池佳子
調査指導者	福岡大学人文学部	教　　授	小田冨士雄

【平成12年度（全面調査）】

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志
調査担当者	〃	文化財主事	宮田栄二
	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財調査員	樋渡将太郎
調査事務担当	〃	総務係長	有村貢
	〃	主　　査	今村孝一郎
	〃	主　　事	溜池佳子
現地指導者	立正大学	学　　長	坂詰秀一
	京都大学大学院	教　　授	上原真人

【平成15年度（整理・報告書作成作業）】

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	木原俊孝
調査企画者	〃	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志
	〃	主任文化財主事	長野眞一
整理担当者	〃	文化財主事	宮田栄二
	〃	文化財主事	平木場秀男
調査事務担当	〃	総務係長	平野浩二
	〃	主　　査	脇田清幸
	〃	主　　事	池　珠美
整理指導者	熊本市教育委員会	文化財保護主事	網田龍生
	鹿児島大学	助　教　授	中村直子
	熊本大学	助　教　授	杉井　健
	鹿児島大学	助　教　授	橋本達也

なお発掘調査中及び整理作業中に，次の方々から指導・助言をいただいた。（敬称略）

上村俊雄（鹿児島国際大学），永山修一（ラ・サール学園），中村明蔵（鹿児島国際大学），

島津義昭・高木正文（熊本県教育庁文化課），中島哲郎（川内市教育委員会）
柴田博子（宮崎産業経営大学），山本信夫（山本考古学研究所）

第３節　調査の概要と調査経過

１　確認調査

大島遺跡の確認調査は平成11年度に実施した。これは近接する計志加里，薩摩国分寺下（京田），鍛冶屋馬場，春田の各遺跡の確認調査と並行して行い，また同年度は前畑遺跡の全面調査も実施した。

各遺跡とも用地買収の進行が良くなく，また用地買収が終了している場所でも住居の移転が行われていなかったり，畑地がそのまま耕作されていたり調査ができる条件が整ってはいなかった。これらの各遺跡のなかで最も用地買収が遅れていたのが大島遺跡と計志加里遺跡であった。このような環境のなかで確認調査を実施した。

確認調査は橋脚予定地点に任意の方向で２ｍ×３ｍないしは４ｍの長さのものを16ヶ所設置して行った。調査の結果，９ヶ所のトレンチで土坑などの遺構や遺物包含層が確認された。遺物包含層からは縄文時代晩期～弥生時代の土器や石鏃と平安時代の土師器・須恵器などが出土した。これにより調査区域内のなかで南側と北側の端部をのぞく中心部が遺跡であると判断された。

２　全面調査

記録保存のための全面調査は平成11年度に遺跡の範囲確認後，他の地点が買収できず確認調査が続行できなかったため部分的に実施し,平成12年度に計志加里遺跡，京田遺跡（薩摩国分寺下遺跡）と並行して実施した。

遺跡の調査区域は新幹線建設のため幅は約10.5mと狭く，橋脚部分のみについて行った。調査区は南側から橋脚１，２，３～10区と呼称した。このなかで橋脚６～８と橋脚９～10及び橋脚11～12については，住居跡などの遺構が検出され，遺構の部分調査をさけるために橋脚の中間部も合わせて調査を実施した。住宅の移転が遅れた部分については最後に調査を行った。

調査の結果，縄文時代晩期では黒川式などの土器と多種の石器が出土した。弥生時代では前期から終末期にかけての各期にわたる多量の土器のほか，竪穴住居跡も９軒検出された。磨製石庖丁も県内では多く出土し，計14点認められた。古墳時代は，刀や剣を副葬した土坑墓などが検出された。古代では竪穴住居跡23軒のほか，掘立柱建物跡，各種の土坑や溝状遺構などの多様な遺構が検出され，出土遺物は土師器の坏・埦・蓋・鉢，須恵器の坏・蓋・皿・甕・壺のほか，県内では珍しい風字二面硯や多量の転用硯が出土した。また２点の石帯と越州窯系青磁や緑釉土器も調査面積の割りに多量に出土し注目された。中世では掘立柱建物跡や畠跡が検出され，土師器，青磁，白磁，滑石製品などが出土した。

以下，調査の経過については日誌抄により略述する。

平成11年7～12月

5月より確認調査開始。7月21日区域設定後面調査開始。計志加里遺跡・鍛冶屋馬場遺跡の確認調査も並行して行う。

平成12年1～3月

1月14日まで大島遺跡の面調査を行う。1月17日からは住居移転が終了したため前畑遺跡の調査に移る。2月14日から大島遺跡の調査に再び移る。

平成12年5月

１日より調査開始。鉄道建設公団の要請により京田遺跡消防署地点の調査から実施する。

平成12年7月

大島遺跡の調査を3日から開始する。4日鉄道建設公団と調査工程の件で打合せを行う。

平成12年8月

大島遺跡と計志加里遺跡を並行して調査する。1日，28日鉄道建設公団と第３調査地点の調査工程について打合せを行う。

平成12年9～10月

大島遺跡及び計志加里遺跡を並行して調査を実施しているが，5日より京田遺跡も並行して調査を行う。

平成12年11～12月

大島・計志加里・京田遺跡を同時並行で調査する。11月9日に熊本県教育庁文化課と新幹線関係調査の二県協議会を発掘調査事務所で行う。

平成13年1月

大島・計志加里・京田遺跡の調査を並行して実施する。新たにプレハブ詰所と休憩所を設置して，11日より京田遺跡の調査を担当するため川口，徳田両名が加わり，作業員も大幅に増員する。

平成13年2月

大島・計志加里・京田遺跡の調査を並行して行う。7～8日は京都大学上原真人先生の指導，8～9日は立正大学坂詰秀一先生の指導を受ける。

平成13年3月

「先史・古代の鹿児島」に関わる遺跡調査として，上村俊雄・中村明蔵・永山修一の3名の先生が遺跡視察を行う。大島・計志加里・京田遺跡の調査を並行して行う。19日大島遺跡の調査が終了する。26日計志加里遺跡の調査終了。京田遺跡については次年度２ヶ月間調査を実施する協議が行われた。

なお，平成15年度報告書作成作業にあたり，報告書検討委員会並びに報告書指導委員会が組織され，報告書作成作業の途中に進捗率の検査と作業進行の検査指導が実施された。

第４節　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は，平成５年５月 12 日より鹿児島市武遺跡から開始し，平成 13 年５月 30 日川内市京田遺跡で全てを終了した。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は，一覧表のとおりである。

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(1)

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2 ～3 H11.3.2 ～4 計 5 日間	240 ㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期 縄文前期	塞ノ神式，轟式，磨製石斧，黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計 1 日間	55 ㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鎧・安原	出水市安原町	H11.2.17・18 H11.2.24・25 H11.3.9 計 5 日間	60 ㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器，黒曜石，土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5～3. 9 H11.5.6 ～H12.3.31 H12.5.1 ～H13.3.27 計 420 日間	27,247 ㎡	彌榮久志 前田　誠 濱崎一富 東　和幸 高岡和也 上床　真 森田裕之	縄文晩期 平安時代 鎌倉時代	縄文晩期埋設土器 38 基，平安期竈付竪穴住居跡 1 軒，掘立柱建物跡 9 棟，焼土遺構 3 基，溝状遺構 30 条，波板状遺構 27 条，上加世田式，入佐式，黒川式，土師器，須恵器，玉縁白磁滑石製石鍋，刻書土器，鉄製品，石鏃，磨製石斧，打製土掘り具，石匙，石皿，磨石，凹石，異形石器，玉類（勾玉 6，管玉 25，丸玉 5，平玉 3，垂飾品 1，剥片 46，未製品 30）
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2 計 2 日間	48 ㎡	彌榮久志 前田　誠 東　和幸	時期不明	包含層は確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計 1 日間	12.5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計 3 日間	108 ㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期	土器，黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1 ～H10.3.31 H10.5.6 ～H10.12.24 H11.12.13 ～H12.2.24 計 195 日間	11,800㎡	長野眞一 上床　真 彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀男	旧石器 縄文早期 縄文前期 縄文後期 中世 近世	土坑（陥し穴含）25 基，集石 4 基，竪穴状遺構 1 基，五輪塔，大型掘立柱建物跡 7 軒，ナイフ形石器，細石刃核，吉田式，石坂式，轟式，石鏃，石斧，石皿，磨石，敲石，土師器，青磁，白磁，染付，薩摩焼

第２表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(2)

番	遺　跡　名	所　在　地	調　査　期　間	調査面積	調査員	時　代	主　な　遺　構　・　遺　物
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1 ～8. 27 H12.5.23 ～H13.3.26 計 218 日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居１軒，掘立柱建物跡５棟，土坑墓３基，円形周溝状遺構１基，土坑５基，中世掘立柱建物跡２棟，古道，溝状遺構，早期押型文土器，曽畑土器，磨製石鏃，打製石斧，錐，ピエス，スクレイパー，磨石，石皿，石匙，石鏃，砥石，土師器，須恵器，瓦，青磁，白磁，滑石製品，刀子，青銅製品，紡錘車
10	京　田 (薩摩国分寺下)	川内市中郷町	H11.6.1 ～20 H12.5.8 ～6. 6 H12.9.4 ～H13.3. 24 H13.4.9 ～5. 31 計 191 日間	5,900㎡	宮田栄二 上之園健二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期 平安時代 中世 近世	弥生期水田跡，土留め状遺構，杭列，ウケ跡，ドングリピット，古代水田跡，弥生土器，三又鍬，二又鍬，大足，一本梯子，横架材，網枠，曲物，土師器，須恵器
11	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6 ～H12.3.24 H12.5.7 ～H13.3.19 計 275 日間	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡４軒，土坑１基，古墳時代土坑墓２基，平安期竪穴住居23軒（竈付２軒），掘立柱建物跡１棟，土坑墓２，掘立柱建物跡１棟，畠跡，弥生期甕・壺，石包丁，磨製石鏃，古墳期成川式，須恵器，大刀剣，鉄鏃，平安期土師器，須恵器，瓦，越州窯青磁，緑釉，陶器，転用硯，帯金具，石製丸鞆，玉類，土錘，金環，青銅製鈴，鉄製品
12	鍛冶屋馬場 春　田	川内市平佐町	H10.11.2 5 H11.9.1 ～9. 27 H12.5.9 ～6. 15 H12.9.1 ～12.27 計 103 日間	2,850㎡	彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉６基，土坑２基，竪穴住居跡１軒，掘立柱建物跡４棟，畠跡，炉跡７基，越州窯系青磁，陶器壺，土師器，鉄滓，古銭，中世青磁，鉄製品（鎌，鋤先，紡錘車，鉄鏃），近世薩摩焼，平佐焼，伊万里焼，土師器，羽口，鉄滓
13	楠　元 城　下	川内市百次町	H10.9.17 ～30 H10.11.4 ～24 H11.9.2 ～12.6 H11.5.6 ～11.8 計 209 日間	1,800㎡	彌榮久志 前田　誠 川口雅之	縄文後期 弥生 古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡２軒，炉跡２基，土坑 12 基，溝７条（杭列を伴う溝１条），縄文期押型文・市来式・西平式・北久根山式，弥生～古墳期土器，木製平鍬，又鍬，横鍬，鍬の柄，掘り棒，丸木弓，容器（未製品），櫂状木製品
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1 ～3.24 H12.5.1 ～H13.3.29 計 316 日間	19,400㎡	前田　誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡 30 棟，土坑墓３基，方形竪穴建物跡５軒，溝４条，古道１条，畠跡，剥片尖頭器，ナイフ形石器，押型文，石坂式，阿高式，土師器，石皿，敲石，凹石，石鏃，土師器，須恵器，白磁，青磁，短刀，古銭，滑石製石鍋，中世陶器，鉄鏃

第３表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(3)

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
15	大原野	川内市百次町浦田	H8.10.1 ～29 H9.11.1 ～H10.3.31 計171日間	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生　誠 上床　真	旧石器 縄文早期 縄文前期	ナイフ形石器，細石器，吉田式，石坂式，条痕土器，轟式，石鏃，石皿，磨石，敲石，石斧
16	東下原	日置郡東市来町養母	H10.10.2 7～29 H10.12.1 ～18 H11.3.12 計20日間	248㎡	彌榮久志 前田　誠	旧石器 縄文後期 古墳 古代	古代焼土付土坑，細石刃核，成川式，土師器
17	上ノ平	日置郡伊集院町下神殿四区	H11.2.26 H11.10.1 ～25 H12.11.1 4 ～H13.3.29 計92日間	2,328㎡	彌榮久志 前田　誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒，集石4基，中世溝1条，細石刃核，指宿式，磨製石斧，石鏃
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院町郡	H11.5.6 ～24 H11.6.4 ～30 H11.11.1 ～H12.3.24 H12.5.1 ～11.13 計184日間	1,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創期 縄文早期 縄文中期 古墳 中世	集石（草創期1基，早期3基，中期3基），中世溝，農具埋納土坑，掘立柱建物跡12棟，縄文早期土器，船元式，成川式，土師器，陶磁器（中国南部），滑石製石鍋
19	梅落	日置郡伊集院町郡	H11.5.19 ～21 H11.6.14 ～17 H12.6.19 ～7.14 計24日間	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石，塞ノ神式，スクレイパー
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
21	武ＡＢＣ	鹿児島市武一丁目	H5.4.12 ～5.25 H5.5.21 ～7.2 H5.12.6 ～H6.2.21 H6.3.9 ～30 計　日間	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦	縄文前期 縄文中期 弥生中期	古墳住居跡27軒，土坑18基，溝2条ピット30．近世溝9条，轟式，深浦式，春日式，船元式，山之口式，成川式
22	寿国寺跡	鹿児島市武二丁目	H11.5.24 ～6.11 H11.7.1 ～9.28 H12.5.8 ～6.13 計175日間		上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	近世	陶器，磁器，瓦，木製品，金属製品，寿国寺跡のはん池（門前池）跡
23	前市野原	串木野市	H10.12.1 5 計1日	22㎡	彌榮久志 前田　誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と立地

大島遺跡は，川内市東大小路町に所在し，JR 鹿児島本線川内駅から 1.3 ㎞の位置にある。

川内市は鹿児島県北西部に位置し，北及び北東は紫尾山系のそびえる出水山地で阿久根市，東郷町に接する。東は丘陵性の上床山地で樋脇町と境をなし，南は古くから修験場として知られる冠岳山地と，西に連なり弁財天山を最高峰とする高江山地で串木野市と接している。川内市はこれら三方を山地で囲まれた盆地上の地形をなしており，盆地中央部を流れる川内川が西流して東シナ海に注ぐため西方に開けている。

川内川は熊本県球磨郡上村の白髪岳を水源とし，宮崎県えびの市や霧島山系をへて，本県に入り，支流・幹流を合わせて本県最大の河川である。川内市は，川内川や支流によって形成された沖積平野にあり，両岸に及ぶ自然堤防やその後背湿地，谷底平野に立地している。洪水の影響もさることながら，その多くは水田に利用されている。流域の地質はおおむね安山岩であるが，川内盆地を囲む山地裾部から盆地中央にむかって，権現原台地などの低いシラス台地が広がり，台地上にはいくつもの重要な遺跡が点在している。

川内川河口付近には仏像構造線が走り南下しているため，古生層が露出し，河口北側の月屋山ではチャートが産出している。

大島遺跡は，川内川右岸に位置する細長く伸びた自然堤防上に立地している。標高は５～６ｍ程度である。遺跡部分は以前から集落となっており，遺跡の北側は一段低く水田であったものが，現在は約２ｍの客土が行われ，集落と同程度の標高となり，一昔前をしのぶことはできない状況である。

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

川内市は，川内川によって形成された肥沃な平野を背景として，古くから政治・経済・文化の中心地であったことが，発掘調査や文献により明らかになってきている。川内（せんだい）という地名も，薩摩国府の置かれた古代薩摩の地で，国衙の所在する地域が川内川の内側であったので「川内」，対岸に属する地域を「川外」と呼んだというのがはじまりとされている。

川内市周辺の遺跡として，県内初の旧石器時代尖頭器が出土した馬立遺跡やナイフ形石器文化と細石刃文化の２文化にまたがる遺物が出土した成岡遺跡，西ノ平遺跡などがあり，また新たに上野城跡でも旧石器時代ナイフ形石器文化の遺物が出土している。

縄文時代後期では，尾賀台遺跡や麦之浦貝塚などで市来式土器をともなった貝塚が確認され，特に麦之浦貝塚では，縄文後期土器（南福寺式・松山式・鐘ヶ崎式）や石鏃・石匙・磨石・石斧のほか，かんざしや垂飾などの骨角器，貝輪や獣骨などが出土している。

弥生時代中期ごろには水田稲作が行われていたことが，楠元遺跡や京田遺跡などの低湿地の調査により明らかになった。両遺跡では木製農具（鋤，鍬など）が多く出土し，京田遺跡では水田そのものが検出された。また，後期には麦之浦貝塚から中国後漢初期（１世紀）の舶載鏡片が出土したほか，外川江遺跡で内行花文Ｓ字状文鏡と呼ばれる小型彷製鏡や亜鉛ガラス製の小玉もみつかっている。

古墳時代には，横岡古墳群で南九州独自の墓制である地下式板石積石室が，宮内町では神代三山陵の一つと言われる可愛山稜近くに，木花開耶媛の陵墓といわれる端陵などの高塚古墳が見られ，各々の墓制を代表する二つの勢力が混在していた地域であったと考えられる。

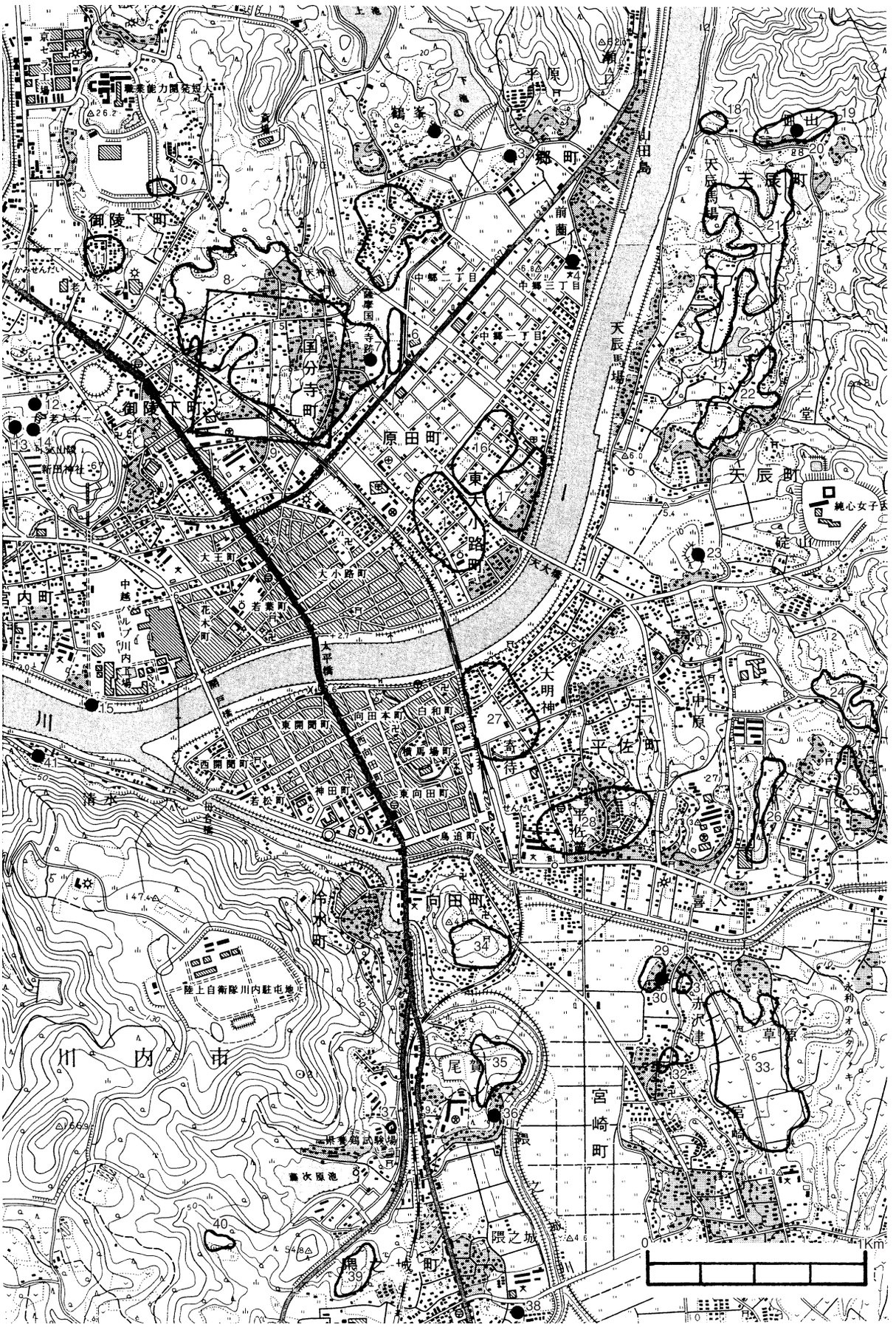
奈良時代に大宝律令が制定（701 年）されると，六〇余国に国府が設置され，翌年に薩摩国府が川内市御陵下町・国分寺町に置かれている。また，741 年の聖武天皇の発願によって国分寺が，奈良時代末期に薩摩国府に隣接する国分寺町字大都・下台に建立されたようである。薩摩国分寺跡の北方約 1 ㎞，川内川右岸の丘陵末端部には，薩摩国分寺創建当時の瓦を焼いた鶴峯窯跡がある。瓦窯二基，須恵器の窯一基があり，第一号窯では丸瓦と平瓦を第二号窯ではそれに加えて軒平瓦，軒丸瓦，鬼瓦などの特殊な瓦を焼いている。第三号窯は須恵器窯で８世紀前半までの蓋や椀などが見つかっている。また，新幹線鹿児島ルートに伴う発掘調査によって，奈良時代から平安時代にかけての円形周溝墓や土坑墓が検出された計志加里遺跡や，本県で初めて古代木簡が出土した京田遺跡などがある。この木簡は告知札と呼ばれるもので，棒状で墨書が四面に確認でき，「嘉祥三年」（850 年）に郡司が在地の有力者に水田の差し押さえを告知するという内容である。

平安時代末期から安土桃山時代にかけては多くの城館が造られ，文献に記されているものだけでも 40 ヶ所以上ある。鎌倉時代には，島津氏の居城であって豊臣秀吉の九州攻めの際に陥落したといわれる平佐城や，百次城（上野城），高江城，隈之城，南北朝時代の碇山城などが知られているが，江戸時代幕府の一国一城制によって荒廃し，名を残すのみとなっている。なお，百次城（上野城）の調査では 10 世紀から 13 世紀頃の掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡等が多数発見され，中世社会の解明につながることが期待されている。

近世の川内は，藩の直轄地と私領の八郷に分けられ，唯一の私領であった平佐領では薩摩焼の中でも肥前有田の技法を取り入れた磁器「平佐焼」が焼かれている。昭和初期に廃窯になるまで，川内の伝統工芸品を生み出していた窯跡は，市の文化財に指定されている。

＜参考文献＞

河口貞徳『日本の古代遺跡 38　鹿児島』　保育社　1988
「成岡遺跡Ⅱ」『鹿児島県文化財発掘調査報告書 (35)』　鹿児島県教育委員会　1985
『川内市文化財要覧』　川内市歴史資料館　1985
「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県文化財発掘調査報告書 (28)』鹿児島県教育委員会　1983
『薩摩国分寺跡』　川内市教育委員会　1979
『鹿児島県市町村別遺跡地名表』　鹿児島県教育委員会　1977
『川内市史上巻』　鹿児島県川内市　1976
『薩摩国府跡・国分寺跡』　鹿児島県教育委員会　1975
『計志加里遺跡』「鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書 (38)」鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001
『前畑遺跡』「鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書 (56)」鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002
宮田栄二「鹿児島県の非黒曜石材と原産地」『石器原産地研究会　第 1 回研究集会資料』　2002



第１図　大島遺跡周辺の遺跡

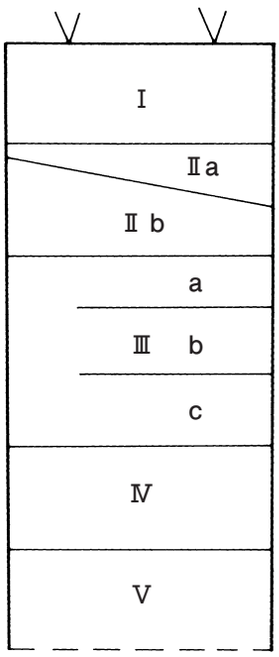
第４表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺構・遺物	備　考
1	大　島	東大小路町大島	自然堤防	縄文～近世	竪穴式住居, 土器, 土師器, 須恵器, 布目瓦, 硯, 石製丸鞆, 金環	本報告
2	鶴峯窯跡	中郷町鶴峯	丘陵端	奈良	窯跡, 国分寺瓦	昭和41年発掘調査, 国指定史跡
3	亀ヶ城	中郷町山崎	丘陵	不明		消滅
4	安国寺跡	中郷町寺園	平地	室町	四天王石像	
5	計志加里	中郷町計志加里・鶴峯・東郷牟田	台地	縄文～江戸	掘立柱建物跡, 道跡方形周溝墓, 土師器, 須恵器	平成12年度発掘調査
6	京　田	中郷町	湿地	弥生～鎌倉	水田跡, 杭列, 弥生土器, 土師器, 木簡, 木製品	平成12年度発掘調査
7	薩摩国分寺跡	国分寺町大都・下台	台地	奈良～平安	国分僧寺跡（伽藍基壇跡・築地跡）	国指定史跡
8	国分寺台地	御陵下町風口・下原･入来ほか	台地	縄文～江戸	土器, 須恵器, 土師器, 青磁, 染付	
9	薩摩国府推定域	御陵下町	台地	縄文～江戸	土器, 須恵器, 土師器, 布目瓦, 青磁	六町四方の庁域
10	越ノ巣	御陵下町越ノ巣	丘陵	奈良～平安	蔵骨器	昭和61年調査
11	尾形原	御陵下町尾形原	丘陵	奈良～平安	蔵骨器	消滅
12	小松城	宮内町小松城	丘陵	不明		消滅
13	端　陵	宮内町1935番2	丘陵	古墳	前方後円墳	昭和62年測量
14	中　陵	宮内町1935番2	丘陵	古墳	前方後円墳？	
15	弥勒寺跡	宮内町八幡馬場	平地	平安		消滅
16	東大小路A	東大小路町下目ほか	微高地	古墳～室町	土器, 青磁, 染付	
17	東大小路B	東大小路町大島馬場ほか	微高地	古墳～室町	土器, 青磁, 染付	
18	平佐焼窯跡群	天辰町皿山	丘陵	江戸～明治	窯跡, 染付, 窯道具	
19	平佐焼窯跡群	天辰町皿山	丘陵	江戸～明治	窯跡, 染付, 窯道具	平成11年度発掘調査
20	平佐焼窯跡	天辰町2992	丘陵	江戸～明治	窯跡	市指定史跡
21	天辰原	天辰町才原ほか	台地	古墳～江戸	土器, 須恵器, 青磁	
22	古　原	天辰町古原	台地	古墳～江戸	土器, 須恵器, 染付	
23	碇山城	天辰町碇山	丘陵	鎌倉	空堀跡	
24	原　口	田崎町原口・外園	台地	古墳～江戸	土器, 須恵器, 染付	
25	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器, 染付, 石鏃	
26	喜入原	平佐町喜入原	台地	縄文～江戸	土器, 染付, 石鏃	
27	鍛治屋馬場	平佐町鍛治屋馬場	平地	平安～明治	掘立柱建物跡, 鍛冶炉, 土師器, 須恵器, 染付, 鉄製品	平成12年度発掘調査
28	平佐城	平佐町藤崎	丘陵	鎌倉～戦国	空堀跡, 土塁跡	
29	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～古墳	土器, 須恵器, 石斧	
30	森殿原の宝塔	宮崎町1834番地	微高地	鎌倉		市指定史跡
31	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器, 土師器, 石鏃	
32	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器, 土師器	
33	宮崎北原	宮崎町出居原ほか	台地	古墳～室町	土器, 須恵器, 陶器	
34	日暮丘	向田町鋒本・諏訪平ほか	丘陵	古墳～江戸	土器, 須恵器, 染付	
35	尾賀台	隈之城町尾賀原・古寺・後原ほか	丘陵	縄文～室町	土器, 須恵器, 染付, 石鏃	一部貝塚
36	栫　城	隈之城町尾賀	丘陵	不詳	掘切り跡	
37	池　尻	隈之城町池尻	丘陵斜面	古墳	須恵器	
38	二福城	隈之城町城	丘陵	鎌倉～戦国	曲輪跡	
39	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
40	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
41	清水寺跡	宮里町清水	丘陵	平安	教塚跡	

第Ⅲ章　遺跡の層位

本遺跡は川内川右岸で標高は約５ｍの自然堤防上に位置する。自然堤防の最も幅広な部分に所在しており，標高は中央付近が比較的高くなる。本遺跡部分は古くから集落が形成された場所であり，周囲の水田部とは一段高く約２ｍ程度の比高差があった。ただし，近年周囲の水田部は埋め立てと宅地造成により，当時の面影はない。

遺跡の土層は下のようになる。



第Ⅰ層　表土。

第Ⅱa層　青灰色土層。旧水田面と考えられる。遺跡の中心部では認められないが，K3など縁辺にのみ所在する。粘質がある。

第Ⅱb層　暗褐色土層。砂質が強く粘性は少ない。中世から近世にかけての遺物包含層である。

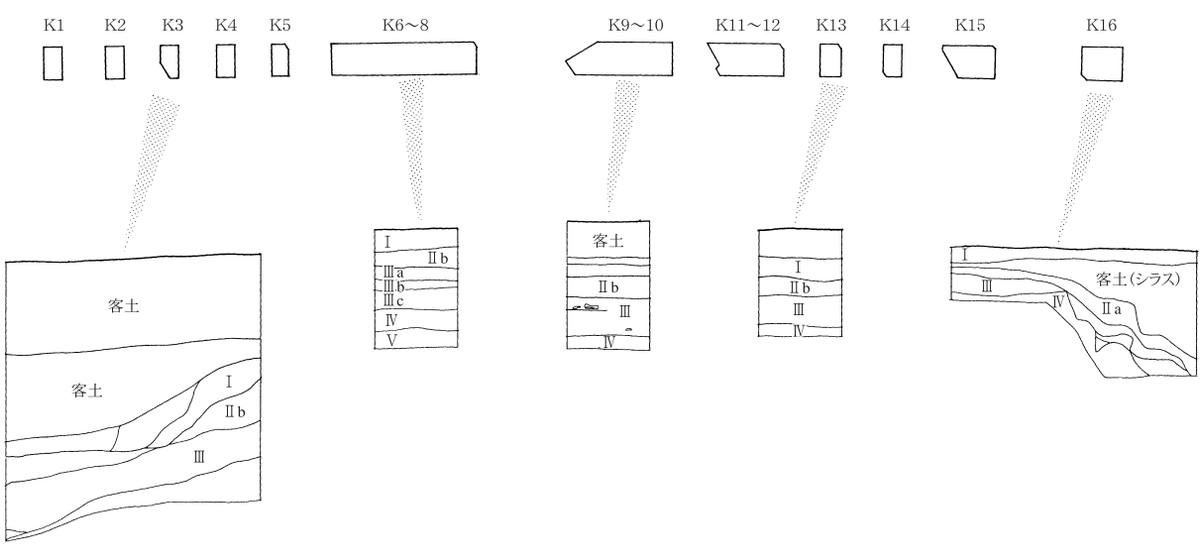
第Ⅲ層　黒褐色土層。硬く締まっており粘質も強い。Ｋ７区では色調などから，ａ・ｂ・ｃに細分できた。ａは茶褐色でｂが明るい褐色土，ｃは暗褐色土であった。古代の遺物包含層である。

第Ⅳ層　暗褐色土層。砂質でありK7～K8区にかけて認められた。弥生時代の遺物包含層である。

第Ⅴ層　白黄色砂層。川内川による自然堤防形成の初期のものと考えられる。

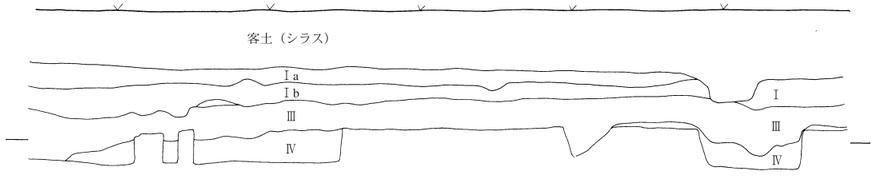
第２図　遺跡の基本土層柱状模式図

なお，前述したようにK3において地形は一段低くなり，客土の下に旧水田面であるⅡa層が認められた。また逆に北側のK15ではⅢ層はうすく，その下はⅣ層の暗褐色砂層となる。さらに最北のK16では第５図最下の土層図にみるように近陵部と水田部の境が明確になった。

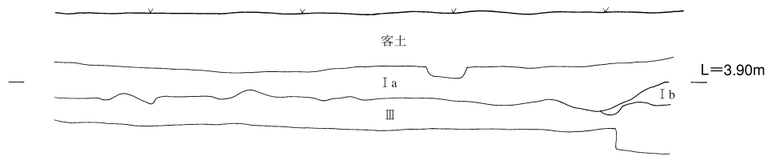


第３図　遺跡内各地点の土層

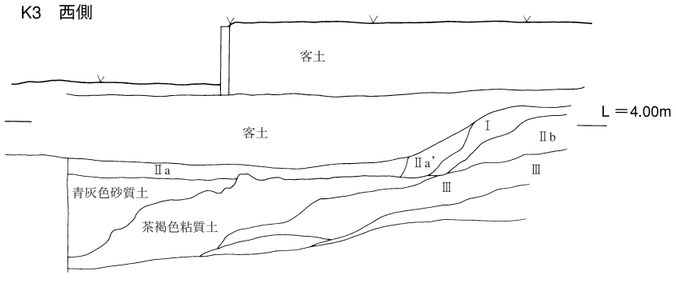
K1　北側



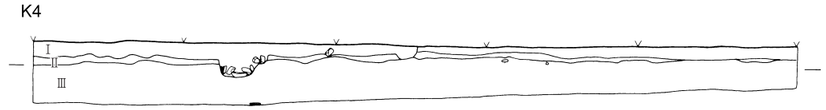
K1　西側



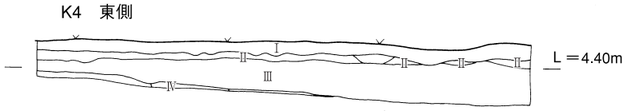
K3　西側



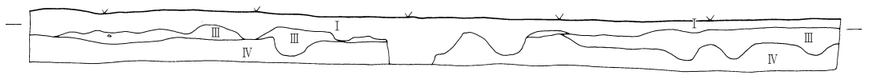
K4



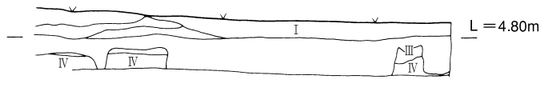
K4　東側



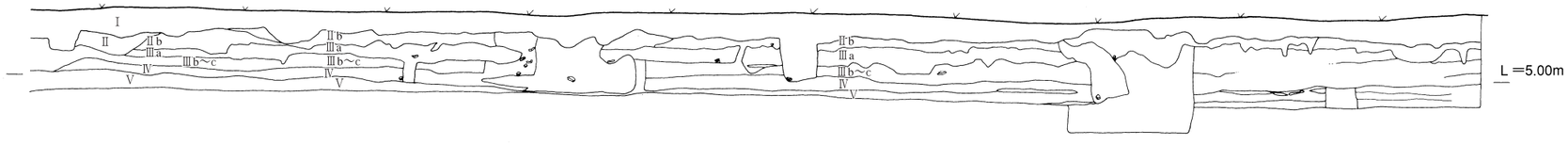
K5　南側



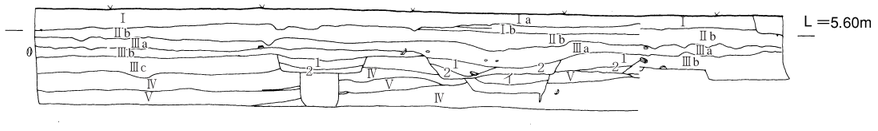
K5　東側



K6～7

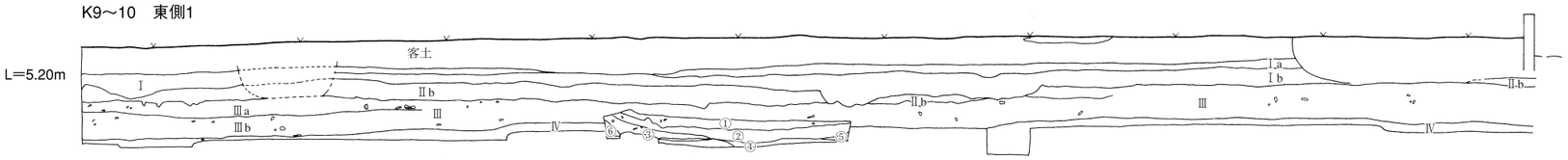


K7.5

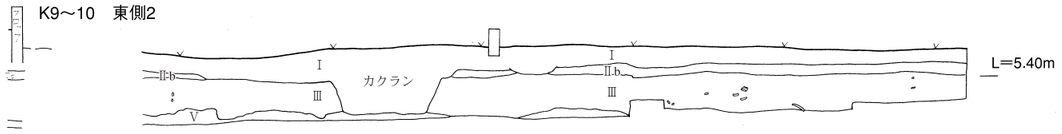


第４図　土層図１（S＝80 分の 1）

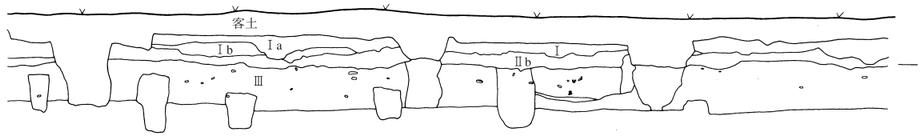
K9～10　東側1



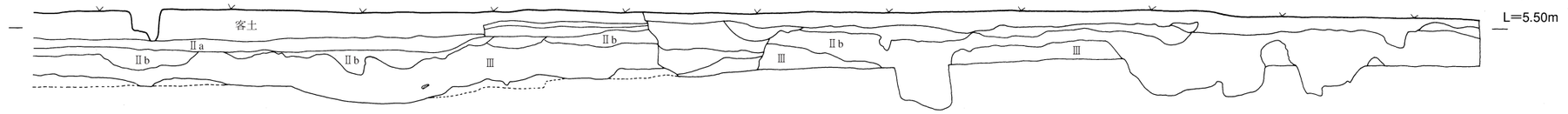
K9～10　東側2



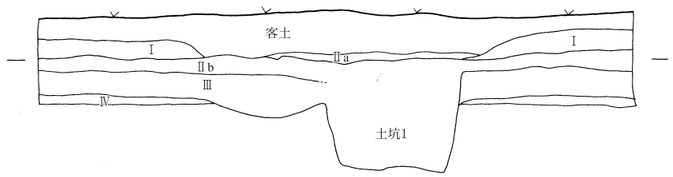
K10　北側



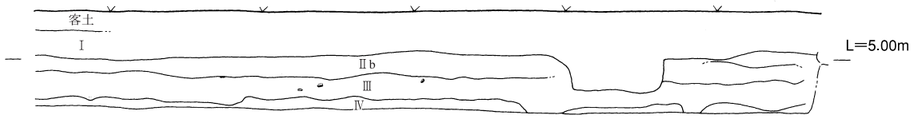
K11～12　東側



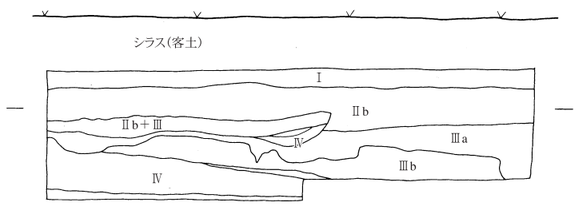
K13



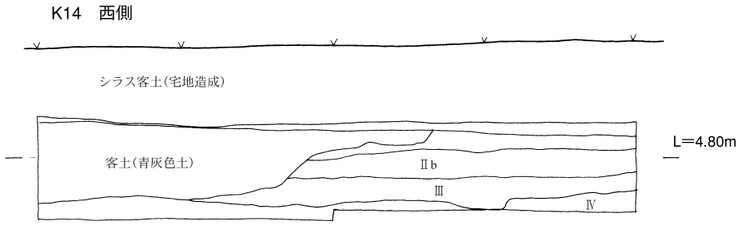
K13　東側



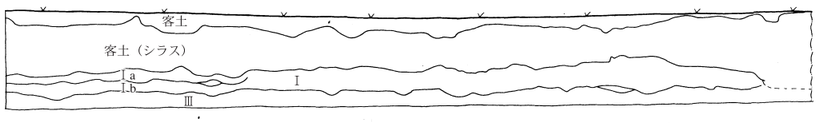
K14　東側



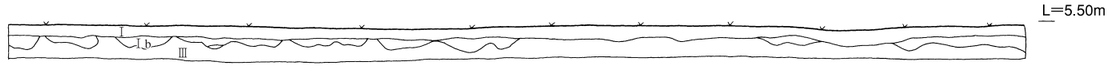
K14　西側



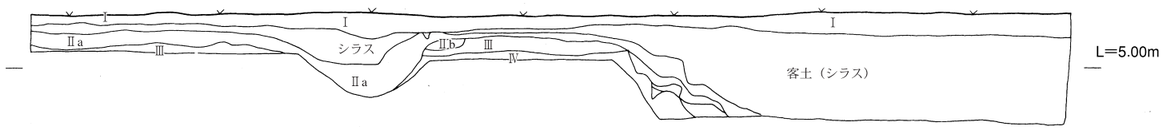
K15



K15　東側



K16



第５図　土層図２（Ｓ＝80分の1）

第Ⅳ章　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物はⅣ層を主体として，一部Ⅲ層にもみられた。しかし，Ⅲ層は主として古代の遺物が多量に出土した古代の時期であり，Ⅳ層の主体は弥生時代の遺物であった。そのため縄文時代のみの単純包含層はない。出土した土器は一部後期のものも認められたが，多くは縄文時代晩期のものであり，出土分布は南側のＫ５から北側のK15まで広く散在しており，弥生時代や古代と比較すると遺物量は多くなく，また特定の集中も認められなかった。

第１節　出土土器

本遺跡から出土した縄文土器は形態及び調整によって，Ⅰ～Ⅲ類に分類した。

Ⅰ類土器（第６図　１～３）

縄文後期に属すると考えられるものである。

１・２は平底となる底部で，１はやや上げ底気味となる。３は深鉢形土器または台付鉢形土器の脚部である。脚上端部外面には２列の刺突文が波状に施されているが，意識的かどうかは判断できない。

Ⅱ類土器（第６・７図　４～12）

縄文晩期に属すると考えられる深鉢形土器である。

４・５・７・８は外傾する口縁部で，４・８は内外面ともにヨコ条痕調整を，５は外面にヨコ条痕調整を，内面は丁寧なナデ調整を施す。７は外傾する口縁部で，内外面ともにヨコナデ調整が行われており，擦痕が残る。口唇部にはリボン状突起が貼付される。

６は口縁部がやや外反し，頸部と胴部で屈曲するものである。頸部と胴部の屈曲部の間隔は近接している。９は頸部で「く」字状に屈曲し，胴部で緩やかに屈曲するものである。

10は口縁部がほぼ直行し，胴部で緩やかに屈曲するものである。11は平底ととなる底部であり，張り出しをもつ。なお，10と11は胎土や色調が類似しており，同一個体の可能性がある。

12は頸部と胴部で「く」字状に屈曲するもので，頸部と胴部の屈曲部の間隔が近接している。外面の胴部屈曲部上位にはナデ調整，下位にはナナメ条痕のちナデ調整が行われる。

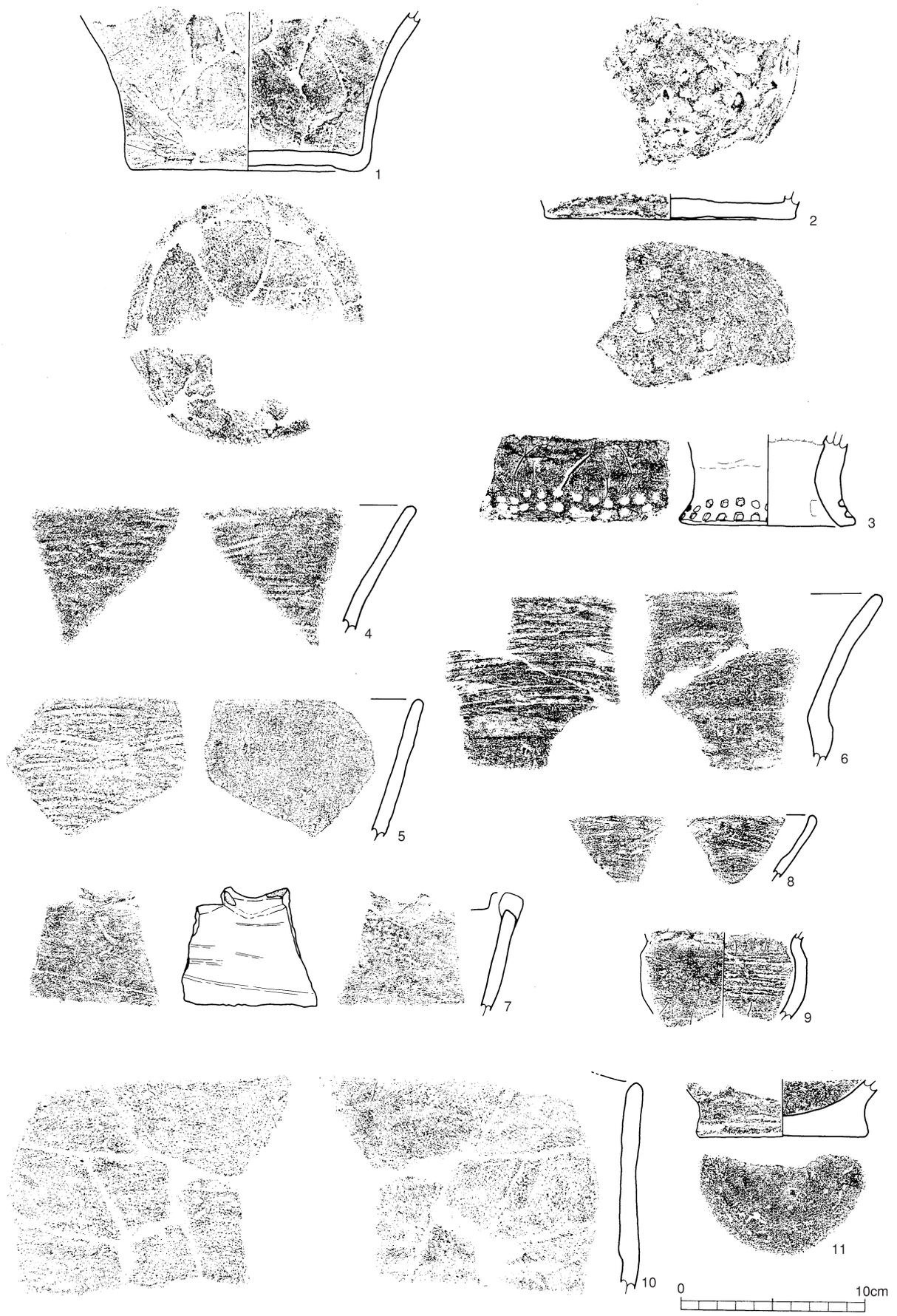
Ⅲ類土器（第７図　13～28）

縄文晩期に属すると考えられる浅鉢形土器である。器面はミガキ調整またはナデ調整が行われている。

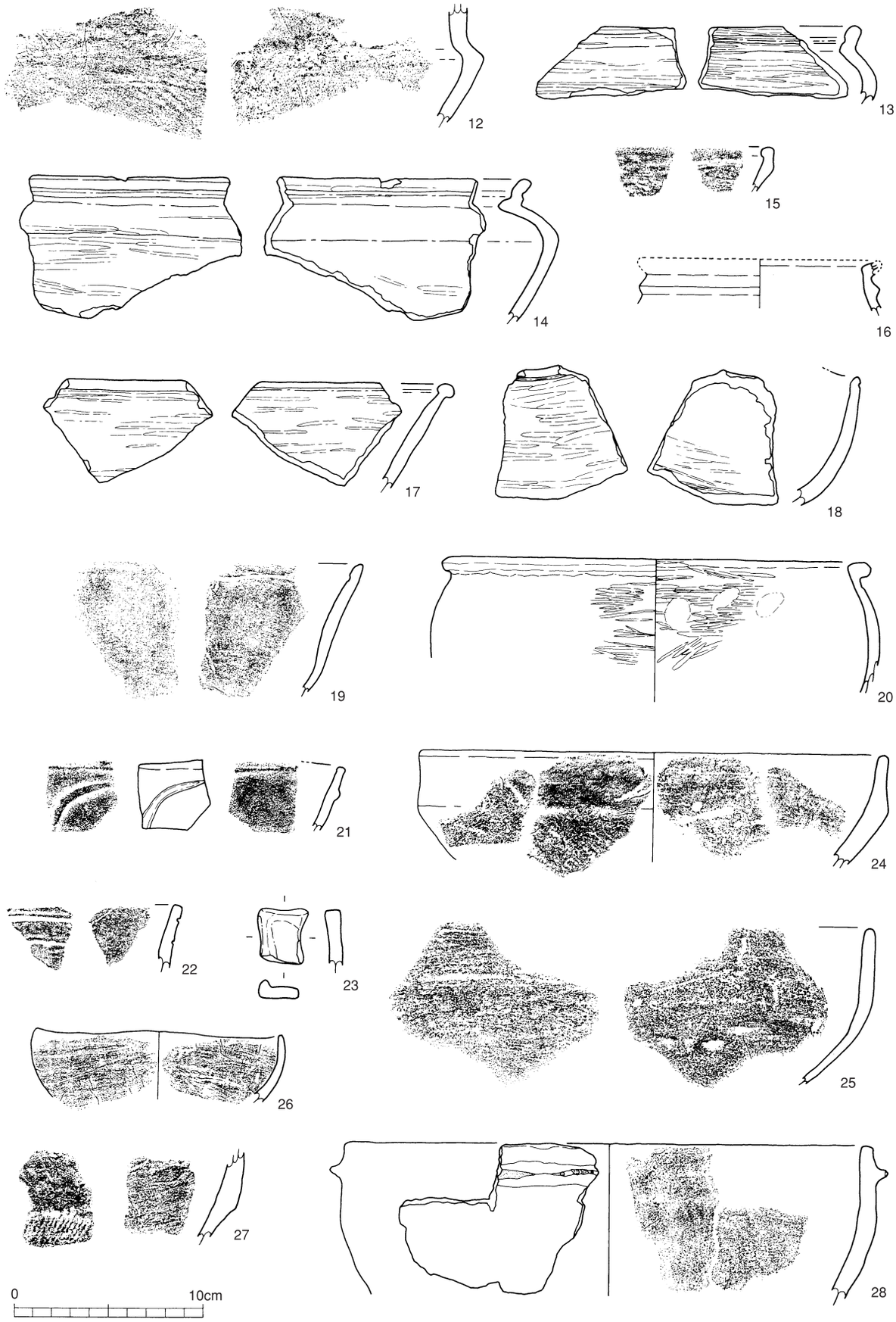
13～24は精製浅鉢形土器と考えられるものである。13・14は口縁部が短く，頸部で屈曲するものである。13は口縁部内面に一条の沈線を施す。14は内外面に一条の沈線を施す。

15は外傾する口縁部で，端部が立ち上がるものである。口縁部内面に沈線を施す。16は内傾する口縁部で端部とその下位に突帯を貼付している。17は外傾する口縁部で，端部内外面に沈線を施し，断面玉縁状を呈する。

18はボール状に立ち上がるもので，口縁端部外面に一条の沈線を施す。波状口縁を呈する。19はやや外反気味に開く口縁部で，口縁端部内面に一条の沈線を施す。内外面ともにナデ調整を施す。20は口縁部から半球状を呈する胴部にそのまま至るものである。口縁部上端に断面かまぼこ状の一条の突帯を巡らせる。



第６図　縄文時代の土器１（晩期土器①）



第７図　縄文時代の土器２（晩期土器②）

21は外傾する口縁部で，外面に突帯を曲線状に貼付する。22は外傾する口縁部で，外面に沈線を二条施す。内外面にナデ調整を施す。23は口唇部に貼付される突起と考えられるものである。従来みられるようなリボン状突起やウロコ状突起とは異なる形状を呈する。なお，土製品の可能性も考えられる。

24は口縁部が直行し，胴部で屈曲するものである。内外面ともにナデ調整が行われるが，外面の屈曲部上位には丁寧なナデ調整がみられる。

25～28は粗製深鉢形土器と考えられるものである。

25・26はボール状に立ち上がるものである。26は波状口縁を呈し，内外面ともに粗いヨコナデ調整を施し，擦痕がみられる。27は胴部下位で屈曲するもので，外面の屈曲部以下に組織痕をもつ。

28はボール状に立ち上がるもので，口縁部上位に一条の突帯を巡らせ，浅い刻みを施す。また被熱しており，口縁部～胴部上位にススが付着する。

第５表　縄文土器観察表

挿図No	No	層	グリッド	取上No	分類	型式	器種	色調（外）	色調（内）	調整（外）	調整（内）	胎土	備考
7図	1	Ⅳ Ⅳ Ⅳ Ⅳ Ⅳ Ⅳ	５Ｔ ５Ｔ ５Ｔ ５Ｔ ５Ｔ ５Ｔ	355 360 393 394 398 410	Ⅰ	縄文後期	深鉢	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)	ナデ	ナデ	石英・長石・角閃石・雲母	底径13.3cm
	2	Ⅲ	K7.5	845	Ⅰ	縄文後期	深鉢	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	摩滅により不明	丁寧なナデ	石英・長石	復元底径13.6cm
	3	Ⅲ	Ｋ５	1251	Ⅰ	縄文後期	深鉢	にぶい褐(7.5YR5/5)	にぶい褐(7.5YR5/5)	ナデ	ナデ	石英・角閃石	復元脚径9.5cm
	4	Ⅲ	Ｋ９	4327	Ⅱ	黒川式	深鉢	にぶい黄橙(10YR7/4)	黒褐(10YR3/2)	ヨコ条痕のちナデ	ヨコ条痕のちナデ	石英・砂粒	
	5	Ⅲ	K15	1610	Ⅱ	黒川式	深鉢	明褐(7.5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ヨコ条痕	丁寧なナデ	石英・角閃石・赤色粒・小礫	
	6	Ⅲ Ⅲ	Ｋ９ Ｋ９	6583 6584	Ⅱ	黒川式	深鉢	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	ヨコ条痕＋ヨコナデ	ヨコナデ	石英・火山ガラス	
	7	Ⅲ	K15	683	Ⅱ	黒川式	深鉢	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ヨコナデ	ヨコナデ	角閃石・赤色粒・砂粒	
	8	Ⅲ	Ｋ９	4319	Ⅱ	黒川式	深鉢	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコ条痕	ヨコ条痕	石英・赤色粒・火山ガラス	
	9	Ⅲ	K15	83	Ⅱ	黒川式	深鉢	黒褐(10YR3/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコナデ	ヨコ条痕	石英・小礫	
	10	Ⅲ	―	1608	Ⅱ	黒川式	深鉢	暗褐(7.5YR3/4)	橙(7.5YR4/6)	摩滅により不明	摩滅により不明	黒雲母・砂粒	
	11	―	K15	3249	Ⅱ	黒川式	深鉢	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	ヨコ条痕のちナデ+ナデ	ナデ	石英・角閃石	底径9.4cm
8図	12	Ⅲ	K14	533	Ⅱ	黒川式	深鉢	にぶい褐(7.5YR5/4)	黄橙(10YR8/6)	ナデ+ナナメ条痕のちナデ	ナデ	石英・小礫	
	13	Ⅳ	Ｋ８	5638	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	灰黄褐(10YR4/2)	灰黄褐(10YR4/2)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	長石・角閃石	
	14	溝５	K13	一括	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	黄橙(2.5Y4/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	ヨコミガキ	ミガキ	石英・角閃石	
	15	Ⅳ	Ｋ８	5971	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	黄橙(7.5YR7/8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコナデ	ナデ	石英・角閃石	
	16	Ⅳ	K6.5	3946	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	褐灰(10YR5/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコナデ	ヨコナデ	石英・角閃石	
	17	Ⅲ Ⅲ	K15 K15	31 32	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	にぶい黄褐(10YR5/3)	黒褐(2.5YR3/1)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	石英・赤色粒	
	18	Ⅲ	K9.5	1214	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	黒褐(2.5YR3/1)	黒褐(2.5YR3/1)	ヨコミガキ	ミガキ	石英・火山ガラス	
	19	Ⅲ	Ｋ７	6601	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	にぶい黄橙(10YR6/4)	暗灰黄(2.5Y4/2)	ナデ	ナデ	石英・角閃石・赤色粒	
	20	Ⅳ	Ｋ５	905	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	黒褐(10YR3/1)	黒褐(7.5YR3/1)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	石英・小礫・火山ガラス	復元口径22.8cm
	21	Ⅳ	Ｋ８	5561	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	摩滅により不明	摩滅により不明	石英・火山ガラス	
	22	Ⅲ	Ｋ９	6160	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	にぶい橙(7.5YR6/4)	黒褐(2.5YR3/1)	ナデ	ヨコナデ	石英	
	23	-	K15	表	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	褐灰(10YR5/1)	褐灰(10YR5/1)	ナデ	ナデ	石英・赤色粒	
	24	Ⅳ Ⅳ	Ｋ８ Ｋ８	5754 5986	Ⅲ	黒川式	精製浅鉢	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	丁寧なナデ＋ナデ	ヨコナデ	石英・角閃石	復元口径25.0cm
	25	Ⅲ	K15	1572	Ⅲ	黒川式	粗製浅鉢	褐(7.5YR4/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	ヨコ条痕のちナデ	ナデ	石英・小礫	
	26	Ⅲ	Ｋ９	6629	Ⅲ	黒川式	粗製浅鉢	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄褐(10YR5/3)	粗いヨコナデ	粗いヨコナデ	石英・火山ガラス	復元口径13.5cm
	27	―	K15	303	Ⅲ	黒川式	粗製浅鉢	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	ナデ	ヨコナデ	石英・火山ガラス	
	28	Ⅲ	Ｋ６	1412	Ⅲ	晩期	粗製浅鉢	赤褐(5YR4/8)	黒褐(10YR2/2)	摩滅により不明	ナデ	角閃石・小礫	復元口径28.0cm

第２節　縄文時代の石器

Ⅲ層及びⅣ層から出土した石器のなかで，縄文時代のものとして，石鏃・異形石器・石匙・スクレイパー・楔形石器・打製石斧・石錐などを取り上げている。また，磨石・敲石類及び石皿については弥生時代まで使用されていることから，弥生時代の章で取り扱うことにした。さらに砥石類については古代の章で取り扱った。磨石類や石皿あるいは砥石など縄文時代のものも当然考慮する必要があるものの厳密な時代区分は困難であり，そのため石器組成については明確にできなかった。各石材の区別と産地の判断は肉眼によるものである。

石鏃（第９図29～53）

打製石鏃は総計32点出土し，そのうち25点を図化した。形態的には小型三角形を呈する平基のもの（29）や，基部をわずかに凹ますもの（30～34），あるいは凹基で半円状に基部が凹むものなどがみられる。使用されている石材は第６表に示したとおりであり，安山岩（サヌカイト）と腰岳系と推定される黒曜石が大部分である。

石鏃未製品・再加工品

54はうすい剥片の縁辺に二次加工が施されているものであり，その押圧剥離は刃部形成ではなく整形のためと判断できる。石材は安山岩（サヌカイト）である。

55は未製品ではなく，先端部が折れた部位に二次加工が施された再加工品である。

異形石器（第９図56～58）

いずれも安山岩（サヌカイト）の剥片を素材とし，押圧剥離により細長く整形したものである。縄文時代晩期に特徴的な石器の器種である。

楔形石器（第９図59）

石材は光沢のある鉄石英であり，打点には複数の敲打痕があり，先端（図の下）からも剥離痕が認められることにより楔形石器とした。両極打法による剥片の可能性もある。

石錐（60）

先端部は台形を呈するものの，両側縁は二次加工が施されており，その後スリガラス状にすれている。良質で不純物の全くない黒色の黒曜石が使用されている。

石匙（61）

61は鉄石英の剥片の主要剥離面側のみの片側に二次加工を施し，つまみ部の整形及び下縁の刃部を形成したものである。

スクレイパー（62～66）

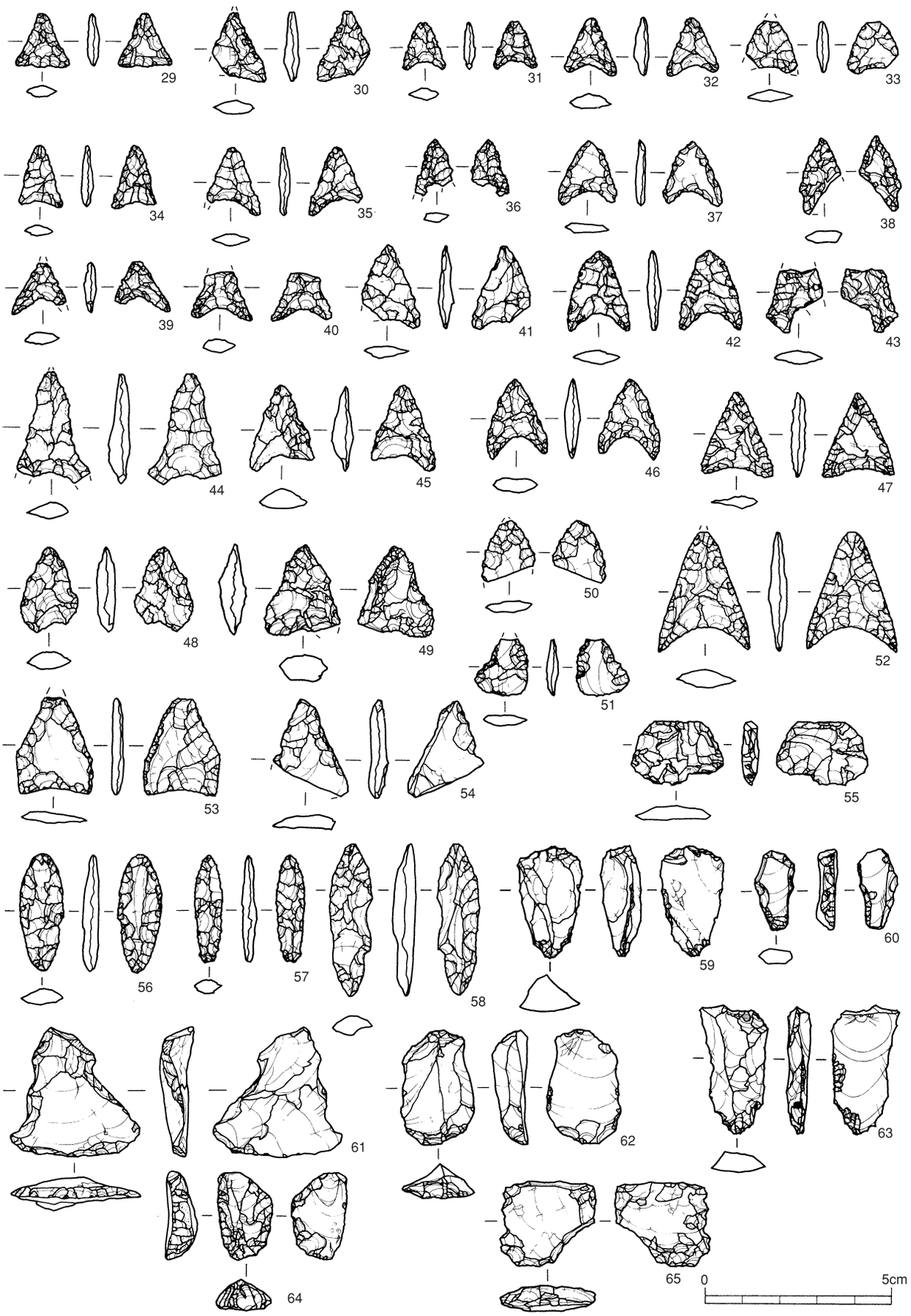
62～64は縦長剥片の末端に二次加工により刃部を形成したもので，刃部角は角傾斜となる掻器である。64は両側縁側も刃部となっている。いずれも良質黒色の腰岳系の黒曜石を利用している。

65は不純物の多い日東産系の黒曜石を使用し，刃部は両面から施している。

66は幅広剥片の鋭い縁辺に両面から刃部形成の加工を施したもので削器である。石材は安山岩（サヌカイト）を利用している。

刃つぶし整形のある剥片石器（67）

不純物が多く透明感のある三船産と推定される剥片を素材とし，両側縁には刃つぶし加工が施されており旧石器時代の台形石器に類似するもののパティナは古くない。



第８図　縄文時代の石器１（石鏃，スクレイパー他）

石核（第10図68～74）

68は黒曜石の角礫を使用し，上下及び右辺の平坦な自然面を打面にして求心的な剥片剥離を実施したものである。69は小角礫を素材とし，平坦な上下の自然面を打面にして剥片を取っている。

70は古い主要剥離面が一部に残っていることより，厚みのある剥片を用いて，数枚の剥片を剥ぎ取ったものである。71は小角礫を使用し，石刃状の縦長剥片を連続して取っている。図の正面を剥ぐ前は下面を剥いでおり，その際は丁寧な打面形成を実施している。鈴桶型石核に類似する。

72は硅化木に類似する光沢のある珪質頁岩を素材とし，平坦な自然面を打面にして，剥片を取っている。73はサヌカイトの厚みのある剥片を素材とし，打面転移を行いながら平坦面を打面にして小剥片を剥いでいる。74は質のいい珪質頁岩を素材とし，平坦な自然面を打面にしている。

針状原石製の錐（75）

75は針状を呈する細長い原石で，その自然面は稜角があるものの全ての面はザラつきがなく，光沢のある特徴的な自然面を持つもので腰岳産黒曜石と判断される。先端部は使用によると考えられる光沢面となり，また先端以外の基部については３ヶ所明確な研磨面が観察され，研磨により整形したことが判断できる。

打製石斧（第11図76～82）

76～82はいわゆる土掘具と考えられる打製石斧である。76～79は短冊形に区分でき，ほぼ平行する両側縁で長方形状に整形されている。80は有肩状に近い。石材は76と80が頁岩であり，その他は安山岩である。

礫器（83）

83は頁岩の礫を使用し，周辺に粗い剥離を施したものである。裏面には節理面が残る。図の下に位置する刃部には敲打痕が多く観察されることより，敲打具として最終的に使用したものと考えられる。

横刃形石器（84・85）

84は節理面で割られた自然面を片側に残す大型の剥片を使用し，鋭利な剥片末端を刃部としたものである。図の左側は折断後敲打を加えて整形している。石材はホルンフェルスである。

85はうすい安山岩を利用し，粗い剥離により上端を整形し，孤状の鋭利な縁辺を刃部としたものである。

石錘（86～89）

86はほぼ円形の偏平礫を使用し,相対する２辺に粗い剥離と敲打により抉りを付したものである。

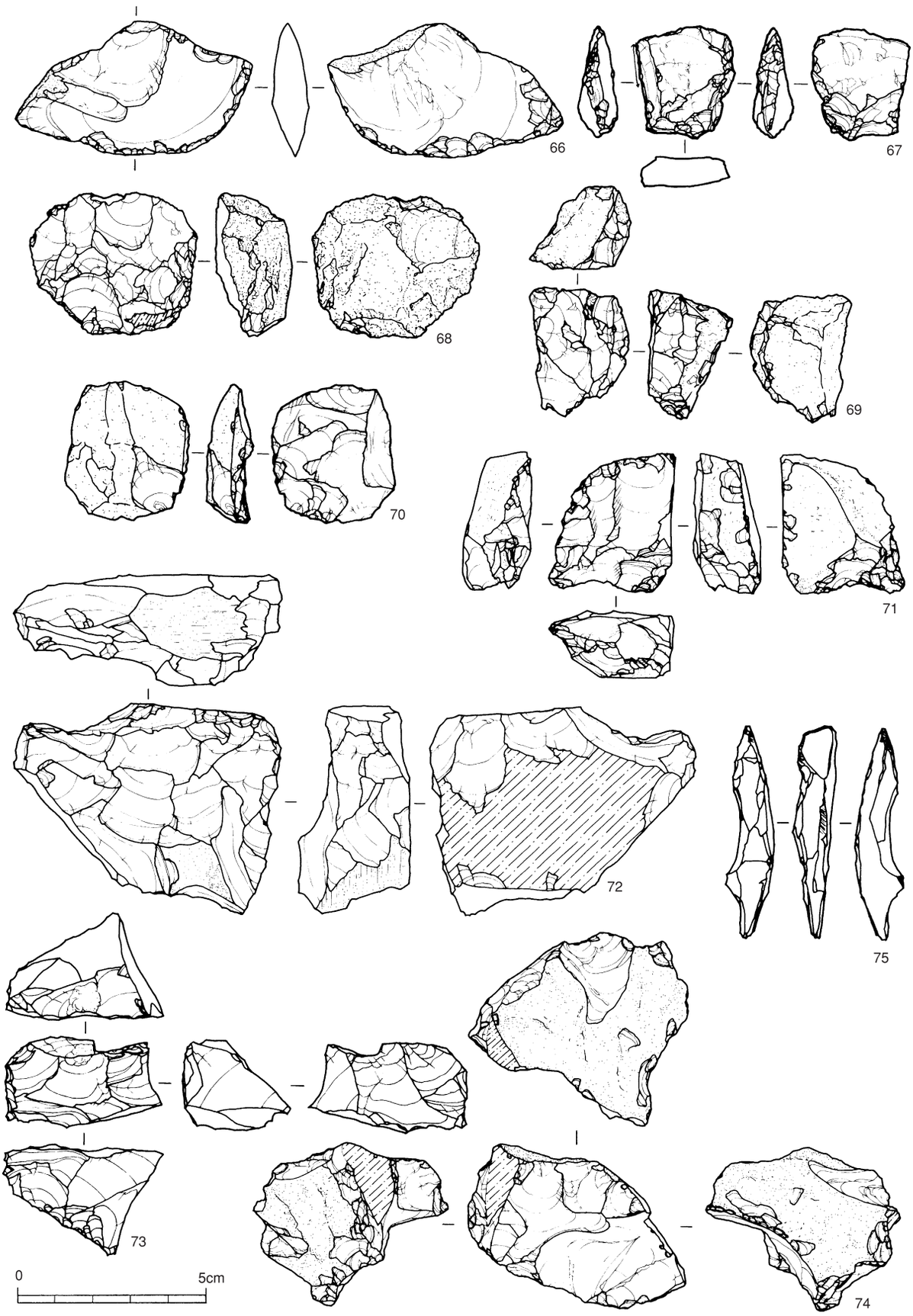
87は楕円形の礫の長軸の両端を粗い剥離と敲打により整形したものである。

88は節理面で割れた頁岩を利用し，短軸部に粗い剥離によりノッチ状にしてあるものである。

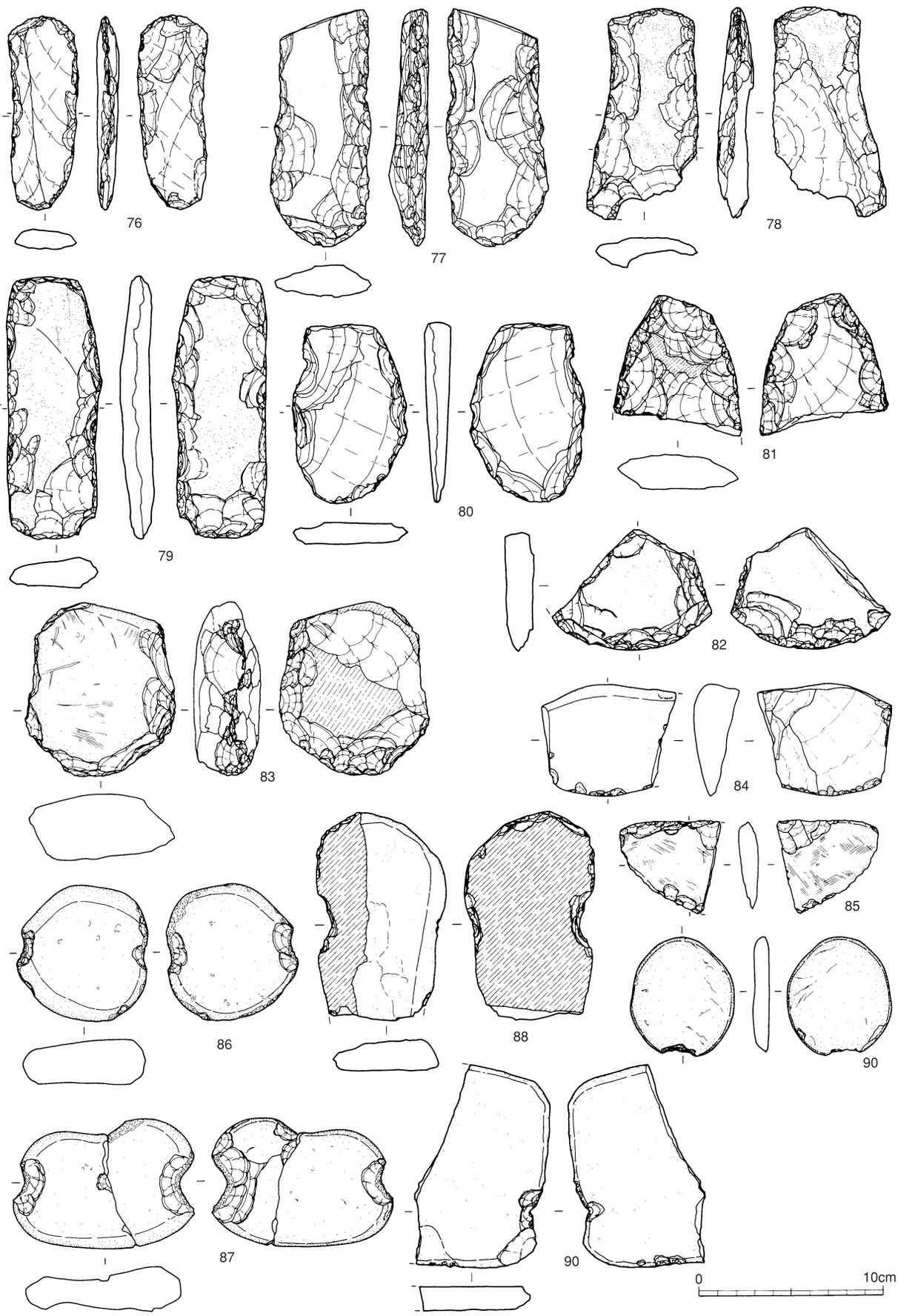
89は偏平な安山岩礫の一辺に粗い剥離によりノッチ状に仕上げたものである。破損しているため全体の形状は不明であるが，　接する縁辺にも敲打が施され，ヒモを十字形に結ぶ石錘が想定されるかもしれない。

打ち欠き痕のある扁平円礫（90）

90は偏平円礫の一端に細かい剥離を施したものである。相対する縁辺には打ち欠きは認められない。石材は頁岩である。



第９図　縄文時代の石器２（石核他）



第10図　縄文時代の石器3（打製石斧他）

第６表　大島遺跡　縄文時代石器計測表

挿図番号	番号	器　種	出土区・層	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号
9図	29	石鏃	5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	1.40	1.45	0.30	0.41	84
	30	石鏃	6.5 Ⅳ	黒曜石(針尾系)	1.85	1.40	0.40	0.67	3440
	31	石鏃	5 Ⅳ	安山岩	1.25	1.10	0.25	0.27	1635
	32	石鏃	6.5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	1.55	1.40	0.40	0.46	4214
	33	石鏃	11T Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	1.40	1.40	0.30	0.50	9
	34	石鏃	7 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	1.65	1.15	0.35	0.35	3344
	35	石鏃	6.5 Ⅳ	安山岩	1.80	1.40	0.30	0.43	3695
	36	石鏃	5 Ⅳ	黒曜石(腰岳系)	1.45	0.95	0.25	0.24	4
	37	石鏃	6 Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	1.70	1.55	0.25	0.51	1563
	38	石鏃	8 Ⅳ	黒曜石(腰岳系)	2.00	1.10	0.30	0.45	5715
	39	石鏃	7 Ⅴ	安山岩(サヌカイト)	1.35	1.40	0.30	0.31	3179
	40	石鏃	8 Ⅲ	黒曜石(腰岳系)	1.25	1.65	0.35	0.39	3450
	41	石鏃	6.5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	2.20	1.55	0.35	0.80	3707
	42	石鏃	6 Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	2.10	1.65	0.35	0.77	1447
	43	石鏃	6.5 H37	黒曜石(腰岳系)	1.70	1.50	0.30	0.58	4250
	44	石鏃	5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	2.95	1.95	0.55	1.68	519
	45	石鏃	5 Ⅳ	安山岩	2.30	1.70	0.55	1.15	335
	46	石鏃	6.5 Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	2.15	1.60	0.40	0.83	1742
	47	石鏃	10 Ⅲ	黒曜石(腰岳系)	2.30	1.90	0.40	0.97	6179
	48	石鏃	7.5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	2.30	1.55	0.50	1.46	3946
	49	石鏃	5 Ⅳ	黒曜石(腰岳系)	2.45	2.05	0.65	2.08	189
	50	石鏃	5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	1.65	1.40	0.30	0.56	159
	51	石鏃	6 Ⅲ	黒曜石(腰岳系)	1.50	1.45	0.25	0.50	1559
	52	石鏃	14 Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	3.20	2.45	0.45	1.88	588
	53	石鏃	14 溝2	安山岩(サヌカイト)	2.60	2.05	0.30	1.57	674
	54	石鏃未製品	7 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	2.60	2.05	0.40	1.66	2536
	55	石鏃再加工品	9 Ⅲ	黒曜石(腰岳系)	1.70	2.45	0.40	1.89	
	56	異形石器	9.5 H20	安山岩(サヌカイト)	3.10	1.25	0.40	1.47	
	57	異形石器	6.5 Ⅳ	安山岩(サヌカイト)	2.85	0.70	0.35	0.65	3430
	58	異形石器	10 Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	4.05	1.05	0.60	2.48	5439
	59	楔形石器	9.5 Ⅲ	鉄石英	3.05	1.70	1.00	4.22	3121
	60	石錐	9.5 H7	黒曜石(腰岳系)	2.10	1.05	0.50	1.20	2392
	61	石匙	9.5 Ⅲ	鉄石英	3.45	3.50	0.90	7.73	
	62	スクレイパー	7.5 Ⅳ	黒曜石(腰岳系)	3.05	1.95	0.90	4.19	3660
	63	スクレイパー	9.5 Ⅱb	黒曜石(腰岳系)	2.35	1.50	0.85	2.58	68
	64	スクレイパー	9.5 H7	黒曜石(腰岳系)	3.50	1.85	0.55	3.36	2286
	65	スクレイパー	6 Ⅱb	黒曜石(日東系)	2.25	2.55	0.65	4.42	482
10図	66	スクレイパー	15 Ⅲ	安山岩(サヌカイト)	3.60	6.35	0.95	16.00	45
	67	刃つぶしのある石器	5 Ⅲ	黒曜石(三船系)	3.00	2.65	1.05	7.20	1165
	68	石核	6.5 Ⅲ	黒曜石(上牛鼻系)	3.85	4.50	2.05	36.47	2043
	69	石核	8 Ⅲ	黒曜石(上牛鼻系)	3.70	3.30	1.15	13.10	2944
	70	石核	8 Ⅳ	黒曜石(腰岳系)	3.45	2.70	2.15	18.83	5788
	71	石核	8 Ⅲ	黒曜石(腰岳系)	3.75	3.30	1.80	21.51	1268
	72	石核	5	頁岩(硅質)	5.65	7.25	3.00	82.50	1422
	73	石核	7.5 土6	安山岩	2.50	4.25	2.80	22.13	3354
	74	石核	18T Ⅲ	頁岩	4.40	5.25	5.05	80.07	
11図	75	針状原石製錐	9.5 Ⅲ	黒曜石(腰岳系)	5.70	1.30	1.00	5.92	3444
	76	打製石斧	8 Ⅳ	頁岩	10.55	3.80	1.15	60.18	5737
	77	打製石斧	9 Ⅲ	安山岩	12.90	5.45	1.95	180.17	6062
	78	打製石斧	8 Ⅳ	安山岩	11.40	6.10	1.65	109.63	5739
	79	打製石斧	7.5 Ⅳ	安山岩	14.30	5.15	1.60	188.51	3588
	80	打製石斧	8 Ⅲ	頁岩	9.70	6.20	1.40	104.78	3816
	81	打製石斧	9 Ⅲ	安山岩	7.60	7.00	1.85	122.31	3308
	82	打製石斧	9.5 H6	安山岩	6.55	8.70	1.55	102.38	4290
	83	礫器	9.5 Ⅳ	頁岩	9.35	8.15	3.60	370.00	4205
	84	横刃形石器	8 Ⅳ	ホルンフェルス	6.05	7.35	2.25	134.43	5582
	85	横刃形石器	8 Ⅳ	安山岩	5.00	5.50	0.95	28.32	5807
	86	石錘	8 Ⅳ	安山岩	7.35	7.10	2.40	233.69	5724
	87	石錘	8 Ⅳ	砂岩	7.00	9.80	2.25	232.30	5740
	88	石錘	6.5 H26	頁岩	11.30	7.00	1.65	221.03	2767
	89	石錘	13 溝	安山岩	11.00	7.40	1.25	178.80	4
	90	打欠きのある扁平円礫	6.5 Ⅱb	頁岩	6.40	5.65	0.85	50.01	989

第Ⅴ章　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は，調査区の南側に当たるＫ６～８区を中心に，竪穴住居跡，溝状遺構，土坑，ピットなどが，遺物包含層であるⅣ層下面より検出された。

出土遺物は，甕型土器（以下甕と略す），壺型土器（以下壺と略す），鉢，高坏などの土器や，磨製石鏃，石庖丁などが調査区全体から広く出土している。割合的には，調査区北側（Ｋ８～16区）よりも，南側（Ｋ１～８区）からの出土量が多く，特に遺構の検出されたＫ６～８区では多量の遺物が集中して出土している。

時期的には，弥生時代前期から終末期までの遺物が出土しているが，中期前半～中頃，後期前半頃，終末期の遺物が中心である。

遺構総数は20を超え，遺物量も膨大なことから，弥生時代は本遺跡の主体となる時代の１つである。

第１節　検出遺構（第11～33図　１～131）

弥生時代の遺構と考えられるものは，第60図遺構分布図に示したように，竪穴住居跡９軒，溝状遺構１条，土坑・ピット11基が検出された。いずれも，遺物包含層であるⅣ層下面より検出されたものが中心である。また，遺構内埋土が検出面と同じ暗褐色土であり検出しにくいものも多く，遺物の出土状況により遺構と確定できたものもあった。

遺構内からは，甕，壺を中心に多くの遺物が出土しており，遺構内遺物の総数は131点である。時期的には，包含層からの流れ込みと思われる弥生時代前期～中期中頃の遺物と，後期や終末の遺物が混在して出土するものが大部分を占める。

遺構内出土遺物については，「第Ⅴ章　第２節　出土遺物」の項で行った型式分類を基本として説明を行う。

１　弥生時代の竪穴住居跡（第11～27図）

調査区全体で９軒の竪穴住居跡が検出されているが，調査区外へ続くため調査不能部分があるものや，異なる時期の遺構に削平されるなどで一部分のみ検出されたものも多い。

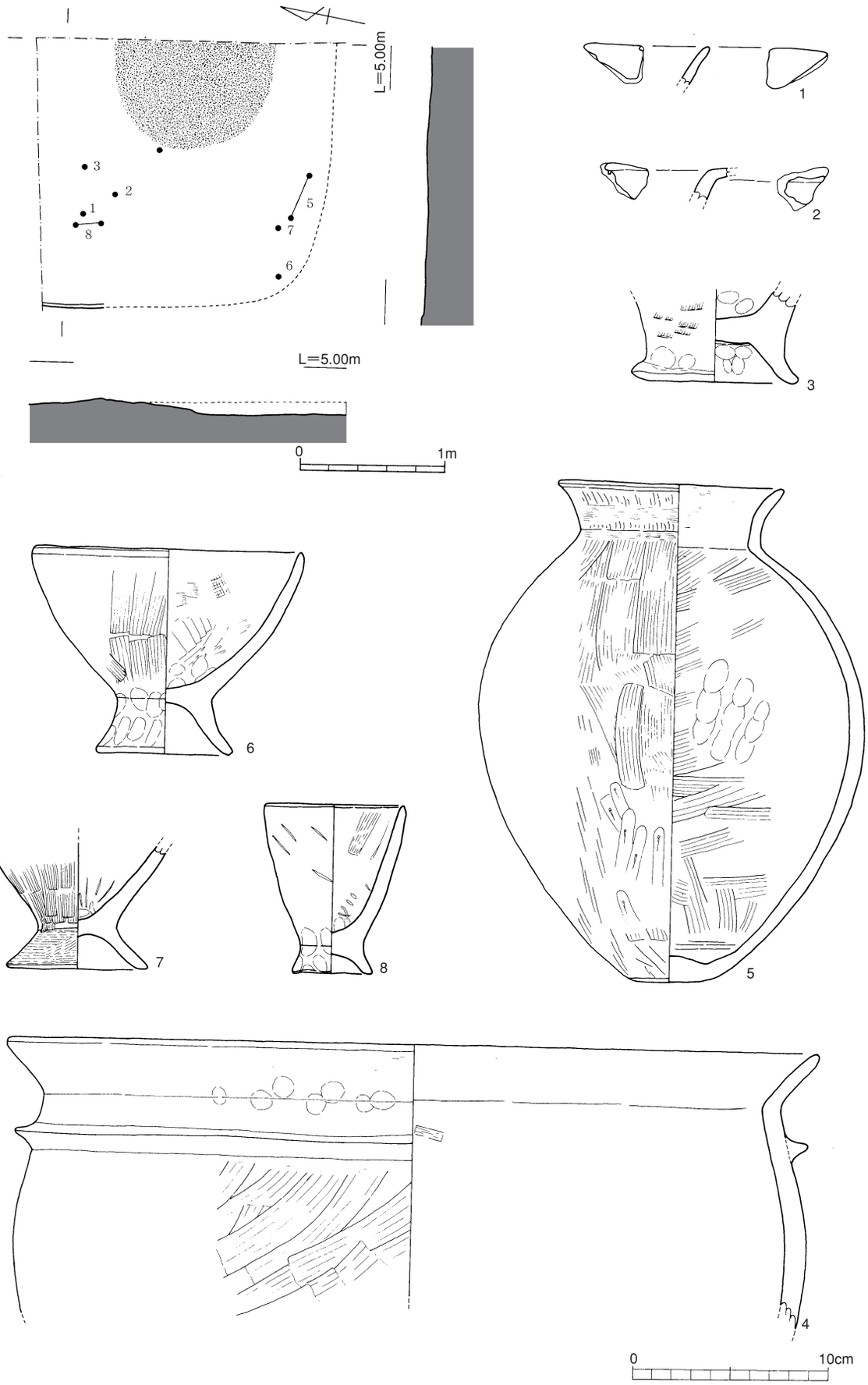
Ｋ６～6.5区に５軒，標高は5.2m，K7.5～８区に４軒，標高は5.1mで検出されている。

16号竪穴住居跡以外はほぼ方形を呈しており，大きさも約2.7m×2.7mと同規模である。また，主軸は南北方向からやや東へ傾いており，住居の重なりは見られない。竪穴住居跡の全体配置図は，第60図に示した。

15号竪穴住居跡（第11図）

K8区東側壁付近で検出された。16号竪穴住居跡の北7.2mに位置し，北側が現道部分，東側が未調査区域に延びるため全長を知ることはできないが，検出された大きさは，南北2.1m，東西1.8mで隅丸方形を呈する。主軸は不明である。

包含層と埋土が同じ暗褐色土であり検出面の判別が難しかった。床面については，明瞭な貼り床



第11図　弥生時代の15号竪穴住居跡と出土遺物

は認められなかったが，自然堆積層である周辺と比較すると硬く締まっており，また，中央部に炭化物の広がりが１ｍ×80㎝範囲で検出されたため，床面と判断した。よって，検出面からの深さは９㎝であるが，検出面はまだ上位にあると考えられる。

出土遺物（第11図　１～８）

遺物は床面直上より甕，大甕，壺，鉢など31点が出土した。この内８点を図化した。

１，２は，甕の口縁部である。小片のため全体像は不明であるが，２の内側に稜が残る。

３は，甕の底部である。脚は低く，裾がわずかに反るもので，高台内天井に平坦部を持つ。指ナデ調整による凸凹が器面に残り，底唇部も歪んでおり不安定である。

４は，くの字状の口縁を持ち，口縁部下位に三角突帯文を施す大甕である。胴部上位に最大径を持つ頸部で弱く締まる。口縁部内面に稜がある。

５は，丸みを持った胴部が頸部で締まり，口縁部がわずかに反る平底の壺である。平底の底径は3.8㎝で，内外面ともハケメ調整を施す。

６～８は，脚台付の鉢である。６は，やや長めの脚を持ち，内湾しながら直線的に開くものである。全体的に薄作りであり，口唇部は尖り気味に丸く仕上げている。８は，脚の短い小さめの脚台を持ち胴部の開きが弱いもので，指ナデ調整痕を多く残し手捏ね風の仕上がりである。

16号竪穴住居跡（第12図）

Ｋ８区，東側壁付近で検出され，15号住居跡の7.2m南に位置する。東側部分は現道部分へ伸びるため全体形状は不明であるが，検出された部分は南北2.7m，東西2.7mで主軸は不明である。住居跡の形状は楕円形に近い隅丸方形で，東側が現道部分へ伸びている。

検出面からの深さは10㎝であり，床面に硬化面はなく平坦である。わずかに西側へ傾斜している。

出土遺物（第12図　９～14，第63図　447）

床面近くから甕，壺，鉢，高坏，小型土器などの土器と磨製石鏃が出土したが，小破片のものが多かった。遺物総数14点中６点を図化した。また，447の磨製石鏃については「第３節　出土石器」にて説明を行った。

９，10は，甕の口縁部である。９は，直線的な胴部から口縁部が強く外反するくの字状口縁を呈するもので，内側に稜を持つ。上面はわずかに反りを持つ平面で，口唇部は丸みを持った方形である。10は，やや張りを持つ胴部が頸部で締まり口縁部が緩やかに外反するもので，口縁部内面に稜は見られない。薄作りで，口唇部は尖り気味である。

11は，丸みを持った張りのある胴部が頸部でしまり，そこから口縁部が外反する壺である。胴部下位は器壁が厚く，内外面ともハケメ調整が施される。底部形状は不明である。

12は，張りのある胴部から内湾しながら口縁部へ至る鉢である。口唇部は丸く仕上げ，内面のハケメ調整痕はナデ消されておらず，外面はやや摩耗している。外面上位に煤が付着している。

13は，逆Ｌ字状に外反する高坏の口縁部である。内側に尖った張り出しを持ち，上面はやや凹んだ平坦面が水平に伸びている。内外面とも丁寧な横ナデ調整が施される。

14は，小型の手捏ね土器である。底部は尖底で，胴部はやや膨らみを持って直線的に開く鉢形を呈する。調整は粗く，手捏ねである。

19号竪穴住居跡（第13図）

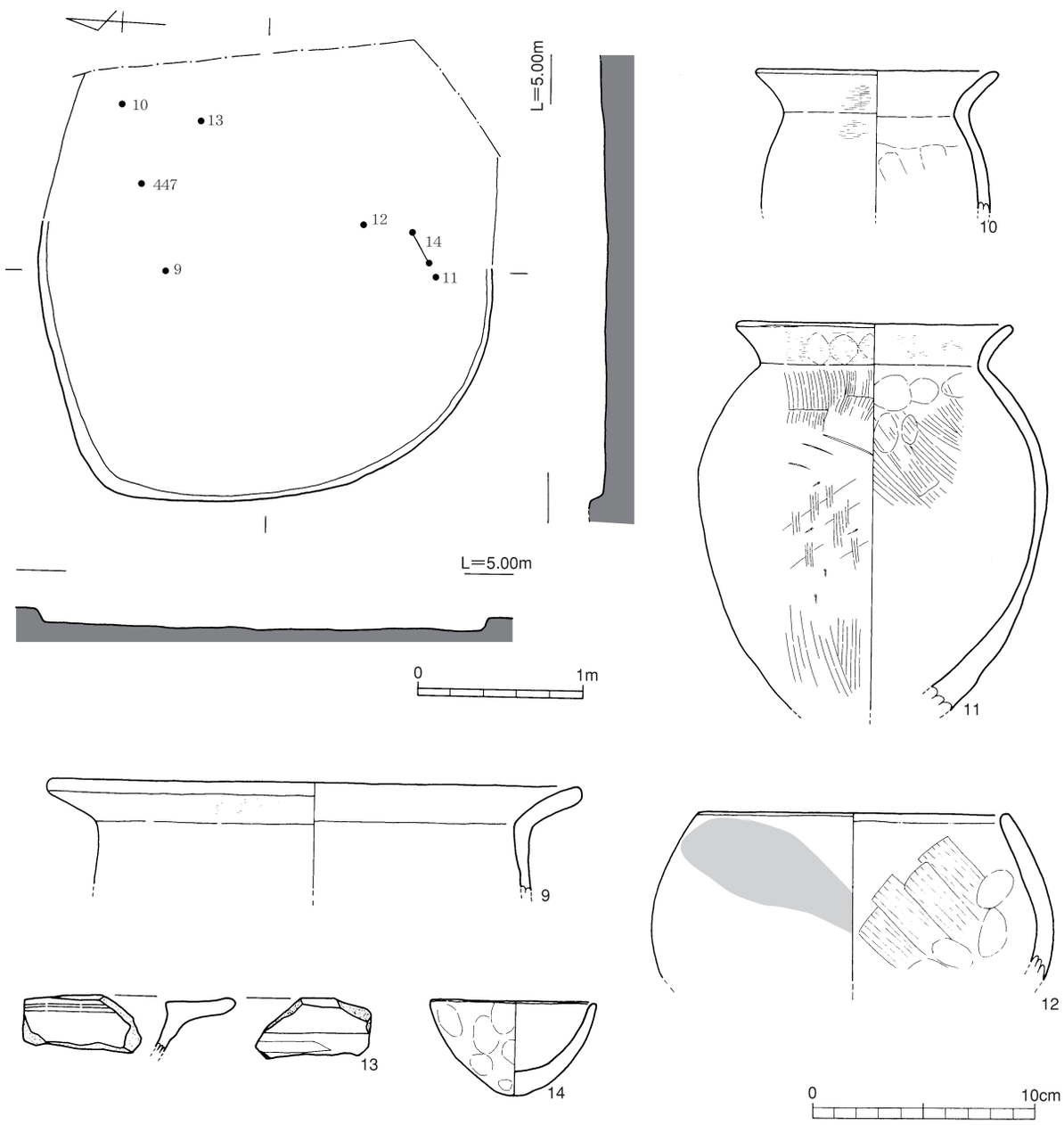
Ｋ６区北側で検出され，26号住居跡から4.7ｍ南東，27号住居跡から6.5ｍ西に位置している。住居跡の形状は，長径2.7ｍ，短径2.5ｍの方形を呈し，主軸の方位は北東―南西である。

検出面からの深さは６㎝で，床面は平坦である。床面に明確な硬化面は形成されていない。北側壁より礫が検出されているが，住居との関連はなさそうである。

出土遺物（第13図　15～22）

遺物は埋土中より甕，壺，高坏，器台など多数出土した。出土した51点中８点を図化した。

15～17は，甕の口縁部と底部である。15は，胴部上面に張りを持ち口縁部が逆Ｌ字状に強く外反する甕である。内側に明瞭な稜を持ち，口唇部は先細りしている。16，17は，脚が大きく開く脚台



第12図　弥生時代の16号竪穴住居跡と出土遺物

である。16は胴部との境から大きく反りながら開くもので，全面に丁寧な横ナデ調整を施し，脚台内天井は丸く仕上げている。17は裾部付近で強く開く低めのもので，脚台内天井は平坦面である。

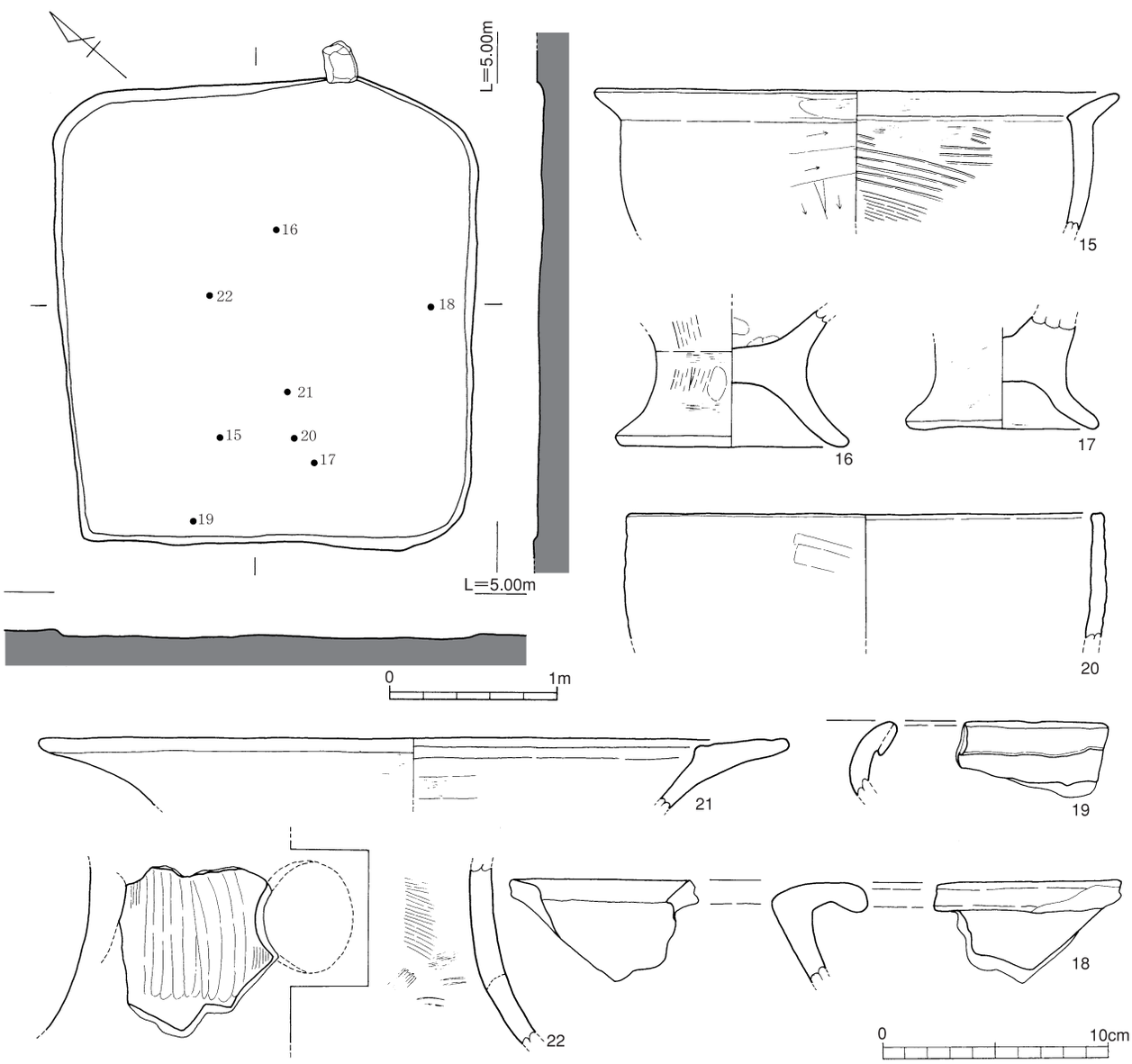
18は，大甕の口縁部である。張りのある胴部が強く締まり大きく外反するもので，逆Ｌ字状を呈している。内面に稜を持ち，上面はやや反りながら肥厚した口唇部へ続く。

19は，胴部形態は不明であるが，屈曲の強い短い口縁部を呈し，端部下面に幅広の粘土を貼り付け肥厚させたものである。口唇部は丸みを持ち，外面中央に粘土貼り付けの段を持つ。「２　出土遺物」中の壺の分類 Ⅸ類に当たる。

20は，直口する鉢の口縁部である。口唇部に面を持ち，中央が浅く凹んでいる。

21は，口縁部が水平に伸びる高坏の坏部である。口縁部内側に明瞭な張り出しを持ち，口縁部上面は平坦である。

22は，底部へ向かい緩やかに開く器台である。胴部中央に円形透孔を１個有する。



第13図　弥生時代の19号竪穴住居跡と出土遺物

26号竪穴住居跡（第14図）

K6.5区西側壁近くで検出され，19号住居跡から4.7m北西に位置する。住居跡の形状は，一部未調査部分が残るが，長径2.9m，短径2.6mの方形を呈し，主軸の方位は19号住居跡と同じ北東―南西である。

検出面からの深さは10cmで，床面は平坦である。床面に明確な硬化面は形成されず焼土や炭化物なども検出されなかった。古墳時代の土坑で切られ床面近くまで掘り込まれていた。

出土遺物（第14図　23～36）

遺物は埋土中より甕，壺，高坏など多数出土した。出土した68点中14点を図化した。

23，24は，甕の口縁部が強く外反し逆Ｌ字状を呈するものである。23は，口縁部内側に小さな張り出しを持ち，上面はやや反り気味となる。24は，口縁部内側に明瞭な稜を持ち，口唇部を面取りしている。

25～27は，口縁部の屈曲が弱く，内側に稜を持たないものである。25は胴部が張りを持ち頸部で締まり緩やかに外反するＳ字状の口縁を呈するものである。口唇部は面取りがされ中央が凹んでいる。外面に煤が広く付着している。26，27は，締まりが弱い直口気味の口縁部が，わずかに外反するものである。27は，内面にハケメ調整痕が明瞭に残る。

28，29は，甕の底部である。28は，厚みのある平底で，接地面から直接的に開くものである。外面は縦方向のナデ調整である。29は，脚の長い脚台で，裾部で外反する。脚台内面天井は丸く仕上げている。

30，31は，壺の口縁部と底部である。30は，ラッパ状に開く口縁部の端に平坦面を作り出しそこに凹線文を意識した，横位の沈線を２条施す。外面は縦方向のハケメ調整である。31は，平底の底部であり，平坦面は直径5.2cmである。

32～35は，高坏の脚部である。32は，直線的に開く肥厚した脚で，外面は縦位のハケメ調整，内面は指ナデ調整である。裾部の形状は不明である。33は，裾部が強く開くもので，内外面ともハケメ調整である。34は，裾部が大きく開く脚部であり，先端は面取りされている。脚部中央に直径８㎜円形透孔が１個施されている。35は，薄手の裾部であり端部が面取りされ中央部に凹みがある。上位に直径５㎜の円形透孔が１個残っている。

36は，尖底の鉢形をした小型土器である。内面に工具ナデ，外面に指ナデ調整を施す。

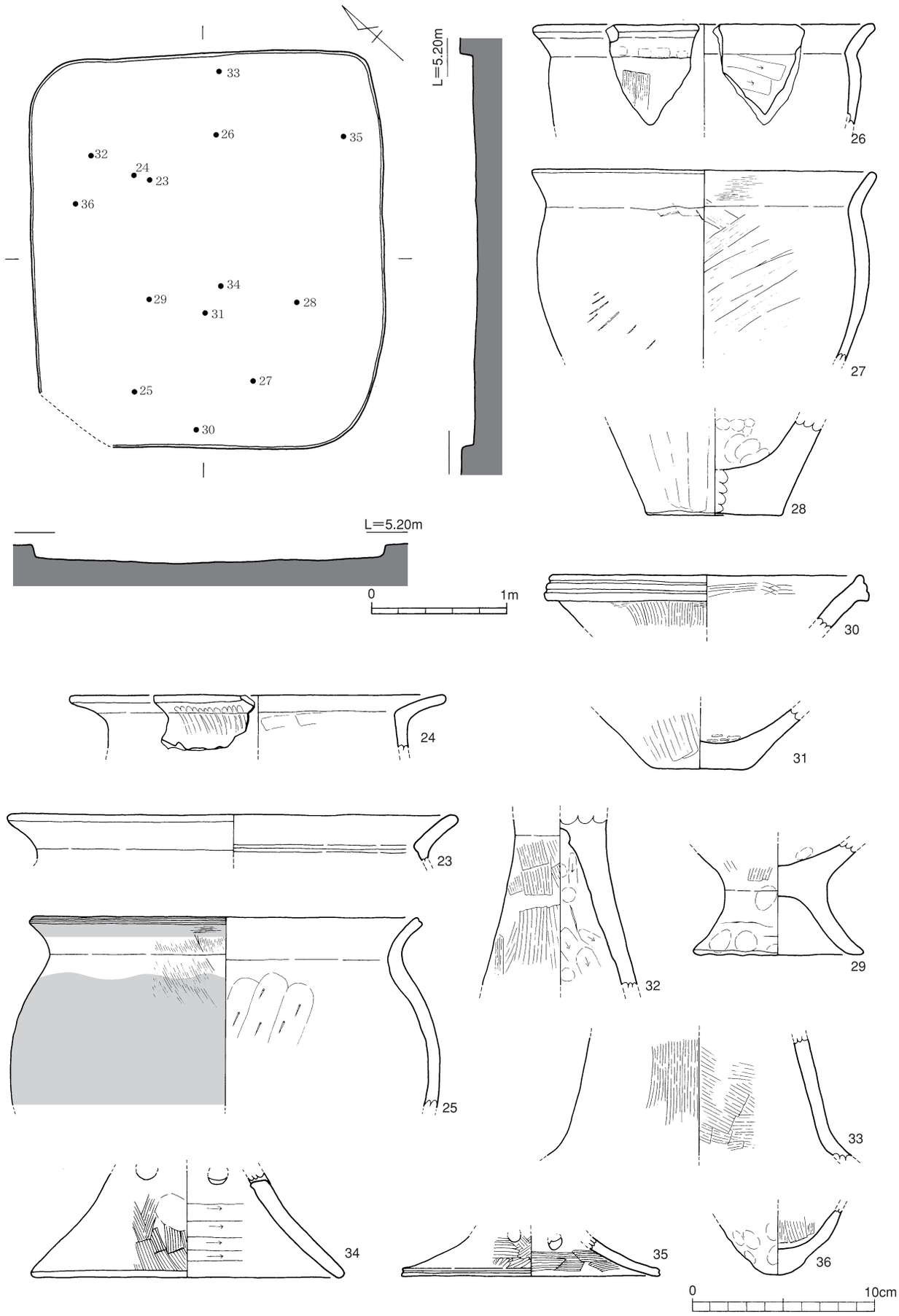
27号竪穴住居跡（第15図）

K6.5区東側壁近くで検出され，19号住居跡から6.5m北東，26号住居跡から8.0m東に位置する。住居跡の形状は，長径2.5m，短径2.4mの方形を呈し，主軸の方位は26号住居跡と同じ北東―南西である。

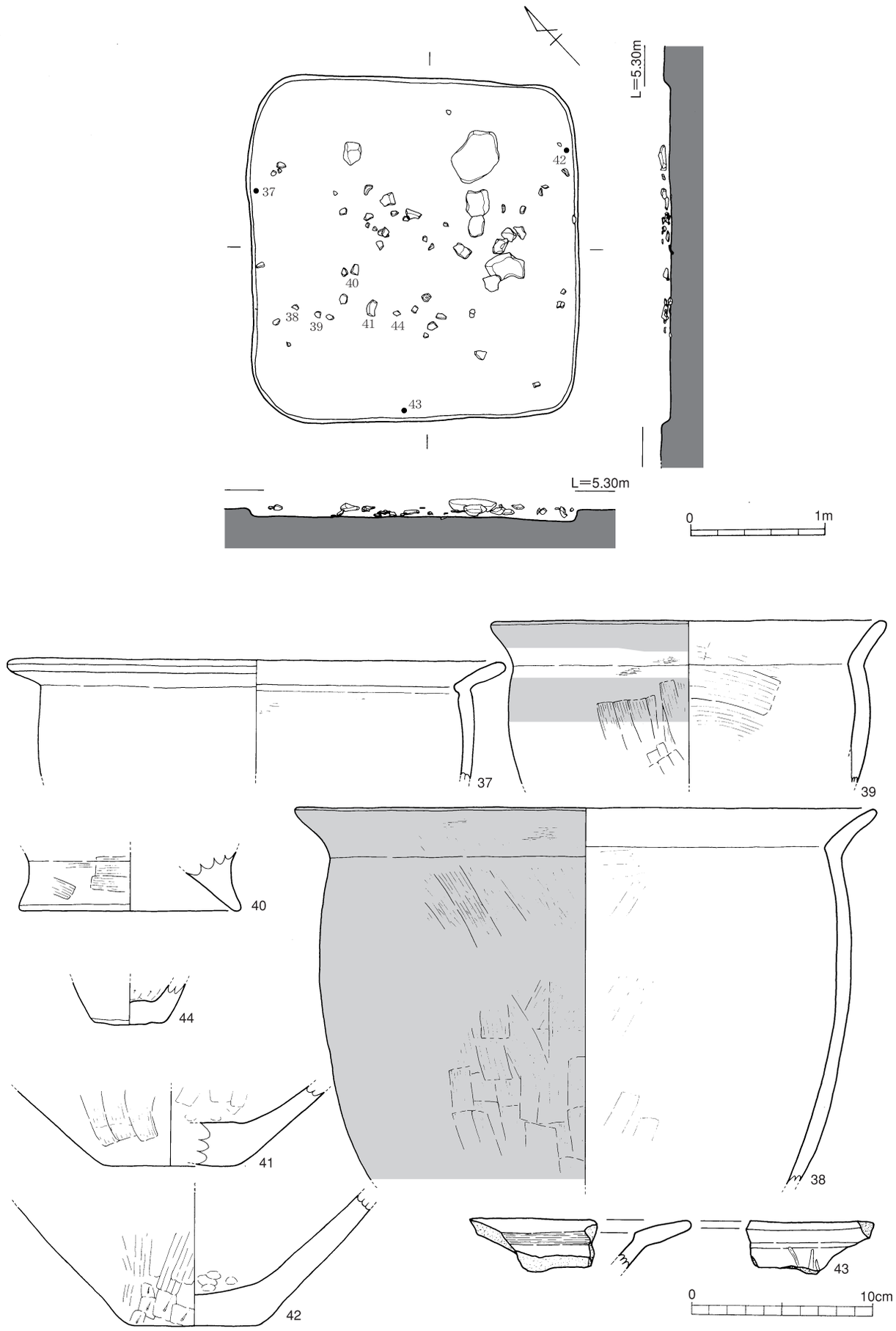
検出面からの深さは10cmで，床面に明確な硬化面は認められなかったが，中央部に白粘土混じりの粘質土が広がっていた。底面に12～40cmの平坦な礫が東西方向に並んで検出されたが，住居との関連は不明である。

出土遺物（第15図　37～44）

遺物は，床面直上から多数出土した。出土した遺物は，甕，壺，高坏，小型土器などであり，遺



第 14 図　弥生時代の 26 号竪穴住居跡と出土遺物



第15図　弥生時代の27号竪穴住居跡と出土遺物

物総数51点中８点を図化した。

37～39は，くの字状に外反する甕である。37は張りのある胴部から強く外反し開くものである。内側に張り出しを持ち，下位に凹みが巡る。38は，胴部上位に張りを持ち，やや締まりながら外反するもので，内側に強い稜を持つ。薄作りで内外面ともハケメ調整の後丁寧なナデ調整である。外面全体に煤が付着している。39は，丸みを持つ胴部から口縁部が弱く外反し，内面に曖昧な稜を持つものである。内外面ともハケメ調整の後ナデ調整を施し，口縁部上位と胴部上位の煤が付着している。

40は，肥厚した短めの脚がわずかに開く甕の底部である。端唇部は丸く仕上げている。

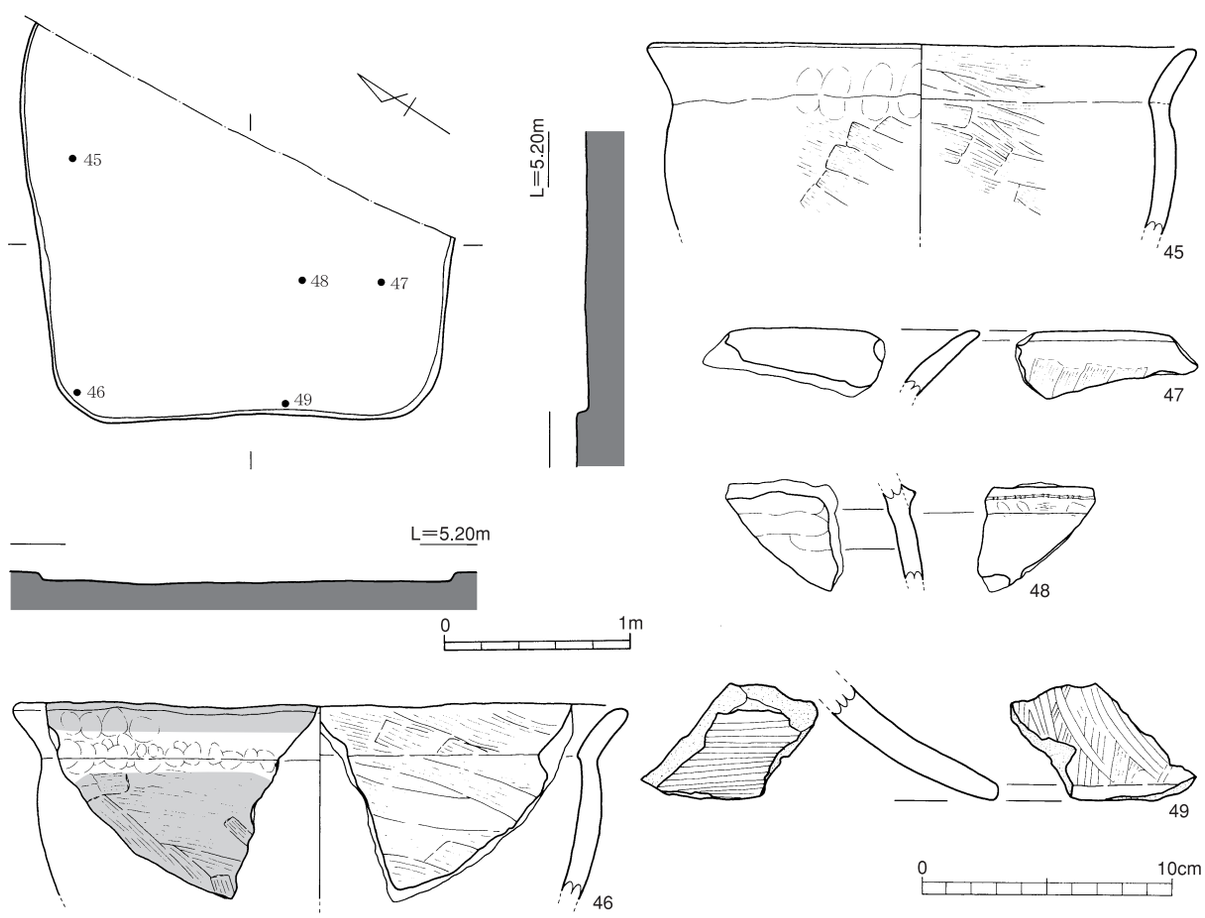
41，42は，壺の底部であり，平底を呈している。広めで厚みのある底面から直線的に大きく開く。41は，内外面とも丁寧なナデ調整を施している。42は，ハケメ調整後のナデ消しが十分でなく，調整が粗い。胴部の底面近くにわずかな凹みが残る。

43は，くの字状に外反する高坏の口縁部である。上面に平坦面を持ち，内側に張り出す。

44は，平底の小型土器の底部である。調整が粗く，手捏ねである。

28号竪穴住居跡（第16図）

K6.5区東側壁に伸びるように検出され，27号住居跡から5.7m北，30号住居跡から4.1m東に位置



第16図　弥生時代の28号竪穴住居跡と出土遺物

する。未調査区へ伸びるため一部不明であるが，検出された住居跡の形状は，長径2.2m，短径1.5mの隅丸方形を呈し，主軸の方位は26号，27号住居跡と同じ北東―南西であると思われる。

検出面からの深さは10㎝で，床面は平坦であり硬化面は認められなかったが，中央部に古代の掘立柱建物跡柱のピットが切り合っている。

出土遺物（第16図　45～49）

遺物は，一部切り合いなどにより撹乱を受け少なく，甕，高坏などがわずかに出土したのみであった。遺物総数28点中５点を図化した。

45～47は，わずかに膨らみを持つ胴部から，くの字状に外反する甕の口縁部である。内側に稜を持ち，内外面ともハケメ調整を施す。46は，外面全体に煤が付着している。

48は，刻目を施した三角突帯を持つ胴部であるが，口縁形状など全体形は不明である。

49は，高坏の脚裾部である。厚めの脚がわずかに反りながら大きく開くもので，端昏部を面取している。外面は縦方向，内面は横方向のハケメ調整である。

30号竪穴住居跡（第17図）

K6.5区で検出され，28号住居跡から4.1m西，27号住居跡から7.2m北西に位置する。住居の西側が近世遺構に切られ削平されているが，検出された部分は長径2.6m，短径2.0mの方形を呈し，主軸の方位は28号住居跡と同じ北東―南西である。

検出面からの深さは４㎝で，床面は埋土よりやや固く締まっている。東側中央に，長径1.0m，短径0.6mの焼土の広がりが検出されたが，掘り込みは認められなかった。

出土遺物（第17図　50～57）

遺物は，床面直上の焼土付近を中心として，甕，壺などが出土している。出土した38点中８点を図化した。

50～52は甕の口縁部である。50は，屈曲の強いもので，内側に張り出しを持つ。上面はほぼ平面で，口唇部は丸みを持った方形である。51は，内側にわずかな稜を持つ屈曲の弱い口縁部で，内外面ともハケメ調整である。52は，緩やかに外反するＳ字状の口縁部で，内面に縦方向のハケメ調整痕が残る。

53，54は，甕の底部である。53は，肥厚な短い脚が下位で強く外反するもので，端昏部は，やや上がり気味に尖っている。54は，薄手の脚が緩やかに開くもので，摩耗が激しい。

55，56は，壺の口縁部である。55は締まった頸部から直線的に立ち上がり，外反するもので，口唇部に広い面を作り出し，横位の沈線を２条巡らしている。外面に縦方向のハケメ調整を密に施し，胴部との境目に小さな三角突帯を巡らす。内面は粘土接合のナデ消しが不十分であり，接合痕が筋状に残る。56は，締まった頸部からラッパ状に開くもので，口唇部に粘土貼り付けによる凹み持った面を作り出す。外面下位は斜め方向のハケメ調整，上位は横ナデ調整である。

57は，壺の肩部であり，全体器形は不明であるが，ヘラ描き沈線文を９～10条施す。

32号竪穴住居跡（第18図）

K7.5区とＫ８区で検出され，28号住居跡から25.5m西，27号住居跡から30.0m北西に位置する。住居の西側が近世遺構と切り合い削平されているが，検出された部分は長径2.8m，短径1.5mの方

形を呈し，主軸の方位は28号住居跡と同じ北東―南西である。

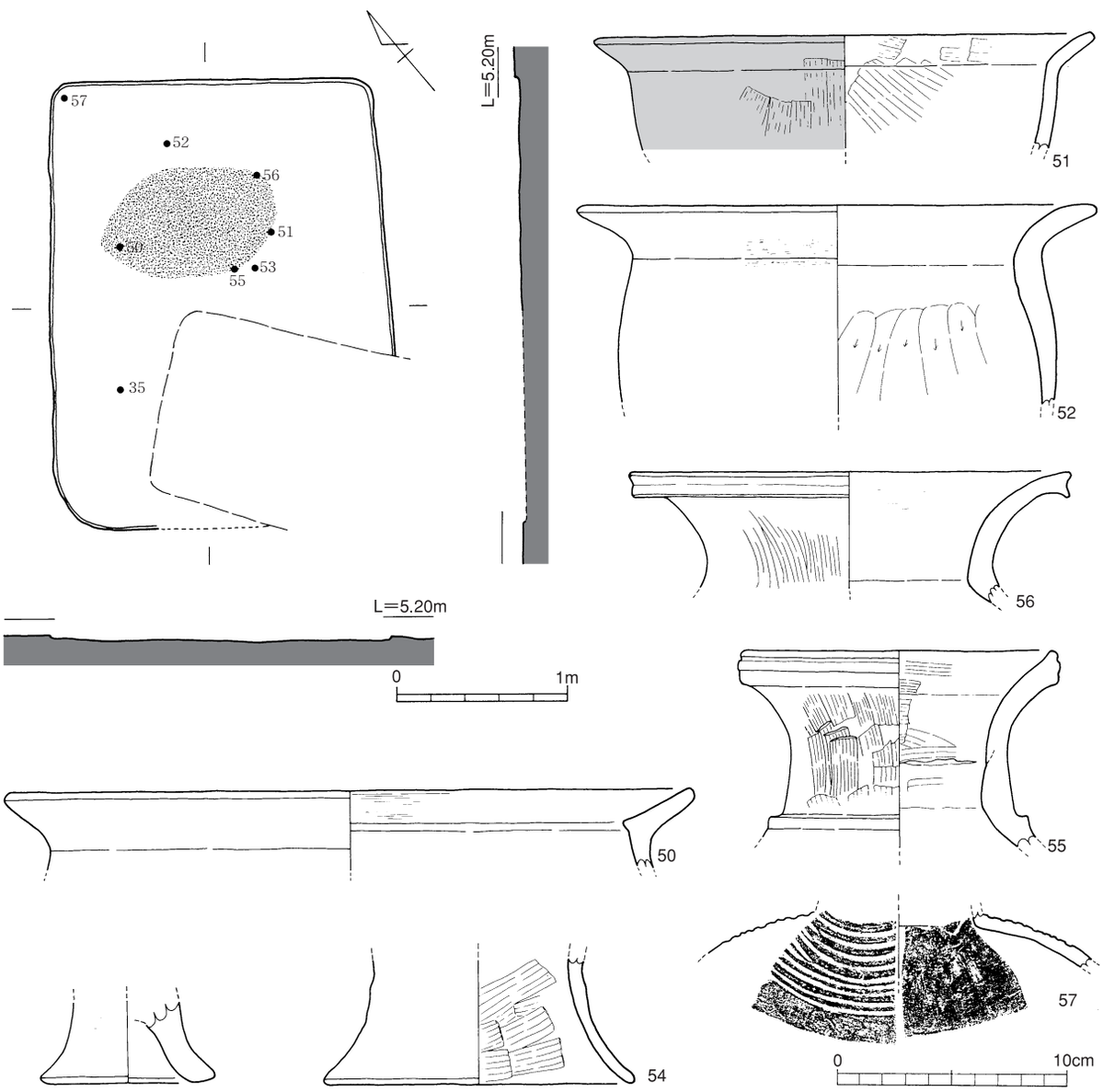
検出面からの深さは24㎝で，床面は埋土よりやや締まっている。東側中央に，長径1.0m，短径0.6mの焼土の広がりが検出されたが，掘り込みは認められなかった。

出土遺物（第19～23図　58～79）

遺物は，床面直上の焼土付近を中心として，甕，大甕，壺，蓋型土器，鉢などが出土している。出土した61点中22点を図化した。

58～62は，胴部上位にわずかな張りを持ち，口縁部がくの字状に外反する脚台付の甕である。

58は，口縁部の外反がやや強いもので，上面がわずかに反り，口唇部に面を有する。内側には稜が残り，内外面ともハケメ調整である。高い脚台の裾の開きは小さく，脚台内天井は丸く凹んでいる。丸みのある胴部には煤が付着し，胴部の大きさに比べ底部が小さいものである。59は，胴部の張りが強く，口縁部の屈曲は小さいものである。内側に明瞭な稜を持ち，外面に縦方向のハケメ調整を施す。脚台は直線的に開き，裾部はやや尖り気味である。60は，小型のもので薄作りである。



第17図　弥生時代の30号竪穴住居跡と出土遺物

内外面にハケメ調整を施し，わずかに開く脚は小さく，不安定である。61は，胴部上位で張りを持ち，底部へ向けて直線的にすぼまるものである。くの字状に外反する口縁部内側に稜を持ち，口縁部内面に横方向の，胴部に縦方向のハケメ調整を施す。62は，大きくラッパ状に開く脚台を持つもので，脚台内天井は尖り気味に凹み，裾部の接地面を平坦にするなど安定した器形である。

63～66は，口縁部下に最大径を持ち，内湾しながら底部で締まるものである。脚台は小さめで直線的に開き，端部は尖り気味である。63は，外面下位に板ナデ調整を縦方向に施し，脚台と胴部の境目に横ナデ調整痕が残るものである。64は，胴部の張りが大きく，屈曲の小さな口縁は直口気味に開く広口の甕である。65，66は，張りの強い胴部がやや強めに外反するもので，内面に稜が残る。

67は，底部から直線的に開く胴部が口縁部近くで強く内湾し，口縁部は緩やかに外反する。口唇部に面取がされ，胴部下位に強いナデ調整を施す。

68，69は，胴部上位に張りを持つが，頸部でほとんど締まらず，口縁部が上方へ向かって立ち上がり気味に反るもので，屈曲が弱く直線的である。68は，わずかに反る口縁部外面に工具ナデ痕が筋状に残っている。胴部は器壁が薄く，八の字状に開く脚台内面天井に平坦面も持つ。69は，工具痕を頸部付近や胴部中央に残し，全体的に薄く仕上げている。口唇部に面を持ち，内面にハケメ調整を施す。

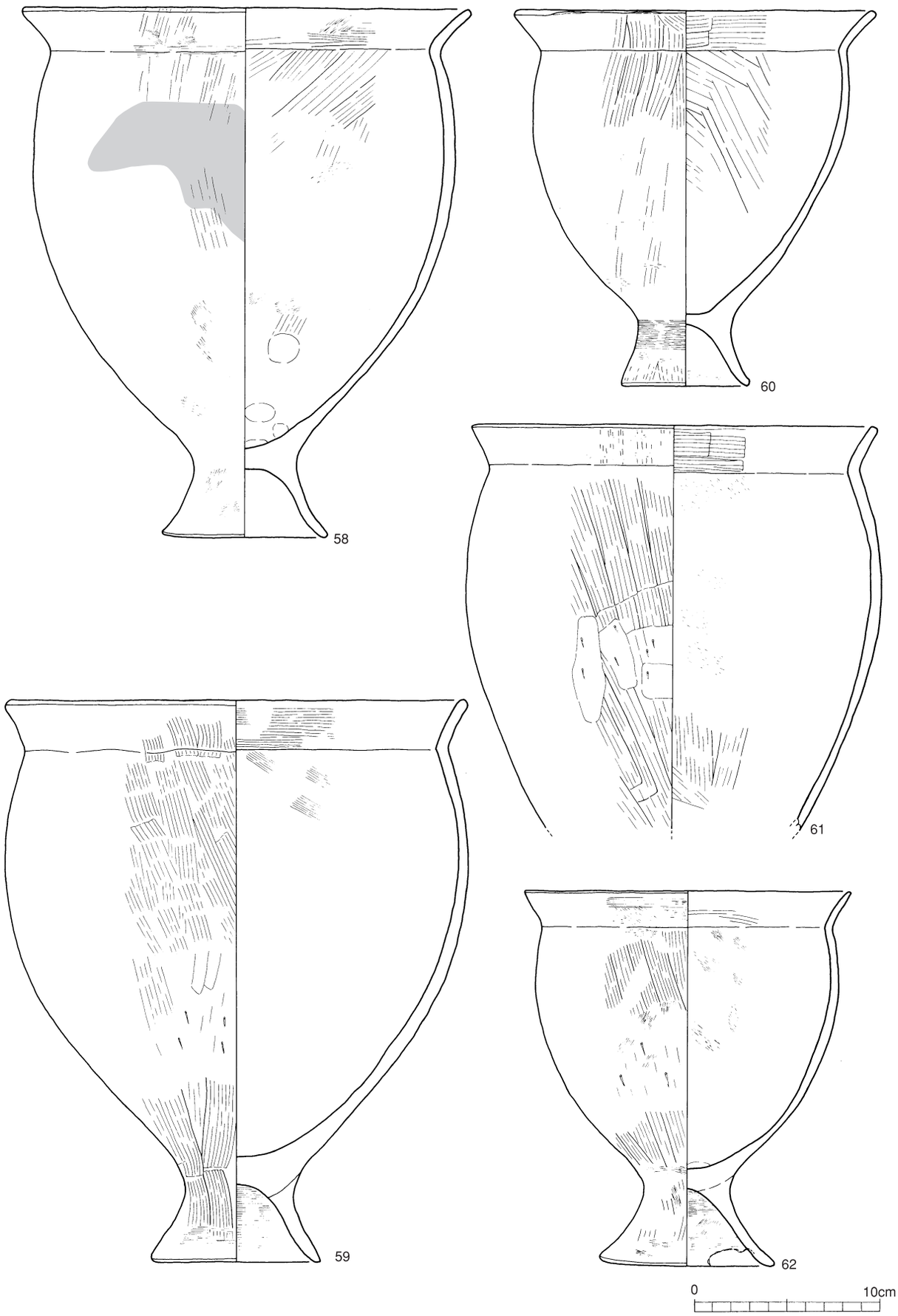
75は，胴部中央に最大径を持ち､頸部でやや締まり口縁部がわずかに反る広口の大甕である。底部形態は，平底気味の丸底である。頸部に斜め方向の刻目を施した小さめの三角突帯を巡らす。全体的に薄作りであるが，胴部下位を最も薄く仕上げ，底部は厚みがある。口縁部内側に弱い稜を持ち，口唇部に面を持つ。摩耗が激しいが，内外面ともハケメ調整の後ナデ調整である。

76～79は，卵形の胴部を持ち，頸部で締まり外反する丸底の壺である。76，77は，張りのある胴部が強く締まり，くの字状に外反するものである。76は，内側に稜を持ち，口唇部は尖り気味の方形である。口縁部上面は反りながら開いており，胴部中央に黒斑が残る。77は，直線的に伸びる口縁部で，口唇部に面取りしている。内側の稜はわずかに残り，口縁部外面に縦方向のハケメ調整を施す。全体的に歪んでおり，左右非対称である。78は，楕円形を呈したやや細長い胴部が頸部で締まり，直立気味に立ち上がった口縁部が端部でわずかに反るものである。口縁部断面はＳ字状を呈し口唇部は尖っている。79は，小型のもので，口縁部がくの字状に外反している。内側に稜は持たず，先端は尖っている。全体的に調整が粗く，器面に小さな凸凹があり，やや歪んでいる。

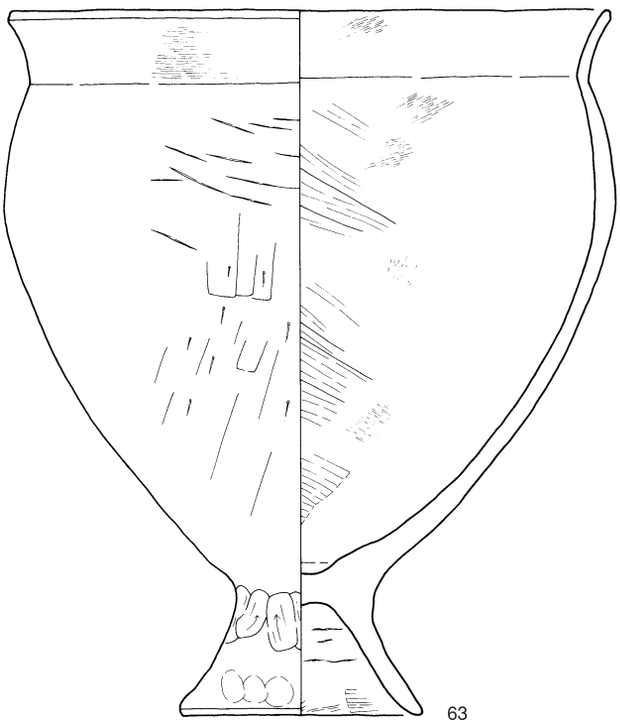


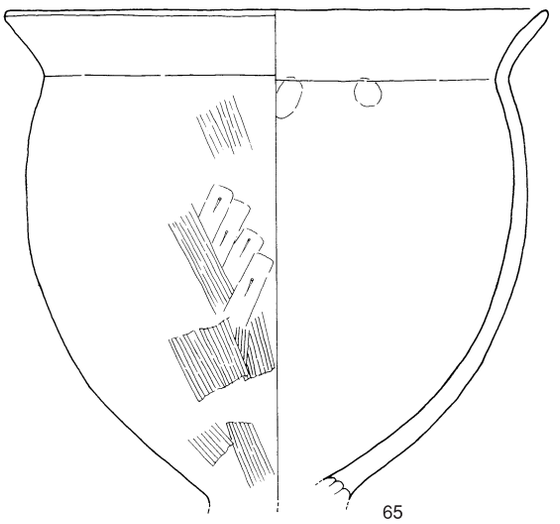
第18図　弥生時代の32号竪穴住居跡1

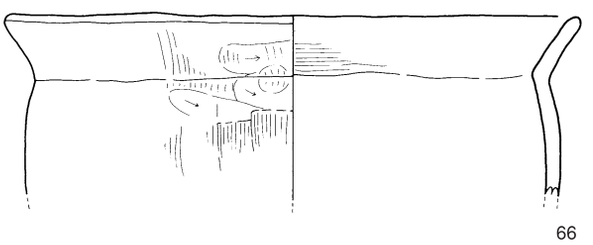
70は，高さの低い蓋型土器である。天頂部は丸く，わずかに内湾しながら下位で強く屈曲し，直線

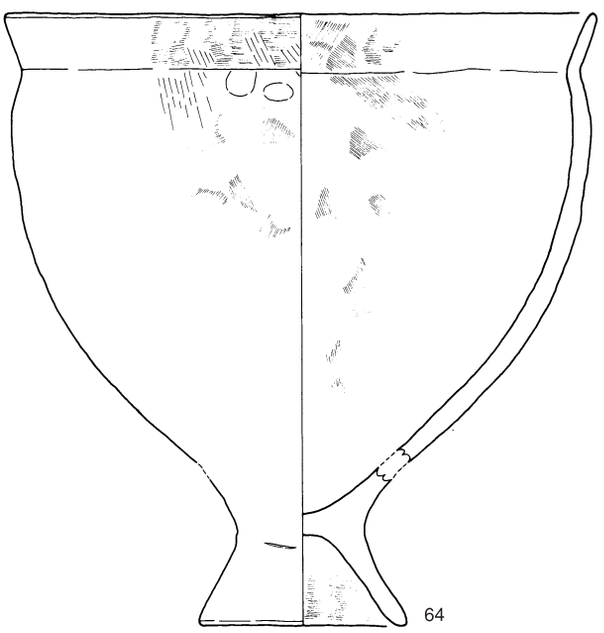


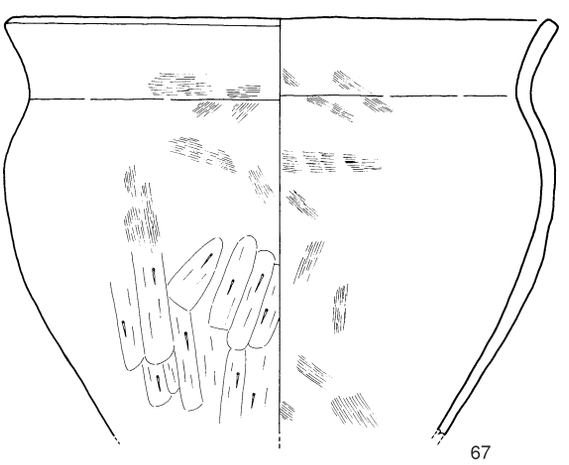
第19図　弥生時代の32号竪穴住居跡2（出土遺物①）

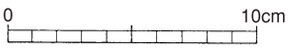




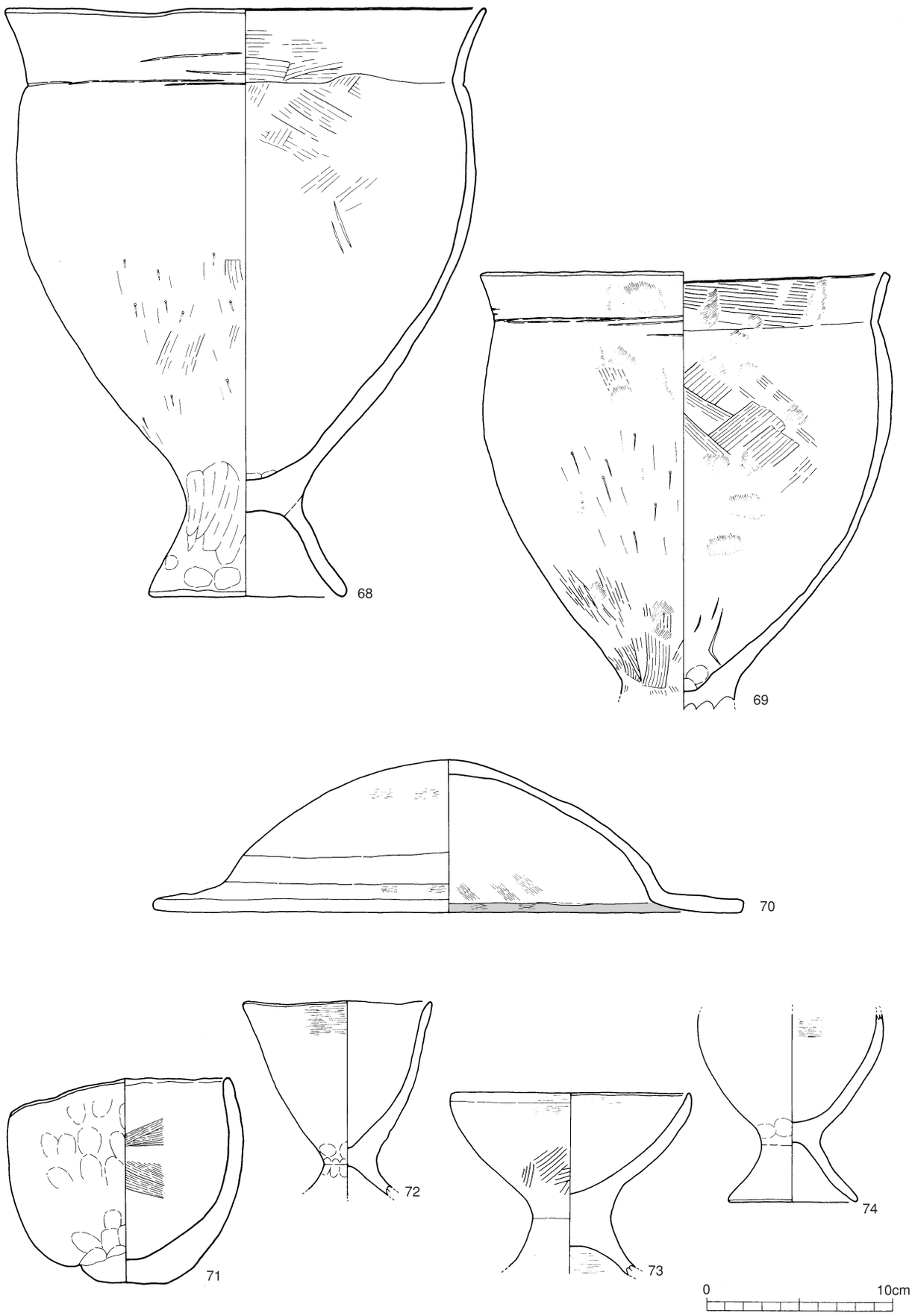




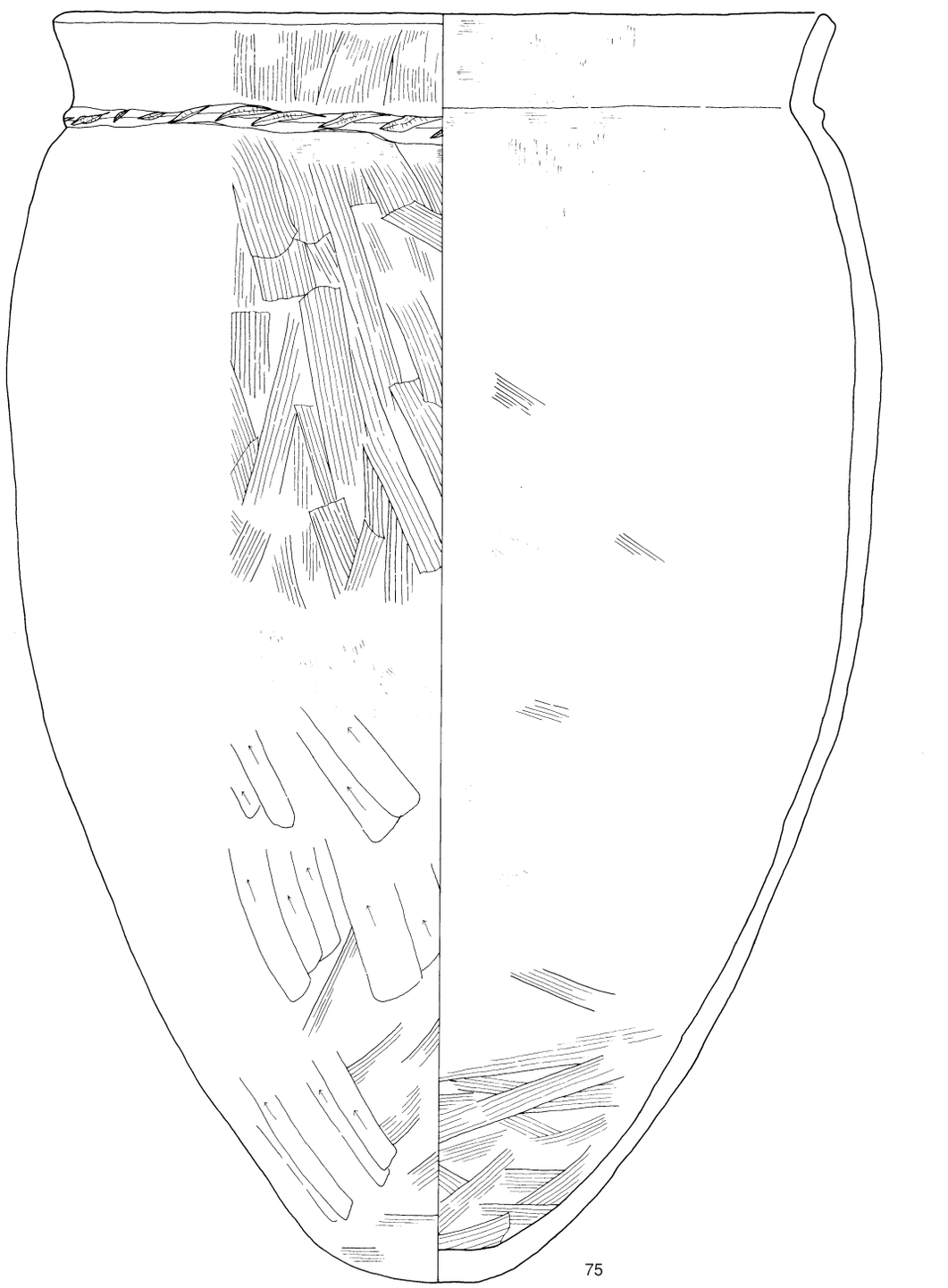




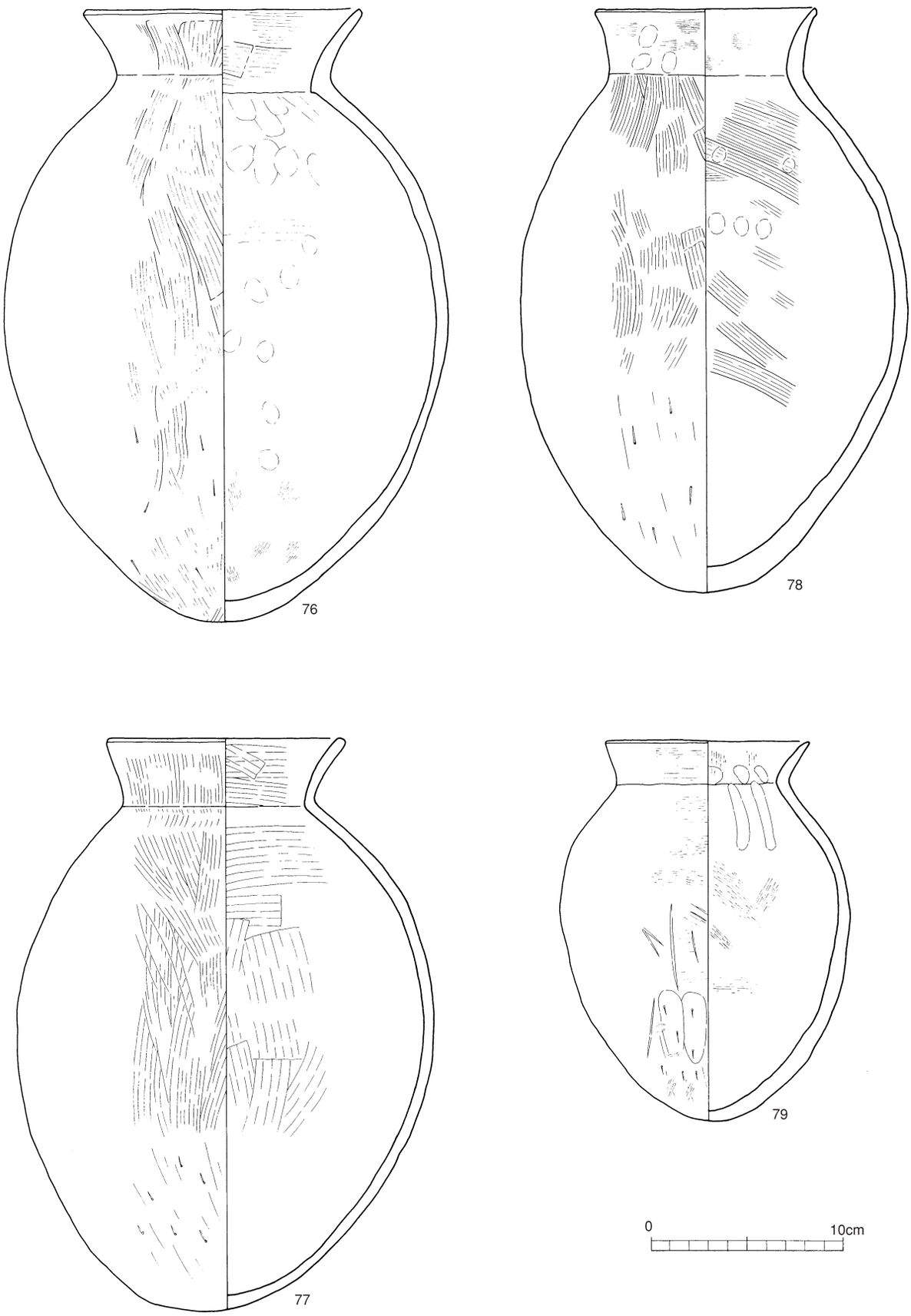
第20図　弥生時代の32号竪穴住居跡3（出土遺物②）



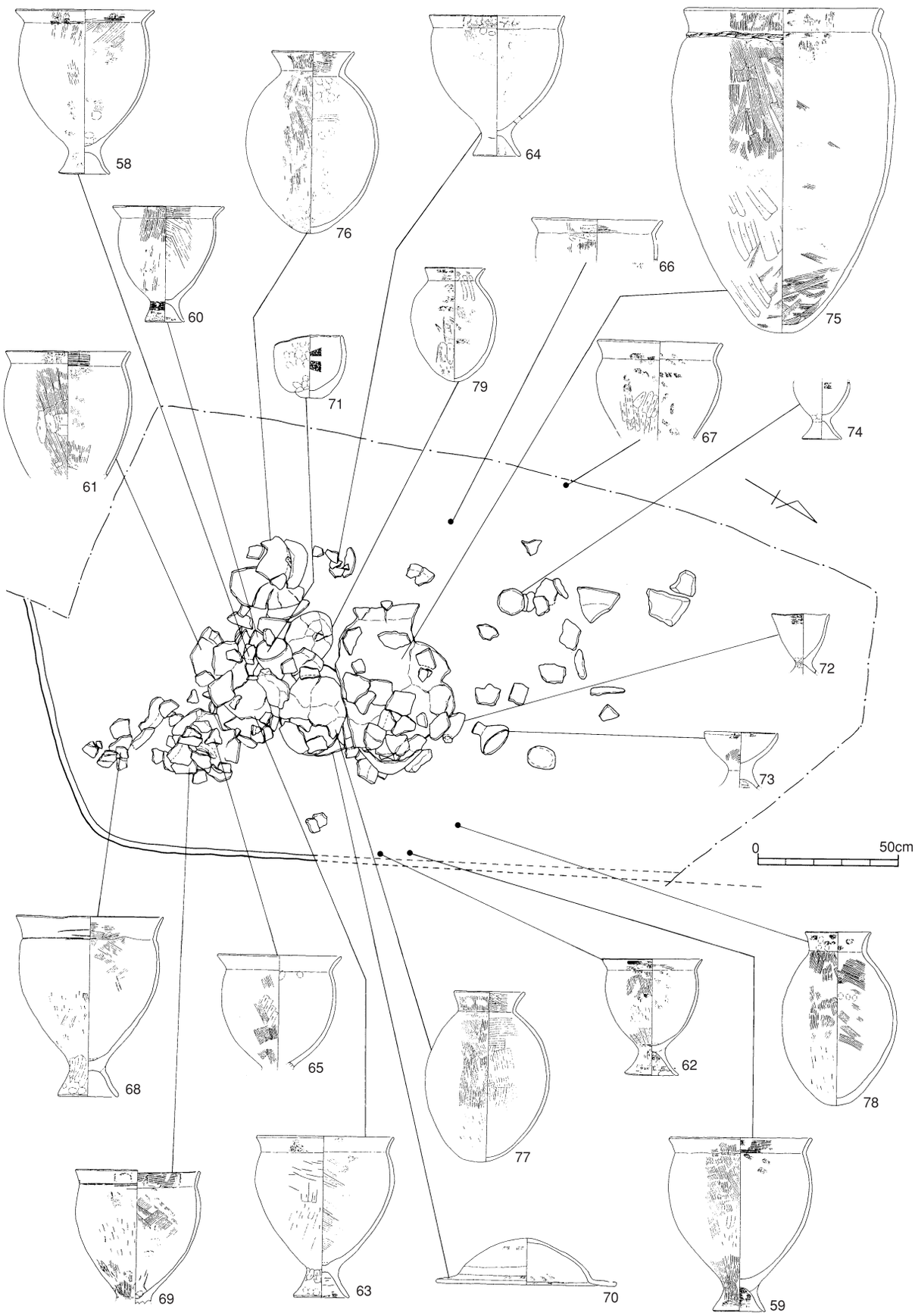
第21図　弥生時代の32号竪穴住居跡4（出土遺物③）



第22図　弥生時代の32号竪穴住居跡5（出土遺物④）



第23図　弥生時代の32号竪穴住居跡6（出土遺物⑤）



第24図　弥生時代の32号竪穴住居跡7（遺物出土状況）

的に伸びた長めの庇部に至る。内面に強い稜を持ち，庇部中央内面にリング状の煤が付着している。全体的に器壁が厚く，庇部先端は面取りを施し，断面方形を呈している。

71は，指圧痕が器面全体に残り，左右非対称な手捏ねの鉢である。底面が高台風に張り出し，底面を広く取った直口の鉢であり，やや傾いている。

72～74は，脚台付の小型の鉢である。72は，脚が大きく開き胴部が直線的に伸びるもので，口唇部は尖り歪んでいる。73は，八の字状に開く脚台から胴部が内湾しながら大きく開く浅めの鉢である。口唇部は尖っており，横ナデ調整を，底部は肥厚でハケメ調整を施す。74は，ラッパ状に開く脚部を持ち，胴部が丸く膨らみを持ちながら立ち上がっていくもので，口唇部は欠損しており形状は不明である。

35号竪穴住居跡（第25図）

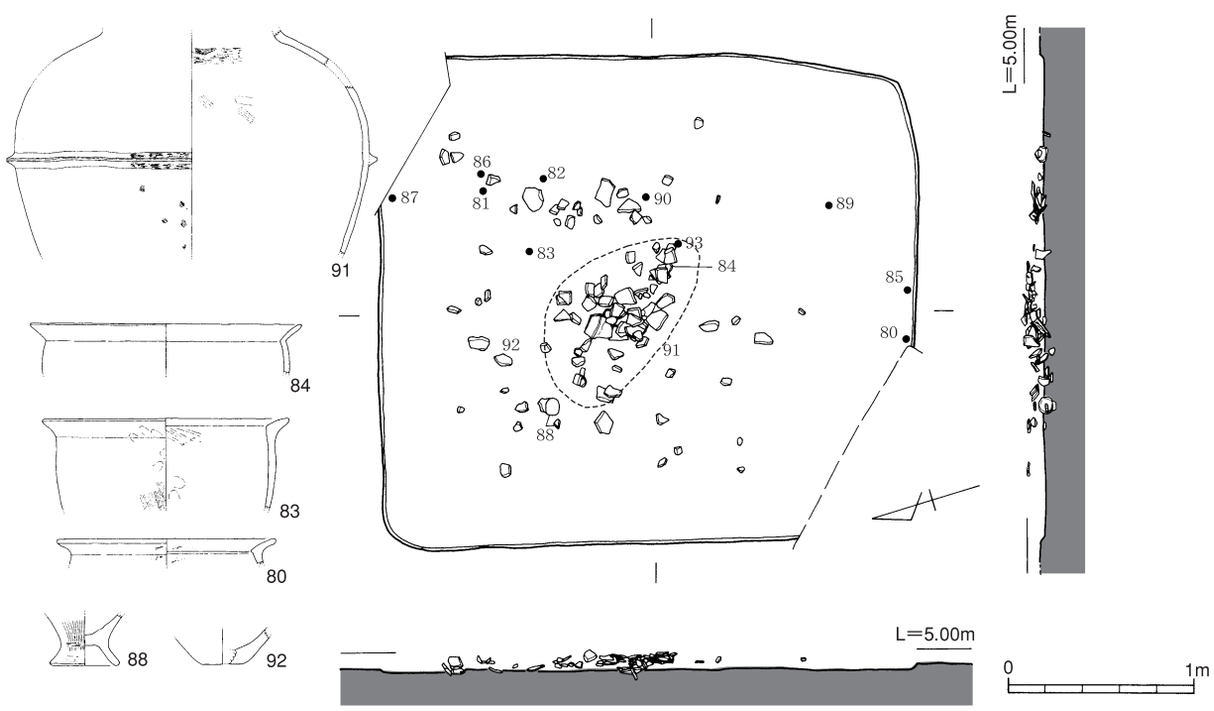
K7.5区で検出され，16号住居跡から8.9m南西に位置する。住居の北東側と南西側の隅が撹乱により削平されている。検出された部分は長径2.9m，短径2.6mのやや大きめの方形を呈し，主軸の方位は南北方向である。

埋土と包含層が同じ暗褐色土であり，住居跡全体の掘り込みが分かりにくかったが，土器集中出土部分直下にあるやや硬めの粘質土を床面と判断し，床面や土器の広がりから住居跡全体を把握した。検出面からの深さは４cmで，中央部に土器溜りが認められた。焼土や炭化物，ピットなどの掘込みは見られず，床面は平坦である。

出土遺物（第26.27図　80～94）

遺物は，床面直上より，甕，大甕，壺，鉢などが出土している。住居跡中央には大甕の破片を中心とした土器溜りができている。出土した25点中15点を図化した。

80～87は，くの字状に外反する甕の口縁部である。80は，屈曲が強く上面に平坦面を持つもの



第25図　弥生時代の35号竪穴住居跡1

で，口唇部は丸みのある方形である。内側に張り出しを持つ。81～83は，口縁部内側に明瞭な稜を持つものである。81は，丸みを持つ胴部が締まり外反するもので，口唇部は尖り気味である。胎土中に砂粒が多く含まれている。82の口縁部は，内側に張り出しを持ち外反する。83は，口縁部断面が三角形に近く，口唇部が尖り気味である。84は，器壁が薄く，頸部で締まり外反するもので，外面に丁寧なナデ調整を施す。85，86は，やや小型のもので口縁部が短く，上面は反っている。87は，屈曲が弱く直口気味に開き，内側に稜を持たないものである。薄作りであり，口唇部に面取りを施す。

88，89は，脚を持つ甕の底部である。短い脚が直線的に開くもので，88は，裾部に面取りを行い，外面に縦方向のハケメ調整を施す。脚台内天井に平坦面を持つ。89は，やや反り気味に開く脚を持ち，脚台内天井は中央が突出し回りに指圧痕が巡る。

90は，膨らみのある胴部が頸部で強く締まり，大きく外反する大甕の口縁部である。内面に稜を持ち，口唇部は丸く仕上げている。

91は，大甕の胴部である。多くの破片が出土しているが，口縁部，底部形状が不明である。張りのある胴部は最大径58.6㎝であり，頸部で大きくすぼまる。胴部下位は直線的であると思われる。最大径近くに断面台形に近い三角突帯を１条施し，その中央が凹んでいる。器壁が厚く，外面が黄橙色，内面が浅黄橙色であり，下位に幅２～３㎝の焼成ムラが帯状に多数残っている。

92は，平底の壺の底部である。器面が摩滅し，底面に黒斑が残る。

93，94は，くの字状に開く口縁部を持つ甕型の鉢である。93は，内外面とも丁寧なナデ調整を施し，口縁部上面が凹んでいる。94は，Ｓ字状に小さく外反する。

２　弥生時代の溝状遺構（第28図）

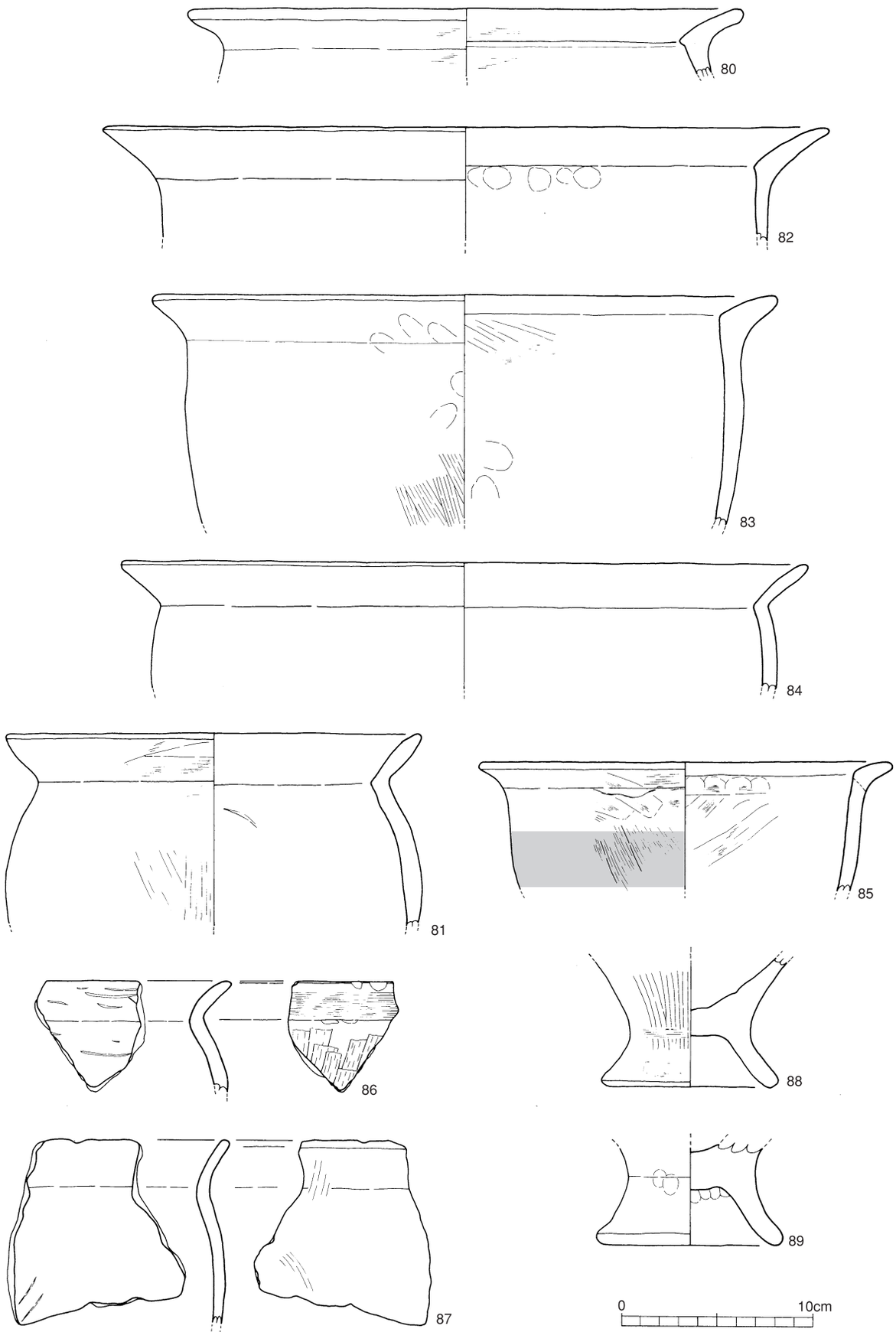
弥生時代の溝と考えられる遺構はＫ６区で１条検出され，19号竪穴住居跡から3.6m南東付近に位置する。方位は，略北東－南西であり，埋土はⅣ層暗褐色土である。検出された長さは5.3m，幅0.3m～0.5m，深さ約0.1mであり，断面形態は東側が逆台形，西側が浅い皿状を呈し，南西から北東方向へ向かって緩やかに傾斜している。西側部分は削平され，消失している。甕Ⅰ～Ⅱ類の口縁部，Ⅱ類の底部が出土していることから，前期末から中期初めの溝と考えられる。

出土遺物は，底面近くより甕の口縁部などが出土しているが，数量的には少ない。

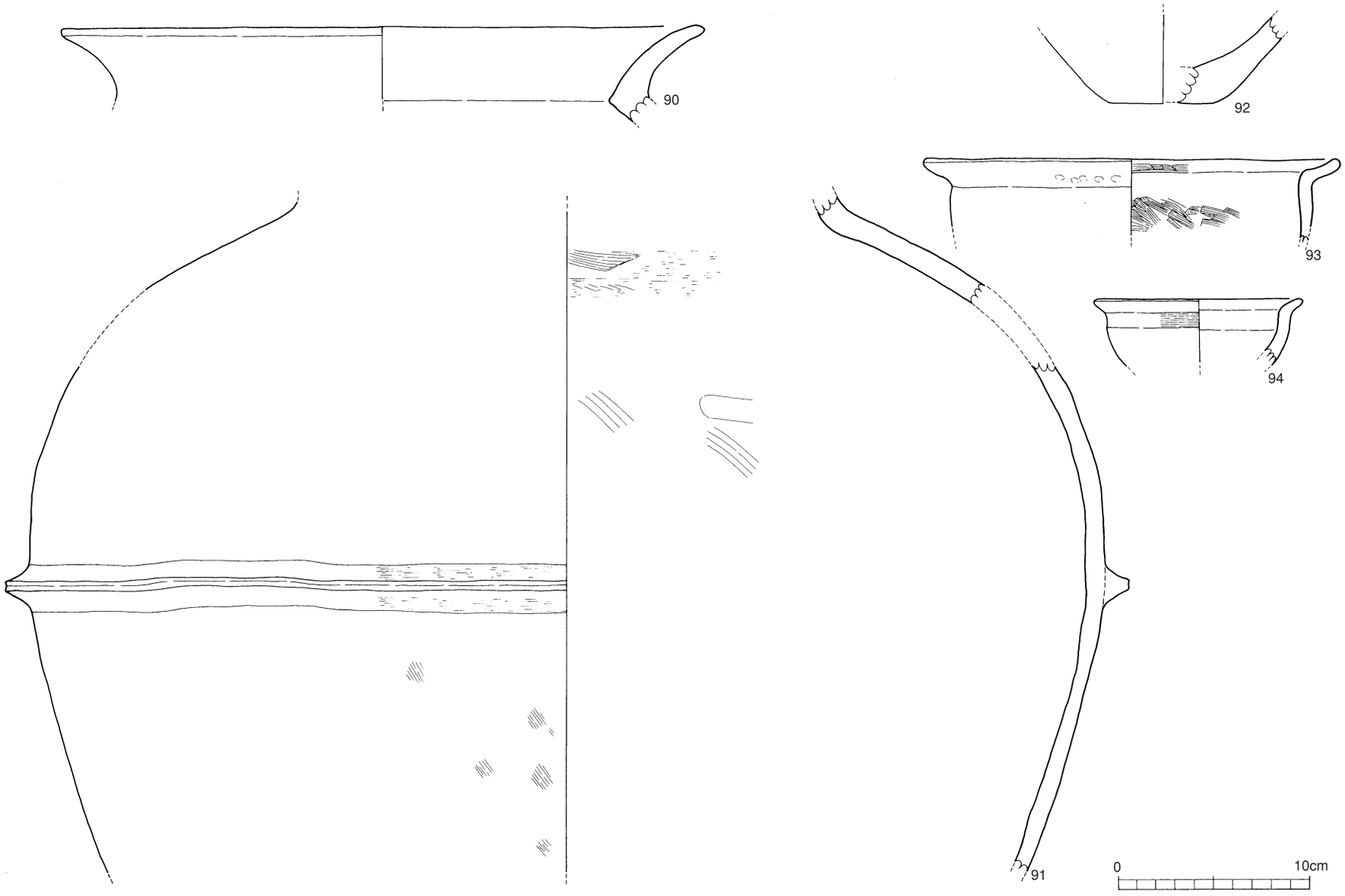
出土遺物（第28図　95～98）

95，96は，口縁部に断面三角形の貼付突帯が施された甕の口縁部である。95は，口縁部突帯の直下に三角突帯を施すもので，口縁部突帯よりやや小さめである。口唇部に浅い刻目を施し，上面は平坦でわずかに凹んでいる。胴部突帯に刻目があるかは摩耗により不明である。96は，口縁部に大きめの三角突帯を貼り付け，刻目を施したものである。胴部の上位に小さめの三角突帯を貼り付け，刻目を施す。97は，口縁部断面が台形に近い三角突帯を垂れ気味に貼り付ける。胴部はわずかに膨らみを持ち，横ナデ調整を施している。内面に指圧痕が残る。

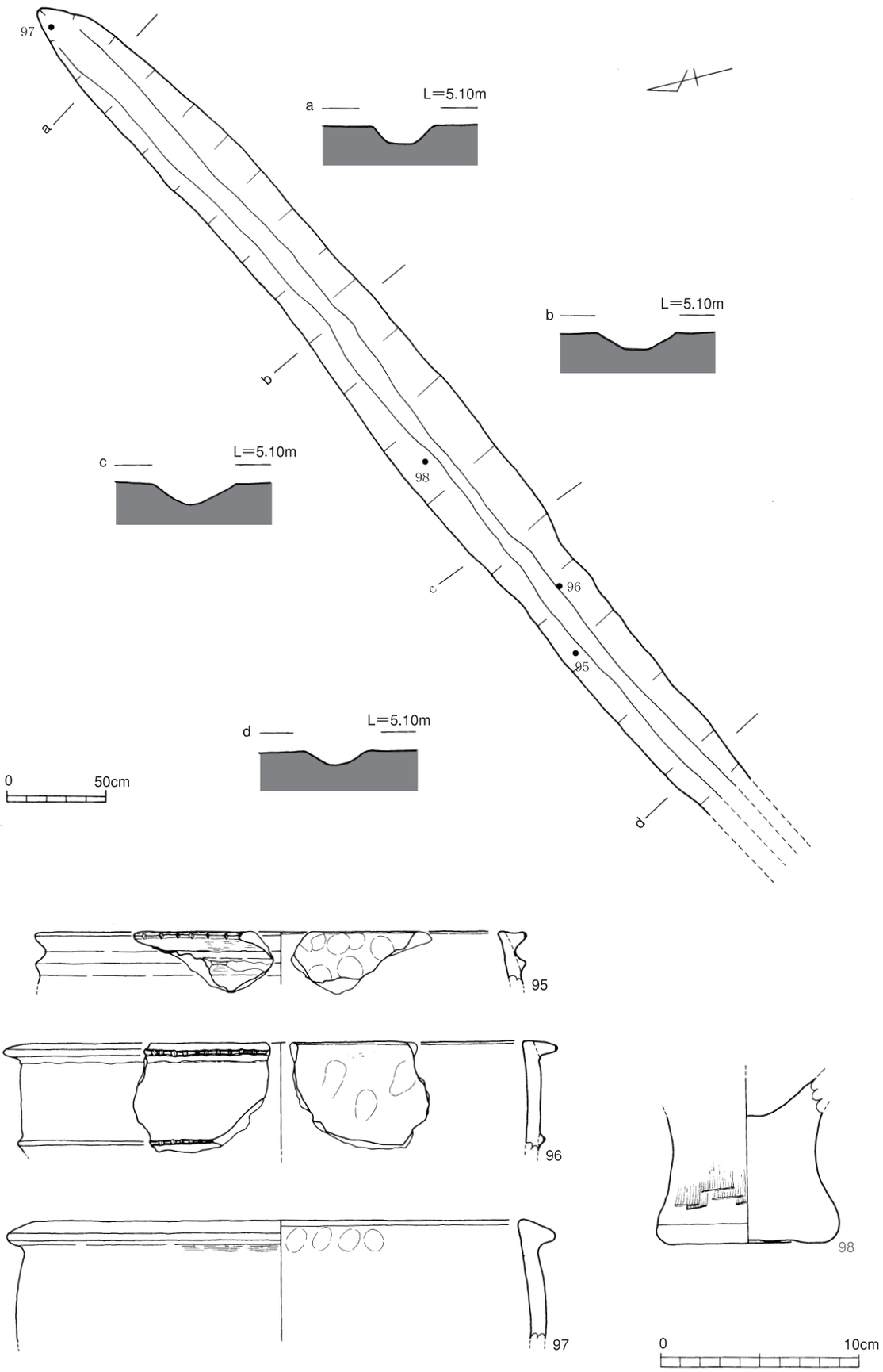
98は，充実した高台を持つ甕の底部である。底面の厚さが6.3㎝と厚く，端部を丸く作り底面に広い平坦面を持つことから，非常に安定している。一部剥落しているが，外面に縦方向のハケメ調整を施し，底面に指圧痕が多数残る。



第26図　弥生時代の35号竪穴住居跡2（出土遺物①）



第27図　弥生時代の35号竪穴住居跡3（出土遺物②）



第28図　弥生時代の溝状遺構と出土遺物

３　弥生時代の土坑（第29図）

弥生時代の土坑と考えられる遺構はＫ８区で検出され，16号竪穴住居跡から5.4m北西，15号竪穴住居跡から6.9m南西付近に位置する。大部分が削平され，南側部分がわずかに残るものであり，検出された部分は1.1m×0.4mの三角形に近い形状を呈している。検出面からの深さは７.５㎝であり，形状から住居の可能性も残るが，削平部分が大きく，北側部分が検出されなかったため住居と確定できず，ここでは土坑として取り扱った。

出土遺物（第29図　99，第64図　460）

埋土中より壺などの土器片と石庖丁が出土した。460の石庖丁については「第３節　出土石器」にて説明を行った。

99は，長頸壺の頸部である。直線状に伸びるもので，口縁部，底部形態は不明である。器面の摩滅が見られるが，薄作りで，内外面に縦方向のナデ調整を丁寧に施している。

ピット群（第29図）

Ｋ９～10区にピットが集中して検出された。大部分のピットは，Ⅲ層褐色土や土師器類を含むことから古代以降のものと思われるが，Ⅳ層暗褐色土で弥生土器を含むものや古墳時代の遺物を含むものなど，時期の異なるピットが混在したピット群であると思われる。

弥生時代のピットと思われるものは，Ｐ17，Ｐ44，Ｐ48，Ｐ50，Ｐ115，Ｐ127，Ｐ131，Ｐ132，Ｐ139，Ｐ148の計10個である。大きさは，直径15～68㎝，深さ22㎝～43㎝であり，最も多くの遺物が出土したＰ127は図に示した。(第29図)

出土遺物（第29図　100～106）

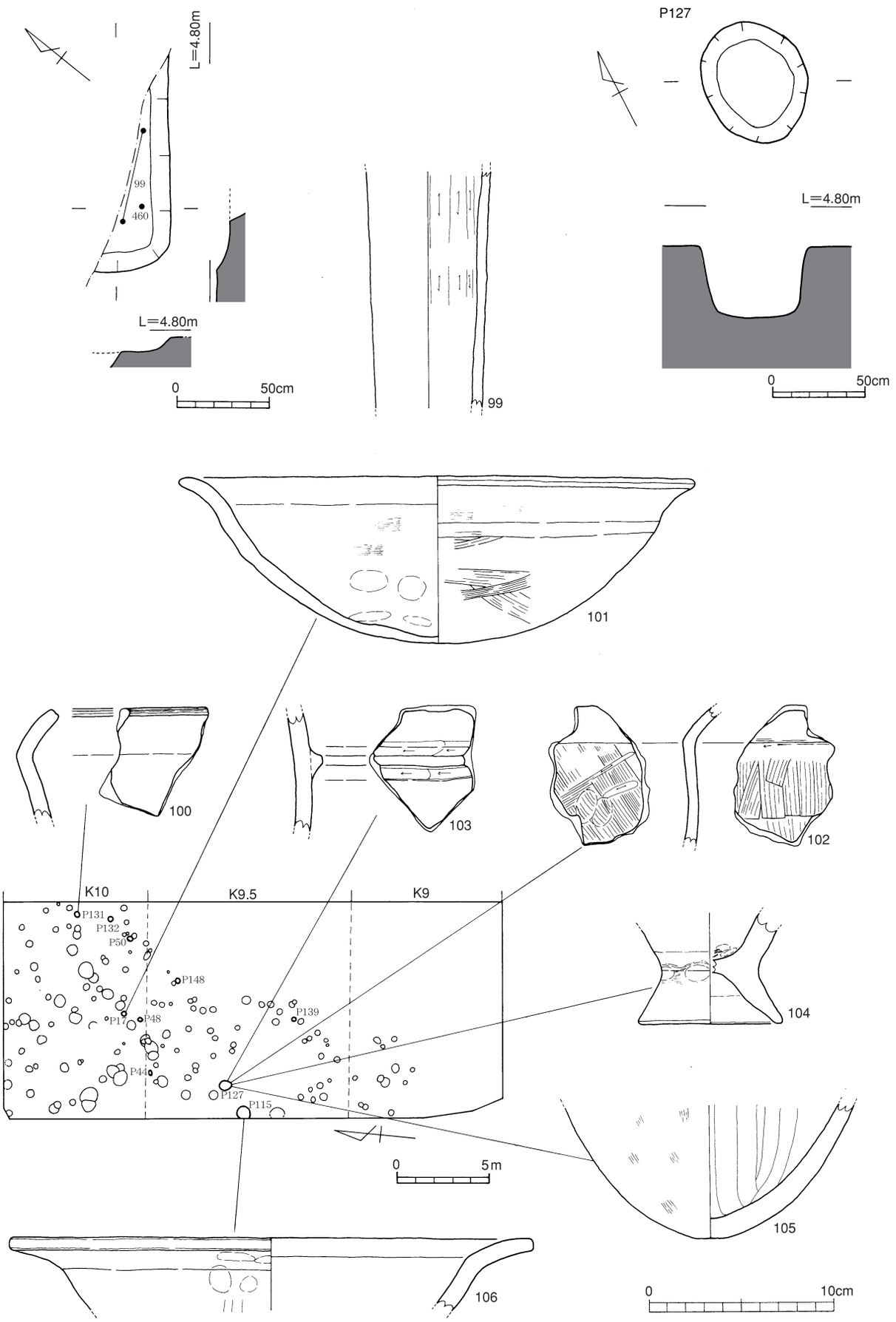
各ピットにより遺物の出土状態が異なるが，小破片のものも多く含まれていた。ピット内出土総数167点中７点を図化した。

100は，くの字状に外反する甕の口縁部であり，Ｐ131より出土した。口唇部は面取り後浅い凹みを施し，内外面とも丁寧な横ナデ調整を施す。

101は，丸底で内湾しながら大きく開き口縁部が緩やかに外反する浅めの鉢であり，Ｐ17で出土した。底部が薄く口縁部が厚い作りで，内外面にハケメ調整を施す。外面の口縁部近くに横ナデ調整による凹みが巡っている。煤の付着は見られないが，蓋型土器の可能性もある。

102～105は，Ｐ127から出土したものである。102は，あまり張りを持たない胴部から緩やかに外反する甕の頸部である。内面に稜が残り，外面に粗めの，内面に細目のハケメ調整を施す。103は，大甕の胴部突帯である。断面は台形に近く，上下に横ナデ痕が残る。104は，甕の底部であり，脚台内天井に平面を持つものである。脚は直線的に先細りしながら開き，裾部は尖り気味である。105は，丸底壺の底部である。尖り気味の底面中央はわずかな平担である。器壁が厚く，内面に縦方向の強いナデ調整を施す。

106は，高坏の口縁部であり，Ｐ115より出土した。口縁部は緩やかに外反するくの字口縁で，内側に弱い稜を持ち，上面はやや反り気味である。口唇部は，面取りがされている。



第29図　弥生時代の土抗，ピットと出土遺物

４　弥生土器集中区（第30図）

K6.5～７区で検出され，28号住居跡から5.4m北西，30号住居跡の北に近接して位置する。Ⅳ層下面より弥生土器が集中して出土したが，埋土と包含層が同じ暗褐色土で分かりにくく床面の硬化面や焼土，炭化物の広がりも検出されなかったことから，住居跡として判断することが困難であった。そこで，遺物の広がりや出土状況から遺構の大きさや深さを推定し，遺構として取り扱うこととした。

推定される遺構は，長径3.4m，短径2.9mの楕円形または隅丸方形を呈していると予想され，主軸の向きなどは不明である。深さは約48cmで底面形状は不明であるが，竪穴住居跡か大きめの土坑の可能性が高い。

出土遺物（第31～33図　107～131）

埋土中より甕，大甕，壺など多くの遺物が出土したが，大部分は甕であり，遺構の東側に集中していた。弥生時代中期～後期の遺物が中心であるが流れ込みと思われるものもある。

107は，口縁部に三角突帯を貼り付けた甕の口縁部で，口唇部に大きめの刻目が施されている。上面は平坦で，指ナデ調整が施され指圧痕が規則的に並んでいる。胴部は直線的で三角突帯が巡るが，刻目は見られない。

108は，厚く小さめの甕の口縁で，内側に尖り気味の張り出しを持つ。口唇部は丸く仕上げられ，上面の平坦面はわずかに凹んでいる。

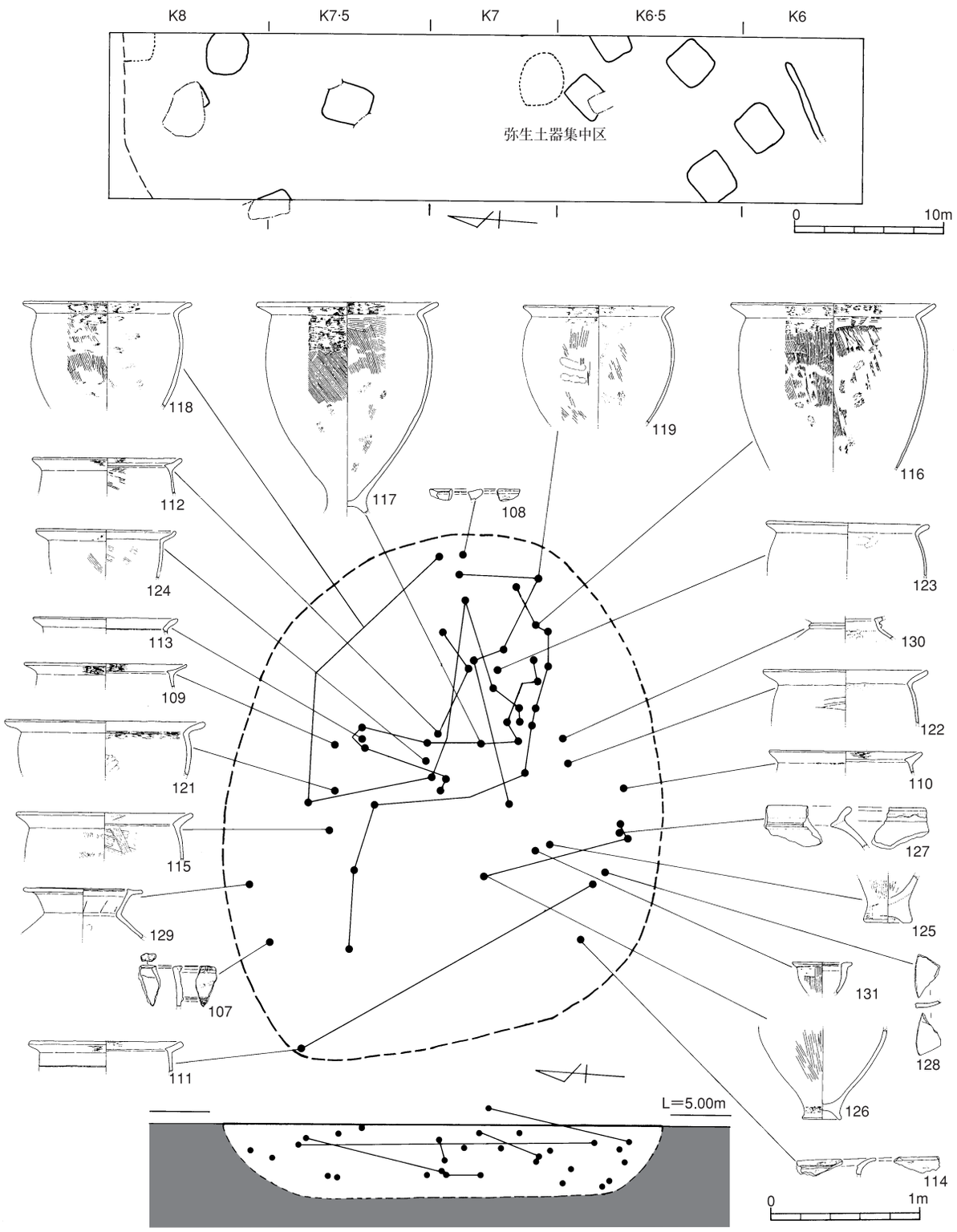
109～112は，口縁部の内側の張り出しが強く，逆Ｌ字状に強く外反する甕の口縁である。109は，器壁が薄く長めの口縁が強く外反するもので，内側の張り出しは尖っている。上面が浅く凹み，口唇部を丸く仕上げている。110は，内側の張り出し下が凹み，直線的に外反している。口縁部付け根から，口唇部へ向かって先細りする。111は，口縁部断面は方形を呈し，上面が凹んでいる。胴部は薄作りで，上位に横ナデ調整痕が沈線状に残る。胎土中に角閃石が多く含まれている。112は，口縁部内側が強く張り出すもので尖っている。直線的に外反する口縁部の上面に段を持つ。断面形態は方形で，胴部の器壁は口縁部に比べ非常に薄く作っている。

113～115は，口縁部内側がわずかに張り出し，くの字状に外反する甕の口縁である。113は，上面がやや反り気味の平面で，内面の張り出し下のナデ消しが不十分である。114は，頸部で締まらず緩やかに外反するもので，内外面は丁寧な横ナデ調整である。115は，頸部で締まり強く外反するもので，内側に粘土貼り付けによる張り出しを作り肥厚させている。やや張りのある胴部は薄作りで，内外面ともハケメ調整が施されている。

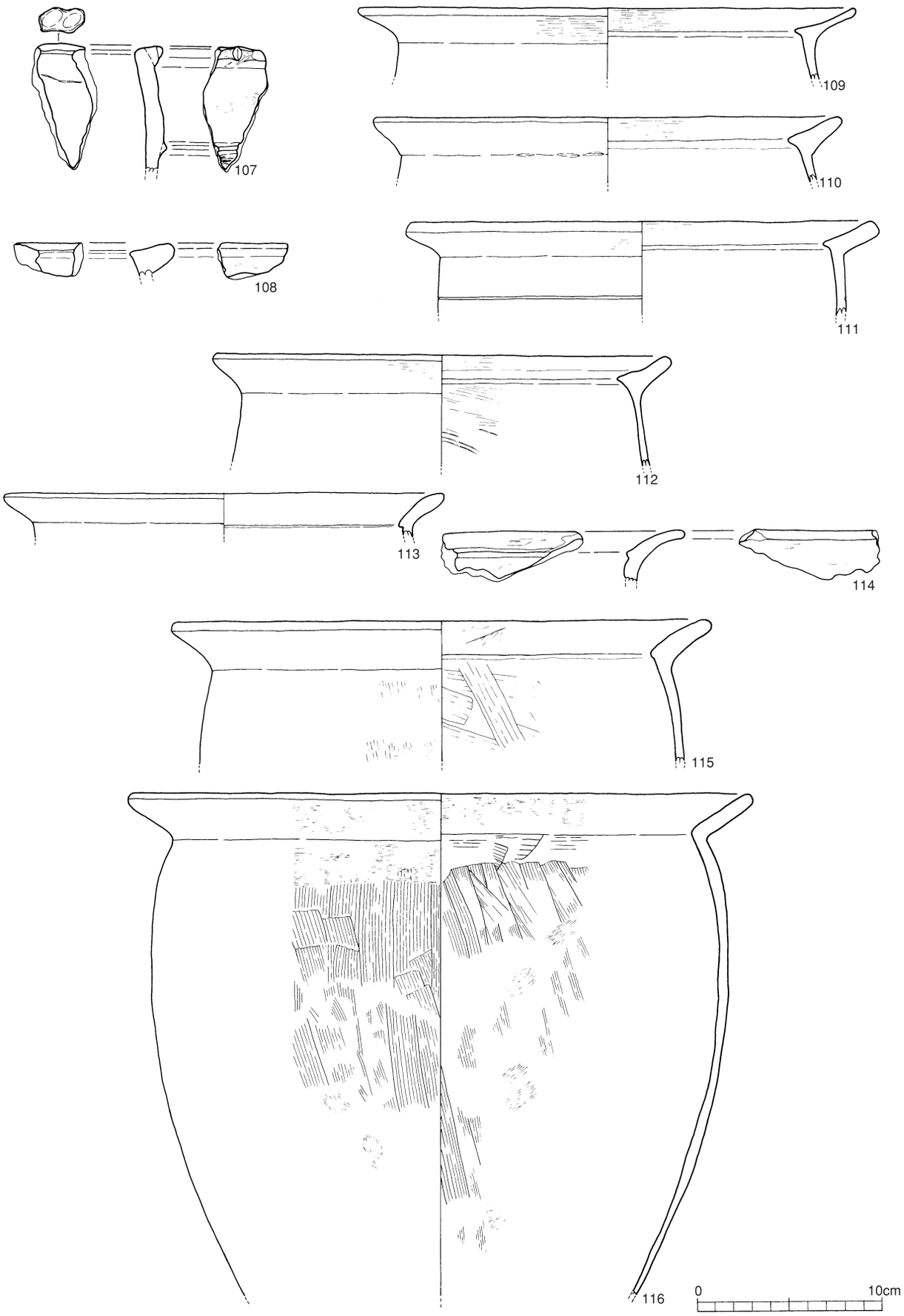
116，117は，胴部上位に小さな張りを持ち，締まった頸部から口縁部が強く外反する甕である。内側に張り出しは持たないが，強い稜を持つ。116は，胴部上位に張りを持ち，丸みを持ちながらすぼまるもので，底部は欠損している。頸部の締まりはあまり強くないが，強く外反し内側に明瞭な稜を作っている。口唇部は方形に近い丸に仕上げている。117は，頸部で強く締まり，外反する口縁部を持つもので，内側の稜は尖り気味である。胴部下位は直線的にすぼまり，八の字状に開く脚台へ至る。全体にハケメ調整を施し，脚台裾部が欠損しているが，ほぼ完形である。

118，119，121～123は，丸みを持った胴部が強く締まり，口縁部が大きく外反する甕である。内側は張り出し気味であるが，稜は見られない。上面はやや反っている。118は，くの字状に外反

するもので，口唇部を肥厚させ丸く仕上げている。胎土中に２～５㎜の長石が多く含まれる。119は，器壁が薄く，胴部下位に熱を受けた跡が赤褐色に残る。口縁部は小さめで，口唇を面取りしている。胎土中に金雲母を多く含んでいる。121は，全面に丁寧な横ナデ調整を施し，口縁部は端部を肥厚させ丸く仕上げている。122は胴部の張りが弱く，屈曲の強い長めの口縁部は直線的に大きく伸びている。123は，胴部が膨らみを持ち，頸部で強く締まるもので，胴部中央に煤が付着して



第30図　弥生土器集中区1（遺物出土状況）



第31図　弥生土器集中区2（出土遺物①）

いる。

120は，小型の甕で口唇部が波打つなど粗い作りである。

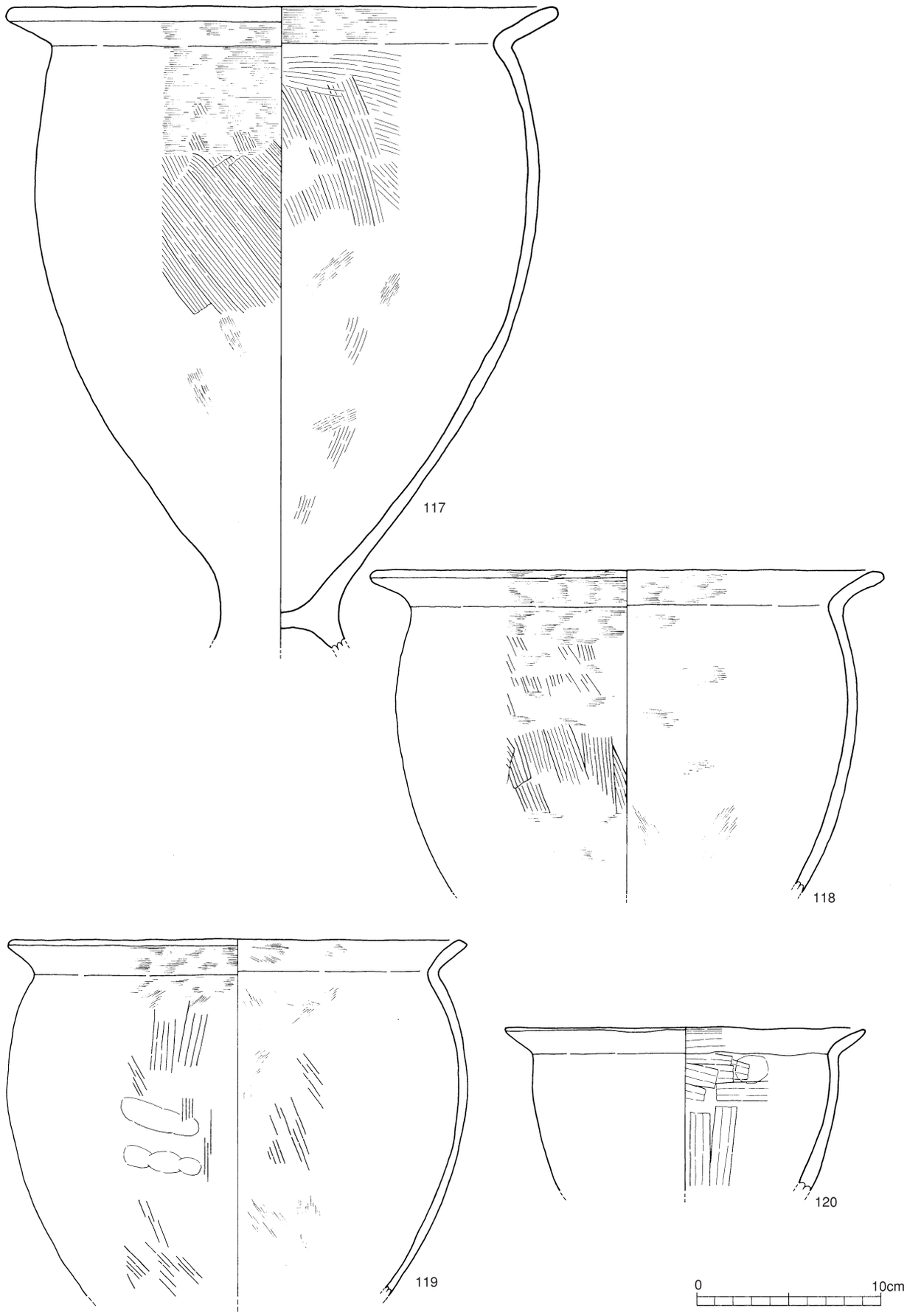
124は，張りを持たない薄い胴部から，頸部で締まらずくの字状に外反する甕である。口縁部は端部で内湾し，上面に明瞭な凹みを持つ。口唇部は上向きで，丸く仕上げている。

125，126は，短い脚を持つ甕の底部である。125は，充実高台気味に厚い底部である。胴部は直線的に立ち上がり，底部もあまり広がらない。接地面に約1.5㎝の平坦面を持つ。外面は縦方向の細かいミガキ調整を施し，丸みのある底部中央の凹みにはミガキ調整を施す。126は，短い脚が外反するもので，胴部は直線的に大きく開く。低い上げ底の底部は，天井に平面を持ち裾部は斜めの面取りが施される。二次焼成を受けたと思われ，器面全体が摩滅している。

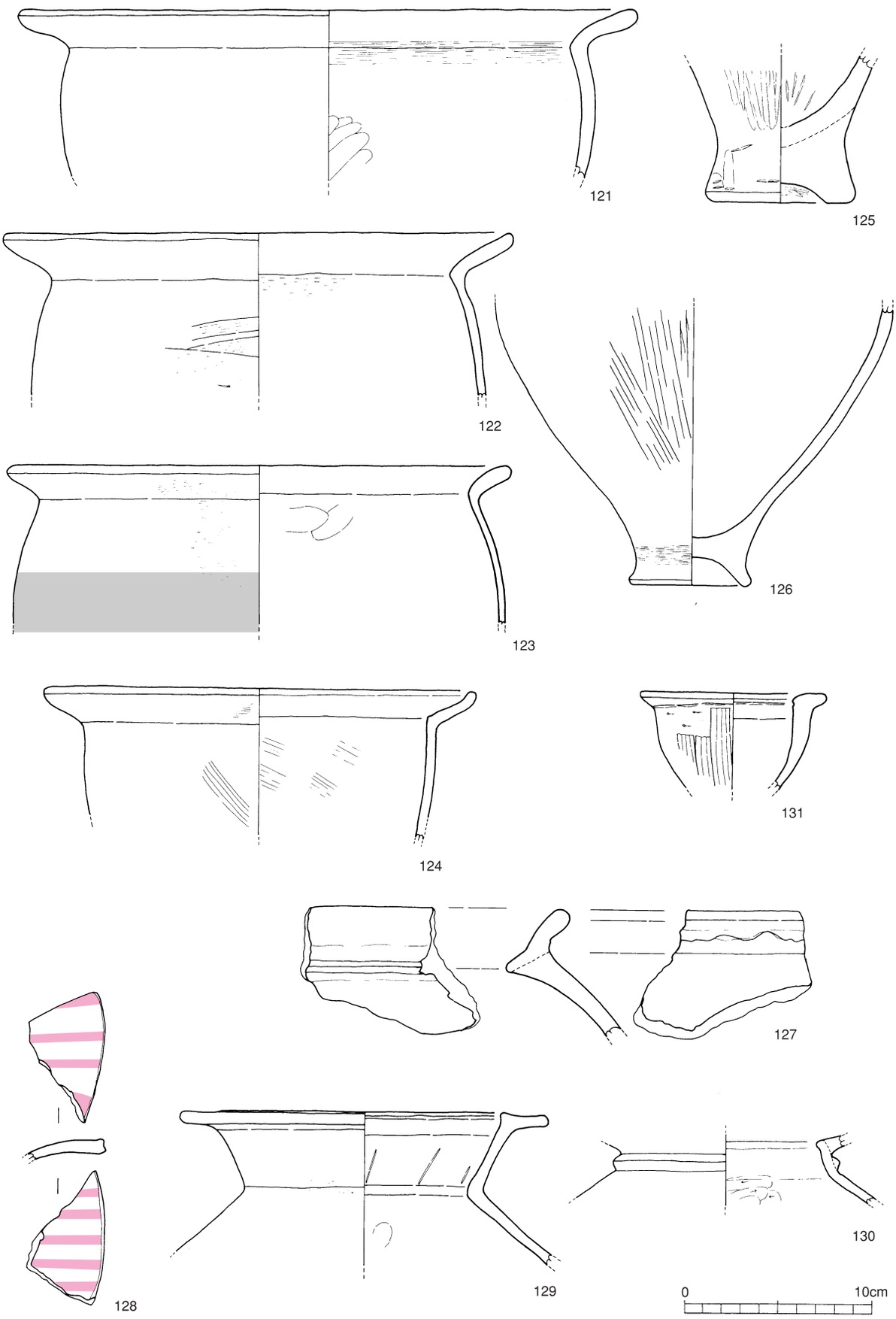
127は，大甕の口縁部である。丸みのある胴部が強く締まり，逆Ｌ字状に外反するものであり，内側が大きく張り出し，上面が凹んでいる。反った口縁部の口唇は肥厚で，粘土接合のナデ消しが不十分である。

128～130は，壺の一部である。128は，ほぼ水平に大きく開く壺の口縁部であり，縦方向に朱塗りの線が施されたものである。線の太さは４～５㎜であり，上面が約1.2㎝，下面が約８㎜間隔で放射状に施されている。わずかに口縁部上面に反りを持ち，口唇部が面取りされた後，浅い凹みを施し，朱が塗られている。129は，張りのある胴部が頸部で強く締まり，斜め上方へ向かって直線的に屈曲した後，ほぼ水平に外反する鋤先口縁である。内面に強い張り出しを持ち，上面の平坦面はわずかに凹み，口唇部を丸く仕上げている。全体に丁寧なナデ調整が施され，頸部内面に縦方向の工具ナデ痕が残る。130は，強く締まる壺の頸部であり，小さめの三角突帯を施している。口縁部はくの字状で内側に張り出しを持ち大きく反るが，欠損のため形態は不明である。胴部は大きく広がり膨らみを持つと思われる。

131は，丸みを持った胴部からほぼ水平に外反する小さめの口縁部を持つ小型の鉢である。口縁部内側に稜を持ち，口唇部が尖っている。外面に縦方向のハケメ調整，内面に横ナデ調整を施す。



第32図　弥生土器集中区3（出土遺物②）



第33図　弥生土器集中区4（出土遺物③）

第７表　大島遺跡　弥生土器観察表１（遺構内出土①）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			備考	出土区	層	注記番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
11図	1	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ	ナデ	石英,角閃石 長石,赤色小石	橙	赤橙	やや良好	－	－	－	器面摩滅	8	H2	6030
	2	甕	頸部	Ⅸ	横ナデ	ナデ	石英，長石	橙	黄橙	良好	－	－	－		8	H2	6034
	3	甕	底部	Ⅳ	ハケ目→ナデ 横ナデ　指圧痕	ナデ 指圧痕	石英 砂粒少混	橙	淡橙	良好	－	8.4	－		8	Ⅳ	5567
	4	大甕	口縁	Ⅴ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石	橙	明褐	良好	41.8	－	－	三角突帯(1条)	8	Ⅲ	4887
	5	壺	口縁部	Ⅹa	ハケ目　横ナデ 板ナデ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	石英，角閃石， 黒雲母	浅黄橙 黒褐	浅黄橙	良好	11.4	3.8	25.4		8	Ⅲ	5379 5380
	6	鉢	口縁～底	Ⅲ	ハケ目→ナデ 横ナデ　指圧痕	ハケ目→ナデ 板ナデ　指圧痕	石英，長石， 輝石，黒雲母	浅黄橙	浅黄橙 黄灰	良好	14	7	10.4		8	Ⅲ	5235
	7	鉢	脚部	Ⅰ	横ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石， 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	－	7.5	－		8	Ⅲ	4973
	8	小型土器	胴～底	Ⅲ	板ナデ→ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ 指圧痕	精製された胎土	黄橙	灰黄	良好	7.2	4.2	8.6		8	Ⅳ	5570 5571
12図	9	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石,小石(2㎜)	浅黄橙	淡黄	良好	24	－	－	摩滅(内)	8	Ⅲ	5274
	10	甕	口縁部	Ⅹ	横ナデ	板ナデ ナデ	石英，長石， 砂粒少混	浅黄橙	浅黄橙	やや良好	10.9	－	－		8	Ⅲ	5424
	11	壺	口縁部	Ⅹa	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	ハケ目　横ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石， 黒雲母	浅黄橙 橙　黒褐	黄橙	良好	12.4	－	－		8	Ⅲ	4735 4915
	12	鉢	口縁～胴	Ⅲ	ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英,角閃石 長石,金雲母	浅黄橙 黒灰	黄橙	良好	13.8	－	－	煤付着	8	Ⅲ	4348
	13	高坏	坏部	Ⅱ	横ナデ 板ナデ→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	精製された胎土	黄橙	黄褐	良好	－	－	－		8	Ⅲ	3882
	14	小型土器	口縁～底	Ⅳ	ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，赤色小石	灰白 浅黄橙	浅黄橙	良好	7.4	0.6	4.2		8	Ⅳ	4734 4735
13図	15	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ 板ナデ→ナデ	横ナデ ハケ目	石英，長石， 角閃石	黄褐	浅黄橙 黄橙	良好	23.4	－	－		6	H19	1661
	16	甕	底部	Ⅴ	ハケ目→ナデ 横ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，長石，角 閃石，砂粒多混	黄橙	赤橙	良好	－	9.8	－		6	Ⅱb	442
	17	甕	底部	Ⅶb	横ナデ ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	灰白	灰黄	良好	－	8.6	－	脚	6	H19	1650
	18	大甕	口縁	Ⅳ	ハケ目→ナデ 横ナデ	横ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙	黄橙	良好	－	－	－		6	Ⅲ	1280
	19	壺	口縁部	Ⅸ	ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石， 角閃石	浅黄橙	橙	良好	－	－	－		6	Ⅲ	652
	20	鉢	口縁部	Ⅲ	板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，黒雲母 長石,小石(3㎜)	暗褐 橙	褐	やや良好	17.2	－	－		6	H19	7653
	21	高坏	坏部	Ⅱ	横ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，金雲母 長石，赤色小石	浅黄橙	浅黄橙	良好	33.3	－	－		6	H19	1654
	22	器台	胴部	―	ハケ目→ナデ →ミガキ	ハケ目→ナデ	精製された胎土 小石(5㎜)	赤橙 黄橙	黄橙	良好	－	－	－	円形透孔(2孔)	6	Ⅲ	663
14図	23	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ	板ナデ→ナデ 横ナデ	石英，長石， 角閃石	黄灰	浅黄橙	良好	24.8	－	－		6.5	H26	2759
	24	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石， 黒雲母	暗褐	暗褐	良好	21.2	－	－		6.5	H26	2760
	25	甕	口縁～胴	Ⅹ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ 横ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙 黒褐	灰白 褐灰	良好	21.6	－	－	煤付着 口唇→凹	6.5	Ⅳ	4141
	26	鉢	口縁部	Ⅲ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ　ナデ	石英，長石， 輝石	褐	浅黄橙	良好	18.8	－	－		6.5	H26	2743
	27	甕	口縁～胴	Ⅹ	ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目 横ナデ	石英,長石,輝石 砂粒多混	灰黄褐 橙	浅黄橙 灰黄	良好	18.9	－	－	摩滅(外)	6.5	Ⅳ	4064
	28	甕	底部	Ⅰ	ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石	明赤褐	黒褐	良好	－	7.6	－		6.5	Ⅲ	2613
	29	甕	底部	Ⅴ	ハケ目→ナデ ナデ　指圧痕	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，金雲母	黄橙	黒褐	良好	－	9.4	－	脚	6.5	H26	2771
	30	壺	口縁部	Ⅵ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石， 金雲母	灰黄褐	黄褐	良好	8.9	－	－	凹線文(2条)	6.5	H26	2807
	31	壺	底部	Ⅲ	板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石， 角閃石	橙	黒褐	良好	－	5.2	－		6.5	H26	3882
	32	高坏	脚部	Ⅲ	ハケ目 ナデ	板ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石， 金雲母	暗黄灰	褐灰	良好	－	－	－		6.5	H26	2754
	33	高坏	脚部	Ⅱ	ハケ目→ナデ ナデ	ハケ目→ナデ	長石，角閃 石，輝石	灰黄 黄橙	黄橙	良好	－	－	－		6.5	H26	3077 1056

第８表　大島遺跡　弥生土器観察表２（遺構内出土②）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			備考	出土区・層		注記番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
14図	34	高坏	脚部	Ⅲ	ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	橙 赤灰	橙 黄橙	良好	－	17.2	－	円形透孔（1孔）	6.5	Ⅲ	2124
	35	高坏	脚部	Ⅱ	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ナデ	精製された胎土	黄橙	黒褐	良好	－	14.2	－	円形透孔（1孔）	6.5	Ⅳ	3389
	36	小型土器	底部	Ⅳ	手捏ね	板ナデ→ナデ	石英，長石， 角閃石	黄橙 浅黄橙	黄橙 灰褐	良好	－	1.1	－		6.5	H26	2761
15図	37	甕	口縁部	Ⅷ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 黒雲母	黄褐	黄橙	良好	27.6	－	－		6.5	Ⅲ	2446
	38	甕	口～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	黒褐 黄橙	黄橙	良好	32.4	－	－	煤付着	6.5	H27	30 31
	39	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	灰黄褐	明黄橙	良好	12.4	－	－	煤付着	6.5	H27	24
	40	甕	底部	Ⅴ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	黄橙	灰黄	良好	－	12.2	－		6.5	H27	38
	41	壺	底部	Ⅲ	ハケ目→ナデ ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，長石 黒雲母，金雲母	黄褐	褐灰	良好	－	7.8	－		6.5	H27	19
	42	壺	胴～底	Ⅲ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，砂粒多混	浅黄橙	黄橙	良好	－	6.8	－		6.5	Ⅱb	647
	43	高坏	坏部	Ⅲ	板ナデ→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石 小石多混	浅黄橙	黄橙	良好	－	－	－		6.5	Ⅲ	1609
	44	小型土器	底部	Ⅲ	板ナデ ナデ	ナデ	石英、長石、 赤色小石	灰白 褐灰	浅黄橙	やや良好	－	3.8	－		6.5	H27	11
16図	45	甕	口縁部	Ⅹ	ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	ハケ目	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	22	－	－		6.5	Ⅲ	2324
	46	甕	口縁部	Ⅹ	ハケ目　ナデ 指圧痕	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 黒褐	浅黄橙 黄褐	良好	24.6	－	－	煤付着	6.5	Ⅳ	4087
	47	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	石英，長石 黒雲母	浅黄橙	灰白	やや良好	－	－	－		6.5	H28	21
	48	甕	胴部	Ⅲ	横ナデ ナデ	横ナデ	石英，角閃石	黒	橙	良好	－	－	－	刻目突帯	6.5	H28	14
	49	高坏	脚部	Ⅱ	ハケ目→ナデ	ハケ目	石英，角閃石 長石，黒雲母	黄橙	黄橙	良好	－	－	－		6.5	Ⅲ	1851
17図	50	甕	口縁部	Ⅵ	ナデ	横ナデ	石英，黒雲母 長石,小石(3㎜)	黄橙	明黄橙	良好	30.0	－	－		6.5	Ⅳ	3933
	51	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目 横ナデ	石英，長石 角閃石	黒褐	黄褐	良好	21.7	－	－	煤付着	6.5	H30	3134
	52	甕	口～胴	Ⅹ	横ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ 横ナデ	石英，角閃石 赤色小石	黄橙	黄橙	良好	22.6	－	－		6.5	H30	3148
	53	甕	底部	Ⅳ	横ナデ ナデ	横ナデ	石英，黒雲母 長石,小石(4㎜)	浅黄橙	黄橙 灰黄	良好	－	7.6	－	脚	6.5	H30	3133
	54	甕	底部	Ⅵa	板ナデ→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英，長石 赤色小石	浅黄橙	灰白	良好	－	13.4	－	脚	6.5	H30	3130
	55	壺	口縁部	Ⅵ	ハケ目 横ナデ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，黒雲母 長石,小石(3㎜)	灰黄褐	黄橙	良好	14.0	－	－	凹線文(2条) 三角突帯	6.5	Ⅳ	4277
	56	壺	口縁～頸	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙	黄橙	良好	19.2	－	－		6.5	Ⅳ	4700
	57	壺	肩部	Ⅻ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目	石英，長石 角閃石	黄橙	黒褐	良好	－	－	－	多条沈線 (9～10条)	6.5	H30	3915
19図	58	甕	口～底	Ⅹ	横ナデ　ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ　指圧痕	石英，角閃石	浅黄橙 黒褐	明黄褐	良好	24.2	9.0	28.6	煤付着	7.5	H32	27,28 29,30
	59	甕	口縁～底	Ⅹ	ハケ目→ナデ 板ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石	浅黄橙 黄褐	浅黄橙	良好	25.0	9.2	30.3		8	Ⅳ	5999
	60	甕	口～底	Ⅹ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目 ナデ	石英，長石	黄橙 黒褐	黄橙	良好	19.6	7.1	20.1		7.5	H32	3,4 27
	61	甕	口～胴	Ⅹ	ハケ目→ナデ 板ナデ　ハケ目	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 小石(6㎜)	黄橙 灰褐	褐	良好	22.0	－			7.5	H32	3
	62	甕	口縁～底	Ⅹ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ→ナデ	石英，長石， 角閃石	浅黄橙 褐灰	浅黄橙	良好	17.8	9.5	20.2		8	Ⅳ	5999
20図	63	甕	口～底	Ⅹ	横ナデ　指圧痕 板ナデ→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石	浅黄橙 黒褐	浅黄橙	良好	24.1	9.5	27.9		7.5	H32	4
	64	甕	口～底	Ⅹ	ハケ目→ナデ 横ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 黒雲母	明赤褐 橙	赤橙 赤褐	良好	23.6	8.3	24.2	器面摩滅(外)	7.5	H32	11
	65	甕	口～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石 黒雲母	明赤褐	赤褐 橙	良好	21.8	－	－		7.5 8	H32 Ⅳ	2,4 5999
	66	甕	口縁部	Ⅹ	ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	23.1	－	－	摩滅(外)	7.5	H32	10

第９表　大島遺跡　弥生土器観察表３（遺構内出土③）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			備考	出土区・層		注記番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
20図	67	甕	口～胴	X	横ナデ 板ナデ　ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 褐灰	灰黄	良好	22.2	－	－		7.5	H32	3922
21図	68	甕	口～底	X	板ナデ　ナデ ハケ目　指圧痕	ハケ目　ナデ 横ナデ　指圧痕	砂粒多混	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 黄橙	良好	25.8	11	31.4	器面摩滅(外)	7.5	H32	1,2,3 3760
	69	甕	口～胴	X	ハケ目→ナデ 板ナデ→ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ　指圧痕	石英，長石 角閃石	浅黄橙 黒褐	浅黄橙 灰黄	良好	22.0	－	－		7.5	H32	2,3 4,8
	70	蓋	庇～天頂	－	横ナデ ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	橙　灰褐 黄橙	黄橙	良好	31.6	0	8.1	煤付着(内)	7.5	H32	25
	71	鉢	口～底	Ⅳ	ナデ 指圧痕	ハケ目→ナデ ナデ	石英，角閃石	明褐灰 褐灰	灰褐	良好	11.5	3.6	11	完形	－	H32	5
	72	鉢	口～底	Ⅳ	横ナデ ナデ　指圧痕	ナデ 指圧痕	砂粒多混 石英，角閃石	褐灰 灰白	灰黄褐	良好	10.2	－	－		7.5	H32	23
	73	鉢	口～底	Ⅳ	ハケ目→ナデ 横ナデ	横ナデ ナデ	長石，砂粒少混 石英，長石	黄橙	黄橙 灰黄	良好	13	－	－		7.5	H32	22
	74	鉢	口～底	Ⅳ	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	黒雲母 石英，角閃石	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 暗褐	良好	－	6.9	－		7.5	H32	13
22図	75	大　甕	口～底	V	ハケ目　ナデ 板ナデ→ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ　ハケ目	長石，砂粒多混 石英，長石	浅黄橙 黒褐	浅黄橙	良好	34.8	2.3	56.1	縄目突帯 器面摩滅(内)	7.5	H32	1854
23図	76	壺	口～底	Xa	ハケ目 板ナデ→ナデ	ハケ目　ナデ 指圧痕	角閃石 石英，長石	黄橙 黒褐	橙	良好	14.5	1.0	31.6		7.5	H32	8
	77	壺	口～底	Xa	ハケ目　ナデ 板ナデ→ナデ	ハケ目 ナデ	角閃石 石英，角閃石	浅黄橙 灰黄	黄橙	良好	12.4	0.5	29.6		7.5	H32	6
	78	壺	口縁部	Xa	ハケ目→ナデ 板ナデ→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	長石，黒雲母 石英，長石	浅黄橙 暗黄褐	浅黄橙	良好	11.6	1.0	30.1		8	Ⅲ	5413
	79	壺	口～底	Xa	横ナデ 板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	角閃石，輝石 石英，長石	淡橙 浅黄橙	淡橙	良好	10.6	0.6	19.6		7.5	H32	7
26図	80	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ	横ナデ	角閃石 石英，角閃石	灰黄褐	黄褐	良好	29.0	－	－		7.5	Ⅳ	4135
	81	甕	口縁～胴	Ⅷ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	長石，黒雲母	黒褐	暗褐	良好	21.6	－	－		7.5	Ⅳ	3173 3183
	82	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ	ナデ 指圧痕	石英，角閃石	浅黄	浅黄橙	良好	38.0	－	－		7.5	Ⅲ	2766
	83	甕	口縁部	Ⅷb	ハケ目→ナデ 指圧痕	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	32.8	－	－		7.5	Ⅲ	2756
	84	甕	口縁部	Ⅸ	板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	砂粒多混	黄橙	浅黄橙	良好	－	36.0	－		7.5	H35	58
	85	甕	口縁部	X	ハケ目→ナデ 板ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 白色小石	黄橙	黒褐 灰黄	良好	21.6	－	－	煤付着	7.5	Ⅳ	3694
	86	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		7.5	H35	20
	87	甕	口縁～胴	X	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	砂粒多混	橙	浅黄橙	良好	－	－	－	摩滅(内)	7.5	Ⅳ	3159
	88	甕	底部	Ⅵb	ハケ目→ナデ 横ナデ	板ナデ→ナデ	砂粒少混	黄橙	灰黄褐	良好	－	9.3	－		7.5	H35	32 33
	89	甕	底部	Ⅵa	ハケ目→ナデ 横ナデ　指圧痕	ナデ	石英，長石 黒雲母	黄橙	灰褐	良好	－	9.4	－		7.5	Ⅲ	2794
27図	90	大　甕	口縁	Ⅳ	板ナデ→ナデ	横ナデ	石英，長石 砂粒少混	浅黄橙	灰白	良好	33.6	－	－		7.5	Ⅳ	3192
	91	大　甕	胴部	Ⅲ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目 ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	黄橙 灰黄	浅黄橙	良好	－	－	－	M字状突帯	7.5	H35	39,40 41,42
	92	壺	底部	Ⅳ	ナデ	ナデ	砂粒多混	浅黄橙	灰黄	やや良好	－	5.2	－	器面摩滅	7.5	H35	34
	93	鉢	口縁部	V	横ナデ 指圧痕	横ナデ 板ナデ	精製された胎土	灰黄褐	褐灰	良好	21.8	－	－		7.5	Ⅳ	3190
	94	鉢	口縁部	Ⅳ	横ナデ ナデ	横ナデ	赤色小石	黄橙	橙	良好	10.8	－	－		7.5	Ⅲ	1303
28図	95	甕	口縁部	Ⅰb	横ナデ ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石	浅黄橙	橙	良好	24.8	－	－	刻目突帯	6	溝	1735
	96	甕	口縁部	Ⅱ	ナデ	ナデ 指圧痕	精製された胎土	灰黄褐	黄橙	良好	28	－	－	刻目突帯	6	Ⅲ	1425
	97	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ ナデ	ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，砂粒少混	褐	赤褐	良好	27.5	－	－		6	溝	734
	98	甕	底部	Ⅱ	ハケ目→ナデ ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	赤橙	浅黄橙	良好	－	9.0	－	底面に指跡	6	Ⅲ	836
29図	99	壺	頸部	Ⅻ	ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	橙	浅黄橙	良好	－	－	－	器面摩滅	8	土＊4	6167 6168

第10表　大島遺跡　弥生土器観察表4（遺構内出土④）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層		注記番号
29図	100	甕	口縁部	X	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，黒雲母 長石，赤色小石	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		9.5	P131	－
	101	浅　鉢	庇～天頂	－	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 砂粒少混	明赤褐 黄橙	浅黄橙 褐灰	良好	28.0	0.4	9.1		9.5	P17	K10 6438
	102	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目　指圧痕	石英，角閃石	灰黄褐	橙	良好	－	－	－		9.5	P127	4537
	103	大　甕	胴部	Ⅲ	横ナデ ナデ	板ナデ→ナデ	砂粒多混	浅黄橙	灰白	良好	－	－	－	突帯1条	9.5	P127	－
	104	甕	底部	Ⅵb	横ナデ ナデ　指圧痕	横ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石 赤色小石	浅黄橙	浅黄橙	やや良好	－	7.8	－		9.5	P127	－
	105	壺	底部	Ⅴ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	赤褐	黒褐	良好	－	1.4	－		9.5	P115	4401
	106	坏部	口縁部	Ⅲ	ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石 角閃石	黒褐 褐	明褐	良好	28.4	－	－	摩滅	9.5	P127	－
31図	107	甕	口縁部	Ⅰa	横ナデ ナデ　指圧痕	板ナデ	石英，長石 角閃石	黒褐 黄褐	浅黄橙	良好	－	－	－	突帯	7	Ⅳ	3299
	108	甕	口縁部	Ⅳ	横ナデ	横ナデ	長石	黒褐	黄橙	良好	－	－	－		7	Ⅳ	3340
	109	甕	口縁部	Ⅵ	ハケ目→横ナデ	横ナデ	精製された胎土	黄橙	浅黄橙	良好	26.8	－	－		7	Ⅳ	2412
	110	甕	口縁部	Ⅵ	横ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	灰黄褐	黄橙	良好	25.4	－	－		7	Ⅳ	3396
	111	甕	口縁部	Ⅶb	横ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	褐灰	浅黄橙	良好	25.6	－	－	沈線	7	Ⅳ	2898 3272
	112	甕	口縁部	Ⅵ	板ナデ→ナデ	横ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	24.8	－	－		7	Ⅳ	2872 3479
	113	甕	口縁部	Ⅷ	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	褐灰	良好	23.8	－	－		7	Ⅳ	2411
	114	甕	口縁部	Ⅷ	ナデ	ハケ目→ナデ	長石，角閃石	灰白 赤橙	灰白 赤橙	良好	－	－	－		6.5	Ⅳ	3940
	115	甕	口縁部	Ⅷ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	暗褐	黄橙	良好	28.6	－	－		7	Ⅳ	3469
	116	甕	口縁～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石，輝石	黄橙 灰黄褐	黄橙 灰黄褐	良好	33.8	－	－		7	Ⅳ	2863
32図	117	甕	口縁～底	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 砂粒少混	黄橙 灰黄	黄橙 褐灰	良好	30.1	－	－		7	Ⅳ	3491 3488
	118	甕	口縁～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	長石，角閃石 砂粒多混	暗褐 明黄褐	淡黄橙 褐	良好	28.0	－	－		7	Ⅳ	3470 2869
	119	甕	口縁～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 金雲母	赤褐 赤黒	明赤灰	良好	25.0	－	－		7	Ⅳ	3415 2863
	120	甕	口縁～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，黒雲母	浅黄	淡黄	良好	19.6	－	－		4T	Ⅲ	2
33図	121	甕	口縁～胴	Ⅸ	ナデ	横ナデ ナデ	精製された胎土	黄橙	浅黄橙	良好	25.8	－	－		7	Ⅳ	3471
	122	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ 板ナデ→ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石	黒褐	橙 灰褐	良好	27.2	－	－		7	Ⅳ	3425
	123	甕	口縁～胴	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 黒雲母	黄褐	灰白	良好	27.0	－	－	煤付着	7	Ⅳ	2875
	124	甕	口縁部	XⅠ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石	黒褐	灰褐	良好	23.0	－	－		7	Ⅳ	3482
	125	甕	底部	Ⅲ	板ナデ→ナデ ミガキ	板ナデ→ナデ	石英，長石 小石(8㎜)	黄橙	灰褐	良好	－	7.6	－		7	Ⅳ	3365
	126	甕	胴～底	Ⅲ	ハケ目→ナデ ナデ	ナデ	石英，長石 砂粒多混	赤橙	赤褐 灰赤	やや良好	－	6.4	－	二次焼成	7	Ⅳ	2533 2893
	127	大　甕	口縁	Ⅰ	横ナデ ナデ　指圧痕	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，角閃石	灰黄 橙	浅黄橙 橙	良好	－	－	－		7	Ⅳ	2892
	128	壺	口縁部	Ⅴ	横ナデ ナデ	横ナデ	精製された胎土	浅黄橙	黄橙	良好	－	－	－	丹塗り(線)	6.5	Ⅳ	3942
	129	壺	口～頸	Ⅲ	横ナデ ナデ	横ナデ 板ナデ　指圧痕	石英，長石	浅黄橙	浅黄橙	良好	19.6	－	－		7	Ⅳ	3306
	130	壺	頸部	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，角閃石	灰黄	灰白	良好	－	－	－	三角突帯	7	Ⅳ	3425
	131	鉢	口縁部	Ⅴ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	黄褐 黒褐	褐	良好	9.9	－	－		7	Ⅳ	3509

第２節　出土土器

弥生時代の遺物は，遺物包含層であるⅣ層を主として前期～終末期にかけてのものが数多く出土した。一部は，Ⅲ層の古墳～古代にかけての遺物と混ざり合った状態で出土するものも少なくなかった。出土した遺物は甕型土器（以下甕と略す），壺型土器（以下壺と略す）を中心とした土器が大部分を占め，土器以外にも磨製石鏃，石庖丁などの石器や石製品が認められた。

なお，各器種ごとの総数（主に口縁部，底部）は，本文で紹介できなかったものも含めて，第11表にまとめた。

出土土器（第35～59図132～443）

出土土器には，甕，大甕，壺，鉢，高坏，器台，蓋型土器，小型土器などがあり，その大部分は甕，壺類である。最も多い甕の口縁部については分類基準についての説明を行い，底部及び，壺，鉢などは，出土遺物の説明の中で分類基準も含めて説明を行う。

なお，図化した各器種の分類ごとの総数は，遺構内出土のものも含め，第12表にまとめた。

１　甕　（第35～44図　132～254）

口縁部の形態からⅠ～Ⅺ類に分類した。分類の概念については，第34図に示した。

Ⅰａ類　（第35図　132～141）

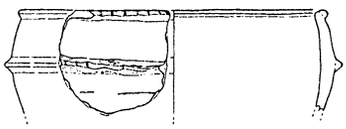
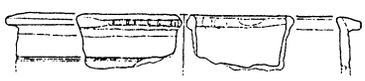
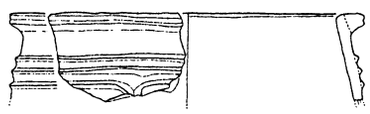
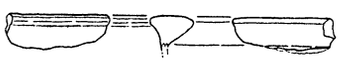
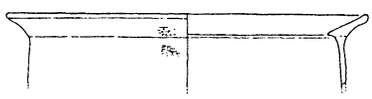
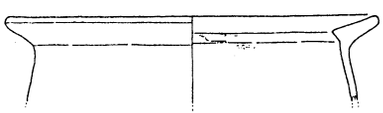
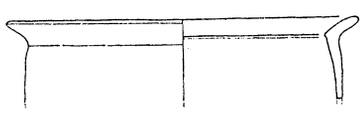
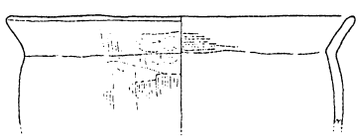
口縁部に断面三角形のやや小さめの貼付突帯が施され，胴部突帯と口縁部突帯がほぼ同じ大きさのものである。

132～135は，口縁部と胴部に三角突帯を巡らし，口唇部に浅い刻目を施す。胴部は張りを持ち，内外面ともナデ調整である。底部形態は不明である。

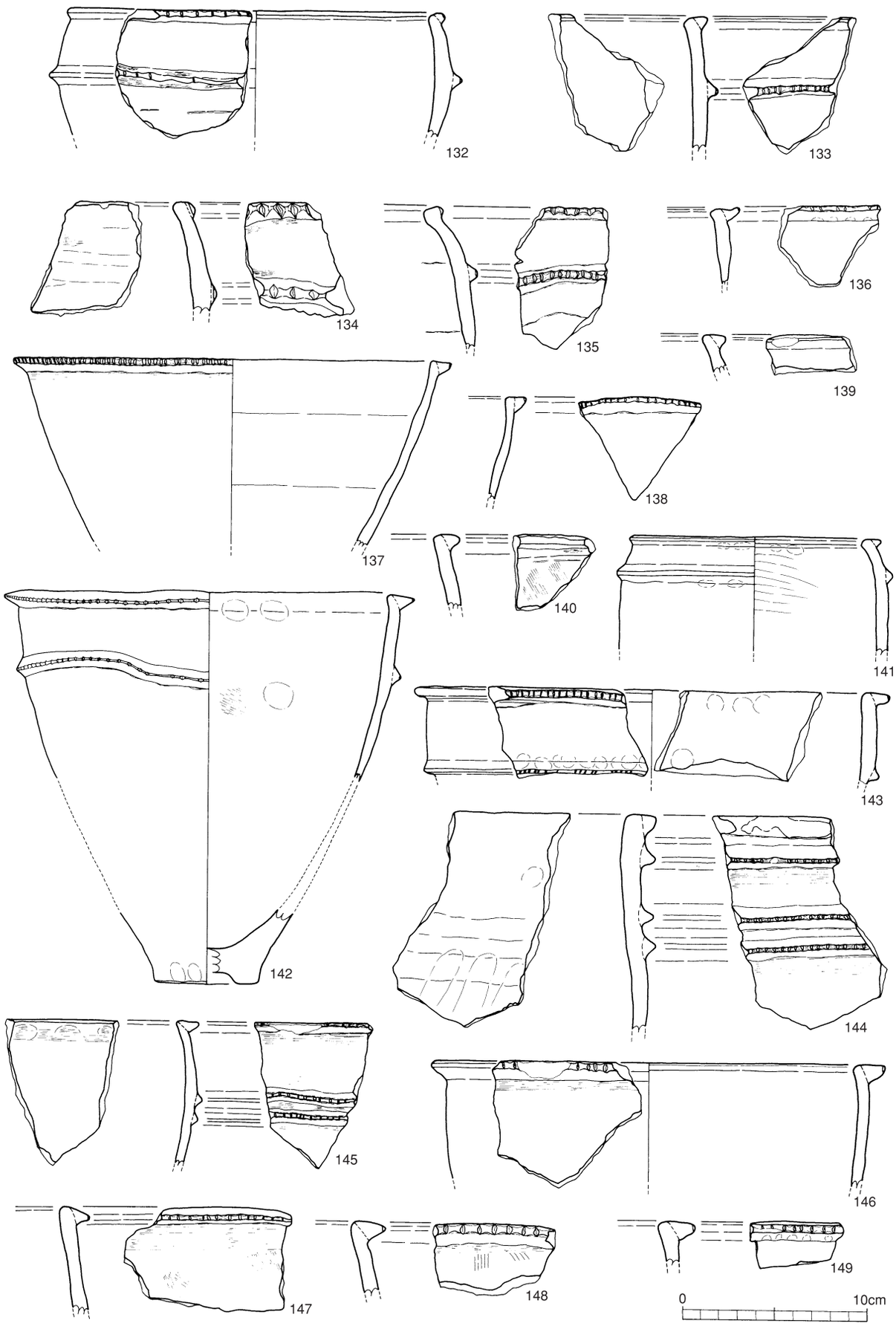
137，138は，口縁部から底部に向かってすぼまる形状を呈し，胴部には突帯を施さない。

第11表　弥生土器集計表1（遺物総数）

器種＼調査区		Ｋ１～Ｋ５	Ｋ６～Ｋ6.5	Ｋ７～Ｋ7.5	Ｋ８	Ｋ９	Ｋ１０	Ｋ11～Ｋ16	合計
甕（口縁部）	Ⅰ類	10	49	18	8	3	1	0	89
	Ⅱ～Ⅴ類	19	42	78	20	6	4	0	169
	Ⅵ～Ⅸ類	10	37	22	20	75	8	2	174
	Ⅹ，Ⅺ類	10	64	61	25	10	58	48	276
甕（底部）	Ⅰ類	4	30	3	25	1	1	1	65
	Ⅱ・Ⅲ類	5	13	9	13	21	70	19	150
	Ⅳ～Ⅷ類	32	1271	138	87	118	0	2	504
大甕		1	14	0	8	22	32	0	77
壺（口縁部）		13	72	0	25	0	0	6	116
壺（底部）		12	100	54	45	141	32	8	392
鉢		3	9	8	11	0	0	0	31
高坏		17	17	7	28	3	3	0	75
小型土器		0	3	10	5	65	0	0	83
その他		94	259	120	133	0	0	21	627
合計		230	836	528	453	465	209	107	2828

Ⅰa 類 ・ Ⅰb 類	Ⅱ 類	Ⅲ 類
 ・口縁部に三角突帯を貼付け ・胴部に三角突帯を貼付け ・突帯に刻目を施す ・胴部は張らずにすぼまる	 ・口縁部断面の形状が方形または長めの台形 ・口唇部に刻目を施す ・胴部に刻目突帯または沈線	 ・口縁部断面の形状が方形または長めの台形 ・口唇部が浅く凹む ・胴部に多重突帯または沈線
Ⅳ 類	Ⅴ 類	Ⅵ 類
 ・厚い短めの逆Ｌ字状口縁 ・口縁部上面に平坦面 ・内側に尖り気味の張り出し ・口縁部断面が三角形	 ・肥厚した逆Ｌ字状口縁 ・口縁部上面に凹み ・内側が強く張り出し尖る	 ・器壁の薄いくの字状口縁 ・口縁部上面は直線的に伸びる ・内側が強く張り出し尖る ・口唇部を丸く仕上げる
Ⅶa 類	Ⅶb 類	Ⅷ 類
 ・くの字状口縁 ・口縁部上面に直線的に伸びる ・内側の張り出しが小さい ・口縁部断面が長めの三角形	 ・くの字状口縁 ・口縁部上面に直線的に伸びる ・内側の張り出しが小さい ・口縁部断面が丸みのある方形	 ・弱く外反するくの字 ・頸部で強く締まる ・内側は張り出すか強い稜 ・胴部の張りは弱い
Ⅸ 類	Ⅹ 類	Ⅺ 類
 ・強く外反するくの字状口縁 ・頸部でわずかに締まる ・内側は張り出さず弱い稜 ・胴部の張りは弱い	 ・屈曲の弱いくの字状口縁 ・頸部の締まりが弱い ・内側に張り出しや稜を持たない ・胴部の張りは弱い	 ・口縁部上面端部に凹み ・口唇部に広い面を持ち，上端は上方へ尖っている

第34図　弥生土器（甕）分類模式図



第35図　弥生時代の土器1（甕Ⅰ類）

137，138は，口縁部から底部に向かってすぼまる形状を呈し，胴部には突帯を施さない。口縁部突帯に刻目を施し，口縁上面に平坦面を持つ。器壁が薄く，外面に黒斑が認められる。

139～140は，胴部に張りを持ち，突帯の有無が不明のものである。

141は，口縁部がややすぼまり，口縁部，胴部に突帯を有するが，突帯に刻目を施さない。

Ⅰｂ類（第35,36図　142～152）

やや大きめの三角突帯を口縁部に施すもので，口縁部突帯が胴部突帯よりも大きい。

142，143は，胴部に１条の刻目突帯を巡らす。142は，胴部に張りがない砲弾形を呈する器形で，底部は充実気味の高台で，中央が凹んでいる。上げ底の凹みは浅く，接地面は平坦に仕上げる。二次焼成を受け器面は赤橙色に変色し摩滅している。

144，145は，胴部に数条の刻目突帯を巡らすもので，144は３条であり，あまり張りが無く，口縁部は直口している。145は２条であり，張りを持ち，口縁部は内湾している。いずれも外面に明瞭な横ナデ調整痕が残り，丁寧な作りである。

146～149は，口縁部のみの出土のため胴部突帯の有無は不明であるが，三角突帯には刻目が施され，口縁上面は平坦であり，口縁の突帯は水平またはやや下がっている。

150は，口縁部，胴部の三角突帯に刻目を施さないもので，胎土中に金雲母が多く含まれる。

151，152は，他はみられない特殊なもので，突帯に刻目は認められない。151は，口縁部突帯に直交する縦位の突帯を施し，152は，外面および口縁部突帯上に工具による刺突文を施す。

Ⅱ類（第36図　153～164）

口縁部に貼り付けた突帯の断面が，方形またはやや長めの台形を呈し，口唇部に刻目を施すものである。胴部には，刻目突帯または横位の沈線を巡らす。

153は，口径47.2㎝のやや大きめの甕である。口縁部上面は水平で平坦面を持ち，口唇部に刻目を施す。口縁部下に１条，胴部上位に１条の刻目突帯を巡らしている。

154～159は，胴部上位に刻目突帯１条施し，口縁部突帯に比べて，かなり小さくなっている。

154は，丸味を持った胴部の外面はナデ調整の後ミガキ調整が施され，丁寧な作りである。

158は，口縁部内面が尖っており，上面は浅く凹んでいる。159は，胴部中央で屈曲し底部ですぼまるもので，突帯上下に指ナデによる指圧痕が多数残る。胴部上位に煤が付着している。

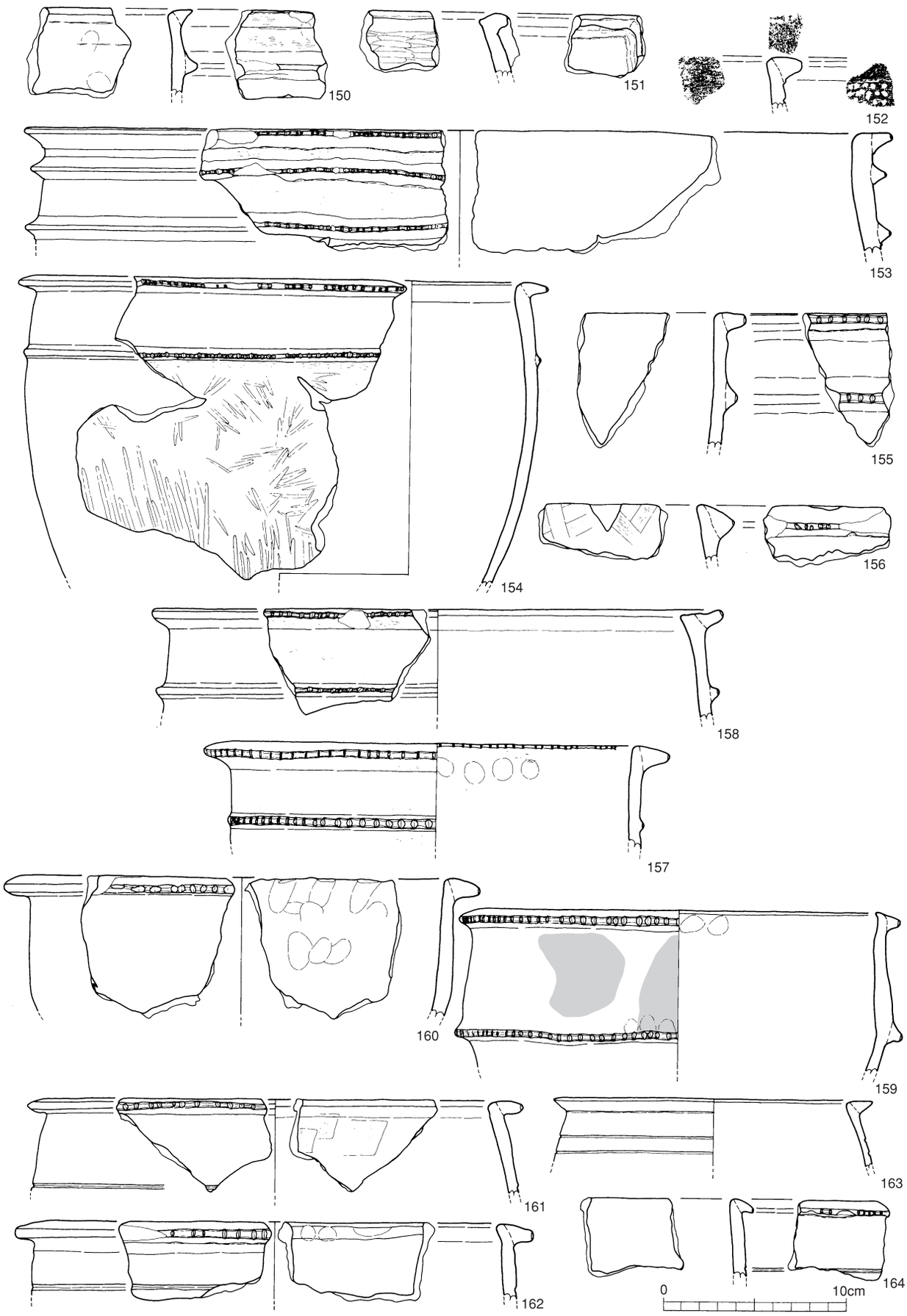
160は，器面の摩滅が激しいが，胴部に突帯や沈線を持たないものである。

161～164は，胴部上位に１条または２条の沈線を施すものである。161，162は，1条の沈線を持ち，口縁部上面がやや丸みのある平面で，内側が横ナデ調整によりわずかに凹む。163は，口縁部断面が三角形である。口唇部が尖り，刻みを施さない。沈線は２条である。

Ⅲ類（第37,38図　165～181）

口縁部の断面が方形または台形に近いやや大きめのもので，刻目を施さない。

165～170は，口縁部突帯の断面が台形に近く，口唇部は平面またはわずかに凹みを持つもので，上面はほぼ平坦で上方へ上がるもの（166，167，170），下がるもの（165，168，169）などがある。膨らみのある胴部上位に三角突帯が１～３条巡っている。165は，肥厚した口縁部で，口唇部の凹みにごく浅い刻目が密に施されている。胴部突帯周辺に煤が付着している。166は，口縁部内側が浅く凹んでおり，内面に板ナデ痕が縦方向に粗く残っている。167は，口縁部上面がほぼ水平



第36図　弥生時代の土器2（甕Ⅰ・Ⅱ類）

で，口唇部の凹み周辺に黒斑が残る。168は，口径12.2㎝と小型のもので，口縁部が下方へ傾き内側に稜を持たない。170は，口縁部上面が浅く凹んでいる。

171は，直線的な胴部中央に２条の沈線が施されている。内面上位は横位のミガキ調整である。

173は，張りのある胴部から逆L字状にゆるやかに外反する。口縁部内側に鋭い稜を持たず，口唇部は丸く仕上げている。胴部に突帯や沈線は施さない。

174，175は，口縁部断面が三角形に近く，175は内側が張り出し，張り出し部の下に凹みを残す。

176は，口縁部接合痕のナデ消しが粗く，筋状に残っている。口縁部上面が凹み，口唇部は尖っている。

177は，口縁部断面が方形であり，口唇部が凹んでいる。上面中央に沈線が巡っている。

178は，胴部上位に３条の三角突帯を横位に施すが，最下位の突帯は下方に向かって伸びている。

179は，張りのある胴部に４条の三角突帯を施すもので，突帯下部に約５㎝間隔で，直径１㎝のU字状の粘土紐を付したものである。接合痕のナデ消しやミガキ調整など丁寧に仕上げている。

180は，胴部に櫛描波状文を施したものである。全体器形は不明である。

181は，口縁部突帯下に縦位の三角突帯を施したもので，口縁部突帯は剥落している。

Ⅳ類（第39図　182～185）

口縁部のみのため全体器形は不明であるが，厚く短めの口縁部が逆Ｌ字状を呈し，口縁部上面に平坦面を持っているものである。口縁部内側が尖り気味に張り出している。

182，183は，口縁部断面が丸みを持った三角形であり，内側に張り出しを持つ。口縁部上面に平坦面を持つが，182はやや浅めに凹み，183はわずかに反る。

184，185は，口縁部形態はⅢ類に近いが，口縁部内側に粘土紐を付け足して作った突出部を持つものである。口唇部は凹んでいる。185は，口唇部がやや垂れ気味である。

Ⅴ類（第39図　186～191）

口縁部内側の張り出しがⅣ類よりも大きくなり，上面に凹みを持つものである。口唇部は，丸みを持つ。

186は，口縁部が大きく外反する逆Ｌ字状を呈し，内側が大きく尖った張り出すものである。やや長めの口縁部上面が浅く凹んでいる。全体に器壁は薄くナデ調整による丁寧な作りである。口縁部下に三角突帯を１条施している。全面に丹が塗られている。

187は，内側の突出が強く上面に凹みを持つもので，口縁部下に三角突帯を施している。口唇部が欠損しているが，186と同タイプと思われる。

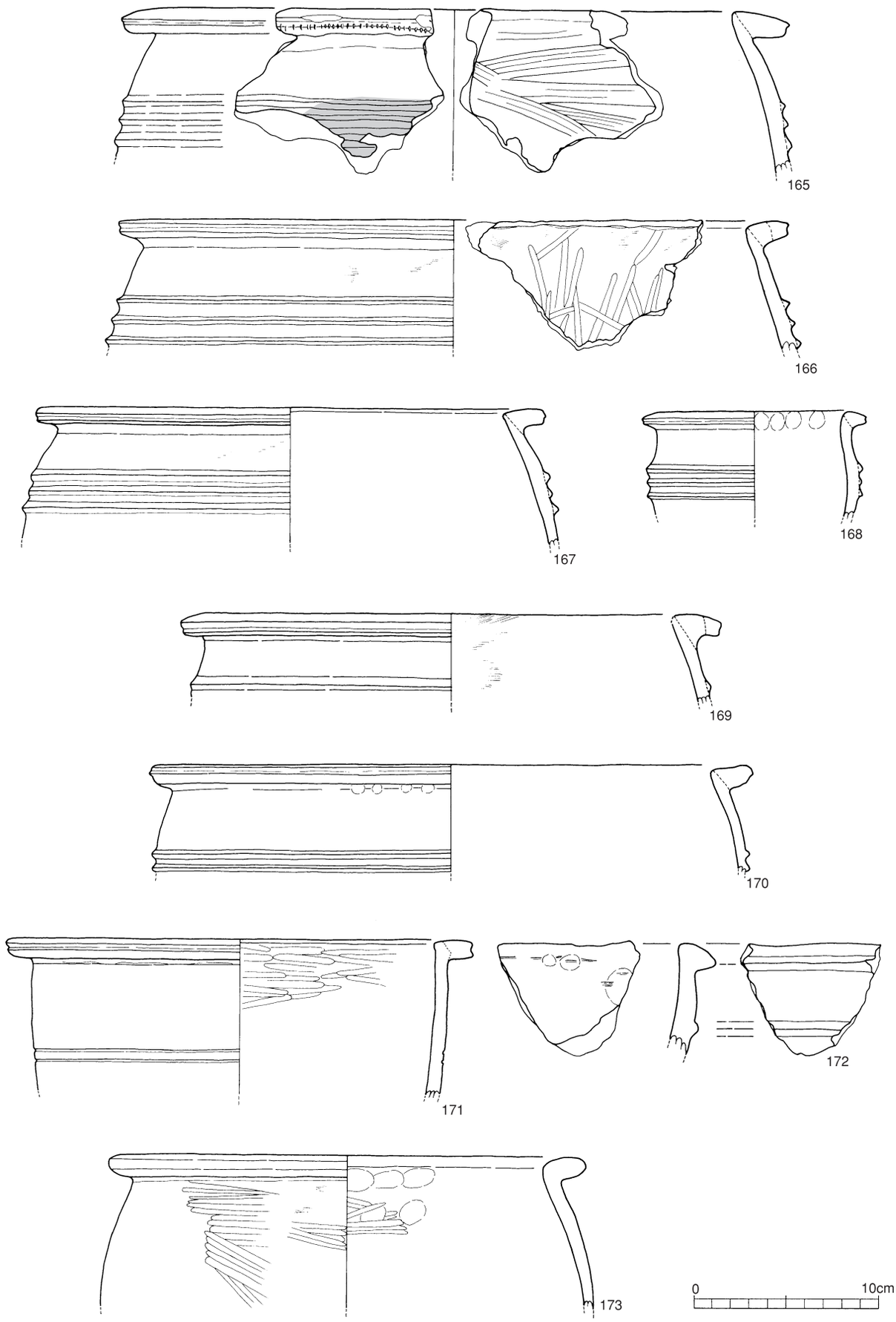
188は，口縁部内側への張り出しが小さく口唇部を丸く仕上げたものである。

189～191は，肥厚で短い口縁部であり，内側への張り出しや上面の凹みが顕著で，断面がＹ字状のものである。189，190は，やや外反が弱く傾いている。

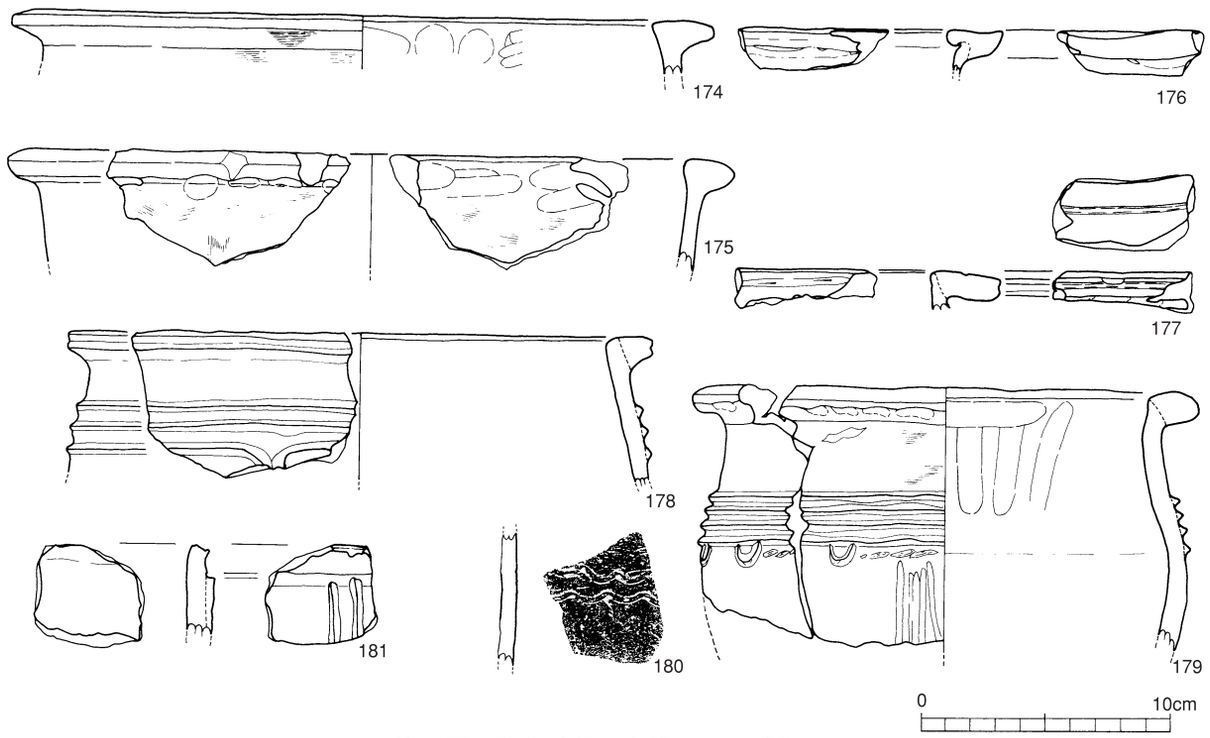
Ⅵ類（第39図　192～194）

口縁部内部の張り出しは尖っており上面に直線的に伸びる平面を持つものである。口縁部断面は口唇部へ向かって先細りしており，長めの三角形を呈している。

192は，器壁が薄く，全体にナデ調整を施し丁寧な作りである。口縁部内側の張り出しが強く尖



第37図　弥生時代の土器3（甕Ⅲ類）



第38図　弥生時代の土器4（甕Ⅲ類）

り，口唇部下に凹みがある。口唇部は丸く仕上げている。

193，194は，口縁部内側の張り出しを尖らせ，くの字状に強く外反するものである。口縁部断面は長めの三角形であり，上面に平坦面を持つ。

Ⅶａ類　（第40図　195～202）

口縁部内側の張り出しは小さくなるが意識して張り出しを作り出し，くの字状の口縁を呈するものである。先細り気味の口縁部はやや長めで，断面形状は三角形に近い。

195は，直線的に締まる胴部は薄作りだが口縁部は厚みがあり，上面に平坦面を持つ。

196～198は，口縁部内側が小さく張り出し外反するもので，胴部との境は厚く口唇部は尖り気味である。197は，胴部が張らず鉢の可能性がある。

199は，口縁部内部に張り出しを作るため摘んで調整した痕が凹みとなって残る。

200は，口縁部内側に粘土紐を貼り付け張り出し部を作り出したものである。口縁部断面は三角形に近く，やや厚めでしっかりとした作りである。

201は，口縁部全体が薄く直線的に伸び，上面に長めの直線的な平坦面を持つものである。

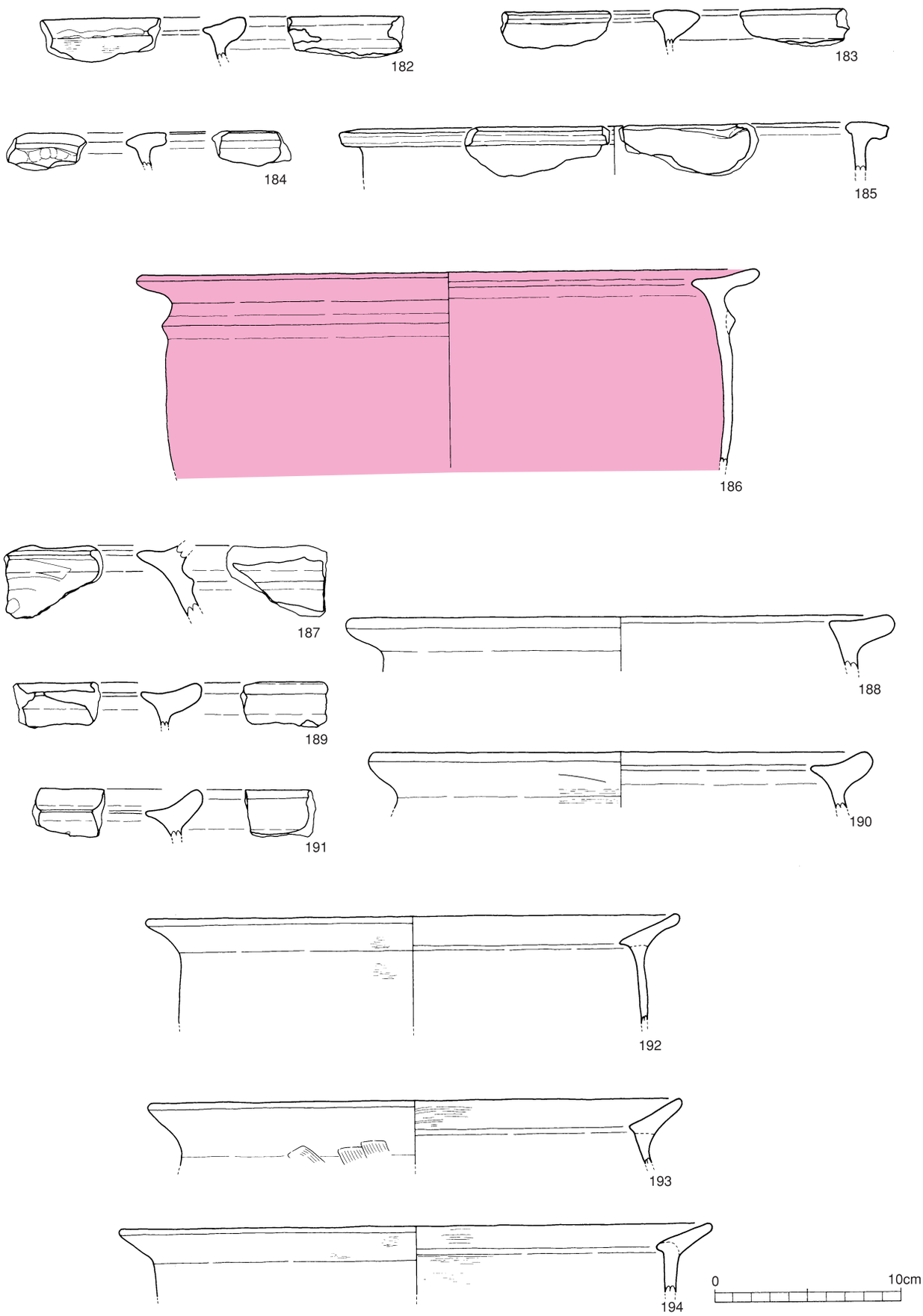
202は，あまり張りのない胴部から口縁部が屈曲するもので，内面に横位のハケメ調整を施す。

Ⅶｂ類　（第41図　203～208）

形態的にはⅦａ類と同じであり，口縁部内側への張り出しが小さく，上面に平坦面が直線的に伸びるものである。口縁部断面は丸みを持った方形に近い。

203は，口縁部内側の張り出しが弱く尖っている。張り出し部の下に摘み出し調整のための凹みが巡っている。厚みはほぼ均一で上面は平担である。

205，206は，口縁部内側の張り出しが丸みを持つもので，口唇部は丸みを持った方形である。



第39図　弥生時代の土器5（甕Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類）

206は，口縁部上面がわずかに凹み，胴部は張りを持たず直線的である。

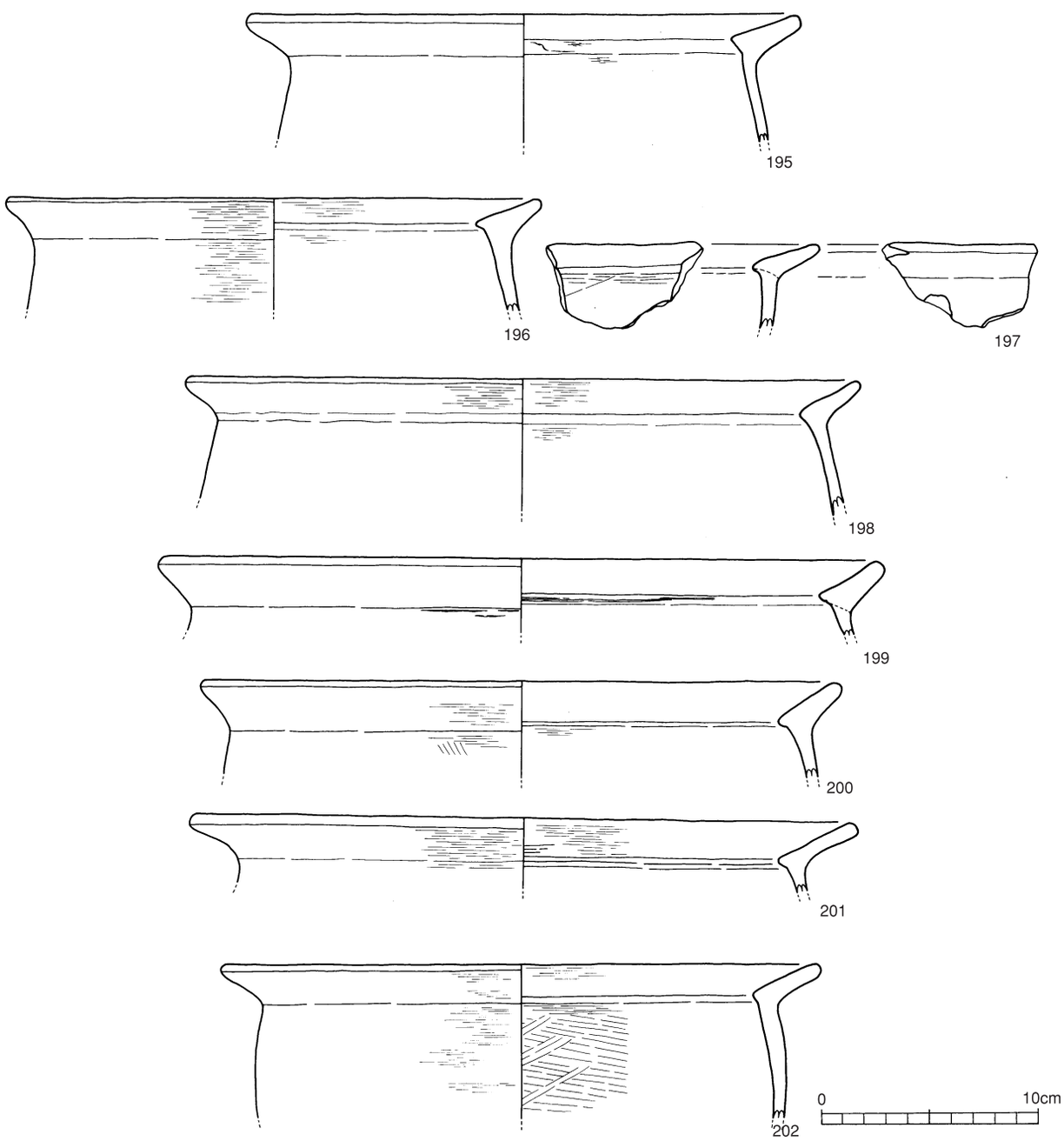
207，208は，口縁部内側が尖っており，厚めの口唇部は面取りされ方形を呈する。

Ⅷ類（第41図　209～217）

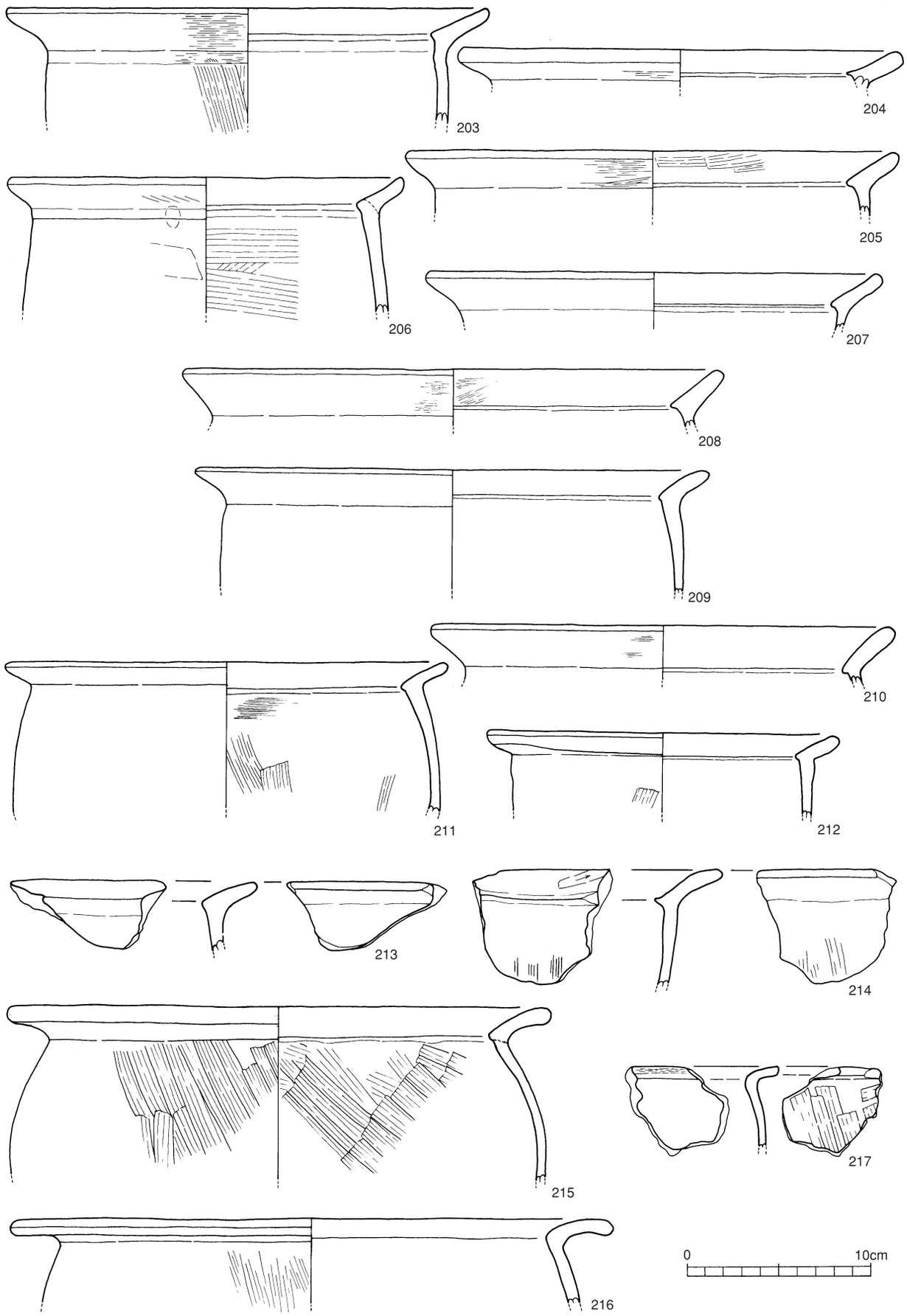
立ち上がりの弱い口縁部が外反し，口縁部内側にわずかな張り出しか強い稜を持つものである。胴部は張りを持つものと直線的に底部へすぼまるものがある。

209は，直線的な胴部から外反する口縁部である。内側にわずかな張り出しを持ち，上面はやや反っている。口縁部付近は丁寧な横ナデ調整を施す。

210，211は，弱い張りを持つ胴部から外反する短めの口縁部である。内側にわずかな張り出しを持ち，上面は直線的に口唇部へ伸びる。胴部内面はハケメ調整を施す。



第40図　弥生時代の土器6（甕Ⅶa類）



第41図　弥生時代の土器7（甕Ⅶb・Ⅷ類）

212は，直線的な胴部から外反するもので，上面は口唇部近くでわずかに凹む。

213は，口縁部内側に弱い張り出しを持ち外反するもので，断面は長めの三角形を呈する。

214は，薄作りであり直線的な胴部から緩やかに外反するもので，頸部付近に最大径を持ち底部へすぼまると思われる。内側に細く尖った張り出しを持ち，上面は浅く凹み口唇部近くで反る。

215，216は，張りの強い胴部が頸部ですすぼまり，強く外反する口縁部を持つ。内側に明瞭な張り出しは見られないが強い稜が残る。口縁部は細長く，口唇部は丸く仕上げられている。

217は，器壁が薄く口縁部が強く外反するもので，鉢の可能性も残る。

Ⅸ類（第42図　218～233）

口縁部が強く外反するくの字口縁を呈し，内側に稜を持つが張り出しは見られないものである。上面はわずかに反っている。胴部はあまり張りを持たず，口縁部に最大径を持つものが多い。

218～221は，逆Ｌ字状に外反するものである。胴部上位に張りを持つと思われる。口縁部上面はわずかに反り，口唇部は丸く仕上げられている。219は，口縁部が先細りの断面三角形であり，内面にハケメ調整痕を明瞭に残す。221は，内面に工具による粗い横ナデ調整を施す。

222は，器壁が薄く，短めの口縁がくの字状に強く外反する。口縁部上面に浅い凹みを持ち，胴部内面は多方向に伸びるハケメを重ねて施す。

223は，厚でな作りであり，くの字状に伸びた短めの口縁部上面は凹んでいる。

224は，口縁部が直線的な胴部からくの字状に大きく外反し，内面に張り出しに近い稜を持つものである。口唇部は尖り気味であり，ハケメ調整で丁寧に仕上げる。胴部上位に煤が付着している。

225は，薄作りであり，器面の摩滅が激しいが内面に指圧痕が多数残る。

226～229は，口縁部内側に稜を持ち，口縁部の立ち上がりが強いものである。226は，頸部の締まりが強く，外面に横ナデ調整痕が明瞭に残る。227は，指ナデ調整の際の歪みが器面に残り，口縁の長さや傾きなど不規則である。胴部上位外面に煤が付着している。228は，小型の甕であり，口縁部上面はやや反り気味である。229は，胎土中に多くの金雲母が含まれている。

230，231は，短い口縁部の端部に面を持ち，断面が方形のものである。

232，233は，大きく外反する口縁部を持つが，内側の稜がやや弱いものである。

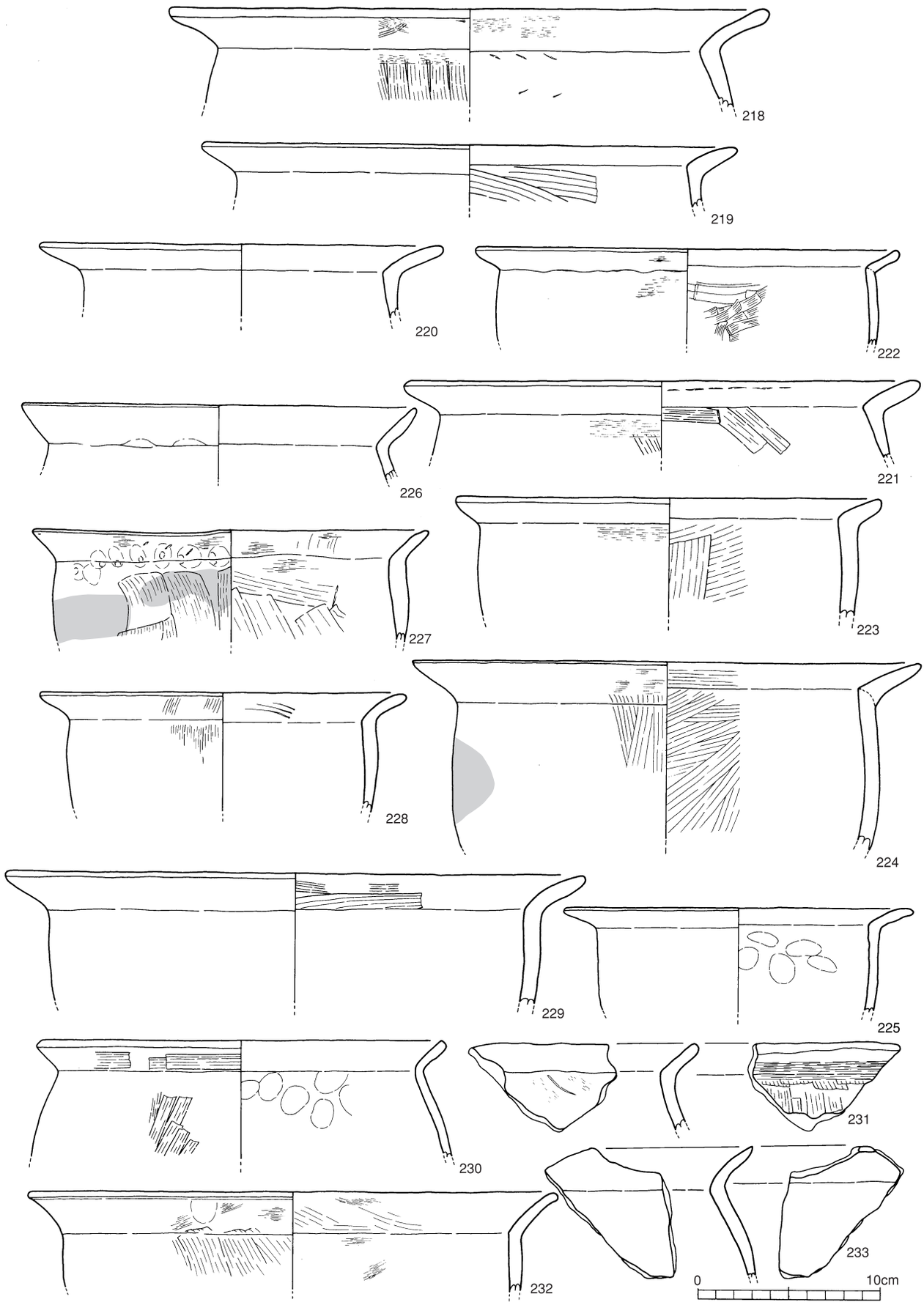
Ⅹ類（第43図　234～243）

口縁部の傾きが弱く，わずかに外反するが直立気味に広がるものである。口唇部は，丸みを持ち尖るものと，面を持つものがある。胴部は上位に張りを持ち，脚台に向かってすぼまる。

234は，やや張りを持つ胴部が頸部で締まり，くの字状に口縁部が外反するもので，口唇部に浅い凹みを施す。内側に弱い稜を認められ，胴部内面に明瞭なハケメ調整痕を残す。

235～238は，屈曲の弱いくの字口縁であり，口縁部内側に稜を持たないものである。235は，やや大きく反り口唇部に不明瞭な面が見られるもので，頸部外面に指圧痕が残る。236は，口縁部が先細りであり口唇が丸く尖っている。一部に指圧痕が残りわずかに歪みがある。口縁部外面と胴部上位に煤が付着している。237は，口縁部下に強い張りを持つもので，内外面ともハケメ調整を施している。238は，口縁部内側が丸みを持ち緩やかに外反するもので，口唇部に面を有する。胴部内面に板ナデ調整痕が筋状に残り，小石の剥離も見られる。

239～243は，口縁部の屈曲が弱く直立気味であり，内面に稜は持たず，口唇部を面取りしたもの



第42図　弥生時代の土器8（甕Ⅸ類）

である。239は口唇部に丸みを持った面を持ち，一部に凹みが見られる。高さも一定でなく波打っている。頸部下に最大径があり，脚台へ向かって緩やかにすぼまる。脚部は裾広がりに開き，内面天井は丸みを持つ。脚台はハケメ調整を施した後粗くナデ消しており，凸凹している。240，241は，わずかに反るが直立気味の口縁部を持つものである。ハケメ調整痕が頸部付近に筋状に残り段となっている。242，243は，頸部の締まりがほとんど無く，口縁部が緩やかに開いている。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。

Ⅺ類（第43図　244，245）

口縁部がくの字状に外反し，口縁部上面が凹み，口唇部に面を持つものである。

244は，口唇部近くの上面で大きく凹み，口唇部上端は上方に向かって尖っている。

245は，器壁が薄く，口縁部は緩やかに外反し後上方へ起き上がる。口唇部は丸みを持つ。

甕（底部）（第44図　246～267）

甕の底部は，ほとんどが底部のみの出土であり，胴部の膨らみや口縁部の形状など不明である。脚の有無，脚台内天井の形態などでⅠ～ Ⅶ類に分類した。

Ⅰ類（第44図　246～248）

大きな平底で安定しており，胴部が直線状に広がるものと端部がやや張り出すものがある。

246は，直線的に立ち上がるもので，内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。底面は浅いレンズ状を呈し，わずかに凹んでいる。

247は，底部が小さく張り出し直線的に開くものである。張り出し部はナデ調整を施し丁寧に仕上げている。内部はやや尖り気味の卵状を呈している。

248は，薄い円盤状の高台が張り出し，逆ハの字状に開くものである。安定感があり底面はわずかに凹み，平坦である。

Ⅱ類（第44図　249～252）

充実高台を持つものである。器壁が厚く，やや直線的に開く。

249は，やや底唇部が開き気味の充実高台を持ち，胴部は直線的に外反するものである。底部の厚さは4.2㎝であり，外面は縦方向のナデ調整で，胴部は工具によるミガキ調整が施されている。底唇部は丸みを持って尖り気味である。

250，251は，厚さ約６㎝の充実した高台を呈するもので，外面は細かいハケメ調整を施す。

252は，小型で締まりの強いものである。底面は楕円形を呈し，立ち上がりも一定しない。

Ⅲ類（第44図　253～256）

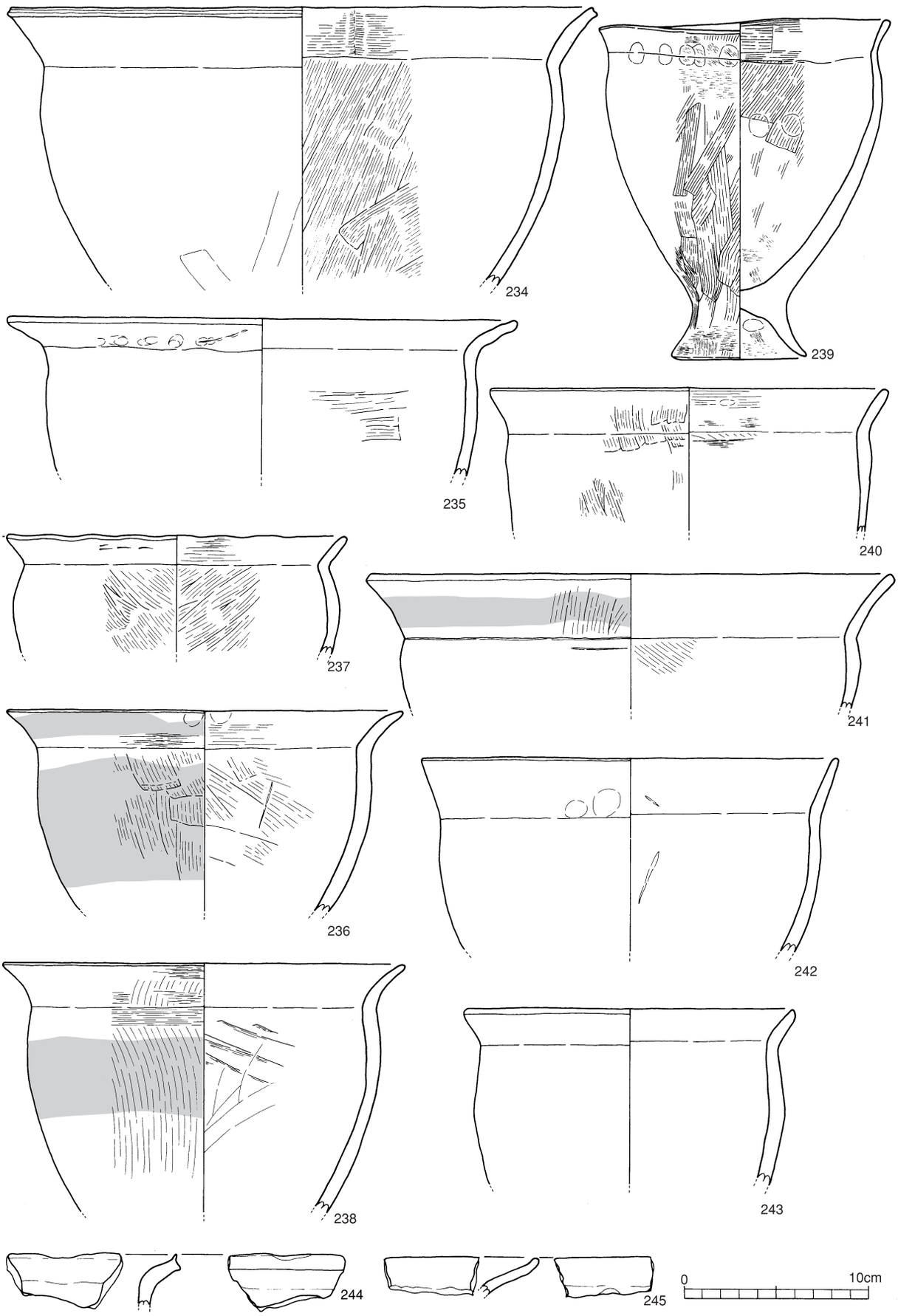
わずかな上げ底の脚台で，脚の開きは小さく，接地面が広いものである。

253，254は，底部の厚みが４～６㎝と厚みのあるものである。253は，やや広がりのある裾の接地面に丸みを持つ。254は，底唇部に面を持つ。

255，256は，やや厚めのもので，底面にレンズ状の凹みを持つものである。255は，底唇部を丸く仕上げ，256は面を持つ形状を呈する。

Ⅳ類（第44図　257～259）

脚台の内面天井に砂粒が付着しているもので，Ⅲ類より上げ底が高くなり，器壁や薄くなる。



第43図　弥生時代の土器9（甕Ⅹ・Ⅺ類）

257は，胴部との境に段を持ち，外面に縦方向のハケメ調整が裾まで伸びている。

258，259は，外反する短めの脚を持つもので，内側天井は平坦である。底唇部は丸く仕上げている。外面は横ナデ調整が施される。

Ⅴ類（第44図　260～265）

裾部が穏やかに開く脚台であり，脚台内面天井が凹むものである。

260，261は，裾部へ向かって外反し，先端は丸みを持ち尖っている。

262～264は，やや直線的に開き，口唇を丸く仕上げたものである。263は，摩耗が激しく器面が粗い。264は，外面に縦方向のハケメ調整を底唇部近くまで施している。

Ⅵ類（第44図　266）

266は，裾部が短く開く脚台であり，脚台内面天井に平坦面を持つものである。

Ⅶ類（第44図　267）

267は，裾広がりに開く脚台であり，脚台内面天井に下方に膨らむ突起を持つものである。

２　大甕（第45～48図　268～285）

大甕は，口縁部の形態によりⅠ～Ⅴ類に分類される。

Ⅰ類（第45図　268）

長めの口縁部で，内側の張り出しが強いものである。

268は，大きく開いたものであり，口唇部に厚みをもつ。内側の張り出しが強く，その上下に摘み出しにより凹んでいる。上面は大きく凹み，口唇部へ丸く仕上げている。胴部形態は不明である。

Ⅱ類（第45図　269）

頸部がわずかに締まりくの字形に外反する口縁部で，内側に張り出しを持つものである。頸部付近に口縁部より大きな突帯を施す。

269は，口縁部付け根付近が厚く，先細りしながらわずかに反るもので，二重口縁の口縁部とほぼ同じ形状を呈しており口唇部に面を持つ。胴部突帯は薄く長めであり，斜め上方へ向かって直線的に伸びている。先端は面取りがされ，断面方形である。胴部はあまり張りを持たず，内外面とも丁寧なナデ調整を施している。

Ⅲ類（第45図　270～272）

肥厚したくの字状口縁を呈し，口縁部直下に三角突帯を施すものである。

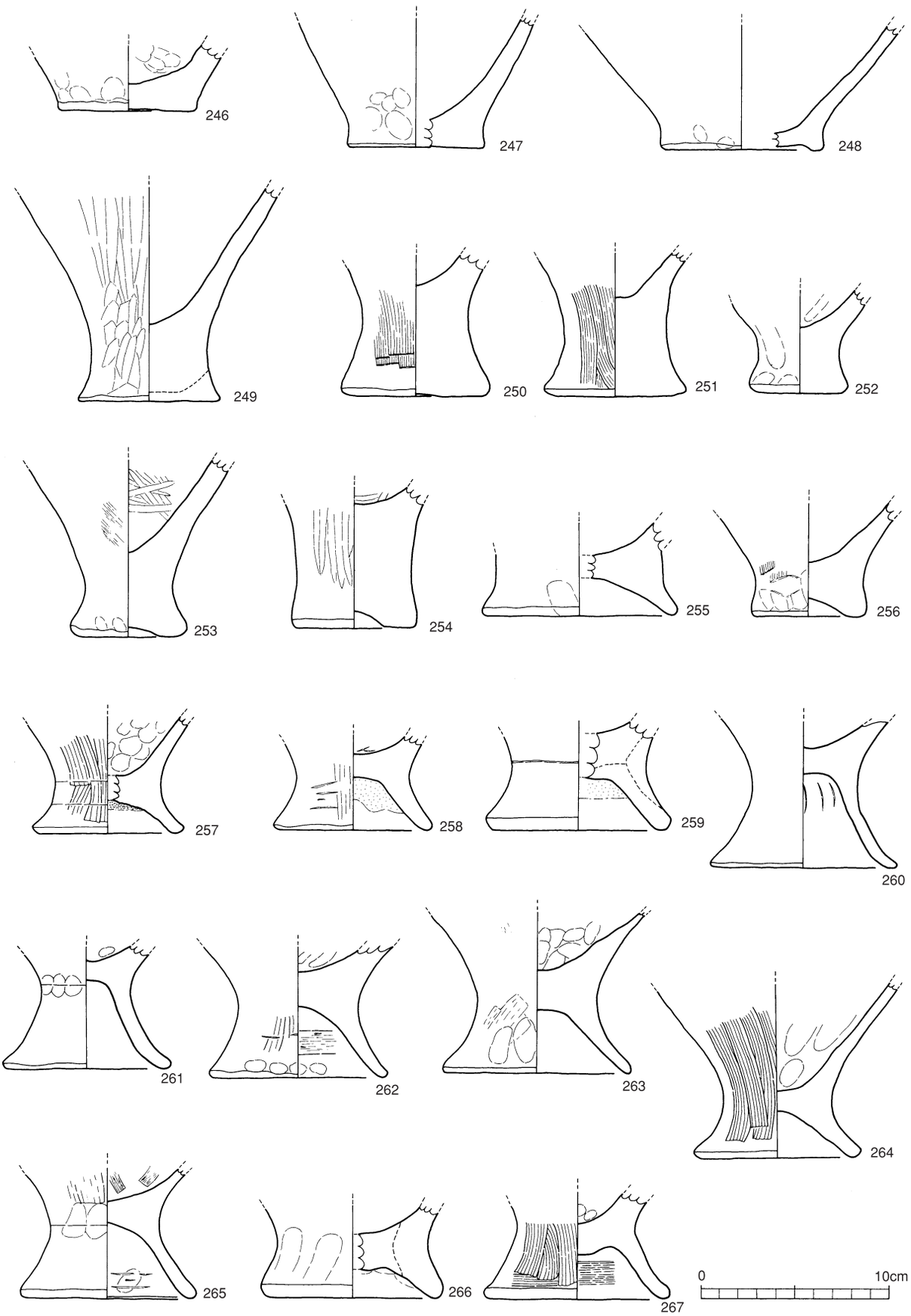
270は，口縁部上面が凹み，口唇部上端が尖りながら丸く仕上げたものである。内面に明瞭な稜を持つが，張り出しは見られない。小さめの三角突帯と口縁部の間に，横ナデ調整による凹みが残る。全体に丁寧な根で調整を施すが，胴部内面の一部が剥落している。

271，272は，口縁部断面が方形であり，焼成が不完全で，全体的に赤みを帯びている。271と272は同一個体の可能性がある。

Ⅳ類（第45,46図　273，274）

直立気味のくの字状口縁であり，胴部上位に三角突帯を施し，内面に稜を持たないものである。

273は，頸部でわずかに締まり，薄手の口縁がわずかに外反するものである。口唇部は面取りがされ断面方形である。大きめの三角突帯を施し，内外面はハケメ調整である。



第44図　弥生時代の土器10（甕　底部）

274は，273より屈曲が強いくの字状口縁であり，先細りで口唇部は尖り気味に丸く仕上げている。三角突帯は小さめであり，やや歪んでいる。

Ⅴ類（第46図　275～277）

頸部で強く締まり外反するくの字状口縁であり，突帯を施すかどうか不明のものである。

275は，強く締まり大きく外反するものであり，内側に弱めの稜が残る。頸部から口唇部へ向けて厚みを増しながら緩やかに反る。口唇部に広めの面を有し，中央が凹んでいる。

276は，膨らみを持つ胴部が強く締まり，大きく外反する口縁部を持つもので，内側に強い稜があるが張り出しはない。口縁部は厚みがあり，やや短めに反る。口唇部は丸く仕上げ，下端は尖り気味である。内外面ともハケメ調整を施した後，丁寧なナデ調整である。

277は張りのある胴部が強く締まり弱く外反するもので，口縁部上位が欠損している。

大甕（胴部）（第47～48図　278～285）

Ⅰ類（第47図　278，279）

278，279は，口縁部下位に突帯を施すものである。278は，長めの断面方形の突帯がやや上向きに張り出している。279は，口縁部直下に短めの断面三角形の突帯を貼り付けたもので，裏面に工具ナデ痕が見られる。

Ⅱ類（第47図　280）

280は，口縁部下位に突帯を二条施したもので，大きめの断面方形を呈する突帯直下に小さめの三角突帯を貼り付けたものである。胴部は直線的に開き，ハケメ調整である。

Ⅲ類（第47.48図　281～283）

281～283は，張りのある胴部中位に断面がコの字状の突帯を施したもので，中央が凹んでいる。281は，長めの突帯断面が台形に近いものであり，282，283は方形である。

Ⅳ類（第48図　284）

284は，膨らみを持つ胴部中央にやや上方向きに尖った三角突帯を貼り付けたものである。上下に，指押さえによる指圧痕が多数残り，外面に丁寧なハケメ調整を施している。

３　壺（第49～55図　268～286）

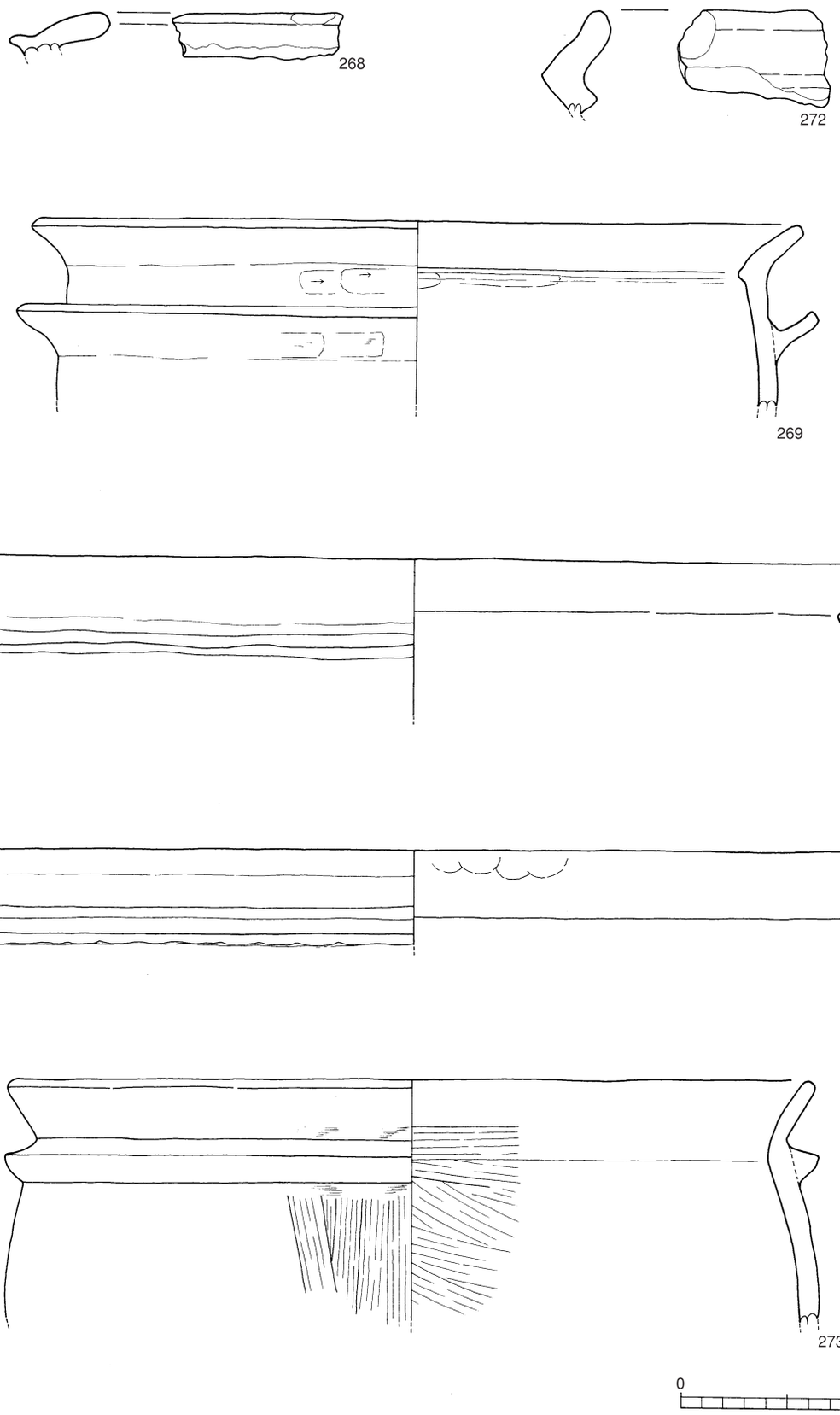
壺は，口縁部，底部合わせて81点を図化した。口縁部の形態により，Ⅰ～ⅩⅣ類に分類した。なお，Ⅸ類については本遺跡１点のみで，19号竪穴住居跡から出土したものである。遺物の形態や特徴についての説明は，「第１節　検出遺構19号竪穴住居跡」（第13図）にて行った。

Ⅰ類（第49図　286）

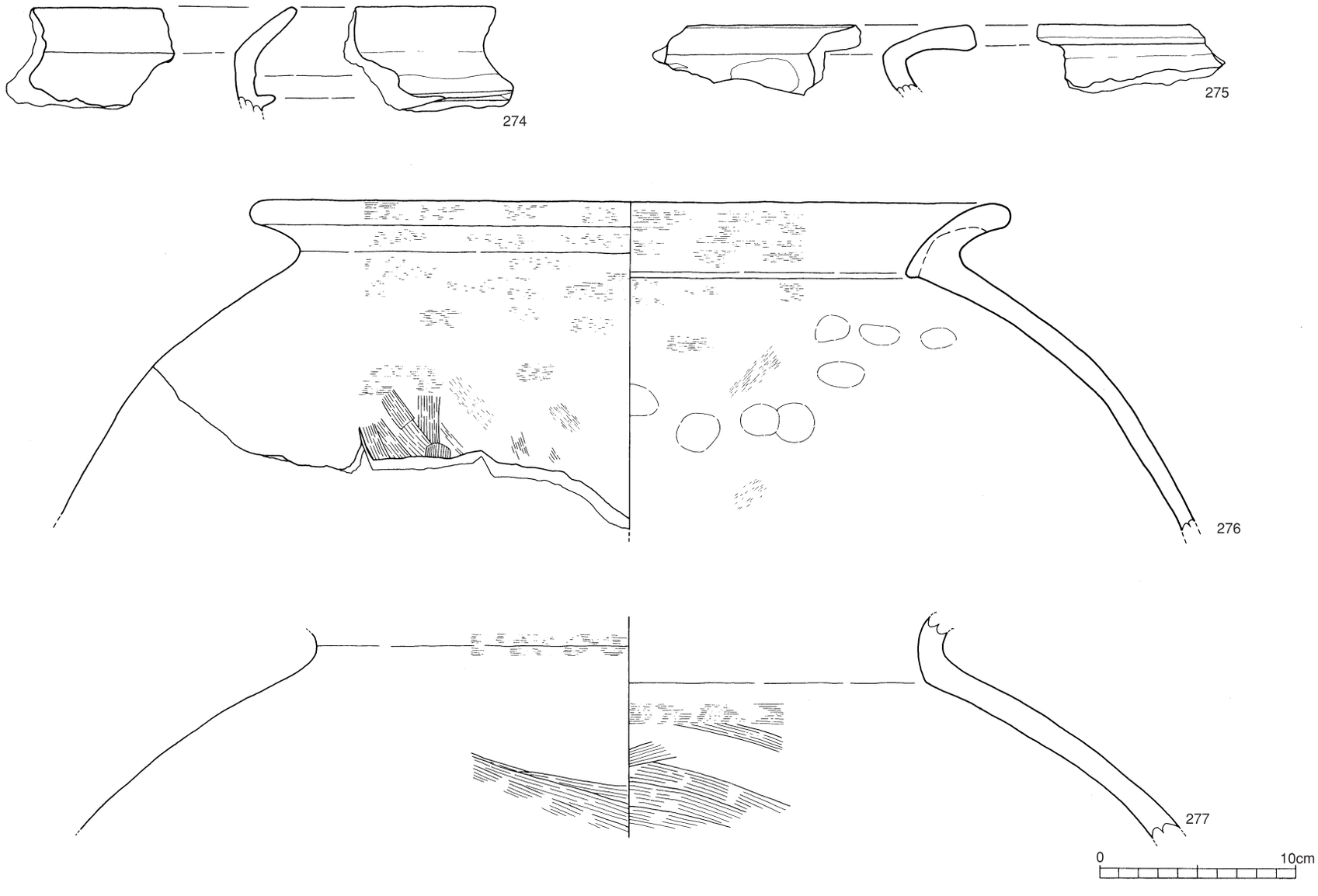
286は，締まった頸部から口縁部がラッパ状に大きく外反する口縁部であり，外面に粘土を貼り付け肥厚させたものである。粘土貼り付け部分には指ナデが施され，指圧痕が残る。口唇部は面取りがされ，中央が凹んでいる。凹みの上下端に浅い刻目が施される。

Ⅱ類（第49図　287）

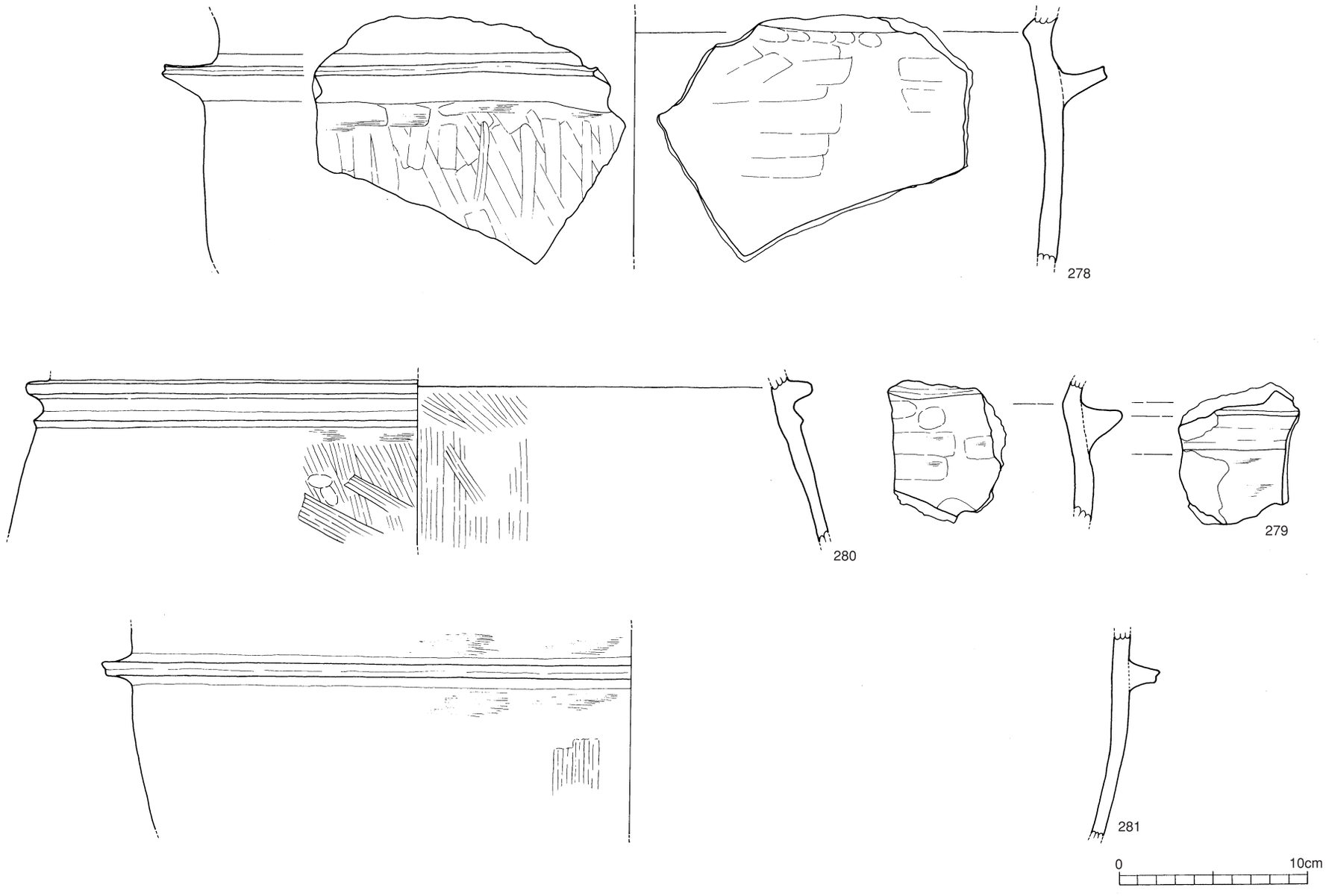
287は，大きく外反した口縁部上面に粘土を貼り付け肥厚させたもので，接合部のナデ消しが弱く口縁部との間に段を有し，接合部が口唇部に筋状の凹みと表われている。



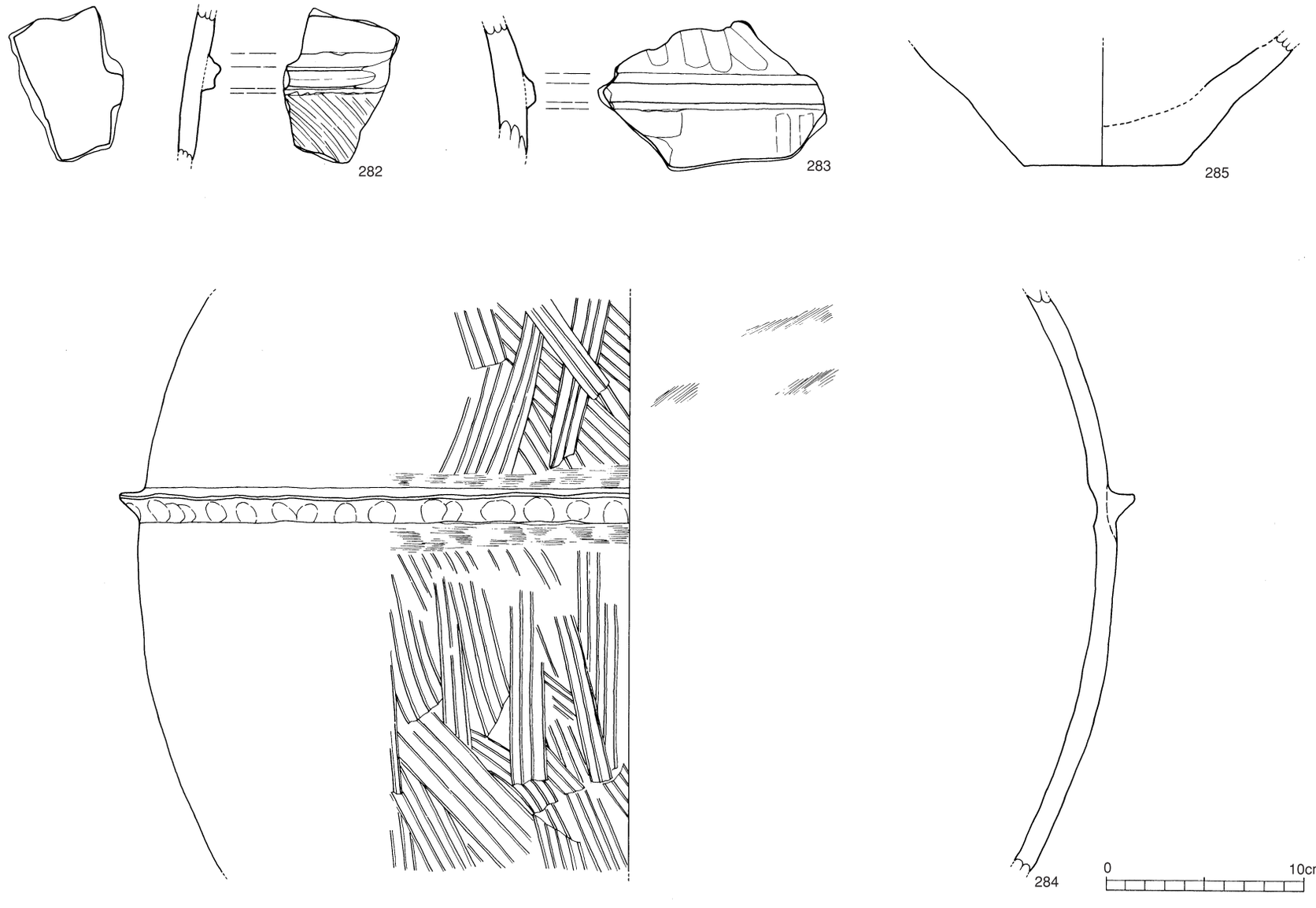
第45図　弥生時代の土器11（大甕Ⅰ～Ⅳ類）



第 46 図　弥生時代の土器 12（大甕Ⅳ，Ⅴ類）



第47図　弥生時代の土器13（胴部Ⅰ,Ⅱ類）



第48図　弥生時代の土器14（胴部Ⅲ,Ⅳ類）

Ⅲ類（第49図　288，289）

頸部から直線的に斜め上方に開き，口縁部の内側が張り出す鋤先口縁である。

288は，器壁が薄くハケメ調整の後ナデ調整を施し，丁寧に仕上げられた大きく開き外反する鋤先口縁の壺である。内側の張り出し部と口唇部に浅い刻目を施している。

289は，膨らみのある算盤型状の胴部が強く締まり，直線的に開き外反する鋤先口縁である。口縁部内側にわずかな張り出しを持ち，上面は平坦面を持つ。張り出し部と口唇に刻目を施し，頸部に刻目突帯を１条巡らしている。頸部内面と胴部外面上位に縦方向の暗文を施し，胴部中央の最大径にわずかな稜を持つ。口縁部内外面に丹塗りの跡が残るが，二次焼成を受け器面が摩滅し一部剥落しているので，全体に塗られていたかは不明である。

Ⅳ類（第49図　290，291）

ラッパ状に外反する口縁部の端部外面に突帯を施す二叉状口縁を呈するものである。

290は，器壁が薄く細長い口縁が上方に開き，口唇部近くで強く反るものである。口唇部下に貼り付けた突帯との間に深い凹みを作る。突帯は，貼り付け部分が厚く先細りで，先端に面を持つ。外面は縦方向のハケメ調整を施し，外面と内面上部に丹塗りされている。

291は，口縁がわずかに開き，口縁部直下に断面三角形の突帯を施す二叉状口縁の壺である。

Ⅴ類（第49図　292，293）

ラッパ状に大きく開く口縁部に，縦方向の丹塗りの線が等間隔で施された壺である。

292は，口縁部中位から大きく開く口縁部であり，口唇部に丸みのある面を持つ。内面に幅4～6㎜の朱線が，7～9㎜間隔で縦方向に施され，外面にも6～8㎜幅の朱線が，８㎜～１㎝間隔で施される。摩滅により消失部分がある。

293は，内面は摩滅し，外面に幅３～４㎜の朱線が５～７㎜間隔で縦方向に施されている。

Ⅵ類（第49図　294～296）

口唇部に広めの平坦面を作り，横位の沈線を数条施した凹線文土器の口縁部である。

294は，直立した頸部が口縁部近くで外反し，口唇部を上方へ拡張している。拡張部に横位の沈線が２条施されている。

295は，器壁が1.5㎝と厚く，わずかに反りながら端部で強く内湾するもので，口唇部下に粘土貼り付けによる広い拡張部を持つ。口唇部下の張り出しは丸みを持ち，上端は尖っている。拡張部に横位の沈線が３条巡っている。

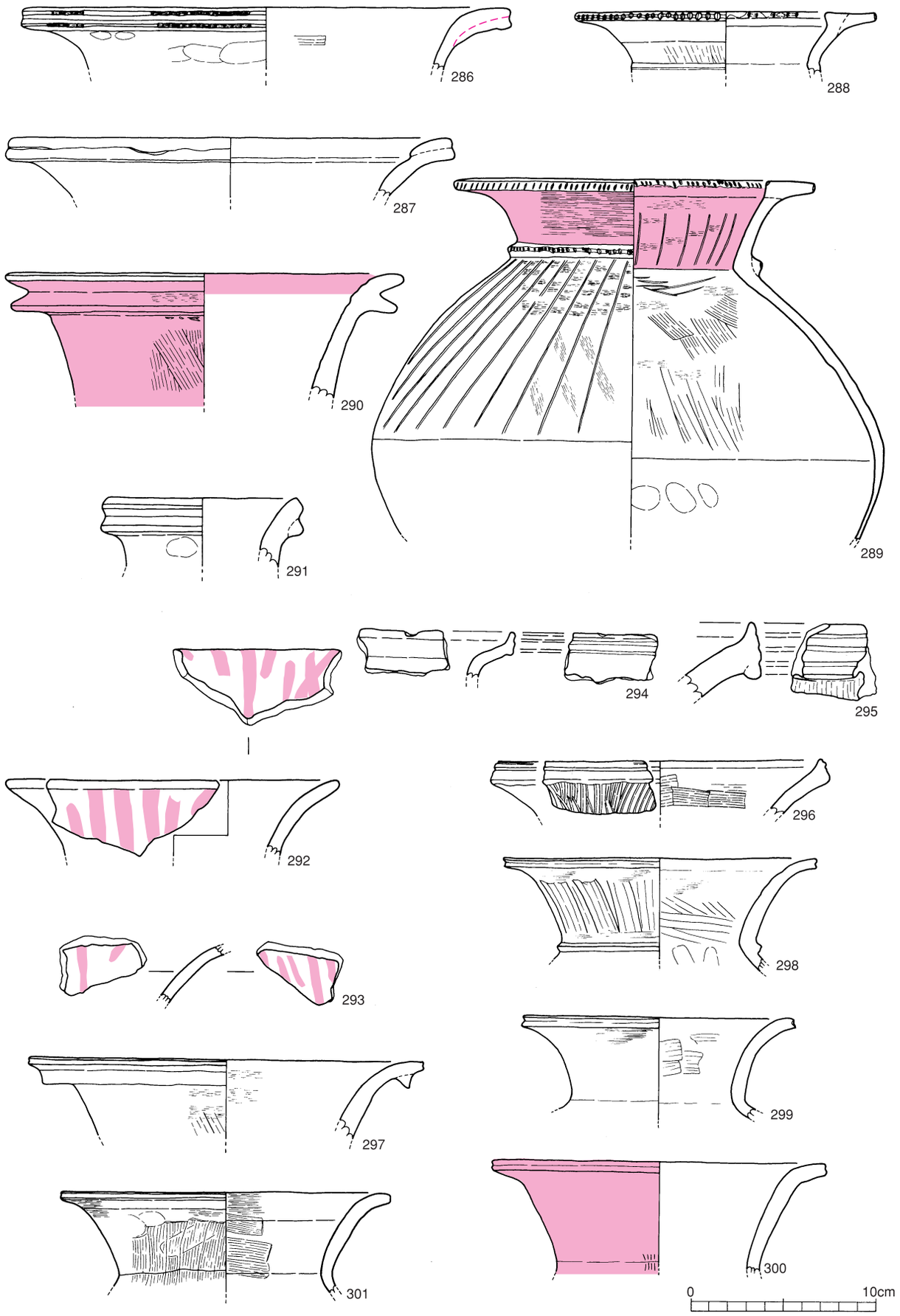
Ⅶａ類（第49図　297～301）

締まった頸部からやや立ち上がり気味に開き，上位で強く外反する広口壺の口縁部である。口唇部に面を持ち，中央がやや浅く凹む。

297は，頸部付近の器壁が厚く先細りであり，口縁部下に三角突帯を施している。

298は，胴部との境に小さめの三角突帯を施し，ラッパ状に開くものである。口唇部の凹みは浅く，全体的に薄手である。外面に縦方向のハケメ調整を施す。

299～301は，胴部との境に突帯を施さないものである。299は，外面に丁寧なナデ調整を施している。300は，外面に丹塗りが施されている。内面は摩耗が激しく塗られているか不明である。301は，口縁部断面が方形を呈し，口唇部に凹みが見られない。



第49図　弥生時代の土器15（壺Ⅰ～Ⅶa類）

Ⅶb類（第50図　302～309）

張りのある胴部が強く締まり，大きく外反しながら朝顔状に開く広口壺の口縁部である。

302～305は，口縁部内側に明瞭な稜を持ち，口縁部中程からより屈曲が強まり大きく外反するものである。302は，口唇部近くの上面にわずかな凹みを持つ。303は，器壁が厚く，口唇部の面は上下を丸く仕上げている。304は，強く丸みを持って外反し，内外面横ナデ調整である。305は，口縁部中位からほぼ水平に伸びるもので，胴部内面が剥離している。

306，307は，やや屈曲が弱く外反するもので，内側に稜を持たないものである。306は，口唇部の上下を凹ませ面を広く取ったもので，中央が凹んでいる。307は，口縁部中位から厚みを増しながら口唇部に至り，口縁部が断面方形を呈するものである。

308は，大きく外反する口縁部で，口唇部に浅い刻目を密に施したものである。

309は，口縁部上位が欠損しているが，膨らみのある胴部が締まり外反するもので，内側には稜を持つものである。胴部中位の最大径に三角突帯が巡り，先端に刻目を施している。胴部は縦方向のハケメ調整を，頸部，突帯周辺には横ナデ調整を施している。

Ⅷ類（第50図　310）

310は，頸部で強く締まり，大きく外反した後強く内湾し直立気味に伸びる。頸部のみの出土のため全体器形を不明であるが，復合口縁壺の可能性がある。締まりの強い頸部に，断面が低い台形状の突帯が巡り，先端に刻目が施されている。

Ⅸ類　（第14図　19）

「第１節　検出遺構　19号竪穴住居跡」参照

Ⅹa類（第51図　311～318）

胴部は膨らみを持ち，口縁部の屈曲が弱く緩やかに丸みを持って外反するものである。

311は，ほぼ球形に近い胴部を呈し，口縁部が緩やかに外反するもので，胴部の中央付近に刻目三角突帯を施す。胴部上位に縦方向の短い波状沈線が，約１㎝間隔で巡っている。

312～314は，あまり張りのない胴部から緩やかに外反し，口唇部に面を持つものである。312は，断面Ｓ字状を呈し，胴部内面に多数の指圧痕と，粘土接合痕のナデ消しが不十分なため，筋状の凹みが残る。313は，口縁部端の屈曲が強く，口唇部を丸く仕上げている。314は，屈曲が弱く，ラッパ状に開くものである。内外面ともにハケメ調整を施している。

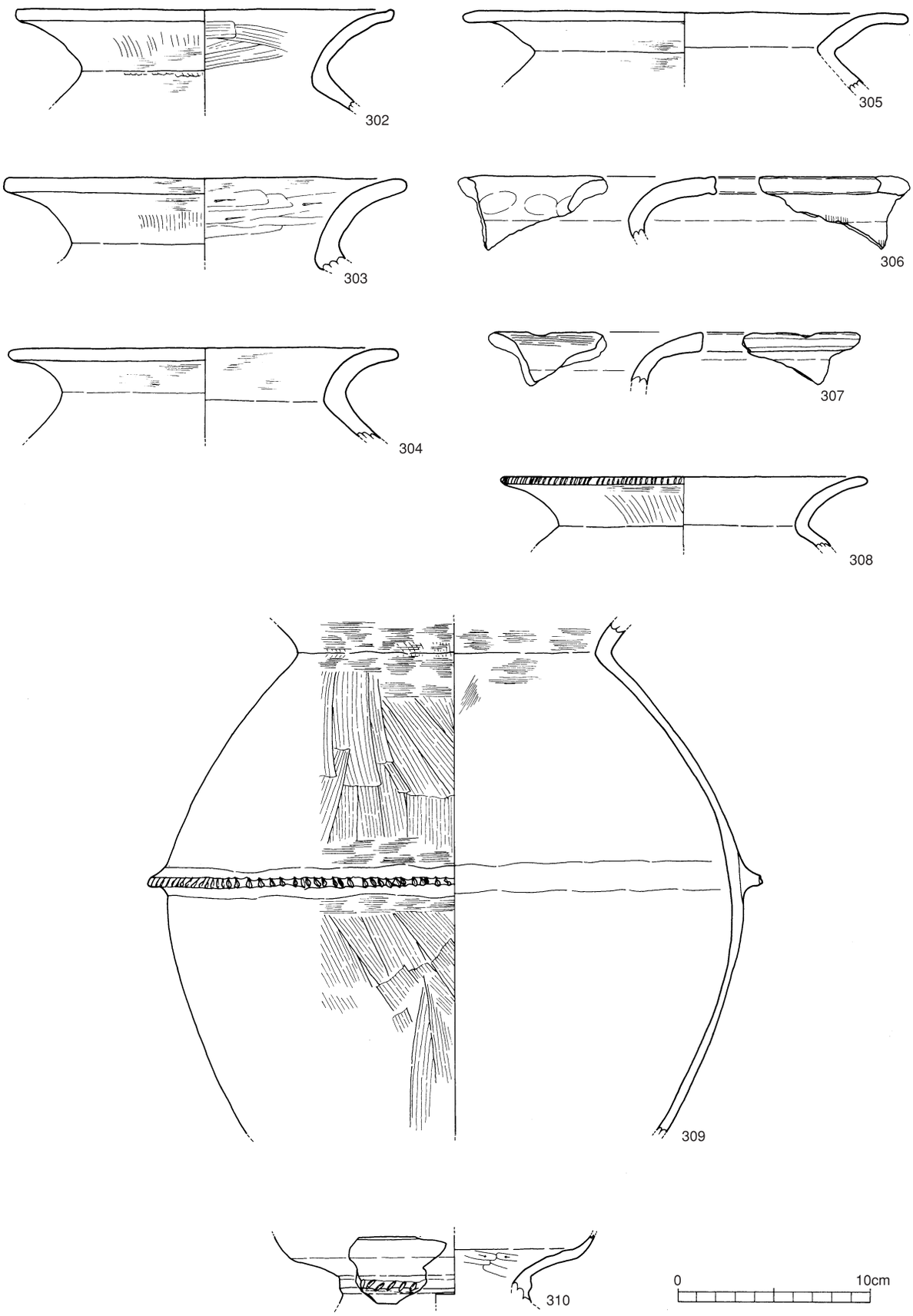
315～317は，体部の膨らみに対して口縁部の長さが短く，緩やかに外反するものである。315は，口唇部に面を持ち，胴部内面に横位の指ナデ調整痕が明瞭に残る。316は，ナデ肩状の胴部から短い口縁がわずかに外反するもので，口唇部は丸みを持つ。317は，口唇部中央に凹みを持ち，上下を丸く仕上げている。外面は規則的な縦方向のハケメ調整である。

318は，口縁部上位が欠損しているが，最大径を胴部下位に持つ胴部から緩やかに外反するものである。胴部外面に丁寧なハケメ調整を施し，中央付近に刻目突帯を巡らす。

Ⅹb類（第51図　319，320）

張りのある胴部からほぼ直立する口縁部を持つものである。

319は，上方に向かってやや反りながら伸びるもので，頸部の締まりは余りなく，内外面とも丁寧な横ナデ調整である。口唇部に面取りを行っている。



第50図　弥生時代の土器16（壺Ⅶb～Ⅸ類）

320は，膨らみを持つ丸い胴部から直立に屈曲する口縁部を持つもので，胴部に比べ極端に短い口縁部である。内面は丁寧なミガキ調整，外面では横ナデ調整である。

Ⅺ類（第52図　321，322）

壺型土器の中で時期不明のものをⅪ類とした。

321は，口縁部が直立気味にわずかに反るもので，先太りで口唇部は肥厚し口唇部には広い平坦面を作り出す。内面はミガキ調整を施し，外面は横ナデ調整後の縦方向へのミガキ調整痕が部分的に残る。

322は，頸部から肩部にかけてのものと思われるが，部分的な出土のため全体器形は不明である。外面は丁寧なナデ調整が施され，下位に２条の沈線が巡る。内面は摩滅が激しい。

Ⅻ類（第52図　323～333）

頸部が筒状に細長く，胴部は大きく張り出した算盤玉状であり，重孤文を施した長頸壺である。

323，324は，長頸壺の口縁部である。直線的に伸びた頸部から口縁部が緩やかに外反するものである。口唇部が尖り気味の323と，平坦に仕上げた324がある。323は，内外面とも丁寧なハケメ調整を施している。324は，口唇部が浅く凹んでいる。

325，326は，長頸壺の頸部である。325は，頸部直下に４条以上の突帯を施し，段を形成している。器面が摩滅し，一部剥落している。326は，頸部が締まり直立気味に立ち上がっている。内側に明瞭な稜を持ち，内外面とも丁寧なハケメ調整で仕上げている。頸部直下に篦描きによる平行沈線文が６条以上施されている。

327～333は，胴部に篦描きや櫛描きによる平行沈線文や重孤文を施したものである。327は，胴部最大径に横位の沈線を施し，さらに上向きの重孤文を重ねたものである。328は，胴部中位が屈曲し稜を持つものであり，稜の上位に上向きの篦描重孤文が施されている。重孤文は，８条以上あり，幅の狭い線である。329は，肩部であり，17条以上の篦描平行沈線文が巡る。330は，５条の上向き重孤文が施された肩部である。331は，胴部中位に稜を持ち，直上に５条の平行沈線文，その上に縦位の沈線を等間隔で施している。上向きの重孤文は，刻目を持つ平行沈線文と一部重なるように描かれている。外面は丁寧なミガキ調整である。332は，胴部中位に稜を持たないもので，２本の篦描き平行沈線文に細かい縦位の刻目を施している。333は，胴部中位に稜を持たず，やや器面が摩滅しているが，櫛描平行文と櫛描波状文が施されている。

ⅩⅢ類（第53図　334～337）

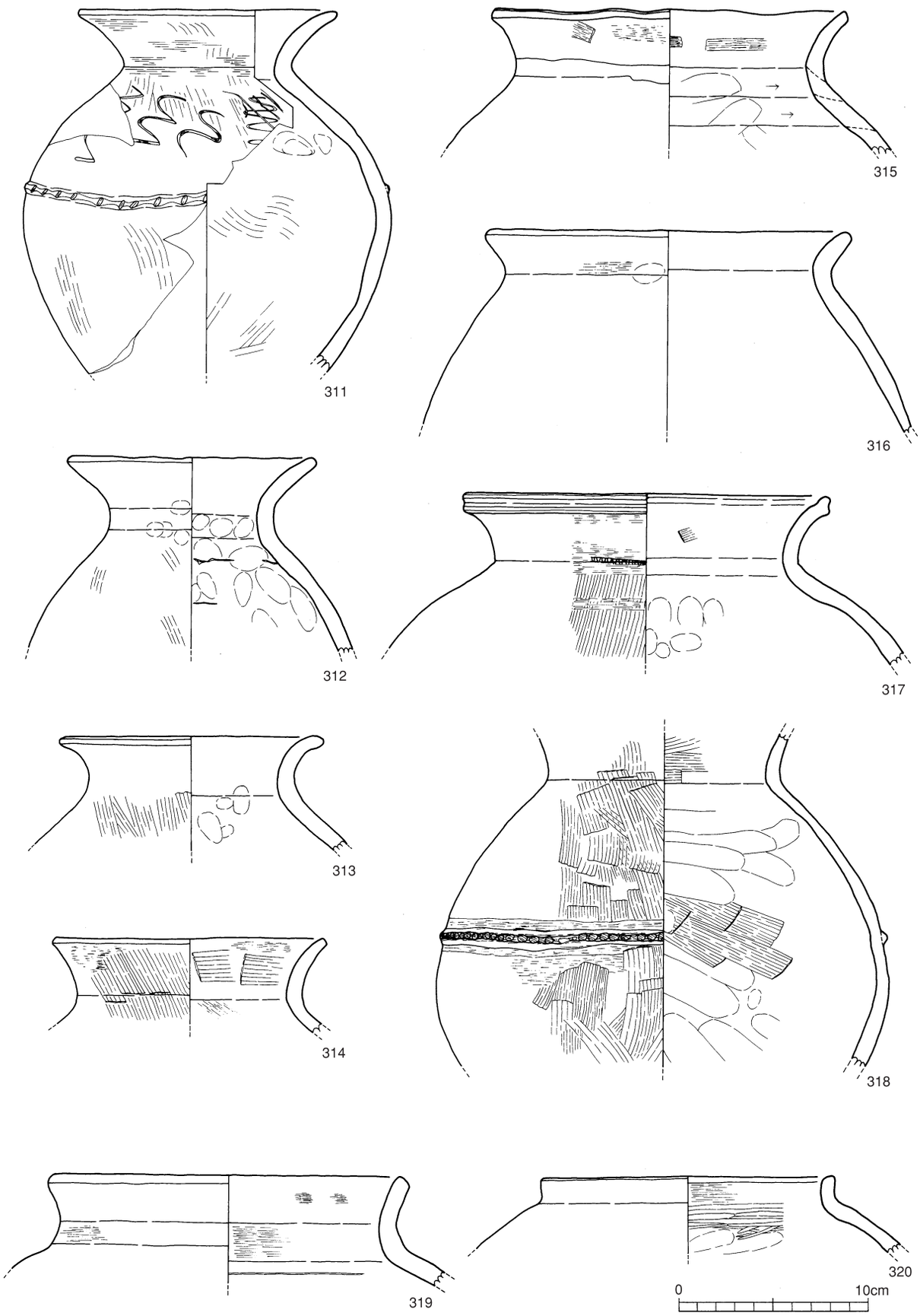
全体器形は不明であるが，突帯や文様に特徴のあるものである。

334は，頸部下位に三角突帯を４条施したもので，屈曲が弱く大型のものである。貼付突帯の上にやや蛇行した横位の朱線が描かれている。

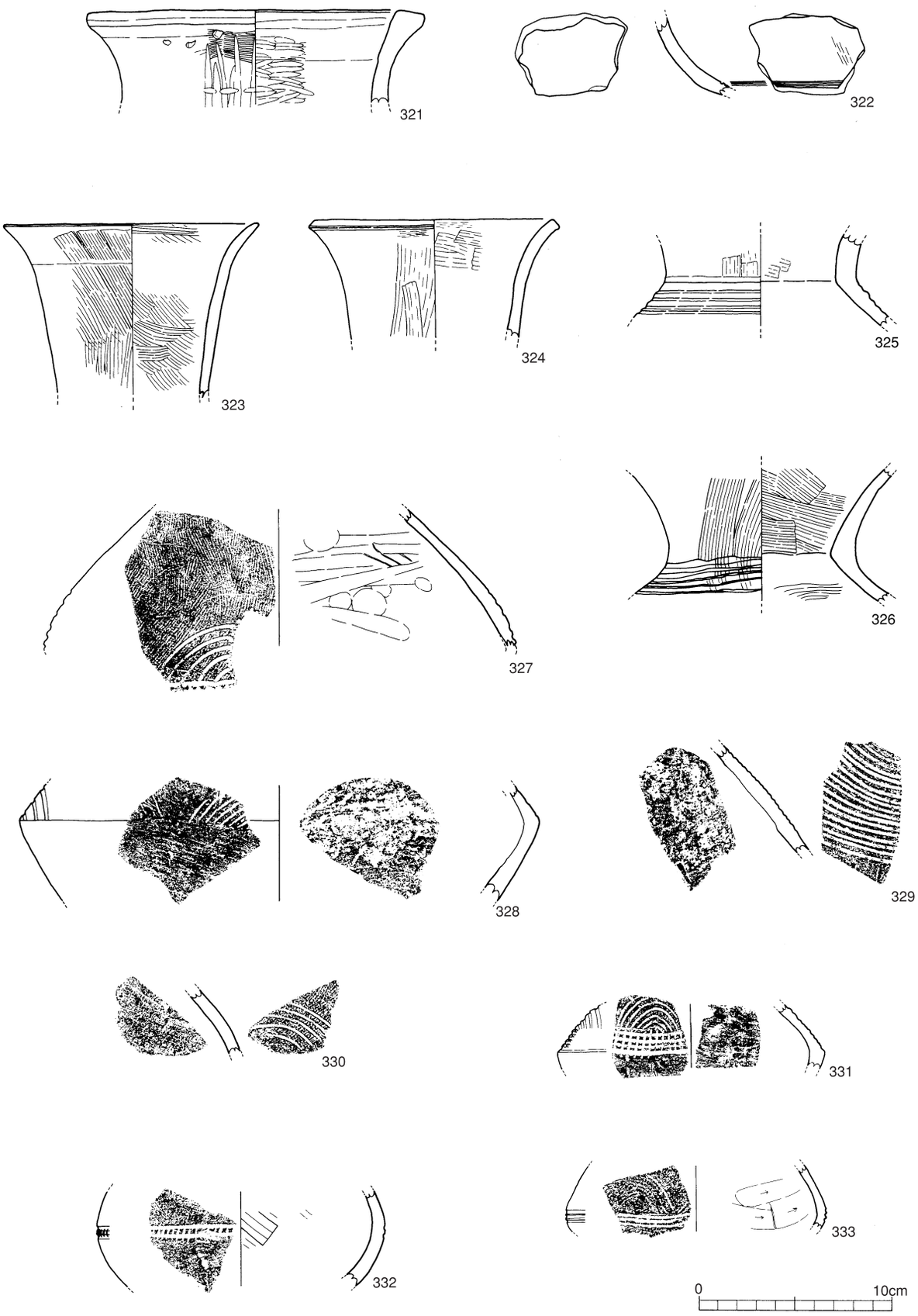
335は，膨らみのある胴部から強く屈曲し口縁部が大きく外反するもので，焼成が良く硬質である。胴部との境目に横位の朱線が施され，そこから２～３㎝間隔で，朱線が下位方向へ直線的に伸びている。朱線の幅は横位が６～７㎜，縦位が８㎜～１㎝である。

336は，丸みを持ちほぼ球形をした胴部であり，最大径部下に方形の工具痕を帯状に巡らせ，文様として施す。また，施文の際に付いたと思われる指圧痕が帯の直上に残る。

337は，胴部上位に張りを持ち，やや胴長を呈する。胴部上位に断面台形の平たい突帯を巡し，



第51図　弥生時代の土器17（壺Ｘ類）



第52図　弥生時代の土器18（壺Ⅺ，Ⅻ類）

斜め方向への刻目を２㎝間隔で施している。突帯中央に横位の平行沈線文が途中まで残る。

ⅩⅣ類（第53図　338～343）

器面の片面または両面全面に丹塗りを施したものである。小破片が多く，全体形態は不明である。

338は，大きく外反する口縁部である。口唇部に面取りがされ断面方形を呈している。全面に丹塗りが施され，ミガキ調整で仕上げている。

339～342は，突帯を１条施した胴部片である。いずれも外面にのみ丹塗りがされ，突帯の上下は横ナデ調整，胴部はハケメまたはナデ調整である。339～341は，三角突帯が貼り付けられ，342は突帯中央部が凹み断面M字状を呈した突帯である。

343は，壺の底部であり，広めの平面を有する平底の底面から直線的に広がる胴部であり，外面に丹塗りが施されている。外面はミガキ調整，内面はナデ調整であり，丁寧に仕上げられている。

小型丸底壺（第53図　344～345）

344は，胴部中央の最大径部にわずかな稜を持ち，膨らみを持つ胴部から頸部で弱くすぼまり，長い口縁部が開きながら直線状に立ち上がる小型丸底壺である。頸部内面にわずかな稜を持ち，全体的に器壁が薄く，先細りの口唇部は丸く仕上げられている。内外面にハケメ調整を施すが，口縁部内面に斜め方向に伸びるハケメ調整痕が明瞭に残る。

345は，胴部下位に最大径があり，丸みを持った胴部である。胴部中央部の器壁が約１㎝と厚く，外面はミガキ調整が施され，黒斑が一部残る。

壺（底部）（第54,55図　346～367）

壺の底部は，平底，丸底など形態の違いによりⅠ～Ⅴ類に分類される。

Ⅰ類（第54図　346～350）

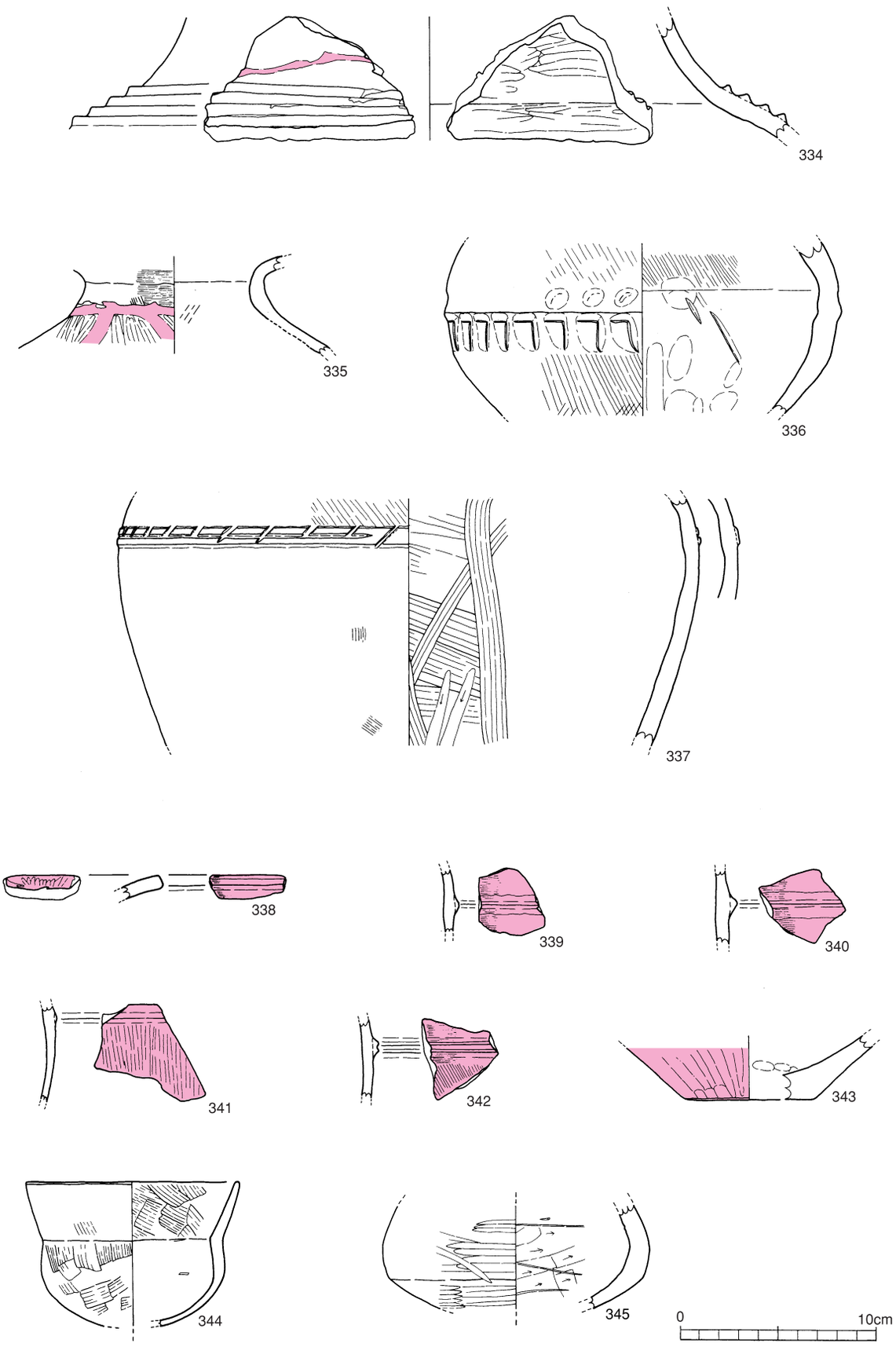
底径が７～10㎝と広い円盤状の平坦面を持つ平底であり，接地面からわずかに直立した後，大きく開き，直線状に伸びて胴部へと続くものである。

346～350は，幅広の平底で，円盤状の底面は厚みがあり，接地面から短く直立気味に立ち上がり開く。346は，外面に縦方向のミガキ調整を施し，内面は横ナデ調整である。347は，底面の高台がやや薄めであり，大きく開いた胴部と同程度である。接地面からわずかに直立し，すぐに大きく開く胴部を持つものである。外面のミガキ調整は，底部から胴部まで一体となって縦方向へ続く。348は，底径10.4㎝と広く，大型の壺であると思われる。349は，胴部の開きが弱く，やや胴長気味に緩やかに開いている。底部と胴部の境目にあまり屈曲は見られない。350は，内傾気味に短く立ち上がり，境目で強く屈曲し開くもので，器面が摩耗している。

Ⅱ類（第54図　351～353）

円盤状の底部を持つもので，Ⅰ類よりも底径が小さいものである。

351～353は，底径５～６㎝とやや小さい高台状の底部である。351は，外面にミガキ調整を施し，丁寧に仕上げている。352は，底部の厚さが2.5㎝とやや厚く，境目で締まり緩やかに外反している。底部外面に指圧痕が横並びに残る。353は，底面が張り出し，胴部との境目が凹んでいる。底部外面に指ナデ調整痕が明瞭に巡っている。



第53図　弥生時代の土器19（壺Ⅻ，ⅩⅣ類，小型丸底壺）

Ⅲ類（第54,55図　354～358）

底面の張り出しが見られず，広い平坦面を持つ平底で直接胴部が開くものである。

354，357，358は，底径７～９㎝の平底の底部である。354は，平底の底部からやや直線的に立ち上がり，胴部上位に最大径を持ち膨らみを持って内湾する壺である。口縁部は欠損しており形状は不明である。胴部中央に深めの刻目を施した三角突帯を１条施す。内外面ともハケメ調整を施し，底部付近は赤色化し，中央に黒斑が見られる。358は，内外面ともナデ調整である。

355，356は，底径11～12㎝の平底の底部である。355は，底面の平坦面がわずかに膨らみを持ち，内面は摩滅により器面剥離が激しい。356は，接地面から直線的に立ち上がり，境目に稜を持ち，外面に縦方向のハケメ調整を施す。

Ⅳ類（第55図　359～363）

底面から緩やかに立ち上がるもので，Ⅲ類よりも底径が小さいものである。

359～361は，底径３～４㎝の平底である。359は，底面に厚みがあり，胴部も厚みを持つ。360は，直線的に立ち上がり，底面との境目に稜を持つ。外面に赤色顔料が施されている。361は，底面中央がやや膨らみを持ち，不安定な底面である。

362，363は，底径が５～７㎝の平底である。362は，底面端に稜を持たず緩やかに立ち上がる。360，361，363は，胴部があまり開かず立ち上がるものである。

Ⅴ類（第55図　364～367）

底面に明瞭な平坦面を持たない，丸底気味の底部である。

364，365は，底面中央がわずかに平面気味の丸底である。内外面ともハケメ調整を施している。364は底部と胴部の器壁がほぼ同じであり，365は底面が厚みがある。

366，367は，尖底の丸底であり，367は，尖った底部から直線的に立ち上がる。

４　鉢（第56～57図　368～403）

鉢は，口縁部形態によりⅠ～Ⅴ類に分類される。なお，甕，壺類の小型のものも鉢として扱った。

Ⅰ類（第56図　368～373）

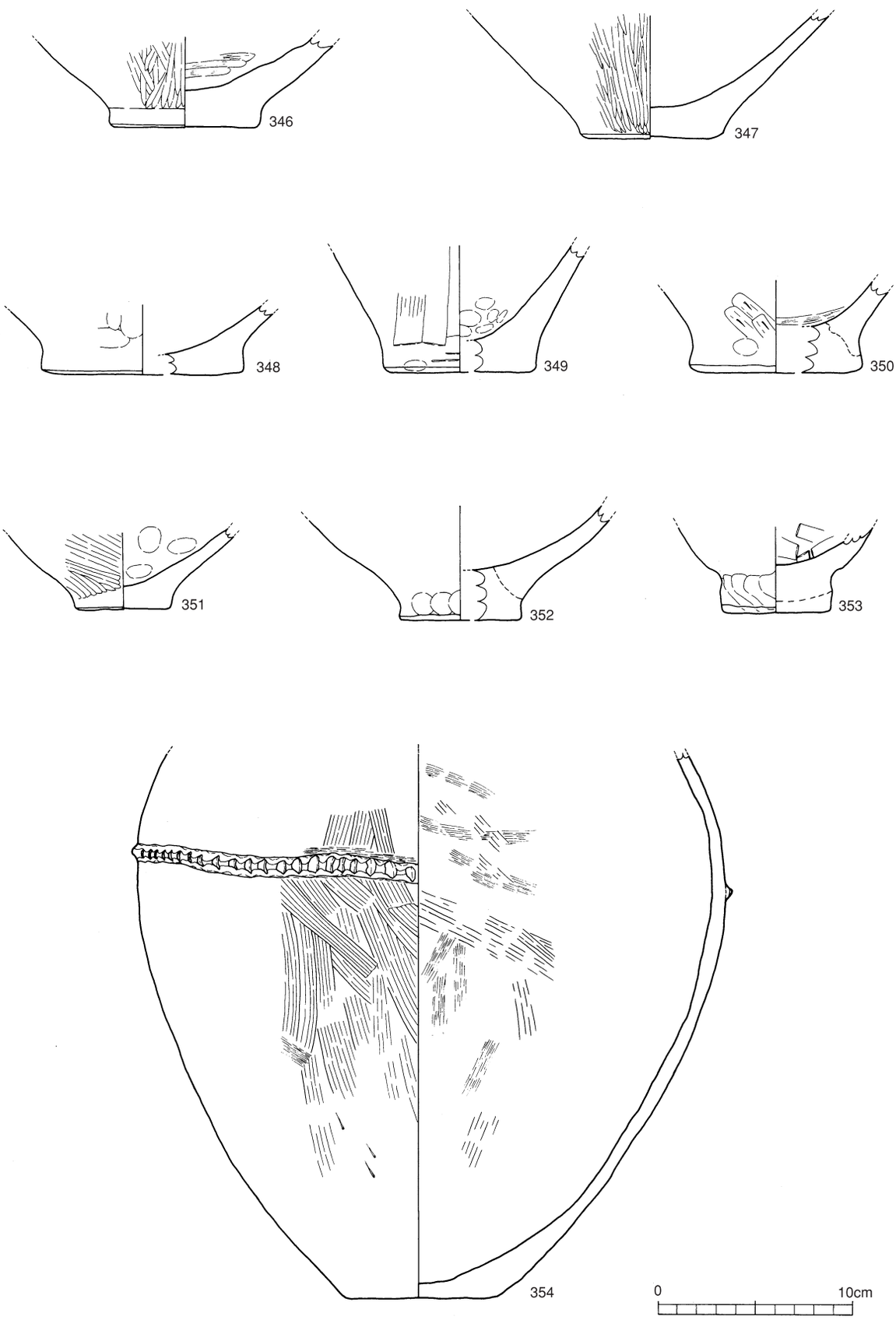
口縁部が強く外反し，口縁部内側に明瞭な稜を持つものである。

368，369は，膨らみを持つ胴部が頸部で締まり，強く外反するもので，口縁部は丸く仕上げている。368は，頸部の締まりが弱く，口縁部が逆Ｌ字状に反り，口縁部内側がわずかに張り出すものである。口縁部断面は楕円形を呈し厚みがあり，中央に直径約３㎜の穿孔が認められる。369は，頸部の締まりが強く大きく外反するもので，内側の張り出しが鋭く尖っている。口縁部上面から斜め方向に，直径約５㎜の穿孔が空けられている。

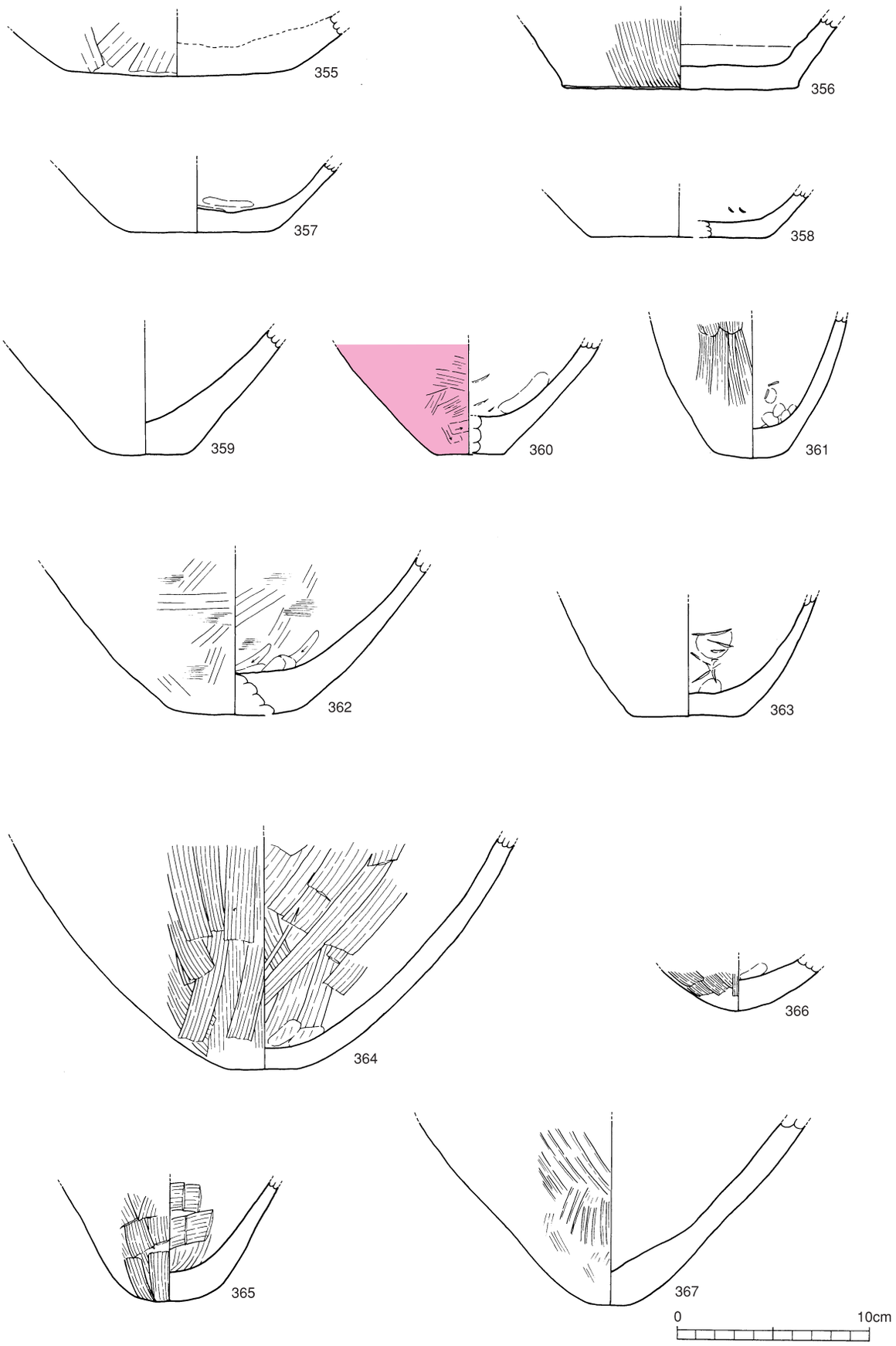
370，371は，口縁部断面が三角形を呈する短めのものである。370は摩耗しているが，強く外反する口縁部を持ち，内側が張り出し，上面はわずかに反っている。371は，内側が弱く張り出し，口縁部上面が下がり気味に浅く凹むものである。

372は，逆Ｌ字状に反る口縁で，内側に弱い稜を持ち，口唇部は凹みを持つ断面方形を呈す。

373は，粘土を口縁部外面に貼り付け，上面に幅広の平坦面を作り出した肥厚なものである。内



第54図　弥生時代の土器20（壺底部Ⅰ～Ⅲ類）



第55図　弥生時代の土器21（壺底部Ⅲ～Ⅴ類）

側の張り出しは強く尖っている。粘土貼り付けの後を丁寧な横ナデ調整で消している。

Ⅱ類（第56図　374～380）

口縁部が緩やかに外反するくの字状の口縁部で，内側に稜を持つものである。

374，375は，頸部ですぼまらない開き気味の胴部から口縁部が外反するもので，上面はわずかに反っている。374は，ハケメ調整が筋状に残る。375は，口縁部の反りがやや強く，口唇部は面取りが施されている。

376～380は，内側に稜を持つくの字口縁を呈し，口縁部が直線状に伸びるものである。

376は，頸部外面に横ナデ調整による凹みが残る。全体的にハケメ調整を施す。377は，口唇部に明瞭な面を持つ。378は，口縁部上位が欠損しており，口唇部形態は不明である。379，380は，屈曲が弱く開き気味の胴部からわずかに外反する。内面に明瞭なハケメ調整が残る。

Ⅲ類（第56図　381～385）

口縁部が緩やかに外反するくの字状の口縁部で，内側に稜を持たないものである。

381，382は，張りを持たない胴部がわずかに反るもので，明瞭なくびれは持たない。381は，直立した胴部から直口気味に外反するもので，口唇部は面を持つ。382は，斜め上方に開き，口唇部近くでわずかに反るもので，胴部内面は板ナデ調整を施す。

383，384は，やや膨らみを持つ胴部から緩やかに外反し口唇部近くで強く反るものである。383は，器壁が薄く，丁寧なナデ調整を施す。384は，口唇部が先細りし尖っている。

385は，手捏ねの組製品であり，小壺の形態を呈している。内面に無数の指圧痕が残り，ナデ消しが不十分なため粘土接合の痕が段になって残る。

Ⅳ類（第57図　386～391）

口縁部が直線的に伸びるものであり，口唇部がわずかに反り気味なものと直線的なものがある。

386～388は，明瞭な屈曲はないが，口唇部近くがわずかに緩く反るものである。386は，平底の底部からV字状に広がり，胴部上位でわずかに屈曲が見られる。底部は薄手だが，胴部下位が厚く口唇部に向かって先細りする。内面に横位，外面に縦方向のハケメ調整が施される。387は，器壁が厚く，口唇部断面がコの字状を呈する。388は，やや膨らみを持つ胴部で口唇部は先細りし，わずかに反り尖っている。外面は丁寧な横ナデ調整を施す。

389～391は，屈曲を持たない直線的な口縁部である。389は，底部に充実した高台を持ち，直上に短く立ち上がった後，Ｖ字状に開く器形を呈する。器壁が薄く，底面は中央部が膨らみ，不安定である。390，391は，やや内湾する胴部で口唇部を丸く仕上げている。

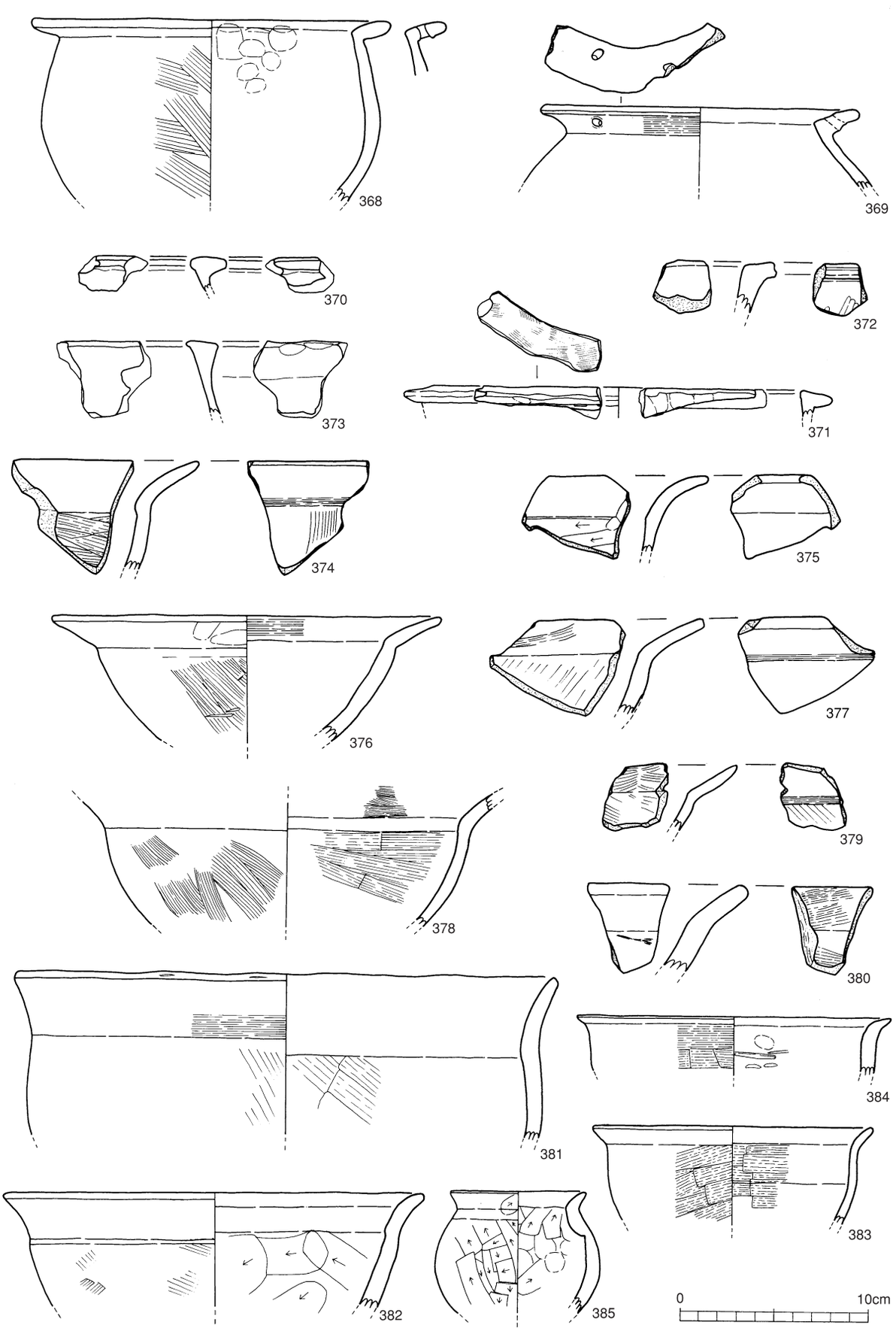
Ⅴ類（第57図　392～395）

膨らみのある胴部が内湾するものでマリ形を呈するものと，胴長のものがある。

392，393は，マリ形を呈し，口縁部は緩やかに内湾する。392は，胴部下位に最大径を持ち内湾する。口唇部は尖り気味に丸く仕上げる。粘土接合痕のナデ消しが不十分であり，内面に筋状の段が残る。393は，内外面とも丁寧なナデ調整である。

394は，あまり胴部が張らず，直口気味の口縁でわずかに内傾する。手捏ね風の作りで内面に無数の指圧痕が残る。外面下位は赤色化し，中央に煤が付着している。

395は，胴部中央に三角突帯を施すもので，直上は凹んでいる。



第56図　弥生時代の土器22（鉢Ⅰ～Ⅲ類）

鉢（底部）（第57図　396～403）

形態の違いや脚の有無などにより，Ⅰ～Ⅳ類に分類される。なお，脚を持つものの中で，脚台の高さや広がり方は異なるが，小型のものは全て鉢の底部として取り上げた。

Ⅰ類（第57図　396）

充実高台気味に肥厚した平底である。底面から直線的に立ち上がる。底部は厚みがあり，上方へ向かって薄くなる。

Ⅱ類（第57図　397）

平底で直接Ｖ字状に開くものである。底面が丸みをもち不安定である。胴部はやや膨らみを持ち，胴部下位の外面に幅広の板ナデ調整痕が縦方向に残る。

Ⅲ類（第57図　398～401）

脚台を持つもので，底部内天井が凹むものである。

398，399は，裾部の広がりが大きく，高い脚台である。398は，底唇部付近の反りが強く，安定した底部である。399は，器壁が薄く，外面をハケメ調整，脚台内を横ナデ調整を施す。

400，401は，小型の脚台である。400は脚台が低く，裾があまり広がらない。胴部下位に強い工具痕が縦方向に残る。401は，薄作りで，丁寧なナデ調整である。

Ⅳ類（第57図　402，403）

脚台を持つもので，底部内天井が平面またはやや突出するものである。

402は，裾が広がる大型のもので，膨らみを持つ胴部との境目で締まり，胴部が内湾しながら立ち上がる台付鉢である。脚台内天井に，指圧痕が残る平坦面を持つ。403は，低い脚台で，先細りの短い脚である。脚台内天井は中央が突出し，調整が粗く凸凹が残る。

５　高坏（第58図　404～411）

高坏は，口縁部の屈曲や長さなどの形態の違いから，Ⅰ～Ⅴ類に分類される。

Ⅰ類（第58図　404）

404は，坏が屈曲し，強く外反する短めの口縁部である。屈曲部外面に稜を持ち，口縁部は先細りしながら反っている。口唇部に面を持ち，断面がコの字状を呈し，中央が凹んでいる。

Ⅱ類（第58図　405，406）

くの字状口縁を呈し，口縁部内側に明瞭な稜を持つものである。

405は，やや開き気味の胴部から外反する鋤先口縁で，口唇部を丸く仕上げている。内側の張り出しは段を持ち，上面はやや反った水平な平坦面である。

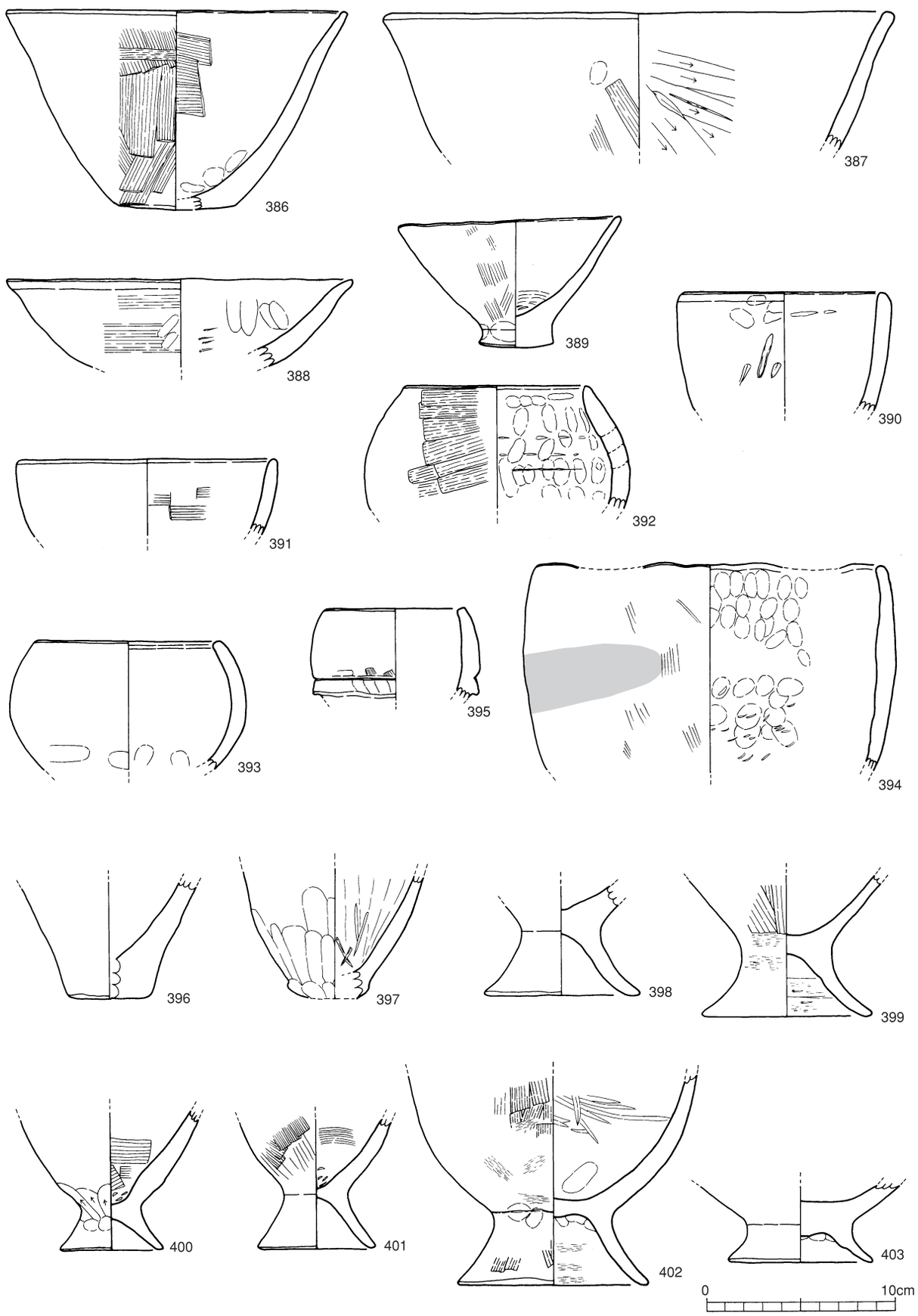
406は，口縁部の屈曲が弱く緩やかに外反するもので，内面に張り出しを持つ。張り出し部は突出し尖っており，摘み出しによる凹みが上下に残る。

Ⅲ類（第58図　407，408）

くの字状口縁を呈し，内側に張り出しを持たず稜が残るものである。

407は，頸部が肥厚し，緩く外反する口縁部は長めで，上面の平坦部が広くわずかに反っている。口唇部に面を持ち，内外面ともナデ調整を施している。

408は，器壁が厚く，口縁部は外側，口唇部は面を持つ断面方形を呈する。



第57図　弥生時代の土器23（鉢Ⅳ・Ⅴ類　底部）

Ⅳ類（第58図　409，410）

409，410は，頸部の締まりが強く，内側に段を持ちながら長めの口縁部が開くものである。409は，深めの坏部であり，口縁部がラッパ状に外反するものである。坏部下半は厚みがあり，口唇部に向かって先細りする断面Ｓ字状の口縁部である。ハケメ調整痕が多く残る。410は，内側に明瞭な段を持ち，外反した後直線状に端部へと伸びるものである。口縁部上面に広い平坦面を持ち，口唇部は面取りされている。内外面とも，ハケメ調整を施す。

Ⅴ類（第58図　411）

411は，内面下位はわずかに凹み，上位は反り気味である。口縁部は先細りであり，口唇部を丸く仕上げている。内面に縦方向のミガキ調整，外面に横ナデ調整を施している。

高坏（脚部）（第58図　412～421）

裾の広がりや脚柱部の有無など形態の違いにより，Ⅰ～Ⅲ類に分類した。

Ⅰ類（第58図　412～414，421）

脚が裾広がりに大きく外反しながら開くものである。

412，413は厚みのある脚で，緩やかに外反し裾部で大きく開くものである。器壁は上位が厚く，裾部へ向かって細くなる。412は，裾部の屈曲が強く安定している。底唇部は面取りがされ，中央が凹んでいる。脚部中位に直径1.4㎝の円形透孔が施される。413は，内外面とも横ナデ調整であり，調整痕が筋状に残る。坏部及び裾部が欠損している。

414は，薄作りであり，坏部との境に１条の突帯を施し，脚部内天井に平面を持つ。外面は，縦方向のハケメ調整を施した後，ナデ調整で仕上げている。

Ⅱ類（第58図　415，416）

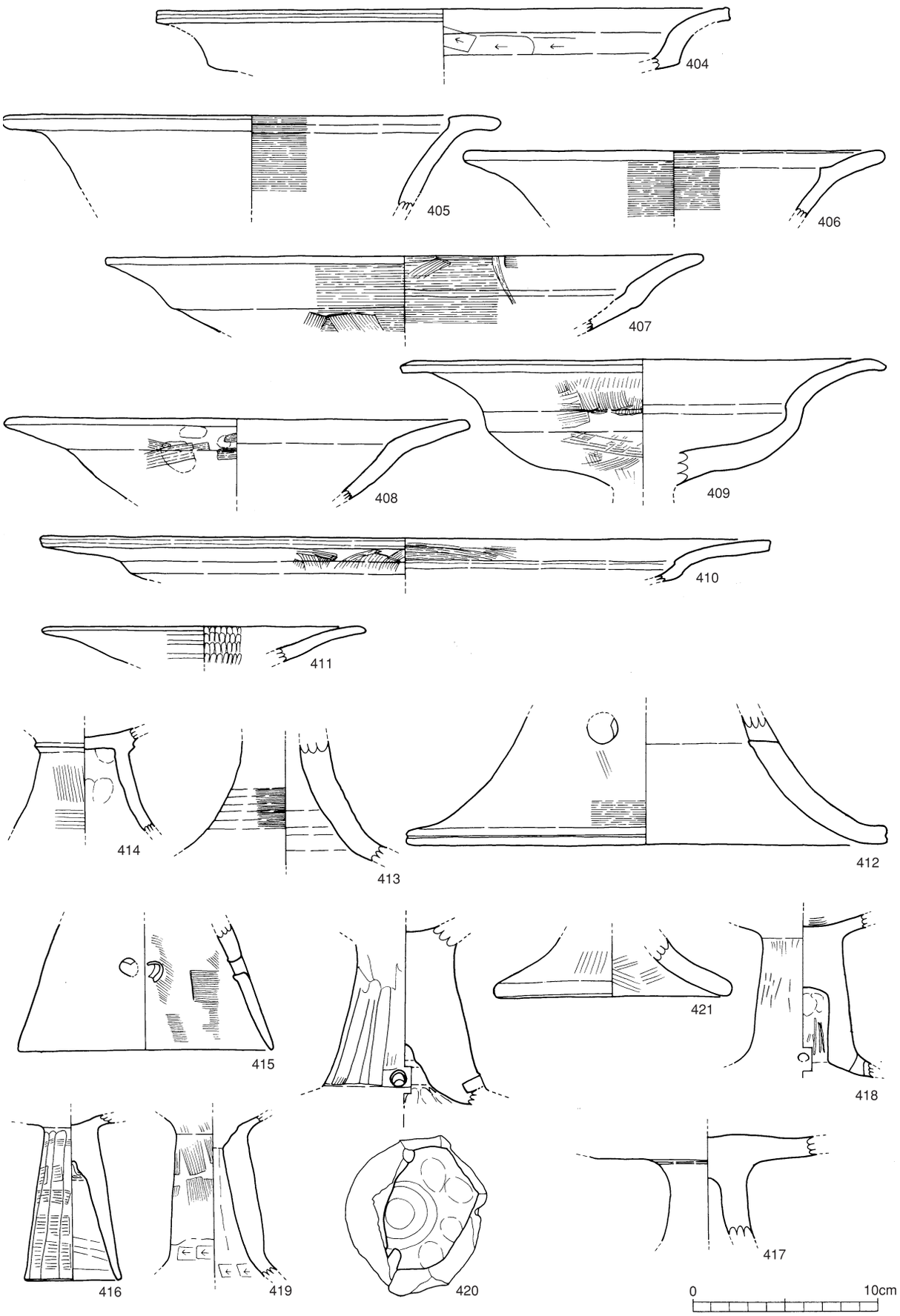
415，416は，脚が緩やかに開きながら直線的に底唇部へ至るものである。開きは小さく，薄作りである。器壁は下位に向かって薄くなり先細りであり，尖り気味である。415は，外面は丁寧なナデ調整，内面は横位のハケメ調整であり，胴部中位に直径約８㎜の円形透孔を施している。内面に横ナデ調整痕が明瞭に残る。416は，開きのない円筒形に近いもので，底唇部は尖っている。上位から，底唇部へ向かって先細り，外面に板ナデ調整を縦方向へ施している。

Ⅲ類（第58図　417～420）

417～421は，高坏の脚柱部であり，直立する脚柱部から裾部が大きく開くものである。417は，器壁が厚く，坏部との接合痕を丁寧にナデ消している。418は，円筒状の脚柱部裾が大きく開いており，裾部上位に円形透孔が３孔施される。内側に稜を持ち，内部上部は充実している。419は，緩やかに裾が開き，内外面に稜を持たないもので，ハケメ調整，板ナデ調整を施す。420は，やや開く脚柱部は，裾部内面が凹む程度で，充実気味である。裾部との境目に円形透孔を３か所施し，その内１孔は外面より途中までであり未完通である。

器台（第59図　422～425）

422～425は，鼓形器台と思われる器形を呈し，422，423は両端を，424は上端を欠損している。422は下位に円形透孔を１孔，423は中央部上下に２孔を交互になるように施している。424は，大



第58図　弥生時代の土器24（高坏）

きく開いた裾部であり，底唇部をコの字状に仕上げ中央が凹んでいる。底唇部上端は，平坦面を広く作り出すため張り出し尖っている。上位に円形透孔１孔施され，内外面ともハケメ調整であり，丁寧に仕上げている。

425は，小型の器台であり，筒型を呈している。上下端ともに面取りがされ，平坦面を作り出すために張り出しが見られる。外面は横ナデ調整を施し，丁寧な仕上がりである。

支脚（第59図　426）

426は，器壁の厚い円筒形をした器形で，底部の接地面にわずかな面を持ち，安定している。上部は欠落しているが，断面が斜めであり，丸底状の土器を支える器台の支脚であると思われる。表面が凸凹しており，手捏ね風に全面ナデ調整を施す。外面に煤が付着している。

蓋型土器（第59図　427，428）

427は，天頂部の器形は不明であるが，緩やかに膨らみを持ちながら内湾し，庇部がくの字状に外反する蓋型土器である。庇部分を丸く仕上げ，内側に稜が残る。内面下部に煤が付着する。

428は，天頂部の器形は不明であるが，緩やかに反りながら八の字状に広がる。庇部は丸く仕上げ直上に三角突帯を施す。内外面ともミガキ調整を施し，内面下位に煤が付着している。

ジョッキ型土器（第59図　429）

429は，小型のジョッキ型土器の取っ手部下位である。胴部形態は不明であるが，取っ手断面は平たい方形を呈し，器面全体に丁寧なナデ調整である。

小型土器（第59図　430～443）

全体の形態から，Ⅰ～Ⅳ類に分類した。指圧痕が全体に残り手捏ね風の作りである。

Ⅰ類（第59図　430～433）

430～433は，底面が厚みのある充実した高台を持ち，直線的にやや開いて立ち上がる鉢型をしたものである。430は，全体が傾いている。433は胴長で，外面に強いナデ調整を施す。

Ⅱ類（第59図　434～437）

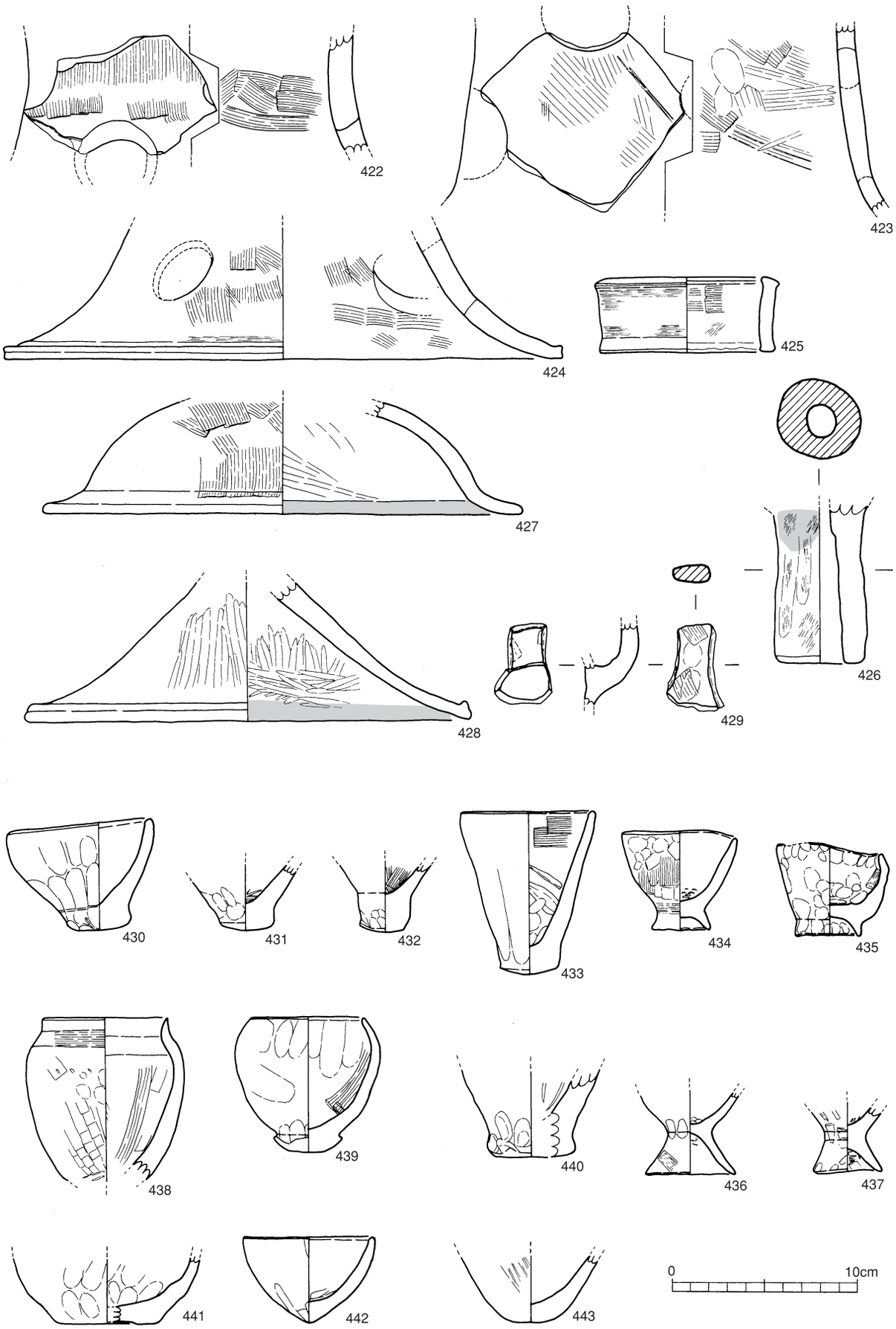
434～437は，脚台を持つものである。434，435は低い脚台で，底唇部は尖り気味である。436，437は，ハの字状に開く長めの脚を有するもので，上部形態は不明である。

Ⅲ類（第59図　438～441）

438～441は，胴部に張りを持ち，口縁部がすぼまる壺型を呈するものである。438は，胴長であり，口唇部近くがわずかに反る。439は，充実高台気味の不安定な底部である。

Ⅳ類（第59図　442，443）

442，443は，底部が丸底または尖り気味のものである。底部は厚みがあり，口縁部は直口する。

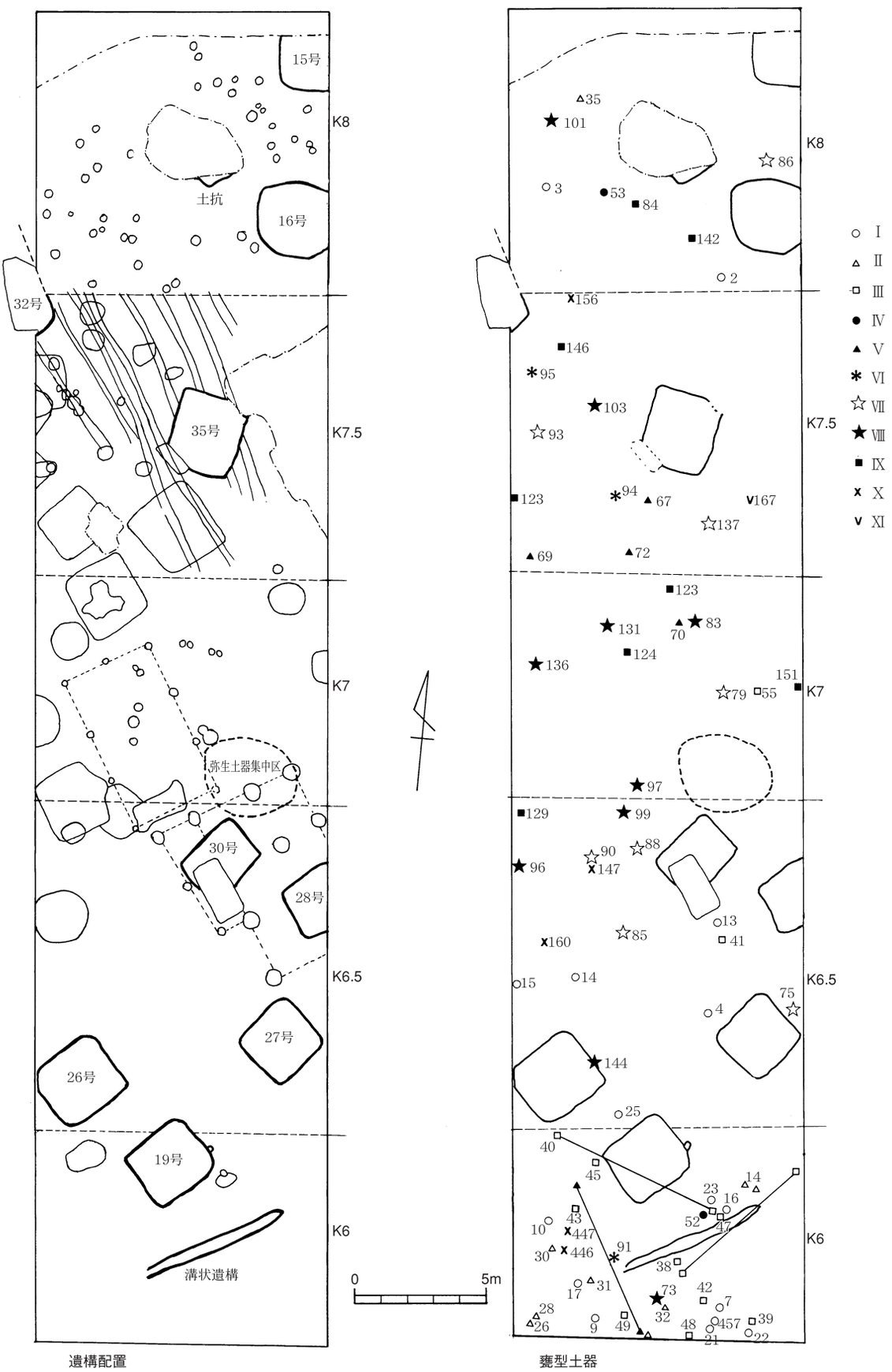


第59図　弥生時代の土器25（器台，蓋他）

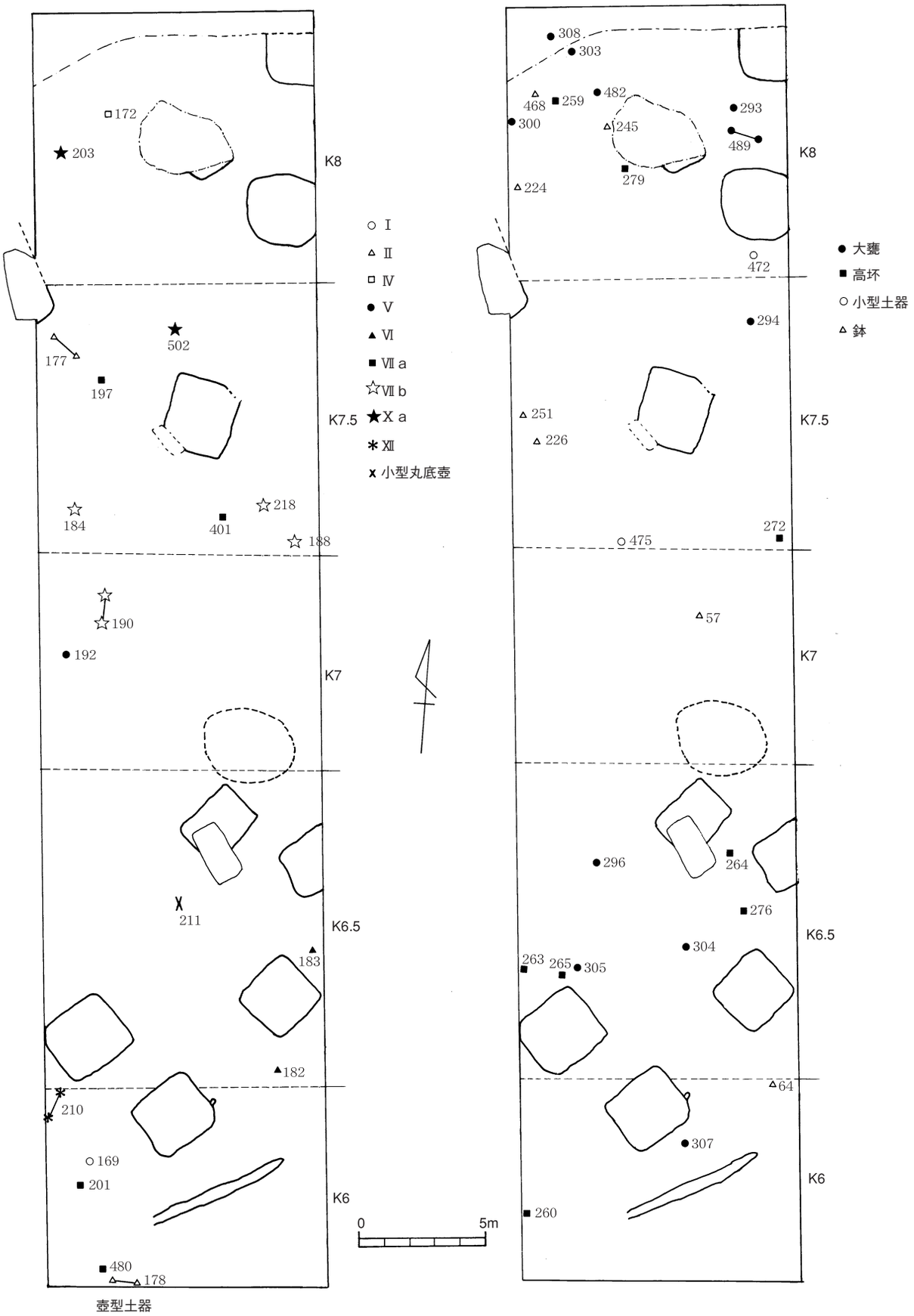
第 12 表　弥生土器集計表 2（実測点数）

器種		分類	K1～5	K6	K6.5	K7	K7.5	K8	K9～9.5	K10～16	合計
甕	口縁部	Ⅰa	1	5	1	2		3			12
		Ⅰb		8	3	2					13
		Ⅱ	3	10	1			1			15
		Ⅲ	1	12	2	1			2		18
		Ⅳ		1	1	2	2	1			7
		Ⅴ		1	1	1	2		1		6
		Ⅵ		1	1	3	2				7
		Ⅶa		2	1	3	1	2			9
		Ⅶb	1		3	3	1				8
		Ⅷ			7	5	3	1		1	17
		Ⅸ		1	5	10	7	5	6	1	35
		Ⅹ	2	2	7		12	3	3	1	30
		Ⅺ				1	1		1		3
	底部	Ⅰ	1	2	1						4
		Ⅱ		1	2		1				4
		Ⅲ	2		1	2			1		6
		Ⅳ		3	1			1			5
		Ⅴ		2	2					4	8
		Ⅵ		1	2		2		2		7
		Ⅶ					1				1
大甕	口縁部	Ⅰ				1			1		2
		Ⅱ			1						1
		Ⅲ					2	1			3
		Ⅳ		1			1	1	1		4
		Ⅴ			1		1	3			5
	突帯	Ⅰ			1			1			2
		Ⅱ						1			1
		Ⅲ	1	1	1		1		1		5
		Ⅳ	1								1
壺	口縁部	Ⅰ		1							1
		Ⅱ	1								1
		Ⅲ		1	2	1	1				5
		Ⅳ						2			2
		Ⅴ			3						3
		Ⅵ		1	4						5
		Ⅶa		2	1	1	2			1	7
		Ⅶb	3	1	1		3				8
		Ⅷ								1	1

器種		分類	K1～5	K6	K6.5	K7	K7.5	K8	K9～9.5	K10～16	合計
壺	口縁部	Ⅸ		1							1
		Ⅹa	1		2		4	4	1	3	15
		Ⅹb		1					1		2
		Ⅺ		2							2
		Ⅻ	1	1	2			1	4	4	13
		XIII	1	1	1	1			1		5
		XIV			3	2					5
	底部	Ⅰ		2	1			1	1		5
		Ⅱ		1	1		1				3
		Ⅲ		2	2	1	1			1	7
		Ⅳ	1	1	1	1		2			6
		Ⅴ		1	2				1	1	5
鉢	口縁部	Ⅰ		1	1	2		1	2		7
		Ⅱ			2		1	1	3	1	8
		Ⅲ		1	1	2	1	1		2	8
		Ⅳ				1	4	2	1	2	10
		Ⅴ			1	3				1	5
	底部	Ⅰ	1								1
		Ⅱ	1								1
		Ⅲ			2			3			5
		Ⅳ								2	2
高坏	坏部	Ⅰ								1	1
		Ⅱ		2				2			4
		Ⅲ	1		3				1		5
		Ⅳ			1				1		2
		Ⅴ		1							1
	脚部	Ⅰ					1		1	1	3
		Ⅱ			3				1	1	5
		Ⅲ			3				2		5
		Ⅳ							1		1
器台・支脚				1	1		1	1	1	1	6
蓋型土器				1			1			1	3
ジョッキ型土器							1				1
小型土器		Ⅰ			2		2				4
		Ⅱ		2	2						4
		Ⅲ		1	2			1	2		6
		Ⅳ			3			1			4
合計			24	83	99	51	64	47	44	31	443



第60図　弥生時代の遺構配置図　弥生時代の土器（出土分布①）



第 61 図　弥生時代の土器（出土分布②）

第13表　弥生土器　観察表5（甕①）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層		注記番号
35図	132	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英，長石 小石(3㎜)	オリーブ黒	灰黄	良好	20.4	－	－	刻目突帯	7	東カベ	3589
	133	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英，長石 黒雲母	褐灰 橙	明褐 灰褐	良好	－	－	－	刻目突帯	5	表	－
	134	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英,角閃石 長石,小石(2㎜)	黄褐	黄褐	良好	－	－	－	刻目突帯	8	Ⅳ	5508
	135	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	灰黄	浅黄	良好	－	－	－	刻目突帯	6T	Ⅳ	500 567
	136	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英，角閃石	黒褐	明黄褐	良好	－	－	－		6	Ⅲ	1508
	137	甕	口縁～胴	Ⅰa	横ナデ ナデ	板ナデ	石英，長石 小石(2㎜)	浅黄橙 黒	黄橙	良好	23.6	－	－		6	Ⅲ	1637
	138	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英，長石	黒褐	浅黄橙	良好	－	－	－		6	Ⅲ	1590
	139	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石,小石(3㎜)	黒褐	黄褐	良好	－	－	－		6.5	Ⅲ	2450
	140	甕	口縁部	Ⅰa	ナデ ハケ目	板ナデ	石英，長石 角閃石	灰褐黄	黄橙	良好	－	－	－		8	Ⅲ	3366
	141	甕	口縁部	Ⅰa	横ナデ ナデ	板ナデ	石英，長石 小石(3㎜)	黒褐	淡黄	良好	13.6	－	－	刻目突帯	6	Ⅲ	1501
	142	甕	口縁～底	Ⅰb	ナデ	ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石,小石(4㎜)	赤橙 黄橙	浅黄褐 橙	良好	22.0	5.6	21.8	二次焼成 刻目突帯	6	Ⅲ	1790
	143	甕	口縁部	Ⅰb	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	石英 小石(5㎜)	黄橙	明褐	良好	25.6	－	－	刻目突帯	6	Ⅲ	1288
	144	甕	口縁～胴	Ⅰb	横ナデ ナデ	ナデ	石英，長石 黒雲母	黒褐	黄橙 黒褐	良好	－	－	－	刻目突帯 (3条)	6	Ⅱb	125
	145	甕	口縁部	Ⅰb	横ナデ	横ナデ ナデ 指圧痕	石英,角閃石 長石,赤色小石	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－	刻目突帯 (2条)	6	Ⅲ	1699
	146	甕	口縁部	Ⅰb	横ナデ ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	黒褐 明黄	黒褐	良好	25.4	－	－		6.5	深堀西	3347
	147	甕	口縁部	Ⅰb	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ 指圧痕	石英 小石多混	暗褐	褐	良好	－	－	－		6	Ⅳ	－
	148	甕	口縁部	Ⅰb	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	石英 小石多混	黄橙	灰白	良好	－	－	－		6.5	Ⅳ	3551
	149	甕	口縁部	Ⅰb	ナデ	ナデ	石英、黒雲母 赤色小石	明褐	橙	良好	－	－	－		6.5	Ⅴ	4222
36図	150	甕	口縁部	Ⅰb	横ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 金雲母	黒褐	明褐	良好	－	－	－	突帯	6	Ⅱb	275
	151	甕	口縁部	Ⅰb	ナデ	ナデ ミガキ	石英， 長石	黒褐 黄褐	黒褐	良好	－	－	－	縦位突帯	7	Ⅳ	－
	152	甕	口縁部	Ⅰb	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	赤褐 橙	灰褐	良好	－	－	－	刺突文 (外面・口唇)	7	Ⅳ	－
	153	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ	ナデ	石英,黒雲母 長石,小石(4㎜)	浅黄橙	橙	良好	47.2	－	－	刻目突帯 (2条)	6.5	Ⅲ	154
	154	甕	口縁～胴	Ⅱ	ナデ ミガキ	ナデ	石英，角閃石 長石，小石多混	赤褐	黄橙	良好	28.8	－	－	刻目突帯	6	Ⅲ	1320 1321
	155	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ	ナデ	石英,長石,輝石小石(5㎜)	浅黄橙 灰褐	灰白	良好	－	－	－	刻目突帯	6	Ⅴ	1707
	156	甕	口縁部	Ⅱ	ナデ	板ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		5	Ⅲ	1194
	157	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ ナデ	ナデ 指圧痕	石英,角閃石 長石,赤色小石	明褐	黄橙	良好	25.4	－	－	刻目突帯	5	Ⅳ	654
	158	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ	ナデ	石英,角閃石 長石,赤色小石	灰黄	浅黄	良好	31	－	－	刻目突帯	6	Ⅲ	1411
	159	甕	口縁～胴	Ⅱ	板ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	石英，長石	灰褐	浅黄橙	良好	24	－	－	煤付着	5	Ⅳ	434
	160	甕	口縁部	Ⅱ	ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 小石(1cm)	浅黄橙	黄橙	良好	22	－	－		6	Ⅲ	1482
	161	甕	口縁部	Ⅱ	ナデ	板ナデ	石英，長石 小石多混	褐灰	浅黄	良好	26.9	－	－		6	Ⅲ	1478
	162	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 砂粒多混	橙	明赤褐	良好	28.2	－	－	沈線	6	Ⅲ	1186
	163	甕	口縁部	Ⅱ	ナデ 指圧痕	ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	橙	良好	17.3	－	－	沈線(2条)	8	Ⅲ	4919
	164	甕	口縁部	Ⅱ	横ナデ	ナデ	石英，長石 小石(3㎜)	赤褐	黒褐	良好	－	－	－	沈線	6	Ⅲ	1236
37図	165	甕	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ	ハケ目 ナデ	石英，長石 小石(5㎜)	浅黄	灰黄	良好	36.2	－	－	口唇部に刻目 煤付着	6	Ⅱb	234
	166	甕	口縁部	Ⅲ	横ナデ	板ナデ ハケ目	石英，黒雲母 長石,小石(4㎜)	黄灰	暗灰黄	良好	36.2	－	－	突帯(3条)	6	Ⅲ	1245 1375
	167	甕	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ	板ナデ	石英，黒雲母 砂粒少混	黄褐	浅黄橙	良好	27.4	－	－	突帯(3条)	6	Ⅲ	1297
	168	甕	口縁部	Ⅲ	横ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 小石(3㎜)	黒褐	赤黒	良好	12.2	－	－	突帯(3条)	6	Ⅲ	1526
	169	甕	口縁部	Ⅲ	ナデ	板ナデ ナデ	石英，角閃石 長石,小石(7㎜)	赤黒	明赤褐	良好	29.2	－	－	突帯(2条)	6	Ⅲ	1629
	170	甕	口縁部	Ⅲ	ナデ 指圧痕	板ナデ	石英，長石 輝石，小石(5㎜)	明赤褐	黄橙	良好	32.6	－	－	突帯(2条)	6	Ⅳ	－

第14表　弥生土器　観察表6（甕②）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区	層	注記番号
37図	171	甕	口縁～胴	Ⅲ	ナデ	ミガキ ナデ	石英，角閃石 長石，小石(7㎜)	暗褐	黄橙	良好	25.2	－	－	沈線（2条）	6.5	Ⅲ	2850
	172	甕	口縁部	Ⅲ	横ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英、長石	黒褐	黄橙	良好	－	－	－	突帯	6	Ⅲ	1157
	173	甕	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ ミガキ	ミガキ　ナデ 指圧痕	石英，角閃石 輝石	黒褐	黄褐	良好	25.8	－	－		6	Ⅲ	1290 1291
38図	174	甕	口縁部	Ⅲ	横ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 小石(5㎜)	赤褐	橙	良好	28.2	－	－		7	Ⅳ	2233
	175	甕	口縁部	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	灰褐	橙	良好	29.2	－	－		6	Ⅲ	3330
	176	甕	口縁部	Ⅲ	ナデ 指圧痕	ナデ	精製された胎土	黄褐	黄褐	良好	－	－	－		5	－	1422
	177	甕	口縁部	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英，長石 赤色小石	赤褐	浅黄橙	良好	－	－	－	口縁上部に沈線	9.5	Ⅲ	2538
	178	甕	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ	ナデ	石英，長石 小石(7㎜)	橙	黄橙	良好	23.8	－	－	突帯（3条） 下位へ屈曲	6	Ⅲ	1175
	179	甕	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ ミガキ　指圧痕	ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	赤褐 黒褐	橙	良好	22.1	－	－	突帯（4条） （一部波状）	6	Ⅲ	1533
	180	甕	胴部	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英，黒雲母	黄橙	灰褐	良好	－	－	－	櫛描波状文	9	Ⅲ	1897
	181	甕	口縁部	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	赤橙	浅黄橙	良好	－	－	－	縦位突帯 （2条）剥落	6	Ⅲ	－
39図	182	甕	口縁部	Ⅳ	横ナデ	横ナデ	石英，長石 白色小石	黒褐	黒褐	良好	－	－	－		6	Ⅲ	1553
	183	甕	口縁部	Ⅳ	ナデ	ナデ	石英，長石 小石(3㎜)	淡黄	灰黄	やや良好	－	－	－		8	Ⅲ	502
	184	甕	口縁部	Ⅳ	横ナデ	ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，小石(5㎜)	明赤褐	橙	良好	－	－	－		7	Ⅳ	－
	185	甕	口縁部	Ⅳ	ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	橙	黄橙	やや良好	29.6	－	－	全体的に摩耗	6.5	Ⅳ	4208
	186	甕	口縁～胴	Ⅴ	横ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石 角閃石	明赤褐	明赤褐	良好	－	－	－	丹塗り 突帯	6	Ⅲ	1395 1396
	187	甕	口縁部	Ⅴ	横ナデ	横ナデ ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒少混	黄橙	浅黄橙		－	－	－	口縁欠損 突帯	7	Ⅳ	2270
	188	甕	口縁部	Ⅴ	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	淡黄	良好	－	－	－		9.5	H10	3558
	189	甕	口縁部	Ⅴ	ナデ	ナデ	石英，角閃石 白色小石	淡黄	淡黄	良好	－	－	－		7.5	Ⅳ	3435
	190	甕	口縁部	Ⅴ	横ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	灰黄	灰黄	良好	27	－	－		7.5	Ⅳ	4116
	191	甕	口縁部	Ⅴ	ナデ	横ナデ	長石，角閃石 白色小石	淡黄	灰黄	良好	－	－	－		7.5	Ⅳ	3666
	192	甕	口縁部	Ⅵ	ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石，角閃石， 赤色小石多混	黄褐	明黄褐	良好	28.6	－	－		7.5	Ⅳ	4034 4035
	193	甕	口縁部	Ⅵ	ハケ目	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	黄橙 橙	良好	28.6	－	－		6	Ⅲ	636
	194	甕	口縁部	Ⅵ	横ナデ	ハケ目 横ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	橙	浅黄橙	良好	31.8	－	－		7.5	Ⅲ	3323
40図	195	甕	口縁部	Ⅶa	ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	25.6	－	－		7	Ⅳ	3569
	196	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石	浅黄	黄橙	良好	24.6	－	－		6.5	Ⅲ	2364
	197	甕	口縁部	Ⅶa	板ナデ→ナデ	板ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		7.5	Ⅳ	3383
	198	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	黄灰	黄褐	良好	31.2	－	－		7	Ⅳ	2418
	199	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	明黄褐	浅黄橙	良好	33.4	－	－		7	Ⅲ	1014
	200	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ	石英，角閃石 長石黒雲母	褐灰	黄橙	良好	29.4	－	－		8	Ⅲ	3576
	201	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	灰黄褐	黄橙	良好	31.2	－	－		6	Ⅲ	705
	202	甕	口縁部	Ⅶa	横ナデ	横ナデ ハケ目	石英，長石 黒雲母	浅黄褐	浅黄橙 黄橙	良好	27.6	－	－		8	Ⅳ	5589
41図	203	甕	口縁部	Ⅶb	横ナデ ハケ目	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 赤色小石	黒褐	浅黄橙	良好	26.2	－	－		7	Ⅳ	3611
	204	甕	口縁部	Ⅶb	横ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	灰白	良好	24.2	－	－		7	Ⅳ	3613
	205	甕	口縁部	Ⅶb	横ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	長石，角閃石 砂粒少混	浅黄橙	褐灰	良好	28.4	－	－		6.5	Ⅳ	4015
	206	甕	口縁～胴	Ⅶb	横ナデ 板ナデ	ハケ目 横ナデ	石英，長石 黒雲母	淡黄	黒褐	良好	21.6	－	－		6.5	Ⅳ	3658
	207	甕	口縁部	Ⅶb	横ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石	暗褐	黄橙	良好	24.8	－	－		5	土・1	1543
	208	甕	口縁部	Ⅶb	横ナデ	ナデ	石英，長石 輝石	黄褐	黄灰	良好	29.4	－	－		6.5	Ⅳ	4118
	209	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	石英，長石 金雲母	黒褐 黄橙	褐	良好	28	－	－		6.5	Ⅳ	4281

第15表　弥生土器　観察表7（甕③）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層		注記番号
41図	210	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ	ナデ	石英，長石 砂粒少混	黒褐	灰黒 浅黄	良好	25.2	－	－	上面摩滅	6.5	Ⅱb	476
	211	甕	口縁～胴	Ⅷ	ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	長石，角閃石 輝石	灰白 黒褐	淡黄	良好	24.1	－	－		7	近世	3333
	212	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石 小石(3㎜)	暗灰黄	黒褐	良好	19.1	－	－		8	Ⅲ	3307
	213	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ	ナデ	精製された胎土	黄橙	淡黄	やや良好	－	－	－		10	Ⅲ	5494
	214	甕	口縁部	Ⅷ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，赤色小石	浅黄橙	灰白	良好	－	－	－		7.5	Ⅲ	2889
	215	甕	口縁～胴	Ⅷ	ハケ目→ナデ	ハケ目	石英，角閃石 長石，金雲母	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 灰白	良好	29.5	－	－		7	H34 床	3446
	216	甕	口縁部	Ⅷ	ハケ目→ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石	灰黄白	浅黄橙	良好	32.8	－	－		7	Ⅳ	3371
	217	甕	口縁部	Ⅷ	ハケ目 ナデ	板ナデ ナデ	石英，長石 黒雲母	黄橙	浅黄	良好	－	－	－		6.5	Ⅳ	3412
42図	218	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄	灰黄 暗灰黄	良好	32.8	－	－		7.5	Ⅳ	4005
	219	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ	ナデ ハケ目	長石，角閃石	浅黄橙	淡黄	良好	23·8	－	－		6	Ⅲ	624
	220	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ 板ナデ→ナデ	ナデ	石英,長石,輝石砂粒多混	浅黄橙	灰白	良好	22	－	－		7.5	土6	3601
	221	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ ナデ	石英，長石 角閃石，輝石	黒褐	黄灰	良好	28.2	－	－		8	Ⅳ	5865
	222	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ	ハケ目 ナデ	石英，黒雲母 長石，金雲母	灰黄褐	橙	良好	23.2	－	－		8	Ⅲ	3517
	223	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石,小石(2㎜)	暗灰黄	淡黄		23.4	－	－		9.5	Ⅲ	1568 1950
	224	甕	口縁～胴	Ⅸ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，小石少混	灰白	浅黄橙	良好	－	－	－	煤付着	7.5	Ⅲ	2849
	225	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ 板ナデ	板ナデ 指圧痕　ナデ	石英，角閃石 長石，赤色小石	黄橙 橙	浅黄橙	やや良好	19.2	－	－	摩滅(内)	10	Ⅲ	－
	226	甕	口縁部	Ⅸ	板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 黒雲母	明黄褐	橙	やや良好	21.4	－	－	器面摩滅	9	Ⅲ	3298
	227	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙 黒褐	浅黄橙 橙	良好	21.6	－	－	煤付着	7	Ⅳ	2206
	228	甕	口縁部	Ⅸ	ハケ目→ナデ	ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 小石(7㎜)	黄橙	橙 黄褐	良好	20	－	－		9.5	Ⅲ	1947
	229	甕	口縁部	Ⅸ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	黒褐	灰黄	良好	31·8	－	－		7	Ⅴ	3244
	230	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，白色小石	黄橙	灰白 浅黄橙	良好	22.4	－	－		6.5	Ⅳ	4280
	231	甕	口縁部	Ⅸ	横ナデ ハケ目	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黒 浅黄	灰黄	良好	－	－	－		7	Ⅳ	2313
	232	甕	口縁部	Ⅸ	ハケ目→ナデ ナデ	ハケ目→ナデ	石英,長石,輝石，砂粒少混	橙	黄橙 浅黄橙	良好	29	－	－		9·5	Ⅲ	1944
	233	甕	口縁部	Ⅸ	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		7·5	Ⅴ	3862
43図	234	甕	口縁～胴	Ⅹ	ハケ目→ナデ	ハケ目	石英，長石 黒雲母	浅黄橙	黄橙	良好	32	－	－		6·5	Ⅳ	3587
	235	甕	口縁～胴	Ⅹ	ナデ ハケ目→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	黄橙	黄橙 淡黄	良好	27.6	－	－		9.5	Ⅲ	1086
	236	甕	口縁～胴	Ⅹ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 赤色小石	黄橙	浅黄橙	良好	21.6	－	－	煤付着	4	Ⅲ	941 947
	237	甕	口縁部	Ⅹ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 黄橙	灰白 黒褐	良好	18.4	－	－		6.5	Ⅳ	3567
	238	甕	口縁～胴	Ⅹ	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ ナデ	長石，輝石 小石(4㎜)	黄橙	浅黄橙	良好	21.8	－	－	煤付着	4	Ⅲ	938 939
	239	甕	口縁～底	Ⅹ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，小石少混	黄橙 浅黄橙	橙	良好	15.9	7.4	18.4		9	Ⅳ	6419
	240	甕	口縁部	Ⅹ	ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 黒雲母	褐灰	浅黄橙	良好	21.6	－	－		6	Ⅱb	399
	241	甕	口縁部	Ⅹ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	28.6	－	－	煤付着	6	Ⅲ	94 937
	242	甕	口縁～胴	Ⅹ	ハケ目→ナデ ナデ	ナデ	石英,長石,輝石,砂粒少混	黄橙	浅黄橙	良好	22.6	－	－		14	Ⅲ	526 603
	243	甕	口縁～胴	Ⅹ	横ナデ ナデ	板ナデ→ナデ ナデ	石英，長石 黒雲母	灰黄褐	黄橙	良好	18	－	－		7.5	Ⅲ	2563
	244	甕	口縁部	ⅩⅠ	ナデ	横ナデ	長石，角閃石	浅黄橙	灰白	良好	－	－	－		7.5	Ⅲ	2824
	245	甕	口縁部	ⅩⅠ	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	橙	暗赤褐	良好	－	－	－		9.5	Ⅲ	2782
44図	246	甕	底部	Ⅰ	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	石英，長石 砂粒多混	橙 暗赤褐	黒褐	良好	－	7.3	－		6	Ⅲ	135
	247	甕	底部	Ⅰ	ナデ 指圧痕	ナデ	石英，長石 小石多混	橙	黄橙 灰褐	良好	－	7.3	－		6	Ⅲ	1618
	248	甕	底部	Ⅰ	ナデ 指圧痕	ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 灰褐	黒褐	やや良好	－	8.8	－		5	Ⅳ	1663 1664

第16表　弥生土器　観察表8（甕④，大甕）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層	注記番号
44図	249	甕	胴～底	Ⅱ	ミガキ ナデ	板ナデ→ナデ	石英，黒雲母 長石，小石(8㎜)	黄褐	黒褐	良好	－	9	－	底面剥落	6.5 Ⅲ	1951
	250	甕	底部	Ⅱ	ハケ目→ナデ	ナデ	長石，黒雲母 小石多混	明赤褐	褐灰	良好	－	7.9	－		6.5 Ⅳ	3434
	251	甕	底部	Ⅱ	ハケ目→ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石 小石(3㎜)、砂粒多混	明赤褐	黒	良好	－	7.5	－		7.5 Ⅲ	
	252	甕	底部	Ⅱ	ナデ 指圧痕	ナデ	石英，長石 小石(5㎜)	暗赤褐	黒褐	やや良好	－	5.2	－		6 Ⅲ	619
	253	甕	底部	Ⅲ	板ナデ→ナデ ナデ　指圧痕	ミガキ ナデ	石英，長石 角閃石	赤橙	淡赤褐 灰褐	良好	－	5.6	－		9 Ⅲ	3033
	254	甕	底部	Ⅲ	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	石英，角閃石 長石，小石少混	赤褐	暗赤褐	良好	－	6.3	－		5 Ⅳ	507
	255	甕	底部	Ⅲ	横ナデ　ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	10.1	－		8 Ⅲ	852
	256	甕	底部	Ⅲ	ハケ目→ナデ 指圧痕	ナデ	石英 小石(1㎝)	橙	赤褐	良好	－	5.8	－		6.5 Ⅳ	3584
	257	甕	底部	Ⅳ	ハケ目	ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	灰黄	暗灰黄	良好	－	7.2	－	砂付着 (高台内)	6 Ⅲ	1470
	258	甕	底部	Ⅳ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	明黄褐	黒褐	良好	－	8.4	－	砂付着 (高台内)	6 Ⅲ	802
	259	甕	底部	Ⅳ	板ナデ→ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	浅黄橙 淡黄	灰黄	良好	－	9.2	－	砂付着 (高台内)	6 Ⅲ	1407
	260	甕	底部	Ⅴ	板ナデ→ナデ 横ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	橙 黄橙	暗灰黄	良好	－	9.9	－		10 Ⅲ	6132
	261	甕	底部	Ⅴ	横ナデ ナデ　指圧痕	横ナデ ナデ	石英，黒雲母 赤色小石	浅黄橙	黒褐	良好	－	9	－		10 Ⅲ	6978
	262	甕	底部	Ⅴ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，黒雲母 長石，砂粒多混	明黄橙	灰黄褐	良好	－	9.4	－		10 Ⅲ	6752
	263	甕	底部	Ⅴ	ハケ目→ナデ ナデ　指圧痕	ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，砂粒多混	浅黄橙	黄褐	良好	－	9.8	－		10 Ⅲ	6465
	264	甕	胴～底	Ⅴ	ハケ目 横ナデ	ナデ 指圧痕	精製された胎土	浅黄橙	浅黄橙 黄褐	良好	－	8	－		6.5 Ⅳ	3587
	265	甕	底部	Ⅵ	ハケ目→ナデ 横ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石，輝石	明黄褐	黄橙	良好	－	9.2	－		6.5 Ⅱb	648
	266	甕	底部	Ⅵ	板ナデ→ナデ 指圧痕	ナデ	精製された胎土	橙	黄橙	良好	－	9.6	－		6 Ⅲ	1700
	267	甕	底部	Ⅶ	ハケ目 横ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，金雲母	灰白	暗褐	良好	－	10	－		7.5 Ⅳ	3901
45図	268	大甕	口縁	Ⅰ	横ナデ	横ナデ	石英，角閃石 長石，白色小石	明黄褐	浅黄橙	良好	－	－	－		9 Ⅲ	4801
	269	大甕	口縁	Ⅱ	板ナデ→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙	灰白	良好	36.1	－	－	二重口縁	6.5 Ⅲ	1944
	270	大甕	口縁	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ	石英，角閃石 長石，小石(1㎝)	黒褐 橙	橙 灰黄	良好	46.8	－	－	内面剥離 三角突帯(1条)	8 Ⅲ	4230
	271	大甕	口縁	Ⅲ	横ナデ	板ナデ→ナデ 横ナデ　指圧痕	石英，角閃石	橙	橙	良好	48	－	－	三角突帯 (1条)	7.5 Ⅲ	2744
	272	大甕	口縁	Ⅲ	横ナデ	横ナデ	石英，角閃石	橙	橙	良好	－	－	－	三角突帯 (1条)	7.5 Ⅲ	2026
	273	大甕	口縁～胴	Ⅳ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英,長石,輝石, 角閃石,金雲母	浅黄橙 黄橙	浅黄橙	良好	37.8	－	－	三角突帯 (1条)	9.5 Ⅲ	－
46図	274	大甕	口縁	Ⅳ	横ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ 横ナデ	石英，長石	黄橙	明褐	良好	－	－	－	三角突帯(1条) 沈線	8 Ⅲ	1511
	275	大甕	口縁	Ⅴ	板ナデ→ナデ	横ナデ	精製された胎土	黄橙	黄橙	やや良好	－	－	－	内面剥離	6.5 Ⅲ	2195
	276	大甕	口縁～胴	Ⅴ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石，砂粒少混	灰黄褐	黄橙	良好	38.6	－	－		8 Ⅲ	4657～ 4671
	277	大甕	頸～胴	Ⅴ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		8 Ⅲ	888 1512
47図	278	大甕	胴部	Ⅰ	ハケ目→ナデ 横ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	黄橙	黄褐	良好	－	－	－	突帯(1条)	8 Ⅲ	3?39
	279	大甕	胴部	Ⅰ	横ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙 橙	黄橙	良好	－	－	－	三角突帯 (1条)	6.5 Ⅲ	1705
	280	大甕	胴部	Ⅱ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，白色小石	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－	突帯(2条) (大1　小1)	8 Ⅲ	3611 3128
	281	大甕	胴部	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	石英，金雲母 長石，黒雲母	浅黄橙	浅黄橙 灰白	良好	－	－	－	突帯(1条)	6.5 Ⅳ	3500
48図	282	大甕	胴部	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	長石，角閃石	黄橙	浅黄橙 褐灰	良好	－	－	－	突帯(1条)	4 Ⅲ	8
	283	大甕	胴部	Ⅲ	板ナデ→ナデ 横ナデ	横ナデ	石英，長石 赤色小石	黄橙	橙	良好	－	－	－	突帯(1条)	6 Ⅱb	255
	284	大甕	胴部	Ⅳ	ハケ目 横ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	橙 灰黄褐	黄灰	良好	－	－	－	三角突帯 (1条)	4 Ⅲ	945 946
	285	大甕	底部	Ⅳ	ハケ目→ナデ ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，小石少混	浅黄橙	浅黄橙	やや良好	－	8.5	－	一部剥落 (内)	9 Ⅲ	4891
49図	286	壺	口縁部	Ⅰ	横ナデ ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英、角閃石 長石，黒雲母	黄橙	黄橙	良好	26.6	－	－		6 Ⅲ	1776
	287	壺	口縁部	Ⅱ	横ナデ	ナデ	長石，角閃石	黄橙	褐灰	良好	24.4	－	－	摩滅(内)	5 表	－

第17表　弥生土器　観察表9（壺①）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層		注記番号
49図	288	壺	口縁部	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ	石英，長石	黄橙	明褐	良好	16.4	－	－		6	Ⅲ	587 993
	289	壺	口～胴	Ⅲ	横ナデ ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英，角閃石 長石，白色小石	橙　褐灰 黄橙	明褐	良好	19.6	－	－	刻目突帯 暗文　丹塗り	7.5	Ⅳ	3935 3940
	290	壺	口縁部	Ⅳ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ	石英 赤色小石	赤褐 浅黄橙	赤褐 浅黄橙	良好	21.6	－	－	丹塗り 剥離(内)	8	Ⅲ	3236
	291	壺	口縁部	Ⅳ	横ナデ 指圧痕	横ナデ	石英，長石	黄橙 灰褐	黄橙 灰褐	良好	11	－	－		8	Ⅲ	3141
	292	壺	口縁部	Ⅴ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	浅黄橙	良好	18.2	－	－	丹塗り(線)	6.5 7	Ⅳ	3370
	293	壺	口縁部	Ⅴ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ナデ	長石　角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	－	－	－	丹塗り(線)	6.5	Ⅱb	4277
	294	壺	口縁部	Ⅵ	横ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－	凹線文(2条)	7	H34	3254
	295	壺	口縁部	Ⅵ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ	石英，角閃石 長石，赤色小石	橙	褐灰	良好	－	－	－	凹線文(3条)	6.5	Ⅱb	652
	296	壺	口縁部	Ⅵ	ハケ目 横ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 金雲母	浅黄橙	浅黄橙	良好	18.4	－	－	凹線文(1条)	6.5	Ⅲ	1456
	297	壺	口縁部	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	21.4	－	－		7.5	Ⅳ	3513
	298	壺	口縁～頸	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	長石，角閃石 小石少混	黄橙	浅黄橙	良好	17	－	－	三角突帯	10	Ⅲ	6709 6843
	299	壺	口縁～頸	Ⅶa	横ナデ 板ナデ→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	精製された胎土	暗褐	黄褐	良好	14.8	－	－		6	Ⅲ	583
	300	壺	口縁部	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	赤褐	浅黄橙	良好	18.2	－	－	丹塗り(外)	7.5	Ⅲ	3106 3287
	301	壺	口縁部	Ⅶa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，角閃石	浅灰黄	灰白	良好	17.9	－	－		6	Ⅲ	533
50図	302	壺	口縁～頸	Ⅶb	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黄褐	橙 灰黄	良好	19.6	－	－		5	Ⅶb	1422
	303	壺	口縁～頸	Ⅶb	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	長石，黒雲母	褐灰	浅黄橙 黒褐	良好	21	－	－		7	Ⅳ	2303 2282
	304	壺	口縁～頸	Ⅶb	横ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石	明褐灰	橙 褐灰	良好	20.2	－	－	摩滅(内)	7.5	深掘	3013
	305	壺	口縁～頸	Ⅶb	横ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	精製された胎土	黄橙	黄褐	良好	23.2	－	－		5	Ⅶb	1422
	306	壺	口縁部	Ⅶb	ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ ハケ目→ナデ	長石，角閃石 輝石	浅黄橙	灰白	良好	－	－	－		7.5	Ⅲ	2479
	307	壺	口縁部	Ⅶb	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	長石，黒雲母 砂粒多混	橙	黄橙	良好	－	－	－		6.5	Ⅲ	1721
	308	壺	口縁～頸	Ⅶb	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ	長石，角閃石 赤色小石	黄橙	浅黄橙	良好	19	－	－	口唇に刻目	7.5	Ⅳ	3663
	309	壺	頸～胴	Ⅶb	ハケ目 横ナデ	横ナデ ナデ	石英，長石 角閃石	赤橙 暗赤褐	淡赤橙	良好	－	－	－	刻目突帯	6	Ⅲ	803
	310	壺	口縁部	Ⅷ	横ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ ナデ	石英，長石 砂粒多混	灰黄褐	暗褐	良好	－	－	－	袋状口縁 刻目突帯	10	Ⅲ	4507
51図	311	壺	口縁部	Ⅹa	ハケ目→ナデ 横ナデ	横ナデ　指圧痕 ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，赤色小石	浅黄橙 黄橙	浅黄橙 褐灰	良好	13.6	－	－	波状線刻 刻目突帯	7.5	Ⅲ	2739
	312	壺	口縁～胴	Ⅹa	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	石英，黒雲母 長石，赤色小石	明褐	黄橙	やや良好	13	－	－		10	Ⅲ	6748
	313	壺	口縁～頸	Ⅹa	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石 角閃石	黄橙 灰黄	黄橙 灰褐	良好	13.9	－	－		10	遺物集積	6754
	314	壺	口縁～頸	Ⅹa	ハケ目→ナデ ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英，長石 砂粒少混	黄橙	浅黄橙	良好	14.4	－	－		8	Ⅲ	2888
	315	壺	口縁～頸	Ⅹa	板ナデ→ナデ 横ナデ	横ナデ ナデ	長石，角閃石 黒雲母	暗褐	黄橙	良好	14.2	－	－		6.5	Ⅳ	3481
	316	壺	口縁～胴	Ⅹa	板ナデ→ナデ 横ナデ	ナデ	精製された胎土	浅黄橙	灰白	やや良好	19.2	－	－		10	H20	7000
	317	壺	口縁部	Ⅹa	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石 輝石	橙	黄橙	良好	19.5	－	－		9.5	Ⅲ	1859 1860
	318	壺	頸～胴	Ⅹa	ハケ目 横ナデ	ハケ目→ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石 輝石	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－	刻目突帯	4	Ⅲ	470 34
	319	壺	口縁～胴	Ⅹb	ハケ目→ナデ ナデ	板ナデ→ナデ 横ナデ	精製された胎土	橙	黄橙	良好	19	―	－		6	Ⅱb	450
	320	壺	口縁～胴	Ⅹb	ハケ目→ナデ 横ナデ	ミガキ 板ナデ→ナデ	精製された胎土	橙	橙	良好	15.6	－	－		9	Ⅲ	2940
52図	321	壺	口縁部	Ⅺ	ハケ目→ナデ ミガキ	板ナデ→ナデ ミガキ	石英,小石(5㎜) 長石,赤色小石	暗赤褐	赤褐	良好	17.4	－	－		6 6.5	Ⅲ	1251 2352
	322	壺	頸部	Ⅺ	ハケ目→ナデ	ナデ	石英,小石(5㎜) 長石,砂粒多混	褐	橙	良好	－	－	－	沈線(2条) 摩滅(内)	6	Ⅲ	1222
	323	壺	口縁部	Ⅻ	ハケ目	ハケ目 横ナデ	精製された胎土	橙 灰黄	橙 灰黄	良好	13.2	－	－		6	Ⅲ	551 1052
	324	壺	口縁部	Ⅻ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石	黄褐	黄橙	良好	13	－	－		10	Ⅲ	5369
	325	壺	頸	Ⅻ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 黒雲母	黄橙	黄橙	良好	－	－	－	多条の突帯	5	Ⅲ	1422
	326	壺	頸	Ⅻ	ハケ目	ハケ目 指圧痕	石英，長石 角閃石	黄橙 褐灰	黄褐	良好	－	－	－	沈線暗模 (5条)	10	Ⅲ	6484

第18表　弥生土器　観察表10（壺②）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区	出土層	注記番号
52図	327	壺	胴部	Ⅻ	ハケ目 ナデ	板ナデ 指圧痕	石英,長石,輝石　小石(3㎜)	黄褐	黄橙	良好	－	－	－	重孤文＋沈線 煤付着	10	Ⅲ	6531
	328	壺	胴部	Ⅻ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石，輝石	明黄褐	褐灰	良好	－	－	－	重孤文 器面摩滅(内)	9	Ⅲ	4956
	329	壺	肩部	Ⅻ	板ナデ→ナデ	ナデ	長石，角閃石	黄褐	灰黄	良好	－	－	－	多条の沈線 器面摩滅(内)	9	Ⅲ	5221
	330	壺	胴部	Ⅻ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石	浅黄橙 灰褐	黄橙	良好	－	－	－	重孤文 沈線	9.5	Ⅲ	3595
	331	壺	胴部	Ⅻ	横ミガキ ミガキ	ナデ 指圧痕	石英，長石	褐	黒褐	良好	－	－	－	重孤文＋沈線 (4条)	9	Ⅲ	6260
	332	壺	胴部	Ⅻ	横ナデ ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黒褐	やや良好	－	－	－	沈線＋ 縦位刻目	6.5	Ⅱb	676
	333	壺	胴部	Ⅻ	ナデ	ナデ	石英，長石 白色小石	明赤褐	浅黄橙	良好	－	－	－	重孤文、沈線 器面摩滅	10	Ⅳ	－
53図	334	壺	肩部	ⅩⅢ	横ナデ 板ナデ→ナデ	ハケ目→ナデ ミガキ	石英，角閃石 長石,小石(7㎜)	褐	明褐	良好	－	－	－	丹塗り(線) 多重突帯	7	Ⅲ	1864
	335	壺	頸部	ⅩⅢ	横ナデ ミガキ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，角閃石 長石,小石(6㎜)	赤褐	褐灰	良好	－	－	－	丹塗り(線) 多重突帯	6	Ⅲ	838
	336	壺	胴部	ⅩⅢ	ハケ目→ナデ 指圧痕	ハケ目→ナデ ナデ　指圧痕	石英，長石 角閃石	浅黄橙	褐灰	良好	－	－	－	工具痕による文様	6.5	Ⅱb	753
	337	壺	胴部	ⅩⅢ	ハケ目 ナデ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，長石 黒雲母	明黄褐	黄橙	良好	－	－	－	突帯に斜め沈線(一部2条)	9	Ⅲ	3834 3231
	338	壺	口縁部	ⅩⅣ	横ナデ→ミガキ	ナデ 指圧痕	砂粒少混	暗赤褐	明赤褐	良好	－	6.5	－	丹塗り	6.5	－	－
	339	壺	胴部	ⅩⅣ	横ナデ	板ナデ→ナデ	長石，角閃石	明赤褐	浅黄橙	良好	－	－	－	丹塗り 三角突帯(1条)	7	Ⅳ	－
	340	壺	胴部	ⅩⅣ	横ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	明赤褐	浅黄橙	良好	－	－	－	丹塗り 三角突帯(1条)	6.5	Ⅳ	4018
	341	壺	胴部	ⅩⅣ	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	明赤褐	浅黄橙	良好	－	－	－	丹塗り 三角突帯(1条)	7	Ⅳ	3357
	342	壺	胴部	ⅩⅣ	横ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 赤色小石	明赤褐	浅黄橙	良好	－	－	－	丹塗り 稜角付突帯(1条)	6.5	Ⅳ	4005
	343	壺	底部	Ⅲ	板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	明赤褐	明赤褐	良好	－	－	－	丹塗り	6.5	深西	3370
	344	小型丸底壺	口縁～胴	－	板ナデ→ナデ →ミガキ	板ナデ→ナデ 指圧痕	砂粒少混	黄橙 黒褐	黄褐	良好	－	－	－		4	Ⅲ	996 1018
	345	小型丸底壺	胴部	－	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目 ナデ	石英，長石 角閃石，輝石	灰白	灰白	良好	11	－	－		6.5	Ⅲ	2085
54図	346	壺	底部	Ⅰ	横ナデ ミガキ	ナデ 指圧痕	石英，長石 砂粒多混	赤褐	橙	良好	－	7.4	－	器面剥離(内)	6	Ⅲ	1622
	347	壺	胴～底	Ⅰ	ナデ→ミガキ	ナデ	石英,長石,輝石，小石(5㎜)	明褐	灰褐	良好	－	7.6	－	器面剥離(内)	6	Ⅲ	1790
	348	壺	底部	Ⅰ	板ナデ→ナデ 横ナデ	ナデ	石英，角閃石	黄橙 赤褐	浅黄橙	良好	－	10.4	－		8	Ⅳ	5488 5496
	349	壺	底部	Ⅰ	板ナデ→ナデ ミガキ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石,小石(3㎜)	赤褐	黒褐	良好	－	7.8	－		6.5	Ⅳ	3618
	350	壺	底部	Ⅰ	板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	長石，角閃石	赤褐	黄橙	良好	－	8.9	－		9	Ⅲ	6311 6312
	351	壺	底部	Ⅱ	板ナデ ミガキ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	黄橙 黒	明褐	良好	－	5	－		6.5	Ⅳ	3859 4231
	352	壺	胴～底	Ⅱ	板ナデ→ナデ 指圧痕	ハケ目→ナデ	長石，角閃石 白色小石	赤褐 淡赤橙	黄褐	良好	－	6.3	－		6	Ⅲ	1762
	353	壺	底部	Ⅱ	ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，砂粒多混	黄橙 黒褐	灰白 褐灰	良好	－	5.6	－		7.5	Ⅳ	3633
	354	壺	底部	Ⅲ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	橙 黒褐	灰白 黒褐	良好	－	7.8	－	刻目突帯	7.5	Ⅳ	4075 4112
55図	355	壺	底部	Ⅲ	ハケ目→ナデ	－	石英，角閃石 長石，砂粒少混	灰褐	黄橙	良好	－	11.6	－	器面剥落(内)	10	Ⅲ	6880
	356	壺	胴～底	Ⅲ	ハケ目→ナデ 板ナデ	ナデ 横ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 黒褐	浅黄橙	良好	－	12.2	－		7	Ⅳ	3612
	357	壺	底部	Ⅲ	板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石	黒褐 赤橙	灰黄褐	良好	－	7.6	－	器面摩滅(外)	6	Ⅲ	803
	358	壺	底部	Ⅲ	板ナデ 横ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	黒	明赤褐	良好	－	9	－		6	Ⅲ	885
	359	壺	胴～底	Ⅳ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	黄橙	灰黄	良好	－	4.4	－		8	Ⅲ	1968
	360	壺	底部	Ⅳ	板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	赤褐	浅黄橙	良好	－	3.8	－	丹塗り(外)	8	Ⅲ	2791
	361	壺	胴～底	Ⅳ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，長石　角閃石	黄橙	橙	良好	－	3.8	－		6	Ⅲ	1103
	362	壺	底部	Ⅳ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，黒雲母 長石,砂粒多混	浅黄橙	黄橙	良好	－	7	－		6.5	H26	3993
	363	壺	底部	Ⅳ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，長石 黒雲母	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	5.4	－		4	Ⅲ	716 978
	364	壺	底部	Ⅴ	ハケ目 ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	黄橙 黒褐	黄橙	良好	－	3	－		10	Ⅲ	6547
	365	壺	底部	Ⅴ	ハケ目 ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石	浅黄橙	浅黄褐 浅黄橙	良好	－	2.4	－		6.5	Ⅲ	1230

第19表　弥生土器　観察表11（鉢）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層		注記番号
55図	366	壺	底部	V	ハケ目→ナデ ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 砂粒少混	浅黄橙	灰褐	良好	－	1.0	－		6	Ⅱb	38
	367	壺	胴～底	V	ハケ目→ナデ ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，長石 赤色小石	黄橙	浅黄橙	良好	－	1.2	－		6.5	Ⅲ	2138
56図	368	鉢	口縁～胴	Ⅰ	ハケ目→ナデ	指圧痕 板ナデ→ナデ	石英多混	黒褐 黄橙	黒	良好	19.2	－	－	口縁部に 穿孔(3㎜)有	6.5	Ⅳ	3760
	369	鉢	口縁部	Ⅰ	横ナデ 板ナデ→ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	17.1	－	－	穿孔有	7	Ⅲ	1826
	370	鉢	口縁部	Ⅰ	ナデ	ナデ	長石 白色小石	浅黄橙	灰白	やや良好	－	－	－		7	Ⅳ	2268
	371	鉢	口縁部	Ⅰ	板ナデ→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石	灰褐	黒褐	良好	22.8	－	－		6	Ⅲ	1579
	372	鉢	口縁部	Ⅰ	ナデ ハケ目	横ナデ	精製された胎土	暗褐	黄橙	良好	－	－	－		9.5	Ⅲ	－
	373	鉢	口縁部	Ⅰ	横ナデ	横ナデ ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	赤褐	橙	良好	－	－	－		9.5	H6	－
	374	鉢	口縁部	Ⅱ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ ハケ目	石英，長石	明褐	灰褐	良好	－	－	－		9.5	Ⅲ	1575
	375	鉢	口縁部	Ⅱ	ナデ	ナデ 横ナデ	石英，角閃石 長石,砂粒多混	橙	浅黄橙	やや良好	－	－	－		7.5	Ⅳ	3635
	376	鉢	口縁～胴	Ⅱ	ハケ目→ナデ 指ナデ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，長石 角閃石	黄褐	黄褐	良好	20.8	－	－		10	Ⅲ	6090
	377	鉢	口縁部	Ⅱ	ナデ	ナデ ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙	黄橙	良好	－	－	－		9.5	Ⅲ	－
	378	鉢	頸～胴	Ⅱ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目 板ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	橙	明褐	良好	－	－	－		6.5	Ⅳ	3417
	379	鉢	口縁部	Ⅱ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目	長石，角閃石	明赤褐	橙	良好	－	－	－		6.5	Ⅲ	1353
	380	鉢	口縁部	Ⅱ	ナデ	ハケ目	石英，長石 輝石	浅黄橙 黒褐	黄橙	良好	－	－	－		8	Ⅲ	4831
	381	鉢	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	黄橙	良好	29.1	－	－		14	Ⅲ	526
	382	鉢	口縁部	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石 赤色小石	浅黄橙	浅黄橙	良好	22.4	－	－		10	Ⅲ	4009
	383	鉢	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ	板ナデ→ナデ	長石，角閃石 小石(3㎜)	淡橙 浅黄橙	灰褐	良好	15	－	－		7.5	Ⅲ	2202
	384	鉢	口縁部	Ⅲ	横ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 小石(3㎜)	灰黄褐	黄褐	良好	16.8	－	－		7	Ⅱb	－
	385	鉢	口縁～胴	Ⅲ	横ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英，角閃石 長石,砂粒多混	浅黄橙	黄橙	良好	7.2	－	－		7	Ⅳ	－
57図	386	鉢	口縁～底	Ⅳ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	黄橙	黄橙	良好	18	6.2	10.5		10	Ⅲ	6739
	387	鉢	口縁～胴	Ⅳ	板ナデ→ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 橙	浅黄橙	良好	27.1	－	－		7	Ⅲ	977
	388	鉢	口縁～胴	Ⅳ	横ナデ	ナデ 指圧痕	精製された胎土	明黄褐	浅黄橙	良好	18.4	－	－		9	Ⅲ	6432
	389	鉢	口縁～底	Ⅳ	ハケ目→ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石,砂粒少混	浅黄橙	黄橙	良好	11.8	3.9	6.8		8	Ⅳ	5493
	390	鉢	口縁～胴	Ⅳ	板ナデ→ナデ 指圧痕	ナデ	長石，角閃石	褐灰 橙	明赤褐	良好	11.4	－	－		8	Ⅲ	4545
	391	鉢	口縁部	Ⅳ	ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	灰白	明黄橙	良好	13.8	－	－		10	Ⅲ	6565
	392	鉢	口縁～胴	Ⅴ	板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	精製された胎土	黄橙 褐灰	黒褐	良好	9.6	－	－		10	H20	7085
	393	鉢	口縁～胴	Ⅴ	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	浅黄橙	浅黄橙	良好	9.6	－	－		7	Ⅳ	2070
	394	鉢	口縁～胴	Ⅴ	板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	橙 灰黄褐	浅黄橙	良好	19.4	－	－	煤付着	7	Ⅳ	3613
	395	鉢	口縁部	Ⅴ	ナデ	ナデ	石英，長石	褐	橙	良好	7.5	－	－	突帯	6.5	Ⅲ	3023
	396	鉢	胴～底部	Ⅰ	板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 赤色小石	灰褐	黄橙	良好	－	4.2	－		5	Ⅰ	1422
	397	鉢	胴～底	Ⅱ	ナデ 板ナデ→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 砂粒少混	灰黄褐	黄褐	良好	－	4.3	－		4	Ⅲ	15 32
	398	鉢	脚部	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	橙	良好	－	8.3	－		8	Ⅲ	5157
	399	鉢	脚部	Ⅲ	横ナデ ハケ目	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石,砂粒少混	橙 (底)黒	黄橙 黒褐	良好	－	9	－		8	Ⅲ	5389
	400	鉢	脚部	Ⅲ	ナデ 板ナデ	ハケ目 ナデ	石英，黒雲母 長石,赤色小石	黄橙	灰黄褐 褐灰	良好	－	5.5	－		6.5	Ⅳ	3423
	401	鉢	胴～脚	Ⅲ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	－	6.2	－		6.5	Ⅳ	3978
	402	鉢	脚部	Ⅳ	ハケ目→ナデ ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	浅黄橙	黄橙	良好	－	10	－		10	Ⅲ	7272
	403	鉢	脚部	Ⅳ	板ナデ→ナデ ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	浅黄橙 灰黒	浅黄橙	良好	－	7.4	－		10	Ⅲ	6483
58図	404	高坏	坏部	Ⅰ	横ナデ	ナデ 板ナデ→ナデ	長石，角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	30.1	－	－		10	Ⅲ	6566

第20表　弥生土器　観察表12（髙坏，小型土器他）

挿図番号	遺物番号	器種	部位	分類	調整・文様 外面	調整・文様 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層	注記番号
58図	405	高坏	坏部	Ⅱ	横ナデ	横ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙 橙	黄橙 橙	良好	26.9	－	－		8 Ⅲ	3127
	406	高坏	坏部	Ⅱ	横ナデ	横ナデ 板ナデ→ナデ	石英，長石 砂粒少混	浅黄橙 淡橙	黄橙	良好	22.8	－	－		6 Ⅱb	15
	407	高坏	坏部	Ⅲ	板ナデ→ナデ 指圧痕	横ナデ	石英，長石 角閃石，輝石	黄橙	橙 黄灰	良好	25.2	－	－		6.5 Ⅲ	1998
	408	高坏	坏部	Ⅲ	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石,小石(3㎜)	黄橙	黄橙 黒褐	良好	32.2	－	－		6.5 Ⅳ	3505
	409	高坏	坏部	Ⅳ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石 長石,砂粒少混	浅黄橙	淡黄	良好	39.4	－	－		6.5 Ⅳ	3357
	410	高坏	坏部	Ⅳ	横ナデ ハケ目→ナデ	横ナデ ハケ目→ナデ	精製された胎土	黄橙	浅黄橙	良好	26.2	－	－		9 Ⅲ	3515 144
	411	高坏	坏部	Ⅴ	板ナデ→ナデ	横ナデ ミガキ	精製された胎土	褐	浅黄橙	良好	17.5	－	－		6 Ⅲ	792
	412	高坏	脚部	Ⅰ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，角閃石 長石，黒雲母	黄橙	黄橙	良好	－	－	－	円形透孔 (1孔)	9 Ⅲ	4923
	413	高坏	脚柱部	Ⅰ	ハケ目→ナデ 横ナデ	板ナデ→ナデ	赤色小石を 多く含む	黄橙	黄橙	良好	－	－	－		7.5 Ⅲ	2093
	414	高坏	脚柱部	Ⅰ	ハケ目→ナデ	ナデ 指圧痕	長石，角閃石 小石(7㎜)	明黄褐	黄橙	良好	－	－	－	突帯	13 Ⅲ	137
	415	高坏	脚部	Ⅱ	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	精製された胎土	浅黄橙	浅黄橙 橙	良好	－	13.8	－	円形透孔 (2孔)	8 Ⅲ	2995
	416	高坏	脚柱部	Ⅱ	板ナデ ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		9.5 Ⅱb	155
	417	高坏	坏～ 脚柱部	Ⅲ	横ナデ 板ナデ→ナデ	ナデ	精製された胎土	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－		5 Ⅳ	383
	418	高坏	脚柱部	Ⅳ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	黄橙	黄橙	良好	－	－	－	円形透孔 (1孔)	9 Ⅲ	2133
	419	高坏	脚柱部	Ⅲ	ハケ目→ナデ	板ナデ→ナデ	精製された胎土	黄橙	褐灰	良好	－	－	－		9.5 Ⅱb	158
	420	高坏	脚柱部	Ⅲ	板ナデ→ナデ	ナデ 指圧痕	石英，長石	橙	橙	良好	－	－	－	円形透孔 (1孔)	9.5 H21	4757
	421	高坏	脚部	Ⅲ	横ナデ ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黒褐	黄褐	良好	－	12.8	－		6.5 Ⅲ	1224
59図	422	器台	胴部	－	ハケ目→ナデ	ハケ目 ナデ	長石，赤色小 石，小石(5㎜)	黄橙	浅黄橙	良好	－	－	－	円形透孔 (1孔)	9 Ⅲ	2102
	423	器台	胴部	－	ハケ目→ナデ →ミガキ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，長石 小石(7㎜)	橙	黄橙	良好	－	－	－	円形透孔 (3孔)	6.5 Ⅲ	2055
	424	器台	底部	－	ハケ目→ナデ 横ナデ	ハケ目→ナデ	石英，角閃石	浅黄橙	灰黄	良好	－	30	－	円形透孔 (2孔)	10 Ⅲ	3395
	425	器台	口～底	－	横ナデ	ハケ目→ナデ 横ナデ	石英，長石 黒雲母	浅黄橙	灰白	良好	9.9	9.5	4		8 Ⅲ	5161
	426	支脚	胴～底	－	板ナデ→ナデ ナデ	ナデ	石英，角閃石 長石，金雲母	明褐	褐	やや 良好	－	4.8	－	煤付着	7.5 Ⅲ	2025
	427	蓋	天頂～庇	－	ハケ目→ナデ ナデ	ハケ目→ナデ	石英，長石 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	－	25.8	－	煤付着	10 Ⅲ	6995
	428	蓋	天頂～庇	－	ミガキ 横ナデ	ミガキ	石英，角閃石	浅黄橙 灰黄	黄橙 黒褐	良好	－	24	－	煤付着	6 Ⅲ	1476
	429	ジョッキ 型土器	突手	－	板ナデ→ナデ ナデ	ナデ	精製された胎土	灰褐	暗灰褐	良好	－	－	－		7.5 Ⅲ	2057
	430	小型土器	口縁～底	Ⅰ	ナデ	板ナデ→ナデ	砂粒多混	浅黄橙	浅黄橙	良好	8	3.4	6.1		7.5 Ⅲ	2012
	431	小型土器	底部	Ⅰ	ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	黒褐	褐灰	良好	－	2.9	－		6.5 Ⅲ	1933
	432	小型土器	底部	Ⅰ	手捏ね	板ナデ→ナデ	石英，角閃石	黄橙	黄橙	良好	－	2.4	－		7.5 深掘	3053
	433	小型土器	口縁～底	Ⅰ	ナデ	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，長石 角閃石	橙	橙	良好	7.2	3.2	8.7		6.5 Ⅲ	2140
	434	小型土器	口縁～底	Ⅱ	板ナデ→ナデ 指圧痕	手捏ね	石英，長石	黒褐	黒褐	良好	6.4	3.1	5.3		6.5 Ⅳ	3418
	435	小型土器	口縁～底	Ⅱ	手捏ね	手捏ね	石英，長石 黒雲母	橙	橙	良好	6.1	3.6	5		6 Ⅱb	411
	436	小型土器	底部	Ⅱ	板ナデ→ナデ 指圧痕	ナデ	石英，角閃石 長石,砂粒多混	浅黄橙	黄褐	やや 良好	－	4.8	－		6.5 Ⅲ	2611
	437	小型土器	底部	Ⅱ	板ナデ ナデ	板ナデ→ナデ	角閃石 砂粒多混	浅黄橙	黒褐	良好	－	3.6	－		6 Ⅲ	505
	438	小型土器	口縁～胴	Ⅲ	板ナデ→ナデ 指圧痕	ハケ目→ナデ 指圧痕	石英，角閃石	浅黄橙	灰黄	良好	6.8	－	－		6 Ⅲ	547
	439	小型土器	口縁～底	Ⅲ	ナデ	ハケ目→ナデ ナデ	石英，角閃石 長石,砂粒少混	黄橙	黄橙	良好	6.1	3.6	7.2		6.5 Ⅲ	1856
	440	小型土器	胴～底	Ⅲ	ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ	石英，長石 角閃石	浅黄橙 黒褐	浅黄橙	良好	－	4.8	－		9.5 Ⅱb	6124
	441	小型土器	底部	Ⅲ	板ナデ→ナデ 指圧痕	手捏ね	長石 赤色小石	黄橙	黄橙	良好	－	5.6	－		9.5 H6	2365
	442	小型土器	口縁～底	Ⅳ	手捏ね	手捏ね	石英，角閃石 長石,小石(4㎜)	褐灰	黄褐	やや 良好	7	0.5	4.6		6.5 Ⅲ	1601
	443	小型土器	胴～底	Ⅳ	板ナデ→ナデ ナデ	ナデ	石英 砂粒少混	灰黄	黄橙	良好	－	2	－		6.5 深掘西	3362

第３節　弥生時代の石器

弥生時代の石器として磨製石鏃及び石庖丁のほか，磨石・凹石類と石皿を取り上げたが前二者は弥生時代以外ではありえない。磨石・凹石類と石皿など食物質食料加工具については，縄文時代に多く使用されており，また下限として古墳時代までの使用が想定されるため，明確な石器の時期区分は困難なことより弥生時代の石器の項で取り上げることにした。そのため後者の石器は弥生時代のみとして限定していない。また，磨製石鏃や石庖丁などを研ぐ砥石については，弥生時代のほか古墳時代・古代・中世と時代を越えて使用されていることより，古代の石器の節で取り上げた。これらの石器の出土層位はⅢ層及びⅣ層である。

磨製石鏃

444 は 16 号住居跡の床面から出土した。頁岩製であり，表裏両面とも主に横方向に研磨が施されており，横断面はレンズ状であり研磨による側縁刃部の鏑はない。基部は縦方向の研磨により凹基に仕上げられている。先端半分及び基部片側の一部を欠損する。

磨製石鏃未製品

445 ～ 454 は磨製石鏃の未製品である。445 は表裏両面に研磨が認められるものであり，また側面の一つは横方向に擦痕が確認でき，擦り切技法による分割の可能性が考えられる。

446 ～ 448 は周縁を粗く細かい二次加工で整形されており，表裏は節理面で剥がされている。整形の過程でうすくなり過ぎたものや，破損したために捨てられたものと推定される。同様に 449 や 450 も製作途中で捨てられたものであろう。451 ～ 452 は比較的大きさがあり，周縁は粗い二次加工により整形されている。これらは研磨が行われる前の未製品として位置づけられる。石材はいずれも頁岩であるが節理面の状況から粘板岩に近い石材である。ただし，452 のみ硅質の強い比較的良質な頁岩を使用している。ここで図化したもの以外に 16 号住居跡の床面及びこの住居跡の周辺では磨製石鏃の未製品や関連する剥片及びチップが少なからず出土した。

石庖丁

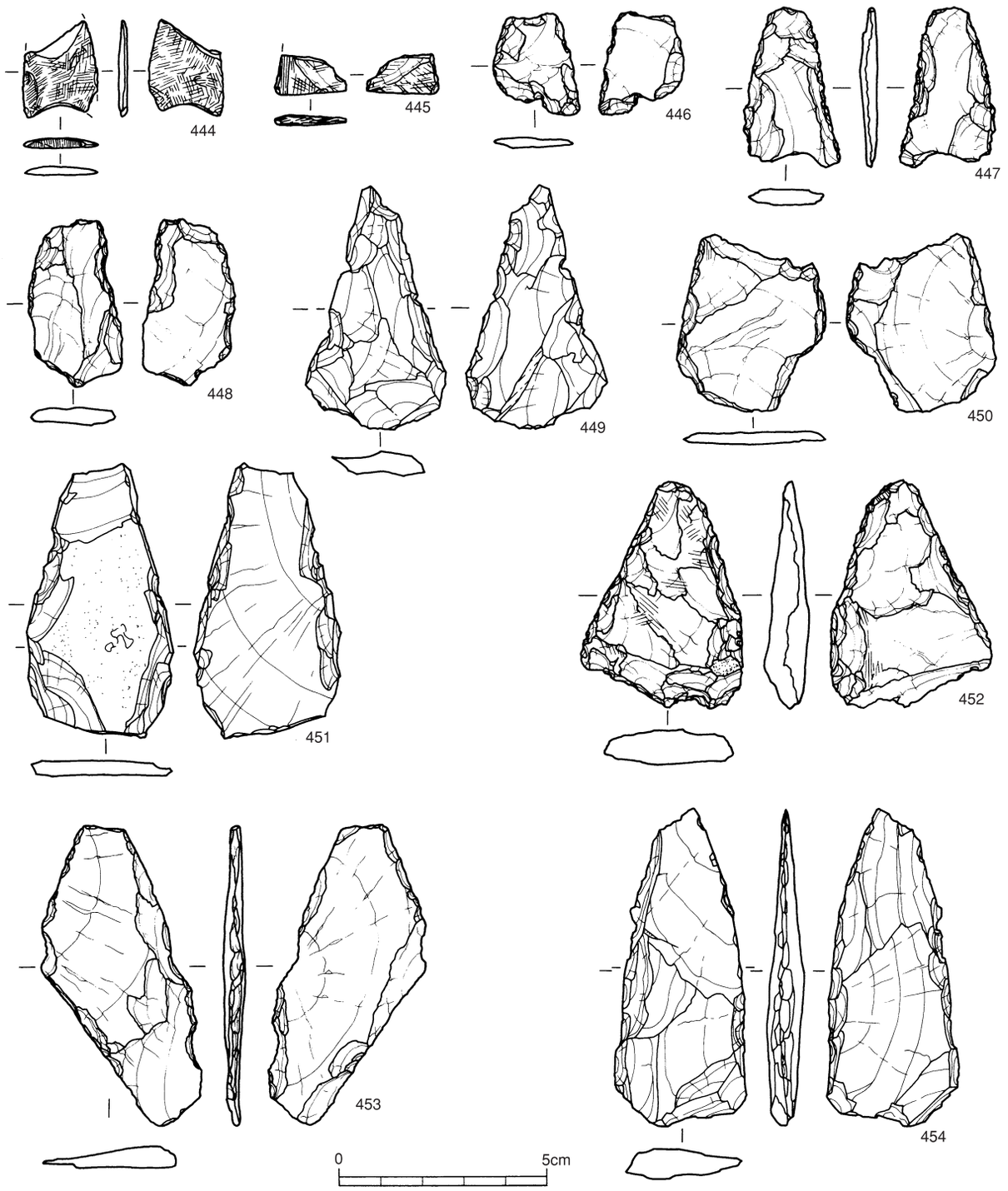
刃部の形態から大きく２類に分類できる。

Ⅰ類…孤状の刃部で全体が半月状を呈するもの（455・456）

455 は欠損しているものの直線的な背部と孤状の刃部を持つものである。穿孔は二ヶ所であり，両面から施されている。他と比較すると穿孔の外径凹みは大きい。456 も欠損品であるが直線的な背部と孤状の刃部を持つ。いずれも研磨は背面と刃部のみ入念に行われ，これらの石材は共通しており節理がある硬質砂岩が利用されている。

Ⅱ類…直線的な背部と刃部をもち全体が長方形状を呈するもの（457 ～ 468）

457 は直線的な背部及び刃部を有し，背部の両端は丸く仕上げられている。石材は凝灰岩であり表裏両面のみでなく背縁や側面も丁寧に研磨が施されている。刃部は両面から研磨され両刃となる。458 は斜刃となっているが刃部の研ぎ直しによる変形と考えられる。459 は２ヶ所の穿孔位置が片側によっているものの，片側が破損しているため意識的がどうか明確ではない。460 は比較的細めの形態であるが刃部の研ぎ直しによるものと推定される。458 ～ 460 はいずれも頁岩を石材とし，表裏両面を丁寧に研磨し，刃部は両刃につくられている。461 の片面に（図の右側）には，途中で止まった穿孔の痕跡が２ヶ所認められる。462 ～ 468 は破損品の一部であり，このうち 462

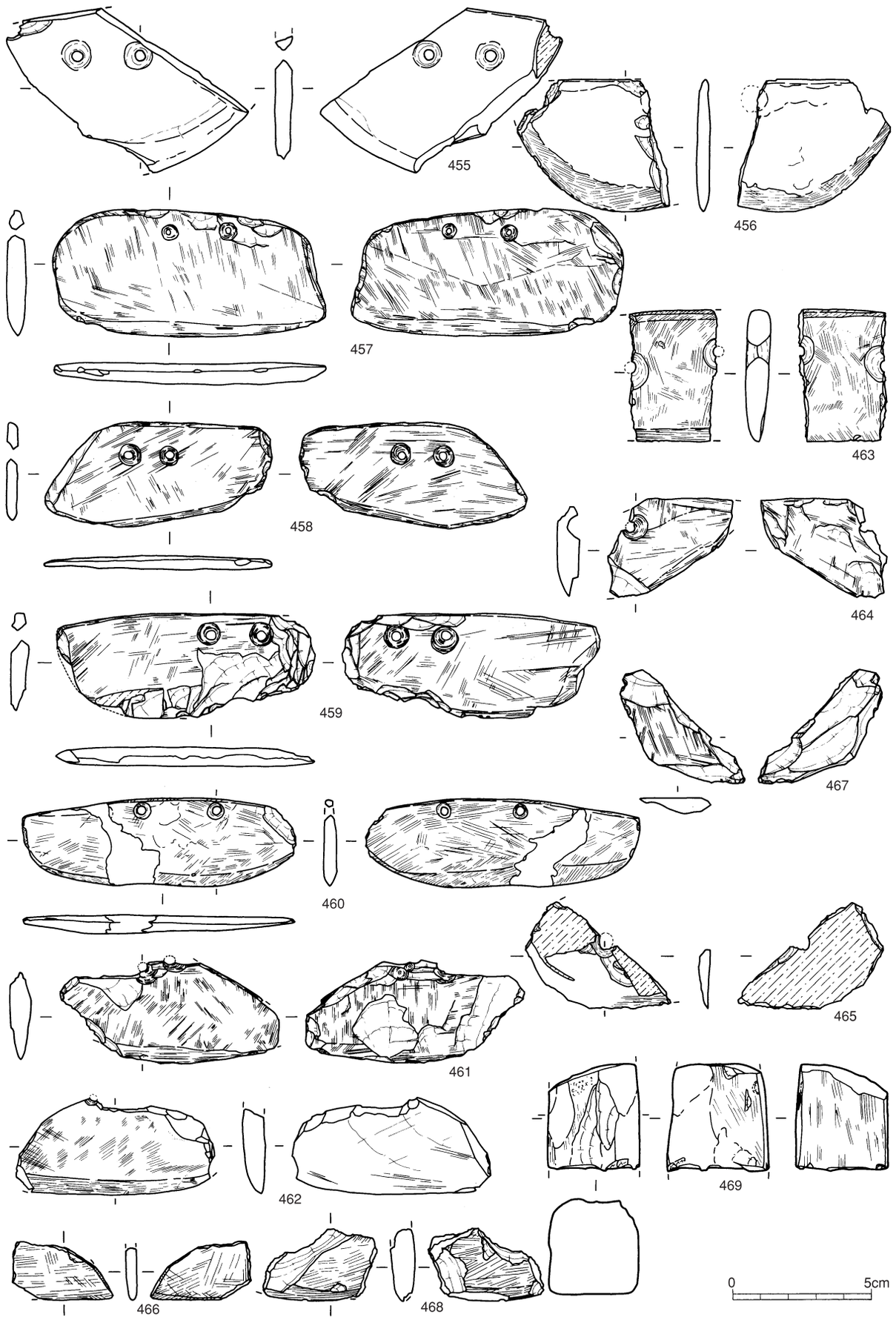


第62図　弥生時代の石器1（磨製石鏃と未製品）

及び 463 の刃部は片刃に仕上げられている。

柱状石斧

469 は平坦に研磨された底面と底面に接する部分の側面の研磨によりやや丸みをもつ表面から，弥生時代に特徴的な抉り入り柱状片刃石斧の一部と推定されるものである。ただし，基部及び刃部を欠損するため抉りの有無や片刃かどうか明確ではない。



第63図　弥生時代の石器2（石庖丁）

磨石

出土した磨石は形態により大きく５類に区別できる。

１類…直径７㎝以上の中型から大型のもので表裏両面に磨面のみが主体のもの。

470 は比較的大型のもので，表裏両面に磨面があり，側面の一部にはわずかに敲打痕も認められる。472 も同様である。473 ～ 478 もこの部類の破片と考えられる。

２類…大型で表裏両面の磨面のほか，長軸の両端にも面的な磨面が認められるもの。

471 は大型品であり，表裏両面は磨面として利用されているのみではなく，使用のため 球面が平面に変形している。また長軸の両端も両面から面的に磨られており変形度が著しい。

３類…小型で磨面のみがあるもの。

479 ～ 485 は小型品であり，表裏二面あるいは片面に磨面のみが認められるものである。484 の片面は磨面が顕著である。

４類…中型で表裏の磨面のほか，側面には敲打痕が面状に残るもの。

486 は両面の磨面のみでなく，側縁が敲打により面状に変形している。

５類…小型で表裏の磨面のほか，側縁には敲打が顕著に認められるもの。

487 は表裏両面とも顕著な磨面があり，また周縁も平坦に変形するほど敲打及び磨面として利用されている。488 と 489 は側面に敲打痕や磨面が形成されており，これらが進行すると 487 のようになると思われる。

凹石

本来凹石は磨石の中央部に敲打痕による凹みが認められ，磨石・凹石類として一括して取り扱う場合が多いが，ここでは凹石のみを３類に区分した。

１類…磨石の両面に敲打が集中した凹みがあるもの。

敲打が集中するが凹みが浅いもの（490 ～ 491・497）のほか，凹みが比較的深いもの（492）あるいは敲打面が広いもの（493）など使用度の違いにより差が認められる。また通常の磨石のように側縁全周に敲打があるもの（493・495）もある。

２類…平坦面に敲打が集中するのみでなく，側面にも集中する敲打があるもの。

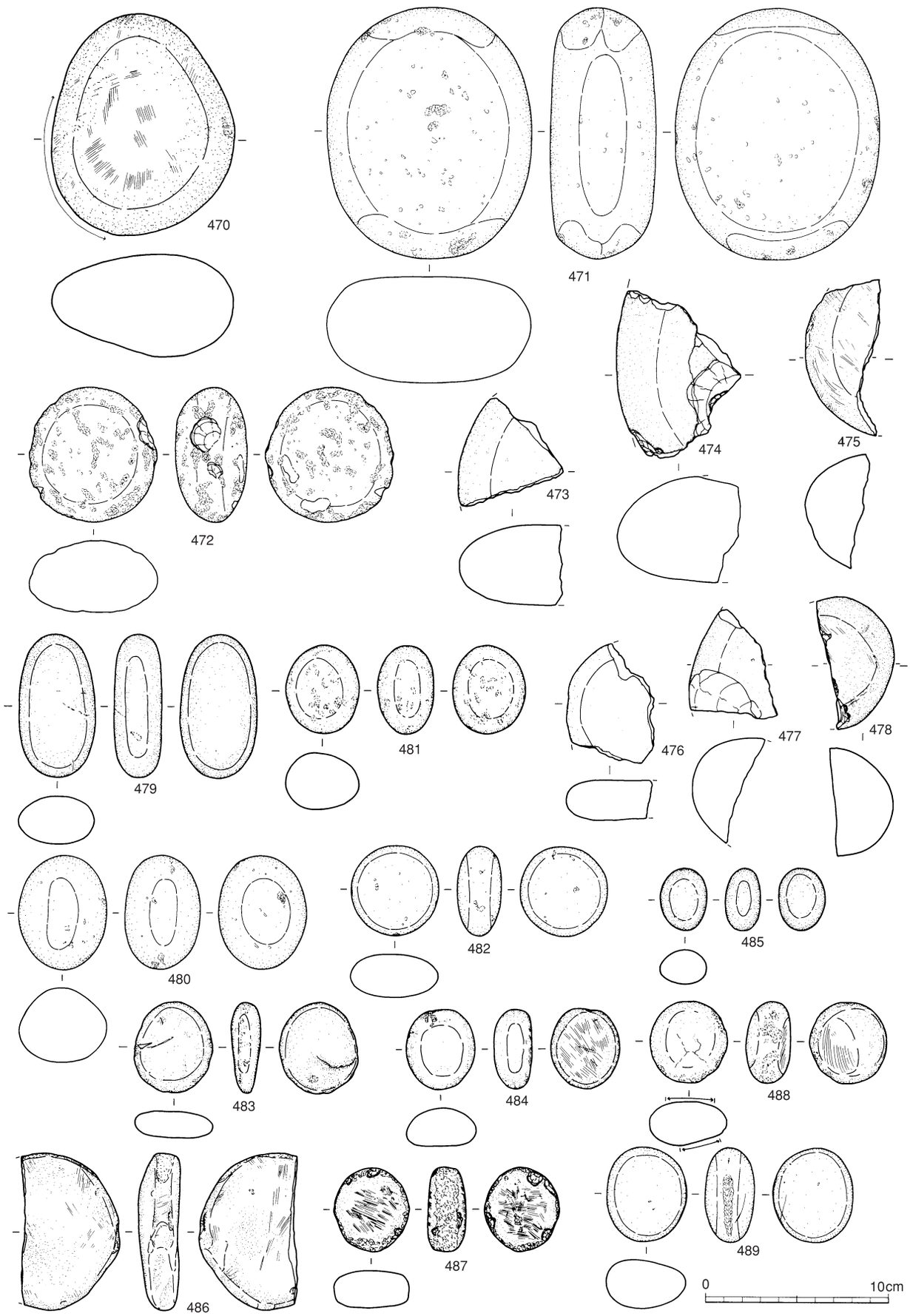
１類の凹石の状況に加えて長軸の両端（498）や左右両端にも敲打痕が集中するもの（499・500・501）などがある。また，敲石の両面に浅い敲打が集中しているもの（501 ～ 503）などがある。

棒状敲石

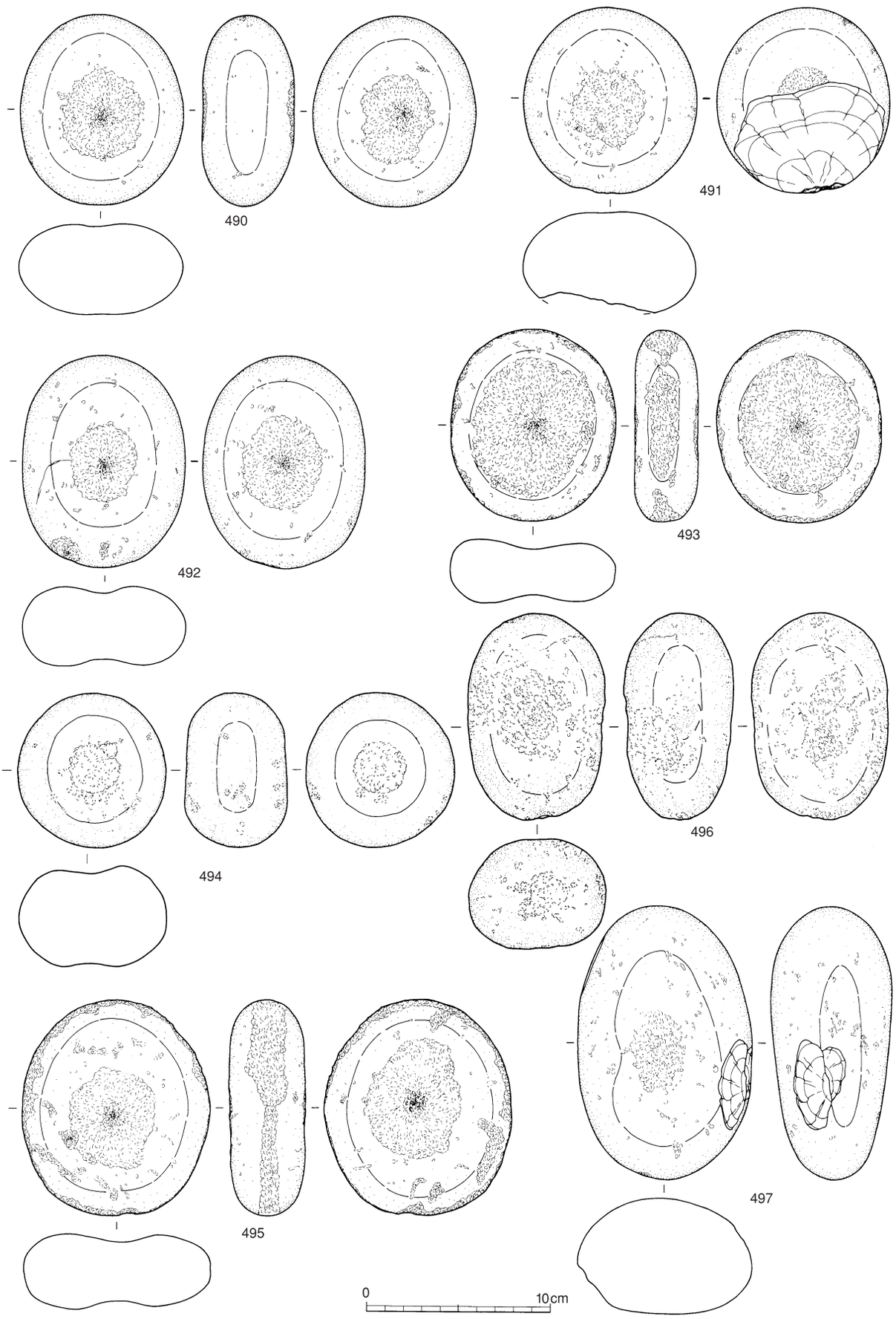
504 ～ 508 は長軸の両端に敲打痕が認められるものである。このうち 505 は石英製であり先端部のみでなく，側面にも敲打痕が残る。507・508 はパンチとして利用された可能性も考えられる。509 は他の敲石と異なり円柱状ではなく，平坦な板状を呈するが，同様に長軸の両端に敲打痕が観察されることよりパンチとして利用されたものと考えられる。

石皿

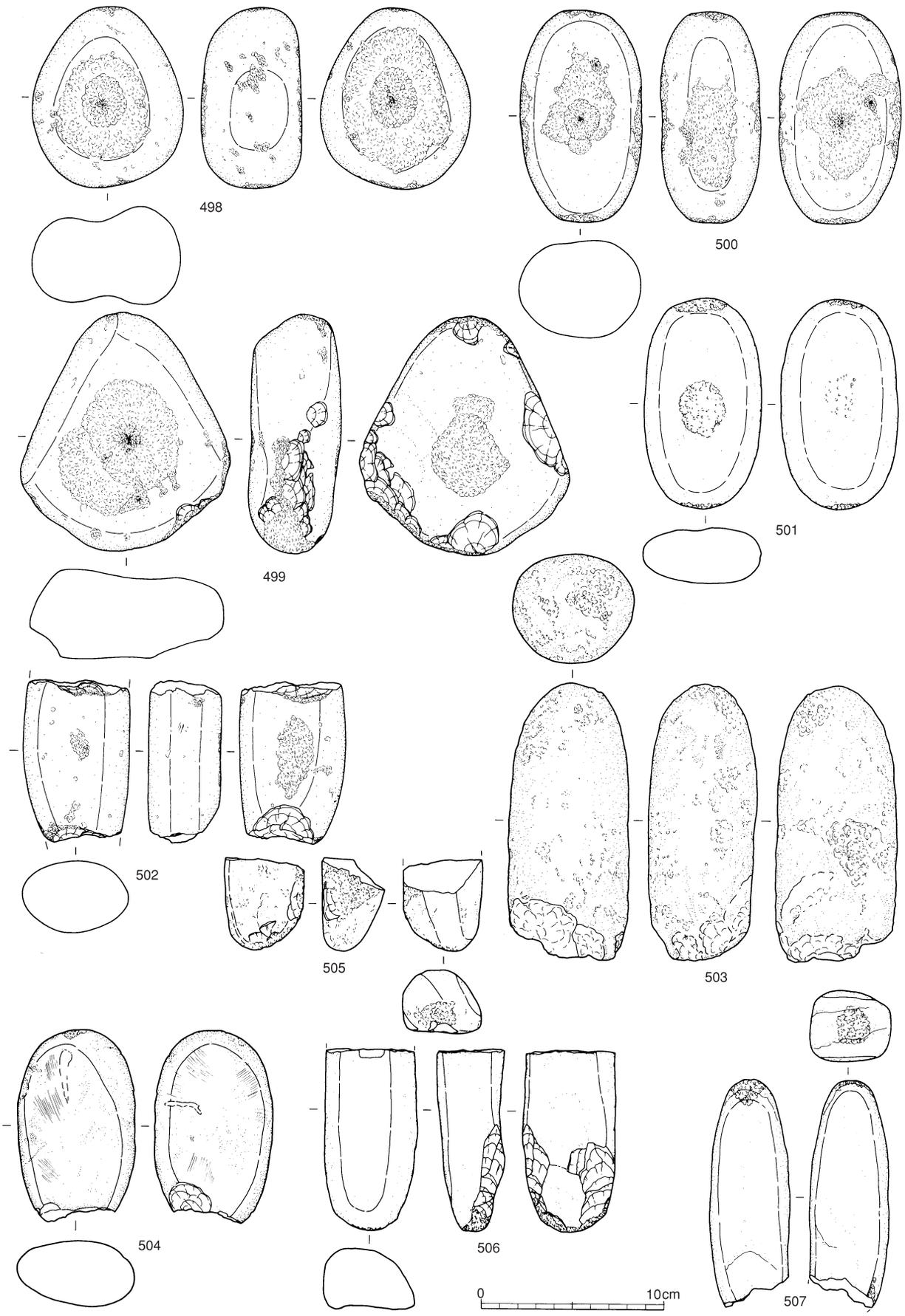
510 ～ 519 は石皿である。510 は表裏両平坦面が使用されている。また 514・515 と 519 も同様に平坦な表裏両面が使用されている。いずれの石皿も石材は安山岩である。



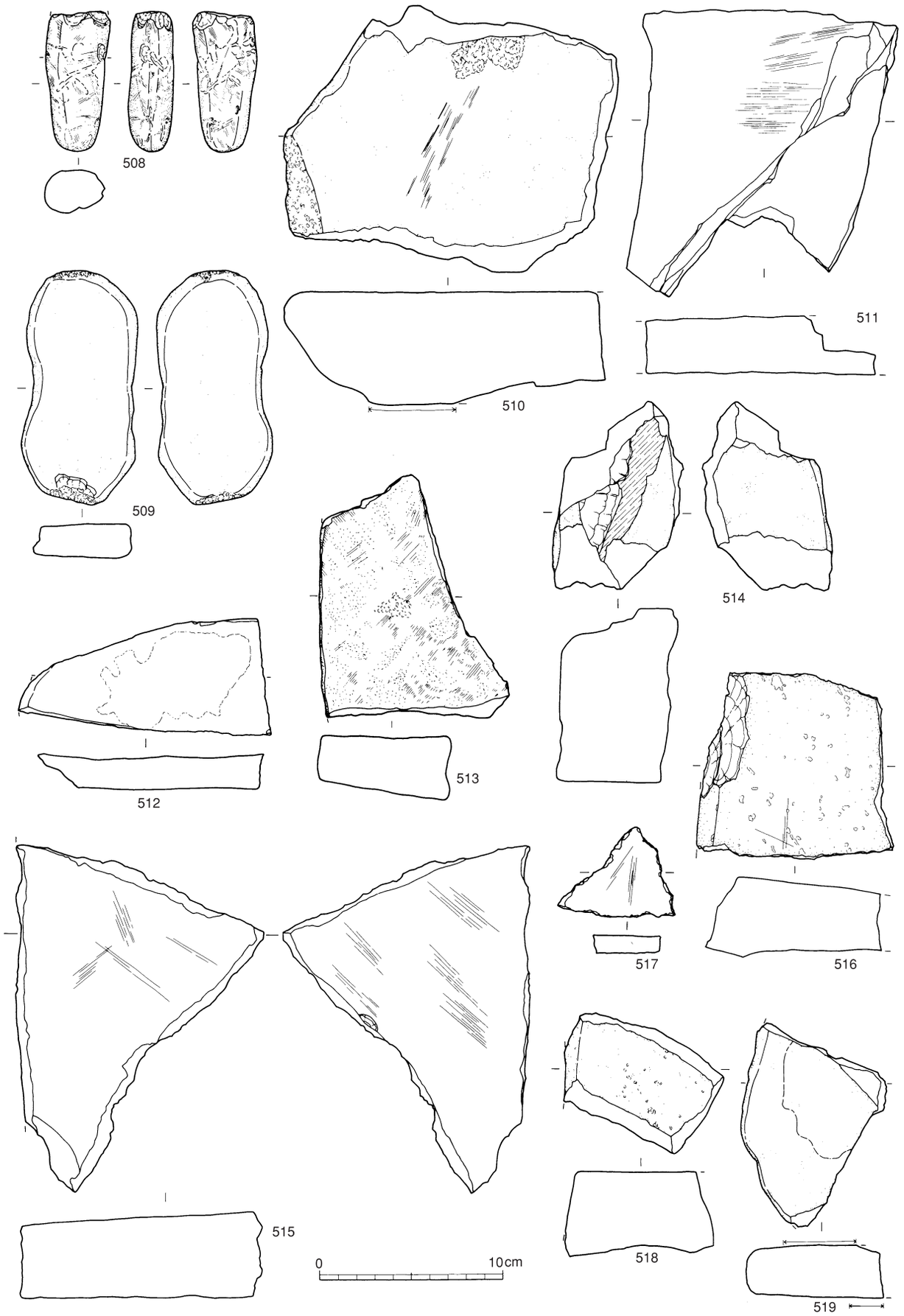
第64図　弥生時代の石器3（磨石）



第65図　弥生時代の石器4（凹石）



第66図　弥生時代の石器5（棒状敲石他）



第67図　弥生時代の石器6（石皿）

第21表　弥生時代石器計測表

挿図番号	番号	器　種	出土区・層	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号
62図	444	磨製石鏃	8　H16-Ⅳ	頁岩	2.30	1.75	0.15	1.05	5913
	445	磨製石鏃未製品	8　Ⅳ	頁岩	0.90	1.70	0.20	0.38	5596
	446	磨製石鏃未製品	8　Ⅳ	頁岩	2.40	2.05	0.25	1.14	5522
	447	磨製石鏃未製品	8　H16-Ⅳ	頁岩	3.75	2.30	0.40	2.96	6059
	448	磨製石鏃未製品	6.5　Ⅱb	頁岩	4.00	2.20	0.40	4.15	1819
	449	磨製石鏃未製品	6.5　Ⅱb	頁岩	5.80	3.35	0.50	9.54	768
	450	磨製石鏃未製品	6.5　Ⅲ	頁岩	4.25	3.55	0.25	5.42	2404
	451	磨製石鏃未製品	7.5　Ⅲ	頁岩	6.50	3.50	0.35	13.34	2302
	452	磨製石鏃未製品	8　Ⅲ	頁岩	5.40	3.85	1.00	18.67	4034
	453	磨製石鏃未製品	8　6T-4	頁岩	7.15	3.80	0.45	10.35	466
	454	磨製石鏃未製品	6　Ⅲ	頁岩	7.55	3.15	0.85	20.97	1100
63図	455	石庖丁	6.5　Ⅲ	硬質砂岩	8.75	5.95	0.60	34.65	3089
	456	石庖丁	5　Ⅳ	硬質砂岩	5.50	4.75	0.45	18.43	808
	457	石庖丁	8　Ⅳ	凝灰岩	9.85	4.60	0.70	52.78	5555
	458	石庖丁	6　H14	頁岩	8.20	3.80	0.50	20.80	991
	459	石庖丁	9.5　H8	粘板岩	9.40	3.80	0.65	35.37	
	460	石庖丁	8　Ⅲ	頁岩	9.95	3.10	0.65		4429
	461	石庖丁	7.5　Ⅳ	頁岩	7.90	3.70	0.80	24.17	4028
	462	石庖丁	6.5　Ⅱb	頁岩	7.20	3.50	0.75	29.10	663
	463	石庖丁	6　Ⅲ	頁岩	3.20	4.70	0.85	23.17	1258
	464	石庖丁	7　Ⅳ	頁岩	4.60	3.50	0.80	14.24	2979
	465	石庖丁	6　Ⅲ	硬質砂岩	5.30	3.80	0.40	6.72	1314
	466	石庖丁	8　Ⅳ	砂岩	3.60	2.10	0.35	4.08	6085
	467	石庖丁	6T　Ⅲ	頁岩	4.50	5.15	0.50	7.31	355
	468	石庖丁	8　Ⅲ	赤色硬質砂岩	4.15	2.60	0.85	9.13	3255
	469	磨製石斧片	6　Ⅲ	頁岩	3.85	3.30	3.45	101.99	1577
64図	470	磨石	5　Ⅳ	安山岩	12.00	9.90	5.55	955.00	183
	471	磨石	7　Ⅳ	安山岩	13.60	11.15	5.75	1450.00	3342
	472	磨石	8　Ⅲ	安山岩	7.30	6.95	3.85	246.15	537
	473	磨石	9.5　Ⅲ	安山岩	5.90	5.70	4.35	162.18	1239
	474	磨石	12　P	安山岩	9.00	67.00	5.65	344.50	1028
	475	磨石	5	安山岩	8.50	4.00	6.00	212.46	1422
	476	磨石	9.5　P32	安山岩	6.45	4.85	2.15	103.59	
	477	磨石	13　Ⅲ上	安山岩	5.90	4.80	5.50	141.23	
	478	磨石	5	砂岩	7.20	4.20	5.85	196.59	1422
	479	棒状磨石	12　溝	砂岩	7.75	4.15	2.60	135.25	862
	480	小型磨石	8　Ⅲ	安山岩	6.15	4.80	4.05	169.61	1641
	481	小型磨石	14　Ⅲ	砂岩	4.75	4.00	3.05	78.50	537
	482	小型磨石	7.5　Ⅳ	安山岩	4.80	4.80	2.35	64.63	3258
	483	小型磨石	12　溝	安山岩	4.90	4.30	1.35	45.70	878
	484	小型磨石	8　Ⅲ	砂岩	4.35	3.80	2.00	49.41	892
	485	小型磨石	12　Ⅲ	砂岩	3.35	2.55	1.85	22.51	157
	486	磨石	5	砂岩	8.55	5.35	2.25	163.27	1422
	487	小型磨石	8　Ⅳ	砂岩	4.55	4.15	2.00	55.52	6110
	488	小型磨石	15　Ⅲ	砂岩	4.40	4.20	2.30	58.80	55
	489	小型磨石	8　Ⅳ	砂岩	5.10	4.40	2.60	86.32	5989
65図	490	凹石	7　Ⅳ	安山岩	10.30	8.80	4.85	714.50	3424
	491	磨石・凹石	7.5　Ⅳ	凝灰岩	10.05	9.35	5.00	654.50	4015
	492	凹石	7.5　H32	安山岩	11.50	8.75	4.30	825.50	19
	493	凹石	7.5　Ⅳ	安山岩	10.35	8.90	3.40	472.50	3263
	494	凹石	7　Ⅳ	安山岩	8.30	8.00	5.40	592.50	2448
	495	凹石	8　Ⅲ	安山岩	11.70	10.15	4.05	775.00	3129
	496	凹石	12　Ⅲ	安山岩	11.00	7.40	5.90	627.50	202
	497	凹石	11　P	安山岩	14.75	9.45	6.25	1335.00	278
66図	498	凹石	7.5　Ⅲ	安山岩	9.85	8.15	5.35	667.50	2711
	499	凹石	7　Ⅳ	安山岩	13.00	11.35	4.80	942.00	2526
	500	凹石	7　Ⅲ	安山岩	11.50	6.65	5.25	610.00	1131
	501	凹石・敲石	10　Ⅲ	安山岩	11.40	6.40	3.00	402.50	3449
	502	凹石・敲石	7　Ⅳ	安山岩	8.80	5.80	3.90	355.00	2533
	503	凹石・敲石	12　Ⅲ	安山岩	14.95	6.70	5.85	647.50	812
	504	敲石	14　溝1	安山岩	10.45	6.40	3.50	324.81	669
	505	敲石	9　Ⅲ	石英	4.95	4.35	3.35	94.08	6137
	506	棒状敲石	8　Ⅲ？	砂岩	9.90	5.05	3.20	278.41	1501
	507	棒状敲石	7　H33	安山岩	12.40	4.35	3.85	309.88	3730
67図	508	棒状敲石	5	砂岩	8.00	3.50	2.30	86.83	1422
	509	敲石	7　Ⅳ	安山岩	12.70	6.20	1.85	275.04	3274
	510	石皿	10　Ⅲ	安山岩	18.50	14.55	6.15	2600	3224
	511	石皿	9.5　Ⅲ	安山岩	15.55	14.00	3.05	995.00	1164
	512	石皿	5　Ⅳ	安山岩	13.80	6.30	1.80	247.82	582
	513	石皿	5　Ⅳ	安山岩	13.25	10.40	3.45	635.00	655
	514	石皿	6T　Ⅳ	安山岩	10.25	7.10	9.45	722.50	485
	515	石皿	9.5　H6	安山岩	18.90	13.45	4.55	1372.50	2368
	516	石皿	8　Ⅳ	安山岩	10.70	10.05	4.30	785.00	5760
	517	石皿	13　Ⅲ	安山岩	6.35	4.85	0.95	33.13	197
	518	石皿	7.5　Ⅲ	安山岩	8.70	7.65	4.55	422.50	2795
	519	石皿	10　Ⅲ	安山岩	110.50	8.00	2.80	332.90	3015

第Ⅵ章　古墳時代の遺構と遺物

第１節　検出遺構

古代の遺物包含層であるⅢ層の下面で古墳時代の遺構が検出された。遺構は直刀などを副葬品とする土坑墓や耳環を副葬とする土坑墓のほか，須恵器坏･蓋が集中していた土坑などが認められた。

土坑墓　１

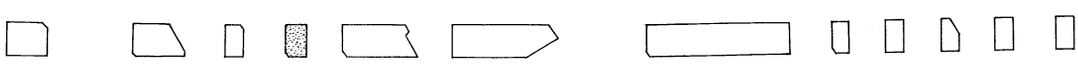
K13 で検出された。最初完形の須恵器坏が出土し，その後に下面から直刀が確認されたことより土坑の存在が明らかになった。最初に出土した須恵器も出土地点は土坑内の出土であることが判明した。土坑は長楕円形を呈し，長さ 190 ㎝，幅は片面が埋土の色調が周辺の土の色調と区別が困難な面があり明確でないものの約 100 ㎝である。検出面からの深さは，須恵器を考慮すると約 30 ㎝以上となる。底面はほぼ平坦であった。副葬品として直刀・剣・鉄鏃などをもつ土坑墓であると推定される。

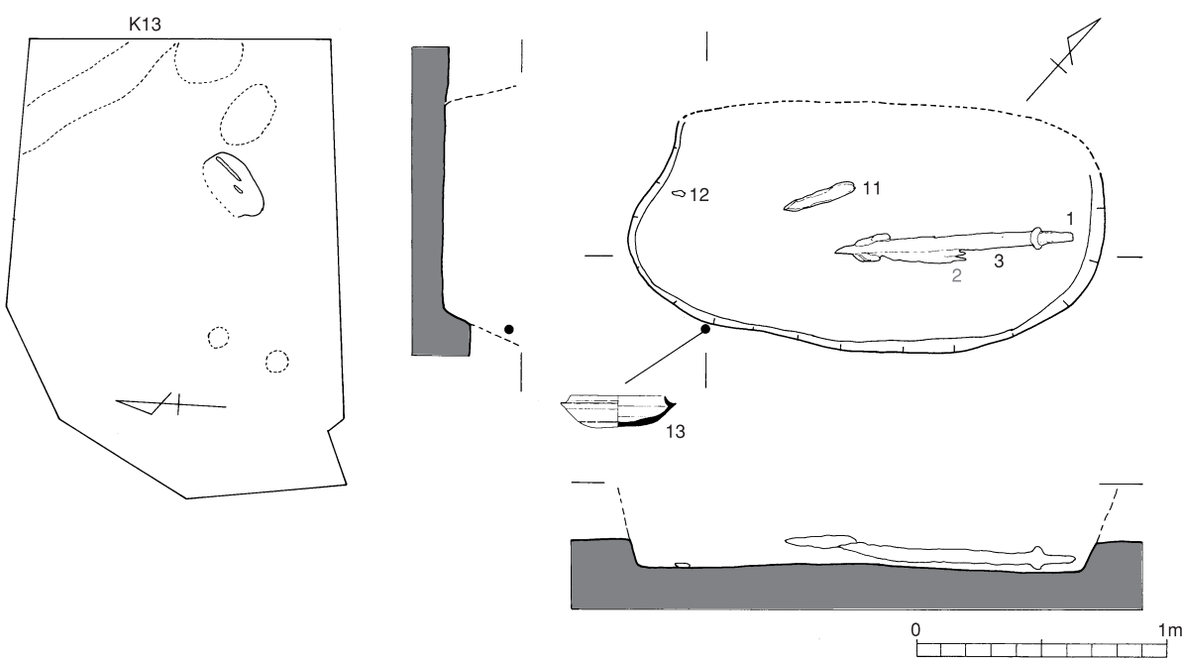
出土遺物（第 69 図）

土坑のほぼ中心部底面直上で１の大刀に２の短刀及び３の短剣が付き，先端部には４～ 10 の鉄鏃が付着して出土した。わずかに離れて 11 の短剣があり，西側の壁近くに 12 の鏃が出土した。須恵器の位置は壁面近くであり，レベル的には約 30 ㎝上位であった。

１は大刀であり全長 96.2 ㎝を測る。鐔を有しており，茎には二つの目釘孔があるほか，刃部の関近くに鎺本穴が認められるものである。目釘孔及び鎺本穴はＸ線写真により確認されたが，鐔の窓は確認できなかったことより無窓鐔の可能性が高い。

２・３は錆着により１から切り離すことはできなかった。２は茎部に目釘孔が一つ確認できる短





第68図　古墳時代　土坑墓1



第69図　古墳時代　土坑墓1の出土遺物

刀である。３は短剣であり，短い茎には目釘孔が一つ認められる。

４～11は大刀の先端に錆着した鉄鏃である。いずれも柳葉形鉄鏃であり逆刺をもつ。また頸部には独立逆刺が片側に付く。

11は大刀から西側にわずかに離れて出土した短剣である。これも茎部は短く，身との境には金属製の装着具が付く。茎には細長い目釘孔が認められる。

12は一つ離れて出土したもので，他の鉄鏃と同様に逆刺をもつ柳葉形鉄鏃であり，頸部にも同様に独立逆刺をもつ。

13は須恵器坏身である。受部からの立ち上がりは短く内傾する。底部は回転ヘラケズリが施されている。色調は暗紫色を呈する。

土坑墓　２

K10の西側で検出され，その一部は調査区域外へ伸びている。土坑の幅は約65㎝であり，長さは区域外については不明であるが，調査した部分だけでも約１ｍを測る。検出面からの深さは約45㎝である。底面は平坦であり，壁面は垂直に近い。底面から約10㎝の高さに耳環が２点検出されたことより土坑墓と判断された。

出土遺物（第70図14・15）

２点の耳環はほぼ同一の形状である。出土時点では青錆で覆われていたが，クリーニングの結果金色の光をもつ。15は調査中欠けたもので青錆より銅を主体とし，２点とも表面の金色は蛍光X線分析によると金と銀の合金であることが判明した。

古墳時代土坑

K6.5の西側において，弥生時代の26号住居跡上面で確認した。当初一つの住居跡からの出土と思われたが，埋土の土が周囲の住居跡と異なり，また住居内の出土遺物は全て弥生土器片であることより単独の土坑と判断した。土坑内からはつぶれた状況の須恵器と大型礫が確認され，さらに礫の下からも須恵器が発見され，その破片は接合している。土坑墓の可能性もある。土坑は長径×短径が130㎝×120㎝の楕円形を呈し，礫から下の深さは約20㎝であった。

出土遺物（第71図16～19）

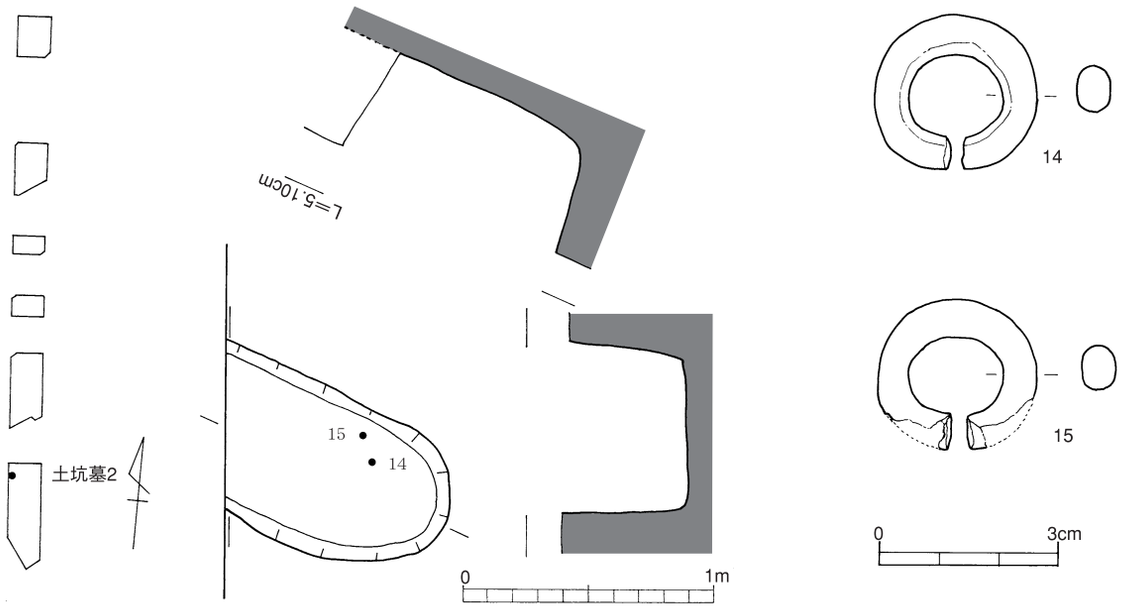
高坏蓋２点，坏蓋１点と坏身１点がほぼ完形で出土した。

16・17は偏平なつまみを有する高坏蓋である。天井部と口縁部の境にはシャープな稜をもつ。天井部全体に回転ヘラケズリが施されている。18はつまみの有無が明確でないが，恐らくつまみの無い坏蓋であろう。天井部の回転ヘラケズリや稜及び口唇部の状況などはほぼ高坏蓋と同様である。

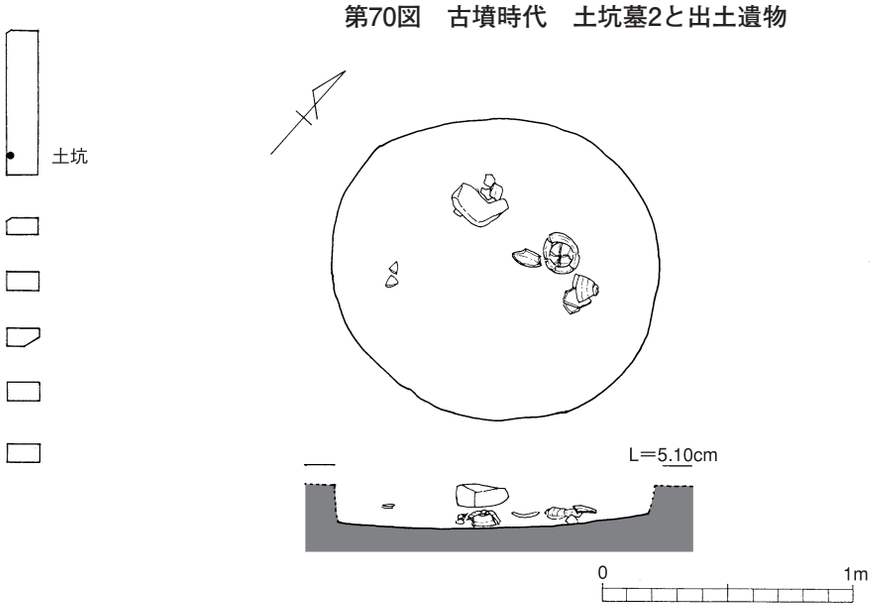
19は坏身である。受け部からの立ち上がりはほぼ直に近く長い。体部には櫛描き波状文が施されている。それ以下の底部は回転ヘラケズリが行われている。

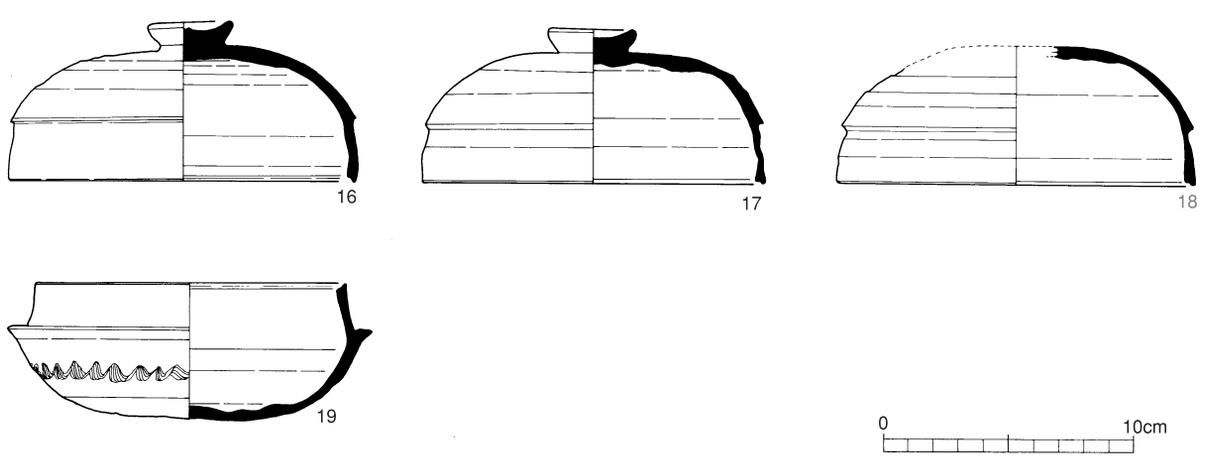
第２節　古墳時代の出土遺物

古墳時代の出土遺物はⅢ層下半からⅣ層にかけて出土した。遺物量の多い古代や弥生時代と比較すると古墳時代の遺物は少なかった。出土した遺物は土師器の高坏や甕・甑などと，須恵器の坏蓋や坏身などがみられた。また，鉄器としては鉄剣や鉄鏃などがみられた。出土分布は全体に散在し

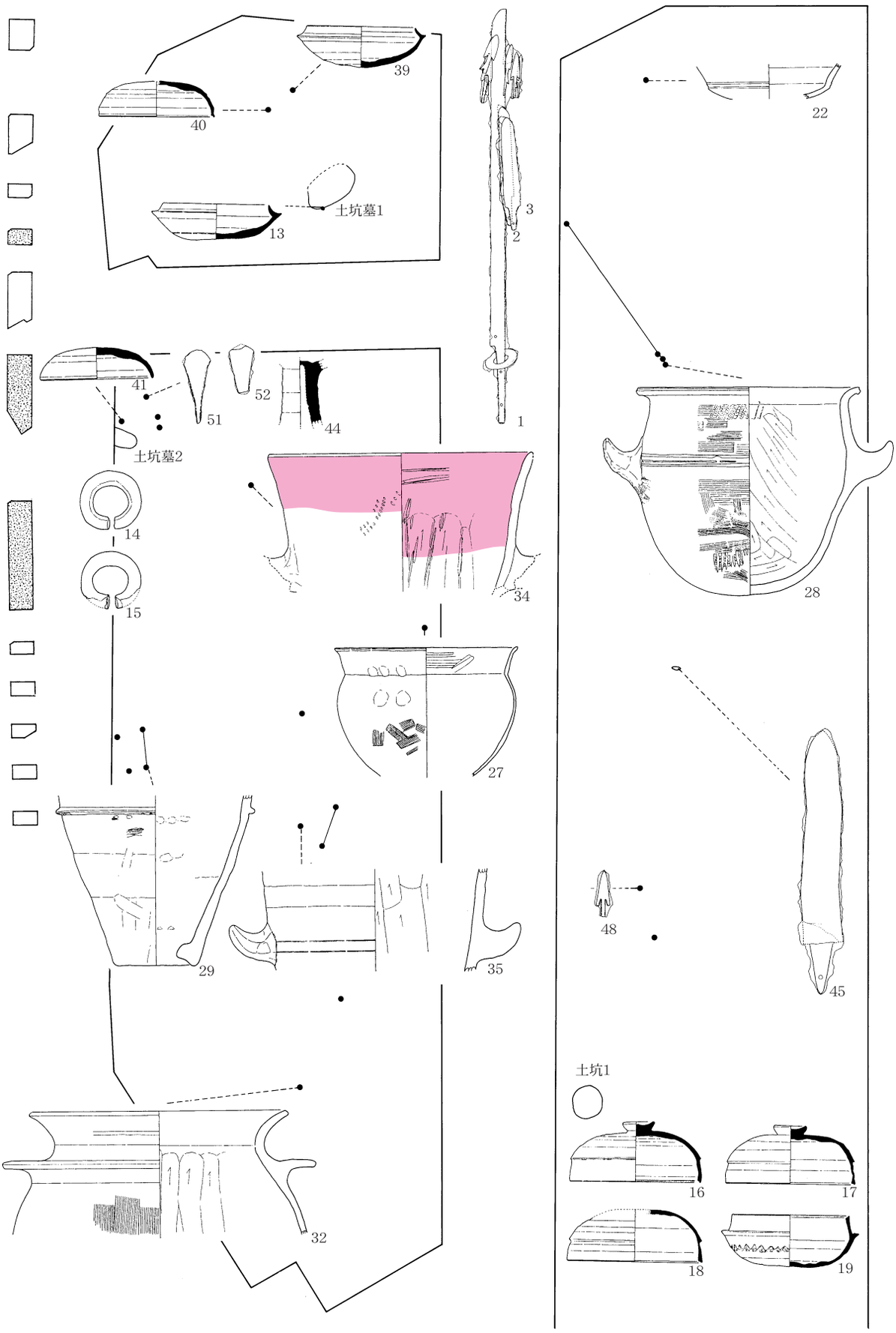


第70図　古墳時代　土坑墓2と出土遺物

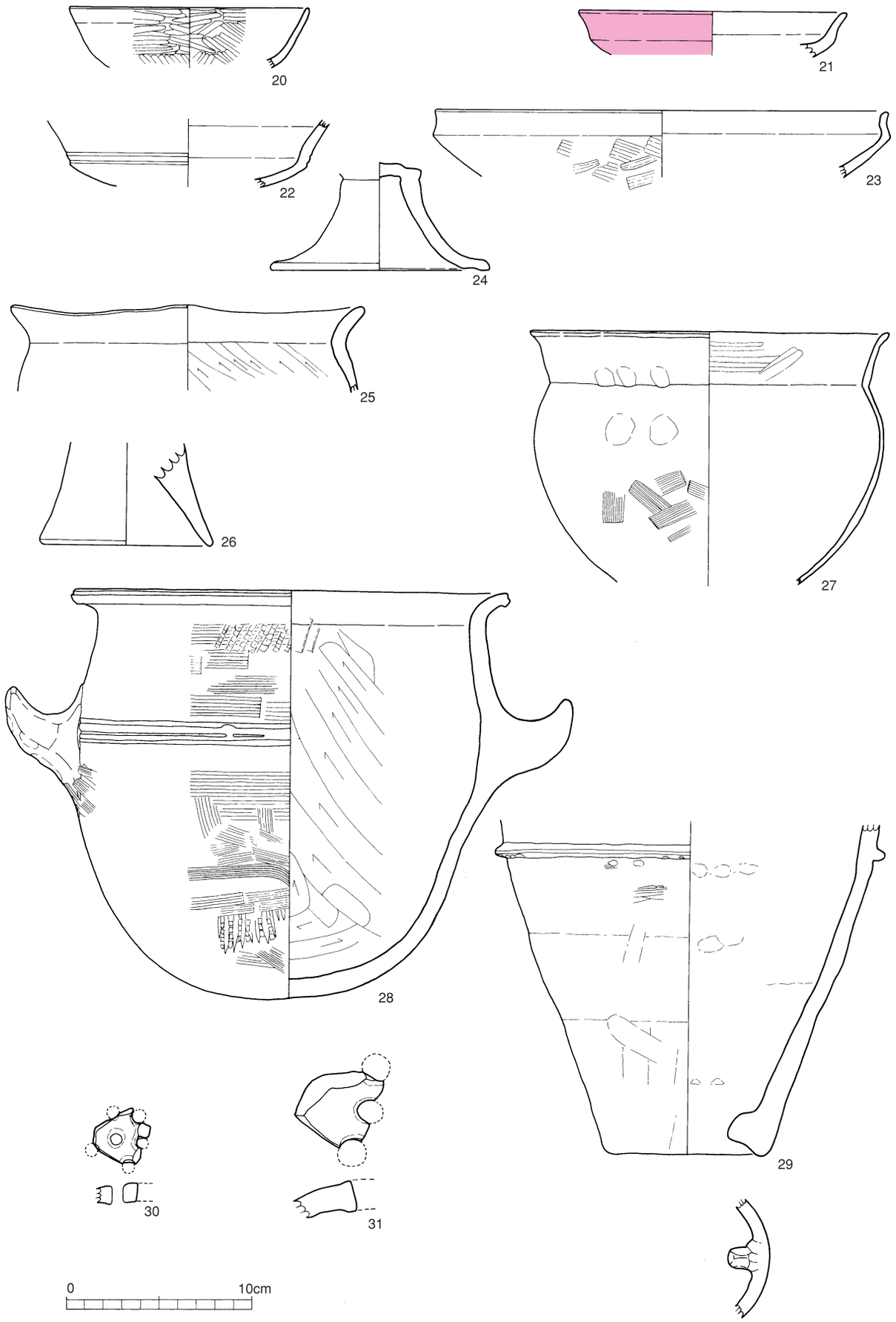




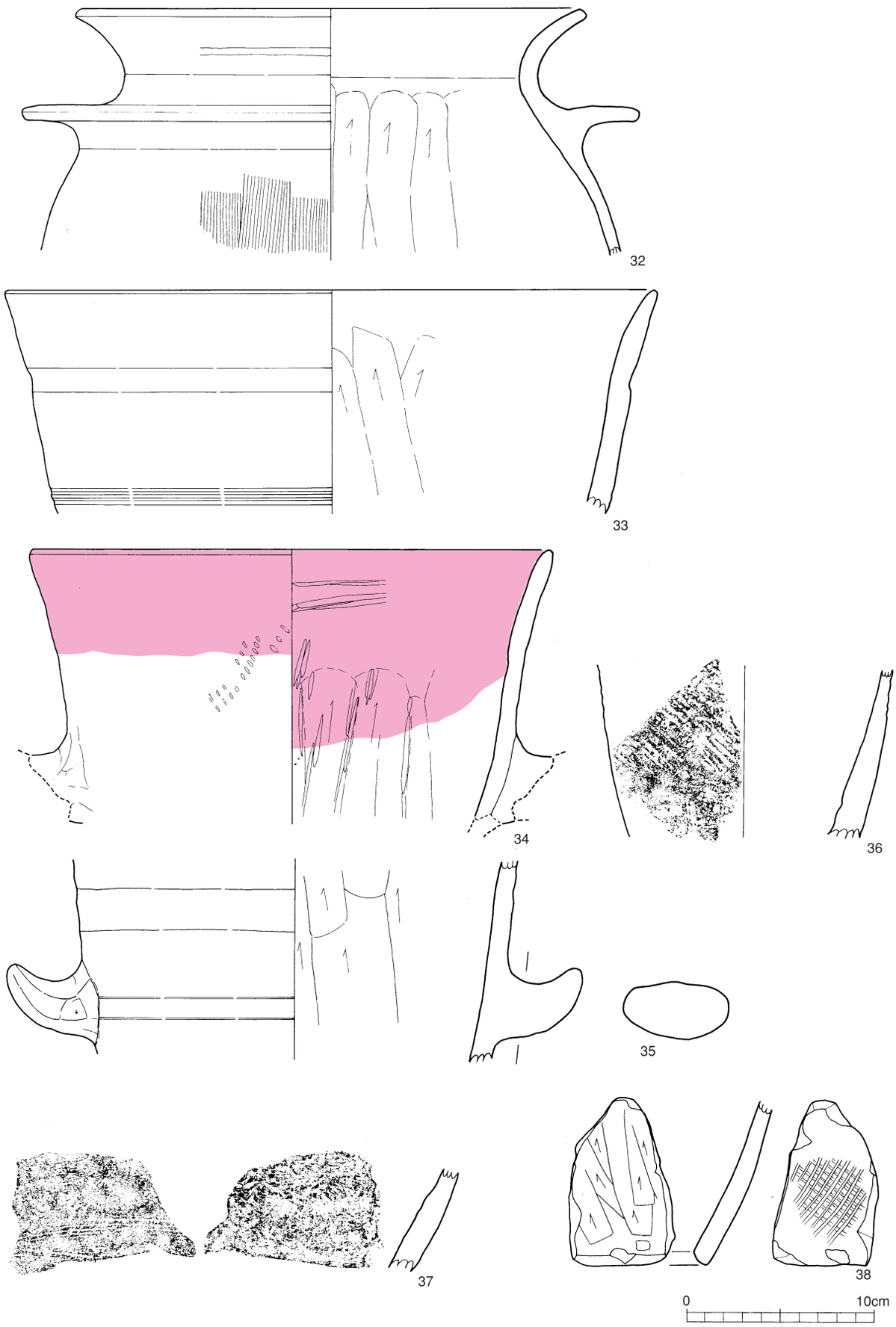
第71図　古墳時代　土坑と出土遺物



第72図　古墳時代　遺物分布図



第73図　古墳時代の出土遺物1（土師器①）



第74図　古墳時代の出土遺物2（土師器②）

ていたものの，土坑墓２の周辺に一つの集中がみられた。

土師器

土師器としては高坏・甕・甑などが出土した。

高坏（第 73 図 20 ～ 24）

20 ～ 23 はいずれも高坏の坏部口縁付近であるが，小片である。20 は内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。21 は口縁が短く屈曲して外反するもので器面には赤色顔料が施されている。22 は屈曲した口縁部に沈線が２条めぐる。23 はハケメ状の調整痕が残り，その上はナデられている。24 は脚部であり，裾は平坦に広がる。

甕（第 73 図 25 ～ 27）

25 は波状になる口縁部であり，器面は磨耗が著しいが，内面はヘラケズリが施されている。26 は脚台である。27 は丸底で口縁部は外反する甕である。器壁は約３㎜とうすく器面にはハケメが部分的に残り大部分はナデられており，口縁内部はヘラミガキが施されている。

把手付甕（第 73 図 28）

牛角状に近い把手を有し，口縁部は短く外反する。貼り付けによる把手の高さには沈線が２～３条めぐる。器面調整は底部付近と胴部上位には格子タタキがみられ，その上にハケメ状のヨコナデが施されている。また胴部下半には縦方向や横方向のハケメ調整が施されており，把手部分もハケメで粘土を押さえている。内面はヘラケズリである。焼成は須恵質のように堅致である。

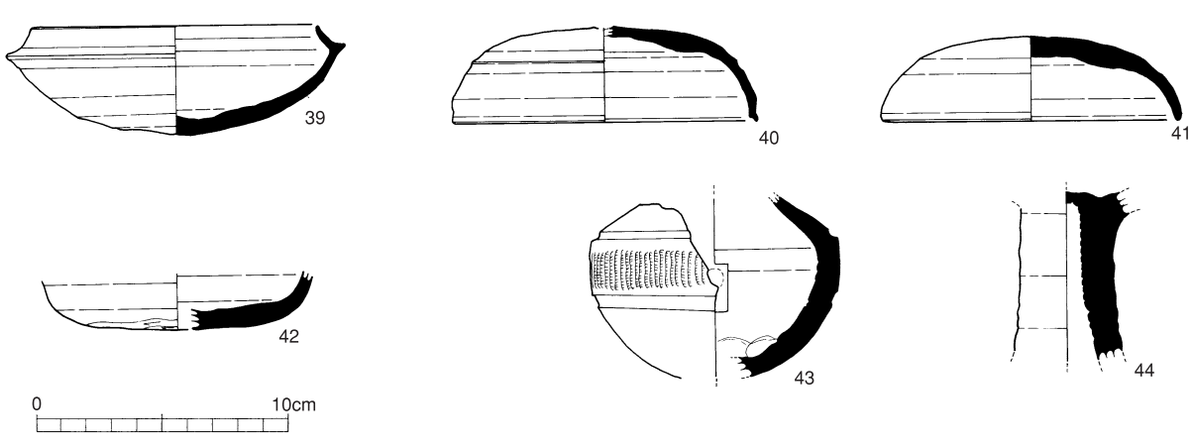
甑（第 73 図 29 ～ 31，第 74 図 33 ～ 38）

29 は胴部に成川式土器特有の貼付突帯をめぐらすものであるが，底部はつつぬけタイプに近い甑である。ただし単なるつつぬけタイプとは異なり，推定４ヵ所程度凸状の突起を付けている。内外面ともナデ調整である。30・31 は蒸気孔が多孔タイプの甑の底部である。

33 ～ 35 は口縁部が直口気味に開くもので甑と推定される。34・35 はやや平たい把手を有し，35 は把手の部位に沈線が２本めぐる。33 も沈線がみられることより把手を有すると思われる。34 の器面には格子タタキが認められ，赤色顔料が施されている。36 は器面にタタキが施されており，37 は内面に同心円当て具痕が認められることより甑の一部と思われる。38 はつつぬけタイプの甑の底部であり，器面には斜格子のタタキ目が残る。

羽釜（第 74 図 32）

体部上位で口縁直下に鍔をめぐらすものである。胎土は他と異なり細かい砂粒が混じり焼成は良



第75図　古墳時代の出土遺物3（須恵器）

好である。

須恵器（第 75 図 39 ～ 44）

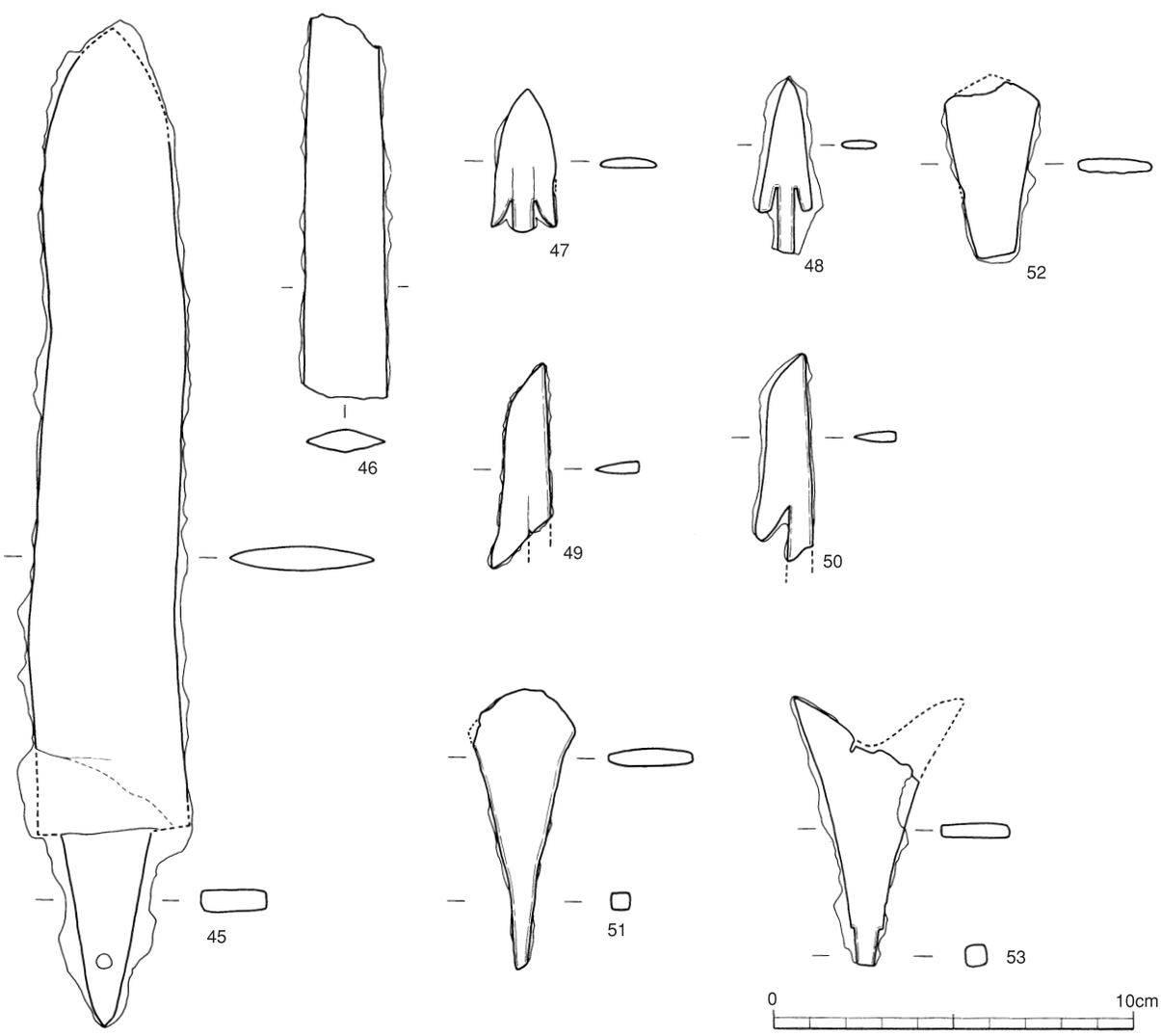
39・40 は土坑墓 1 の近くで出土したものである。39 は受け部からの立ち上がりが短く内傾する。器面調整は底部の中ほどまでヘラケズリが施されている。40 は坏蓋であり，天井部と口縁部の境に形骸化した稜がみられ，天井部の中央のみヘラケズリが施されている。41 は口縁部が丸味をもち天井部はナデである。42 は坏としたが蓋の可能性もある。底部には手持ちヘラケズリが施されている。

43 は磁である。球状の体部には櫛描の押引文が施されている。断面は暗紫色を呈している。44 は高杯の脚部である。

鉄器（第 76 図 45 ～ 53）

45 は蛇行剣である。茎は短く目釘孔が一つ認められる。錆着が著しく鎬は判別できない。身は 3 ヶ所の屈曲が認められ蛇行する。46 は剣の身の部分である。先端及び基部を欠損している。

47 ～ 53 は鉄鏃である。47・48 は柳葉形鉄鏃であり逆刺をもつ。49・50 は平根系片刃鏃である。51・52 は圭頭鏃である。53 は雁又鏃である。



第76図　古墳時代の出土遺物4（鉄器）

第22表　古墳時代鉄器観察表

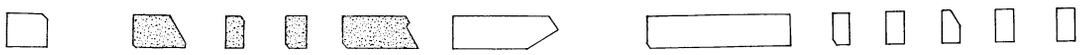
挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	全長(cm)	刃部長(cm)	茎長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	注記番号
69	1	大刀	13	土坑墓1	96.2	78.2	17.8	3.6	0.85	鐔あり,鞘本穴あり,目針孔2	345
	2	短刀			27.5	21.4	6.6	3.2	0.6	目針孔1	
	3	剣			26.1	20.5	5.6	3.6	0.6	目針孔1	
	4	鏃(1)			15.8	6.1		2.55		二段返刺柳葉鏃	
	5	鏃(2)			6.3						
	6	鏃(3)			12.0	6.0					
	7	鏃(4)			10.5	6.0					
	8	鏃(5)			10.3	6.1					
	9	鏃(6)			10.0	6.2					
	10	鏃(7)			4.8						
	11	剣			30.4	25.1	5.3	4.2	0.6	取付部金属，目針孔1	344
	12	鏃			7.6			2.6	0.4	二段返刺柳葉鏃	343
76	45	剣	7	Ⅳ	27.7	22.3	5.4	4.3	0.7	蛇行剣	2274
	46	剣	6	Ⅱb	10.5			2.3	0.6	先端と基部　欠損	60
	47	鏃	12	Ⅲ	3.9	3.7		1.8	0.3	柳葉鏃	一括
	48	鏃	6.5	Ⅲ	4.8	3.7		1.5	0.2	柳葉鏃	1312
	49	鏃	5	Ⅲ	5.8			1.6	0.3	片葉鏃	1045
	50	鏃	5	Ⅲ	5.7	5.7		1.7	0.3	片葉鏃	1045
	51	鏃	10	Ⅲ	7.7			2.4	0.5	圭頭鏃	2980
	52	鏃	10	Ⅲ	4.9			2.7	0.4	圭頭鏃	3113
	53	鏃	8	Ⅲ	7.5	6.4		3.1	0.6	雁又鏃	2653

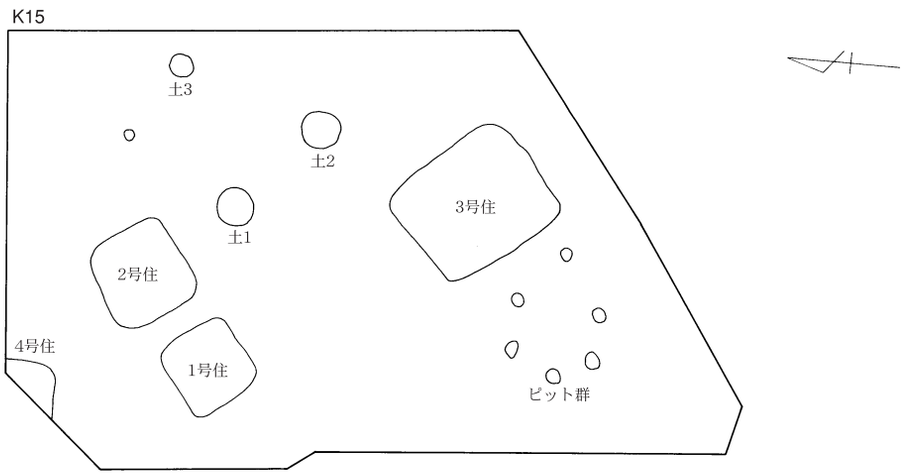
第23表　古墳時代耳環観察表

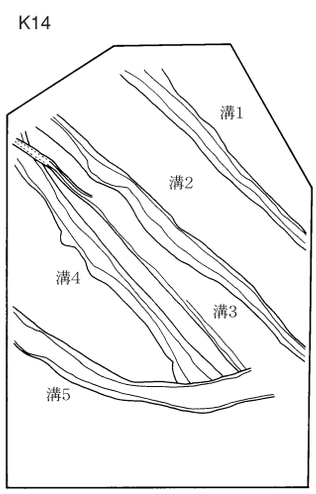
挿図番号	遺物番号	名　称	出土区	出土遺構	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	備考	取上番号
70	14	耳環	10	土坑墓2	27.5	15.5	8.0		7205
	15	耳環	10	土坑墓2	27.0	16.0	6.0		

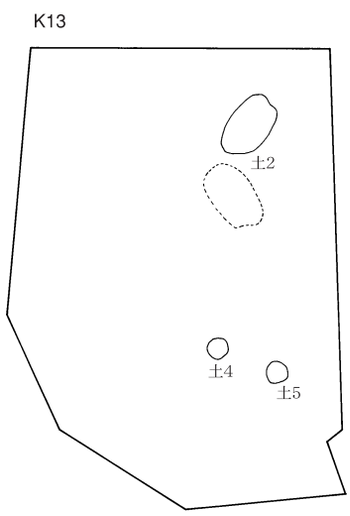
第24表　古墳時代土器観察表

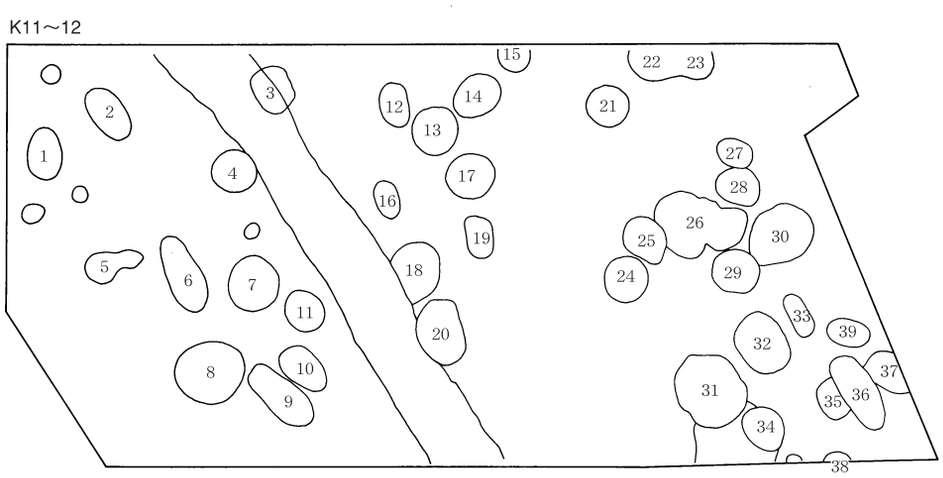
挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号	注記番号
69	13	須恵器	坏身	9.0 土坑墓１	11.2	7.3	3.65	底部回転ヘラケズリ	ヨコナデ		完形	1251	
71	16	須恵器	高坏蓋	6.5　土坑	13.9		6.4	天井部回転ヘラケズリ	ヨコナデ		完形	1	
	17	須恵器	高坏蓋	6.5　土坑	13.7		6.2	天井部回転ヘラケズリ	ヨコナデ		完形	2	
	18	須恵器	坏蓋	5.0　土坑	14.4			天井部回転ヘラケズリ	ヨコナデ		完形	3	
	19	須恵器	坏身	6.5　土坑	12.5	8.8	5.5	底部回転ヘラケズリ	ヨコナデ	櫛描波状文	完形	4・5	
73	20	土師器	高坏	9.5　H13	13.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/8	4139	
	21	土師器	高坏	15.0　H3	14.4					器面赤色顔料	1/8	204	
	22	土師器	高坏	8.0　Ⅲ								3611	
	23	土師器	高坏	9.0　Ⅲ	24.8			ハケメ状調整痕			1/8	1926	
	24	土師器	高坏（脚）	9.5　H11		11.8		ナデ	ナデ			3716	
	25	土師器	甕	15.0　H3	19.2				ヘラケズリ		1/4	318	
	26	土師器	甕（脚台）	15.0　H2		9.2						1431	
	27	土師器	甕	9.5　H6	19.3			ハケメ・ナデ	ヘラミガキ・ナデ	器壁がうすい	1/3	4001	
	28	土師器	把手付甕	7.5　Ⅲ	23.6		21.9	ハケメ・ナデ・タタキ	ケズリ・ナデ		4/5	1853	1854・1855
	29	土師器	甑	9.5　Ⅲ		9.0		ナデ	ナデ			2813	2440
	30	土師器	甑底部	10.0　Ⅲ									
	31	土師器	甑底部	15.0　Ⅲ								172	
74	32	土師器	羽釜	9.0　Ⅲ	27.3			ハケメ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ		1/6	1763	
	33	土師器	甑	9.5　Ⅲ	35.0			ナデ	ヘラケズリ		1/8	1219	1224
	34	土師器	甑	9～10　ピット	28.0			ナデ	ヘラケズリの後ヘラミガキ	赤色顔料	1/6	P109	
	35	土師器	甑	9.5　Ⅲ				ナデ	ヘラケズリ			2403	
	36	土師器	甑	8.0　Ⅲ				斜格子タタキ	ナデ			1434	
	37	土師器	甑	6.5　Ⅲ				ハケメ状調整	同心円当て具痕	器面に沈線		2198	
	38	土師器	甑	9.5　Ⅱ・Ⅱb				斜格子タタキ	ヘラケズリ				
75	39	須恵器	坏身	5T　Ⅲ	11.6	7.0	4.3	回転ヘラケズリ	ヨコナデ		5/6	245	247
	40	須恵器	坏蓋	5T　Ⅲ	12.1		3.8	回転ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	232	
	41	須恵器	坏蓋	10.0　Ⅲ	12.0		3.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	5107	
	42	須恵器	坏身	9.5　Ⅲ		8.0		手持ちヘラケズリ	ヨコナデ			2869	
	43	須恵器	甕	12.0　Ⅲ					棒による押圧	櫛描文		737	
	44	須恵器	高坏	10.0　Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			1688	



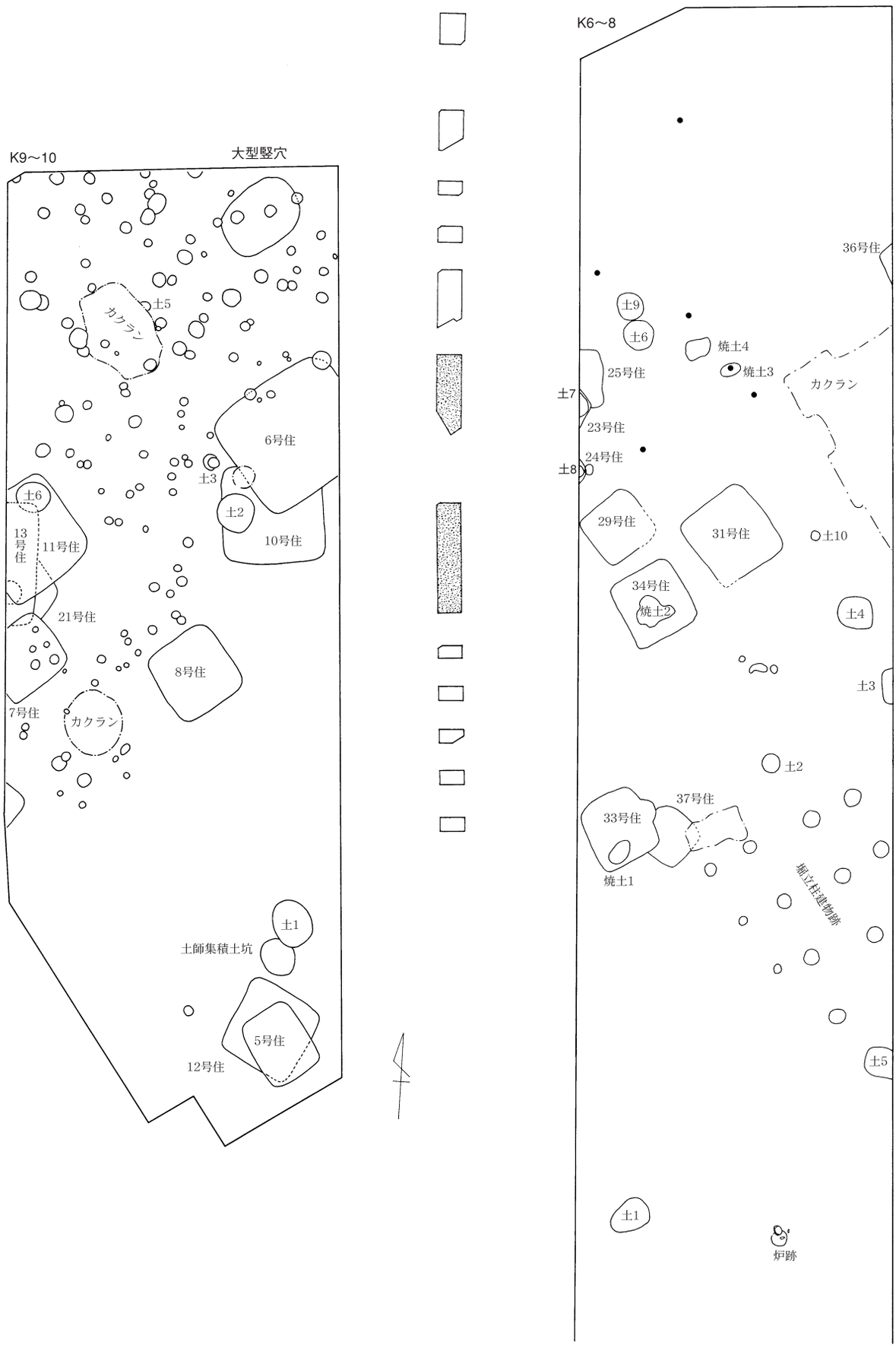








第77図　古代　遺構分布図1（S=200分の1）



第78図　古代　遺構分布図2（S=200分の1）

第Ⅶ章　古代の遺構と遺物

第１節　検出遺構

ここで古代として取り扱った時期は７世紀後半程度から11世紀までである。第Ⅵ章古墳時代とは明確な年号などにより厳密に区切っていない。

古代の時期と判断される遺構では，竪穴住居跡23軒，掘立柱建物跡１棟，大型竪穴状遺構１基，土坑62基，溝状遺構６条，焼土遺構４ヵ所，ピット群などが検出された。（第77，78図）

古代の遺物包含層はⅢ層であり，遺構はⅢ層の調査途中に土層の色調などにより判断できたもののほかⅣ層上面で遺構確認できたものもある。

Ⅲ層の遺物包含層は暗褐色土で粘質があるため，また色調的に暗く遺構埋土も同様の色調であるため，総じて遺構判別が困難であった。そのため一部については遺構を確認できずに，単に遺物包含層として掘り下げてしまった可能性も否定できない。

１．住居跡

古代の遺構として認識した竪穴住居跡，掘立柱建物跡のほか，大型の竪穴状遺構，土坑などは時期的前後関係を示す切り合いが認められ重複しているものも多く存在した。

以下北側の調査橋脚であるK15から順次説明を加えていく。

K15の住居跡

K15は住居跡が検出された最も北側に位置する橋脚であり，11ｍ幅で長さ約21ｍの比較的広い面積を有する。K15区から竪穴住居跡４軒と土坑３基及び少数のピット状遺構が検出された。

１号住居跡（第79図）

平面プランは隅丸方形を呈するもので，一辺約２ｍ×2.17ｍの大きさをもつ。主軸は北西方向を向く。検出面からの深さは約20㎝であり，床面は中央部が一段深い二段構造となっている。床面及び一段高い周囲の面もほぼ平坦となっている。埋土は２枚に区分でき，上層は硬く締まった暗褐色土，２層は同じように硬く締まった明るい褐色土であり，土層堆積はレンズ状を呈し，自然堆積であることが理解される。

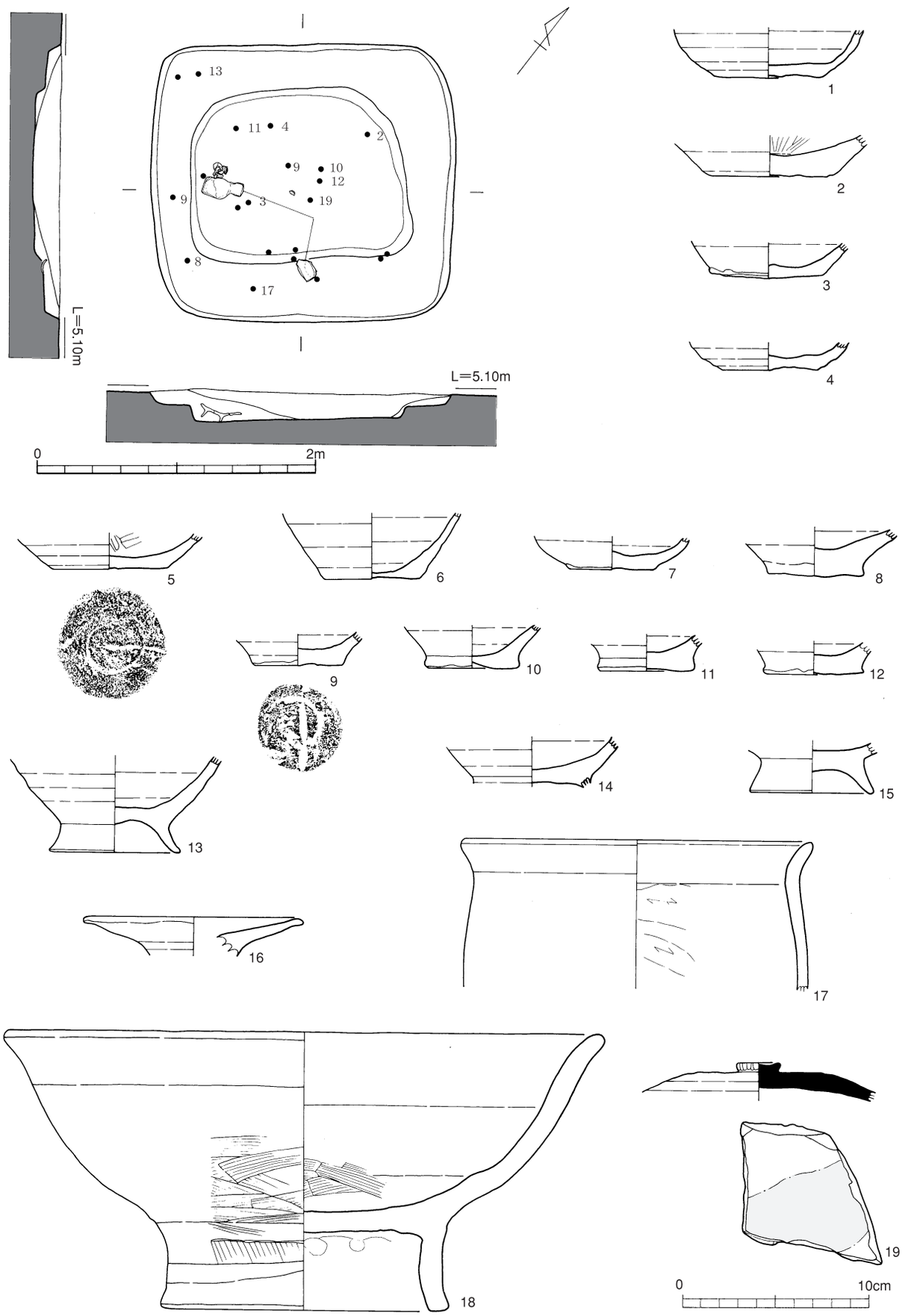
出土遺物

住居跡の埋土からは多量の土器片が出土した。出土した遺物は土師器の坏・埦・皿・甕・大盤・須恵器蓋を利用した転用硯などがみられた。

土師器（１～18）

１～７は坏である。いずれも底部のみで口縁部を欠損するが，体部が直線的に開くもの（２・３・５・６）や体部が内湾して立ち上がるもの（１・４・７）がある。８～12は底部を厚くした底径の小さい充実高台をもつものである。底部に直線状のヘラ記号が施されたもの（５・９）もある。２の内面は放射状にヘラナデされ，５は内面ヘラミガキ調整であるが他はいずれも内外面ともヨコナデ調整である。13～15は輪高台をもつ埦である。高台は比較的高く「ハ」の字状に広がる。16は高台付皿である。17は土師甕で口縁はあまり屈曲しない。内面はヘラケズリが施される。

18は住居跡南西部の床面直上に出土した大型盤である。口径32.2㎝，器高14.8㎝を測る。高台は高さ４㎝を越え，直立している。体部は内湾気味に開き，口縁はわずかに外反する。器面調整は体



第79図　古代の1号住居跡と出土遺物

部下半がハケメ調整，上半部はヨコナデ調整，内面はハケメ調整の後ナデ調整が施されている。色調は赤褐色を呈する。

須恵器

19はつまみをもつ蓋の破片であり，内面は使用光沢のある転用硯である。外面天井部は回転ヘラケズリが施され，つまみの側面は細かく割面が認められる。

２号住居跡（第80図）

１号住居跡の北東側約70㎝の位置で検出された。主軸は１号住居跡とほぼ同一方向であり，平面プランも隅丸方形と同一形を呈する。大きさは2.3ｍ×2.5ｍと１号住居跡よりわずかに大きい。検出面からの深さは約10㎝であり，床面はほぼ平坦である。

住居跡の埋土は分層できず，１号住居跡の下部にある埋土２と同様の比較的明るい色調の褐色土であり，硬く締まっていた。

出土遺物

埋土中より多くの土師器細片などが出土した。

20はやや底径の大きい坏底部で体部は内湾気味に立ち上がる。21は円板状の高台を有するものである。22～24は充実高台を有するものである。これらは内外面ともヨコナデ調整が施されている。

25は土師器埦である。高台は比較的低いが，やや広がる。体部は内湾して立ち上がる。内外面ともヨコナデ調整が施される。

26は焼成を受けた粘土であることは確実であるが，丸くて浅い皿状を呈しているものの器とは考えられず，剥落した面を側縁にもち，内面は工具状の放射する調整痕が残る。カマドの一部ではないが，それに相当する施設の一部の可能性も考えられる。

３号住居跡（第81図）

１号住居跡の南西方向約5.4ｍの位置で検出された。竪穴の主軸は１号及び２号住居跡と同様に北西方向である。平面プランは１・２号と同様に隅丸方形を呈しているが，大きさは3.7ｍ×３ｍと一回り大きい。検出面からの深さは約10㎝程度であり，床面はほぼ平坦である。

住居跡の埋土は分層できなかったが，１号住居跡の下部の層である埋土２と同質であり明るい褐色を呈し，硬く締まっていた。

出土遺物

埋土中より多量の土師器・須恵器や緑釉陶器などが出土した。これらの出土遺物は住居跡の検出面が下部のため，ほとんど床面直上として考えられ，一括資料として位置づけられる。

土師器

坏・埦・皿・甕・鉢などが出土した。

坏（第81図27～38）

口径は大きく12～13㎝程度であり，底径も比較的大きく７㎝以上を測る。底部は回転ヘラ切りによる切り離し後，丁寧にナデられており，体部の立ち上がり部分まで回転ヘラケズリが行われたもの（33・34）もみられる。なお33・34の底面には短い直線のヘラ記号が見られる。体部はほぼ直線的に開いて立ち上がる。内外面とも器面調整はヨコナデである。色調は33・34が赤褐色，他は桃白色を呈するが，38のみ黒褐色である。

埦（39・40）

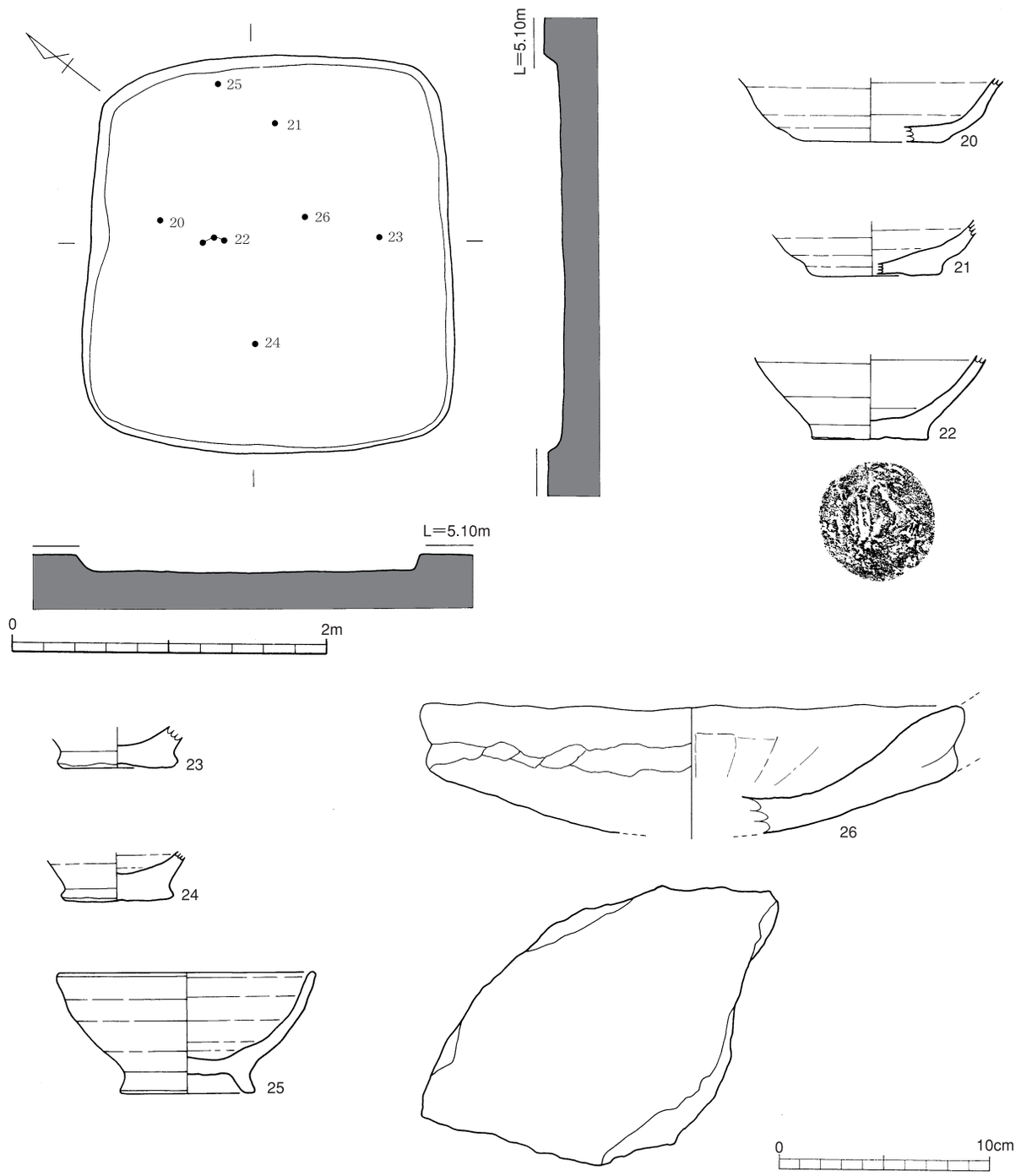
いずれも底部のみであるが，高台は短く立つものである。内外面ともヨコナデ調整である。

皿（41）

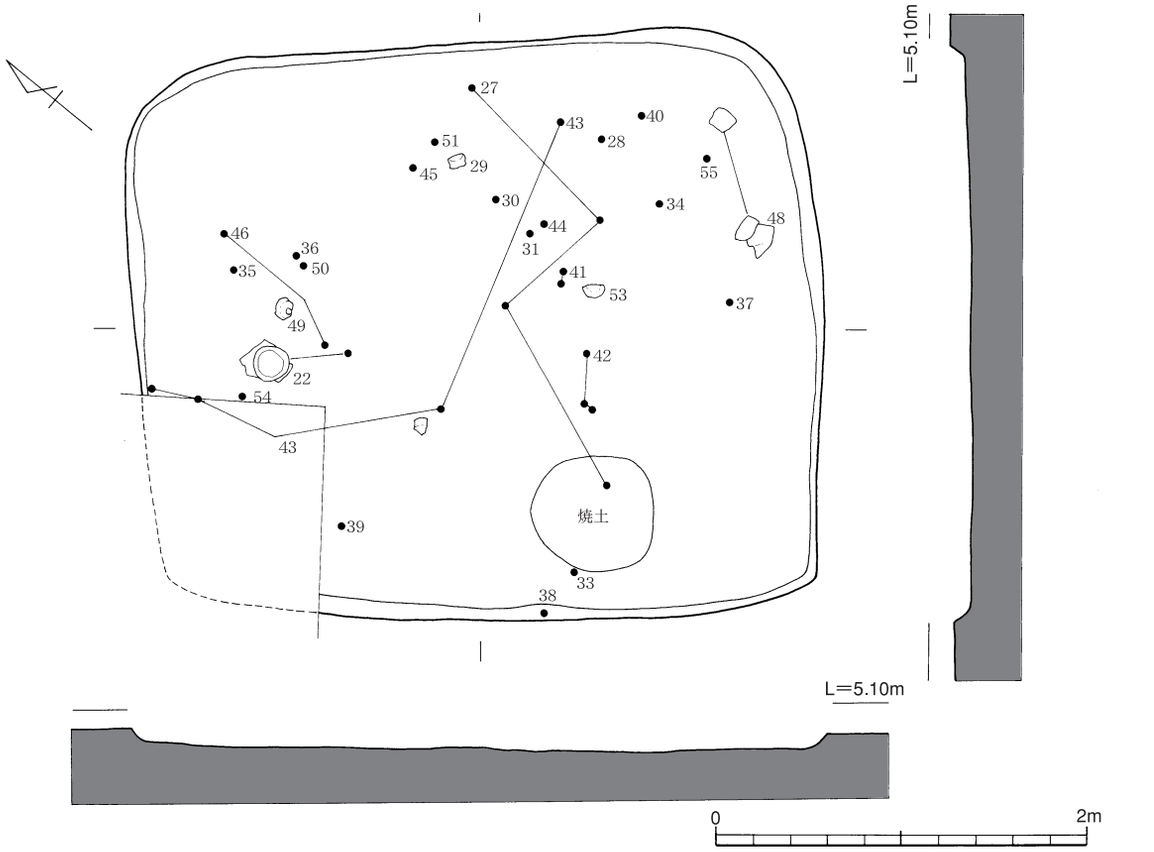
41は平坦な底部から体部は中間部で屈曲し，口縁部でわずかに外反する。内外面ともヨコナデ調整であり，底面も丁寧にナデられている。

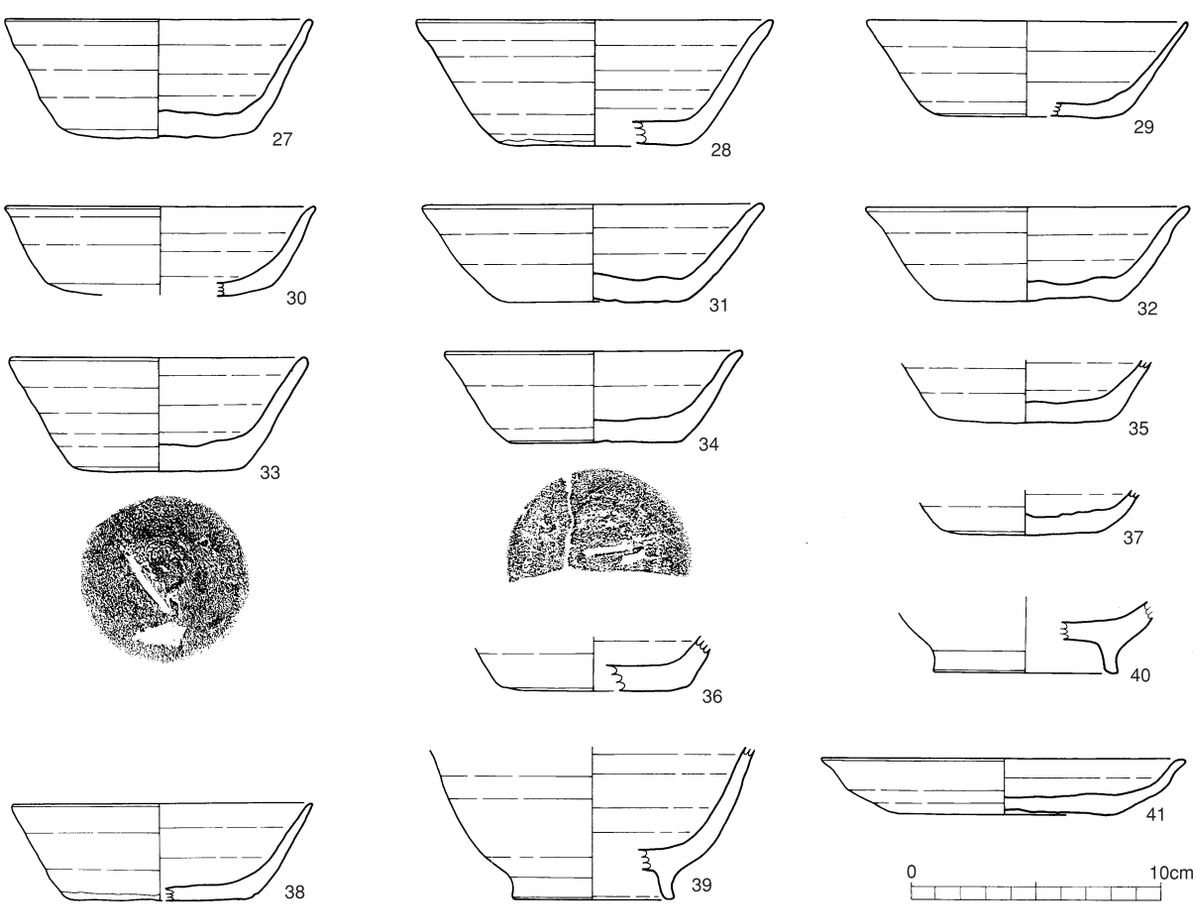
甕（第82図42～47）

口径はいずれも22cmを越えるものであり，口縁部はくの字状に外反する。器面調整は外面がハケ

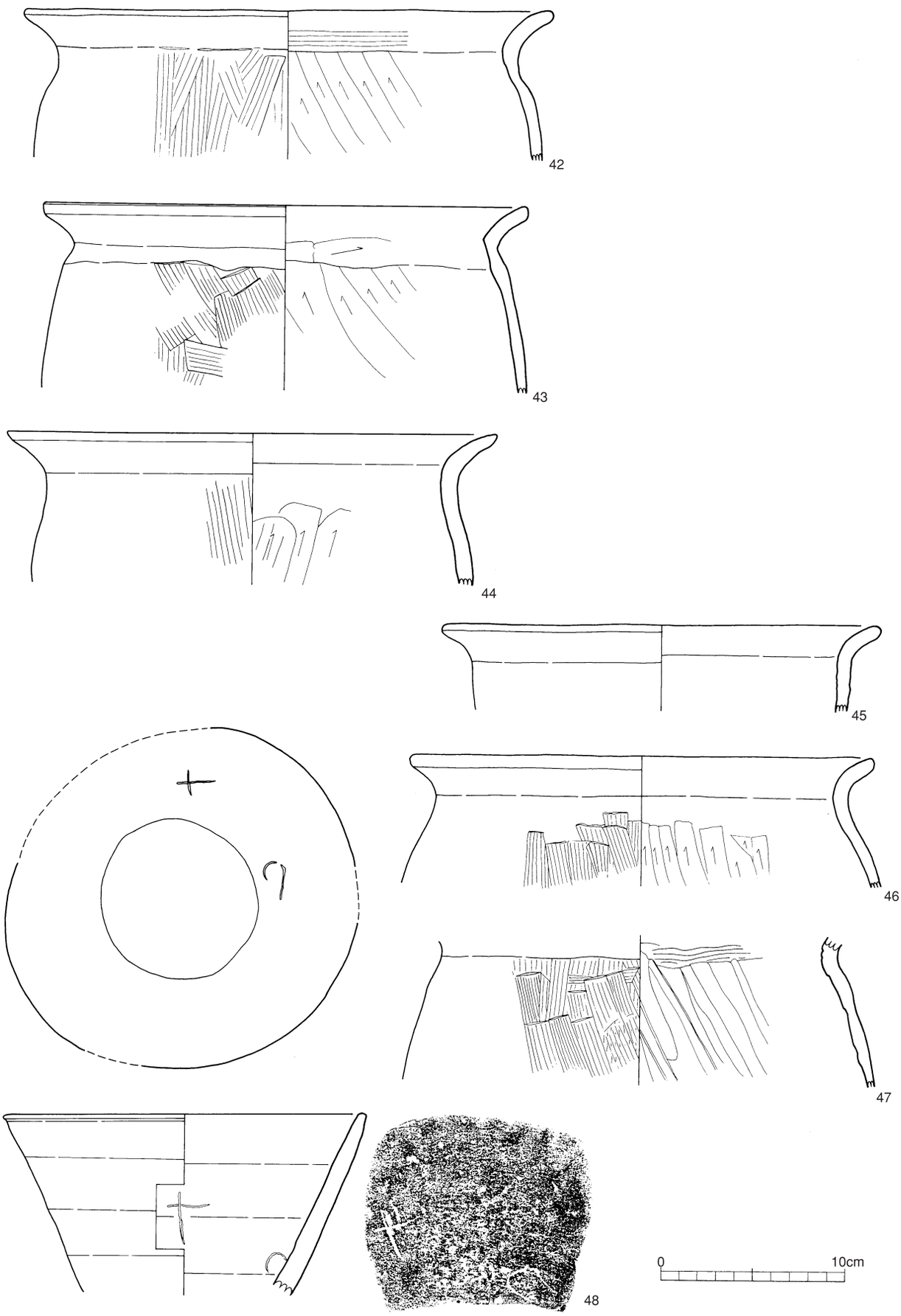


第80図　古代の2号住居跡と出土遺物

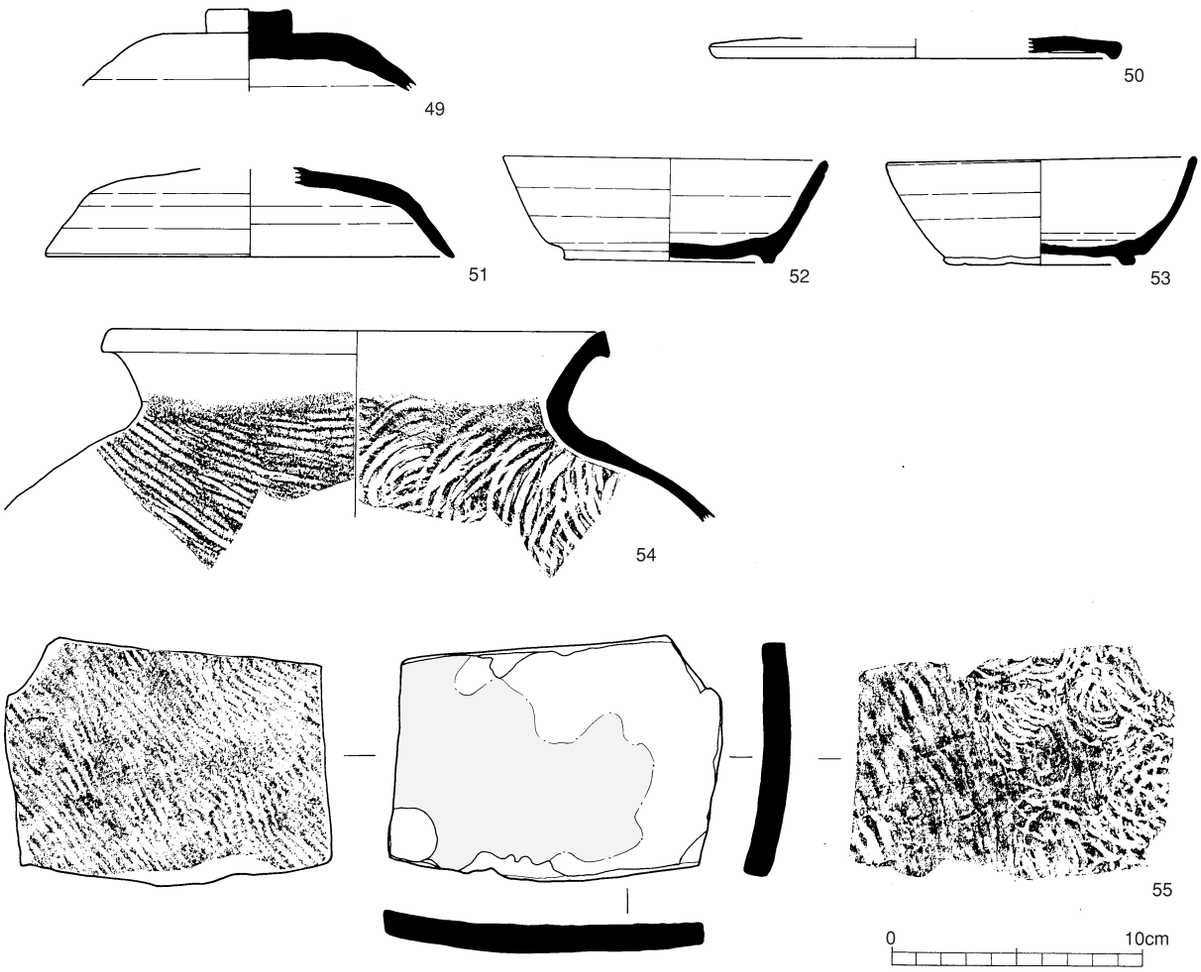




第81図　古代の3号住居跡と出土遺物1



第82図　古代の3号住居跡出土遺物2



第 83 図　古代の 3 号住居跡出土遺物 3

メ調整，内面がヘラケズリである。

鉢（48）

体部は直線的に開くものであり，器面は工具によるナデ調整，内面はヨコナデである。内面には「＋」と「○」の刻書が施されている。

須恵器

蓋・高台付坏・甕・転用硯などがみられた。

蓋（第83図49～50）

49はつまみを有する天井部，50は口縁部であり両方とも黄白色呈する生焼けである。51も黄褐色を呈し生焼けに近い。天井部から屈曲して口縁部に到る。天井部はナデ調整が施されている。

高台付坏（52・53）

いずれも断面四角形の低い高台がつき，52の体部は直線的に開き，53の体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。器面調整はヨコナデである。

甕（54）

口径20cmを測るものであり口縁は短く外反する。肩は大きくはり，器面には平行文タタキ，内面

には同心円当て具痕が残る。

転用硯（55）

内面には使用による光沢面が認められる。長方形を呈する４面の割れ面には磨りによる整形痕が観察される。大型甕の破片の転用と思われる。

なお緑釉陶器（第164図974）については遺物包含層のものと一括して説明する。

４号住居跡（第84図）

１号住居跡の北側約３ｍの位置に検出された。一部のみの検出であり，大部分は調査区域外に伸びる。検出された住居跡の二辺より，プランは１号・２号・３号住居跡と同様に隅丸方形と推定されるものの，その規模は明確ではない。検出面からの深さは約５㎝である。

埋土は暗褐色を呈しており，１～３号住居跡の埋土と類似しているものの具体的な比較はできなかった。全体プランを検出していないことにより不明確ではあるが，主軸は１～３号住居跡とは異なり北方向であると考えられる。

出土遺物

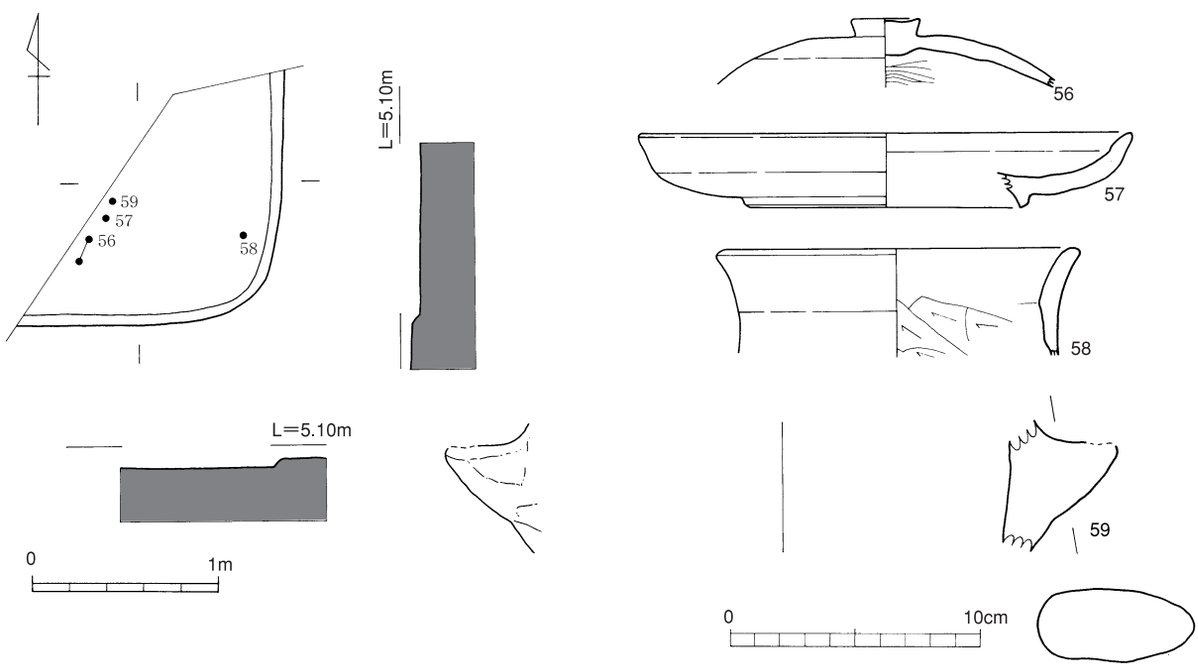
少量の土師器のみが出土した。

56はつまみを有する蓋の天井部である。器面は磨滅が著しいが，内面にはヘラミガキ調整が行われている。

57は口径約20㎝を測る高台のついた皿である。高台は断面四角形を呈し低い。体部は底部から平坦に伸び，途中で屈曲して内湾する。これも表面の磨滅が著しいものの器面調整はヨコナデと思われる。

58は口径14.8㎝の小型甕の口縁部である。口縁部は直口に近くわずかに外反する。器面調整は外面がヨコナデ，内面はヘラケズリが施されている。

59は甕もしくは甑の把手部分である。把手は横幅が長く，断面形は長楕円形となる。器面はナデ調整，内面にはヘラケズリが行われている。



第84図　古代の4号住居跡と出土遺物

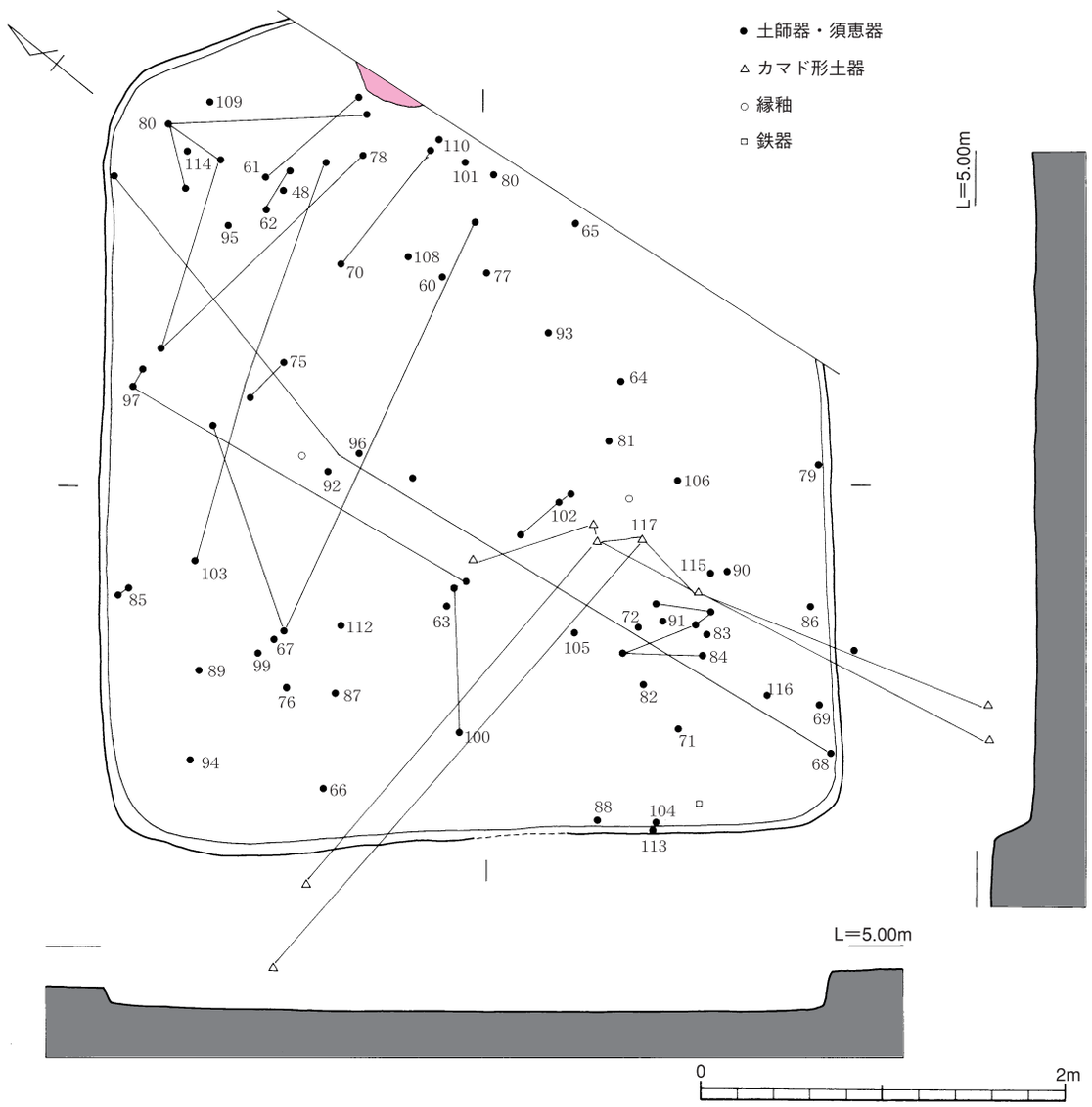
Ｋ９～10の住居跡

この調査区域は，先に橋脚９（Ｋ９）と橋脚10（K10）の調査を実施した結果，多量の土師器などの遺物の出土がみられ，住居跡の存在が推定された。そのため，中間のK9.5及びＫ９の南側をＫ９拡張区として広げ，最終的に比較的長いＫ９～10とする調査区域とした。調査の結果，10軒の竪穴住居跡と多数の土坑やピット群などの遺構を検出することができた。ただしK9.5で検出した住居跡の一部がＫ９では検出できなかった部分も存在し，また先に調査を進めたＫ９で完形土師器の多さから，Ｋ９においても住居跡が存在した可能性を否定できない。包含層の色調や土質と遺構埋土の色調及び土質とは極めて類似しており，住居跡などの遺構検出がかなり困難を要する調査であった。

検出された住居跡はかなり複合しており，同一時期ではなく，時期差の存在が指摘できる。住居跡の番号は検出・調査順に付しており，先後関係がそのまま反映されていることより，今回の報告書でも新たに番号を付け直さず，そのまま使用した。

６号住居跡（85図）

一部は未調査区域に伸びるものの，平面形は隅丸方形を呈するものである。10号住居跡を切って



第85図　古代の6号住居跡　平・断面図

いる。主軸方向は７・８・11号の各住居跡と同様に北西方向を向いている。長辺は約4.5m，短辺は４mを測り，検出された住居跡の中では最も規模が大きいものである。検出面からの深さは約20㎝であり，床面はほぼ平坦である。なお，床面を精査したが柱穴は検出できなかった。床面の北西側で赤褐色の焼土が検出され，位置的には先にカマドの存在が推定されたものの，区域外に伸びている部分であり確認には到らなかった。埋土は暗褐色であり，遺物包含層とほぼ同様の土で硬く締まっており分層はできなかった。

出土遺物

土師器・須恵器・緑釉陶器・鉄器やカマド形土器など多量の遺物が埋土中より出土した。

土師器

坏（第86図60～73）

口径は12～13㎝程度であり，底径は約６～８㎝程度とばらつきがみられるものである。体部は直線的に開くもの（60・61・64・65）のほか，わずかに内湾して丸味をもち立ち上がるもの（62・63・66）もみられる。底部は回転ヘラによる切り離し後，丁寧にナデられている。器面調整は，内外面ともヨコナデ調整である。色調は桃白色から黄白色を呈するものが多い。72の底部は円板状に厚くなる。

埦（74～79）

74は短い高台が付き，体部は直線的である。75は口縁径及び底径も大きいものであり，高台は垂直に付く。体部は下半部がやや内湾しているが上半部は直線的に開く。74～76の器面調整は内外面ともヨコナデ調整であるが，77・78の内面調整はヘラケズリが施されている。79の高台は高く，ハの字状に広がる。

高台付皿（80）

器壁の薄い高台が付く皿であり，体部は斜方向に直線的に開く。皿自体は高台付皿のなかで比較的深くなる。器面調整は内外面ともヨコナデである。

内黒土師器

坏（81）

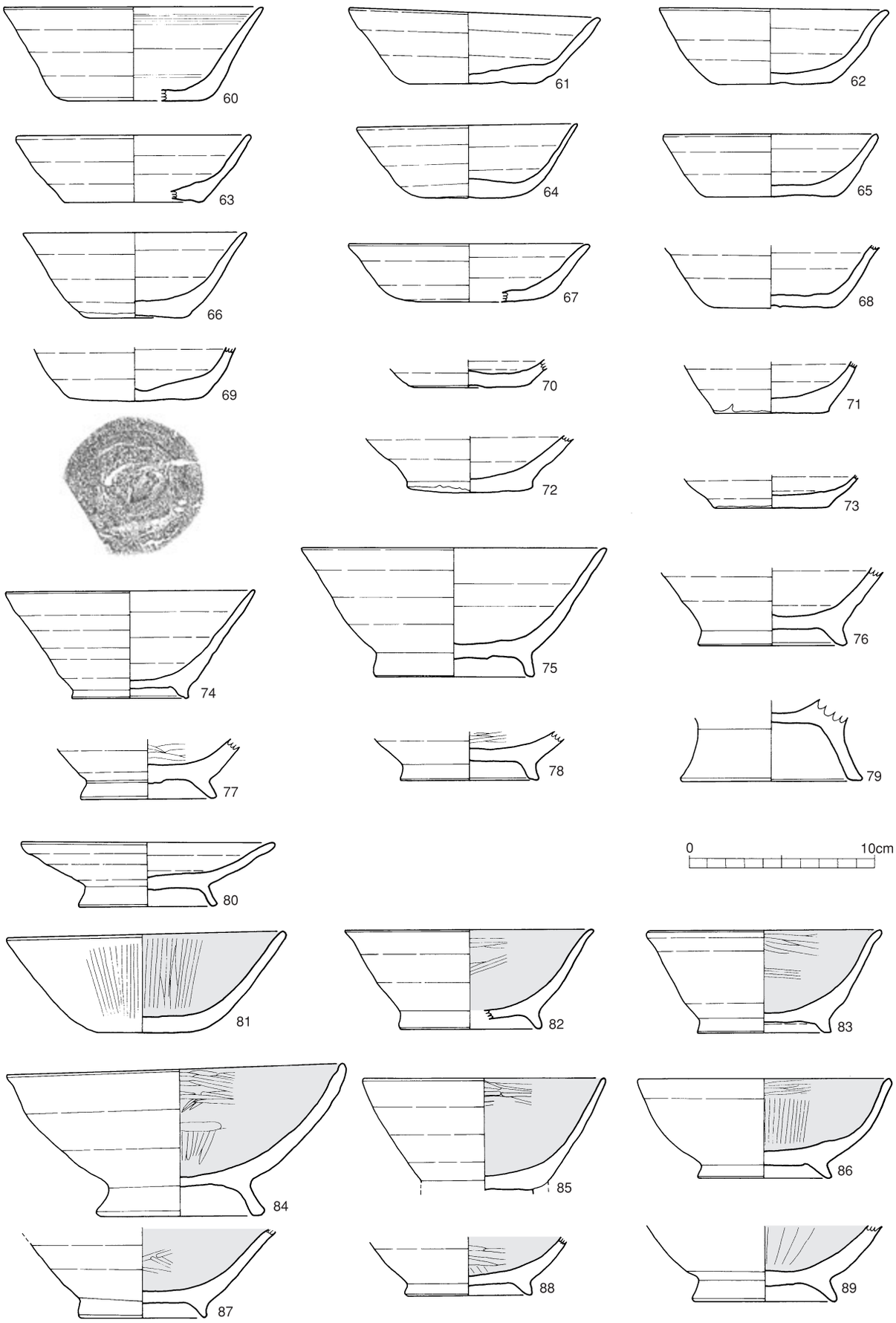
底面は切り離し後丁寧にナデられ，丸味をもつ立ち上がりで口縁まで直線的に開く。内外面ともヘラミガキ調整が施されるが，横方向ではなく放射状に行われている。

埦（82～96）

いずれも内側のみを黒く燻したもので，高台は断面三角形で短いもの（83・86・87・88）のほか，ハの字状に広がるもの（84・89）がみられる。体部はほぼ直線的に立ち上がるもの（83・87）や，内湾して丸味をもつ（84・86・89）ものがみられ，後者の方が多い。

高台の部分（90～96）のなかで，95は器面の色調は灰白色を呈しているが，高台部分のみ焼成後に赤褐色を呈する粘土が使用されている。

また96は逆に赤褐色を呈する器面であるが，高台部分のみ焼成後に白色を呈する白色粘土を使用している。95と96はいずれも高台部分の粘土を体部と異なるものを使用し，焼成後すなわち完成時において内面の黒色と体部の色調そして異なる色調の高台を有するという言わば「異色高台土器」と呼ぶことができる特徴的なものである。この二つは高台の形状が異なり注意される。



第86図　古代の6号住居跡　出土遺物1

甕（97～105）

97～102は口径25cmを越える大型の甕である。97・98は底部近くまで残存しており，器高はあまり高くなく，丸味をもつ胴部と推定される。胴部上半でやや内傾し，そこから屈曲して外反する口縁部は短く，端部を丸くおさめる。器面調整は外面がハケメ調整，内面はヘラケズリが行われる。99～102は胴部上半のみであるが，同様の口縁部であり，器面調整も同様に外面がハケメ調整，内面はヘラケズリが施されている。

103～105は口径21cm未満の小型であり，直線的な胴部から口縁は短く外反するものである。器面はいずれも磨耗が著しいものの，内面調整はヘラケズリである。

鉢（第88図106）

106は口径27cm，器高17cmを越す。底径も16cmと大きく，体部は直線的に立ち上がり口縁となる。器面調整は外面が粗いハケメとナデ，内面はナデ調整が行われている。破片の多くは上層であるⅡb層や住居跡外からも出土していることより，この住居のものではない可能性が高い。破片のうち数点は二次的に火を受け赤化している。

把手（107）

横に長く平たい把手である。半損品であるが，現存幅11cm以上であり，耳状の形態をもつ。表面には指頭圧痕がみられる。貼り付けた部分から剥落している。

須恵器

坏（108～110）

いずれも小片であるが，断面四角形の低い高台をつけ体部が直線的に立ち上がるもの（109）や，断面三角形の高台で体部が内湾して立ち上がるもの（110）などがみられる。

皿（111）

灰白色を呈するもので生焼けと考えられる。平坦な底面はナデ調整が行われ，立ち上がりはやや丸味をもつ。

蓋（112）

輪高台状のつまみを有し，天井部外面は回転ヘラケズリが行われ，体部下半はヨコナデ調整であり，その境界は稜となる。内面はナデ調整である。色調は黄褐色を呈する。

壺（113）

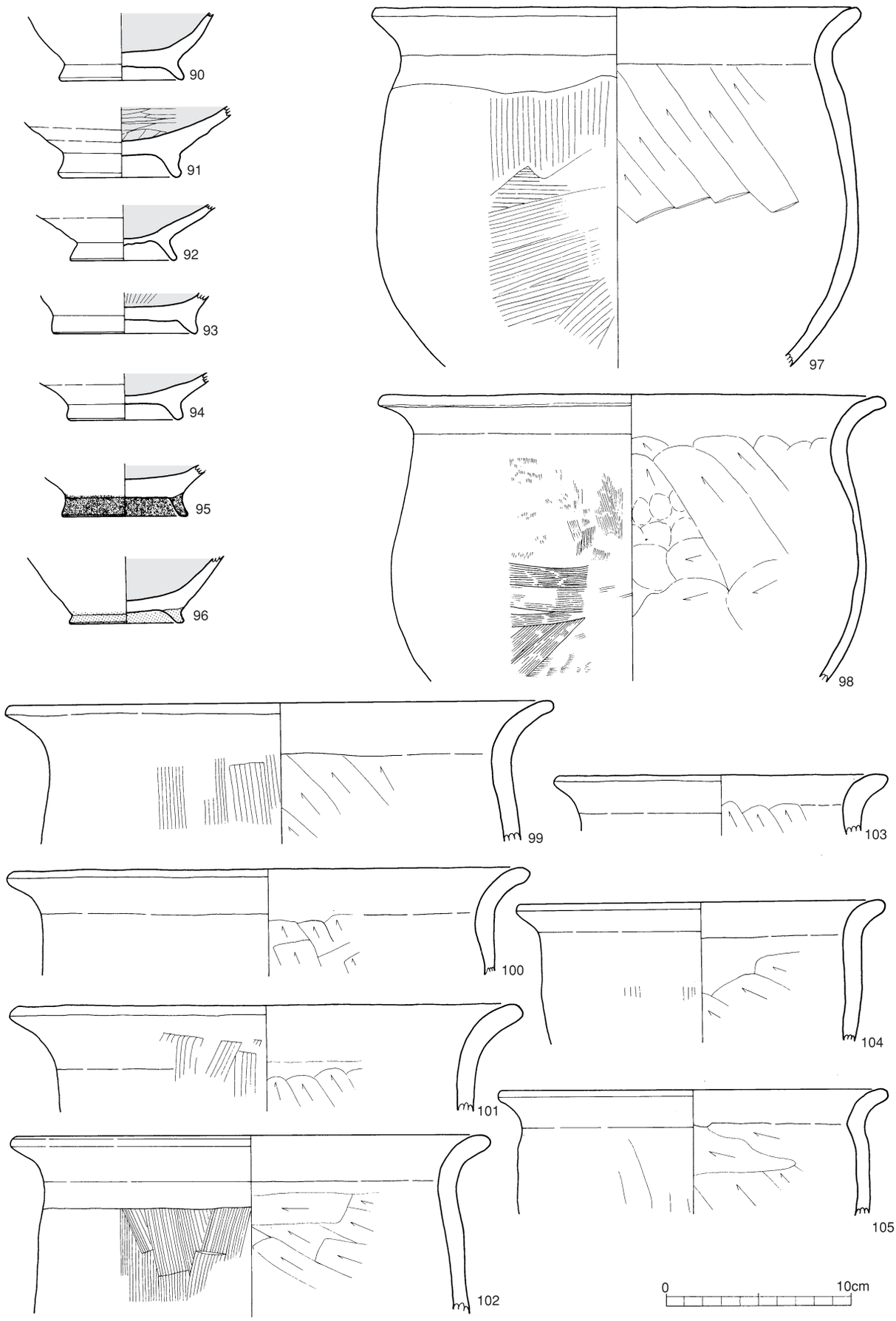
直線状に開く胴部の立ち上がり部分は丁寧なヘラミガキが施され，上部はナデ調整である。内面はヨコナデである。

転用硯（114～116）

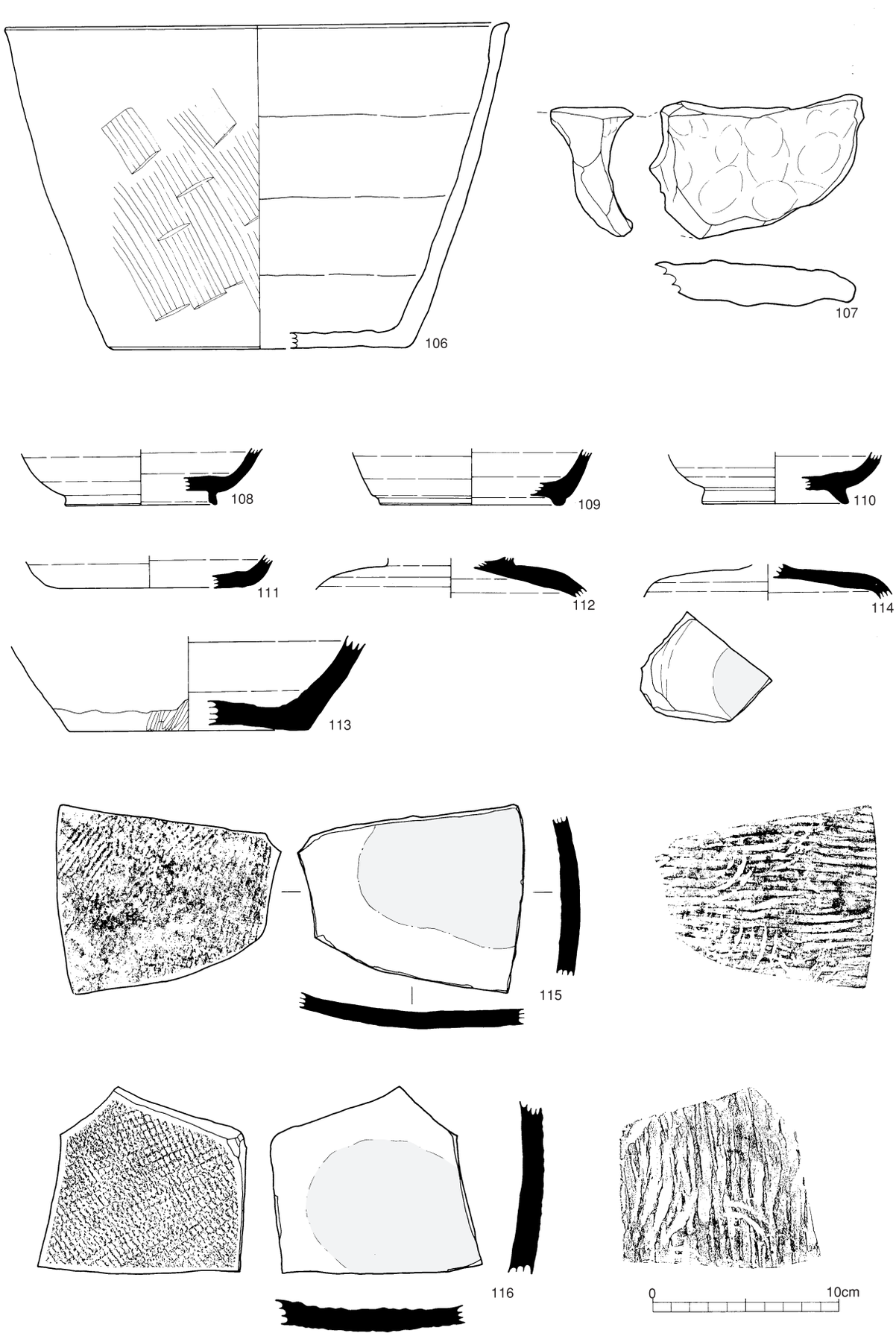
114は蓋の内面を，115・116は甕の破片を硯として転用したものである。いずれも使用された面は光沢がある。115・116の割れた側面には細かい打ち欠きによる整形や磨った痕跡はみられず，転用硯としての元の大きさではなく，さらに割れたものと推定される。

カマド型土器（第89図117）

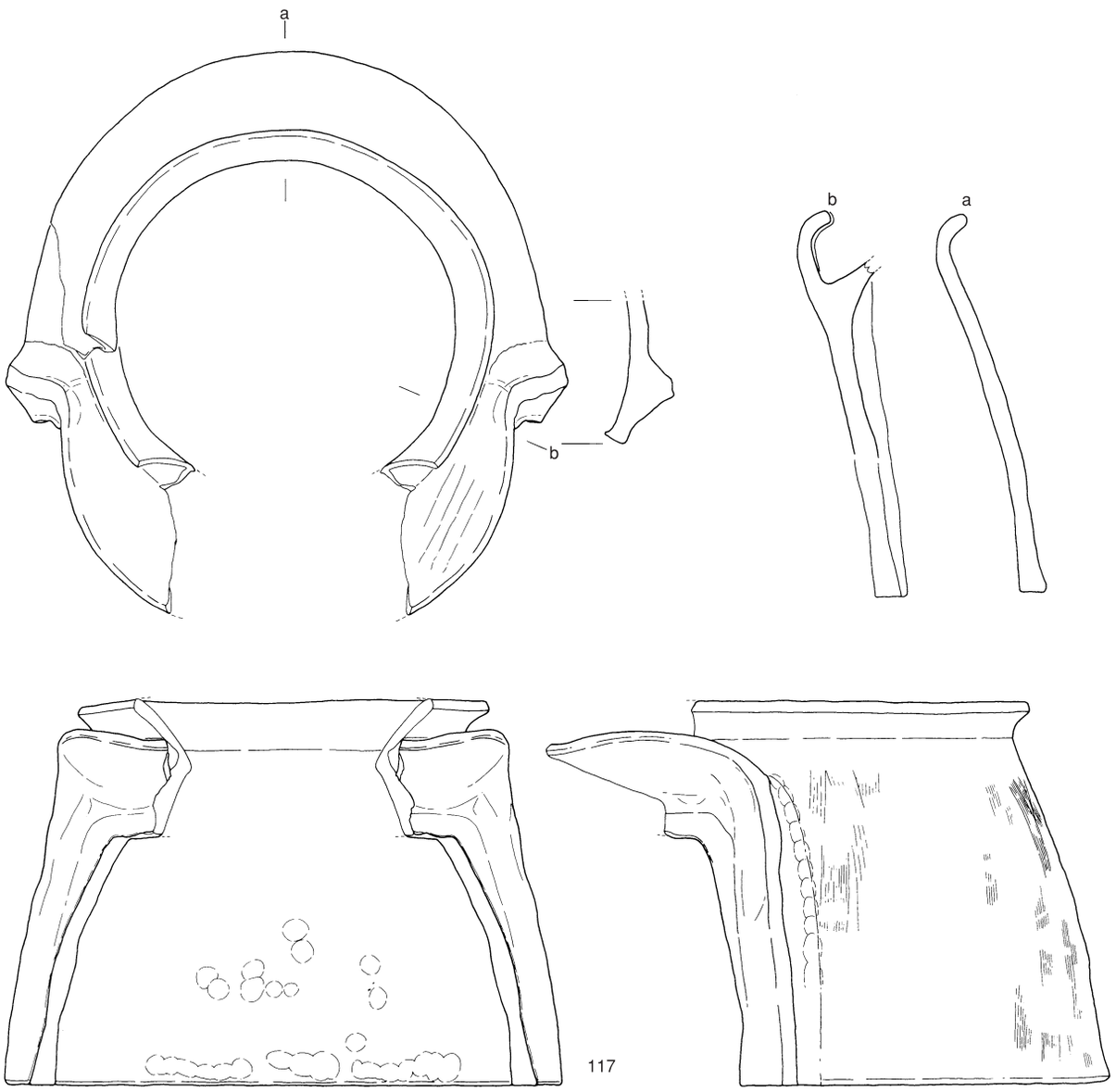
いわゆる移動式カマドと呼ばれるものであり，接合により完形に近い形状となった。正面観は高さが低いことより方形を呈し，体部は内湾して立ち上がり，口縁部はくの字状に屈曲して外反して掛口となる。掛口部分は甕の口縁と形態的に類似している。炊口上部には粘土を貼り付け庇として



第87図　古代の6号住居跡　出土遺物2



第88図　古代の6号住居跡　出土遺物3



第89図　古代の6号住居跡　出土遺物4（S=5分の1）

いる。庇は上部のみではなく，両側にも粘土を貼り付け，炊口全体をおおっている。器壁は下の基部近くが厚くなり，基部端部は断面四角形となる。器面調整は体部外面にハケメ調整が施されており，内面には指頭痕が残る。

なお，カマドの破片は住居跡内のみでなく，住居跡の外の遺物包含層にも広がりがみられ，このことより，カマドは本住居跡に伴うものではなく，後から混入したものであると推定された。

緑釉陶器（第164図968，976）

２点出土している。そのうちの１点は３点が接合したものであり，この接合する２点は住居外出土である。緑釉陶器については一括して後で取り上げる。

鉄器（第175図1166）

これも後で一括して鉄器の項で取り上げた。

10号住居跡（第90図）

６号住居跡に切られた位置に検出された。平面プランは方形であり，主軸は６号住居跡と異なり北方向を向いている。住居跡の大きさは3.3m×3.4mを測る。検出面からの深さは約10㎝程度であり，埋土は炭化物粒子を多く混在する暗褐色であった。平坦な床面直上には炭化物粒子が薄く堆積していた。床面は精査したが柱穴は確認できなかった。なお北側には径70㎝程度のゴミ穴による撹乱部があった。

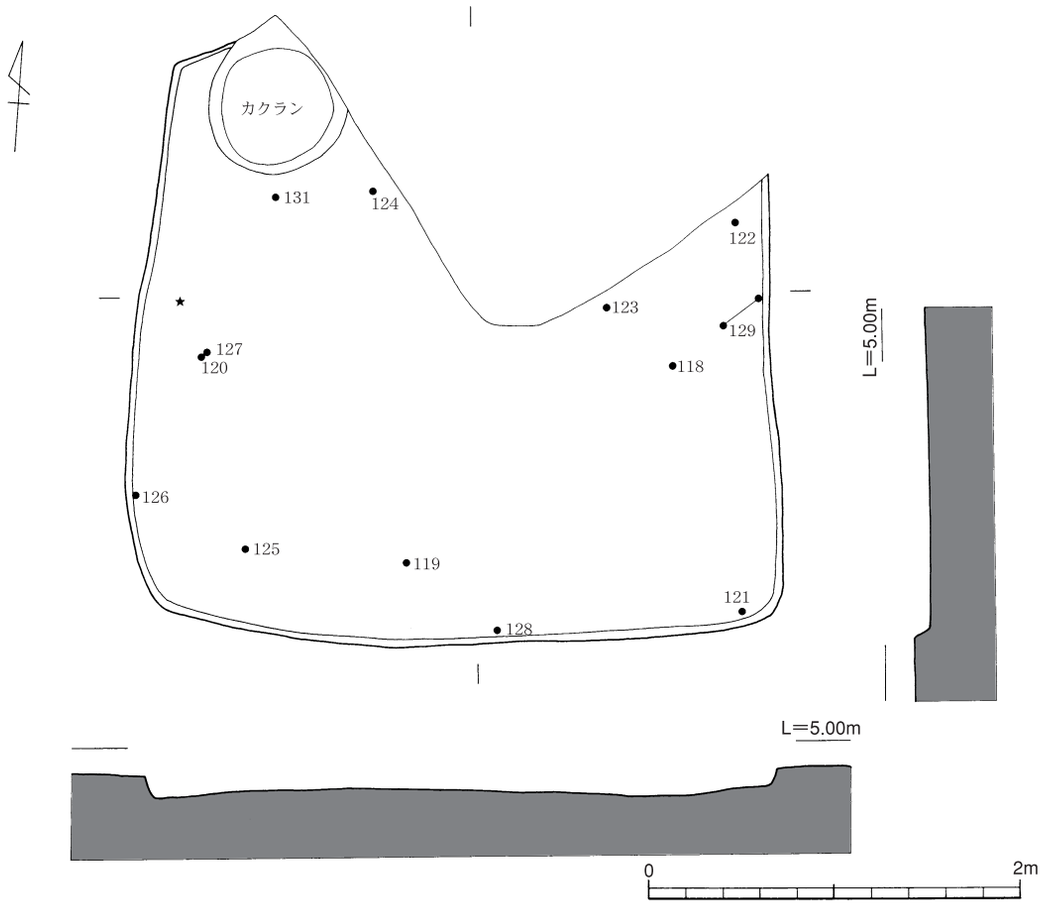
出土遺物

土師器や須恵器・土錘など多くの遺物が出土した。

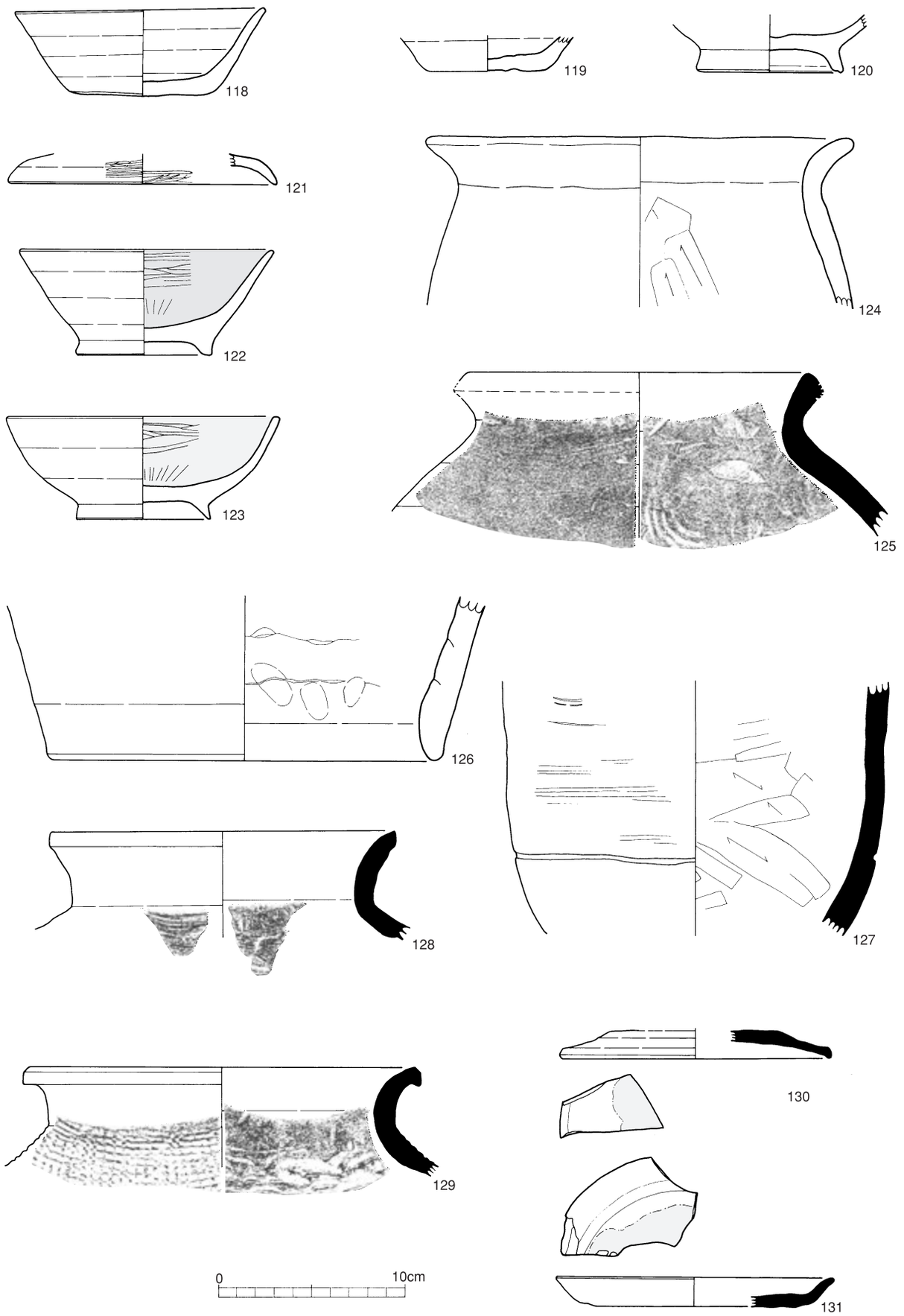
土師器（第91図118～124）

118は完形の坏である。口径及び底径も大きく器高は比較的低い。底面は回転ヘラ切りによる切り離し後丁寧にナデられている。120は埦であり，高台は垂直に近い。121は細片であるが，内外面ともヘラミガキが施された蓋である。焼成は堅致である。122・123は内黒土師器の埦である。122は短い高台で体部は直線的に開く。123は断面三角形の高台で体部は内湾して立ち上がり口径の割りに器高は低い。124は土師甕である。125は頸部が締まり口縁は短く外反するもので壺形の器形を呈する。内面には同心円当て具痕の上にヨコナデが認められ，外面はタタキ痕を完全にナデ消している。赤褐色を呈するが焼成は堅致であり赤焼きの須恵器と思われる。

126は甑である。蒸気孔の部分であり，器面にはススが付着している。内面には粘土の輪積痕が明瞭であり，その上には指頭による圧痕が残る。127も125と同様に焼成が堅致な赤焼き須恵器であ



第90図　古代の10号住居跡　平・断面図



第91図　古代の10号住居跡　出土遺物

り，甑と推定される。器面には沈線が施され，調整は外面がハケメ，内面はヘラケズリが行われている。

須恵器（128～131）

128・129は甕である。

130は蓋の転用硯，131は器高が浅い皿の転用硯である。いずれも使用面は光沢をもつ。

８号住居跡（第92図）

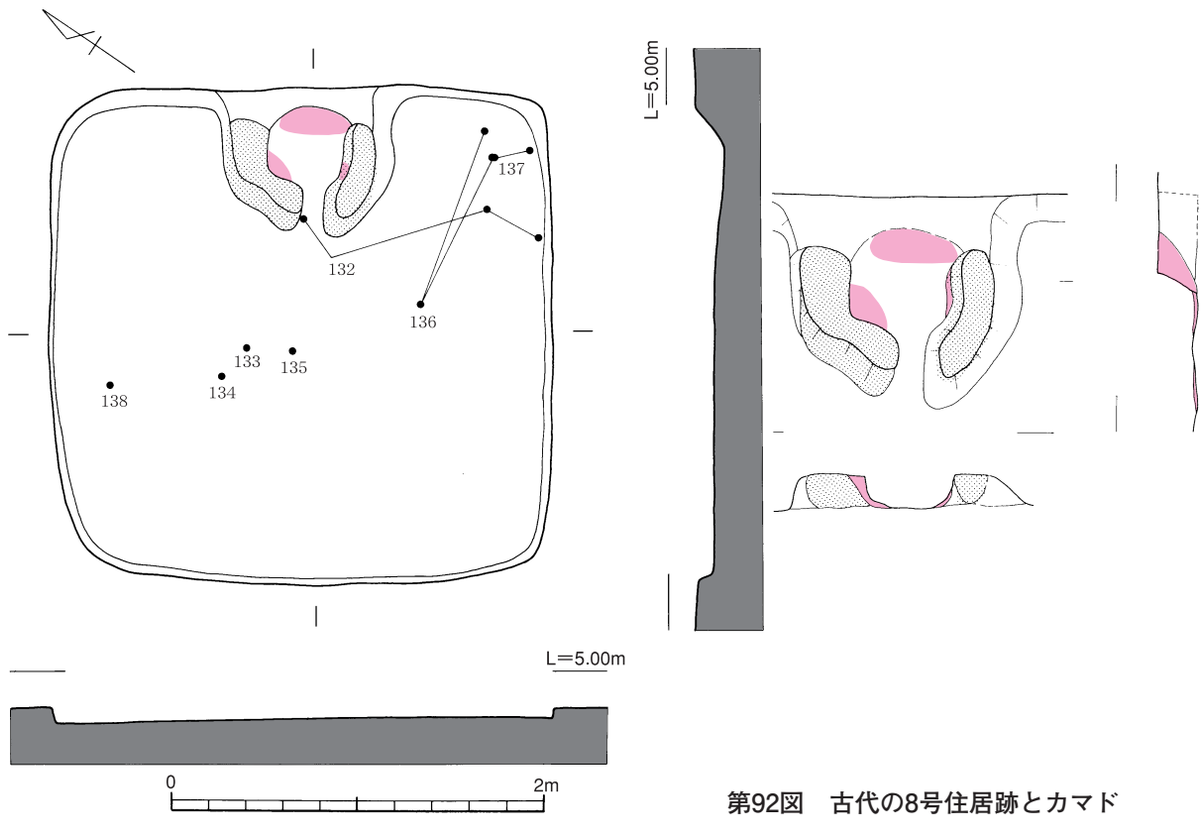
調査区域のほぼ中央に位置する。当初調査を実施したＫ９区では確認できず，その後に調査したK9.5区で確認できた。平面プランは一辺約2.6ｍを測る方形を呈しており，主軸方向は６号・11号・７号の各住居跡と同様に北西方向である。床面は平坦であり，北西部壁面には造り付けのカマドをもつ。住居跡の埋土は暗褐色土で硬く締まっており，遺物包含層であるⅢ層と同様でありほとんど区別ができないものであった。そのため検出面からの深さは約５㎝程度である。カマドは黄色粘土を使用して両袖部を形成している。炊口は比較的狭く，内側は円形に広がる。内部は赤褐色の焼土があり，袖部の内側や奥の部分も赤褐色に硬化していた。

出土遺物

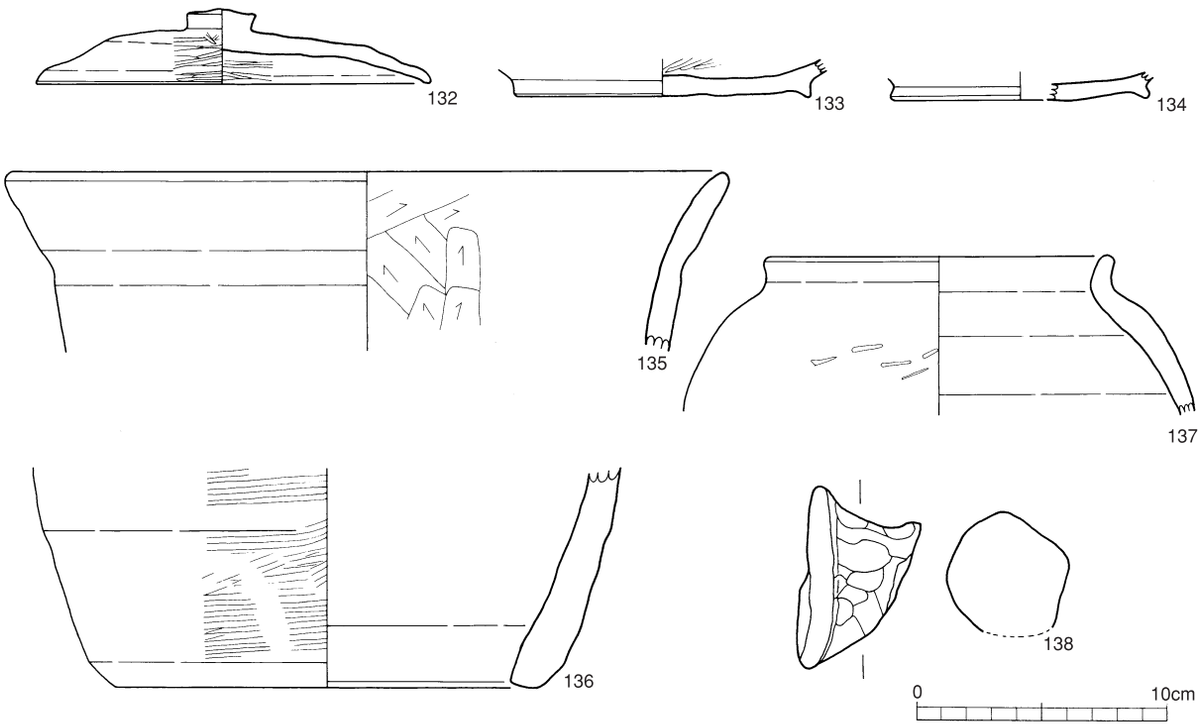
検出面が浅いため，本住居跡として認識できる遺物は多くない。全て土師器であった。

土師器（第93図132～138）

132は蓋であり，宝珠様のつまみは位置が中央よりずれている。内外面ともヘラミガキが行われている。133･134は高台付坏の底部であり底径は大きい。磨耗は著しいがヘラミガキが施されている。135は口縁部が体部からわずかに外反して開くものであり，甑の口縁部と考えられる。136は筒抜けタイプの蒸気孔をもつ甑の底部である。135と類似する胎土及び色調を呈しており同一個体の



第92図　古代の8号住居跡とカマド



第93図　古代の８号住居跡　出土遺物

可能性もある。

137は壺形を呈するもので内湾する体部からくの字状に屈曲して短い口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめ，内面はヨコナデ調整である。

138は灰白色をしており，135・136の赤褐色と異なり別個体である。甕もしくは甑の剥落した把手であり断面は円形を呈する。外面は指頭痕がみられ，内面には縦方向のヘラケズリが施されている。

５号住居跡（第94図）

調査区域の南側で検出された。当初のＫ９では埋土の区別ができなかったものの南側に拡張した部分の調査の時点で，炭化物粒子を含む埋土から住居跡の存在が確認できた。そのため北側部分は推定ラインとなっている。平面形は長方形を呈し，2.4ｍ×２ｍの大きさである。住居跡の主軸方向は他の住居跡と異なり北西方向である。検出面からの深さは南側で約15㎝程度であり，埋土は遺物包含層とほぼ同質であり，わずかに炭化物粒子も含む。12号住居跡を切っている。

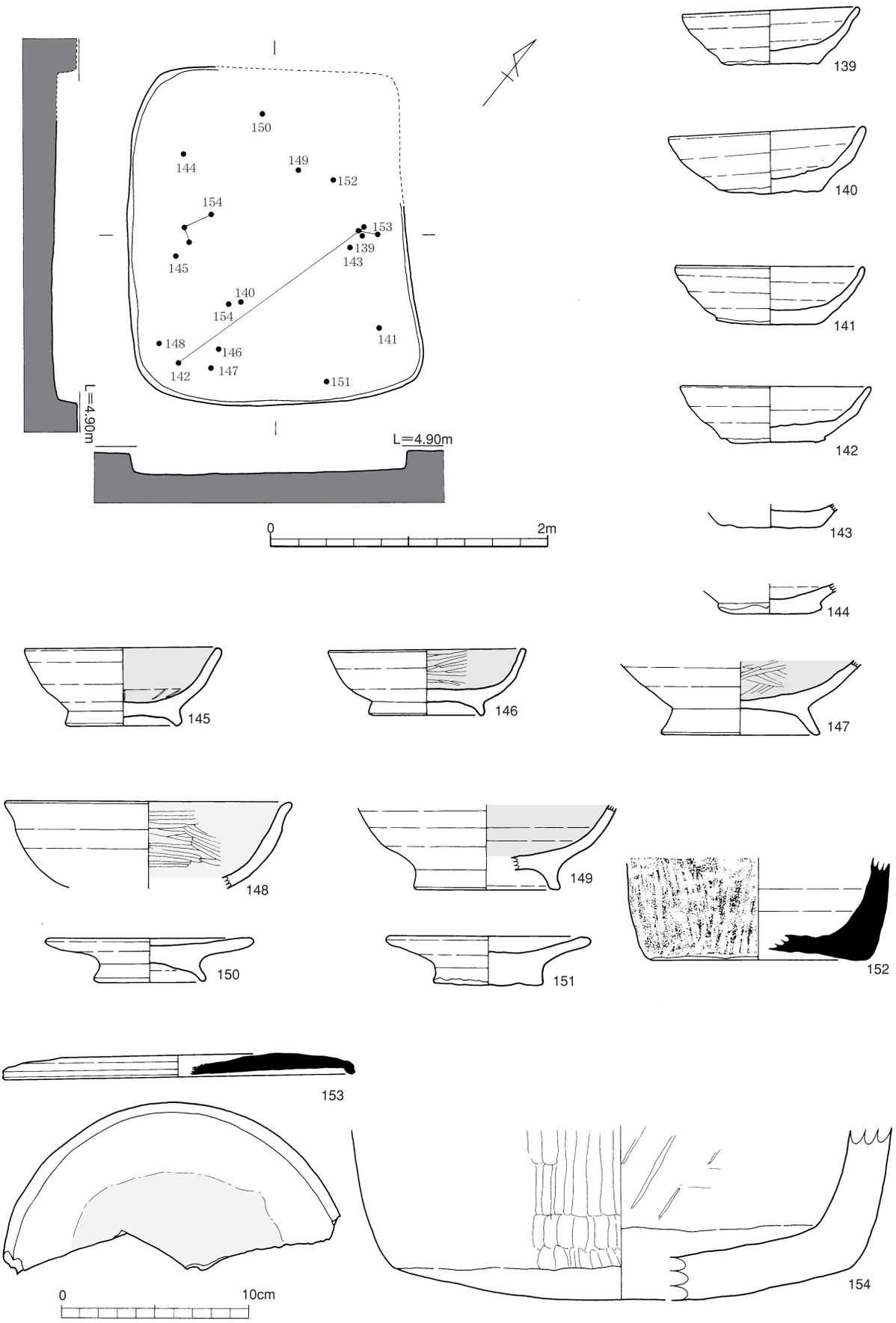
出土遺物

土師器（第94図139～151）

139～142は口径がかなり小さく，10～11㎝程度，底径は６㎝未満，器高３㎝程度を測る。体部は内湾気味に立ち上がる。底部は回転ヘラによる切り離しで，内外面ともヨコナデである。

145～149は内黒土師器である。145・146は口径11㎝に満たない小型で器高も低いものである。高台は短く立つ。内面はヘラミガキが施される。147～149は口径の大きいものであるが，いずれも小片で割れ口断面の磨耗が著しい。この住居跡のものではない可能性も考えられる。

150・151は高台付の皿であり，口径は約11㎝程度と同様であるが，150は端部を伸ばした輪高台で，151は充実高台である。いずれも皿部は浅く，器面調整はヨコナデである。



第94図　古代の5号住居跡と出土遺物

須恵器（152・153）

152は壺の底部で器面は粗いハケメ調整が行われている。153は蓋を利用した転用硯である。天井部は平坦に広がり，口縁端部は下方に折り曲げてある。硯の使用面は光沢をもつ。

滑石製石鍋（154）

154は厚みのある大型の石鍋である。器面には縦方向のノミ痕が観察され，また底部から体部の外面にはススが付着している。

12号住居跡（第95図）

５号住居跡調査終了直前に，住居床面に色調がわずかに違う新たな埋土が直線状に確認されたことから検出できた。平面形は方形を呈し，一辺の長さは約2.8ｍを測る。主軸方向は北東である。検出面からの深さは５㎝で，床面はほぼ平坦面である。

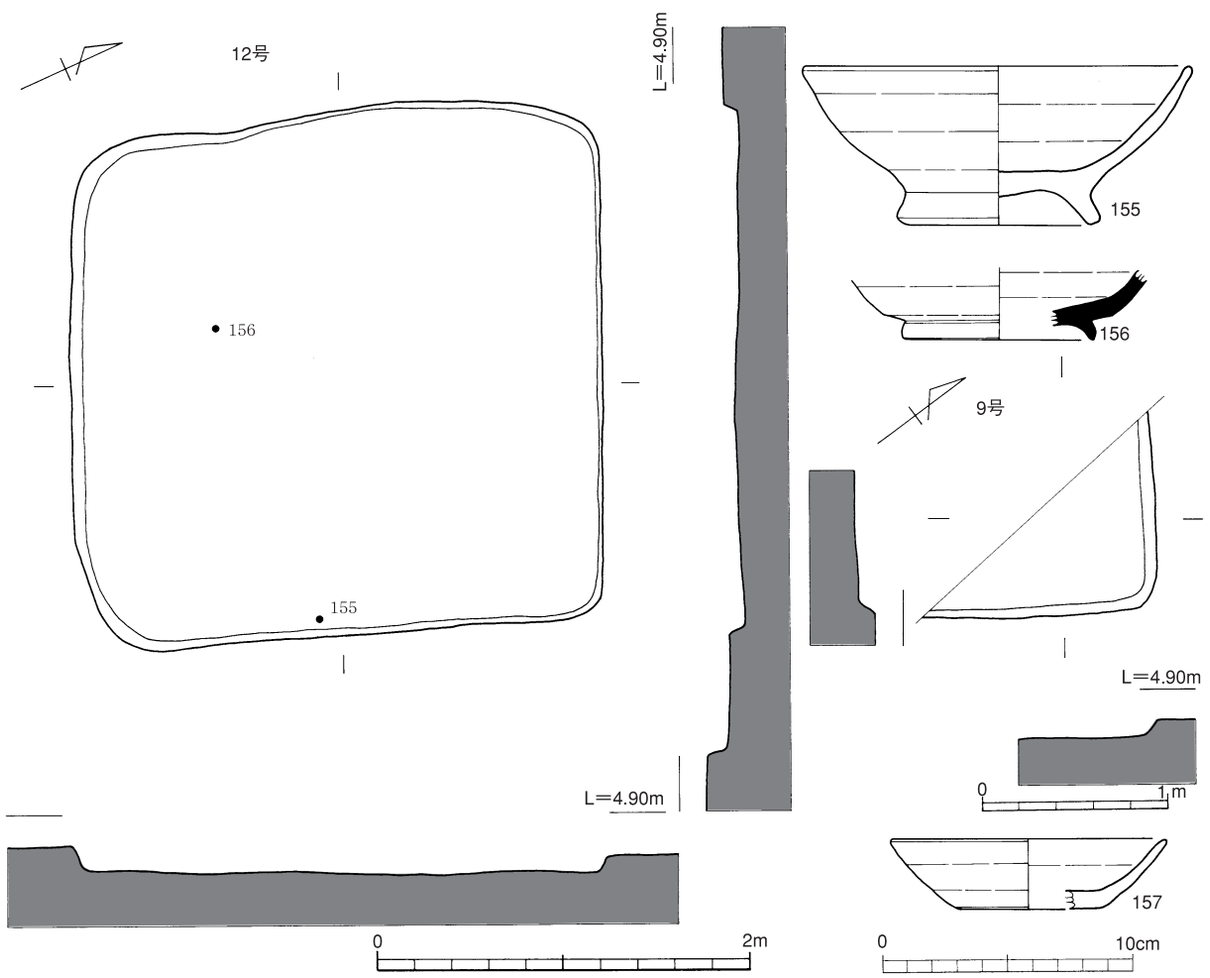
出土遺物（第95図155・156）

155は土師器埦である。体部は内湾し，器高は低い。高台は「ハ」の字状に開き端部は丸くなる。内外面ともヨコナデ調整である。

156は須恵器坏である。小さな破片であるが，体部は内湾して立ち上がり，高台は断面三角形である。器面には淡褐色の自然釉が付着している。

９号住居跡（第95図）

一部分のみの検出であり規模等は不明である。主軸方向は検出辺より12号と同様であろう。



第95図　古代の12号，9号住居跡と出土遺物

出土遺物（第95図157）

157は土師器の坏である。破片が小さいため口径等の法量は信頼性が少ない。内外面ともヨコナデ調整である。

11号住居跡（第96図）

調査区域の西側中間部で検出された。一部は調査区域外へ広がる。近接して７号住居跡があり，また13号及び21号住居跡と切り合っている。主軸方向は６号・７号・８号住居跡と同様に北東方向を向く。平面形は方形を呈し，一辺約3.4ｍを測る。検出面からの深さが約５㎝程度と浅いのは，埋土が遺物包含層とほぼ類似していることによる。

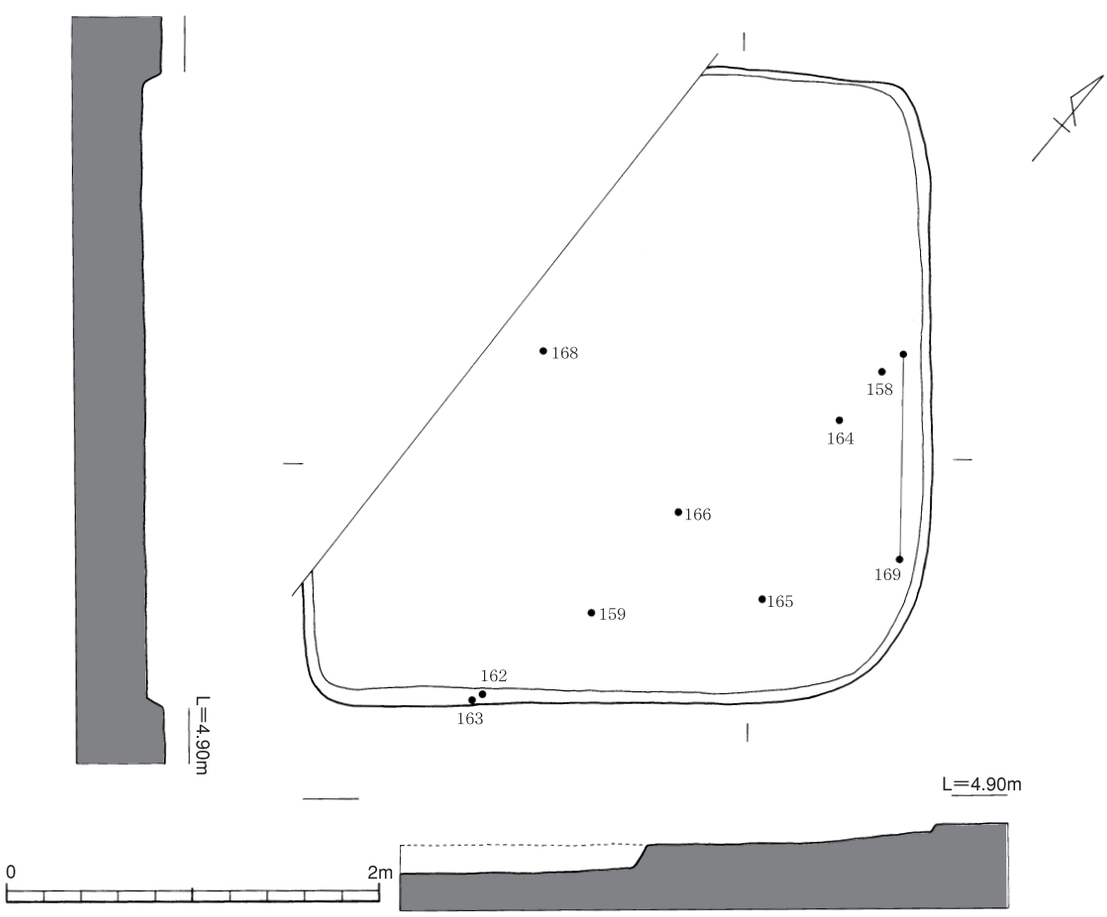
出土遺物

土師器や須恵器などが出土した。

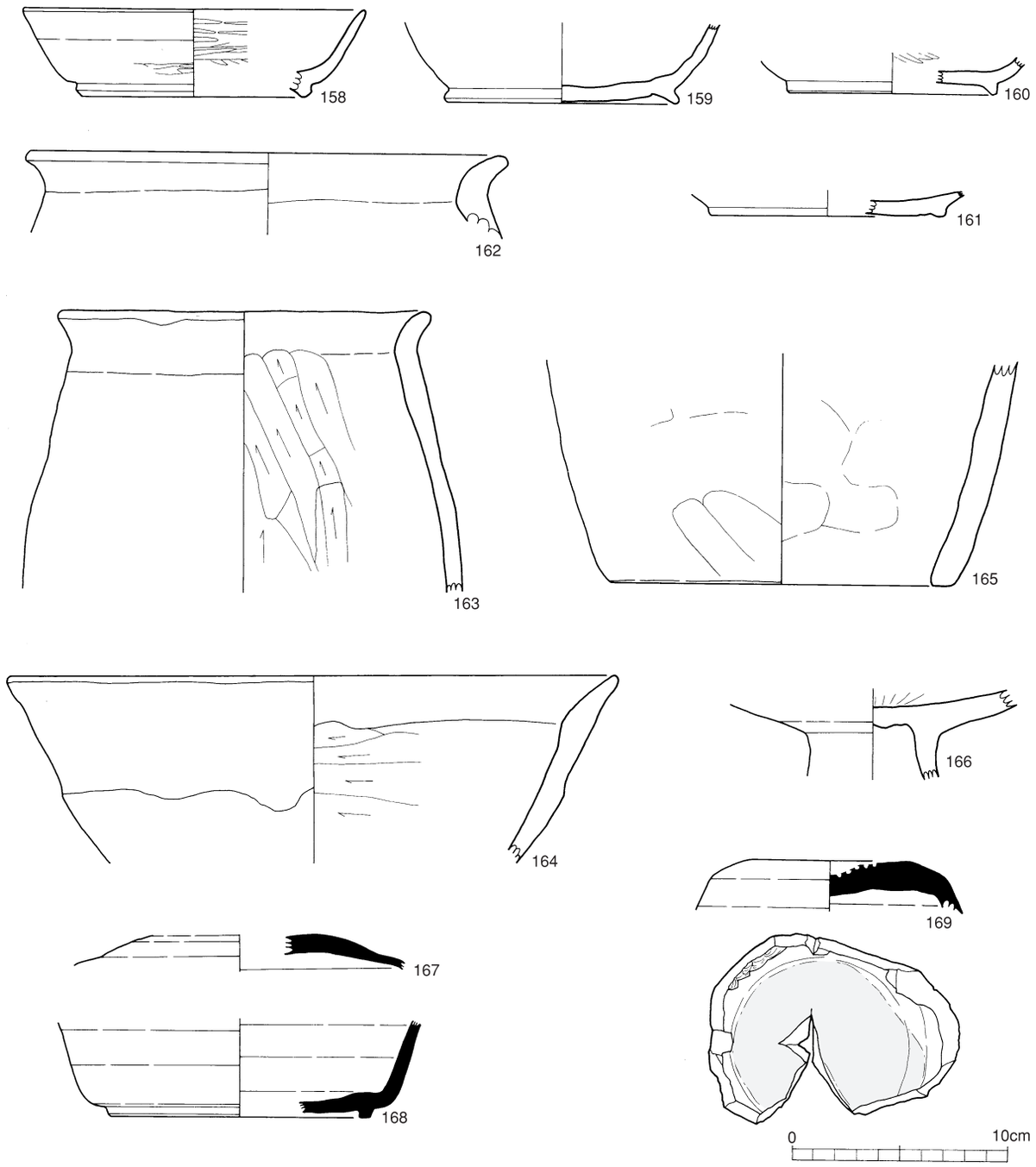
土師器（第97図158～166）

158～161は坏である。いずれも底部には低い高台を付け，高台径は10～11㎝程度と大きい。高台の接地部はいずれも高台内側端部部分のみである。158の復元口径は約16㎝を測り，159の体部はわずかに内湾して立ち上がる。器面調整は内外面ともヘラミガキが施されているが，磨耗により確認できないものもある。

162・163は甕である。163の最大径は胴部下半にあり，胴部上半部は内傾し口縁部は短くわずかに外反する。器面は磨耗が著しいが，内面はヘラケズリが施されている。



第96図　古代の11号住居跡　平・断面図



第 97 図　古代の 11 号住居跡　出土遺物

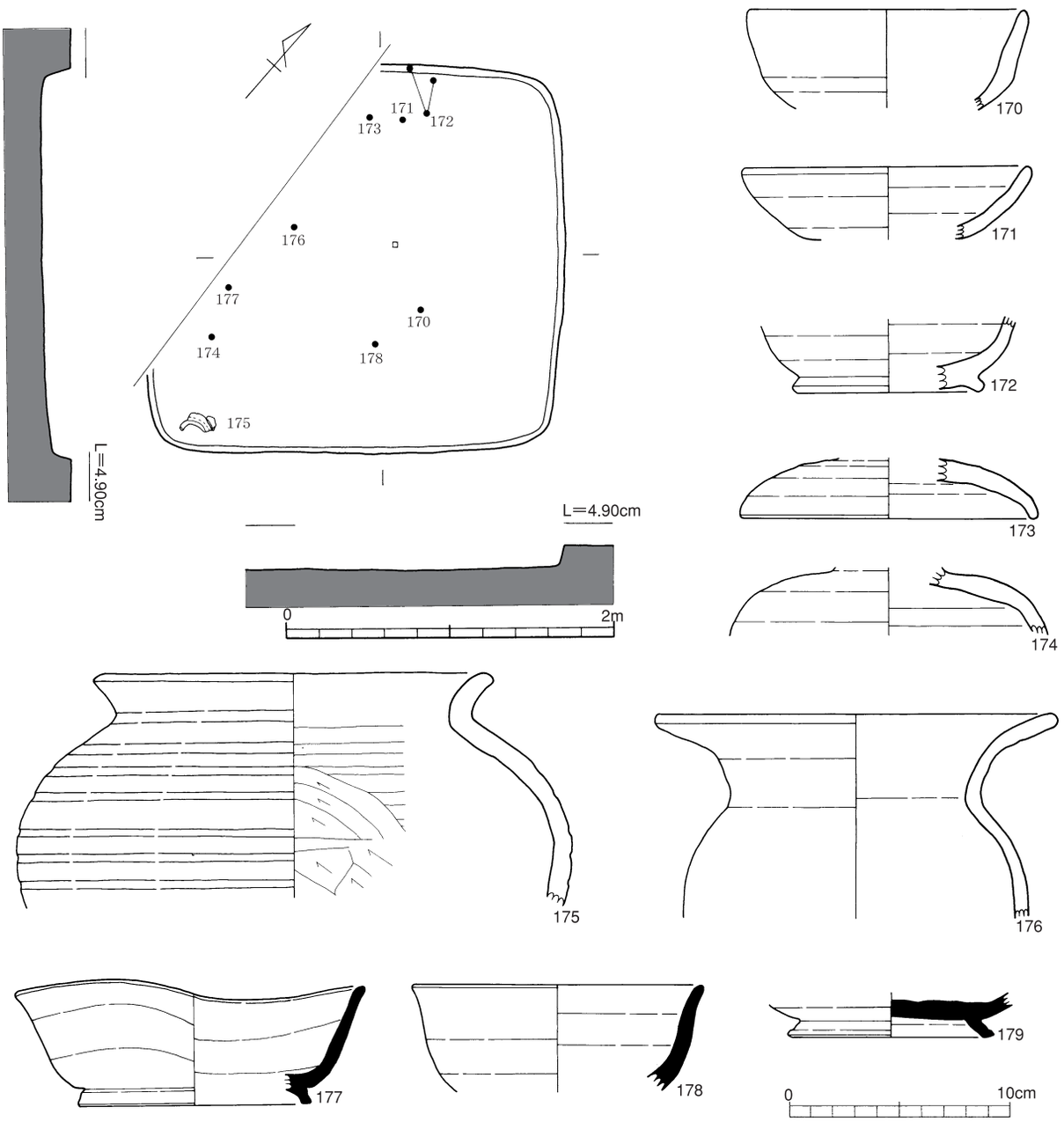
164は鍋である。体部から口縁にかけて大きく開き，内面の体部と口縁部の境界には稜がみられる。内面の器面調整は横方向のヘラケズリが行われている。

165はつつぬけタイプの蒸気孔をもつ甑である。蒸気孔端部は平坦で，体部上位は小さく開いて立ち上がる。器面には粘土の輪積痕が残り，内面にはヘラケズリの痕が観察される。

166は高坏と思われる。皿部内面にはヘラミガキが施されている。

須恵器（第97図167～169）

167は蓋である。天井部は厚く口縁部は薄くなる。内外面ともヨコナデ調整である。168は高台付坏である。高台径は12.2㎝と比較的大きい。高台は断面四角形で底部のやや内側に低くつく。体部



第98図　古代の7号住居跡と出土遺物

はあまり開かない。内外面ともナデ調整である。

169はつまみ部分が剥落した蓋であり，体部は内湾気味に開くことにより坏蓋ではなく壺蓋の可能性がある。天井部外面は回転ヘラケズリが行われている。内面の転用硯としての使用面は光沢をもつ。

7号住居跡（第98図）

11号住居跡の南側に隣接した位置で検出された。平面プランは，一部を調査区域外に残すが方形を呈し，約2.4m×2.5mを測る。主軸方向は６号・８号・11号住居跡と同様に北東方向である。検出面からの深さは約15cmであり，埋土は硬く締まった暗褐色土であり分層はできなかった。床面はほぼ平坦である。13号及び21号住居跡と切り合い関係にある。

出土遺物

土師器や須恵器など多くの遺物が出土した。

土師器（第98図170～176）

170・171は坏か埦の口縁部である。体部は内湾して丸味をもつ。172は埦であり体部は内湾して立ち上がる。磨耗が著しいものの器面調整はヨコナデと思われる。

173・174は蓋である。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリが行われる。

175は胴部が丸くふくらみ頸部はしまり口縁は屈曲して外反する。口径は18㎝と大きい。器面には整形上の工具痕と推定される沈線が巡る。内面はヘラケズリが施されている。176は頸部はしまり，口縁は屈曲して大きく開く。体部の型はあまり張らず，口径が最大径となる。175は桃白色176は灰白色を呈し，いずれも焼成は良好である。

須恵器（177～179）

177・178は焼けひずみが生じており，復元口径の信頼性に欠ける。高台はハの字状に開く。体部は内湾して立ち上がり，口縁端部で外反する。

21号住居跡（第99図）

７号及び11号住居跡の中間の位置で検出され両住居跡と切り合い関係にある。検出された二辺より主軸方向は７号や11号住居跡と同様に北東方向であるが，西側の調査区域外に伸びるため規模は明確ではない。検出面からの深さは約10㎝であり，埋土は遺物包含層であるⅢ層と類似しており硬く締まっていた。

出土遺物

土師器を主体としており，わずかに須恵器もみられた。ただし，７号住居跡及び11号住居跡と切り合っているのみでなく，13号住居跡とも切り合い関係にあることより，一部の遺物については混在している可能性も否定できない。

土師器（第99図180～193）

180～183は坏である。180は復元口径15㎝を越えるが小片のため明確ではない。胎土及び焼成は坏１類に近い。182・183は高台付坏であり，いずれも高台は低い。182は高台径11㎝と大きく，器面は磨耗が著しいものの内外面ヘラミガキ調整である。184～186は蓋である。いずれも口縁端部をわずかに屈曲させるものであり，185は内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施されている。

187～192は甕である。187は口径25㎝を越える大型甕で他は小型である。小型甕は胴部と口縁部の境界の内面に稜をもつ。いずれも内面はヘラケズリが行われている。191・192の口縁部はわずかに短く外反する。192の器面にはヘラケズリが施されている。

193はつつぬけタイプの甑の蒸気孔部分である。内面はヘラケズリが行われている。

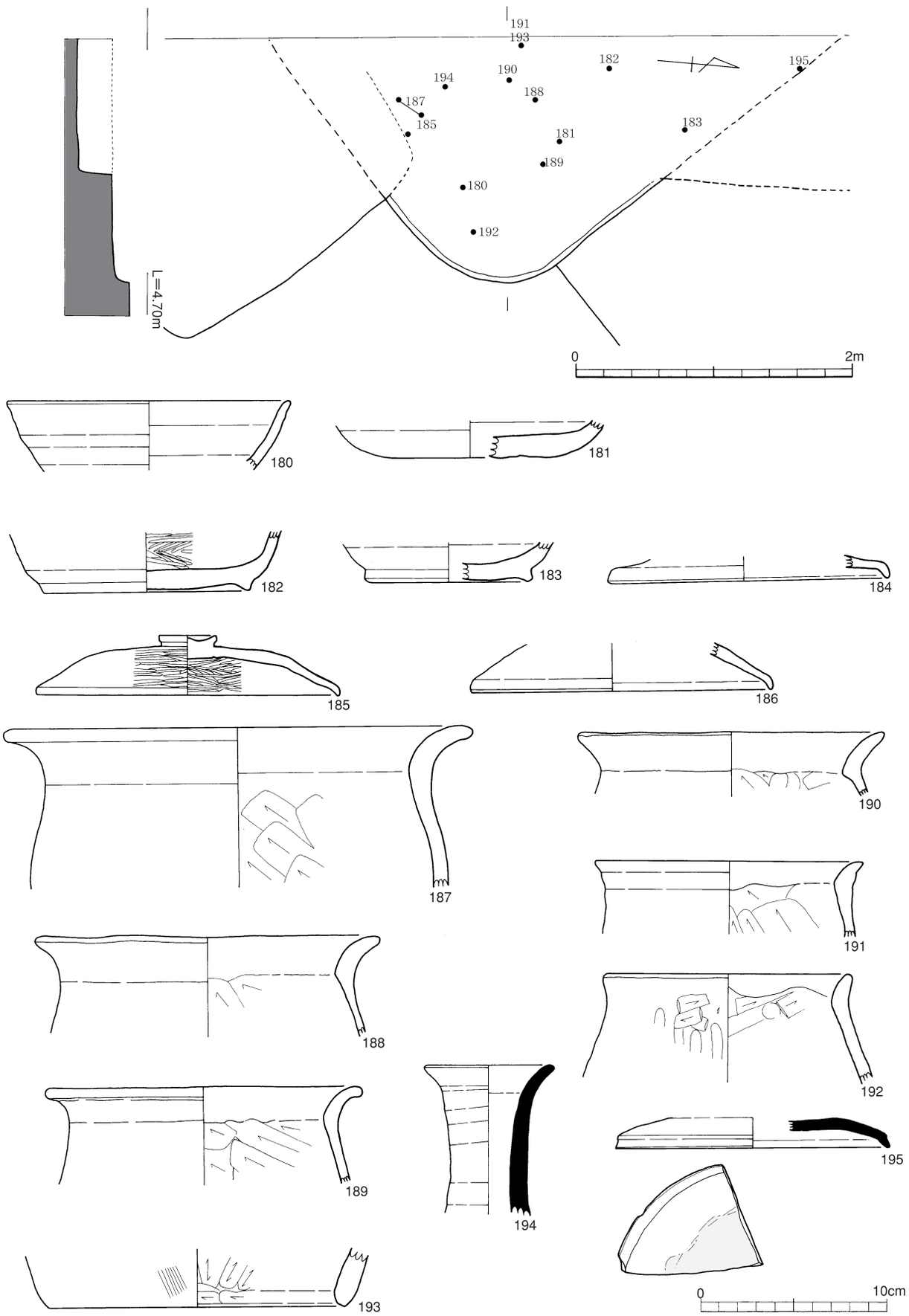
須恵器（194・195）

194は壺の口縁部である。比較的長い頸部をもち，口縁部はわずかに外反する。

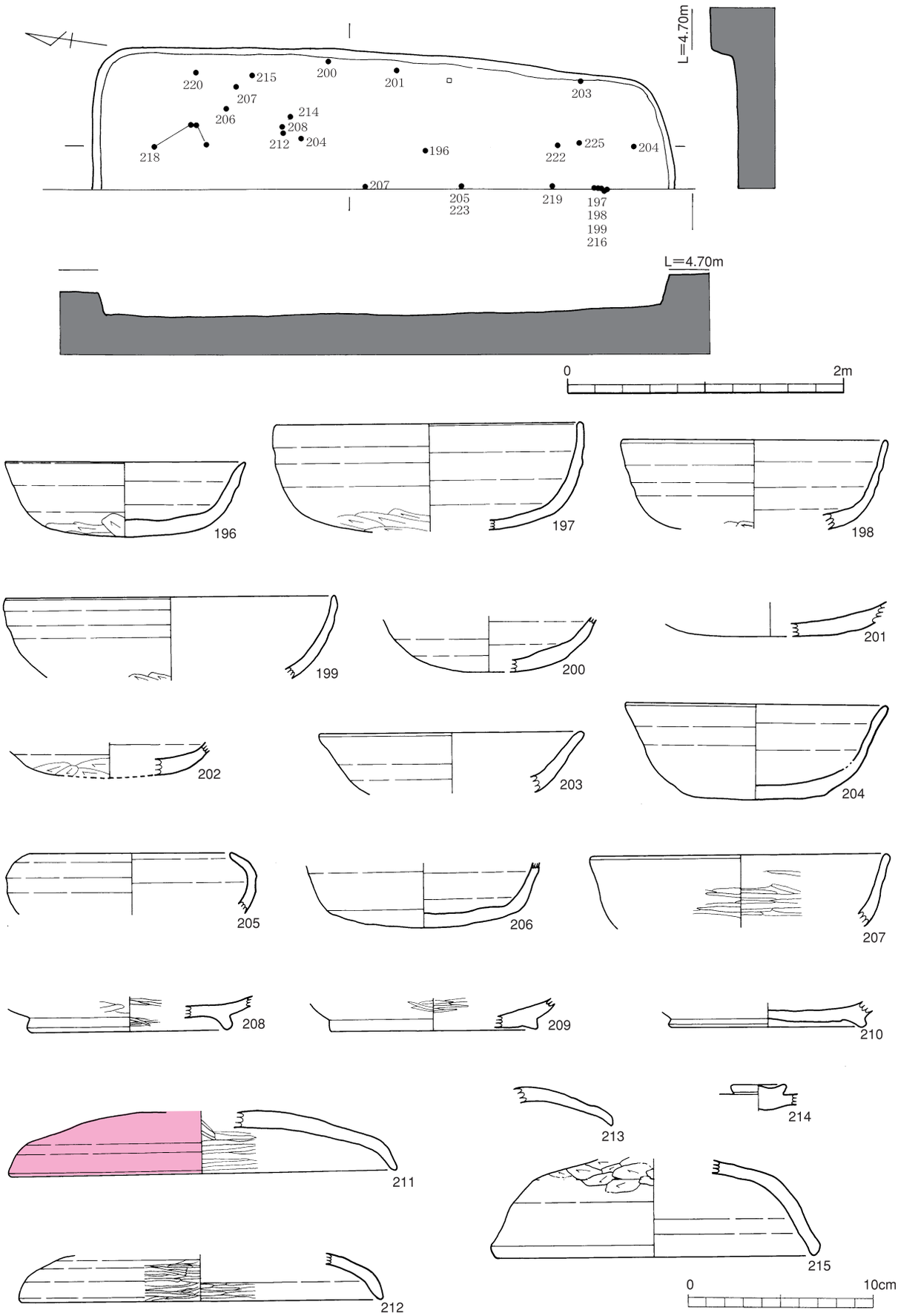
195は坏蓋を転用した転用硯である。口縁端部はわずかに外反しており，内面は硯として使用されたため光沢痕があり，墨もわずかに付着している。

13号住居跡（第100図）

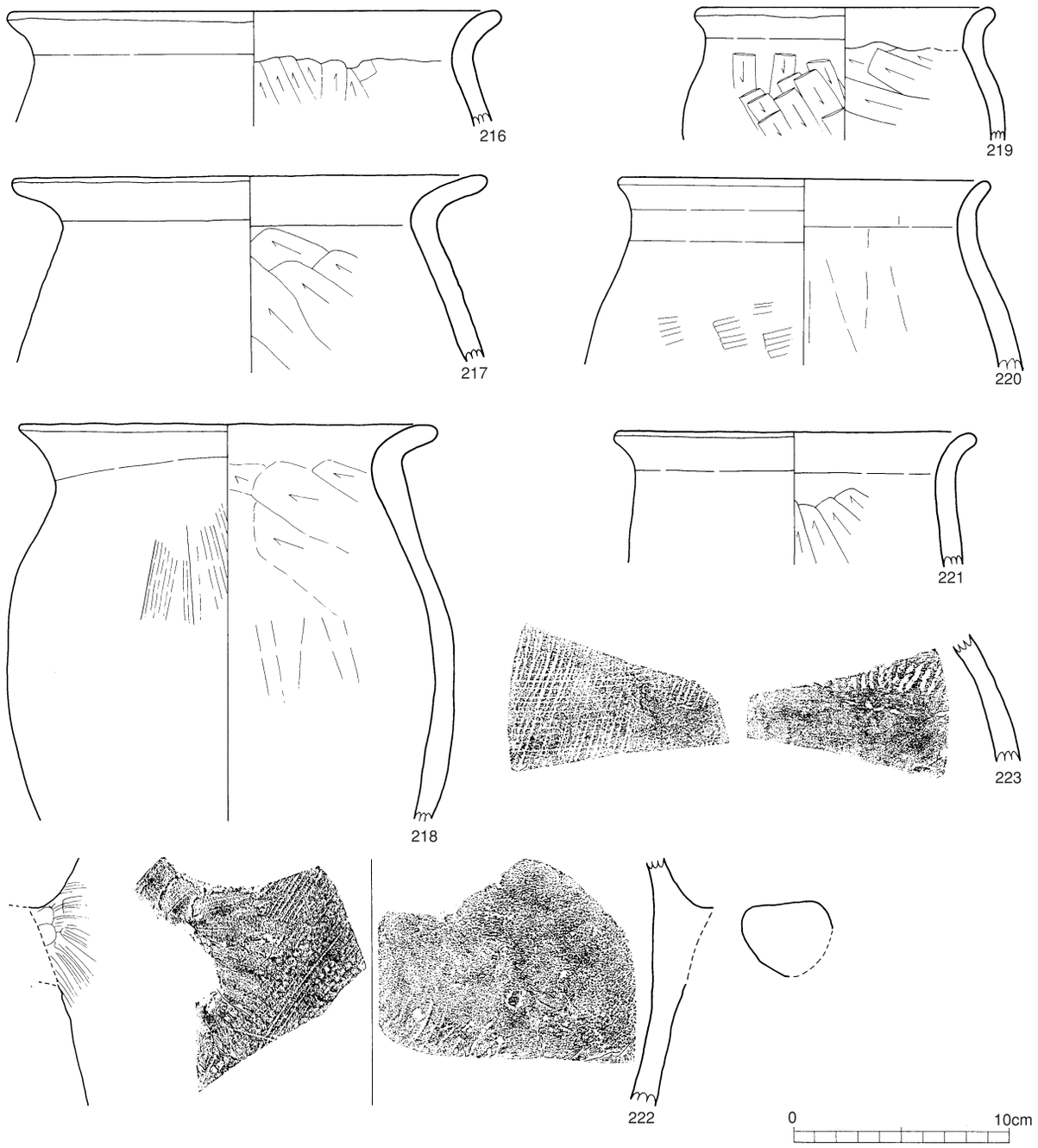
11号・7号・21号の各住居跡と切り合い関係にある。住居跡の半分以上を区域外に残している。



第99図　古代の21号住居跡と出土遺物



第100図　古代の13号住居跡と出土遺物1

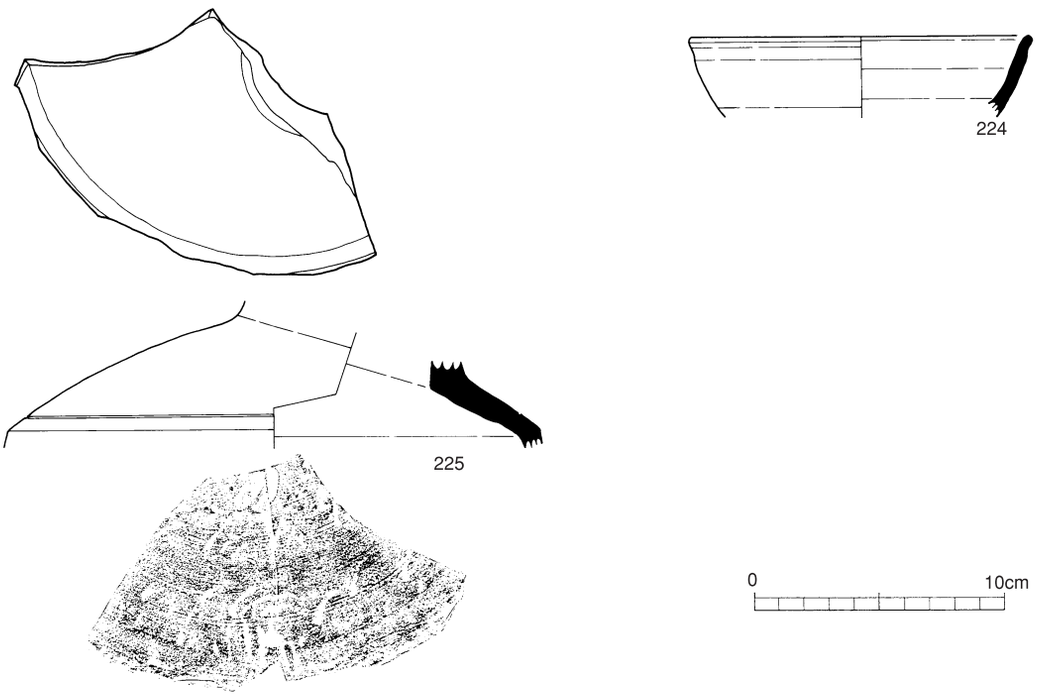


第101図　古代の13号住居跡　出土遺物2

11号住居跡の調査終了段階において，床面の色調などから存在が確認できた。西側壁面の土層堆積から，４軒のうち最古期の住居跡と判断された。部分的な調査であるが，平面プランは方形を呈すると思われ，一辺の長さは4.2mを測る。主軸方向は切り合い関係にある３基と異なり北である。床面のレベルは最も下位であり，検出面からの深さは20cmである。

出土遺物（第100図～第102図）

土師器を主体にして少量の須恵器が出土した。なお住居跡の複合する切り合い関係から，一部の遺物については他の住居跡と混在する可能性を否定できない。ただし，196 ～ 200・205・216・219･222 ～ 225 の遺物については床面近くから出土しており，確実に本住居跡のものと考えられる。



第102図　古代の13号住居跡　出土遺物3

土師器

坏・蓋・甕などが出土している。埦は出土していない。

坏（第100図196～210）

196～202は底部が丸味をもつ特徴的な坏である。196～199及び202は底部に手持ちによるヘラケズリが施されている。200・201は磨耗のため明確ではないが同様の整形と考えられる。体部上位はヨコナデ痕があり回転台を使用しての製作は明らかである。口径は約13㎝～17㎝であり，胎土・焼成は良いが，特に209・202は赤焼きの須恵器と思われるほど焼成が堅致である。

204は底部を丁寧にナデ，体部下半は内湾して立ち上がり丸味をもち，口縁はわずかに外反する。205は内湾する口縁部である。206はナデ調整により丸味をもつ底部で体部との境には稜ができている。204・206は灰白色を呈し，他は赤褐色を呈する。

208～210は高台付坏であり，高台径は大きく内外面ともヘラミガキが施されている。207はこれらの口縁と思われる。高台付坏はいずれも小片である。

蓋（第100図211～215）

211の器面には赤色顔料が施されており，内面にはヘラミガキが行われている。212・213も内外面ともヘラミガキ調整が行われている。215は天井部に手持ちヘラケズリが行われている。

甕（第101図216～221）

いずれも胴部上半は内湾して頸部でしまり，口縁部は短く外反するものである。最大径は口縁部ではなく胴部中位にある。口径では比較的大型と小型がみられる。器面調整は外側にハケメが普通であるが221はヘラケズリ状の工具ナデが行われている。内面は全てヘラケズリが行われている。

甑（第101図222）

把手をもつものであり器面は格子タタキの後，粗いハケメ調整がみられる。把手の近辺はナデが行われている。焼成は堅致で須恵器のようである。

須恵器（第101図223～第102図225）

223は桃褐色を呈する赤焼きの須恵器甕である。224は坏もしくは碗の口縁部，外面には淡緑色の自然釉がかかる。225は提瓶である。

Ｋ６～８の住居跡（第78図）

この調査区域も，用地内住宅の撤去・移転が遅れたことにより先に橋脚８（K8）の調査を行い，次の年度に橋脚６（K6）と橋脚７（K7）の調査に取りかかり，その途中で住居の移転が終了したため中間区域のK6.5及びK7.5も調査を行い，これらの調査区域をＫ６～８とした。

最終的には本遺跡のなかで最も長い調査区となり，古代の時期として竪穴住居跡９軒のほか，掘立柱建物跡１棟，土坑10基，配石をもつ炉跡１基，焼土跡４ヵ所などが検出された。ただし，初期に調査したＫ８では遺物包含層と遺構埋土との微妙な差異が認識できず，遺構を見逃した可能性を否定できない。前記したように住居跡の番号は遺跡全体の通し番号であり，弥生時代も含めたものである。

31号住居跡（第103図）

平面プランはほぼ方形を呈する。埋土は遺物包含層と極めて類似しており，そのため検出面は床面近くとなり，検出面からの深さは約４㎝である。住居跡の大きさは約2.9m×2.7mであり，主軸方向は北東方向である。他の住居跡と同様に柱穴は検出されなかった。

出土遺物（第103図226～230）

検出面から浅かったことより少量の土師器等のみ出土した。226は短い高台を付けた高台付坏である。内外面にわずかにヘラミガキの痕跡が残る。227～229は坏である。227は口径13㎝を越えるが底径は７㎝程度である。底部は回転ヘラ切りにより切り離し後，体部下半までナデている。体部は直線的に開く。体部上半及び内面はヨコナデ調整がみられる。228は口径約11㎝と比較的小さく体部は直線的に開く。内外面ともヨコナデ調整である。230は口縁部が屈曲して短く外反する甕である。床面直上で226・229とまとまって出土した。底部のみを欠くものの短胴であり，器面調整は外面がハケメ，内面はヘラケズリが施されている。

36号住居跡（第103図）

わずかに部分的な検出であり，住居跡の大部分は区域外に広がる。検出された二縁辺より主軸方向は31号とほぼ同様で，また平面形も方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約８㎝程度である。

出土遺物は土師器の小片がわずかに出土しているが図化に到らなかった。

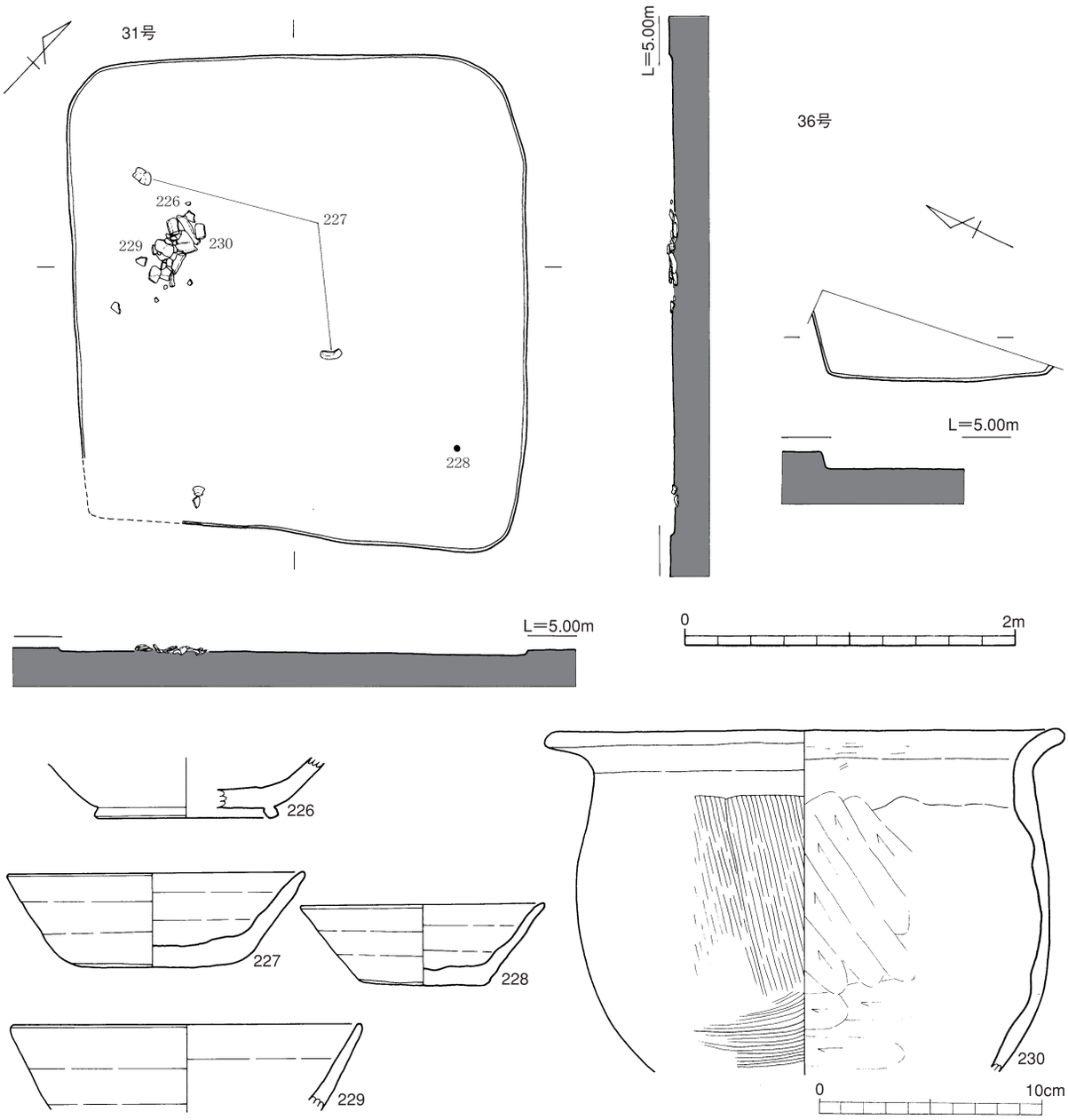
34号住居跡（第104図）

平面プランは方形を呈するもので，規模は2.4m×2.5mである。31号住居跡の約１m南西方向で検出された。主軸方向は31号住居跡とほぼ近い北東方向である。検出面からの深さは約10㎝程度であり床面は平坦である。この住居跡の中央上部では赤褐色の焼土が確認されており（第127図焼土遺構２），住居の廃棄後にまだ凹みが残存している時期に捨てられたものと考えられる。

出土遺物（第104図231～237）

土師器の坏・皿・甕や管状土錘・双孔棒状土錘などが出土した。

231～233は坏である。231は体部が内湾して立ち上がり口縁部でわずかに外反する。232も体部は

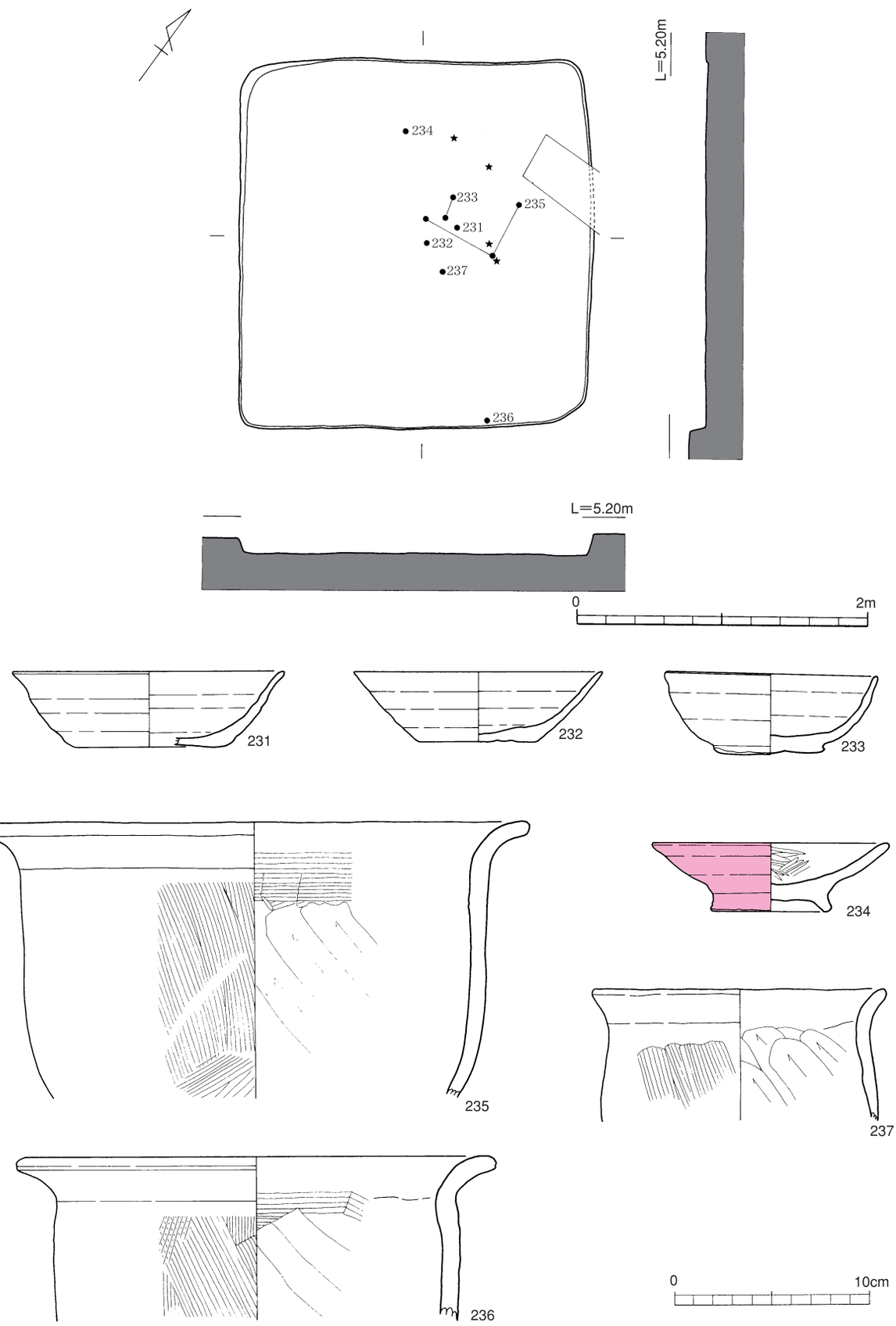


第 103 図　古代の 31 号，36 号住居跡と出土遺物

内湾気味に立ち上がる。233は口径と底径が小さく，体部は内湾して丸味をもつ。底面には短い直線のヘラ記号が施されている。234は高台付きの皿である。皿部は比較的深く，器面には赤色顔料が施され，内面にはヘラミガキが行われている。235～237は甕である。235・236は大型のもので胴部は直線的で口縁が屈曲して外反する。器高は低いようである。最大径は口縁部にある。器面はハケメ調整が顕著に行われており，内面調整は頸部付近が横方向の粗いハケメ調整，胴部はヘラケズリが施されている。

237は小型の甕であり，口縁部はわずかに外反するものである。237のみ231～236と異なり土器表面の磨耗が著しい。

なお，住居跡平面図☆印の土錘については包含層のものと一括して後述する。



第104図　古代の34号住居跡と出土遺物

29号住居跡（第105図）

平面形は方形を呈する。34号住居跡の北西方向約50㎝の位置で検出された。主軸方向は34号住居跡とほぼ同一であり北東である。東側の一角を後世の撹乱で欠くものの規模は約2.1ｍ×2.2ｍである。検出面からの深さは約15㎝を測り，床面は平坦である。

出土遺物は土師器の坏や甕などの小さな破片が少なからず出土したが，細片のため図化するには到らなかった。

23号住居跡（第105図）

29号住居跡の北側約2.5ｍの位置に検出された。住居跡と考えられる二辺を検出したが，大部分は調査区域外へ伸びる。全体の形状は方形に近いものと推定され，主軸方向は29号住居跡とほぼ同様である。埋土は上部が炭化物の混在した赤褐色土，下部は硬く締まった淡褐色土である。

出土遺物（第105図238）

238は坏である。体部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともヨコナデ調整である。

24号住居跡（第105図）

これも部分的な検出であり，23号住居跡の南側に位置する。埋土は23号と同様に上部は炭化物混じりの暗褐色土で，下部は暗褐色砂質土であった。

出土遺物（第105図239）

239は完形の土師器坏である。口径は比較的小さく，体部は内湾して立ち上がる。

25号住居跡（第105図）

23号と切り合い関係にある。これも部分的な検出であるが，主軸方向は23号と異なり北方向である。埋土の上部は硬く締まった淡褐色土で，下部は暗褐色土であった。

出土遺物（第105図240～242）

240・241は坏か埦の口縁部。242は埦の完形である。高台は短く「ハ」の字状に開く。体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。内外面ともヨコナデ調整である。

33号住居跡（第106図）

方形プランを呈し，北側にカマドをもつ。カマドは黄褐色粘土により構築してあり，北側の壁面より約30㎝外側に半円形に張り出す。両袖が手前に伸び，内部は楕円形状を呈する。内側壁面は赤褐色に硬く焼けており，底面には炭化物や灰が面状に広がる。内部中央には支えのためと推定される礫が３個みられた。断面図に示したように内部には焼土ブロックが混在しており天井部が落下したものと思われる。埋土上部には焼土１（第127図）が堆積しており，住居跡が完全に埋まる前に捨てられたものと思われる。

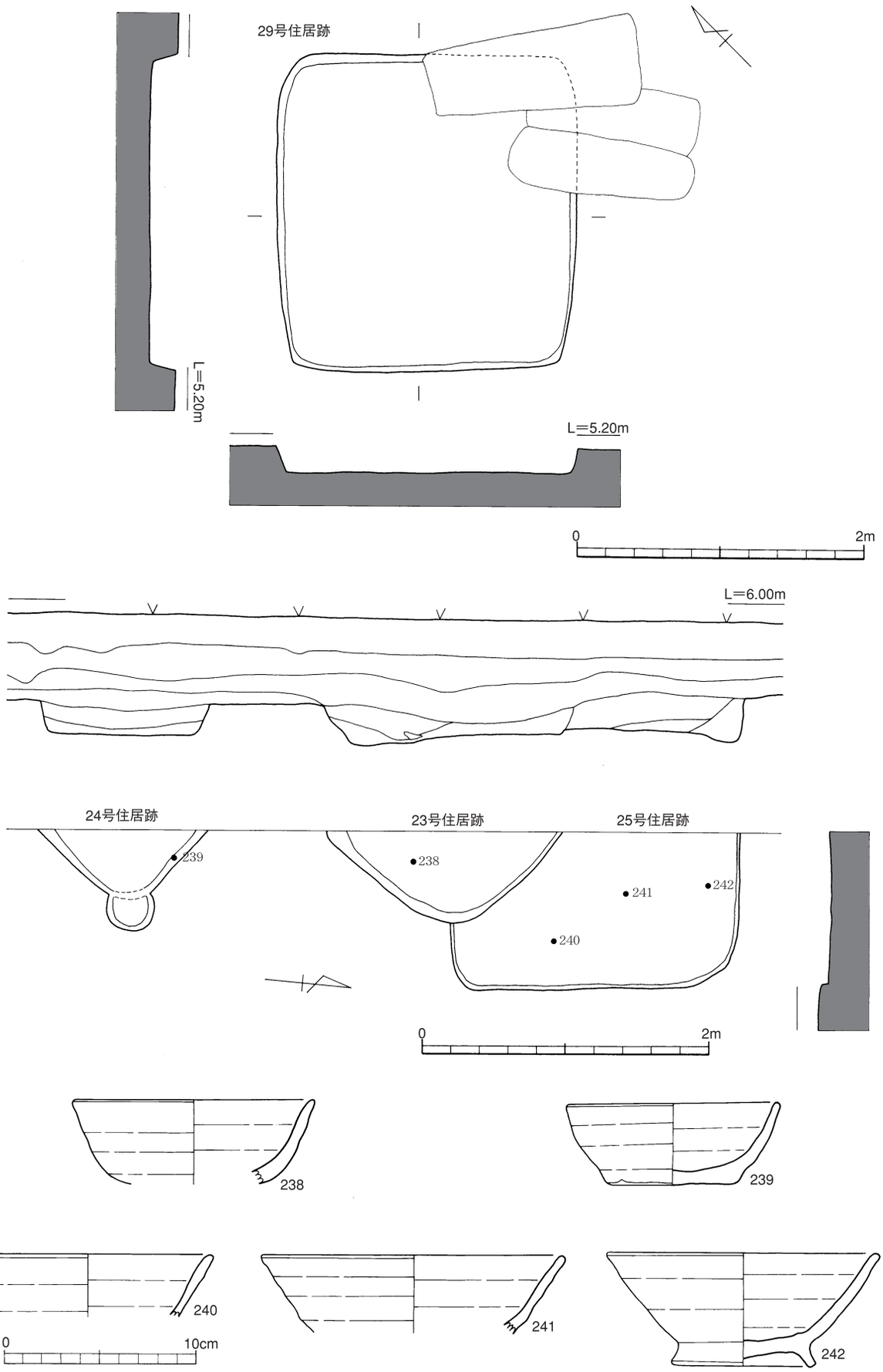
出土遺物（第106図243・244）

243は把手が剥落した甕か甑の部分である。内面はヘラケズリが行われる。244は口縁端部が下方に屈曲する須恵器蓋を利用した転用硯である。使用面は光沢痕が著しい。

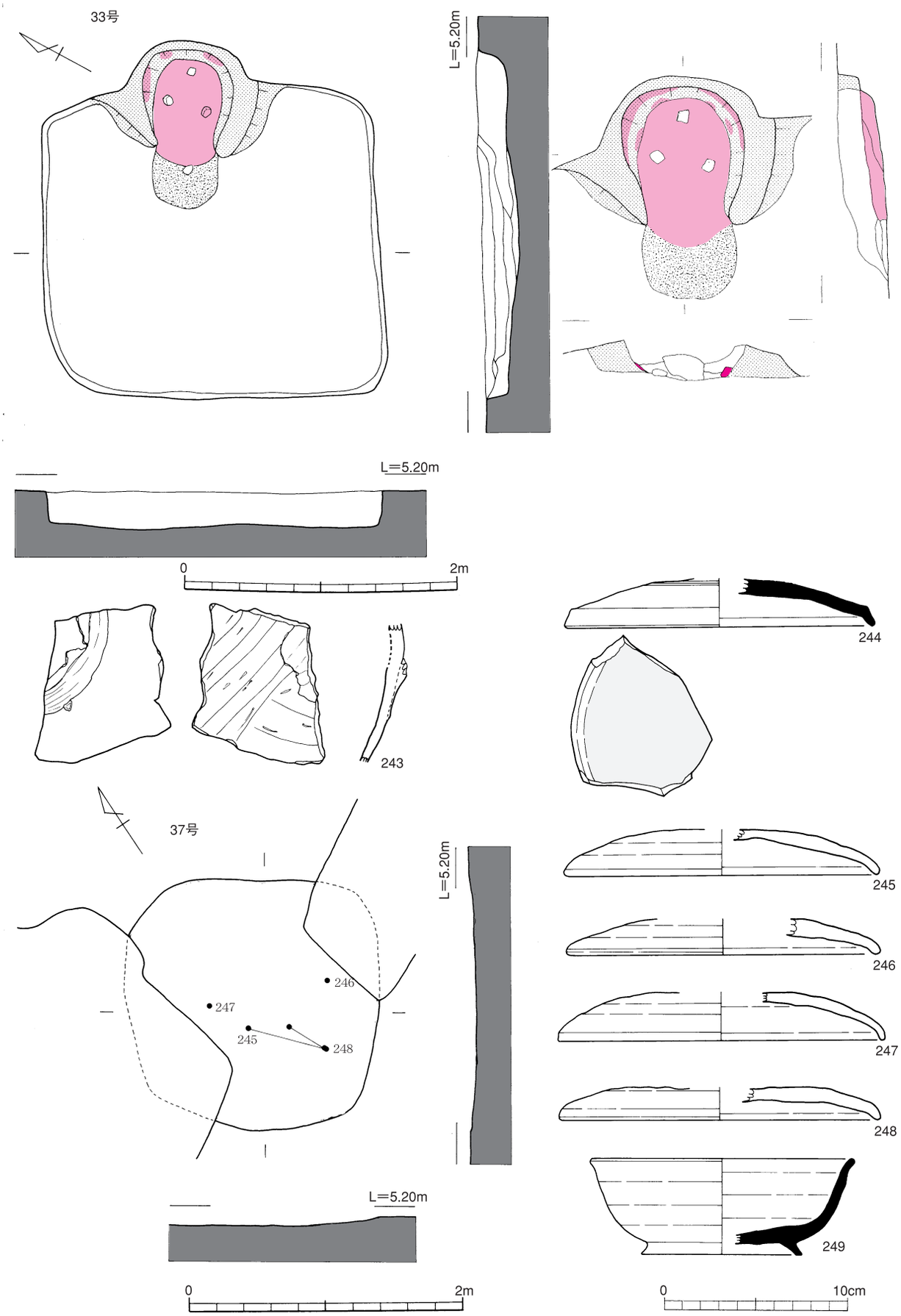
37号住居跡（第106図）

33号に切られて床面のみ検出された。床面には長さ約20㎝の炭化材が５ヵ所ほど認められ焼失住居の可能性もある。

出土遺物（第106図245～249）



第105図　古代の29号，23号，24号，25号住居跡と出土遺物



第106図　古代の33号，37号住居跡と出土遺物

245～248は土師器蓋である。口縁は17～18㎝と大きく，天井部は回転ヘラケズリが行われ，口縁端部は丸い。249は須恵器の高台付坏である。体部の立ち上がりは丸味をもち，口縁はわずかに外反する。

２．掘立柱建物跡（第107図）

K6.5で検出された部分は２間×３間の総柱の建物跡と考えられるが，一部調査区域外の広がりより３間×４間以上の可能性もある。また西側には庇部と推定される径の小さい柱穴も３個検出されている。主柱穴ピットの直径は約50㎝程度と近似した径であり，検出面からの深さはＰ６の50㎝を除くと他は浅く10～15㎝程度である。庇部のピットは径約25㎝と小さく，深さは18～35㎝である。

出土遺物（第107図250～253）

ピット内から若干の遺物が出土した。250・251は土師器坏である。250は底部を切り離した後ナデており，体部の立ち上がり部分までナデられ丸味をもつ。口縁はわずかに外反する。内外面ともヨコナデ調整である。252は小型の鉢と思われるものであり，体部上半は球状に内湾し，口縁部は短く外反する。253は甕である。頸部はわずかに締まり，口縁部は外反する。器面調整は外側が横方向のハケメ調整，内面はヘラケズリが施される。

３．大型竪穴状遺構（第108図）

K10の東側で検出された。Ⅲ層の包含層の下位で，先にピット群が検出されており，そのピット検出時点で本遺構は確認されず，それよりもさらに下位の面で検出されていることより，時期的には他の遺構よりも古い時期のものと判断される。

平面形は楕円形を呈し，長径×短径は285㎝×200㎝である。当初規模の大きさから住居跡の可能性も考えられたが，底面は摺鉢状で平坦ではなく，検出面からの深さは中央部で約80㎝を測る。埋土中には多量の土師器などが出土したのみでなく，赤褐色を呈する焼土が数ヶ所ブロック状に認められ，投げ入れられたような斜堆積の痕跡もあり，また部分的にかつ微量であるが動物骨や灰なども確認できたことより何らかの掘り込み遺構が最終的にゴミ穴として使用された可能性が想定できるかもしれない。

出土遺物

土師器の坏・甕・鍋・甑や須恵器などが出土した。

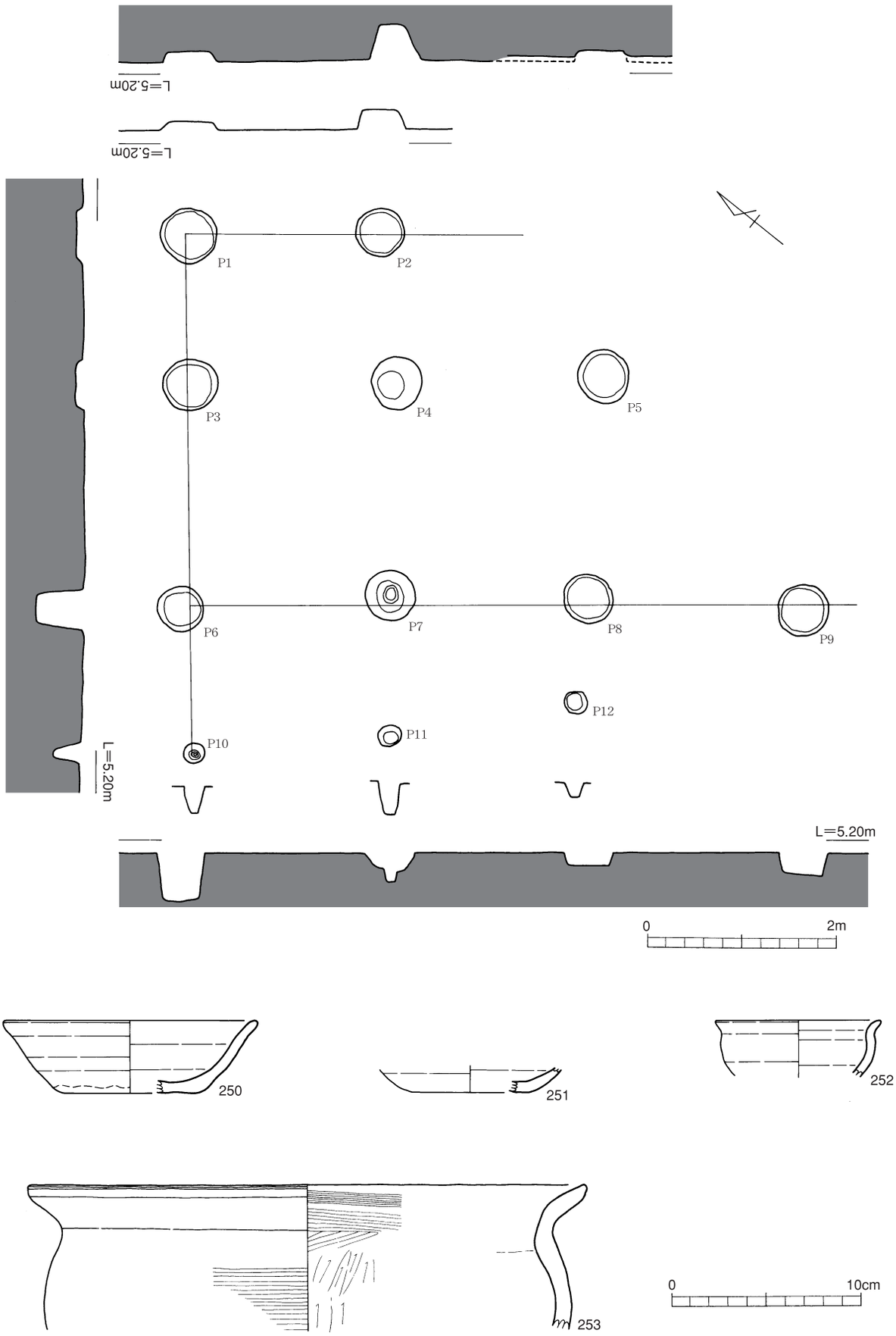
坏（第109図254～257）

254は底部に手持ちヘラケズリ調整が施され，やや丸味をもつ。体部は内湾気味に開き，口縁部で少し内湾する。口唇端部は平坦である。赤褐色を呈し，焼成は堅致である。255は破片が小さいため口径の信頼性に欠けるが，256と同様に底部は手持ちヘラケズリが施され，わずかに丸味をもつ。体部は内湾気味に開く。焼成は254と同様に堅致である。

257は高台付坏であり，低い高台をもち，口径及び高台径も大きく側面観は箱形を呈する。器面が磨耗しているが内面は部分的にヘラミガキの痕跡が残る。

甕（第109図258～第111図268）

口径では14～18㎝の小型甕（258・259・263～267）と，口径20㎝を越す大型甕（260・261）に分けることができる。258は口径14㎝に満たないものであり，胴部上位で内湾して締まり，口縁はわずかに外反する。他の小型甕も同様の形態であり，口縁は短くわずかに外反する。最大径は胴部中



第107図　古代の掘立柱建物跡と出土遺物

位にある。器面調整は外面がハケメ調整，内面はヘラケズリが行われている。

260・261の大型甕も形態や器面調整はほぼ同様である。262は胴部上位がかなり内湾して頸部が締まり，口縁は屈曲して外反する。器面調整はヘラミガキ，内面はヘラケズリが施されている。

鍋（第110図269～273）

いずれも口径が25㎝を越えるものであり，269は口縁端部のみが大きく外反するもの，270・272は器高が比較的深く，口縁はくの字状に外反する。271・273は丸味をもつ底部から口縁がさらに開くもので，体部器面には粗いハケメ調整が施されている。内面調整は全てヘラケズリが行われる。

甑（第110図274～第111図275）

274はつつぬけタイプの蒸気孔をもつ甑であり，端部内面はハケメ状の調整が施されてわずかに外反する。内面上部はヘラケズリが行われている。275もつつぬけタイプの蒸気孔をもつ甑である。これは胴部中位に牛角状の把手をもつ。蒸気孔の端部は平坦面となり，器面調整は斜位の格子タタキ目が残り上部はナデ消されている。内面はヘラケズリの後ヘラミガキが施されている。赤褐色を呈しており，焼成は堅致であり，酸化炎焼成された赤焼きの須恵器に類似する。

把手（第111図276～279）

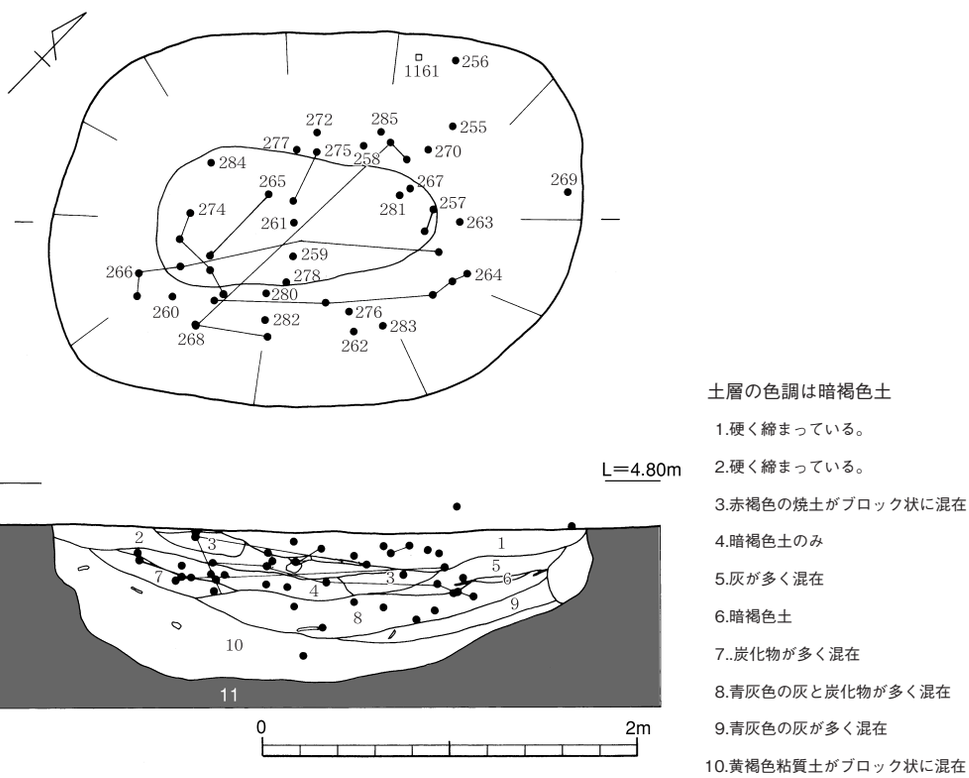
いずれも甕か甑の把手と思われるものであり，276～278は牛角状を呈し，279は棒状を呈す。ナデ整形によるもので，277は貼り付け部分のみ剥落したものである。

突帯のある土器（280）

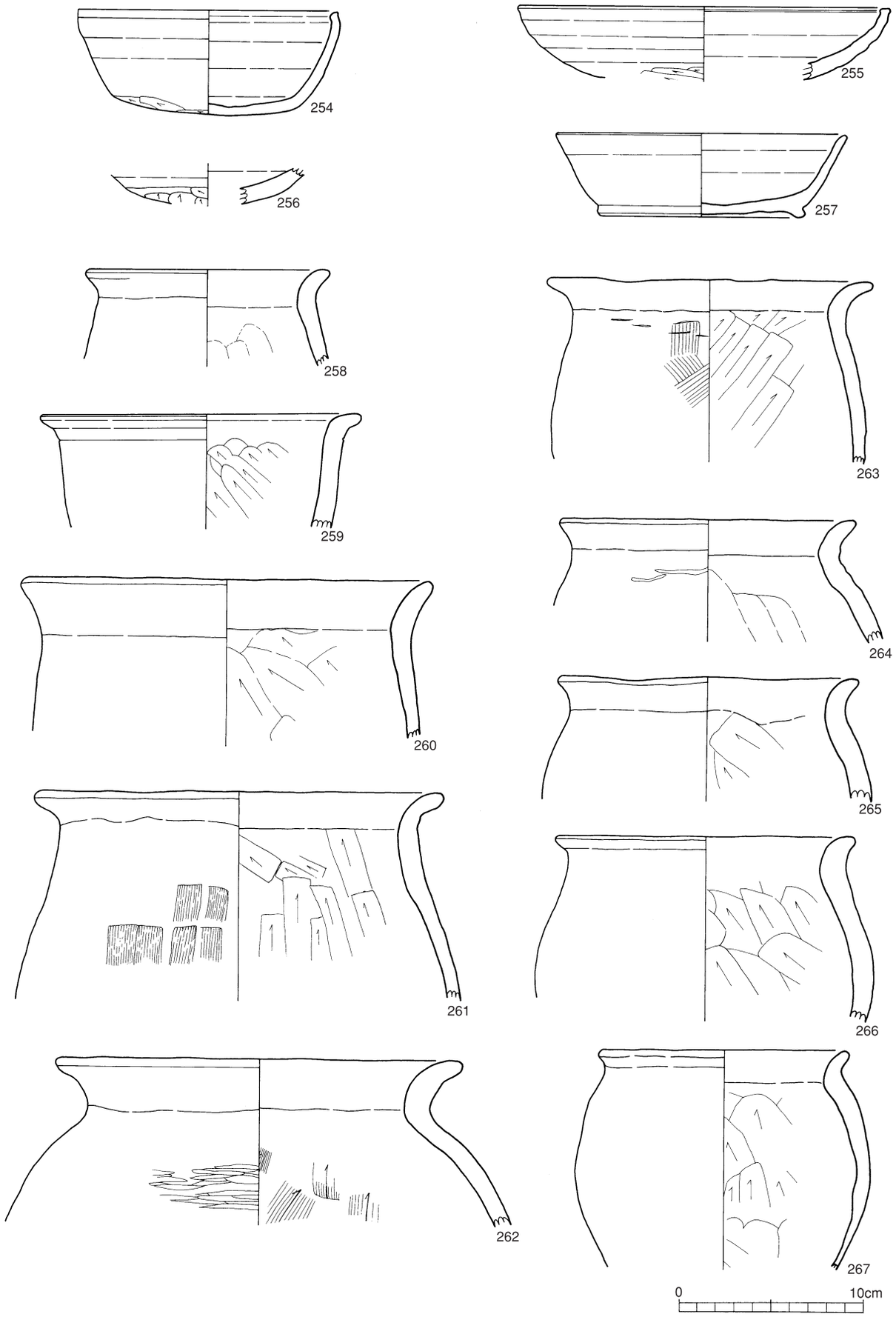
280は甕か甑と思われるもので胴部上位にいわゆる成川式土器のような突帯がめぐる。器壁は薄く器面調整はナデである。

須恵器（第111図281～285）

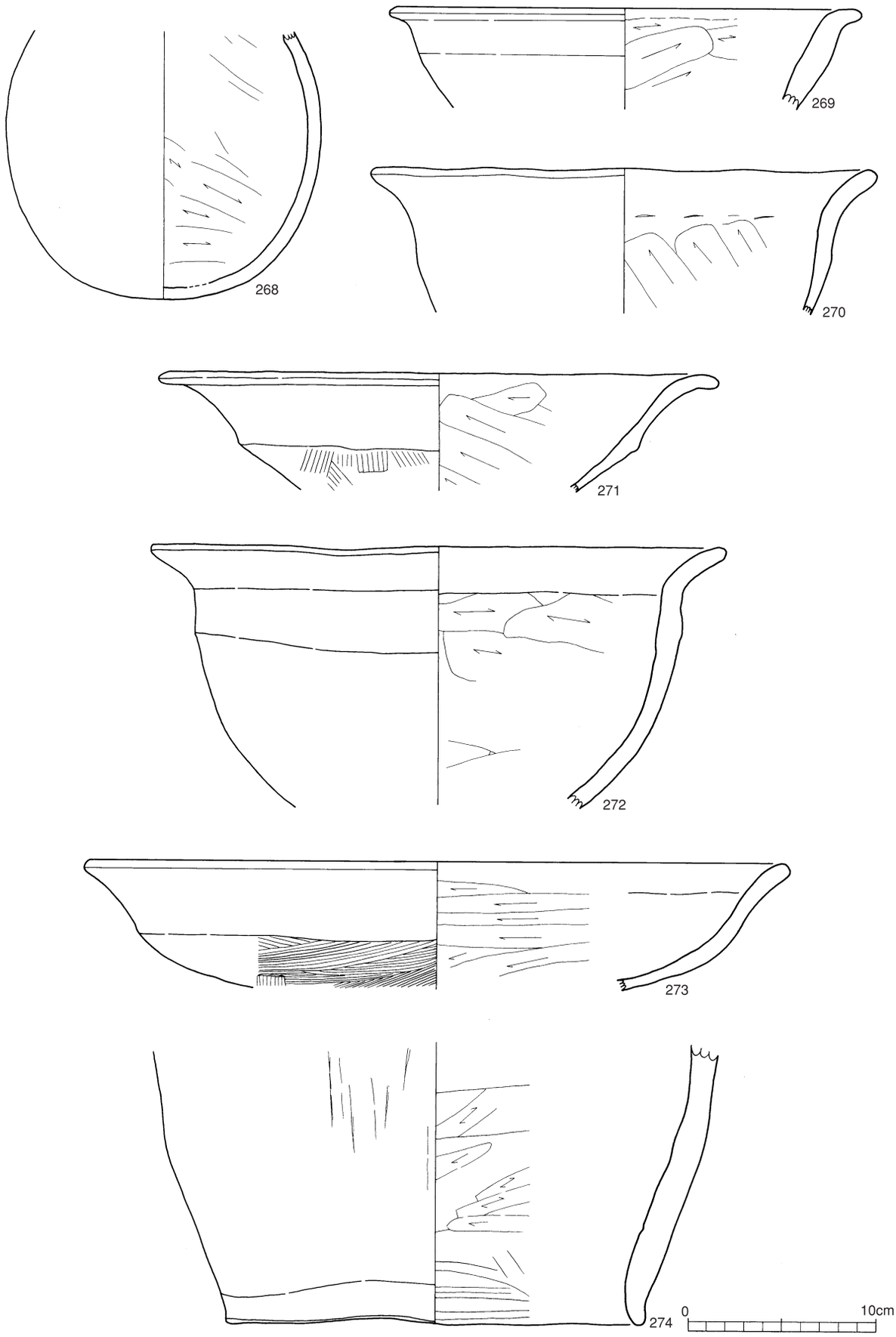
281は蓋である。天井部は手持ちヘラケズリが行われ丸味をもつ。体部はゆるく内湾して口縁部



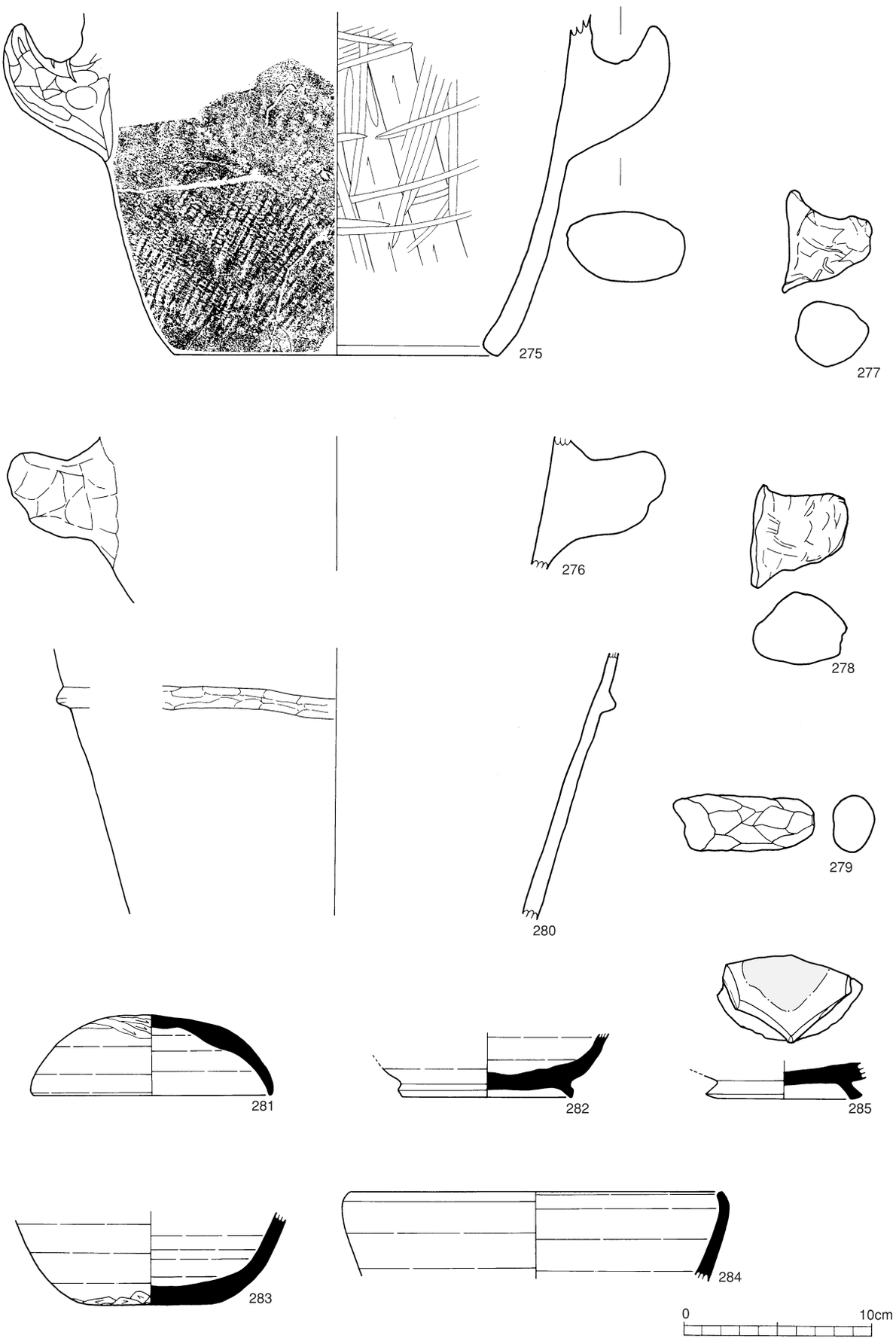
第108図　古代の大型竪穴状遺構



第109図　古代の大型竪穴状遺構　出土遺物1



第110図　古代の大型竪穴状遺構　出土遺物2



第111図　古代の大型竪穴状遺構　出土遺物3

に到る。282は高台付坏であり，高台端部は下方に屈曲し尖る。体部は内湾気味に立ち上がる。283は鉢と推定され，底部は手持ちヘラケズリが施されている。284は口縁部が内湾する鉄鉢と思われる。285は埦の転用硯であり，使用面は光沢をもつ。

４．土坑

各橋脚（K）で検出された。土坑番号は各橋脚ごとに付している。

(1)　K15では3基の土坑が検出された（第77･112図）

K15－１号土坑

径110㎝×100㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは20㎝であり，底面は平坦でなく丸味をもつ。埋土は上部が硬く締まった暗褐色土で，下部はやや明るい砂質混じりの暗褐色土であった。2点の遺物が出土した。286は口径及び底径も大きく器高は低い坏である。底部は手持ちヘラケズリが行われている。

K15－２号土坑

平面形は楕円形を呈し，大きさは116㎝×90㎝を測り，検出面からの深さは約20㎝である。埋土の大部分は暗褐色土であり，下面近くに砂が混在した薄い色調の土が認められた。２点の遺物が出土した。287は口径が12.2㎝の完形土師器坏である。なお土坑平断面にある土師器皿は紛失してしまった。

K15－３号土坑

径65㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは約30㎝である。埋土は暗褐色であり，土師器の細片が数点出土したのみである。

(2)　K13では古代の土坑と確認されたものは3基である。

K13－２号土坑

楕円形を呈しており長径×短径は180㎝×110㎝であり，検出面からの深さは50㎝である。土師器の小片が少量出土したのみである。

K13－４号土坑

楕円形を呈したもので，大きさは60㎝×40㎝，深さは14㎝である。遺物は出土しなかった。

K13－５号土坑

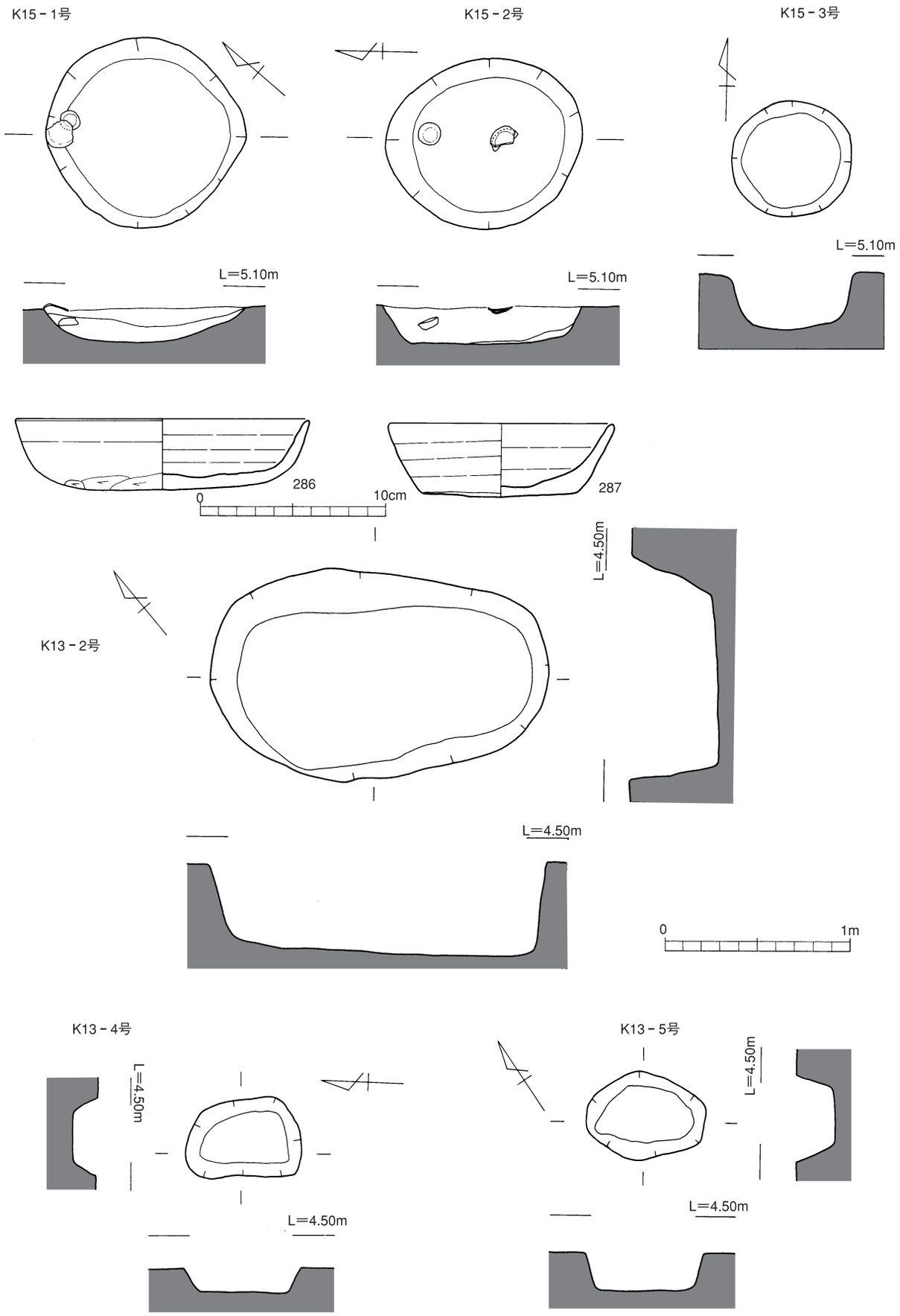
楕円形を呈しており，65㎝×48㎝の大きさで深さは20㎝である。遺物は出土しなかった。

(3)　Ｋ９～10では古代の土坑が6基と土師器坏埦が集積された土坑が検出された。

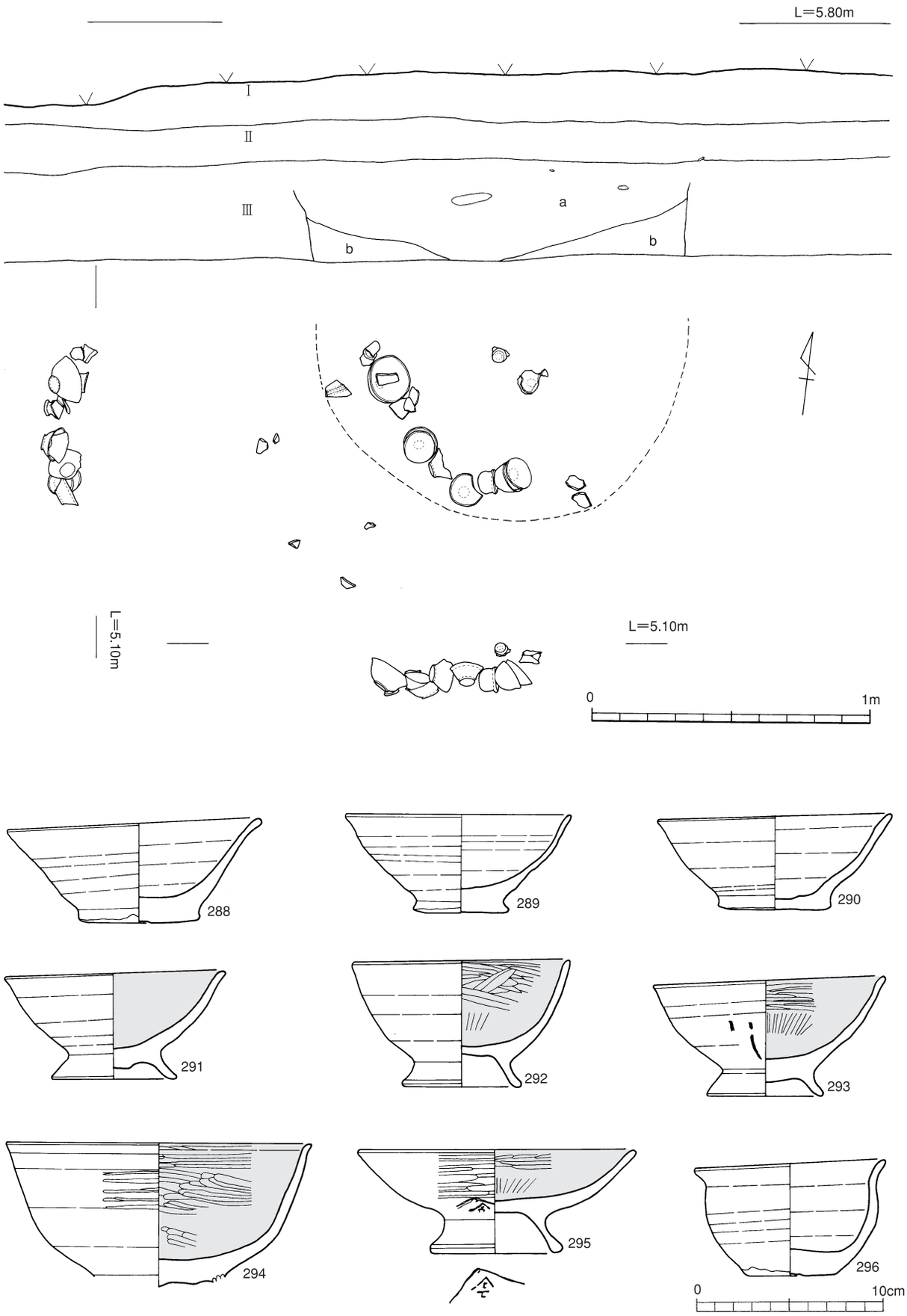
土師器集積土坑（第113図）

Ｋ９の南側拡張区で検出された。遺構は土師器の完形が集中して出土したことにより，その存在が認識された。近接した位置に土層ベルトを設定しており，ベルト断面で土坑の堀込みが確認できた。完形土師器は並んだような状況で出土した。

288は坏である。底部は厚く，体部はほぼ直線的に開く。289・290は充実高台埦と呼ばれるものである。厚くつくられた底部高台の側面部は丁寧にナデられており，体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。291～293は内黒土師器埦である。高台は「ハ」の字に開き，体部は内湾して立ち上がる。292・293の内面はヘラミガキ調整が行われているが，291は明確ではない。また292の器高は比較的高い。293の体部下半には墨書が施されており，斜方向に比較的長い直線とそ



第112図　K15，K13の土坑と出土遺物



第113図　K9　古代の土師器集積土坑と出土遺物

の左側に短い直線がみられるが，文字としては判読できなかった。294は大型の内黒土師器埦であるが高台を欠損する。

295は内黒土師皿である。「ハ」の字状に開く高台をもち，体部は内湾気味に立ち上がる。皿部は比較的深く，器面調整は内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。体部下半には墨書が施されており，「舎」と書かれている。296は小型の鉢である。器高は低く体部は丸く内湾し，口縁部が短く外反する。内外面ともヨコナデ調整である。

土坑１（第114図）

長径×短径は174cm×145cmの楕円形を呈しており，土師器集積土坑に近接して検出された。底面は丸味をもち，検出面からの深さは48cmである。底面近から土師器や須恵器の小片が出土した。第158図902は須恵器壺の肩部である。

土坑２

10号住居跡の床面検出時点で検出された。長径×短径は145cm×125cmで楕円形を呈しており，深さは20cmである。297～301は土坑内の出土土師器と須恵器である。297は口径は大きいが底径は小さく体部は直線的に大きく開く坏である。口縁部端部付近にはススが付着し，灯明皿として利用されたと思われる。器面調整は内外面ともヨコナデである。298は高台付坏，299は甕である。300は鉢と思われ器面にはタタキ目が残る。301は須恵器甕である。

土坑３

土坑２から北側へ近接した位置で検出された。平面形はほぼ円形を呈し，径は55cm×50cmであり，検出面からの深さは18cmである。302～304は出土した土師器である。302は底径が大きく，体部は内湾気味に立ち上がる坏である。303の坏は底径が小さく，体部は直線的に開く。いずれも内外面ともヨコナデ調整である。304は「ハ」の字状に広がる高台をもつ埦である。

土坑４

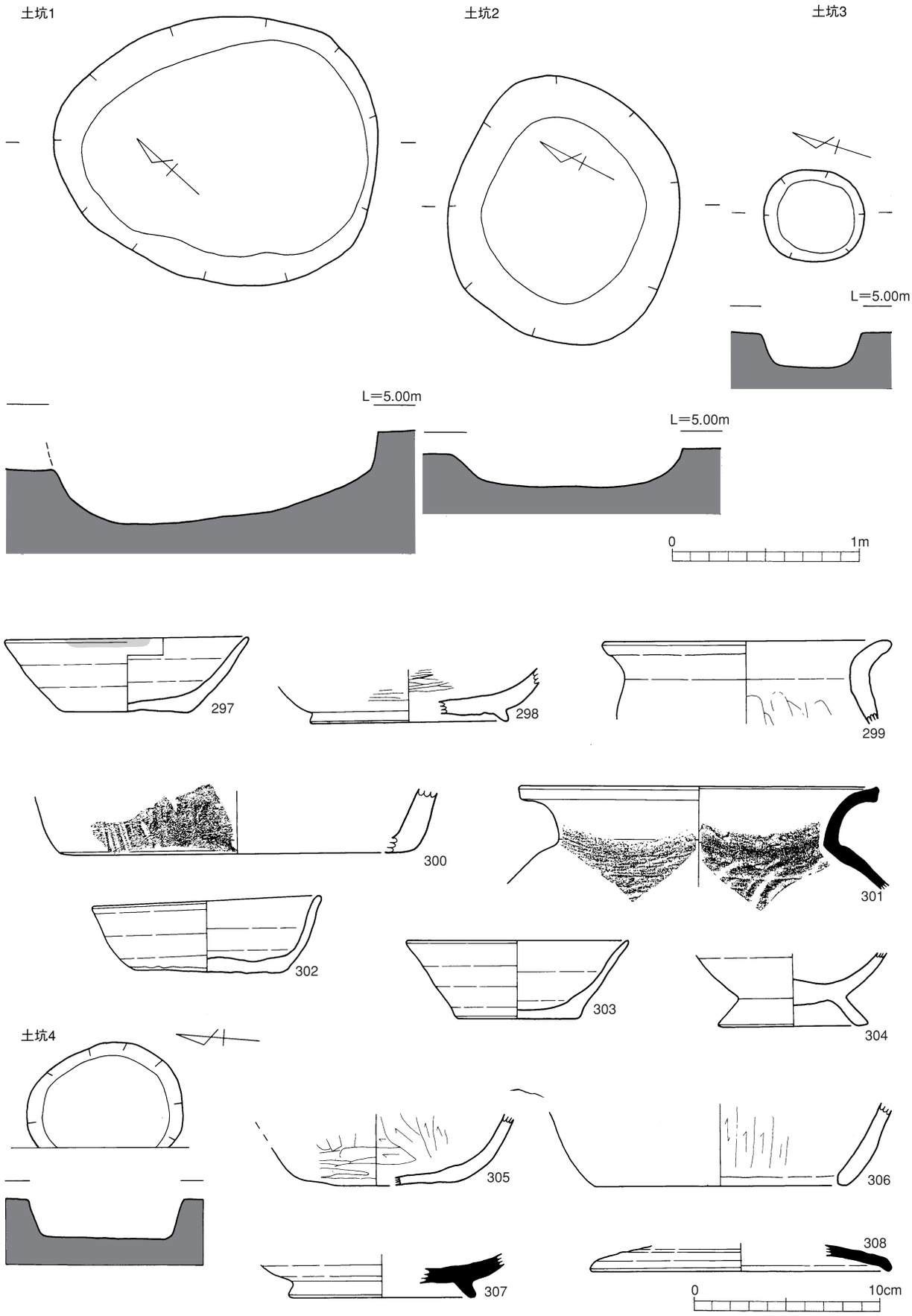
13号住居跡の床面で検出された。一部を調査区域外に残すもので長径85cm，短径48cmを測るが，ほぼ円形になると思われる。深さは21cmであった。305～308は出土遺物である。305は土師器であり，底部はわりと平坦で体部は内湾して立ち上がる。器面調整は外面がヘラミガキ，内面はヘラケズリが施されている。器種は不明である。306はつつぬけタイプの蒸気孔をもつ甑である。307は須恵器高台坏であり灰白色を呈し，焼成は良くない。308は須恵器蓋である。

土坑５（埋め甕）

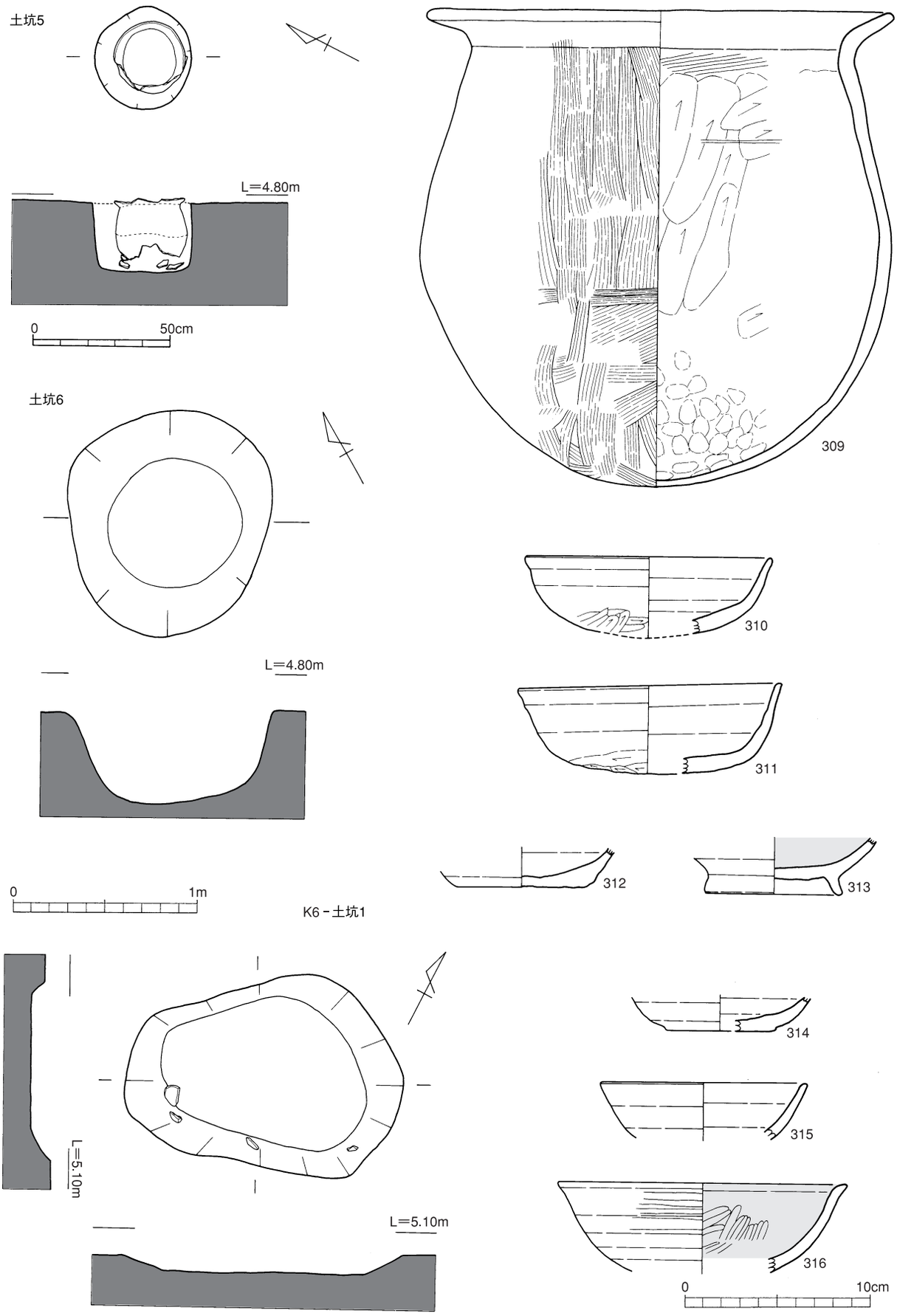
K10で検出された。309の土師甕が立てられたような状況で出土したため，その後裁ち切り調査により埋めた土坑が確認された。土坑は径約35cmのほぼ円形であり，土師甕を埋める大きさの穴を掘っている。土坑の深さは土師甕の高さと対応している。309は口径25cmを越える大型甕であり，胴部下半は球状に丸く，上部は内湾して頸部で締まり，口縁はくの字状に外反するものである。器面調整はハケメ調整が行われ，内面は下部に指頭痕が顕著に残り，上半部ヘラケズリのほか頸部付近はハケメ調整が施される。

土坑６

11号住居跡の床面で検出された。楕円形を呈しており長径×短径は125cm×110cmで深さは48cmである。310～313は土師器である。310・311は底部が丸味をもつ坏であり，底部から体部下半にか



第114図　K9　古代の土坑1～4と出土遺物



第115図　K9～10　古代の土坑5・6及びK６土坑1と出土遺物

けて手持ちヘラケズリが施されているものである。そのため体部の立ち上がりが丸味をもつ。口縁部はわずかに外反する。回転台整形によると思われ内面はいずれもヨコナデである。312は坏の底部，313は内黒土師器埦の高台付近である。高台端部は丸く，器面調整はヨコナデ，内面はヘラミガキが施されている。

(4)　Ｋ６～８の調査区域では古代の時期と判断された土坑は計10基である。このほか竪穴住居跡が９軒，掘立柱建物跡１棟，焼土遺跡４ヵ所が検出されている。

土坑１（第115図）

Ｋ６で検出された。長径×短径は150㎝×110㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは12㎝である。底面は平坦であるが，立ち上がりは開く。314～316はこの土坑から出土した土師器である。314は坏の底部，315は体部が丸く内湾しており埦の口縁部と思われる。内外面ともヨコナデである。316は内黒土師器である。体部は内湾し，口縁部がわずかに外反していることより埦と思われる。器面の上部及び内面はヘラミガキが施されている。

土坑２（第116図）

Ｋ７で検出された。ほぼ円形を呈する径65㎝×61㎝の大きさであり，土坑というより大型ピットに近いものである。検出面からの深さは22㎝である。317・318の土師器が出土した。

317は口径19㎝を測る大型の蓋であり，口径の割に浅く体部は直線的に開き，口縁端部がわずかに屈曲する。平坦なつまみの上面には焼成後の刻書が認められ「丁」と直線的に記されている。赤褐色を呈し，器面調整は内外面ともヘラミガキが施されている。318は口径16.5㎝，底径12.2㎝を測る大型の坏である。底面は幅広いヘラ切りにより体部との境に稜がつくられている。体部は直線的に立ち上がり，側面観は箱形を呈する。内外面はヨコナデである。

土坑５

東側壁面近くで検出されたため，一部が実測調査区域外に残る。検出部分から径約110㎝のほぼ円形を呈すると思われる。検出面からの深さは約30㎝であり，底面は摺鉢状である。

土坑３

土坑５から北へ約12ｍの位置で検出された。これも一部が調査区域外に残るものであり，検出部分は幅130㎝を測る。長方形に近い形状になると推定される。底面は平坦であり，検出面からの深さは約50㎝である。

土坑４

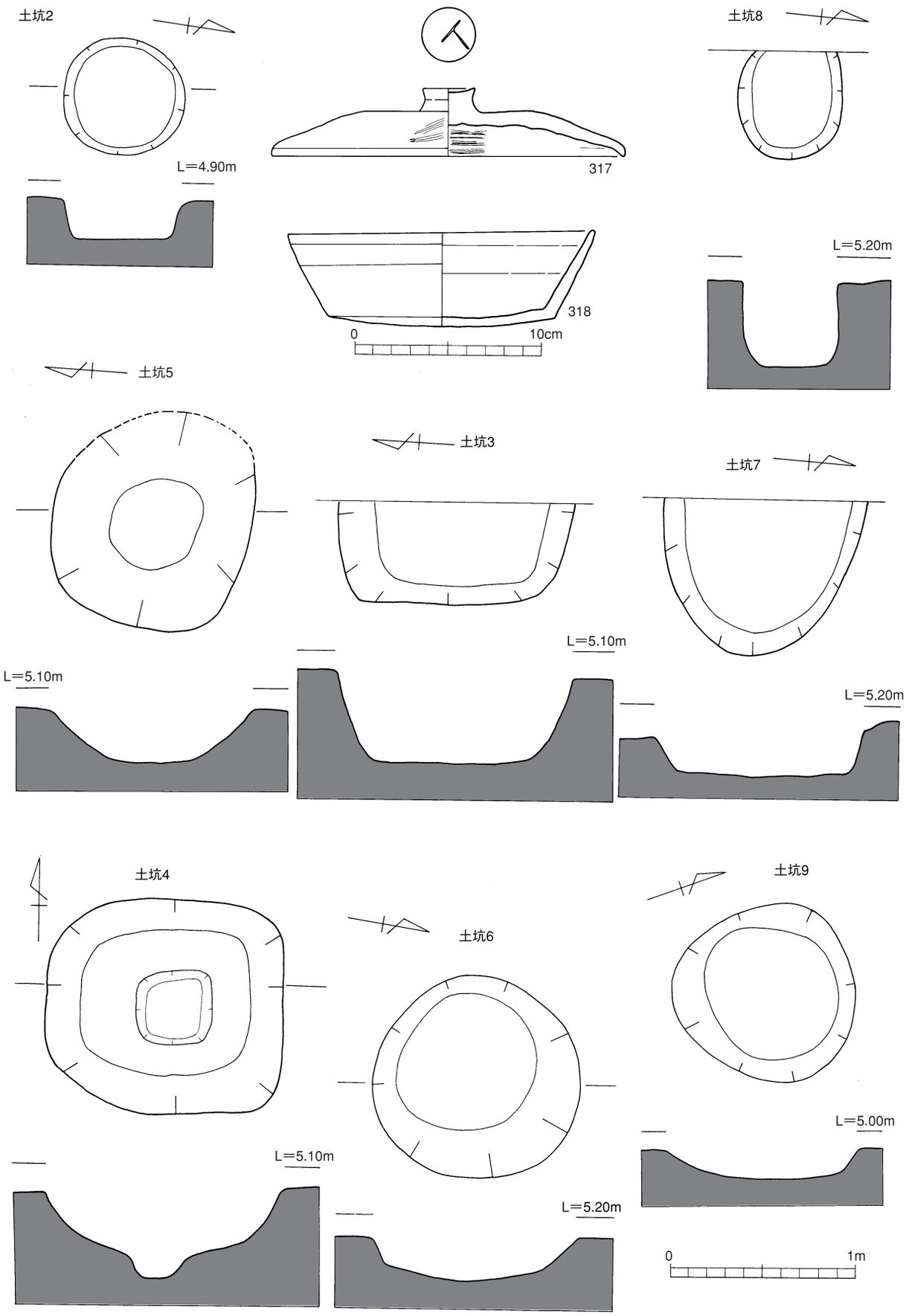
土坑３から約1.5ｍ北西方向の位置で検出された。平面形は隅丸方形を呈しており，長径×短径は128㎝×115㎝である。底面は丸味をもち，中心部は一段深い二段構造である。検出面からの深さは約50㎝を測る。

土坑８

24号住居跡の床面で検出された。一部は西側の調査区域外に残る。検出部分で長径60㎝，短径は56㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは44㎝で土師器小片が出土した。

土坑７

23号住居跡の床面で検出された。これも一部地域外に伸びている。検出面での幅は110㎝であり楕円形を呈すると思われる。深さは30㎝を測る。



第116図　K6～8　古代の土坑と出土遺物

土坑６

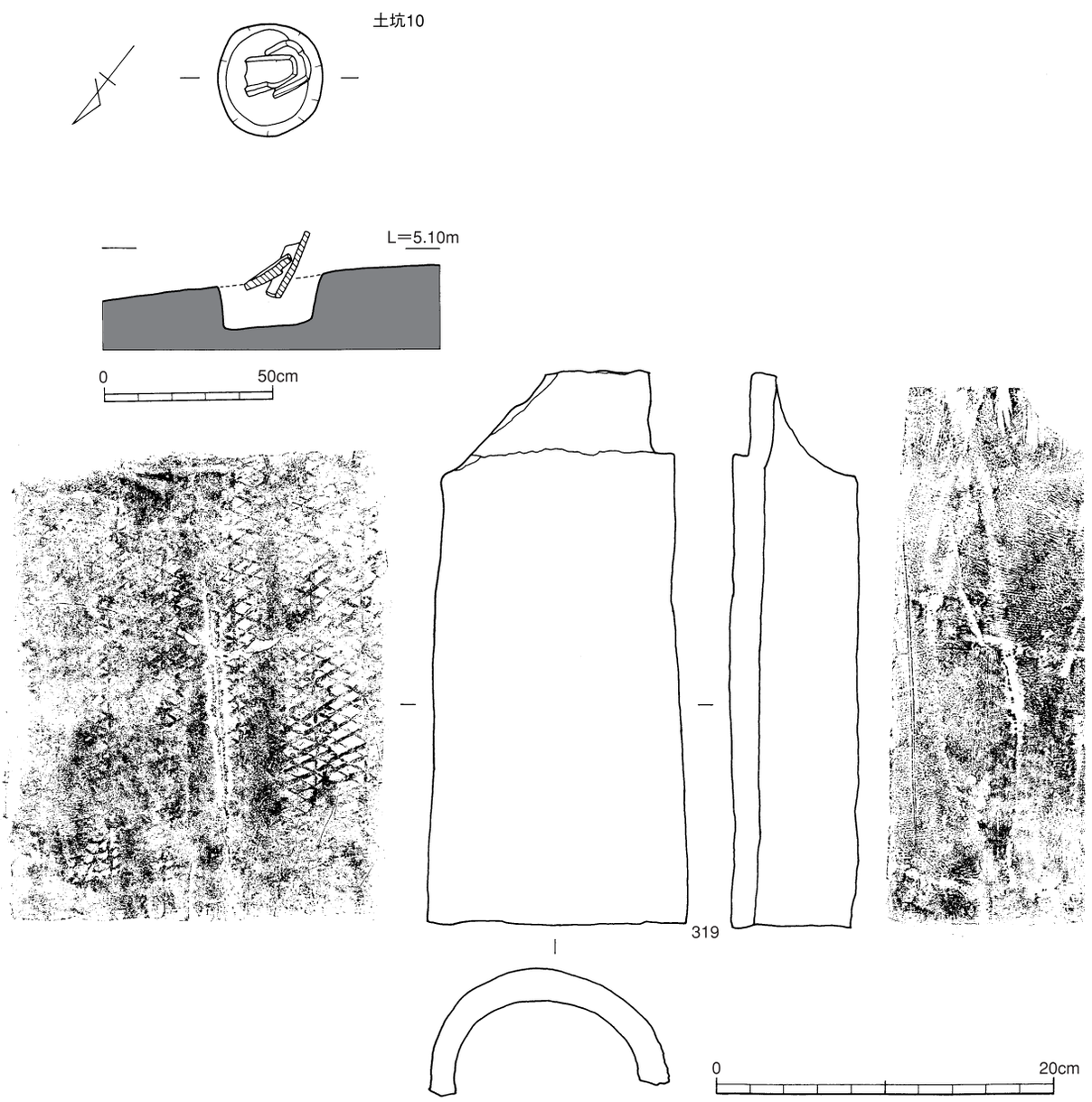
平面形はほぼ円形を呈しており，直径は約110㎝を測る。検出面からの深さは24㎝であり，底面は平坦である。

土坑９

土坑６に近接した位置で検出された。径は100㎝×95㎝を測り，これもほぼ円形を呈する。検出面からの深さは15㎝である。

土坑10（瓦入り土坑）

K7.5東側で検出された。２点の古代瓦が直立した状況で出土し，周囲を精査した結果土坑の存在が確認できた。土坑は直径約30㎝程度の円形を呈し，検出面からの深さは約15㎝を測る。ただし，瓦全体が埋められた状況を考えるなら約30㎝程度の深さとなろうか。底面は平坦であり，土坑の大きさを考慮するとピットの下部とも考えられる。



第117図　K6～8　古代の瓦入り土坑と出土瓦

出土した瓦は接合したことより割られて埋められたことも想定される。319は接合してほぼ完全な丸瓦となったものである。一端に段がある玉縁式の丸瓦であり，最大長32.6cm，最大幅15.5cmを測る。外面は斜格子のタタキ目があり，それを縦方向に部分的にナデ消している。内面は全体に布目痕が残る。両側縁端部にはヘラ切り痕が残る。外面の中央付近には，縦方向に幅５～８㎜で長さ13cm程度砂が付着している。色調は青灰色を呈する。

(5)　K11及びK12においては大型の土坑が多く検出されたため，その中間についても調査を実施した。調査の結果，溝状遺構の両側に大型～中型の土坑が39基検出された。このうち埋土中に近世磁器が出土し，近世の時期と考えられるもの２基（10号・12号）と，玉縁口縁の白磁が出土し中世の時期のものが１基（17号）が認められたが，残りの多くの土坑については古代のものと考えられる。（第77図）

K11においてⅢ層暗褐色土の下はⅤ層灰白色砂質土であり，遺構の把握が比較的容易であった。土坑番号はこのK11～12についてのみ北側から付け直した。

土坑１（第118図）

平面形は楕円形を呈し，長径×短径は135cm×90cmを測り，検出面からの深さは30cmである。埋土は暗褐色土に炭化物粒子が多く混在していた。

土坑２

平面形は楕円形を呈し，長径×短径は152cm×85cmを測る。検出面からの深さは20cmである。埋土は暗褐色土である。

土坑３

不整円形を呈し，長径×短径は132cm×100cm，深さは40cmを測る。溝状遺構を切っている。埋土から若干の土師器が出土している。第121図320は土師器坏である。321・322は甕である。321は大型のもので，口縁はくの字状に屈曲する。322は比較的浅く，頸部は締まらない。いずれも器面はハケメ調整であり，内面はヘラケズリが施されている。

土坑４

ほぼ円形に近い形状であり，長径×短径は113cm×110cmである。底面は北側が若干深くなり，55cmを測る。

土坑５

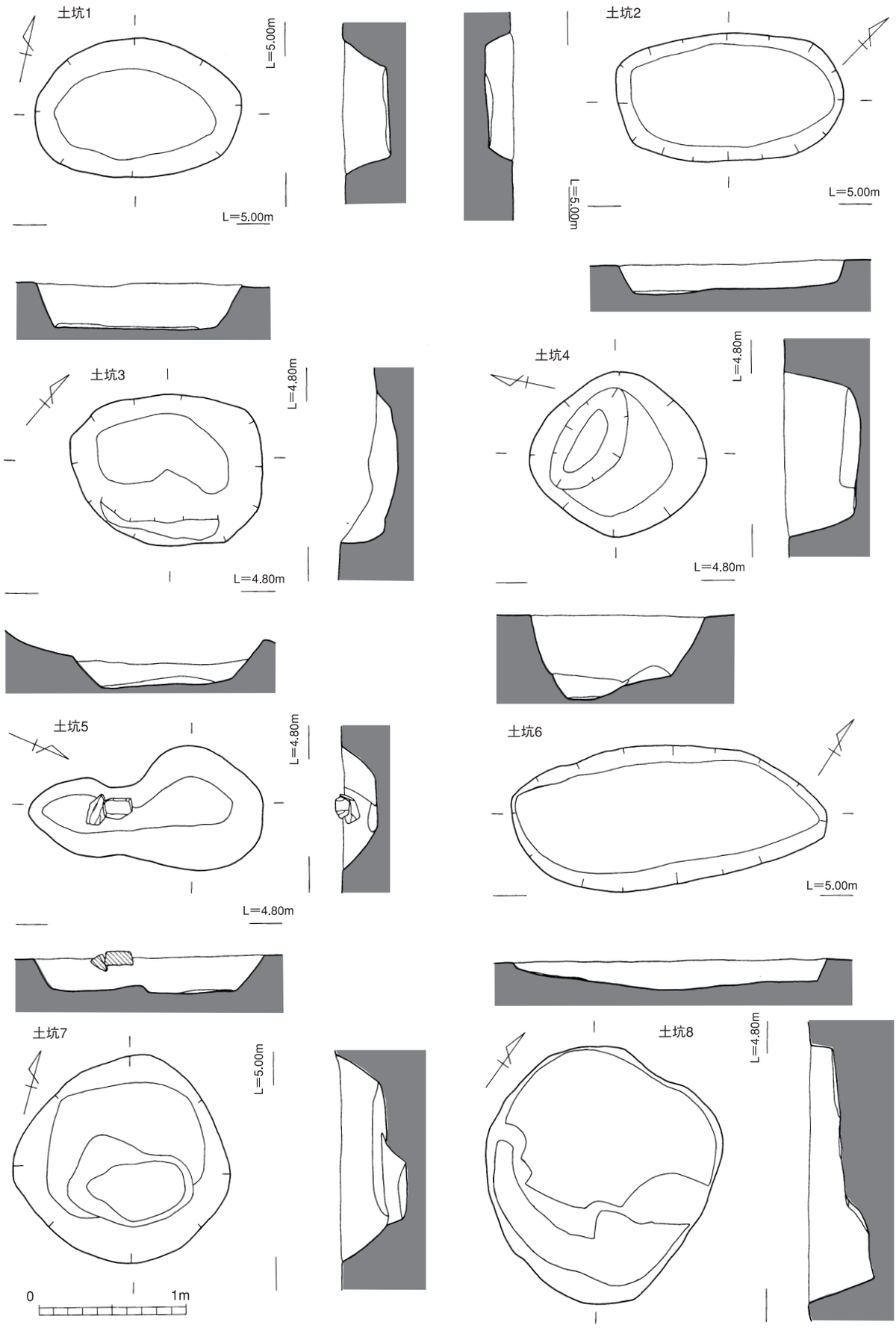
平面形はひょうたん形であり，長さ156cmで小円の幅50cm，また太円の幅は83cmを測る。深さは25cmである。検出面で２点の礫が重なっていた。

土坑６

長楕円形を呈しており，長径×短径は210cm×95cmで，検出面からの深さは20cmである。323は内黒土師器埦である。体部上半は内湾しており口縁部はわずかに外反する。器面には焼成後の刻書がみられ，縦方向の直線と横方向の２本の直線が引かれている。器面調整はヨコナデ，内面はヘラミガキが行われている。

土坑７

長径×短径は145cm×138cmでほぼ円形を呈する。検出面からの深さは45cmである。底面の南側がピット状に深くなっている。



第118図　K11～12　古代の土坑1

土坑８

長径×短径は170cm×160cmで，これも円形に近いプランを呈する。深さは北側の平坦部が25cm南の一段深い部分が45cmである。

土坑９

長楕円形を呈しており，長径×短径は205cm×87cmである。深さは50cmを測る。この土坑の中央付近には撹乱の穴がみられた。

土坑11

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は115cm×95cmである。底面は平坦でなく凸凹が著しい。最深部の深さは45cmである。

土坑13

長径×短径は125cm×120cmを測り，平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦でなく，南側には小穴が三個みられ，最深部の深さは60cmである。

土坑14

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は130cm×110cmを測る。検出面からの深さは40cmであり底面は平坦である。

土坑15

西側壁面に接しており，一部調査区域外に残るものの平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。検出部分の径は90cmであり，底面は二段で最深部の深さは70cmを測る。

土坑16

平面形は楕円形を呈し，長径×短径は120cm×68cmである。底面は平坦ではなく摺鉢状となり最深部は35cmを測る。

土坑17

埋土から玉縁口唇の白磁が出土しており，中世の時期と判断される。中世の項で再掲する。

土坑18

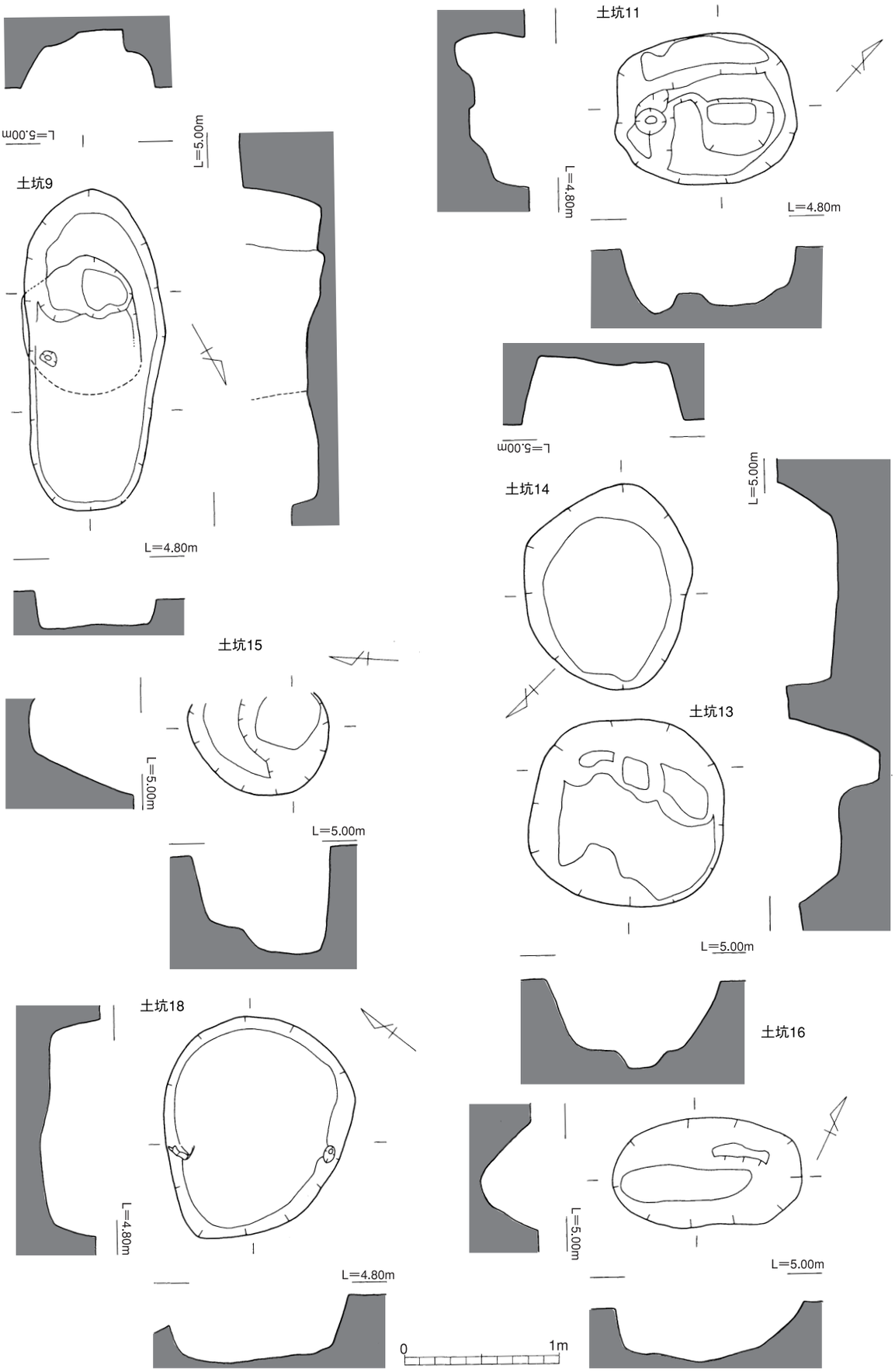
溝状遺構に切られている平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は140cm×124cmを測る。底面は平坦で深さは35cmである。第121図325・326の須恵器が出土した。325は甕の肩部，326は壺の底部である。325は器面が格子状タタキ，内面は同心円状当て具痕がみられ，326は器面が平行タタキの後ナデており，内面はナデの指痕が残る。

土坑19

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は108cm×66cmである。底面は平坦で深さは20cmである。327は埋土から出土した須恵器甕片である。器面は格子タタキ，裏面には同心円当て具痕が残っている。

土坑20

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は170cm×120cmである。底面は平坦で深さは55cmである。第121図328・329が出土した。328は頸部が短く直行し，口縁部はわずかに外反する甕，329は大甕の体部破片を利用した転用硯である。破片は小さな打ち欠きによる整形の後，周縁は丁寧に磨かれている。内面の使用面は使用による痕が著しく光沢をもっている。最大長は15.7cm，幅は13cm



第119図　K11～12　古代の土坑2

である。

土坑21

平面形はほぼ円形を呈しており，長径×短径は120㎝×108㎝を測る。底面は平坦であるが西側に小ピットがあり深さは50㎝である。第121図330は埋土から出土した土師器埦である。高台は低く，体部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともヨコナデ調整である。

土坑22

東側に壁面に接して検出されたものであり，一部区域外に残る。検出部分の幅は135㎝で，深さは55㎝である。土坑23に切り合う関係にあるが，前後関係は明確でない。埋土は他の暗褐色土と異なり灰褐色土であり分層はできなかった。中世の時期の可能性がある。

土坑23

これも土坑22と同様に一部を未調査区域に残す。検出部分の幅は85㎝で深さは45㎝を測る。埋土は土坑22と同様に灰褐色を呈しており，中世の時期の可能性がある。

土坑24

平面形はほぼ円形を呈しており，直径120㎝を測る。底面は平坦でなく，北側がピット状に深くなり，最深部の深さは55㎝である。

土坑25

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は135㎝×105㎝を測る。底面は平坦であり検出面からの深さは70㎝と比較的深い。埋土は暗褐色土であり分層ができなかった。

土坑26

不整円形であり，長径×短径は250㎝×160㎝である。底面は平坦でなく，南側が一段狭くなり40㎝の深さとなる。

土坑27

長径×短径は120㎝×96㎝であり平面形は楕円形を呈する。底面は平坦であり，検出面からの深さは40㎝を測る。

土坑28

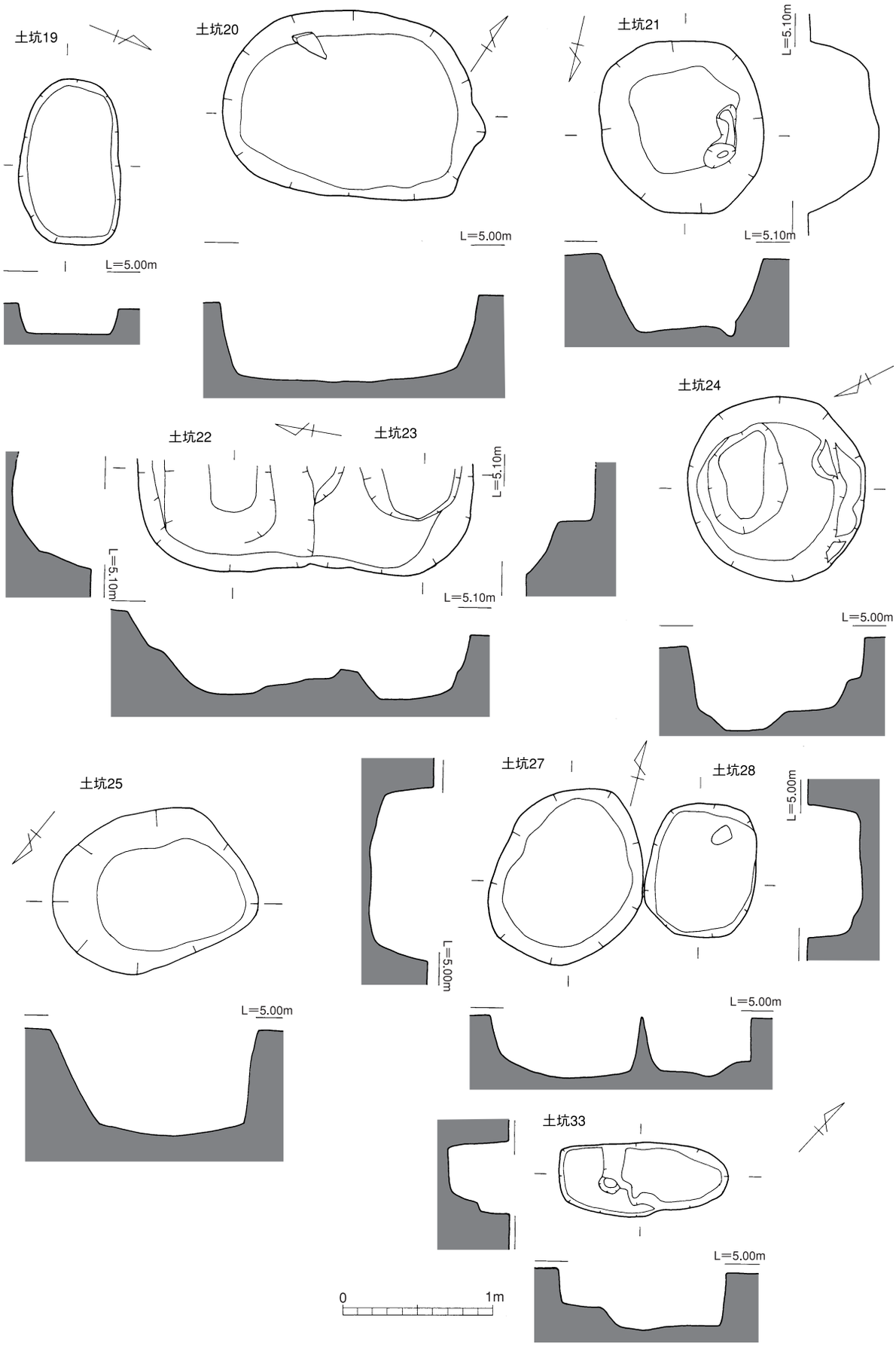
土坑27と接しており，平面形は楕円形を呈し，長径×短径は90㎝×70㎝を測る。底面はほぼ平坦であり深さは40㎝である。

土坑29

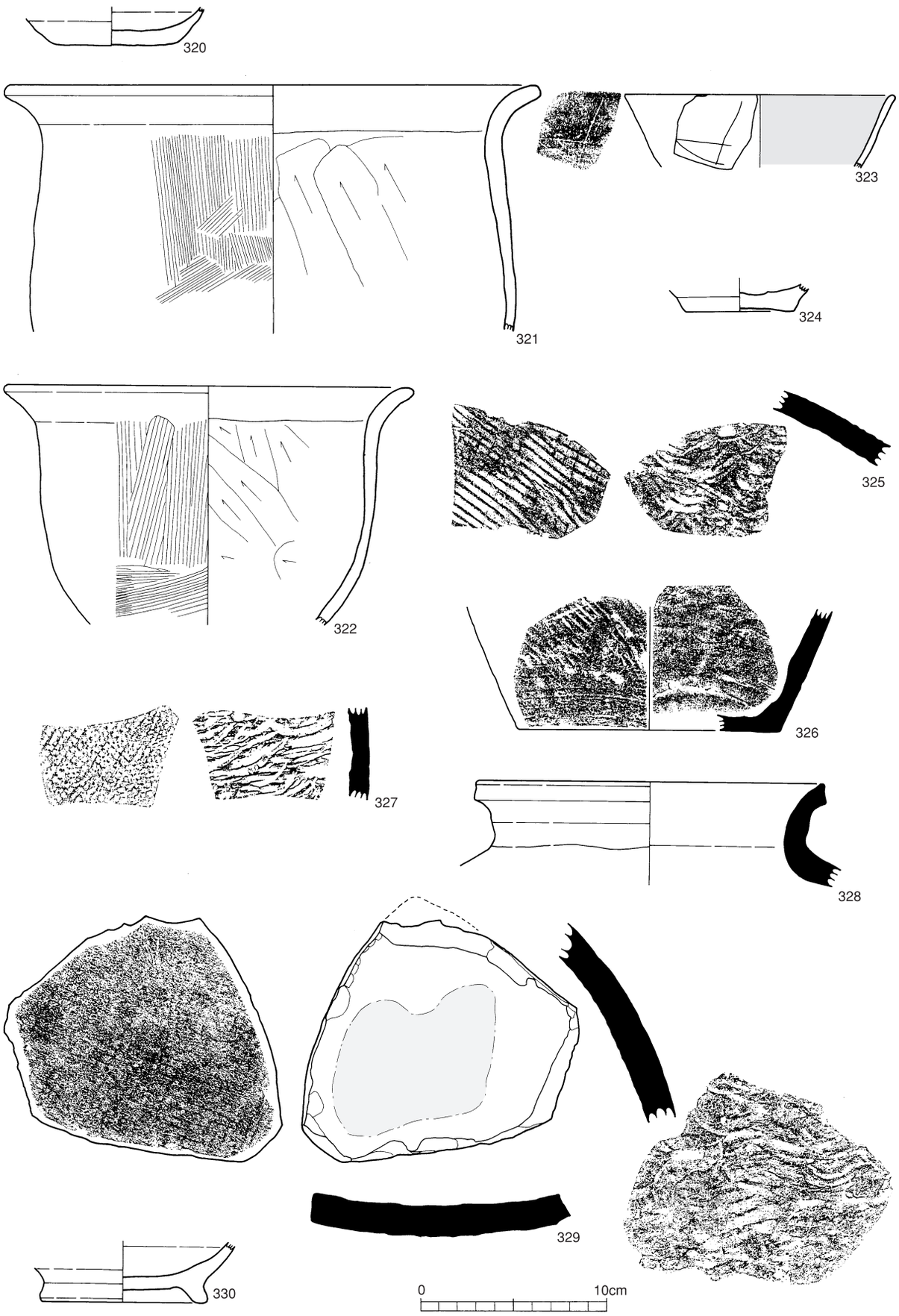
平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は127㎝×115㎝である。底面は平坦で検出面からの深さは50㎝を測る。第124図331は埋土から出土した須恵器である。体部は直線的に開く。色調は灰白色を呈しており，いわゆる生焼けで焼成は良くない。そのため磨耗が著しい。

土坑30

土坑26と土坑29に接している。平面形は楕円形を呈し，長径×短径は180㎝×160㎝を測る。検出面からの深さは30㎝である。埋土から第124図332～334の土師器が出土している。332は坏であり，底部は厚く，回転のヘラによる切り離し後軽くナデられ，直線状のヘラ記号が施されている。体部は直線的に立ち上がり，器面調整は内外面ともナデである。333・334は埦である。333の高台は「ハ」の字状に開き，体部は内湾気味に立ち上がる。器面調整は内外面ともヨコナデが施される。



第120図　K11～12　古代の土坑3



第121図　K11～12　古代の土坑　出土遺物1

334も同様である。

土坑31

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は200㎝×180㎝である。底面は平坦であり，検出面からの深さは60㎝を測る。第124図335は埋土から出土した土師器坏である。底面は回転ヘラ切りによる切り離し後丁寧にナデられ，体部との境までナデられ立ち上がり部分は丸味をもつ。器面調整は内外面ともヨコナデである。埋土は灰褐色土である。

土坑32

平面形は楕円形を呈し，長径×短径は165㎝×130㎝である。底面の中央近くにピット状の小穴があり，深さは平坦部が50㎝，ピット部分で60㎝を測る。第124図336・337は埋土から出土した土師器坏である。336の底面には直線を引いたヘラ記号がみられる。337の体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。いずれも器面調整は内外面ともヨコナデである。

土坑33

平面形は長楕円形を呈し，長径×短径は112㎝×48㎝である。底面は平坦でなく，北側が一段狭くなり，検出面からの深さは40㎝を測る。埋土は灰褐色を呈し，中世の可能性がある。

土坑34

平面形はほぼ円形に近い形状を呈しており，長径×短径は110㎝×95㎝である。底面は平坦に近く，検出面からの深さは46㎝を測る。

土坑35

土坑36と接している。平面形は長方形状を呈しており，長辺×短辺は100㎝×70㎝である。底面は平坦で，深さは26㎝である。埋土は暗褐色土である。

土坑36

土坑35と土坑37に接し，その中間に位置している。平面形は長楕円形を呈しており，長径×短径は220㎝×90㎝である。底面は平坦で深さは40㎝を測る。埋土は暗褐色土である。

土坑37

一部を区域外に残している。平面形は楕円形を呈すると思われ，検出部分の幅は120㎝である。検出面からの深さは60㎝である。埋土は暗褐色土である。

土坑38

これも部分的な検出であり，その大部分は調査区域外に伸びる。検出部分の大きさは70㎝×22㎝であり深さは40㎝を測る。

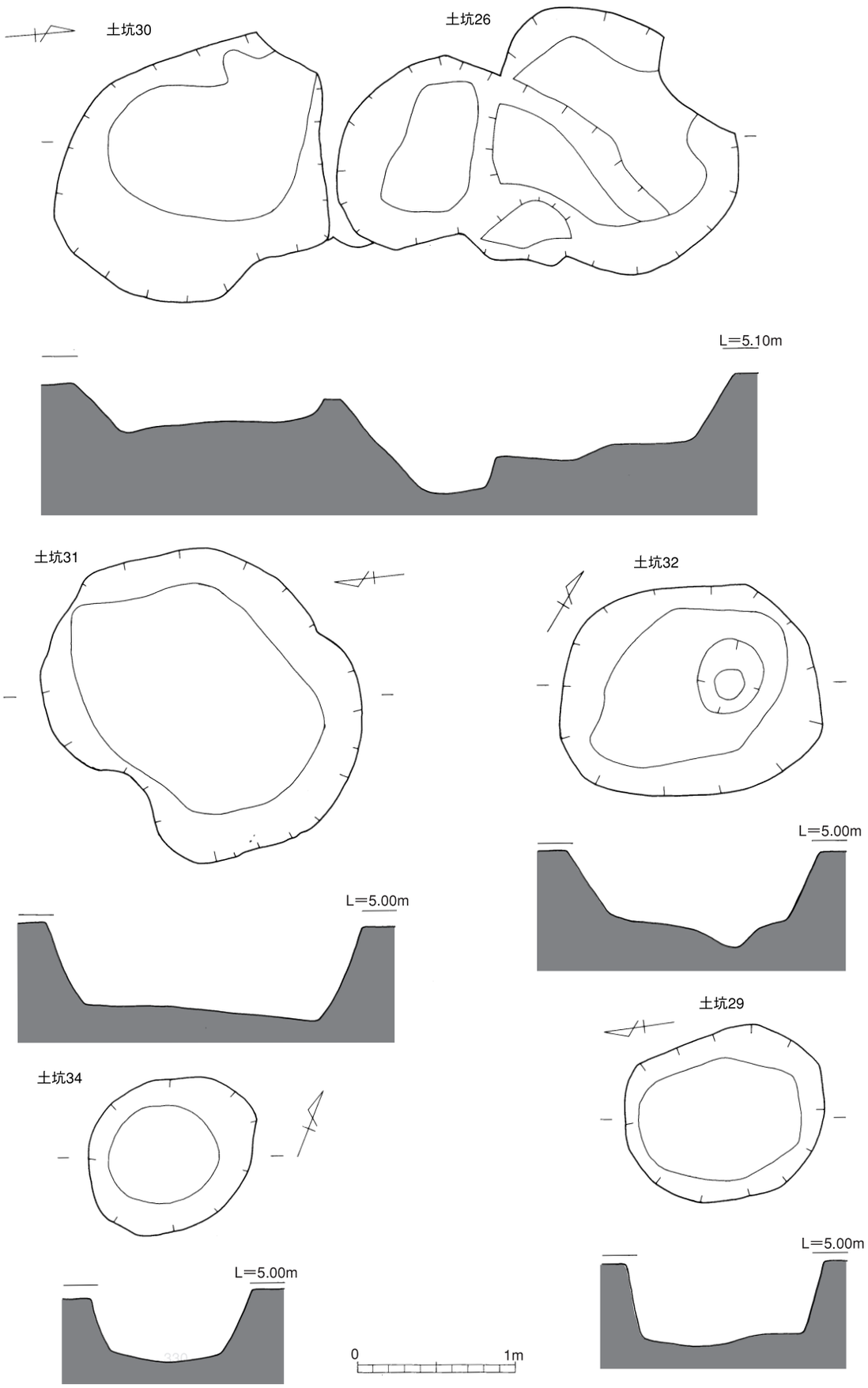
土坑39

平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は108㎝×70㎝である。底面は平坦でなく南側に傾斜しており深さは38㎝である。埋土は暗褐色土である。

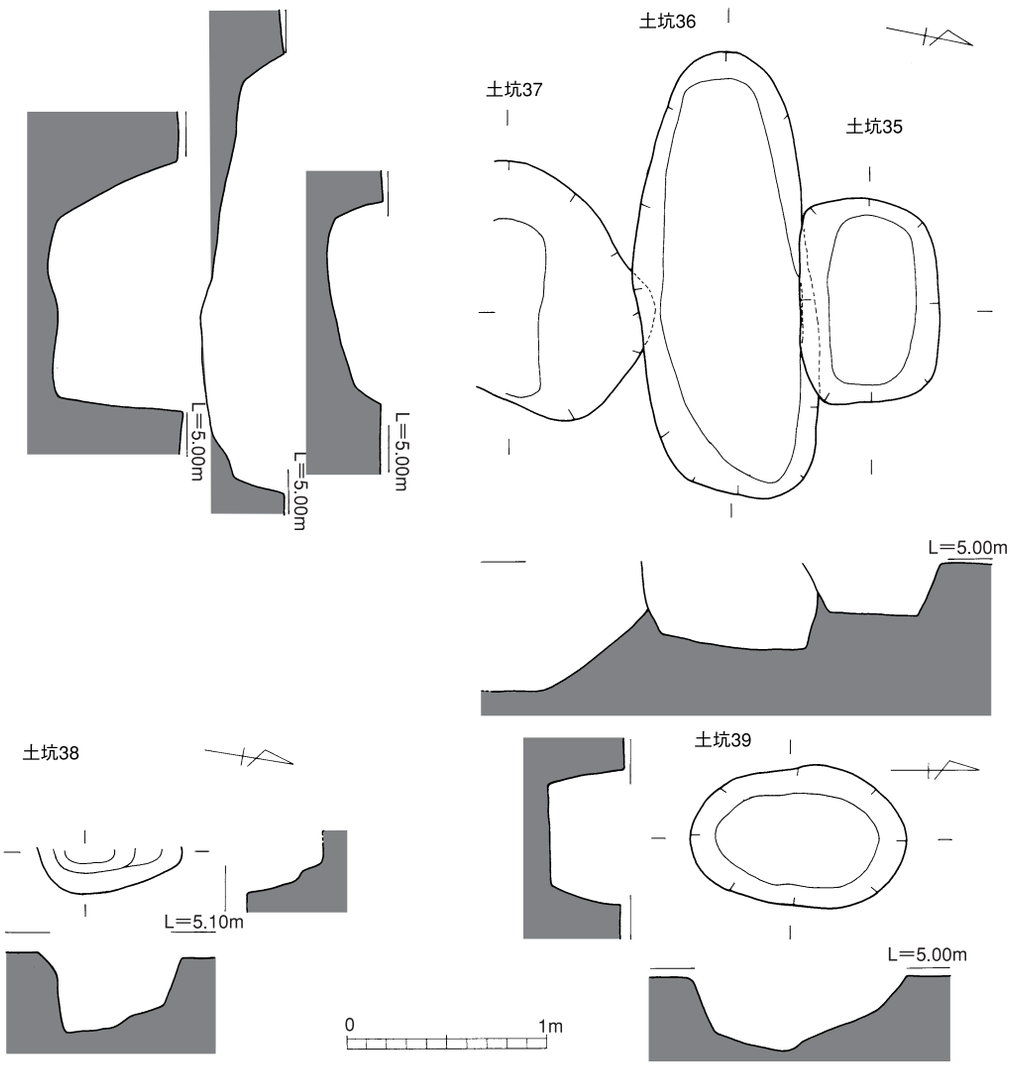
なお，各土坑の埋土は分層ができないもので，一括した土であった。特に土坑21～39は特徴的であり，レンズ状に堆積がみられないことより，人為的に埋められたものと考えられる。

５．溝状遺構

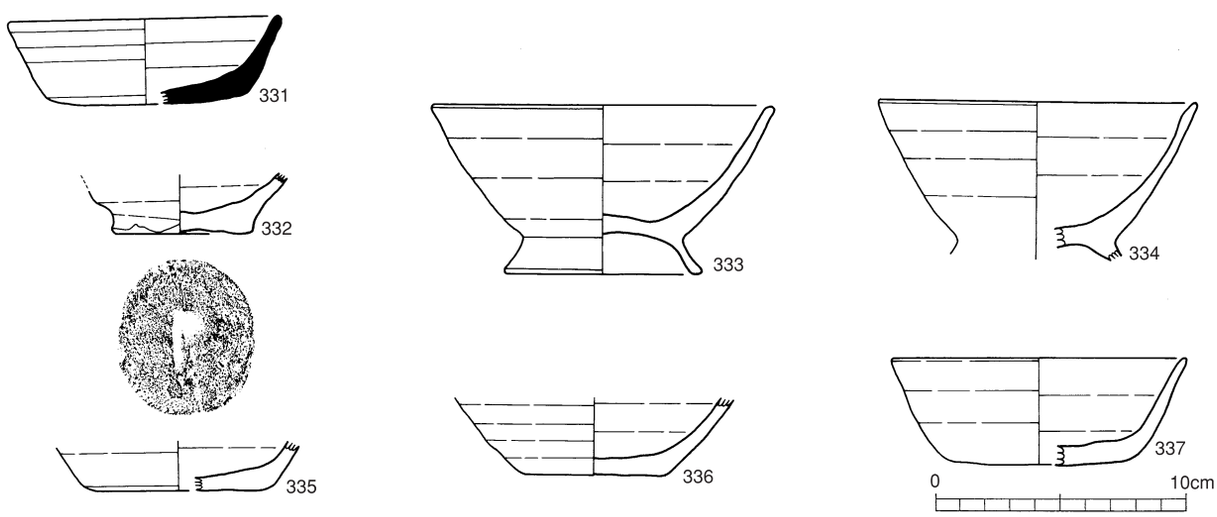
溝状遺構も各調査橋脚で検出された。以下各橋脚（K）ごとに説明を行う。



第122図　K11～12　古代の土坑4



第123図　K11～12　古代の土坑5



第124図　K11～12　古代の土坑　出土遺物2

K16の溝状遺構（第125図）

K16は調査区域の北端に位置している。調査の結果，自然堤防立地としての丘陵（現在の畑地面）が，ちょうど調査区域のなかで終わり，それより北側は２ｍ以上低い低湿地（現在の水田面）となっている。（ただし水田面は近年２ｍ以上の客土が行われ，現在の時点で丘陵端はみられない。）検出された溝状遺構は，この丘陵端部境に平行するように存在している。レベル的には西側に向かって下がる。検出された溝状遺構の幅は東側で約70cm，西側では約160cmと広い。西側の検出面からの深さは約60cmである。

溝状遺構の埋土は青灰色硬質土が下半部にみられ，この層が中世の時期に対応していることより中世の時期である可能性が高い。

K14の溝状遺構（第125図）

Ⅲ層遺物包含層の下面で４条の溝状遺構が検出された。遺構は溝状遺構のみであり，ピット群などは検出されていない。南側から溝１，溝２，と番号を付した。なお溝５の西側は撹乱であり遺構の延長は検出されなかった。

溝１

北東方向から南西方向に直線的に検出された。検出面の幅は東側が80cm，西側で40cmである。深さも東側の幅広の部分が深く24cmを測る。

溝２

溝１とほぼ平行している。これも東側が深く，西側が浅くなっている。検出面の幅は東側で60cm，西側で30cmである。

溝３

これも溝１，溝２と平行している。最も幅は狭く20～30cmである。東側では溝４の上位レベルにあり溝４より新しい。

溝４

これも同様に同一方向に形成されている。また東側が同様に深い。検出幅は西側が広い。また溝５に切られている。

溝５

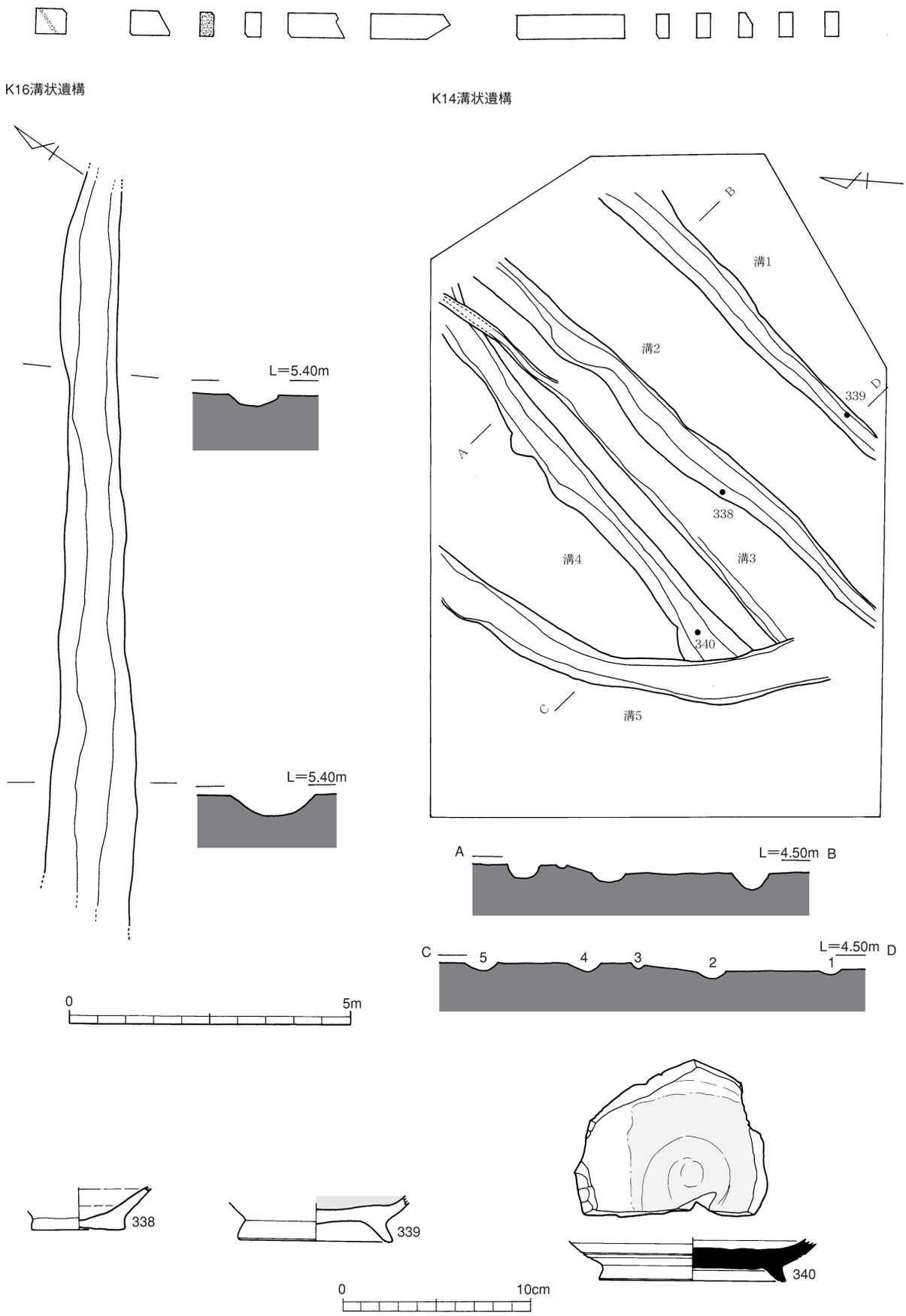
溝３及び溝４を切っており，最も新しいものである。南側は孤状に曲がり，溝２の下にみられないことより，溝２より新しい。

溝の埋土は，いずれも暗褐色土であり，Ⅲ層遺物包含層と同一である。埋土からは若干の遺物が出土している。第125図338は溝２から出土した充実高台の埦である。底径は小さい。339は溝１から出土した内黒土師器埦である。340は赤褐色を呈する酸化炎焼成のいわゆる赤焼きの須恵器である。高台は低い。転用硯として使用されており，内面は光沢をもつ。

K11～12の溝状遺構（第126図）

この調査区域は土坑の項で触れたように，土坑39基とピット状遺構４基と溝状遺構が１条検出されている。南側に隣接するＫ８～10では多数の竪穴住居跡が検出されているが，本調査区域では住居跡はみられなかった。

溝状遺構は北東から南西方向に走るもので，ほぼ直線状に検出された。溝状遺構の幅は約170cm

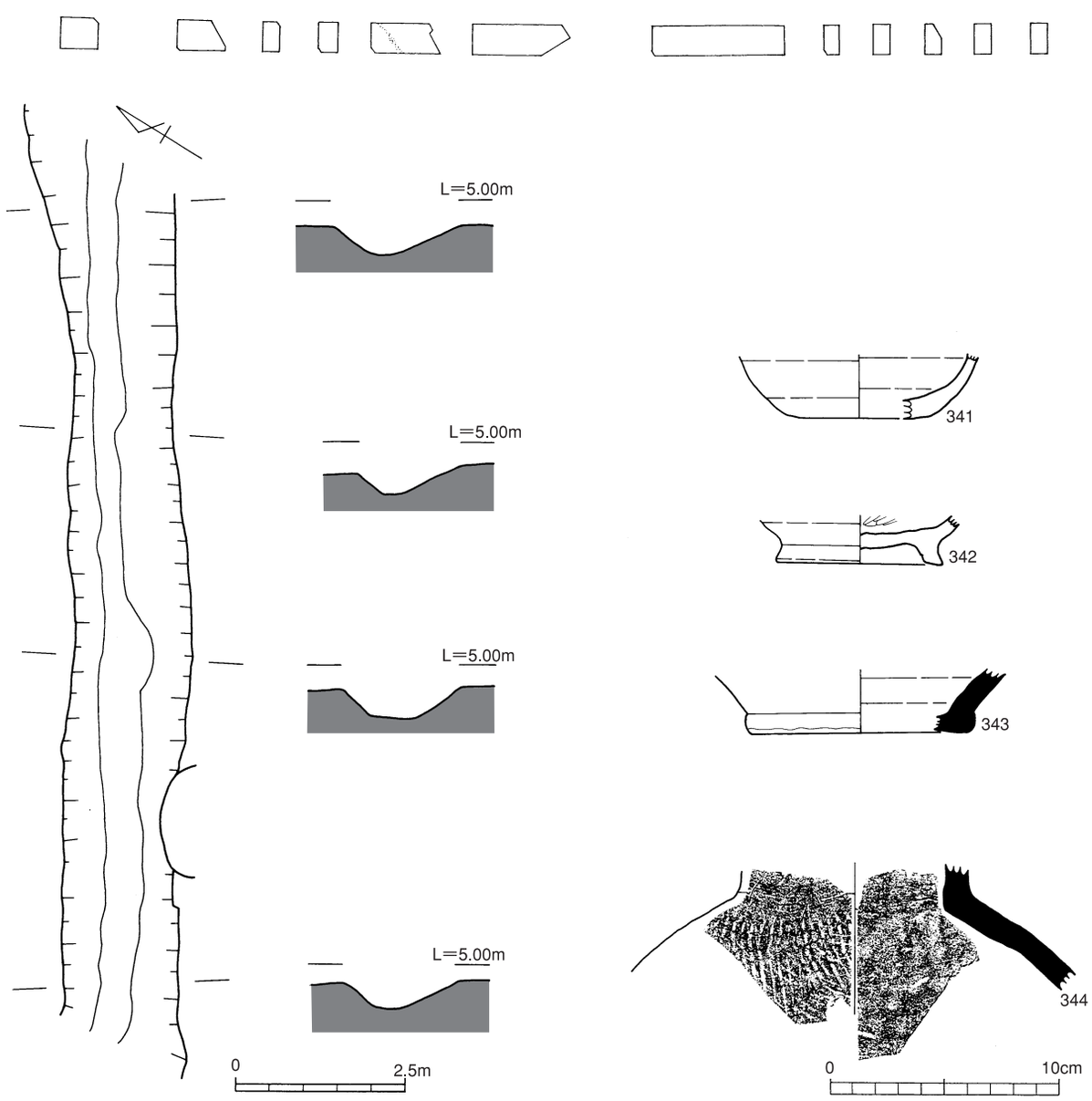


第125図　K16，K14　古代の溝状遺構と出土遺物

あり，検出された長さは約14mである。埋土はⅢ層暗褐色土であり硬く締まっていた。ただし下面近くは黄褐色砂質土であり若干軟質である。埋土より第126図341～344が出土した。341は土師器坏で底面からの立ち上がりは丸味をもち内湾する。342は埦であり器面調整はヨコナデが行われ，内面はヘラミガキが施されている。343は須恵器鉢と思われる。344は須恵器壺である。器面には平行タタキがあり一部交差している。内面はナデである。

6．炉跡（第127図）

K6で検出された。検出面はⅡb層からⅢ層上である。長径約40cmの礫が斜めに置かれ，周辺には拳大より大きな礫がある。丸味を呈する掘り込みの約10cm上に平坦な炉面が認められ，炭化物が数cmの厚さで検出された。礫にはススが付着しており，径1m程度の配石をもつ屋外炉と考えられる。検出面の層から，古代末から中世の時期と判断される。



第126図　K12　古代の溝状遺構と出土遺物

７．焼土遺構（第127図）

焼土１はK6.5北西部で検出された。長径×短径は約90㎝×60㎝である。焼土のみでなく，ブロック状に固まった焼土や炭化物と土器細片などが混在していた。中心部の厚さは約20㎝でほぼレンズ状に焼土などが認められたが，下面は凹凸があり硬く締まってはおらず，二次的に焼土などを廃棄したものと推定された。その後，この下面より住居跡が検出されており，このことから住居の廃棄後，住居の凹地に捨てられたものと考えられる。

焼土２はＫ７区北西部で検出された。東西幅130㎝，南北幅110㎝とかなり広く検出された。焼土は赤色化した軟質の焼土のみでなく，固まったものや，土器片なども混在していた。これも下面には住居跡が検出されており，住居跡廃棄後の凹地に捨てられたものと判断される。第127図345～353は焼土２の中から出土したものである。345は坏である。346～348は土師甕である。また，349～351はスサ状の痕跡が認められる焼成された粘土であり，片面は平坦である。352・353は赤褐色を呈する焼成された粘土である。

焼土３及び焼土４は，K7.5の北側で約60㎝の近接した位置で検出されている。ただしこれらが検出されたレベルは，約30㎝も異なっており，それぞれの時期が異なるものと判断できる。焼土３の平面形は楕円形を呈し，長径×短径は70㎝×40㎝である。底面はやや丸味を帯びた堀り込みが認められる。焼土４は90㎝×60㎝であり底面は平坦に近い。これらはいずれも屋外炉の可能性が考えられる。焼土３は古代の可能性が高いが，焼土４については，レベル的に低く古代以前の古墳時代もしくは弥生時代の時期である可能性が高い。ちなみに焼土遺構４に接して古墳時代の把手付甕（第73図28）がつぶれた状況で出土していた。

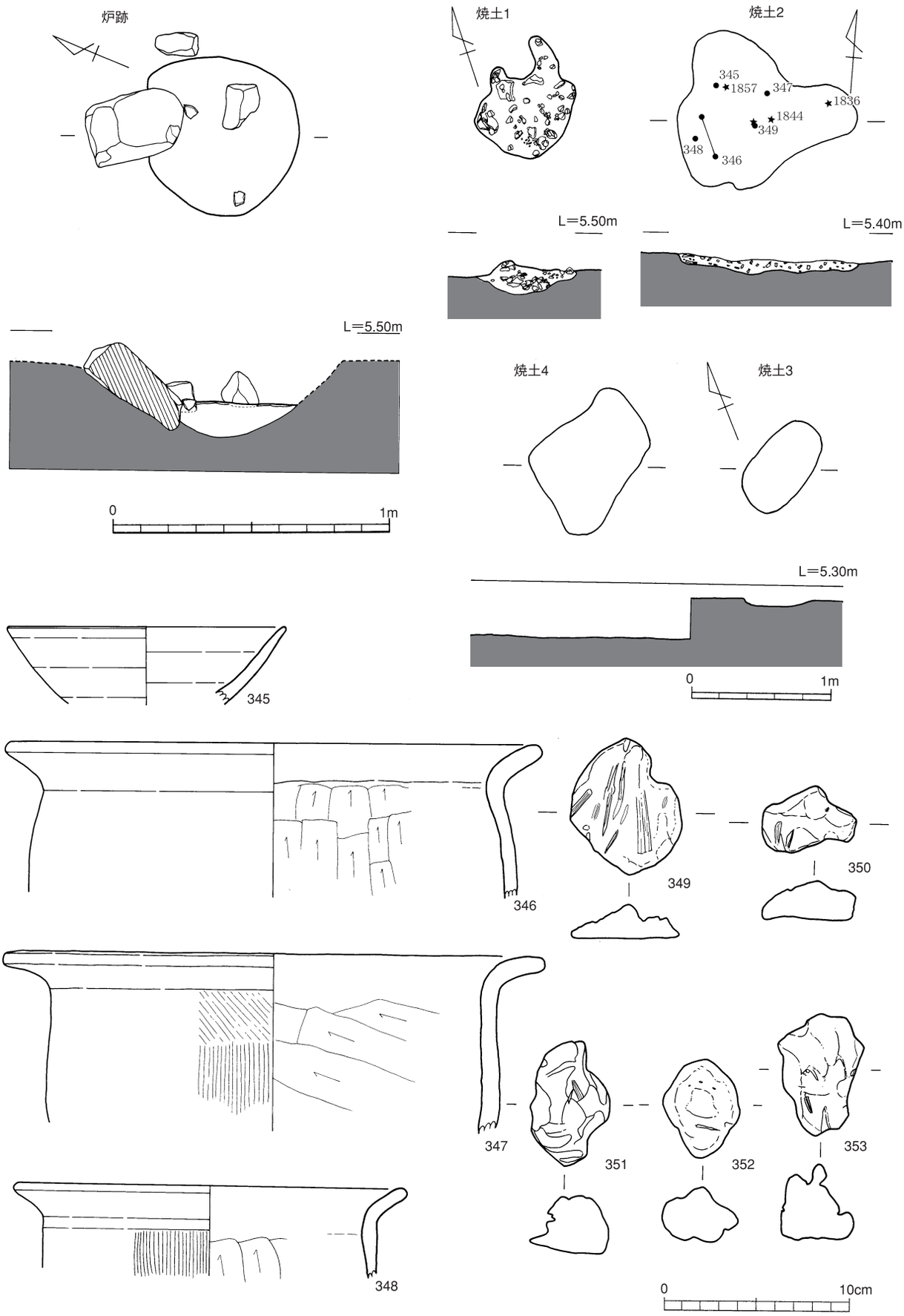
８．ピット群（第128図）

ピット群も各橋脚で検出された。

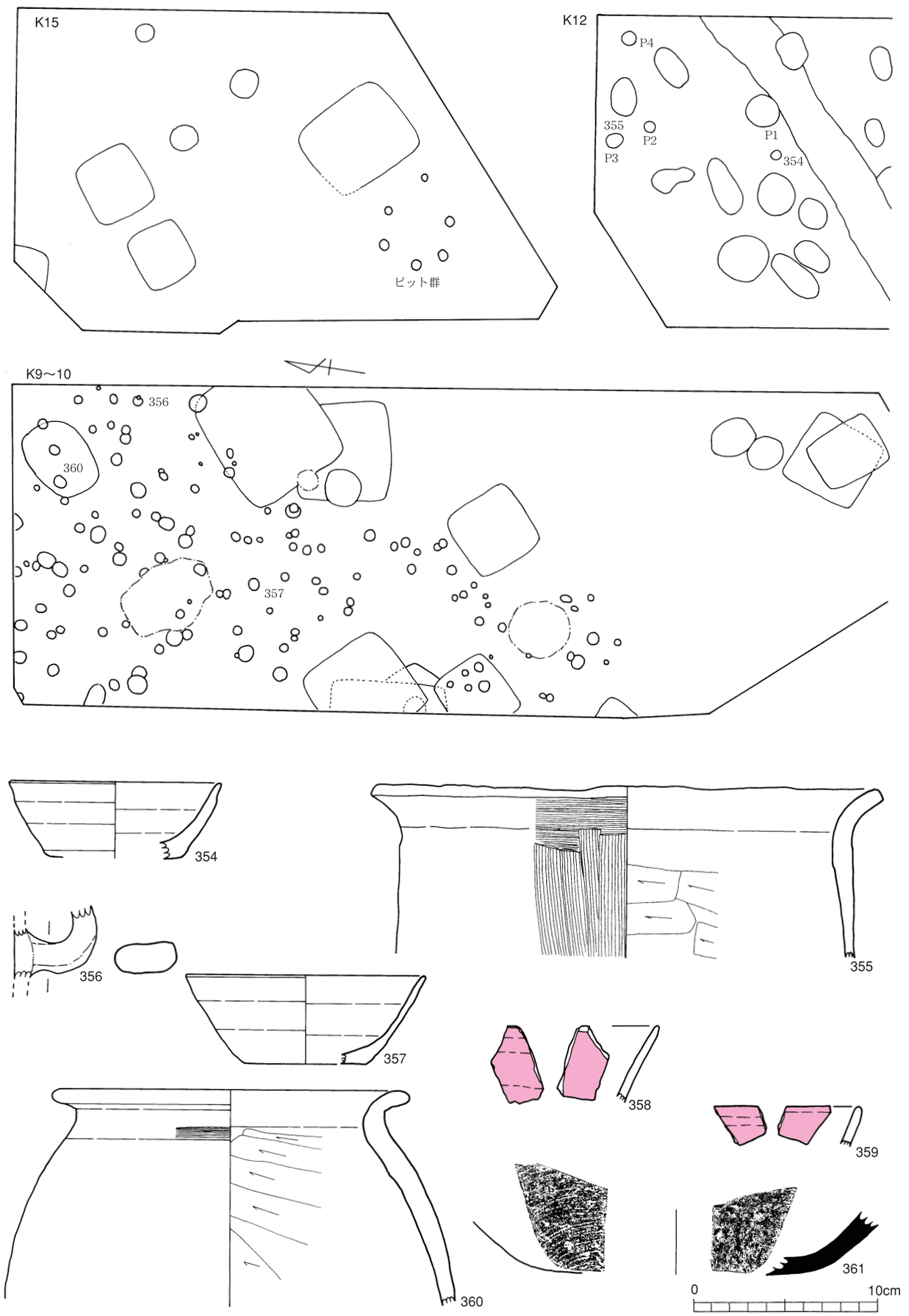
K15では南側に合計６個円形に検出された。直径は25～35㎝までであり，深さは20～40㎝であった。建物跡としては認識できなかった。

K12では北側に4個のピットが検出されたが建物としては認定できなかった。ピットは直径35～50㎝であり深さは20～40㎝であった。第128図354は出土した土師器坏，355は甕である。

K8～10では多数のピットが検出された。直径は20～60㎝と多様であり，深さも15～60㎝と多種であった。ここの調査区域でも建物跡を認識できなかった。ピットの検出はⅢ層遺物包含層の中位面から下面までにおよび，また住居跡の下面で検出されたもの，あるいは先にピットが検出され，その下面に大型土坑が検出される等，ピット群は竪穴住居が多く切り合い複合するように，多くの異なる時期の所産のものの集合であることが予想された。この調査区域のピットから出土したものが356～361である。356は把手の一部，357は土師器坏，358・359は内外面とも赤色顔料が施された土師器。360・361は大型竪穴状遺構の上に位置するピットから出土したもので，360は土師甕，361は須恵器である。



第127図　古代の炉跡，焼土遺構と出土遺物



第128図　古代のピット群と出土遺物

第 25 表　古代遺物観察表 1（遺構内出土①）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層	口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
	1	土師器	坏	15	1号住居		5.6		ヨコナデ	ヨコナデ			1435			
	2	土師器	坏	15	1号住居		6.8		ヨコナデ	ヘラナデ			1293			
	3	土師器	坏	15	1号住居		6.0		ヨコナデ	ヨコナデ			1399	1461	1465	
	4	土師器	坏	15	1号住居		5.3		ヨコナデ	ヨコナデ			1216			
	5	土師器	坏	15	1号住居		6.2		ヨコナデ	ミガキ	底部にヘラ記号		1375			
	6	土師器	坏	15	1号住居		5.0		ヨコナデ	ヨコナデ			1690			
	7	土師器	坏	15	1号住居		4.6		ヨコナデ	ヨコナデ			1485			
	8	土師器	充実高台(坏)	15	1号住居		5.2		ヨコナデ	ヨコナデ			1239			
	9	土師器	充実高台(坏)	15	1号住居		4.6		ヨコナデ	ヨコナデ	底部にヘラ記号		1456			
79	10	土師器	充実高台(坏)	15	1号住居		4.6		ヨコナデ	ヨコナデ			1450			
	11	土師器	充実高台(坏)	15	1号住居		5.2		ヨコナデ	ヨコナデ			1211			
	12	土師器	充実高台(坏)	15	1号住居		5.4		ヨコナデ	ヨコナデ			1449			
	13	土師器	埦	15	1号住居		7.0		ヨコナデ	ヨコナデ			1202	1204		
	14	土師器	埦	15	1号住居				ヨコナデ	ナデ			1244			
	15	土師器	埦	15	1号住居		6.8		ヨコナデ	ヨコナデ			1261			
	16	土師器	皿	15	1号住居	11.6			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	1438			
	17	土師器	甕	15	1号住居	19.8			ナデ	ヘラケズリ		1/6	1249			
	18	土師器	大盤	15	1号住居	32.2	15.3	14.8	ハケメ	ハケメ・ナデ		1/3	1462	1491	Ⅲ397	
	19	須恵器	蓋(転用硯)	15	1号住居				回転ヘラケズリ							
	20	土師器	坏	15	2号住居		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ			1369			
	21	土師器	円板状高台(坏)	15	2号住居		6.4		ヨコナデ	ヨコナデ			1349			
	22	土師器	充実高台(坏)	15	2号住居		5.5		ヨコナデ	ヨコナデ	底部にヘラ記号		1370	1410	1428	
80	23	土師器	充実高台(坏)	15	2号住居		5.2		ヨコナデ	ヨコナデ			1422			
	24	土師器	充実高台(坏)	15	2号住居		5.0		ヨコナデ	ヨコナデ			1408			
	25	土師器	埦	15	2号住居	12.0	6.4	5.6	ヨコナデ	工具ナデ・ハケメ状		1/4	1362			
	26	焼成あり	不明	15	2号住居					放射状工具ナデ			1346			
	27	土師器	坏	15	3号住居	12.3	7.6	4.7	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	37	185	203	273
	28	土師器	坏	15	3号住居	14.1	7.8	5.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/5	99			
	29	土師器	坏	15	3号住居	12.8	6.6	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	295			
	30	土師器	坏	15	3号住居	12.4			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	190			
	31	土師器	坏	15	3号住居	13.7	7.5	3.85	ヨコナデ	ヨコナデ		1/5	87			
	32	土師器	坏	15	3号住居	13.0	7.6	3.7	ヨコナデ	ヨコナデ		3/4				
	33	土師器	坏	15	3号住居	11.8	6.4	4.5	ヨコナデ・下回転ヘラケズリ	ヨコナデ	底部にヘラ記号	1/4	32			
81	34	土師器	坏	15	3号住居	12.0	7.2	3.6	ヨコナデ・下回転ヘラケズリ	ヨコナデ	底部にヘラ記号	1/2	117			
	35	土師器	坏	15	3号住居		7.0		ヨコナデ	ヨコナデ			169			
	36	土師器	坏	15	3号住居		5.8		ヨコナデ	ヨコナデ			157	347		
	37	土師器	坏	15	3号住居		6.2		ヨコナデ	ヨコナデ			66			
	38	土師器	坏	15	3号住居	12.0	7.6	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ			235	575		
	39	土師器	埦	15	3号住居		6.4		ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	9			
	40	土師器	埦	15	3号住居				ヨコナデ	ヨコナデ			327			
	41	土師器	皿	15	3号住居	14.6	8.4	2.2	ヨコナデ	ナデ		1/3	79	80		
	42	土師器	甕	15	3号住居	28.8			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	45	46	246	
	43	土師器	甕	15	3号住居	26.3			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ		1/6	23	297	TⅢ26	TⅢ97
	44	土師器	甕	15	3号住居	26.6			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	90	Ⅲ1048	Ⅲ1060	
82	45	土師器	甕	15	3号住居	23.9			磨耗	磨耗		1/6	132			
	46	土師器	甕	15	3号住居	25.2			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	167	298		
	47	土師器	甕	15	3号住居				ハケメ	ヘラケズリ・ハケメ		1/6	259	264	Ⅲ1043	
	48	土師器	鉢	15	3号住居	19.7			工具によるヨコナデ	ヨコナデ	内面に刻書	4/5	3291	292		
	49	須恵器	蓋	15	3号住居				磨耗	ナデ			258			
	50	須恵器	蓋	15	3号住居	16.1			磨耗	ナデ		1/8	156			
	51	須恵器	蓋	15	3号住居	16.4			ヨコナデ	ヨコナデ	赤焼き	1/3	181			
83	52	須恵器	高台付坏	15	3号住居	12.8	8.4	4.0	底面ナデ	ヨコナデ		1/4	228	Ⅲ1044		
	53	須恵器	高台付坏	15	3号住居	12.5	7.6	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	378			
	54	須恵器	甕	15	3号住居	20.0			平行タタキ	同心円当て具痕		1/1	22			
	55	須恵器	甕(転用硯)	15	3号住居				平行タタキ	同心円当て具痕				Ⅱ125		
	56	土師器	蓋	15	4号住居				磨耗	ヘラミガキ			1530	Ⅲ889		
84	57	土師器	皿	15	4号住居	19.8	11.8	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	1529			
	58	土師器	甕	15	4号住居	14.8			ヨコナデ	ヘラケズリ		1/6	1495			
	59	土師器	把手	15	4号住居				ナデ	ヘラケズリ			1528			
	60	土師器	坏	9.5	6号住居	14.0	8.4	5.0	ヨコナデ	ヨコナデ(工具ナデ)		1/4	4305			
	61	土師器	坏	9.5	6号住居	13.5	7.0	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	2125			
	62	土師器	坏	9.5	6号住居	12.4	6.4	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	2122	2127		
	63	土師器	坏	9.5	6号住居	12.6	7.4	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	1701			
	64	土師器	坏	9.5	6号住居	11.95	5.85	3.95	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	2136			
	65	土師器	坏	9.5	6号住居	11.6	6.0	3.35	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/3	4300			
86	66	土師器	坏	9.5	6号住居	12.1	5.6	4.55	ヨコナデ後丁寧なナデ	ヨコナデ		1/3	1670			
	67	土師器	坏	9.5	6号住居	13.0	8.5	4.15	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/6	2190			
	68	土師器	坏	9.5	6号住居		7.0		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			1776	2081		
	69	土師器	坏	9.5	6号住居		7.2		ヨコナデ	ヨコナデ			2148			
	70	土師器	坏	9.5	6号住居		6.7		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			2115	2353		
	71	土師器	坏	9.5	6号住居		6.2		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			1741			
	72	土師器	坏	9.5	6号住居		6.8		ヨコナデ後丁寧なナデ	ヨコナデ			1726			

第 26 表　古代遺物観察表 2（遺構内出土②）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
86	73	土師器	坏	9.5	6号住居		6.3		ヨコナデ	ヨコナデ	底部にヘラ記号		2258			
	74	土師器	埦	9.5	6号住居	13.4	5.7	6.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	2104	2376		
	75	土師器	埦	9.5	6号住居	16.4	8.7	6.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	2087	2219	2352	3617
	76	土師器	埦	9.5	6号住居		8.0		ヨコナデ	ヨコナデ			4273			
	77	土師器	埦	9.5	6号住居		7.4		ヨコナデ	ヘラミガキ			1805			
	78	土師器	埦	9.5	6号住居		7.5		ヨコナデ	ヘラミガキ			2124			
	79	土師器	埦	9.5	6号住居		9.8		ヨコナデ	ナデ			1779			
	80	土師器	高台付皿	9.5	6号住居	13.7	7.0	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	2087	3939	4320	4322
	81	土師器	内黒 坏	9.5	6号住居	15.0	5.5	5.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/2	4684			
	82	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居	13.5	7.8	6.3	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/4	1734			
	83	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居	12.7	7.3	5.7	磨耗	ヘラミガキ		1/3	2145			
	84	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居	18.3	9.1	7.9	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/3	1721	1722	1724	1733
	85	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居	13.2	6.0	6.0	磨耗・ヨコナデ	ヘラミガキ・磨耗		1/5	2184	3614		
	86	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居	13.7	7.25	5.35	磨耗	ヘラミガキ		1/5	2141	3568		
	87	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		7.0		ヨコナデ	ヘラミガキ			3924			
	88	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		6.9			ヘラミガキ			2156			
	89	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		7.8		磨耗	ミガキ			1635			
87	90	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		6.8		磨耗	磨耗			1714			
	91	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		6.7		磨耗	ヘラミガキ			1993			
	92	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		5.8		工具ナデ	ミガキ			2372			
	93	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		7.9		ヨコナデ	ヘラミガキ			2198			
	94	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		6.3		磨耗	磨耗			1656			
	95	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		6.8		ヨコナデ	磨耗	赤高台		4253			
	96	土師器	内黒 埦	9.5	6号住居		6.3		磨耗	ヘラミガキ	白高台		2338			
	97	土師器	甕	9.5	6号住居	26.5			ハケメ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ		1/3	1702	2078	2101	
	98	土師器	甕	9.5	6号住居	27.4				ナデ・ハケ・指頭圧痕		1/6	4272	4274	4302	
	99	土師器	甕	9.5	6号住居	29.4			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	下4271			
	100	土師器	甕	9.5	6号住居	28.2				ヘラケズリ		1/6	1959	1979		
	101	土師器	甕	9.5	6号住居	27.8			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	1806			
	102	土師器	甕	9.5	6号住居	25.0			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ		1/4	1704	1996	2343	1749
	103	土師器	甕	9.5	6号住居	16.0			ナデ	ヘラケズリ		1/6	2186	2210		
	104	土師器	甕	9.5	6号住居	20.0			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	1757			
	105	土師器	甕	9.5	6号住居	21.2			ヘラケズリ・磨耗			1/4	2054			
88	106	土師器	鉢	9.5	6号住居	27.1	16.0	17.25	ハケメ・ナデ	ナデ		1/3	2227	Ⅱb317	Ⅲ110	Ⅲ837
	107	土師器	把手	9.5	6号住居				指頭圧痕				床下			
	108	須恵器	坏	9.5	6号住居		7.2		ヨコナデ	ヨコナデ			2113			
	109	須恵器	坏	9.5	6号住居		10.0		ヨコナデ	ヨコナデ			2209			
	110	須恵器	坏	9.5	6号住居		7.9		回転ヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ			3943			
	111	須恵器	皿	9.5	6号住居		9.0		ヨコナデ	ヨコナデ			－			
	112	須恵器	蓋	9.5	6号住居				ヨコナデ	ヨコナデ			2192			
	113	須恵器	壺	9.5	6号住居		12.8		タタキの後ナデ消し・下ヘラミガキ	ナデ			2153	Ⅲ402		
	114	須恵器	蓋(転用硯)	9.5	6号住居				ヨコナデ				2090			
	115	須恵器	甕(転用硯)	9.5	6号住居				格子目タタキ	平行・同心円当て具痕			2143			
	116	須恵器	甕(転用硯)	9.5	6号住居				格子目タタキ	平行・同心円当て具痕			2060			
89	117		カマド形土器	9.5	6号住居				ハケメ							
91	118	土師器	坏	9.5	10号住居	13.5	7.9	4.6	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		完形	3361			
	119	土師器	坏	9.5	10号住居		6.4		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			3355			
	120	土師器	埦	9.5	10号住居		7.9		磨耗	磨耗			3559			
	121	土師器	蓋	9.5	10号住居	14.4			ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/8	3515			
	122	土師器	内黒 埦	9.5	10号住居	13.8	7.3	5.7	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/4	4072			
	123	土師器	内黒 埦	9.5	10号住居	14.75	7.2	5.5	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/4	3370			
	124	土師器	甕	9.5	10号住居	23.0			磨耗	ケズリ			3554			
	125	須恵器	壺	9.5	10号住居	18.2			ヨコナデ	同心円当て具痕	赤焼き		3335			
	126	土師器	甑	9.5	10号住居		21.2		ヨコナデ	ヨコナデ			3339			
	127	須恵器	甑	9.5	10号住居				ハケメ・ナデ	ケズリ	赤焼き		3347			
	128	須恵器	甕	9.5	10号住居	18.9			ヨコナデ			1/6	3567			
	129	須恵器	甕	9.5	10号住居	21.0			格子目タタキ	同心円当て具痕		1/4	3363	3545		
	130	須恵器	蓋(転用硯)	9.5	10号住居	14.6			ヨコナデ			1/10	－			
	131	須恵器	蓋(転用硯)	9.5	10号住居	14.8	11.0	1.55	ヨコナデ	ヨコナデ	内面にスミ付着	1/6	3570			
93	132	土師器	蓋	9.5	8号住居	15.7			ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/2	2736	4354	4729	
	133	土師器	坏	9.5	8号住居		11.9		磨耗	ヘラミガキ			7652			
	134	土師器	坏	9.5	8号住居		10.4		磨耗	磨耗			2707			
	135	土師器	甑	9.5	8号住居	29.0			ナデ	ヘラケズリ		1/8	2998			
	136	土師器	甑	9.5	8号住居		17.0		ハケメ・ナデ	ナデ		1/3	2739	2743	2989	4357
	137	土師器	壺	9.5	8号住居	14.1			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ		1/4	4357			
	138	土師器	把手	9.5	8号住居				指頭痕	ヘラケズリ			2705			
94	139	土師器	坏	9拡	5号住居	9.5	5.3	2.8	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		完形	6479			
	140	土師器	坏	9拡	5号住居	10.6	5.4	3.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		3/4	6644			
	141	土師器	坏	9拡	5号住居	10.3	5.75	3.1	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		3/4	6639			
	142	土師器	坏	9拡	5号住居	10.2	5.5	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	6480			
	143	土師器	坏	9拡	5号住居		5.5		回転ヘラ切り				6663			
	144	土師器	充実高台坏	9拡	5号住居		5.6		ヨコナデ	ヨコナデ			6553			

第 27 表　古代遺物観察表 3（遺構内出土③）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
94	145	土師器	内黒 埦	9拡	5号住居	10.7	6.3	4.1	ヨコナデ	ナデ・(内側)ヘラ		1/2	6542			
	146	土師器	内黒 埦	9拡	5号住居	10.8	6.2	3.45	ヨコナデ	ヘラミガキ		3/4	6526			
	147	土師器	内黒 埦	9拡	5号住居		8.5		ヨコナデ	ヘラミガキ			6523			
	148	土師器	内黒 埦	9拡	5号住居	15.4			ヨコナデ	ヘラミガキ		1/3	6528			
	149	土師器	内黒 埦	9拡	5号住居		7.7		ヨコナデ	磨耗			6472			
	150	土師器	皿	9拡	5号住居	11.2	6.0	2.3	ヨコナデ	ヨコナデ	輪高台	1/3	6564			
	151	土師器	皿	9拡	5号住居	11.0	5.9	2.55	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ	充実高台	1/3	6496			
	152	須恵器	壺	9拡	5号住居		12.0		ハケメ	ヨコナデ			474			
	153	須恵器	蓋(転用硯)	9拡	5号住居				ナデ	ヨコナデ		1/2	527	6796		
	154	滑石製石鍋		9拡	5号住居		25.0		ケズリ(ノミ痕)				6543	6547	6679	6681
95	155	土師器	埦	9拡	12号住居	15.7	8.2	6.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	6799			
	156	須恵器	高台付坏	9拡	12号住居		7.8		ヨコナデ	ヨコナデ			6807			
	157	土師器	坏	9拡	12号住居	11.1	5.8	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	6959			
97	158	土師器	高台付坏	9.5	11号住居	15.8	10.3	4.0	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ		1/6	4534			
	159	土師器	高台付坏	9.5	11号住居		10.9		磨耗	磨耗			3702			
	160	土師器	高台付坏	9.5	11号住居		9.8		磨耗	ヘラミガキ			一括			
	161	土師器	高台付坏	9.5	11号住居		11.0		磨耗	磨耗			－			
	162	土師器	甕	9.5	11号住居	22.3			磨耗	磨耗		1/8	3246			
	163	土師器	甕	9.5	11号住居	17.3			磨耗	ヘラケズリ		1/6	3245			
	164	土師器	鍋	9.5	11号住居	28.4			磨耗			1/4	3311			
	165	土師器	甑	9.5	11号住居		16.2		磨耗	ケズリ		1/8	3299			
	166	土師器	高杯	9.5	11号住居				磨耗	ミガキ			3295			
	167	須恵器	蓋	9.5	11号住居				ヨコナデ	ヨコナデ			4755			
	168	須恵器	高台付坏	9.5	11号住居		12.2		ヨコナデ	ヨコナデ			3722			
	169	須恵器	蓋(転用硯)	9.5	11号住居				ナデ・回転ヘラケズリ	ナデ			2577	3305		
98	170	土師器	坏か埦	9.5	7号住居	12.8			ヨコナデ	磨耗		1/8	4190			
	171	土師器	坏か埦	9.5	7号住居	13.2			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	4475			
	172	土師器	埦	9.5	7号住居		8.2		磨耗	磨耗			3882	4098	4099	
	173	土師器	蓋	9.5	7号住居	13.5			回転ヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ			3887			
	174	土師器	蓋	9.5	7号住居				回転ヘラケズリ・ナデ	ナデ			3903			
	175	土師器	壺	9.5	7号住居	18.0			工具痕	ヘラケズリ		1/3	3880			
	176	土師器	壺	9.5	7号住居	18.4			磨耗	磨耗		1/5	2291			
	177	須恵器	高台付坏	9.5	7号住居	16.0	10.6	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	3902			
	178	須恵器	坏	9.5	7号住居	13.4			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	3042			
	179	須恵器	高台付坏	9.5	7号住居		9.4		ヨコナデ	ヨコナデ			4751			
99	180	土師器	坏	9.5	21号住居	15.3			ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	4490			
	181	土師器	坏	9.5	21号住居		9.6		ヨコナデ	ヨコナデ			4158			
	182	土師器	高台付坏	9.5	21号住居		11.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ			3666			
	183	土師器	高台付坏	9.5	21号住居		9.1		磨耗	磨耗			3673			
	184	土師器	蓋	9.5	21号住居	15.6			ヨコナデ	ヘラミガキ		1/9	3770			
	185	土師器	蓋	9.5	21号住居	16.4			ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/6	4108			
	186	土師器	蓋	9.5	21号住居	17.4			磨耗	磨耗			－			
	187	土師器	甕	9.5	21号住居	25.2			磨耗	ヘラケズリ		1/6	3857	4136		
	188	土師器	甕	9.5	21号住居	18.6			ナデ	ヘラケズリ			3649			
	189	土師器	甕	9.5	21号住居	17.0			ナデ	ヘラケズリ			4454			
	190	土師器	甕	9.5	21号住居	16.5			ナデ	ヘラケズリ			3647			
	191	土師器	甕	9.5	21号住居	14.5			磨耗	ヘラケズリ		1/8	4755			
	192	土師器	甕	9.5	21号住居	13.4			ナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ		1/8	4497			
	193	土師器	甑	9.5	21号住居	16.0			ハケメ・ナデ	ケズリ		1/10	4755			
	194	須恵器	壺	9.5	21号住居		7.0		ヨコナデ	ヨコナデ		1/1	3621			
	195	須恵器	蓋(転用硯)	9.5	21号住居	14.8			ナデ・ケズリ	ヨコナデ	スミ付着	1/6	3691			
100	196	土師器	坏	9.5	13号住居	13.0		4.0	手持ちヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ		1/2	3745			
	197	土師器	坏	9.5	13号住居	16.6	9.15	4.55	手持ちヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ		1/4	4752			
	198	土師器	坏	9.5	13号住居	14.4			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ		1/5	4752			
	199	土師器	坏	9.5	13号住居	17.9			手持ちヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ		1/4	4752			
	200	土師器	坏	9.5	13号住居				磨耗	ヨコナデ			3680			
	201	土師器	坏	9.5	13号住居		5.0		磨耗	ヨコナデ			3683			
	202	土師器	坏	9.5	13号住居		7.0		手持ちヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ			－			
	203	土師器	坏	9.5	13号住居	14.3			ヨコナデ	ヨコナデ			3860			
	204	土師器	坏	9.5	13号住居	14.15	7.6	5.15	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	4103			
	205	土師器	坏	9.5	13号住居	11.0			ヨコナデ	ナデ		1/12	4756			
	206	土師器	坏	9.5	13号住居				磨耗	ヨコナデ			3760			
	207	土師器	坏	9.5	13号住居	16.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ			3758			
	208	土師器	高台付坏	9.5	13号住居		10.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ			3808			
	209	土師器	高台付坏	9.5	13号住居		11.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ			3769			
	210	土師器	高台付坏	9.5	13号住居		10.7			ヘラミガキ			－			
	211	土師器	蓋	9.5	13号住居	21.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤色顔料		1622	4162		
	212	土師器	蓋	9.5	13号住居	19.7			ヘラミガキ	ヘラミガキ			3781			
	213	土師器	蓋	9.5	13号住居				ヘラミガキ	ヘラミガキ			－			
	214	土師器	蓋	9.5	13号住居					ヘラミガキ		1/6	3779			
	215	土師器	蓋	9.5	13号住居	17.2			手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/5	3761			
101	216	土師器	甕	9.5	13号住居	23.0			ナデ	ハケメ		1/8	4752			

第 28 表　古代遺物観察表 4（遺構内出土④）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
101	217	土師器	甕	9.5	13号住居	22.0			ナデ	ヘラケズリ		1/3	4757			
	218	土師器	甕	9.5	13号住居	19.4			ハケメ	ヘラケズリ		3/4	3693	3695	3696	3697
	219	土師器	甕	9.5	13号住居	14.0			ハケメ・ナデ	ケズリ		1/6	4754			
	220	土師器	甕	9.5	13号住居	17.3			ハケメ	磨耗		1/6	3756			
	221	土師器	甕	9.5	13号住居	16.7			ナデ	ヘラケズリ		1/6	3780			
	222	土師器	甑	9.5	13号住居				タタキ・ハケメ・ナデ	当て具痕・ナデ	把手付き		3867			
	223	土師器	甕	9.5	13号住居				タタキ	当て具痕・ナデ	赤焼き		4756			
102	224	須恵器	坏？	9.5	13号住居	13.8			ヨコナデ	ヨコナデ			4752			
	225	須恵器	提瓶	9.5	13号住居				ナデ	当て具痕・ナデ			4753	13H3855		
103	226	土師器	高台付坏	7.5	31号住居		8.2		ミガキ	ミガキ			3920	3931		
	227	土師器	坏	7.5	31号住居	13.4	7.1	4.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		3/4	H31-1			
	228	土師器	坏	7.5	24号住居	11.05	5.7	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ	内面にスス付着	1/3	2618	Ⅲ-		
	229	土師器	坏	7.5	31号住居	15.8			ヨコナデ	ヨコナデ			3924			
	230	土師器	甕	7.5	31号住居	22.8			ハケメ	ヘラケズリ		1/3	2	3	4	5
104	231	土師器	坏	7	34号住居	14.0	7.8	3.85	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	3063	埋土c		
	232	土師器	坏	7	34号住居	12.8	6.1	3.5	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/4	2910	埋土g		
	233	土師器	坏	7	34号住居	10.9	5.6	4.1	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/3	2907	2908	埋土a	
	234	土師器	高台付皿	7	34号住居	12.2	6.2	3.5	ナデ	ヘラミガキ		1/2	3084	埋土e		
	235	土師器	甕	7	34号住居	28.2			ハケメ	ハケメ・ヘラケズリ		1/4	2909	3089	3091	埋土abg
	236	土師器	甕	7	34号住居	24.8			ハケメ	ヘラケズリ・ヨコナデ		1/6	3435	床		
	237	土師器	甕	7	34号住居	15.2			ハケメ	ケズリ		1/8	3147	埋土g		
105	238	土師器	坏	7.5	23号住居	12.6			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	2205			
	239	土師器	坏	7.5	24号住居	11.0	6.9	4.35	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/1	2206			
	240	土師器	坏か埦	7.5	25号住居	13.0			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	2292			
	241	土師器	坏か埦	7.5	25号住居	16.9			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	2290			
	242	土師器	埦	7.5	25号住居	14.15	7.45	5.85	ヨコナデ	ヨコナデ		1/1	2284			
106	243	土師器	甕か甑	7	33号住居				ナデ	ケズリ			カマド			
	244	須恵器	蓋(転用硯)	7	33号住居	16.9			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	3707			
	245	土師器	蓋	6.5	37号住居	17.2			回転ヘラケズリ・ナデ	ナデ		1/4	4252			
	246	土師器	蓋	6.5	37号住居	17.2			回転ヘラケズリ	ナデ		1/3	4246			
	247	土師器	蓋	6.5	37号住居	17.8			回転ヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ		1/3	2154	2932	4253	
	248	土師器	蓋	6.5	37号住居	17.6			回転ヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ		1/3	4247	4249		
	249	須恵器	高台付坏	6.5	37号住居	14.4	8.8	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	3609			
107	250	土師器	坏	6.5	掘立柱建物跡	13.2	7.2	3.85	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	掘2P12			
	251	土師器	坏	6.5	掘立柱建物跡		6.4		ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	掘P2			
	252	土師器	鉢	6.5	掘立柱建物跡	7.2			ヨコナデ	ナデ		1/6	掘2P2			
	253	土師器	甕	6.5	掘立柱建物跡	29.5			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	掘2P2			
109	254	土師器	坏	10	大型竪穴	14.2		5.6	手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	回転台整形	1/2	7266			
	255	土師器	坏	10	大型竪穴	20.2			手持ちヘラケズリ	ナデ		1/8	7311			
	256	土師器	坏	10	大型竪穴				手持ちヘラケズリ	ヨコナデ			7011			
	257	土師器	高台付坏	10	大型竪穴	15.8	11.2	4.5	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/2	7172	7339		
	258	土師器	甕	10	大型竪穴	13.2			磨耗	ヘラケズリ		1/4	7105			
	259	土師器	甕	10	大型竪穴	17.0			ナデ	ヘラケズリ		1/6	7132			
	260	土師器	甕	10	大型竪穴	22.2			磨耗	ヘラケズリ		1/4	7189			
	261	土師器	甕	10	大型竪穴	22.1			磨耗	ヘラケズリ		1/3	7357	注記半消		
	262	土師器	甕	10	大型竪穴	22.1			ヘラミガキ・ナデ	粗いハケメ・ナデ		1/4	7041			
	263	土師器	甕	10	大型竪穴	17.6			ハケメ	ヘラケズリ		1/4	7341			
	264	土師器	甕	10	大型竪穴	16.1						1/1	7047	7128	7177	7186
	265	土師器	甕	10	大型竪穴	17.0			ナデ	ヘラケズリ		1/4	7147	7326		
	266	土師器	甕	10	大型竪穴	16.2			磨耗	ヘラケズリ		3/5	7149	7151	7155	
	267	土師器	甕	10	大型竪穴	13.6			ナデ	ケズリ		1/4	7376	もとH10		
110	268	土師器	甕	10	大型竪穴								7021	7047	7069	Ⅲ2473
	269	土師器	鍋	10	大型竪穴	25.1			ヨコナデ	ヘラケズリ		1/3	7024			
	270	土師器	鍋	10	大型竪穴	26.9			磨耗	ヘラケズリ		1/3	7264			
	271	土師器	鍋	10	大型竪穴	29.6			ハケメ・ナデ	ナデ・ヘラケズリ		1/3	3788	5637		
	272	土師器	鍋	10	大型竪穴	30.4			ナデ・ヨコナデ・磨耗	ヘラケズリ		1/3	7356			
	273	土師器	鍋	10	大型竪穴	37.4			ナデ・ハケメ	ヘラナデ		1/4	2136	2551		
	274	土師器	甑	10	大型竪穴		22.3		ナデ	工具ナデ		1/4	7135	7146	7148	7323
111	275	土師器	甑	10	大型竪穴		17.2		斜格子タタキ	ヘラケズリ・ヘラミガキ			6895	7327	7333	P55
	276	土師器	把手	10	大型竪穴				ナデ				7229			
	277	土師器	把手	10	大型竪穴				ナデ				7381			
	278	土師器	把手	10	大型竪穴				ナデ				7200			
	279	土師器	把手	10	大型竪穴				ナデ				229			
	280	土師器	甑か甕	10	大型竪穴				ナデ	ナデ			7130			
	281	須恵器	蓋	10	大型竪穴	12.8	7.2	4.2	(底)ヘラケズリ(胴)ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	7335			
	282	須恵器	高台付坏	10	大型竪穴		9.0		ヨコナデ	ヨコナデ			7129			
	283	須恵器	坏か鉢	10	大型竪穴		7.5		手持ちヘラケズリ	(底)ナデ			7040			
	284	須恵器	鉄鉢	10	大型竪穴	18.3			ヨコナデ	ヨコナデ			7099			
	285	須恵器	埦(転用硯)	10	大型竪穴		8.2					1/6	7258			
112	286	土師器	坏	15	土坑1	15.8	11.8	4.75	(底)手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/2	土1			
	287	土師器	坏	15	土坑2	12.2	8.3	3.95	ヨコナデ	ヨコナデ		1/1				
113	288	土師器	坏	9拡	土師集石土坑	13.7	6.5	5.25	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/1	H1-16			

第 29 表　古代遺物観察表 5（遺構内出土⑤）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
113	289	土師器	充実高台	9拡	土師集石土坑	12.2	5.2	5.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/1	H1-15			
	290	土師器	充実高台	9拡	土師集石土坑	12.6	6.05	4.95	ヨコナデ	ヨコナデ		4/5	H1-18			
	291	土師器	内黒　埦	9拡	土師集石土坑	11.8	6.7	5.7	ヨコナデ	磨耗		1/1	H1-17			
	292	土師器	内黒　埦	9拡	土師集石土坑	11.7	6.4	6.7	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/1	H1-13			
	293	土師器	内黒　埦	9拡	土師集石土坑	12.5	6.2	6.15	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/1	H1-14			
	294	土師器	内黒　埦	9拡	土師集石土坑	16.4			工具ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/1	H1-21			
	295	土師器	内黒　皿	9拡	土師集石土坑	15.0	7.1	5.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刻書土器	1/3	H1-19	H1-20	H1-25	
	296	土師器	小型　鉢	9拡	土師集石土坑	10.3	5.1	5.95	ヨコナデ	ヨコナデ		1/1	H1-12			
114	297	土師器	坏	9.5	土坑2	13.1	7.0	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	内面にスス付着	1/1	3965			
	298	土師器	高台付坏	9.5	土坑2		10.6		磨耗・研磨の跡アリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ			3990			
	299	土師器	甕	9.5	土坑2	15.6			磨耗	ヘラケズリ			3974			
	300	土師器	鉢	9.5	土坑2		19.2		タタキ	ナデ			3955			
	301	須恵器	甕	9.5	土坑2	19.2			平行文タタキ	同心円当て具痕			3970			
	302	土師器	坏	9.5	土坑3	12.3	8.2	3.8	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ			3916			
	303	土師器	坏	9.5	土坑3	12.0	6.7	4.15	ヨコナデ	ヨコナデ			3914			
	304	土師器	埦	9.5	土坑3		8.0		磨耗	磨耗						
	305	土師器	甕か坏	9.5	土坑4		8.7		ヘラミガキ	ヘラケズリ			4408			
	306	土師器	甑	9.5	土坑4		13.5		ナデ	ケズリ			4406			
	307	須恵器	高台付坏	9.5	土坑4		10.1		磨耗	磨耗			4414			
	308	須恵器	蓋	9.5	土坑4	16.0			ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	4411			
115	309	土師器	甕	9.5	土坑5	25.6		25.8	ハケメ	ヘラケズリ・ナデ(底)指頭圧痕	完形	1/1				
	310	土師器	坏	9.5	土坑6	13.3	6.0	4.4	手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/5	P87			
	311	土師器	坏	9.5	土坑6	14.1	10.5	4.7	手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		3/4	P87			
	312	土師器	坏	9.5	土坑6		7.2		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			P87			
	313	土師器	内黒　埦	9.5	土坑6		7.5		ヨコナデ・磨耗	ヘラミガキ			P87			
	314	土師器	坏	6	土坑1		5.6		ヨコナデ	ヨコナデ			1749			
	315	土師器	埦	6	土坑1	11.2			ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ		1/5	1712			
	316	土師器	内黒　埦	6	土坑1	15.6			ヘラミガキ	ヘラミガキ			1710			
116	317	土師器	蓋	7	土坑2	19.0		3.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	つまみに刻書	1/2	3354			
	318	土師器	坏	7	土坑2	16.5	12.2	5.0	ヨコナデ(底)ヘラケズリ	ヨコナデ		1/2	3354			
117	319	瓦	丸瓦	7.5	土坑10				斜格子タタキ	布目痕	二分割					
121	320	土師器	坏	12	土坑3		6.2		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			ミゾ605			
	321	土師器	甕	12	土坑3	28.8			ハケメ	ヘラケズリ		1/2	ミゾ606	土9-2	土9-5	
	322	土師器	甕	12	土坑3	22.0			ハケメ	ヘラケズリ		1/2	土9-1	土9-4		
	323	土師器	内黒　埦	12	土坑6	14.5			ヨコナデ	ヘラミガキ	刻書	1/10	土4-648			
	324	土師器	坏	12	土坑18		5.9		磨耗	磨耗			P1045	P1048		
	325	須恵器	甕	12	土坑18				格子タタキ	同心円当て具痕			P997			
	326	須恵器	壺	12	土坑18		14.2		平行タタキ	指ナデ			P993			
	327	須恵器	甕	12	土坑19				格子タタキ	同心円当て具痕			P1004			
	328	須恵器	甕	12	土坑20	18.8			ヨコナデ	同心円当て具痕		1/5	P980			
	329	須恵器	転用硯	12	土坑20				格子タタキ	同心円当て具痕			P989			
	330	土師器	埦	12	土坑21		8.9		ヨコナデ(底)ナデ	ヨコナデ			P1009			
124	331	須恵器	坏	11	土坑29	10.9	8.0	3.4	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成不良	1/4	Pオ			
	332	土師器	坏	11	土坑30		5.6		ヨコナデ	ヨコナデ	底面にヘラ記		Pカ			
	333	土師器	埦	11	土坑30	13.7	7.9	6.7	ヨコナデ	ナデ		1/4	Pカ			
	334	土師器	埦	11	土坑30	12.8			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	Pカ			
	335	土師器	坏	11	土坑31		7.5		ヨコナデ	ヨコナデ			Pウ			
	336	土師器	坏	11	土坑32		5.9		ヨコナデ	ヨコナデ			Pイ			
	337	土師器	坏	11	土坑32	11.8	7.0	4.3	ヨコナデ後ナデ	ナデ		1/8	P272			
125	338	土師器	充実高台	14	土坑		5.0		ヨコナデ	ヨコナデ			ミゾ2-696			
	339	土師器	内黒　埦	14	土坑		8.2		磨耗	磨耗			ミゾ1-666			
	340	須恵器	(転用硯)	14	土坑		10.0		ヨコナデ	ヨコナデ	赤焼		ミゾ4-716			
126	341	土師器	坏	12	ミゾ		7.0		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			909			
	342	土師器	埦	12	ミゾ		7.3		ナデ	ミガキ			1043			
	343	須恵器	鉢	12	ミゾ		10.0		ナデ	ヨコナデ			876			
	344	須恵器	壺	12	ミゾ				平行タタキ	ナデ			904			
127	345	土師器	坏	7	焼土	15.0			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	1863			
	346	土師器	甕	7	焼土	29.0			ヨコナデ・磨耗	ヨコナデ・ケズリ		1/4	1832	1833		
	347	土師器	甕	7	焼土	29.2			ハケメ	ヘラケズリ			1862			
	348	土師器	甕	7	焼土	21.2			ナデ・ハケメ	ナデ			1834			
	349	焼けた粘土		7	焼土						灰白色		1851			
	350	焼けた粘土		7	焼土						灰白色		－			
	351	焼けた粘土		7	焼土						赤褐色		－			
	352	焼けた粘土		7	焼土						灰白色		－			
	353	焼けた粘土		7	焼土						赤褐色		－			
128	354	土師器	坏	12	P1	11.6			ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/8	633			
	355	土師器	甕	12	P3	28.0			ナデ・ハケメ	ヘラケズリ		1/6	658	659		
	356	土師器	取っ手	9.5	P6											
	357	土師器	坏	9.5	P70	13.1	6.6	4.8	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4				
	358	土師器	埦か坏	9.5	P99						両朱					
	359	土師器	埦か坏	9.5	P99						両朱					
	360	土師器	甕	9.5	P55	19.5			ナデ・(口)ハケメ	ヘラケズリ						

第２節　出土遺物

古代の遺物は遺物包含層であるⅢ層を主に出土しており，一部のものは上部のⅡ層や下部のⅣ層においても認められた。出土した遺物は土師器，須恵器，緑釉陶器，越州窯系青磁，焼塩土器のほか土製品として土錘や紡錘車もあり，また金属製品として鉄器や青銅製品など，あるいは石器や石製品など多種のものが認められた。ただし遺物包含層から出土した遺物総数はパンケース400箱に及び，整理期間等の都合により図化掲載できた遺物は残念ながら多くない。

なお，ここでは７世紀後半以後のものを古代として取り扱った。

１．土師器

土師器には，坏，蓋，皿，埦，などの供膳具や甕，鉢，甑などの煮炊具が出土したほかカマド形土器も多く出土した。

坏

出土した坏は器形や口径・底径・器高などの法量及び整形・調整などから以下のように分類できる。

１類…底部は手持ちのヘラケズリ調整が行われており，そのため立ち上がりは丸味をもつ。体部上位から口縁までと内面はヨコナデである。

２類…口径約16cm程度で，そして底径は10～12cmと大きいものの器高は比較的低い。器面調整は内外面ともヘラミガキが施されている。底面は平坦で大きく体部は直線的で側面観は箱形を呈する。

３類…高台付きの坏であり，口径及び底径ともそれぞれ16cm以上と11～14cmと大きい。高台は低く，器面調整は内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。

４類…口径は大きく13cmを超えるものであり，底径も約８cm程度と大きい。しかし器高は低く，側面観は箱型に近い形状である。

５類…口径は比較的大きく12～13cm程度であるが，底径は７～８cm程度と比較的小さくなる。体部は直線的である。底面はヘラ切りの後ナデられている。

６類…口径は11～13cm程度であるが，底径は６～７cm程度と５類よりも小さくなる。体部は直線的に開く。底面はヘラ切りの後ナデられている。

７類…口径・底径・器高とも法量がかなり大きいもの。

８類…口径は12cm程度であり，底径はかなり小さくなる。体部は丸味をもち，内湾して立ち上がる。

９類…口径はかなり小さくなり11～12cm程度となる。器高及び底径も小さく，全体的に雑なつくりとなる。

10類…口径は12cm程度で底部は厚く円盤状となる。高台を意識しているものと推定され，円盤状高台埦に区別される。底部底面及び立ち上がり部の器面はナデられている。

11類…口径は11～12cm程度で底部は９類より径が小さくなり，同時に厚くなる。いわゆる充実高台埦に分類されているものである。底部と体部の境界は明確であり，意識的にナデられている。

以下各分類に従って説明を加えていく。

１類（第129図362～366）

いずれも底面を手持ちヘラケズリにより整形したものであり，そのため底面近くの立ち上がりは丸みをもつ。体部はやや開き気味である。体部上面及び内面はヨコナデであることより回転台による整形と判断できる。

366は体部が丸く内湾し，口縁端部がわずかに開く。いずれも胎土はよく，焼成も他の土師器坏と全く異なり須恵器のように固い焼成である。

２類（第130図367～371）

口径16cm程度及び底径が12cm程度と大きく平坦で，側面観は箱形を呈する。器面調整は内外面ともヘラミガキである。369は他と異なり底面は回転ヘラによる切り離しであり，底径も大きくないが内面調整がヘラミガキのためここに入れてある。色調はいずれも赤褐色を呈し，胎土・焼成は良好である。

３類（第130図372～381）

底面には低い輪高台が付いた，高台付坏と呼ばれるものである。いずれも口径及び底径も大きいものであるが器高は高くなく側面観は箱形を呈する。器面調整は内外面ともヘラミガキが施される。

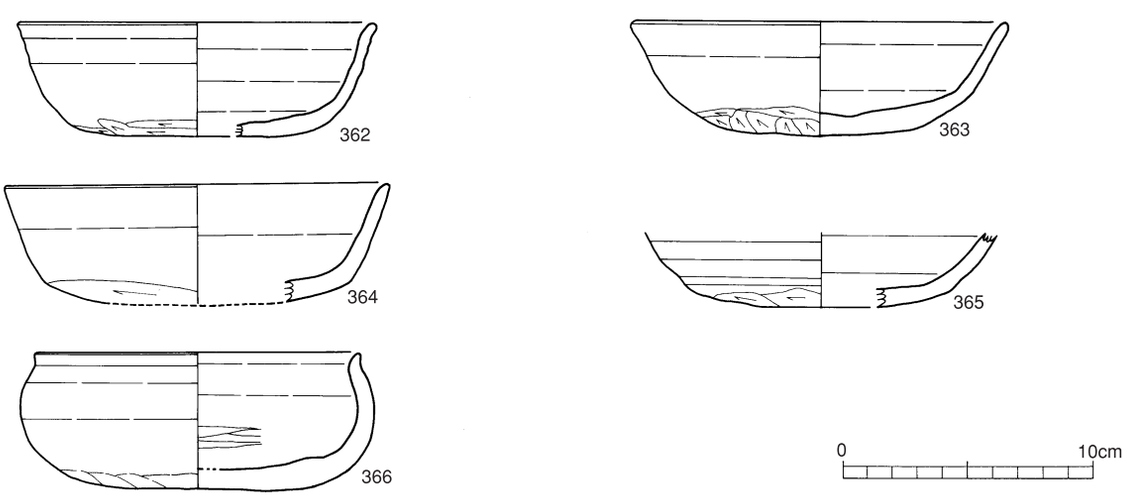
372は口縁端部が内湾するものの内外面及び底部外面も丁寧なヘラミガキが施されている。焼成は須恵器のように堅致である。373・374は器面が摩耗しているため明確ではないが，器面調整はナデと思われる。378・379の高台は断面四角形であり，体部立ち上がりよりやや内側に付く。380・381の高台は断面三角形状の低いものである。

４類（第131図382～390）

口径及び底径とも大きく，口径は13cm程度で底径が８cm程度を測るものであり，器高は比較的低いことより側面観は箱形に近いものである。低部切離しは回転ヘラ切りであり，その後体部下半近くまでナデ調整を施している。体部は直線的であり，内外面ともヨコナデ調整である。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

５類（第131図391～410）

口径は12～13cm程度であり４類に近いが，底径は７～８cmと４類より比較的小さくなる。その



第129図　古代の遺物1（土師器　坏①）

ため体部は直線的に開く印象が強い。底面は回転ヘラ切りによる切り離しの後ナデているものが多い。393は底面に「人」のヘラ線刻がみられる。色調は３・４類と比較してわずかに白に近くなる。

６類（第132図411～442）

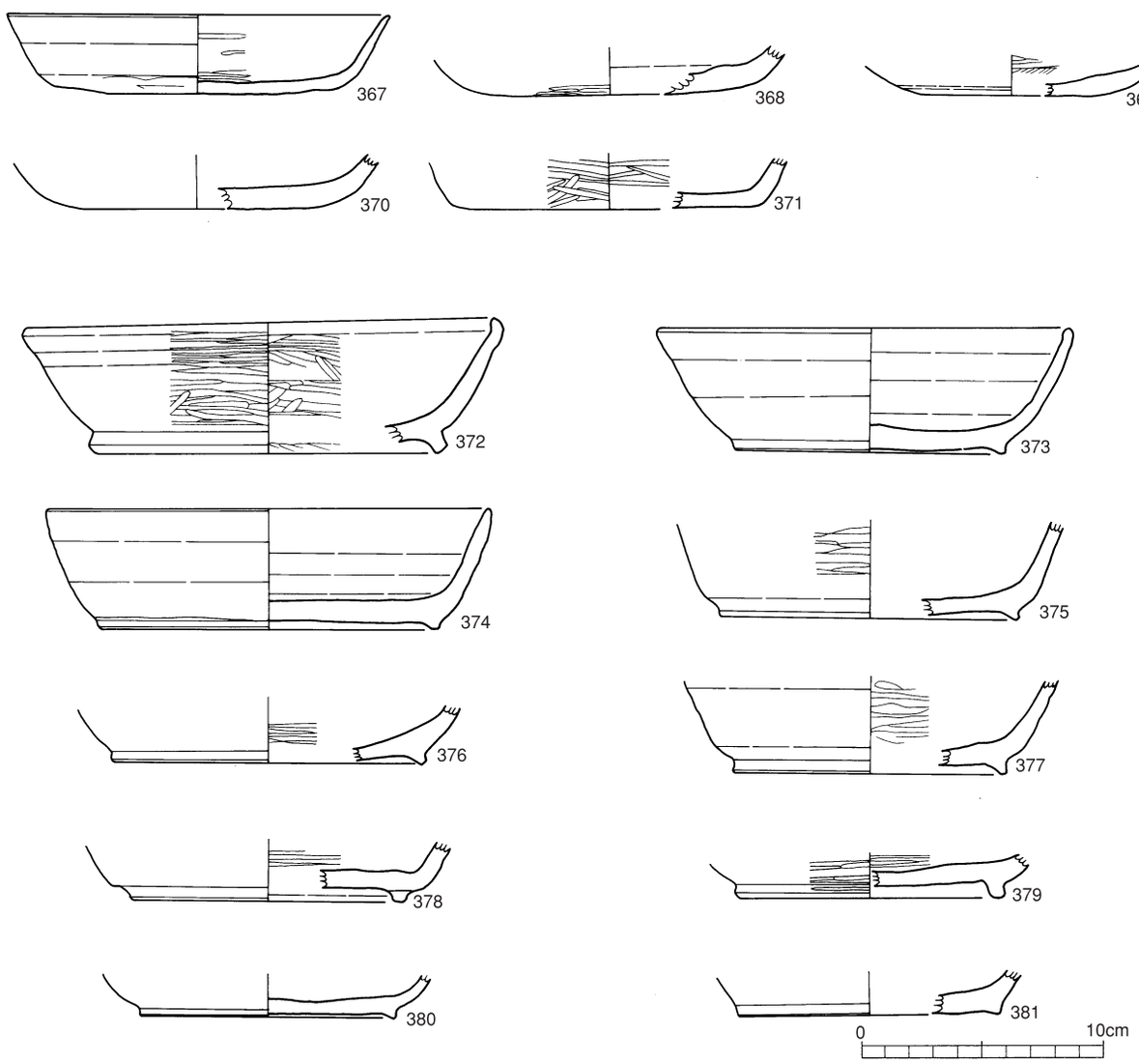
口径は12～13cm程度であるが，底径は６～７cmと５類より小さくなる。体部は直線的に開きその開き度合いは増す。低部は回転ヘラ切りによる切り離し後ナデられる。412・413のように器高の高いものもある。色調は灰白色のものがより多くなる。

７類（第132図443）

443は口径及び器高など法量が特殊な大型品であるが，口径・底径・器高の比率等からここに入れてある。本来通常の坏とは区別し，埦とした方が良いかもしれない。１点の出土である。体部は内湾気味に立ち上がる。

８類（第133図444～464）

口径は11～12cmであり，底径は５～６cm，器高は３～５cmを測る。体部は丸味をもって開く。底部は回転ヘラによる切り離しの後ナデられているものと，そのままのものが認められる。内外面とも器面調整はヨコナデであるが，雑なつくりとなる。



第130図　古代の遺物2（土師器　坏②）

９類（第133図465～483）

口径は10～11cm，底径は４～５㎝，器高は３～４㎝を測り，８類より一回り小さくなる。底部は回転ヘラ切りの後そのままのものが多い。雑なつくりといえる。器面調整はヨコナデである。色調は赤褐色のものは470のみで他は全て灰白色を呈する。ヒズんだものが多い。480は内面見込みに粘土が細く帯状に付着しているもので，成形・乾燥時もしくは焼成時に重ねた痕跡と考えられる。479は内面にススが付着しており灯明皿として使用されたものと思われる。

10類（第134図484～495）

口径は12㎝程度，底径は６～７㎝程度，器高は４～５㎝を測る。底部は厚く円盤状を呈する特徴をもつ。体部はやや丸味をもって開き，立ち上がり部はナデられている。底部は回転ヘラ切りによる切り離し後，丁寧にナデられている。器面調整は内外面ともヨコナデである。色調は490のみ赤褐色を呈し，その他は桃白色から灰白色を呈する。

11類（第134図496～521）

口径は10～12cm，底径は５～６㎝，器高は４～５㎝を測る。円柱状の高い高台を有するものでありいわゆる充実高台埦と呼ばれているものである。高台部分は意識的につくられ，立ち上がり部はナデられている。体部はやや丸味をもって開く。記面調整は内外面ともヨコナデである。

521は高台部分にハケメ状の工具痕が認められる。色調は赤褐色のものは２点（504・507）で，他は灰白色を呈する。図に高台部分をわずかに掲載しているが，厚くつくられた柱状高台は割れにくく，そのまま残存しているものが多い。本遺跡の遺物包含層からはこのような高台部分が多量に出土している。

埦

出土した輪高台が付く埦は，口径・器高及び高台の法量及び形態から次のように分類できる。

１類（第135図522・523）

522・523はいずれも口径17㎝を越え，器高も８㎝を越える大型のものである。522は体部下半はヘラケズリが施され，内面はヘラミガキが施されている。高台は短く立つ。523は直線的に開く体部下半は工具ナデが施され，その上部から口縁にかけてと内面は指のヨコナデである。高台は短く広がる。522の色調は赤褐色である。

２類（524）

復元口径は17㎝を超えるが，残存率が低く信憑性に欠ける可能性もある。高台は断面四角形で短い。体部は直線的に開く。色調は桃白色を呈する。

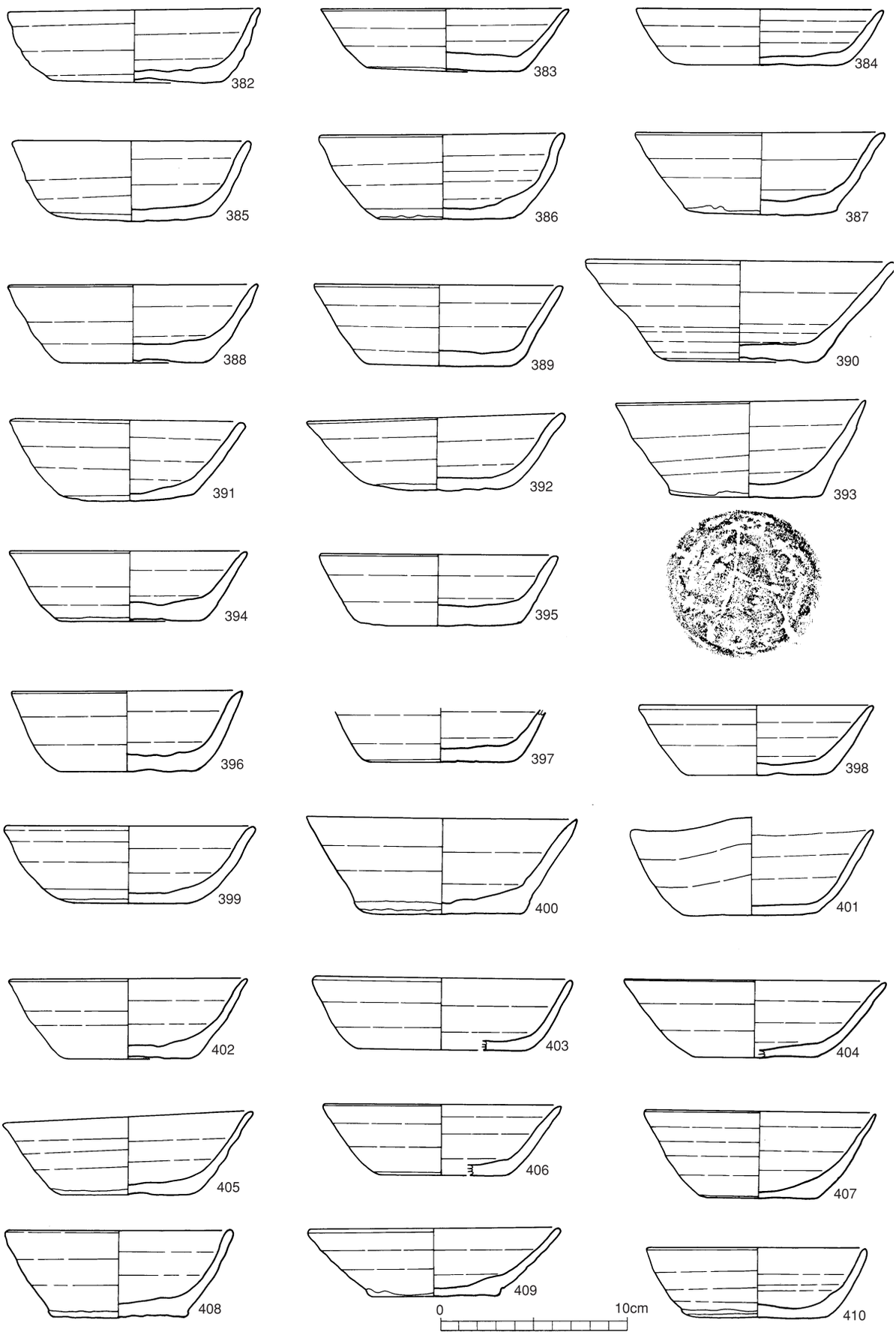
３類（525～527）

口径は13㎝程度であり，体部は直線的に開く。高台は短く立ち，接地面はやや丸味をもつ。器面調整は内外面ともヨコナデである。

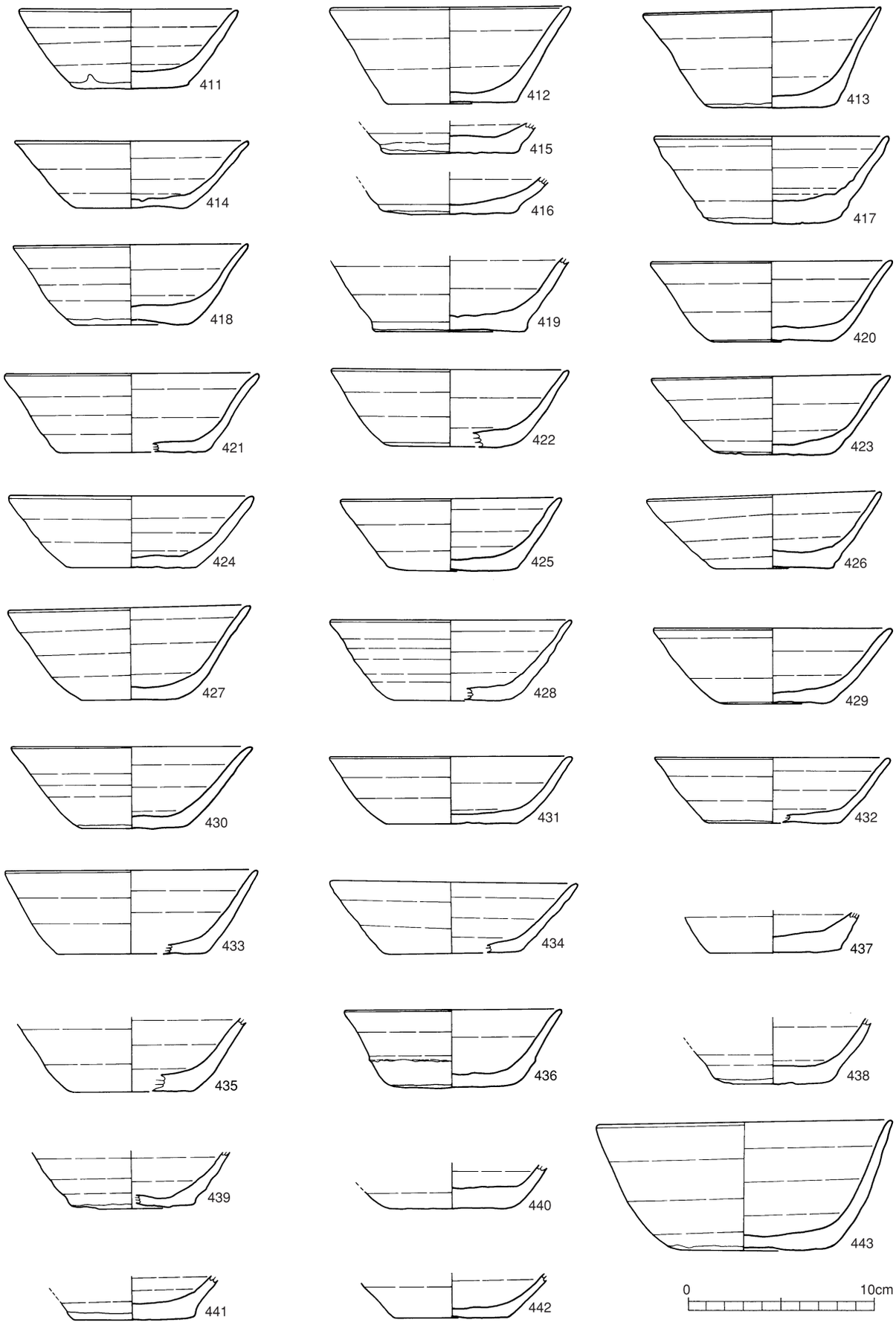
４類（第528～537）

高台が「ハ」の字状に広がるものであり，体部は直線的に開くもの（528～531）と，内湾気味に開き丸味をもつ（532～537）ものがある。535の体部の器高は著しく低い。器面調整はいずれもヨコナデである。色調は灰白色を呈する。

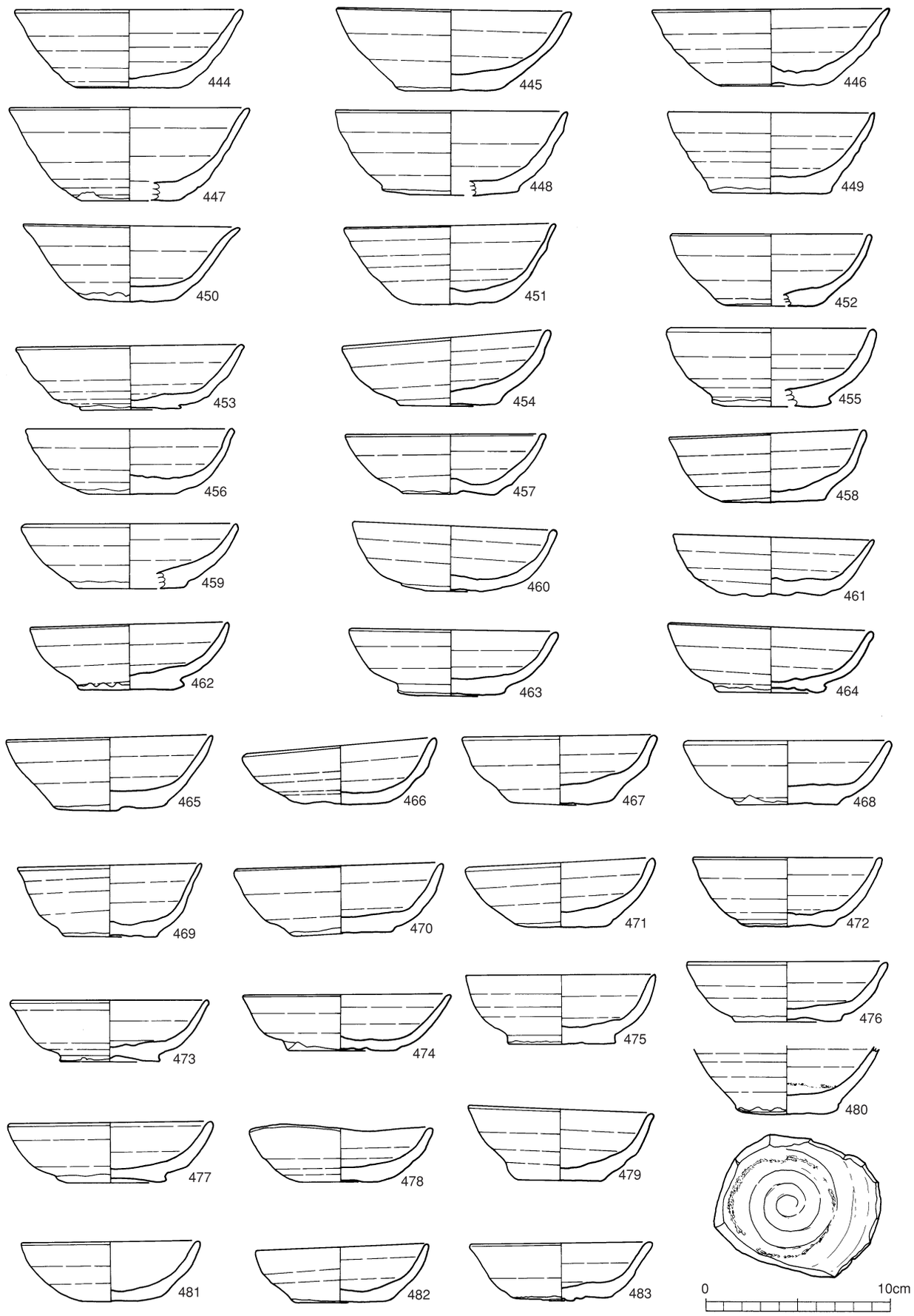
なお，高台がついた埦の底部のなかで特徴のある異色高台埦が認められた。



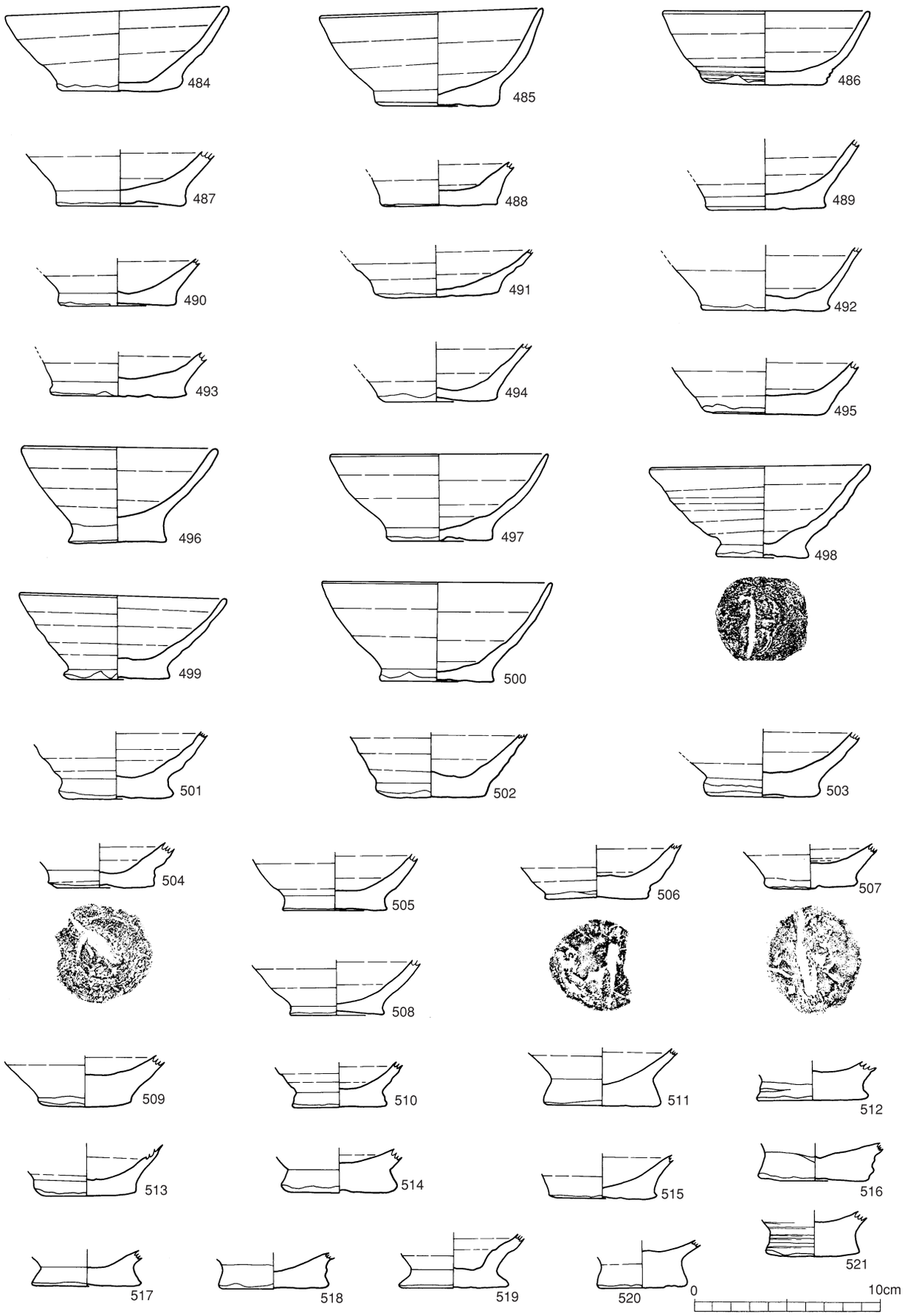
第131図　古代の遺物3（土師器　坏③）



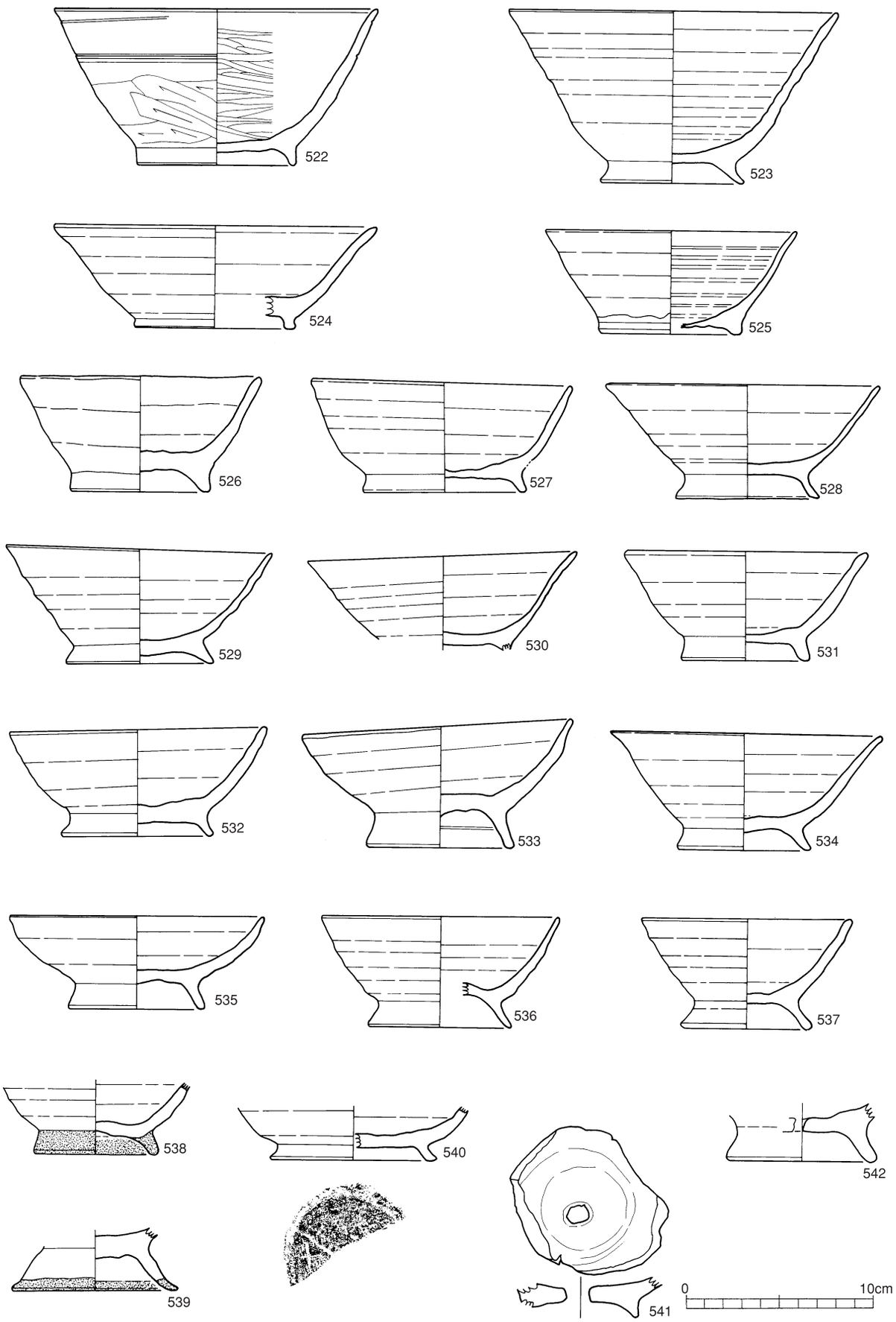
第132図　古代の遺物4（土師器　坏④）



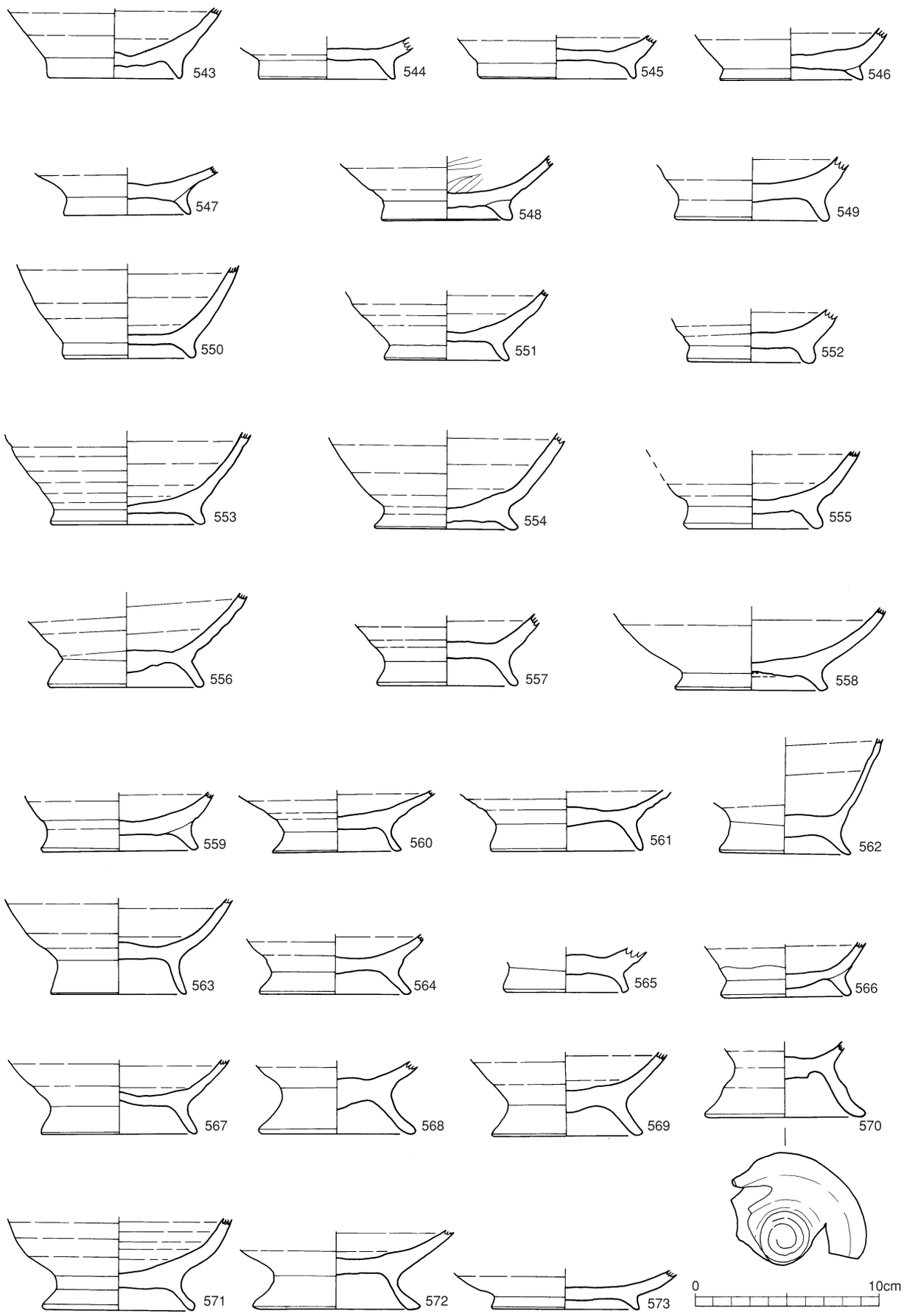
第133図　古代の遺物5（土師器　坏⑤）



第134図　古代の遺物6（土師器　充実高台）



第135図　古代の遺物7（土師器　埦①）



第136図　古代の遺物8（土師器　埦②）

538は体部がにぶい橙色を呈するものであるが，高台部分は灰白色の粘土を使用しており，桃高台となる。539は「ハ」の字に広がる高台であり，高台の下半部のみ灰白色粘土を使用し，桃高台となっている。高台下半は橙色を呈しているため，より桃高台が目立つ。（カラー図版1参照）

540の底部底面にはヘラ状工具により「×」の刻書が施されている。

541・542は底部中央に穿孔が施されているものである。541は焼成後と思われ，542は粘土の盛り上がりより焼成前の穿孔と考えられる。

第136図543～573は高台の付いた埦の底部であり，短い高台で高台端部が尖がるもの（543～547）や，短い高台で端部が丸味をもつもの（548～553），あるいは「ハ」の字状に広がる高台をもつもの（554～572）などがある。573の高台は短く簡単に付けた新しい時期のものと考えられる。

蓋（第137図574～589）

土師器の蓋の出土は全体量の多さと比較すると少ないようである。

574・575は口径19～20㎝程度の大型のものであり，表面の摩耗のため調整は明確でない。口縁端部はわずかに屈曲する。576・577は口径15㎝程度のものであり，いずれも口縁端がわずかに屈曲する。576は外面は摩耗しているが，内面にはヘラミガキの痕跡が観察される。天井部中央には平坦なつまみをもつ。578は天井部外面が回転ヘラケズリが施されており，中央には宝珠様のつまみをもつ。口縁端部はわずかに屈曲する。これのみ赤褐色を呈している。579～585は蓋の一部である。586は輪高台状のつまみをもち，内面は丁寧なヘラミガキが施されている。坏蓋ではなく壺蓋の可能性が考えられる。588・589は口径18～19㎝の大型のもので，つまみはもたない。端部は直線的である。

皿（第137図590～603）

出土した皿は，口径・器高・形態により大きく３類に区分できる。

１類（590～597）

590～594は口径16～18㎝程度，底径13㎝程度と大きいものであるが，器高は約２㎝と浅い皿である。底面は広く平坦で口縁は直線的である。591・593は口縁直下に沈線が施される。595～597は皿の底部である。口縁は不明であるが底径の大きさから１類の可能性がある。

２類（598～600）

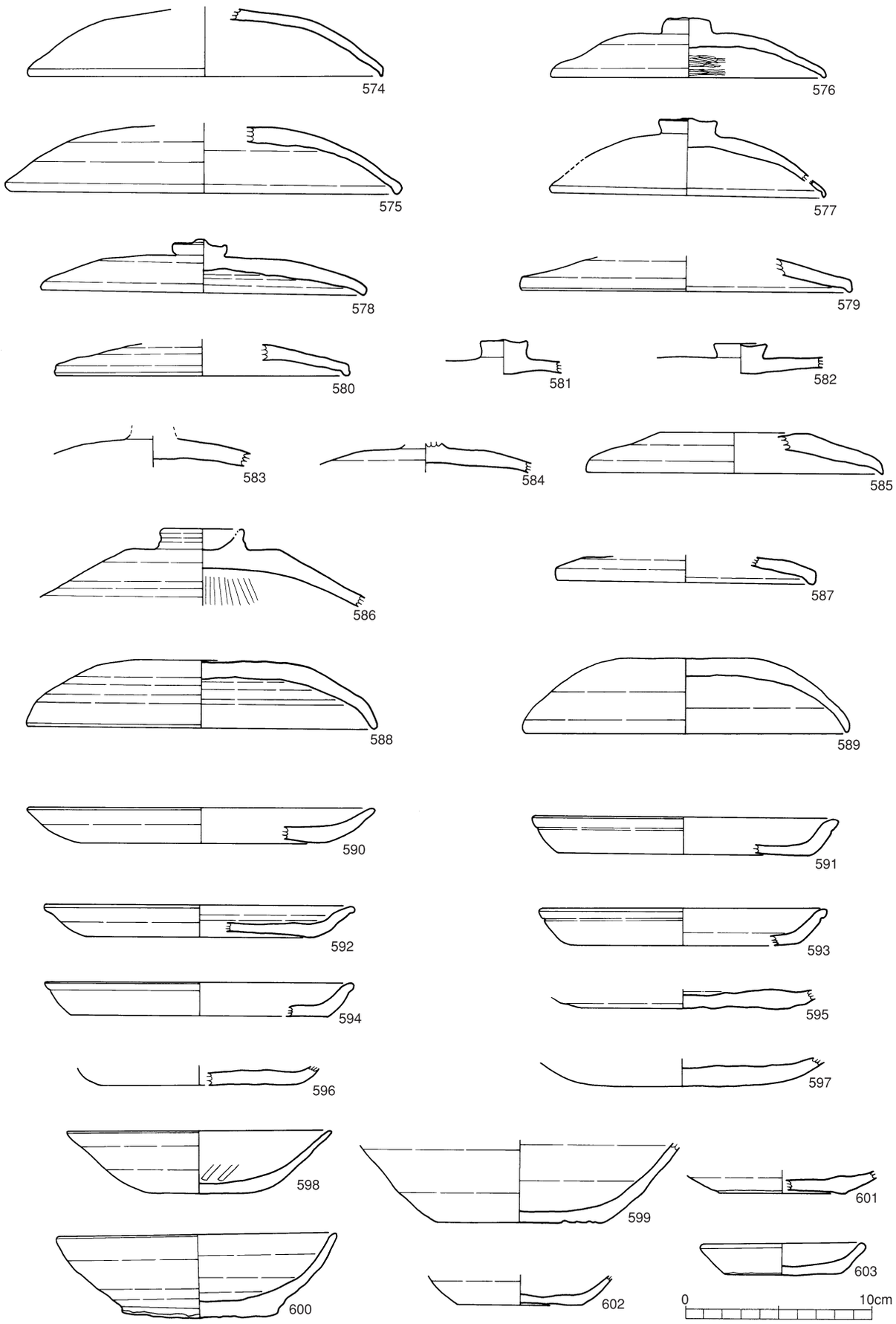
598～600は口縁径に比較して底径が小さく，また器高も４～６㎝と上記の皿とは形態が異なる深い皿である。体部は丸味をもって開く。600の器面下半及び底面は工具による回転ヘラケズリが施されている。

３類（601～603）

601～603は小皿であり，口径９～10㎝程度，器高は２㎝に満たない。いずれも底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われており，口縁は直線的で短い。603は他の土師器と異なり胎土に金雲母が含まれている。

高台付皿（第138図）

第138図は高台付皿である。口径や皿の深さ及び高台の高さ等の法量と形態により大きく５類に区別できる。



第137図　古代の遺物9（土師器　蓋・皿）

１類（604～606）

皿部の口径は15cm程度であり，高台は高く３cm以上になると推定されるものである。皿部はほぼ平坦に近く深さは２cm未満と浅く，高台部は柱状に立つ。いずれもきめの細かい胎土が利用されており，灰白色を呈している。器面調整は内外面ともヨコナデである。

２類（607～612）

皿部の口径は13cm程度で，１類よりわずかに小さくなるが，高台径はほぼ同様となるものの高台の高さは約１cm強と著しく低い。皿部は比較的上方に広がるため，皿の深さは約３cm程度と深くなる。607は赤褐色を呈し，608・609は胎土に砂が多く含まれる。いずれも器面調整は内外面ともヨコナデである。

３類（613）

皿部の口径は12cm程度であるが，高台の径は１類とほぼ同様であり，しかも３cmを越す高さを有し，高台の端部は「ハ」の字状に開く。皿部は短く平坦に近いため皿部の深さは１cmと浅い。内外面ともヨコナデ調整である。

４類（614）

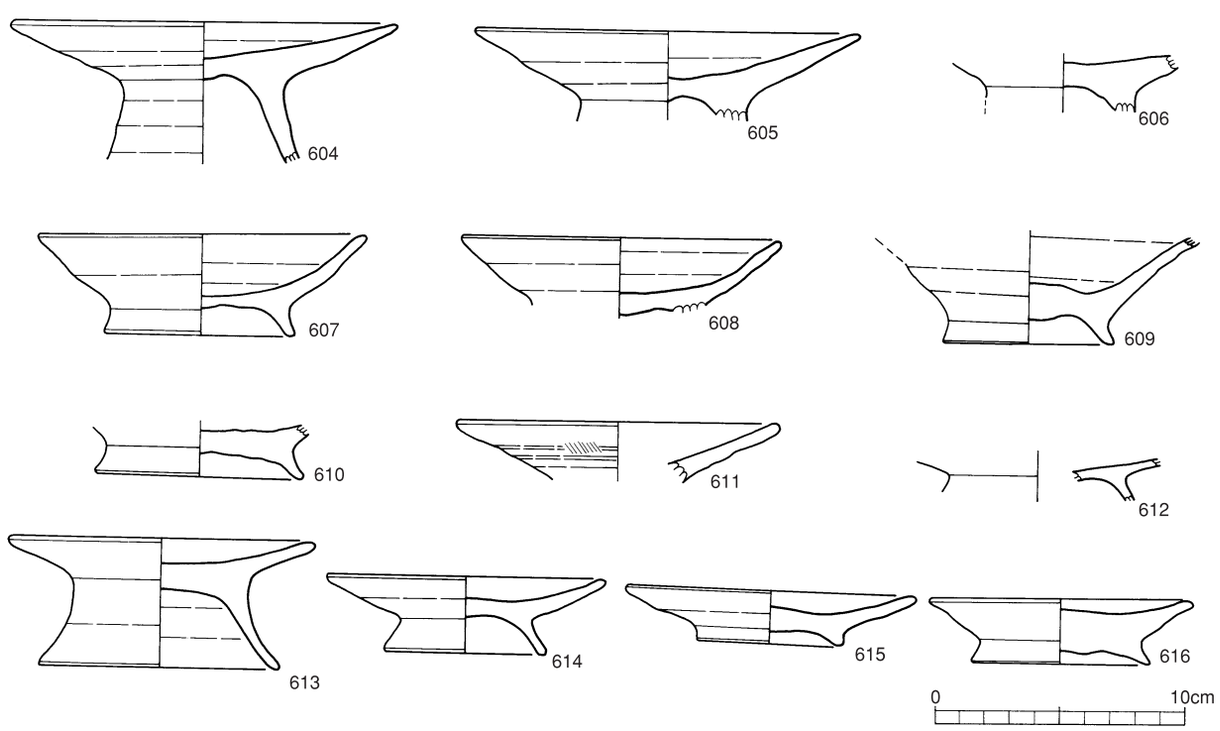
皿部の口径は11cmであり，３類と同様に短く開く。高台部は２類と類似しており短く開く。内外面ともヨコナデであり，灰白色を呈する。

５類（615～616）

皿部の口径は４類と同様11cm程度であるが，皿部も浅く高台は極めて低い。616の底部は厚く高台は断面三角形となる。いずれも器面調整はヨコナデである。

黒色土器

内面のみを黒く燻した内黒土師器（黒色土器A）と，内外面とも黒く燻した黒色土器（黒色土器B）とがある。器種は各々坏・埦・皿などが出土している。ただし黒色土器Ｂは量的に極めて少な



第138図　古代の遺物10（土師器　高台付皿）

かった。

内黒土師器

坏（第139図617～628）

617は口径約18cmに比較して底径約7cmと小さく，体部は内湾気味に開く大型のものである。

618も同様の法量を有すると推定されるものであるが，器面調整は黒色土器のなかで唯一回転ヘラミガキが施されている。619～622は体部の底部からの立ち上がりが角をもつものに対し，623～625は立ち上がりが丁寧にナデられやや丸味をもつ。626・627は口径15cm程度であり体部は直線的に開く。

皿（629～630）

629は底部が認識できる程度の厚みをもち，体部はほぼ平坦近くに広がることより皿と考えられる。630は低い円板状の高台が付き，体部は同様に平坦状に広がるものである。

埦（第139図631～第141図672）

体部の立ち上がりと高台により３類に区分できる。

１類…632～637は体部が直線的に立ち上がるものである。632の高台は低く，633～637の高台はやや高くなり「ハ」の字状に広がる。口径は13～14cmを測る。

２類…638～641は体部が丸味をもって立ち上がるものである。641は内面の黒色に燻された面のみでなく，外面もヘラミガキが施されている。

３類…642は口径11.4cm，器高3.7cmの小型のものであり，短い高台で体部は内湾して立ち上がるものである。

なお，特殊なものとして赤高台の内黒土師器がある。643は短く立つ高台に，体部は内湾して立ち上がり口縁端部でわずかに外反するものである。先の分類では２類に含まれるが，明茶褐色を呈する体部の粘土と異なり，高台部分は赤褐色を呈する粘土を貼り付けている。（カラー図版１参照）640は高台部分が剥落しているものの，高台付近に赤色粘土が輪状に付着しており634と同様のものと考えられる。

644～672は埦の高台部分であり，短く立つもの（644～649）や「ハ」の字状に広がるもの（650～669）のほか，円板状に貼り付けるもの（670・671），あるいは細い糸状のもの（672）などがみられる。657は内面底部にモミ痕が残るものである。

高台付皿（673・674）

いずれも短い高台が付く。674は口縁端部をわずかに欠損するが，口径は相方とも13cm程度となる。

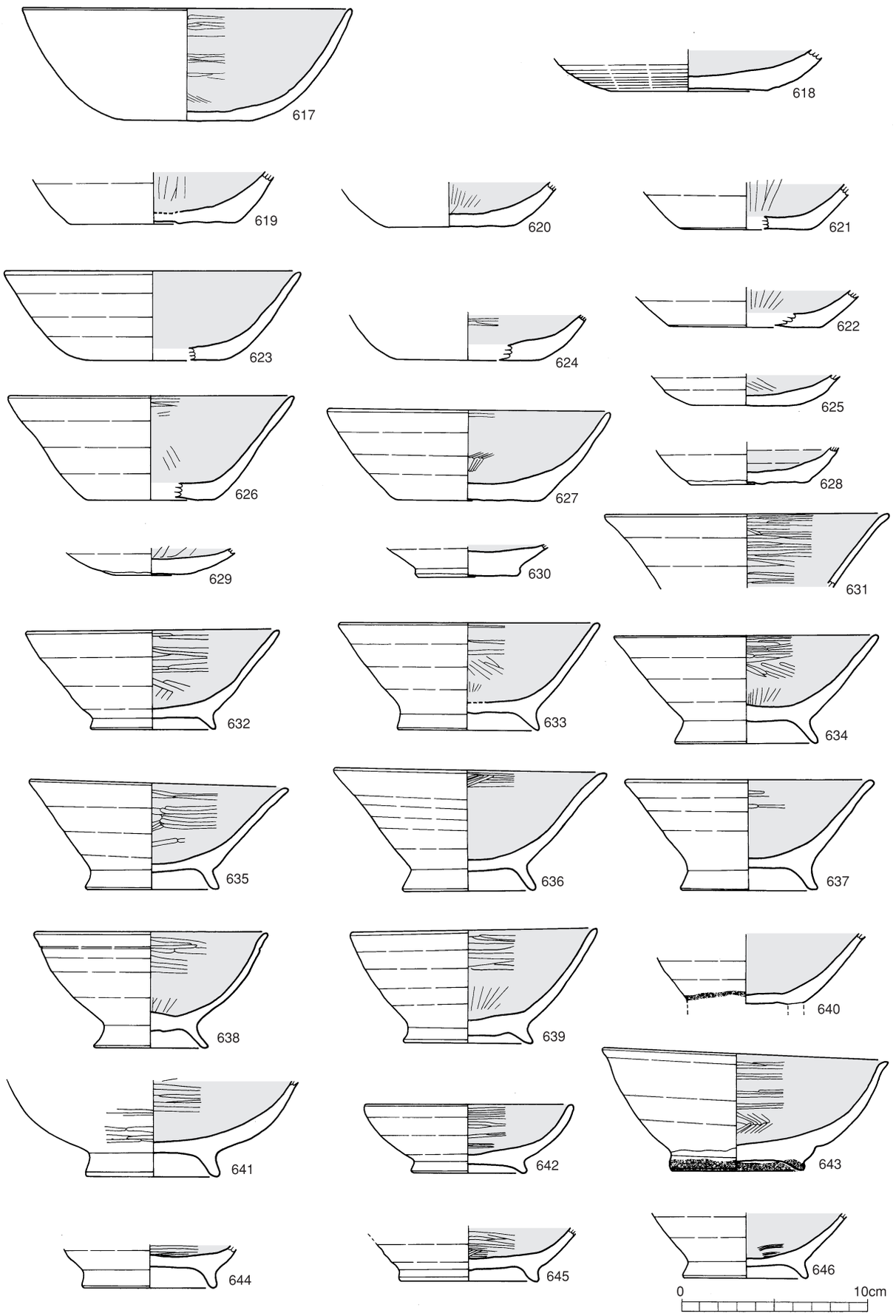
黒色土器B

埦（675～678）

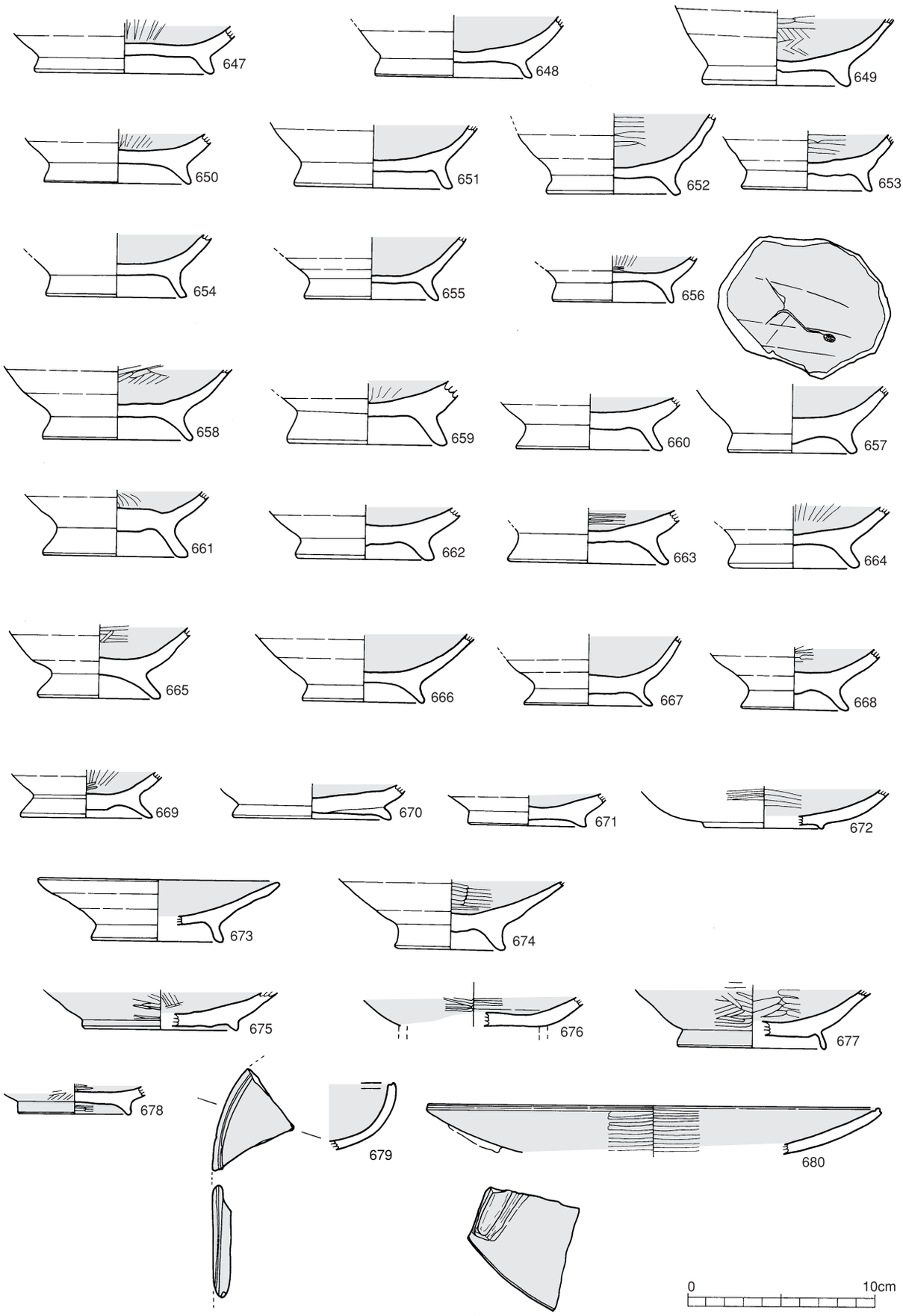
675は断面三角形の短い高台を付したものである。676は高台部分が剥落しているが，677は高台が極めて薄い。

その他の器形（679・680）

679は楕円形状の口縁と推定され，口唇部には細い沈線が施されている。680は皿状の器形を呈すると考えられるもので，口縁直下には縦長の細い貼り付けをもつ。



第139図　古代の遺物11（土師器　内黒坏・埦）



第140図　古代の遺物12（土師器　内黒埦他）

赤色顔料が施された土師器

第141図は赤色顔料が施された土師器である。内面のみに施された内朱土器のほか，内外面とも施された両朱土器とがあり，器種は坏・埦・皿がみられた。全体量のなかで赤色顔料が施された土師器は少ない。

坏（681～686）

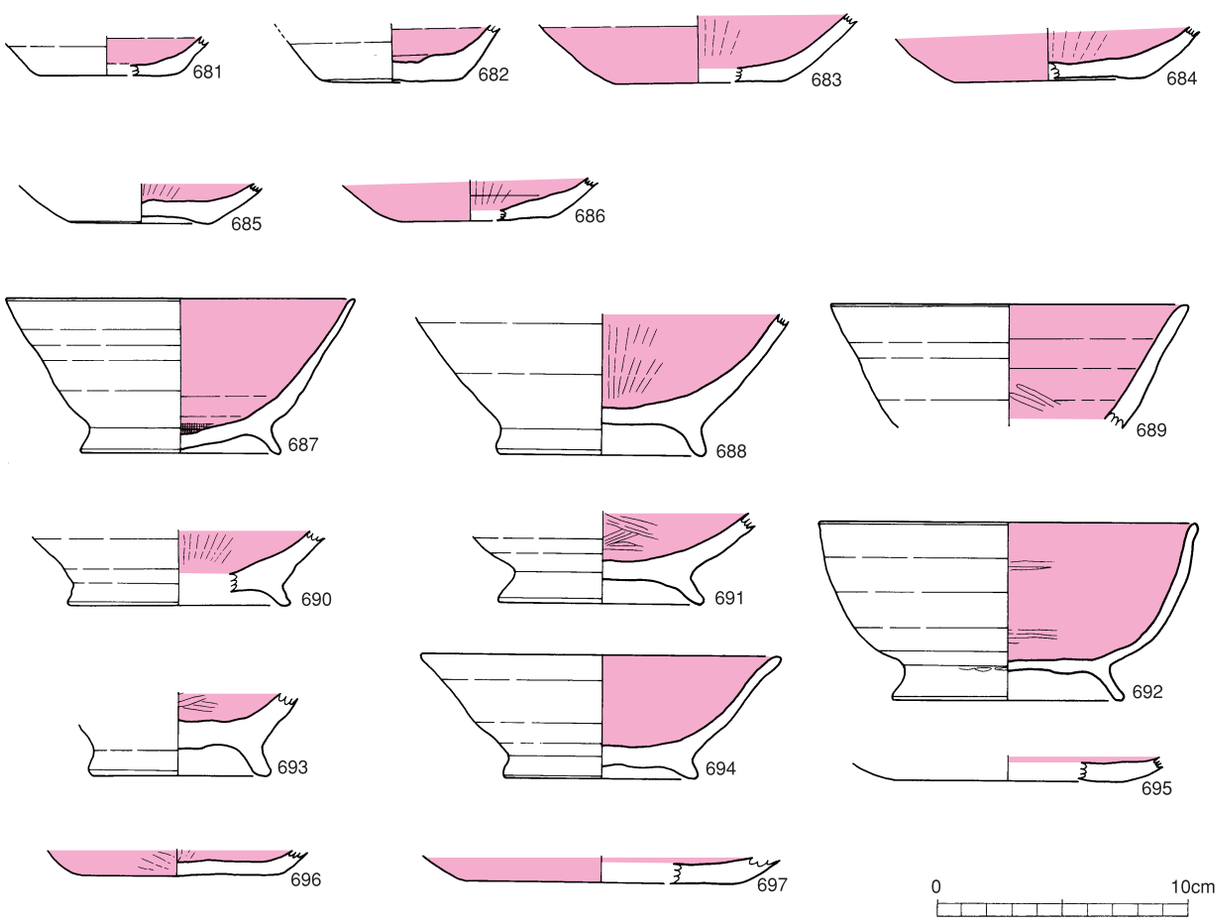
681・682は内面のみに赤色顔料が施された内朱土器である。683～686は内外面とも施された両朱土器である。顔料の剥落が著しい。682の器面調整はヨコナデであり，底面は回転ヘラ切りによる切り離しの後ナデている。685の底部はわずかに上げ底となる。

埦（687～694）

687～689は体部がほぼ直線的に立ち上がるものである。いずれも高台は「ハ」の字状に広がる。687の内面見込みには布目痕が残る。688の器高は厚く鉢の可能性もあるが，内面はヘラミガキが施されている。689の内面調整はヨコナデ痕が残る。692は「ハ」の字状に広がる高台から体部は内湾して立ち上がる。口径は約15cmで高さは約７cmを測る。外面はヨコナデである。694の高台は断面三角形で短くつく。

皿（695～697）

いずれも小さな破片であるが，立ち上がりの角度が平坦に近いことから皿と考えられるものである。695は内朱土器，696・697は両面とも赤色顔料が施された両朱土器である。



第141図　古代の遺物13（土師器　内朱坏・埦）

甕

出土した甕は形態的に４類に区別できる。

１類（第142図698～703）

胴部に最大径があり，胴部中央から肩にかけてなだらかに内湾し，口縁部は短く外反する。肩部の器壁は厚く，口縁端部が薄くなる。器面調整は外面にハケメがみられ，内面はほとんどヘラケズリが行われている。698の器面にはタタキ痕が観察される。702の器面には細かいハケメ調整が残る。色調は桃白色（698～702）が多く，赤褐色は701のみである。

２類（第142図704～第143図711）

口径は14～18cmであり，１類と同様に最大径は胴部中央付近にあり，肩にかけてなだらかにしまる。口縁は短く外反する。口縁端部はまるくおさめる。いずれも器面調整はハケメであり内面はヘラケズリが施される。外面のハケメが横方向に施されるもの（704・705・708）もある。色調はいずれも赤褐色を呈する。711は丸底の底部が残存するもので器面14.7cmを測る。708の最大径は口縁にあるが，その他の要素は２類であり，ここに入る。

３類（第143図712～717）

最大径は口縁部にあり，口縁20cm程度の小型の甕である。口縁は「く」の字状もしくは「逆L字」状に大きく外反し，直線的な胴部へと続く。器面調整は外面がハケメ調整，内面はヘラケズリが施される。

４類（第143図718～第145図741）

最大径は口縁部にあり，口径22cm以上で30cmを越すものまである。口縁部は「く」の字状に外反するもの（720・723・730・737）や，逆L字状に大きく外反するもの（724・731・736）や直口気味に開くもの（728・738）など多様である。器面調整は外面がハケメ，内面はヘラケズリが施される。色調は茶褐色や黄褐色のものが多い。

鍋

外面にススが付着しているものの存在より甕と同様に煮炊具と判断されるものである。形態的に３類に区分できる。

１類（第146図742・743・752）

口縁は体部から直線的に開き，体部と口縁部の境界は明確でない。器面調整は内外面ともヨコナデであるが，大型の752は底部近くにハケメが施されている。１類はススが付着していない。

２類（744～747）

胴部と口縁部の境の内面には稜があり，境界が明確になっている。口縁部は胴部より外反して開く。胴部内面はヘラケズリが施されている。747より器高の浅さがわかる。

３類（748～751）

口縁部は胴部から外に大きく屈曲して外反するものである。748は胴部上位でしまり，その後口縁で外反する。器面調整は底面はハケメ，上位はヨコナデ，内面は胴部が横方向のヘラケズリ，上位はハケメ調整である。749の底面付近はタタキ状の痕が残る。751の胴部上半は直行し，口縁部は逆L字状に広く，底部は胴部から大きく内湾し半円状となると思われる。３類は全てススが多く付着している。

鉢

出土した鉢類は４類に区分できる。

１類（第147図753～761，第148図770～774）

平坦な底部で体部は直線的に開くものである。口径は約20㎝程度のものと，約30㎝程度のものとがある。器面調整は内外面ともヨコナデを主体としたもの（753・754）のほか，内面をヘラケズリ調整したもの（755・756・759）もみられる。

２類（第148図762～767）

高台が付くものである。762は「ハ」の字状に広がる高台を有し，体部は内湾して立ち上がり丸みをもち，口縁端部はわずかに内傾する。内外面ともヨコナデ調整が施されている。764は高台部が剥落したものであり，内面にはモミ痕が認められる。

763は口縁部を欠損しているが，短く立つ高台を有し，体部は内湾して立ち上がるものである。器面には部分的にタタキ痕が残り，その後ナデ消されている。内面はヘラミガキの後，黒く燻され内黒土器となっている。765も同様に内面は黒く燻された黒色土器である。

３類（第148図768）

768は内外面ともヘラミガキが施され，その後赤色顔料により両朱土器となっているものである。高台は断面四角形を呈し，体部は直線的であり，２類とは形態が異なる。

４類（第148図769）

769は広い口径に比較して器高が低く，２類が埦形とすれば本類は坏形を呈するものと表現できる。体部は直線的に開き，器面調整は内外面ともヨコナデが施される。

５類（第148図775・776）

底部のみの欠損品であるが，底径は７㎝程度と小さく，体部は直線的に開くものである。器面調整は内外面ともヨコナデ調整である。

甑（第149図777～784）

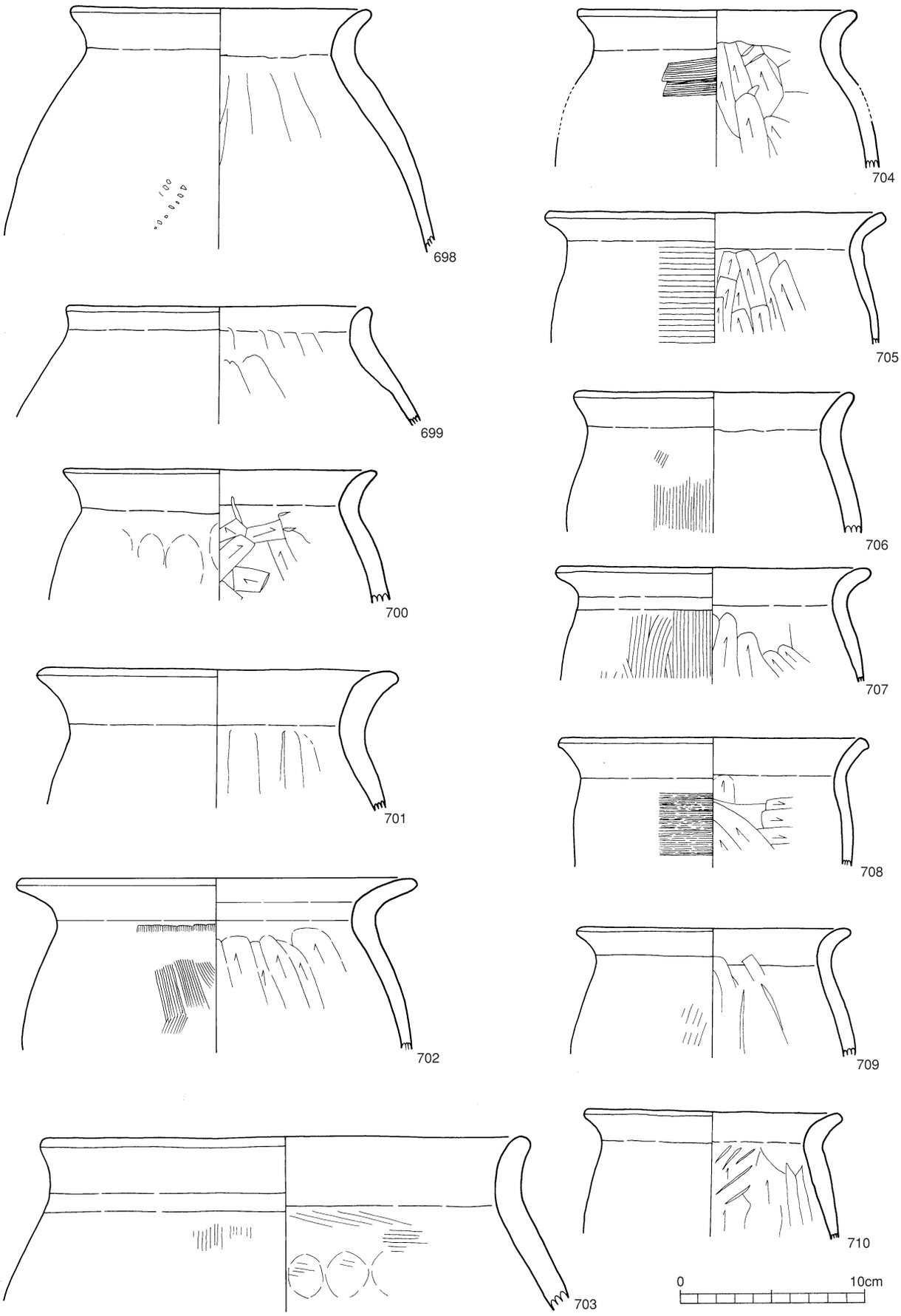
777～784はほぼ類似する胎土及び焼成・色調を有するものであり，口縁部の形態等より甑と推定される。口縁部は特徴的に外反して開くもの（777～780）のほか，直行して開くもの（781），あるいは直行する体部で口縁部分のみ短く外反するもの（782・783）などがみられる。778には把手の剥落した痕が残る。器面調整は外面がヨコナデのほか，内面はヘラケズリが施されている。784は蒸気孔のある底部でありつつぬけタイプと呼ばれている。孔径約14㎝を測る内面はヘラケズリが施される。いずれも焼成良好であり，783は須恵質程度に堅く焼かれている。

把手（第150図785～793）

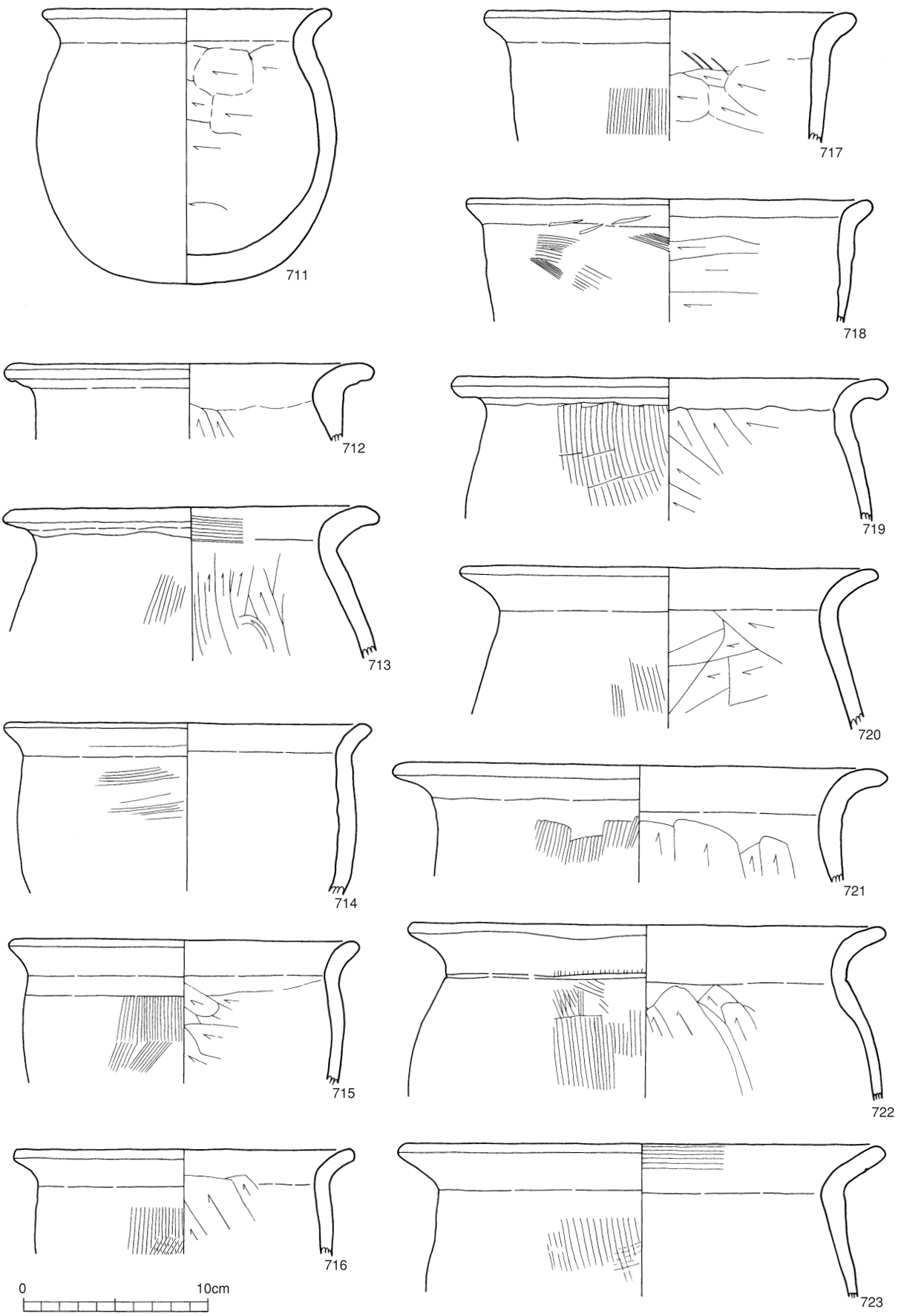
785～793は把手の部分であり，甕あるいは甑のものと推定される。総点数40点程度出土しており，図化したものはその一部である。形態的には幅広平坦状のもの（785）や，円柱状で屈曲して牛角状のもの（786～788）のほか，先端が平坦となるもの（792・793）がみられる。把手の調整はほとんどナデであるが，793のみハケメが認められる。いずれも貼り付けによるものであり，体部への差込みタイプではない。内面調整はヘラケズリが施されたもの（785･786･788）もみられる。

把手付甕（第150図794）

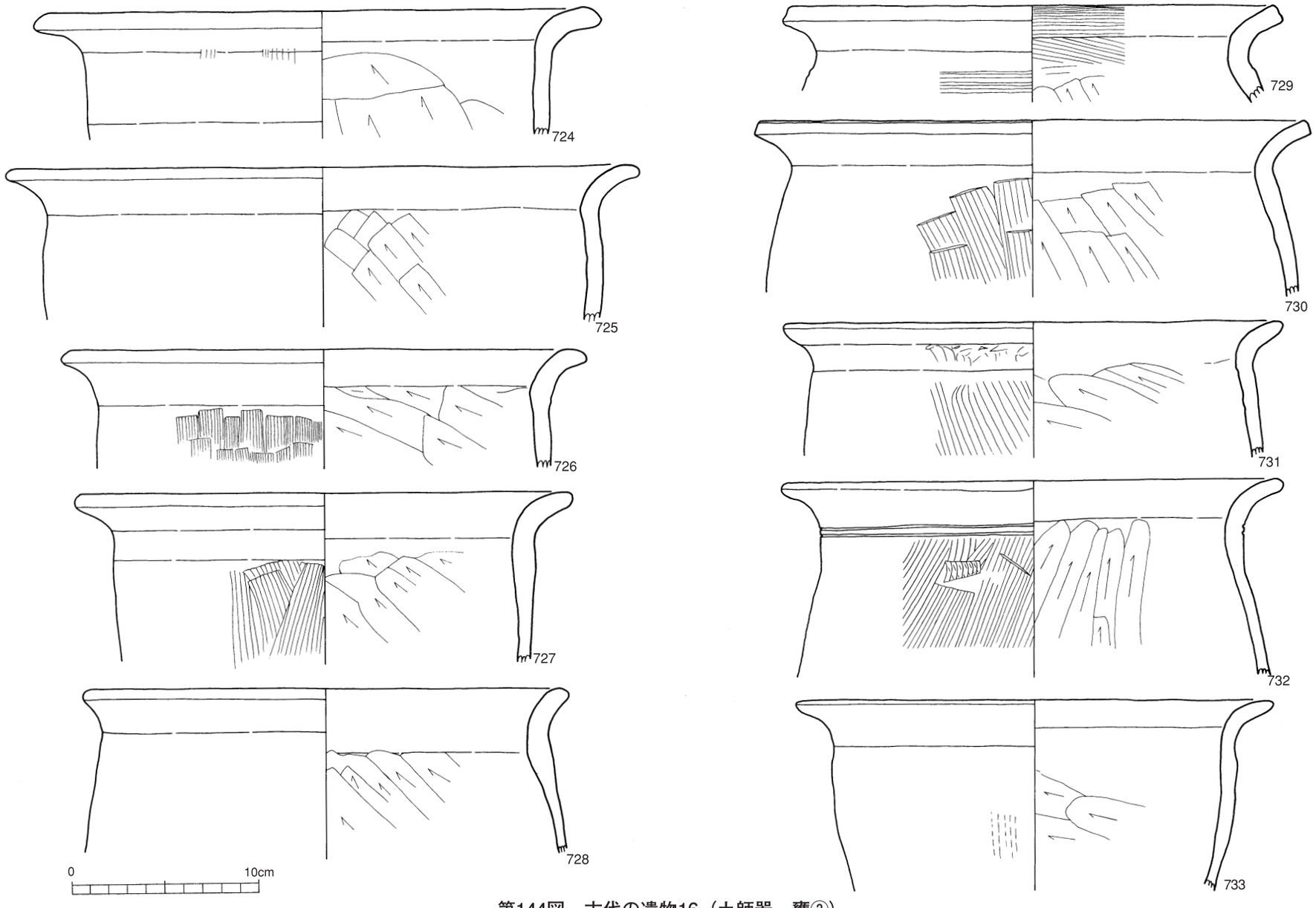
794は小型甕に把手のついたものである。把手は小さく貼り付けている。底部は丸く，把手部分



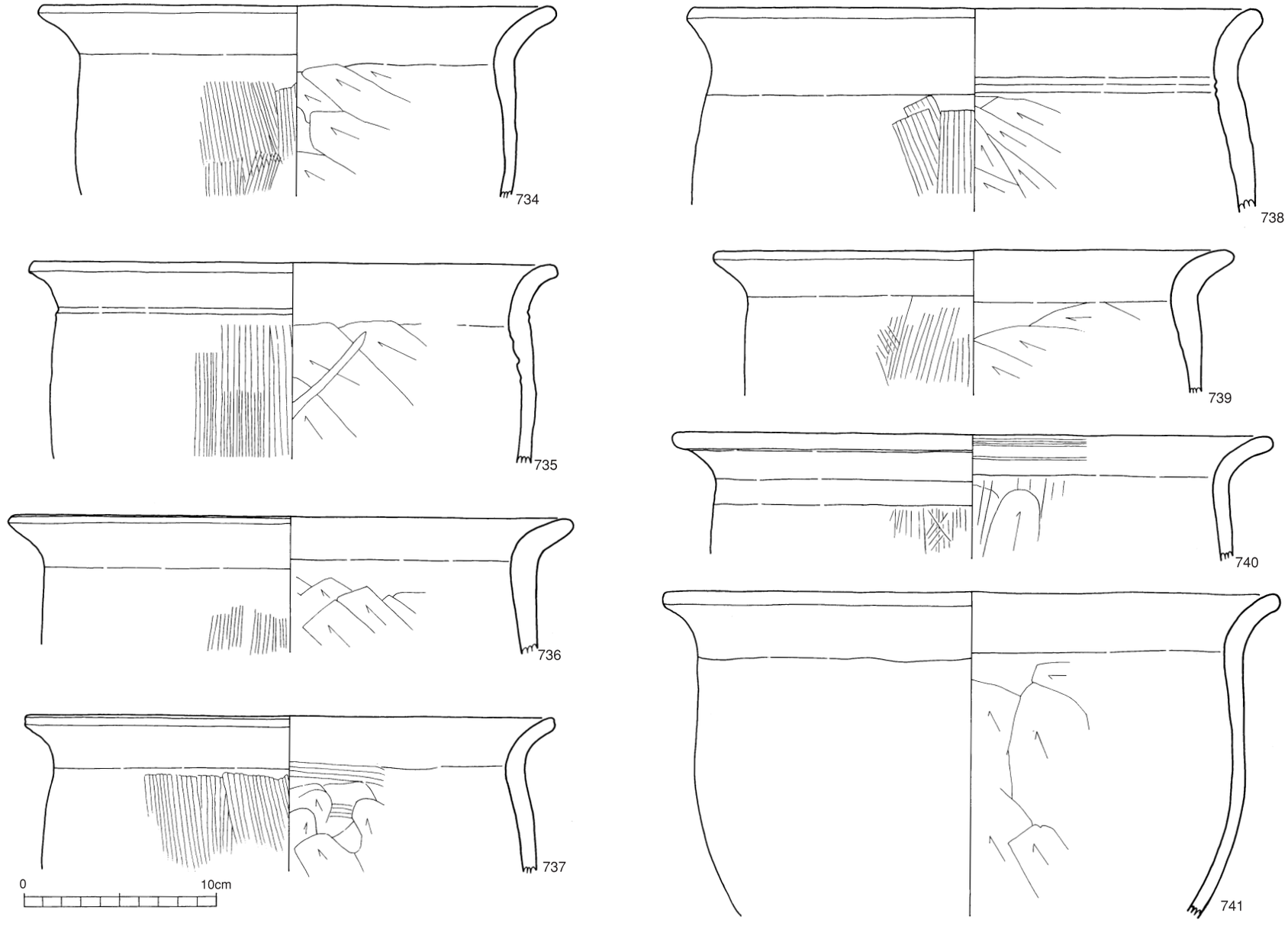
第142図　古代の遺物14（土師器　甕①）



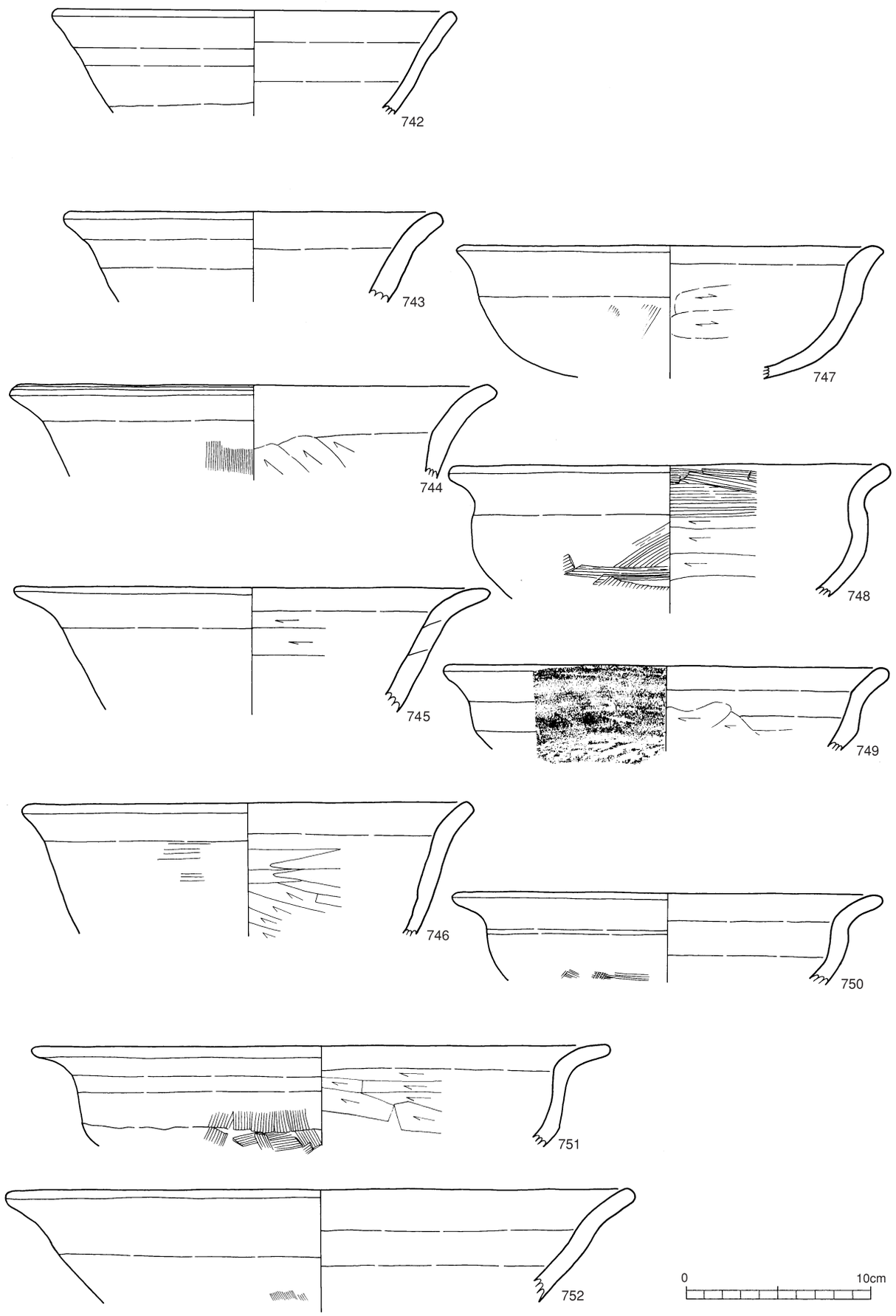
第143図　古代の遺物15（土師器　甕②）



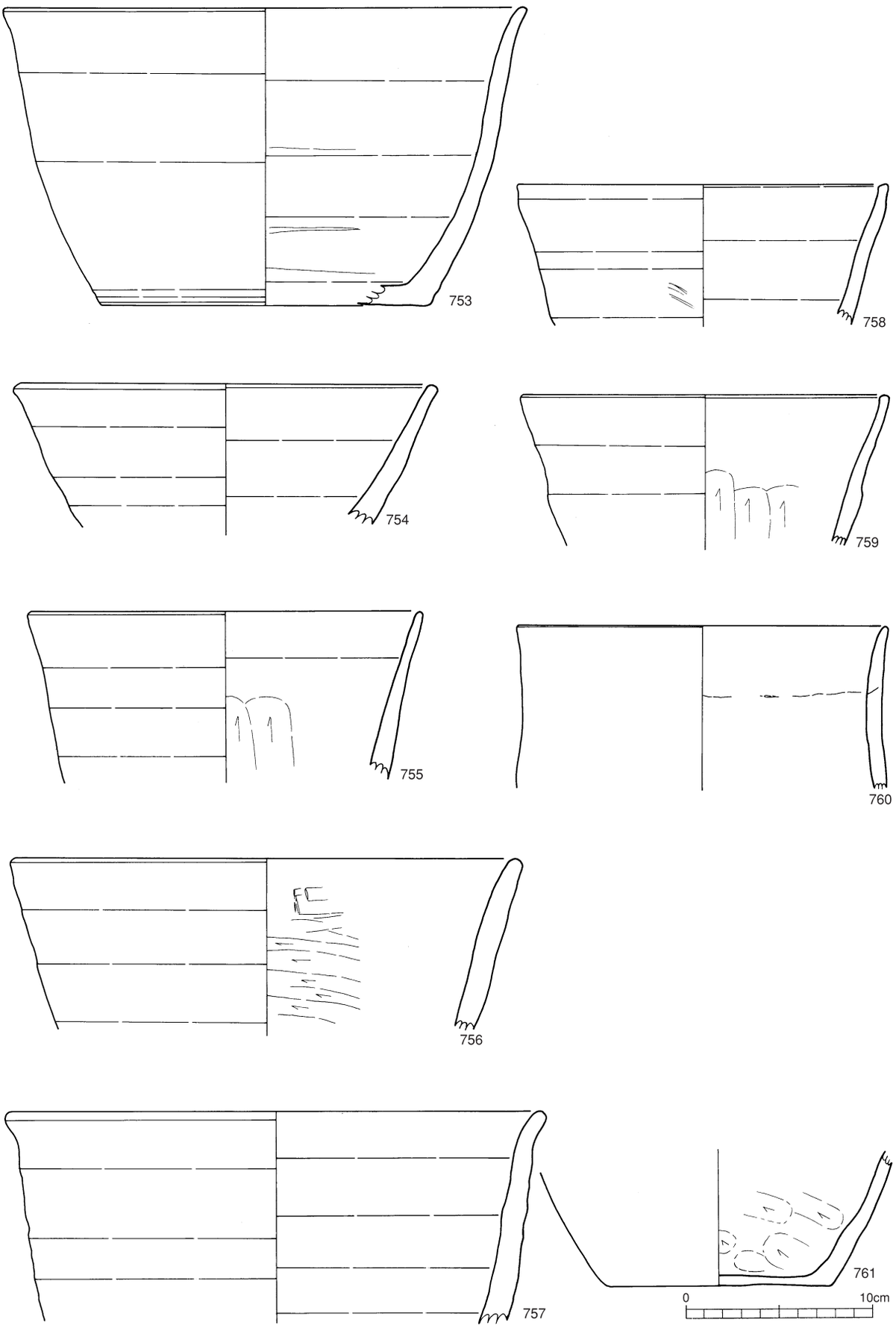
第144図　古代の遺物16（土師器　甕③）



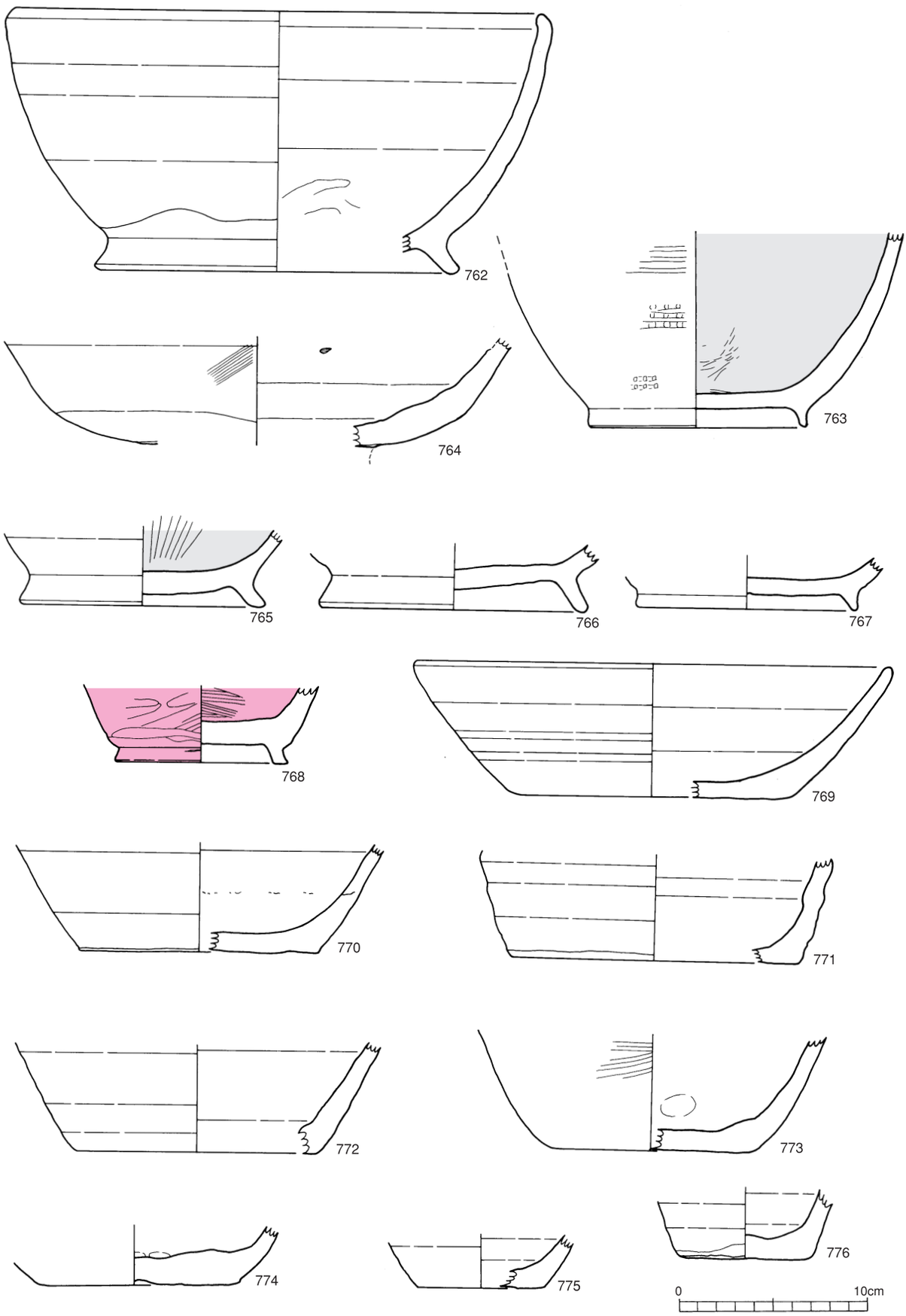
第145図　古代の遺物17（土師器　甕④）



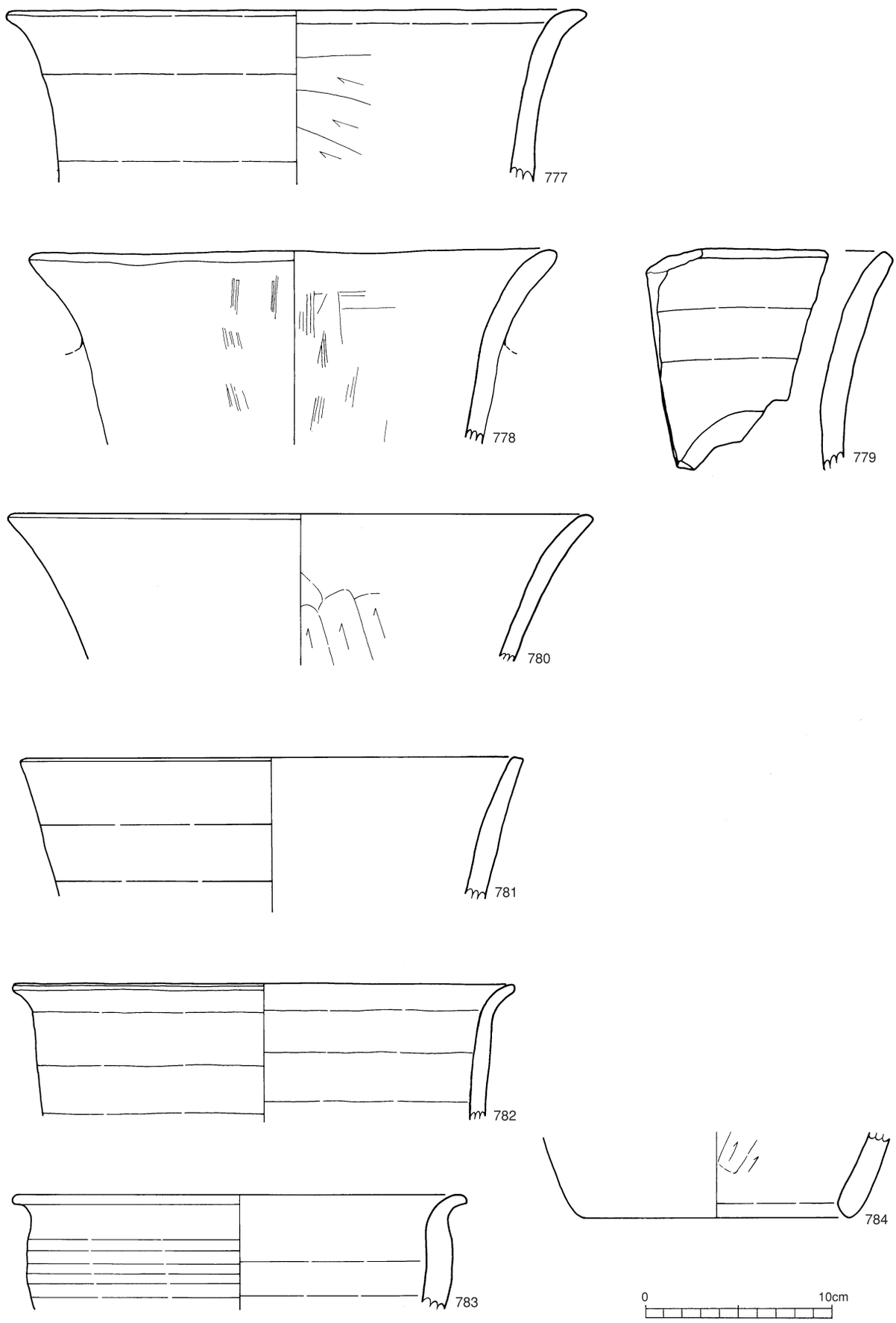
第146図　古代の遺物18（土師器　鍋）



第147図　古代の遺物19（土師器　鉢①）



第148図　古代の遺物20（土師器　鉢②）



第149図　古代の遺物21（土師器　甑）

から口径はしまる。器面調整は外面がナデ，内面はヘラケズリである。

カマド形土器（第151図795～第153図811）

いわゆる移動式カマドと呼ばれるものである。このような破片はパンケース４箱分以上認められており，個体別に考えると11個体以上になると判断される。795は焚口上部に付く庇と考えられるものである。ハケメ調整が施されている。796～802はカマドの焚口の周辺部と思われるもので，焚口の縁に粘土を貼り付け庇としているものや，庇が剥落した痕跡が残るものである。内面にはナデやヘラケズリ調整が施されている。

803は焚口の上部と思われ長い庇が付く。804は土師甕の口縁に類似するが内面にススが付着しておりカマドの掛口と推定され，第89図117の掛口部分と類似する特徴を持つ。外面は縦方向のハケメ調整，内面はヘラケズリが行われている。805は焚口の切り口上部を折り曲げて庇としたものである。

806～811はカマドの側面基部付近と思われるものであり，ナデ調整や部分的なヘラケズリ及びハケメ調整あるいはタタキがみられ，内面はヘラケズリが施されている。端部底面には沈線が残るもの（806・808・809）もみられる。

小型壺（第153図812～817）

812は浅い器高と推定され，内湾する体部で頸部がしまり口縁は短く直行する。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。813も類似する器形と考えられるが，器面調整は磨耗のため明確ではない。814は内湾する体部からそのまま口縁部となるものであり，口縁直下に焼成前に行われた穿孔が２つ施される。器面調整は内外面ともナデ調整である。815～817は小型壺の底部であり，器面調整は815が内外面ともヨコナデ調整，816は底部近くがヘラケズリで肩の付近にはヘラミガキが行われている。817は比較的広い底面であり体部の中間部がわずかにしまる。内外面ともヨコナデ調整である。

その他の土師器（第153図818～823）

818は高坏の脚部であり，胎土・焼成から古代の時期と考えられるものである。

819は壺であり肩がはり頸部は細くしまる。内外面ともナデ調整である。

820は甕形を呈する土器の口縁部であるが，通常の土師甕とは全く異なる。色調は暗紫色から黒褐色を呈し，器面にはたたき痕が残り，内面はヘラケズリが行われている。

821は円板状の底部で体部は内湾気味に開く。器種的には坏の底部に近いと推定される。底部中央には穿孔が１ヶ所施されている。胎土の盛り上がりから穿孔は焼成前である。器面調整は内外面ともナデ調整である。

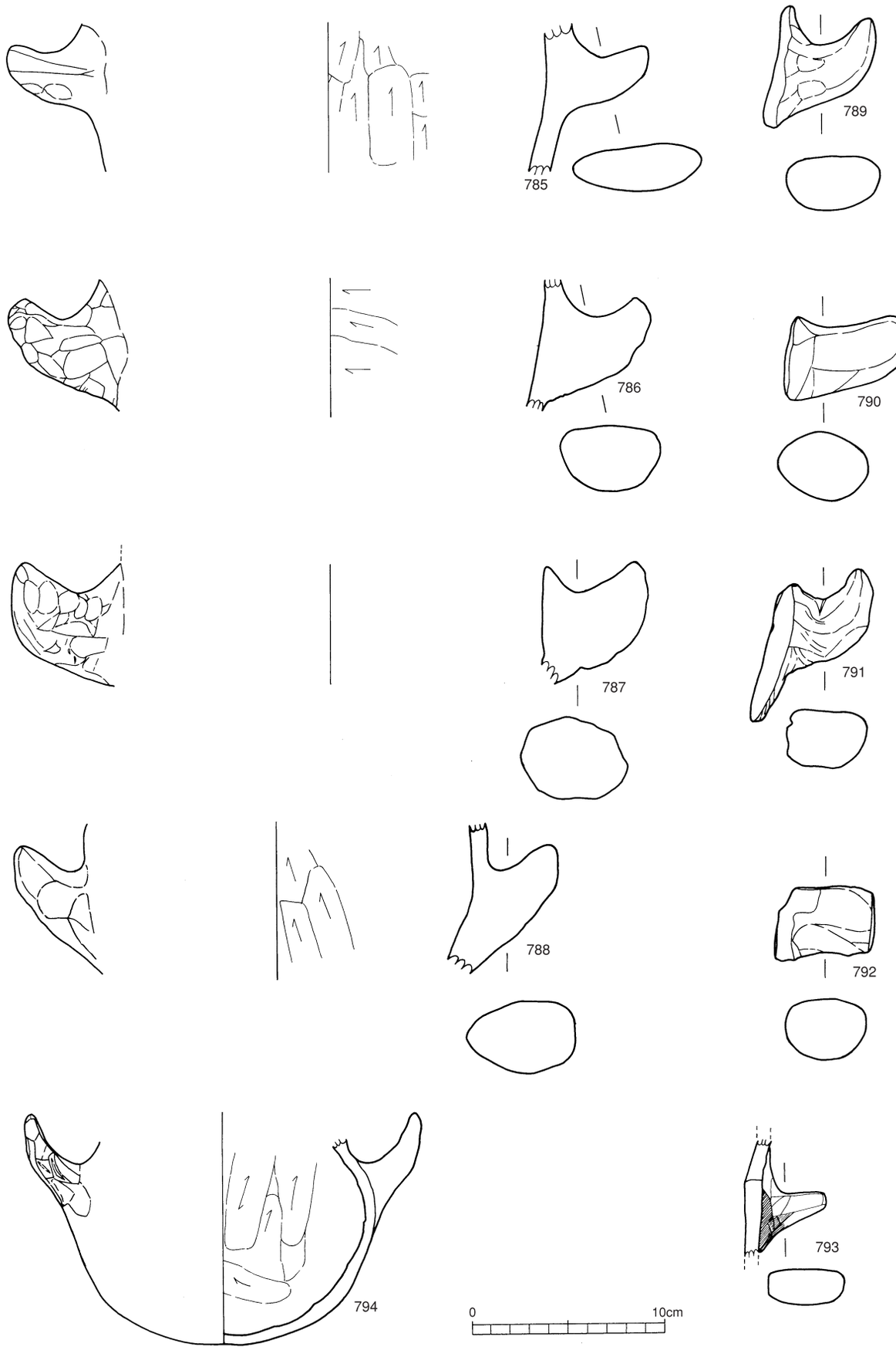
822は坏の底部もしくは蓋の天井部と推定されるものである。底面はヘラケズリが施されており内面はナデ調整である。底部底面には刻書により「×」状の文字ないしは記号が認められる。

823は甕の胴部の可能性があるもので，１ヶ所穿孔が施されているものである。

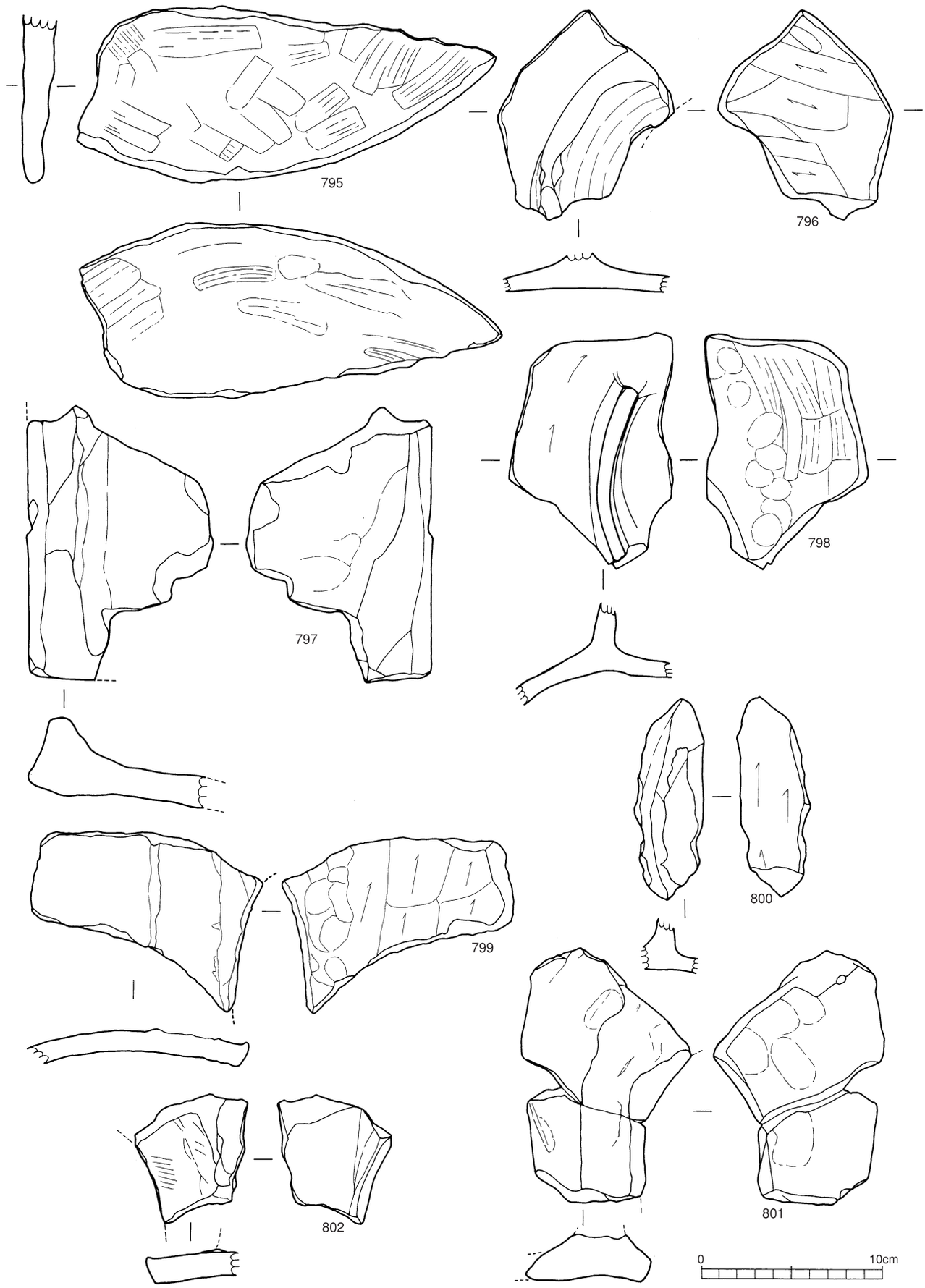
その他の土製品（第153図824～827）

824は円柱形でわずかにカーブをもつものである。ナデ調整である。

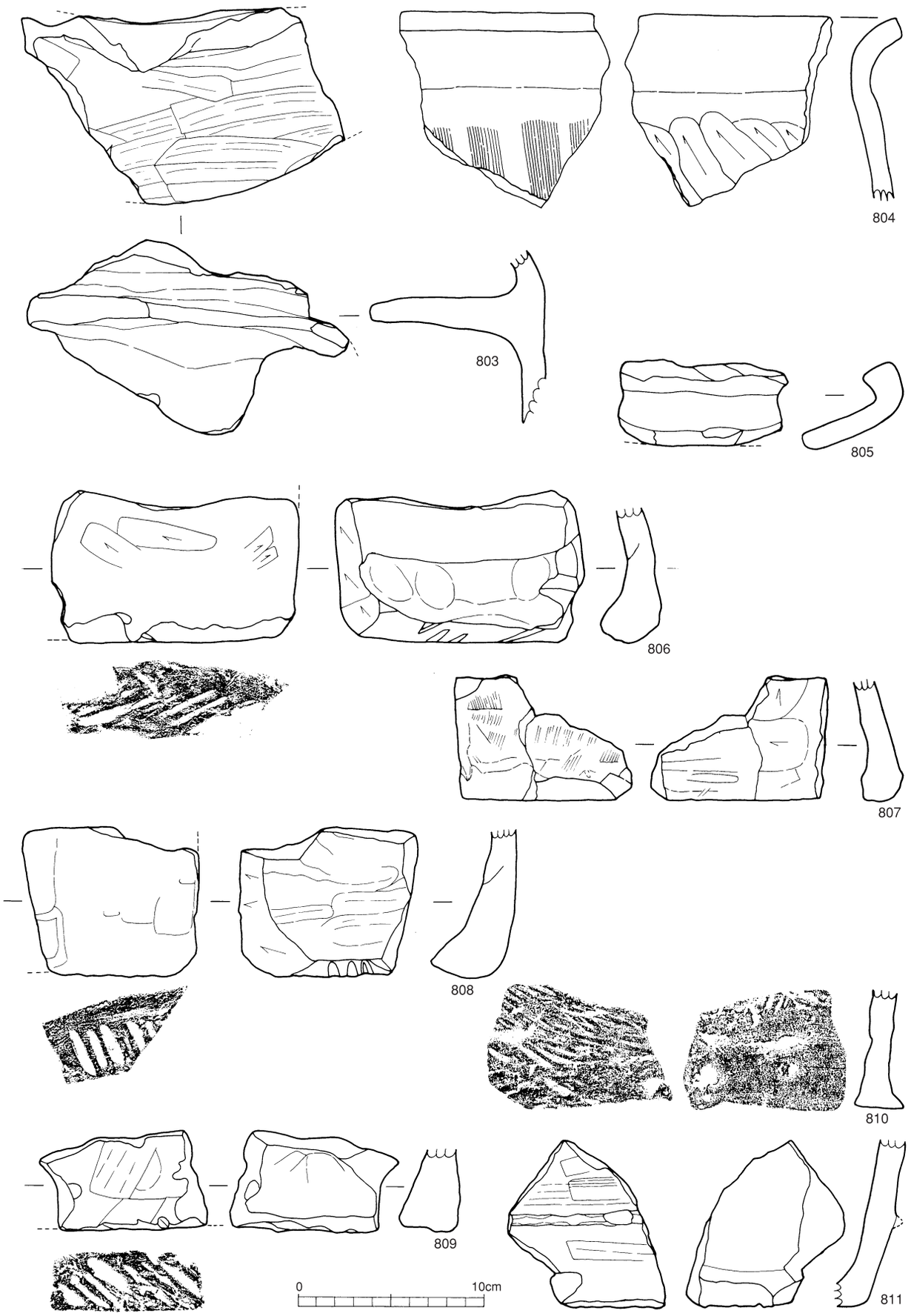
825は甕の破片と推定されるものであり，周縁を打ち欠き円板状に整えている。土製メンコと推定される。胎土及び焼成から古代の時期の甕の転用と考えられる。



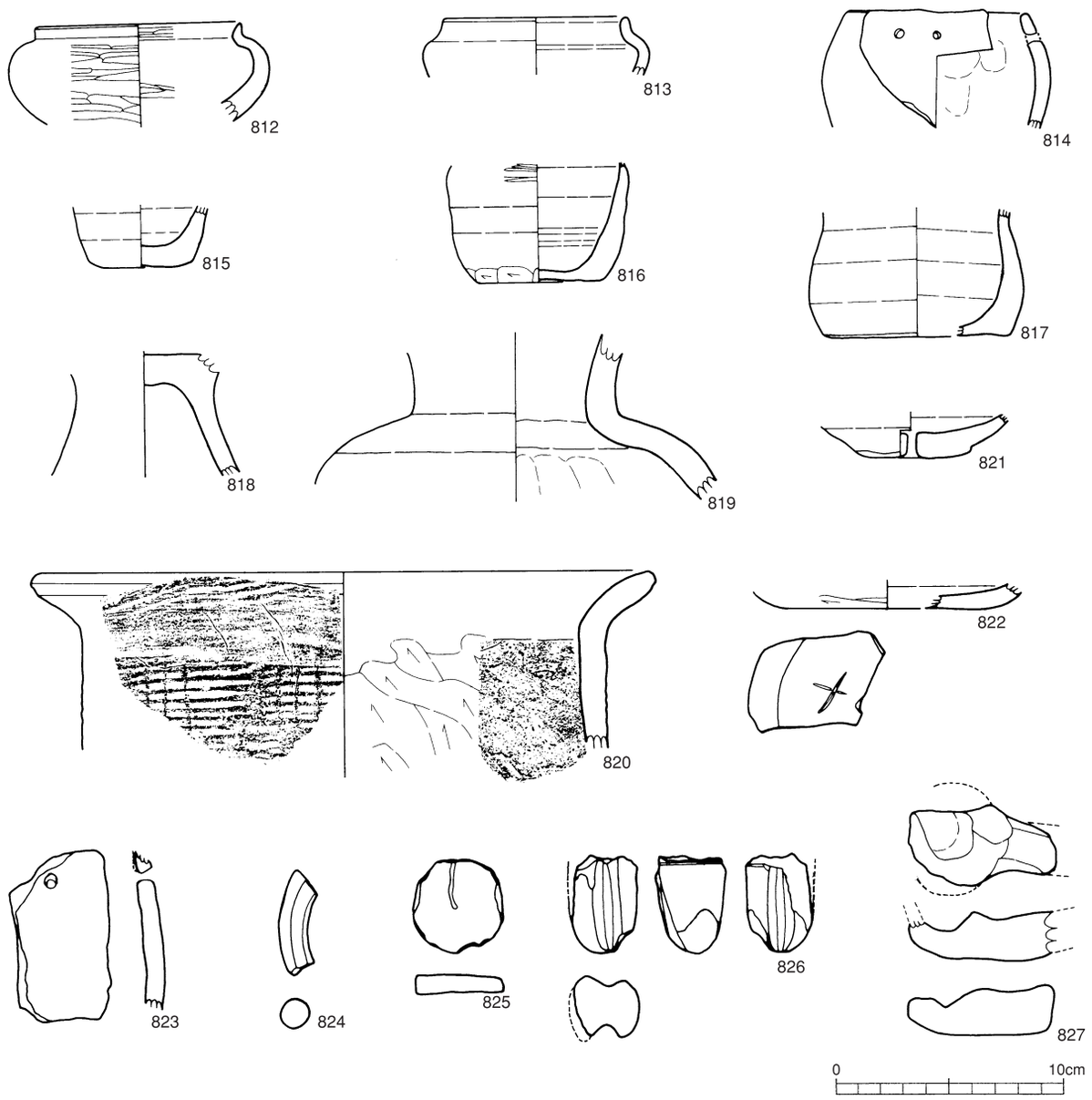
第150図　古代の遺物22（土師器　把手）



第151図　古代の遺物23（カマド形土器①）



第152図　古代の遺物24（カマド形土器②）



第153図　古代の遺物25（その他土器，土製品）

826は半損品であるが，両面に凹線が施され，また折れた中央部付近には凹線と直行する細い凹線がみられる。これはエ字形土錘（有溝土錘）と呼ばれるものに類似しており，中世以降に普及率が高くなるとされている。

827は土製スプーンである。基部を欠損する。

２．須恵器

遺物包含層から出土した須恵器には，坏・蓋・皿・甕・鉢・壺・硯など多種の器種がみられ，また転用硯も多量に出土し，須恵器全体の出土量もかなり多かった。しかし整理期間等の都合により一部の実測・掲載に限らざるを得なかった。

坏（第154図828～853）

坏は高台がついた高台付坏と，高台がつかないものに大きく二分できる。828～844は高台付坏であり，口径，器高，高台径などの法量と高台や体部などの形態により数タイプに分類されるが，口縁部まで判明するものは少なく，大まかな分け方で述べる。

828は口径及び底径も大きく，底部からの立ち上がりは丸味をもち，口縁部は直線的に開き，口縁端部でわずかに外反する。829はこれも口径はかなり大きいと思われるもので高台が底面の内側に短く付き，底部からの立ち上がりは丸味をもつ。830・831は体部が直線的に立ち上がる。832は体部が内湾気味に立ち上がり，高台は下方に曲がり接地部は尖る。色調は大部分が青灰色であるが832のみ暗紫色である。837～839の高台は平坦な底部のやや内側に付き，高台は断面四角形で著しく低い。841～844は底部高台径が小さく，体部下半は丸味をもつ。

845～853は高台のない坏である。845～847は体部下半が内湾気味に立ち上がりやや丸味をもち，口縁端部はわずかに外反する。これらの底部底面は回転ヘラケズリが施されている。848～850は回転ヘラ切りによる切り離し底部をもち，体部は直線的に開くものである。850の内面見込みには「乙」と読めるヘラ描き刻書が施されている。これは焼成前に刻まれたものである。

852は体部下半が内湾して立ち上がるもので，色調は黄褐色を呈する赤焼きの須恵器である。

埦（854～857）

854～856は体部が長く，口径に比較して底径が小さくなり埦と判断される。857も高台端部を丸くおさめる高台径の小さい埦である。854・856は火襷文様がみられる。

蓋（第155図858～869）

蓋も数形態に分けられる。

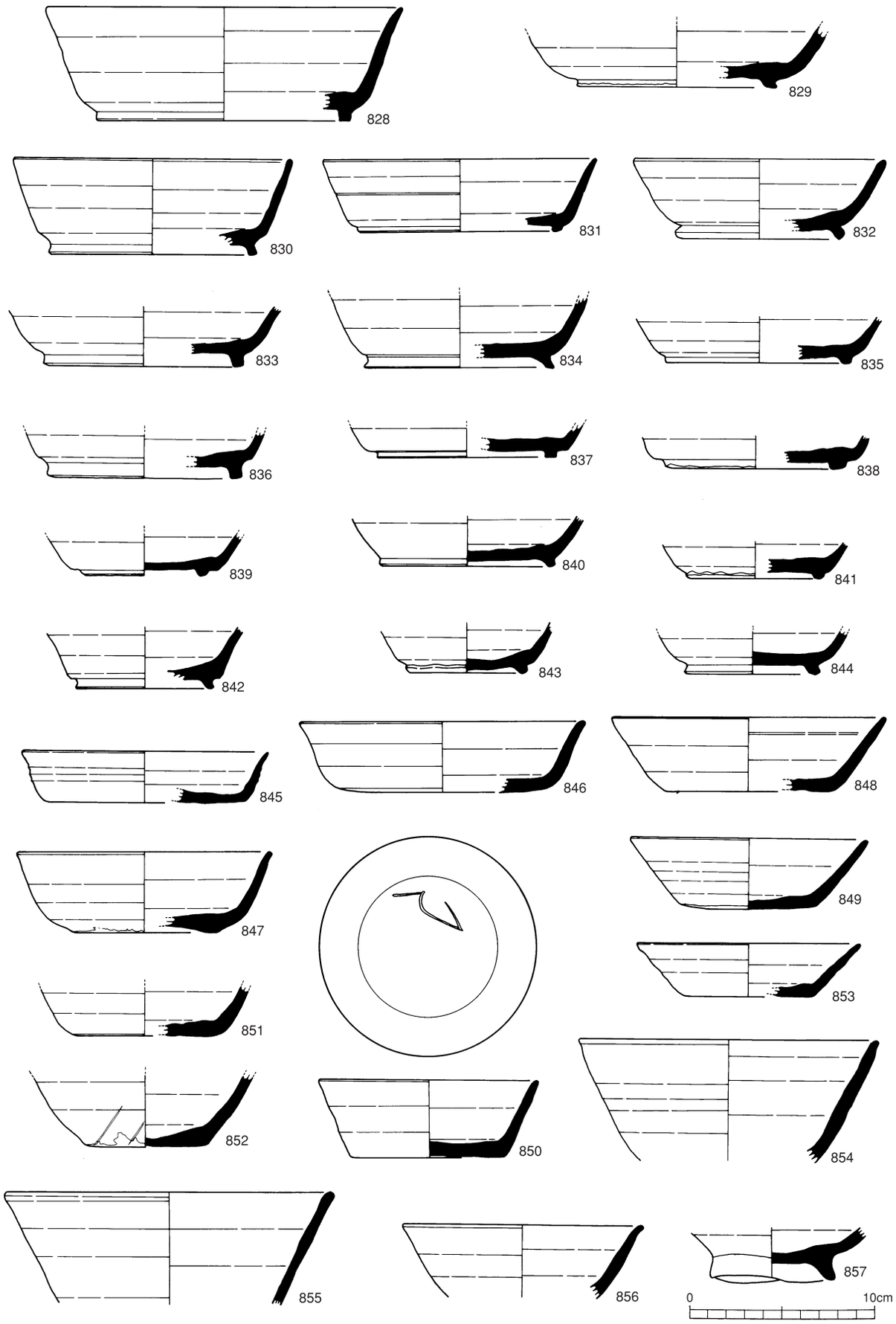
858～860は端部近くの内面に小さなかえりがつくものである。かえりは断面三角形で内側はシャープである。858・859は天井部端部を丸くおさめ，860は端部が細くなる。

861～864は天井部端部を下方に折り曲げたもので，端部外面にはシャープな稜をもつ。口径が17㎝を越すもの（861・862）と比較的小さなもの（863・864）に分けられる。いずれも天井部は回転ヘラケズリ調整が行われている。またつまみは輪状のものをつけるもの（861・863）と，欠損しているものの擬宝珠様のつまみをもつもの（862）がある。

865は端部を折り返さず，わずかに丸く仕上げている。天井部はナデ調整が施されている。

866～868は端部を大きく屈曲させるもので，壺の蓋の可能性が考えられる。866の天井部には淡緑色の自然釉がかかる。口径が大きい867には輪状のつまみが剥落した痕が残る。また口径が小さい868は擬宝珠様のつまみがつくと思われる。

869は口径11㎝と小さいものであり，端部は下方に屈曲させている。天井部はやや丸味をもち，回転ヘラケズリ調整が施されている。また天井部には焼成前のヘラ描きによる波状文が描かれている。



第154図　古代の遺物26（須恵器　坏）

皿（第155図870～876）

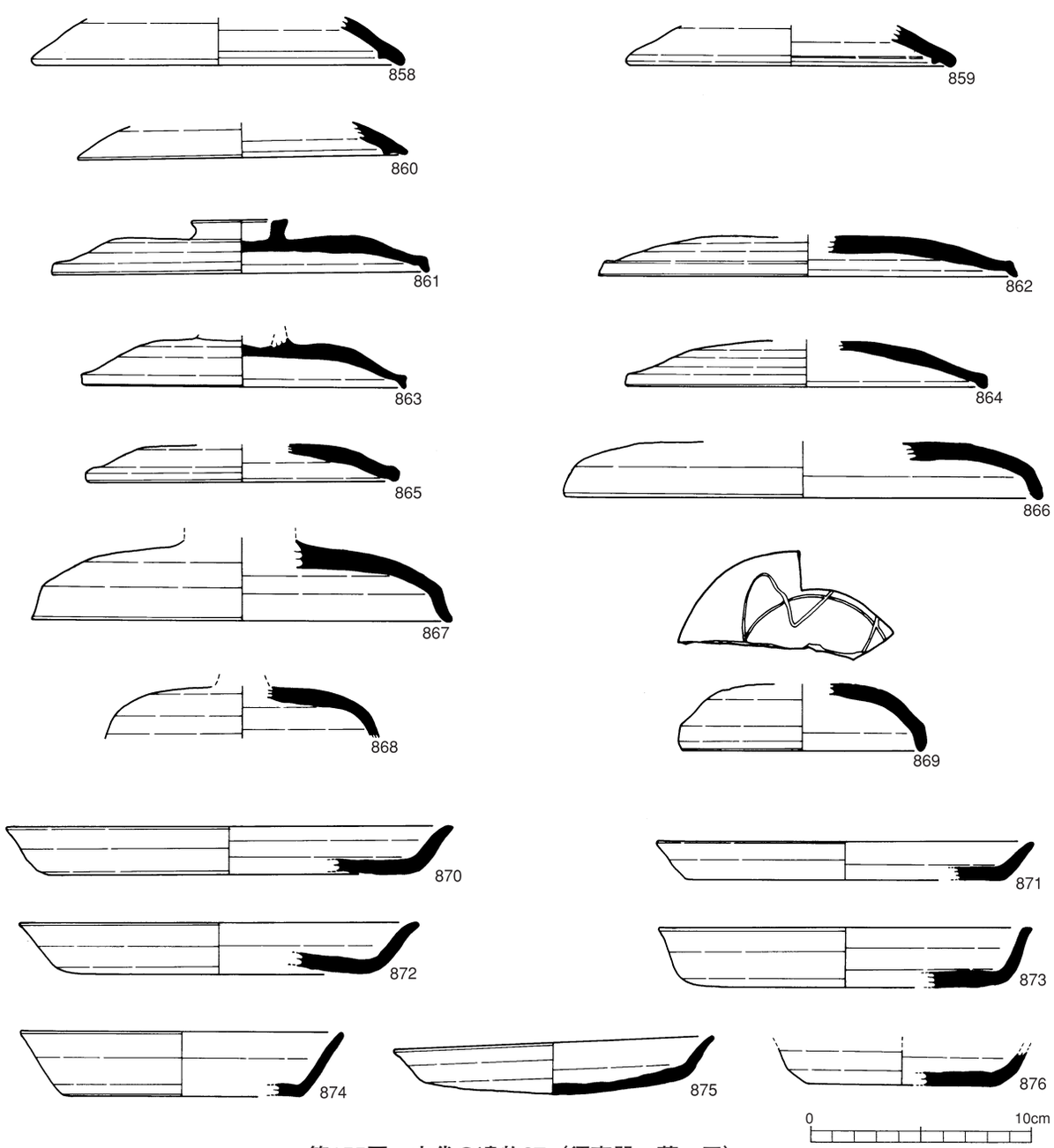
いずれも平坦な底部で口縁部は短く器高が浅いものである。870・871は口径が比較的大きいものであり，口縁部は短く立ち上がり端部はわずかに外反する。底面から口縁の立ち上がりはナデ調整により丸味をもつ。

872・874は口縁部が直線的に開くものである。873は口縁が直口に近い角度で立ち上がり，端部は平坦面となる。底部底面は回転ヘラケズリが施されている。

875はややふくらむ底部から口縁は短く外反して開く。底部は回転ヘラ切りによる切り離し後ナデられ，立ち上がり部分まで丸くナデ調整が行われている。

甕（第156図877～第157図888）

須恵器甕の破片は多量に出土した。ここで図化した甕の口縁部はほんの一部にも満たない。整理



第155図　古代の遺物27（須恵器　蓋，皿）

期間及びページの都合で胴部片は全て割愛せざるを得なかった。

877は口縁部から底部まで接合し全体の器形がわかるものである。口径は17.2cmと小さく，胴部最大径は約38cmで，器高は41.8cmを測る。胴部は球状を呈し，下半部がわずかに締まる。口縁部は短く外反する。器面は平行文タタキ，内面は下半に平行文当て具痕，上半が同心円当て具痕がみられる。口縁部内外面はナデ調整が行われている。

878～881も同様の器形と思われるものである。いずれも頸部は締まり，口縁部は短く外反している。879は灰白色を呈しており，880は赤褐色を呈する赤焼きの酸化炎焼成である。

882～886も頸部が小さく，口縁部は短く外反する甕の口縁部である。いずれも器面には格子目タタキや平行文タタキがみられ，内面には同心円当て具がみられる。このうち，884と886は灰白色を呈するもので焼成が甘い。

887・888は大型の口縁部で櫛描波状文を施されたものである。888は外反する口縁部が端部近くで屈曲し，二重口縁状となる。

鉢（889・890）

889は大きく開く口縁部で鉢と思われる。内外面ともヨコナデである。

890は口径22.8cm，器高11.2cmを測る鉢で，体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。器面はヨコナデ，内面は粘土の接合部が観察されるものの丁寧なナデ調整が施されている。黄白灰色を呈し，焼成は軟質でわずかに甘い。

壺（第158～159図）

891～897は壺の口縁部あるいは頸部である。891は短く外反する口縁部であり，892は頸部で直行し口縁は途中から開く。893～895は口縁部がくの字状に屈曲し二重口縁となるものである。896・897も同様の二重口縁と思われる。

898・899は頸部が直行し長く伸びるものであり，長頸壺であろう。器面はヨコナデである。

900は肩に粘土を縦方向に短く貼り付け耳をつけたもので，四耳壺である。胴部器面には平行文タタキがみられ，内面には粘土の接合部とその上に指頭痕やナデがみられる。

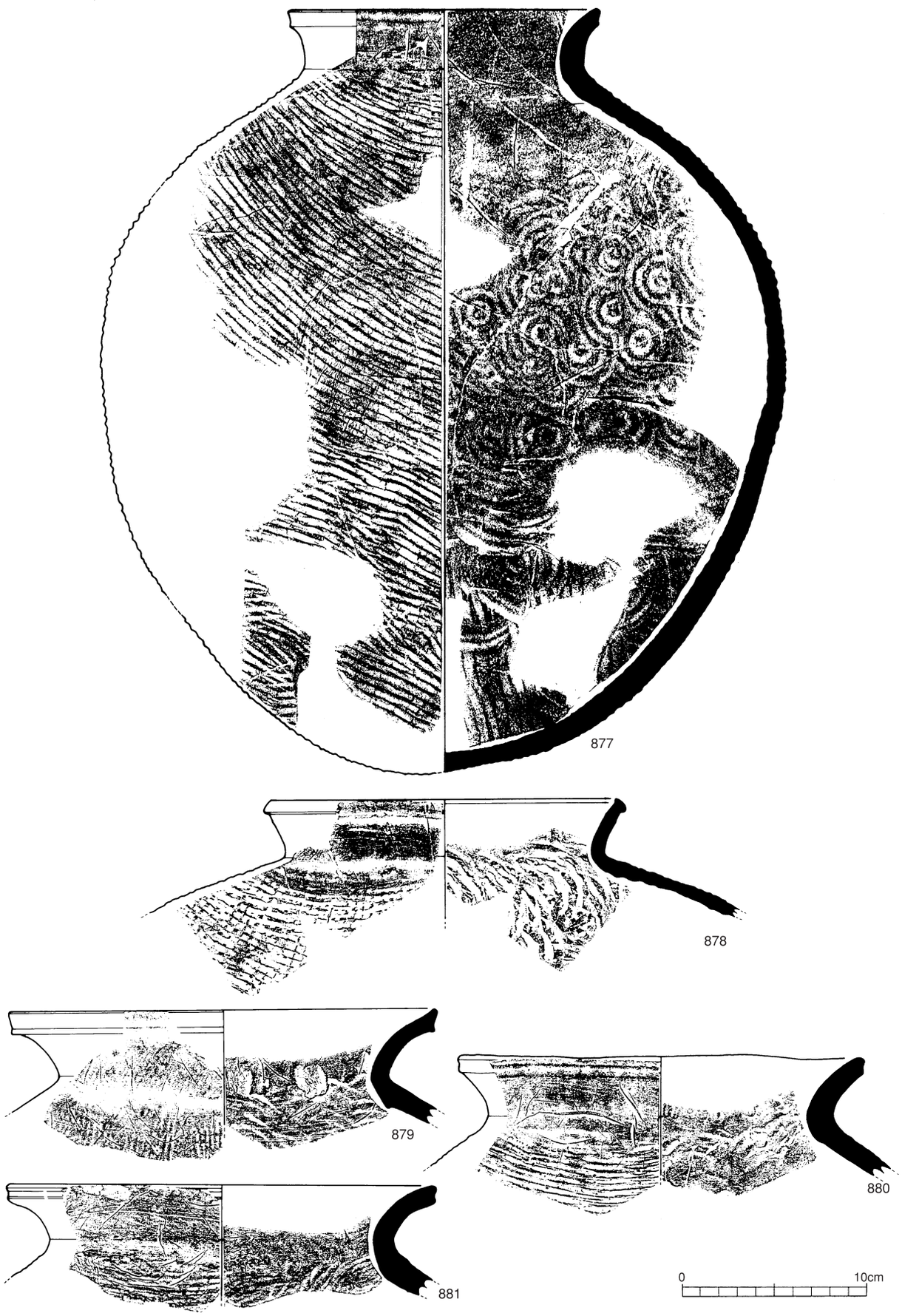
901は小型壺であり，平坦な底部付近に最大径があり胴部は直行する。頸部も小さく口縁は外反するようである。器面には平行文タタキがみられる。902はK9～10の土坑1から出土したもので頸部が小さく締まるもので破損した部分は磨られている。格子目タタキが施される。

903～905は壺の底部であり，903の胴部は直線的に立ち上がる。904・905は胴部が内湾気味に立ち上がるもので，底部底面には同心円タタキがみられる。906～911も壺の底部であり，器面には格子目や平行文タタキがみられ，内面には粘土接合痕と指頭痕やナデがみられる。

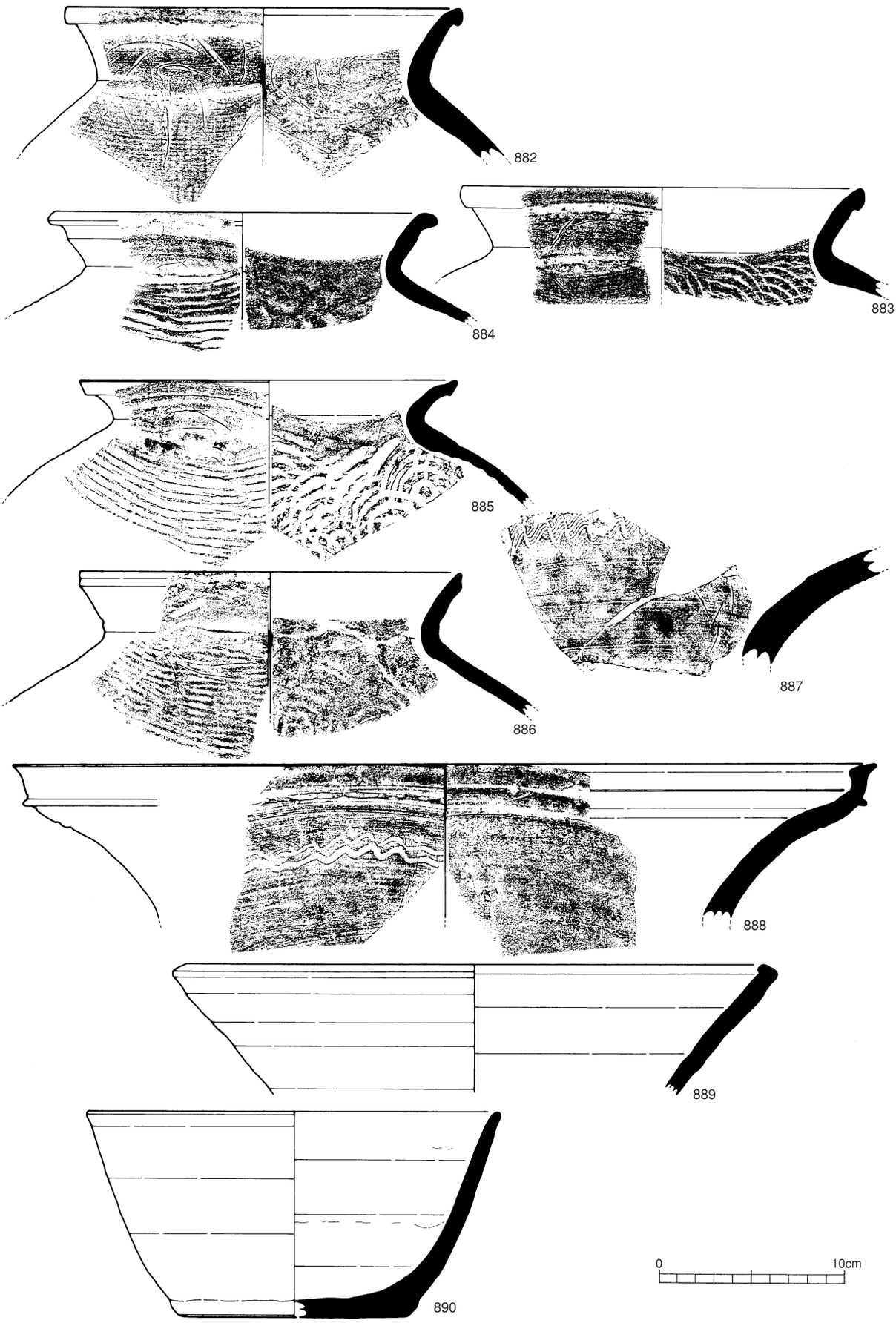
912・913は比較的小型の壺底部であり，912は内面に粘土接合面がみられ輪積み整形であるが，913は回転台整形で底面には短い直線のヘラ記号がみられる。

914は胴部がくの字状に屈曲して内湾するものであり，胴部下半はヘラケズリが行われる。914は白灰色を呈し生焼けで焼成が甘い。915は長頸壺の頸部である。916は胴部が屈曲する長頸壺の胴部下半である。

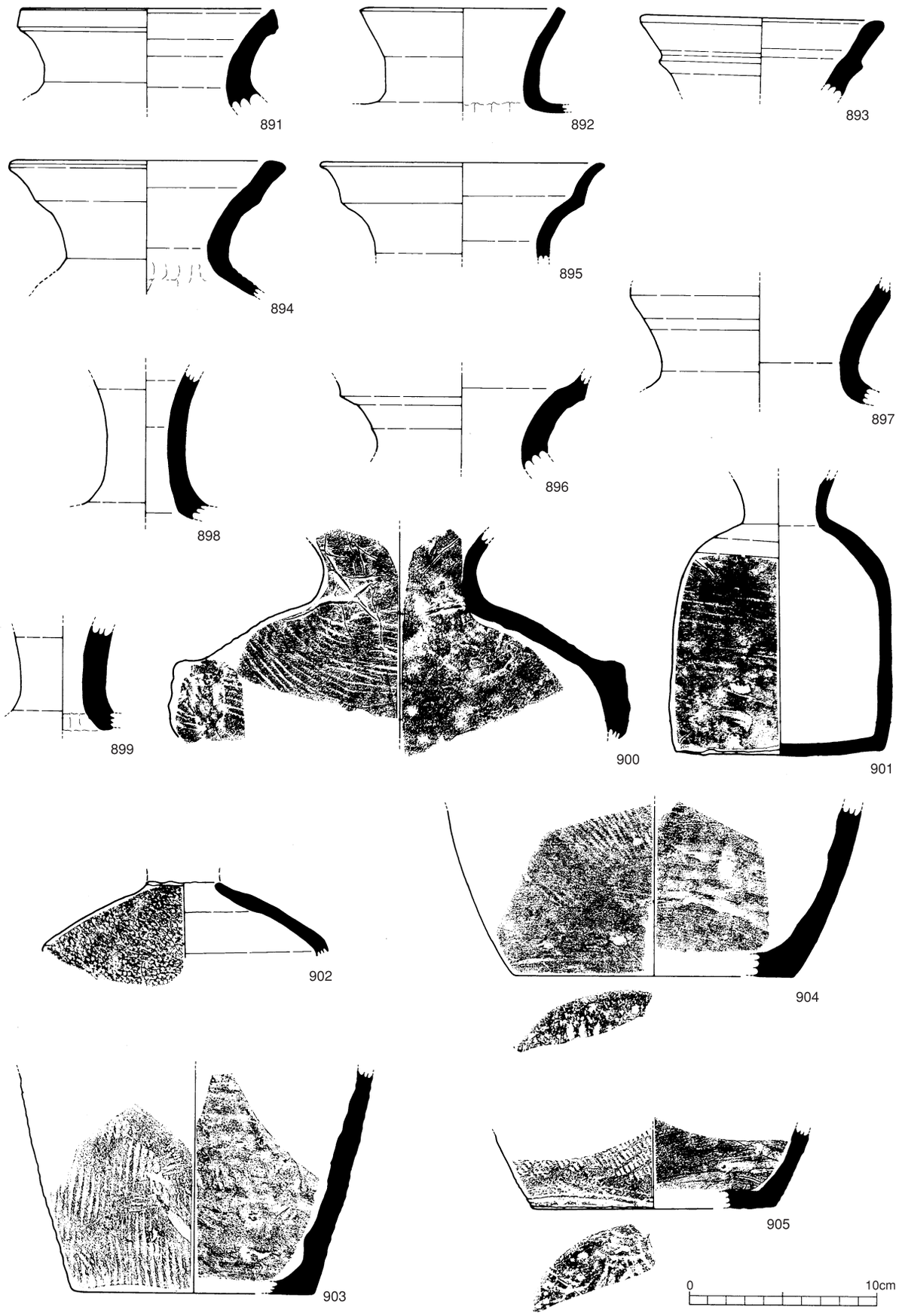
917～920は輪高台を有する壺の底部である。917・918の胴部は内湾して立ち上がるもので，917の器面は，底部近くが横方向，上位は縦方向のヘラケズリが施されている。内面はヨコナデであ



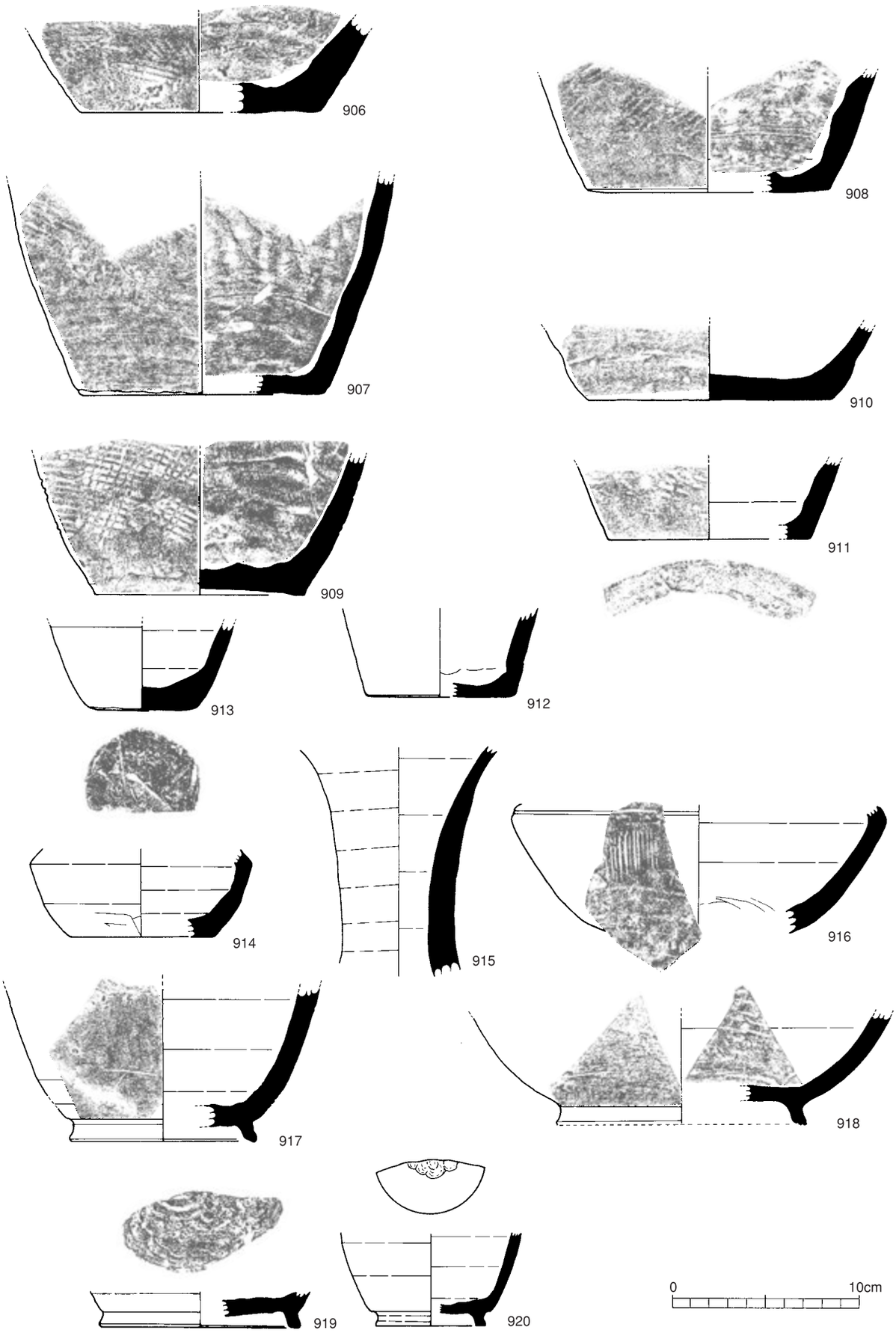
第156図　古代の遺物28（須恵器　甕①）



第157図　古代の遺物29（須恵器　甕②，鉢）



第158図　古代の遺物30（須恵器　壺①）



第159図　古代の遺物31（須恵器　壺②）

る。918の器面も横方向のヘラケズリが施されており，内面には同心円当て具痕とその上にナデ消した痕が残る。いずれも高台はハの字状に広がる。

919は底部内面に同心円当て具痕がみられる。

920は比較的小型のもので，胴部は内湾気味に立ち上がる。器面は回転ヘラケズリ整形が行われており，内面はヨコナデである。底部内面には径１㎝程度の棒状の工具で突いたような痕が残る。

水差し（第160図921～924）

かなり小型の壺であり，921～923は口縁部のみであり全体の形状は不明に近い。921は直立する短い口縁のみで図の下には胴部がつく。922は破損した口縁部を小さく打ち欠き整えている。923は二重口縁である。924は底径４㎝で口縁部を欠損するが胴部はくの字状に屈曲して頸部は締まるものである。

小型丸底壺（925・926）

925は無頸壺であり，胴部上半は内湾して口縁端部を丸くおさめる。926は極めて短い口縁部が立つ。926の下半は回転ヘラケズリ調整が施されている。

高坏（927～929）

927は胴部が低く，裾が広がり端部を下方に曲げている。割れ口には坏部との接合が凸状にみられ，脚部と坏部を別々につくり接合したことがわかる。928は低く脚部は短く開く。929は脚部と坏部の接合である。

鉄鉢（930・931）

930はくの字になる体部上位が，そのまま口縁となるものである。内外面ともヨコナデである。931は口縁は直行しており内傾しないが鉄鉢と思われる。

瑯（932）

932は極めて小さな破片であるが，球形になると思われる体部上位に穿孔が施されたものであり瑯と思われる。器面調整はナデである。

横瓶？（933）

933は回転整形と推定されるヨコナデが認められる部分に粘土を貼り付けており，これが底面にはならず側面に位置すると思われ，横瓶の可能性が考えられる。

硯（第161図～第163図）

出土した硯のなかには県内でも珍しい風字硯がみられたが，多量に出土したものは坏・皿・蓋・甕の破片を転用した転用硯であった。

風字二面硯（934）

平面は「風」の字に似ていることより風字硯と呼ばれるものである。頭部が円弧状を呈しておりまた硯面は縦方向の提があり二分されているため，縦提二面円頭風字硯とも呼ばれる。硯尻の裏面には２個の短い脚がつき，硯面は傾斜する。復元長は約19㎝，幅約17㎝となる。側面外はヘラケズリが施され中間には横方向に稜が形成されている。また頭部から硯尻に到る端部もヘラケズリが施されておりシャープなコの字状となる。側面内側から硯面と提部分はナデ調整が行われており，硯面は使用のため光沢をもつ。

獣脚硯（935）

獣脚部分のみの出土である。正面は立体的に丸味をもち，両側面及び背面は平坦である。背面はヘラケズリにより角があるが，正面はナデ調整が行われている。正面の膝下には横位の細い沈線が２条みられ，爪先は丸味をもち，先端には縦に短い切り込みが３条施され，足指が表現されている。全体に淡緑色の自然釉がかかる。獣脚硯の脚部と判断したが，硯部はなく，獣脚付皿の可能性も考えられる。

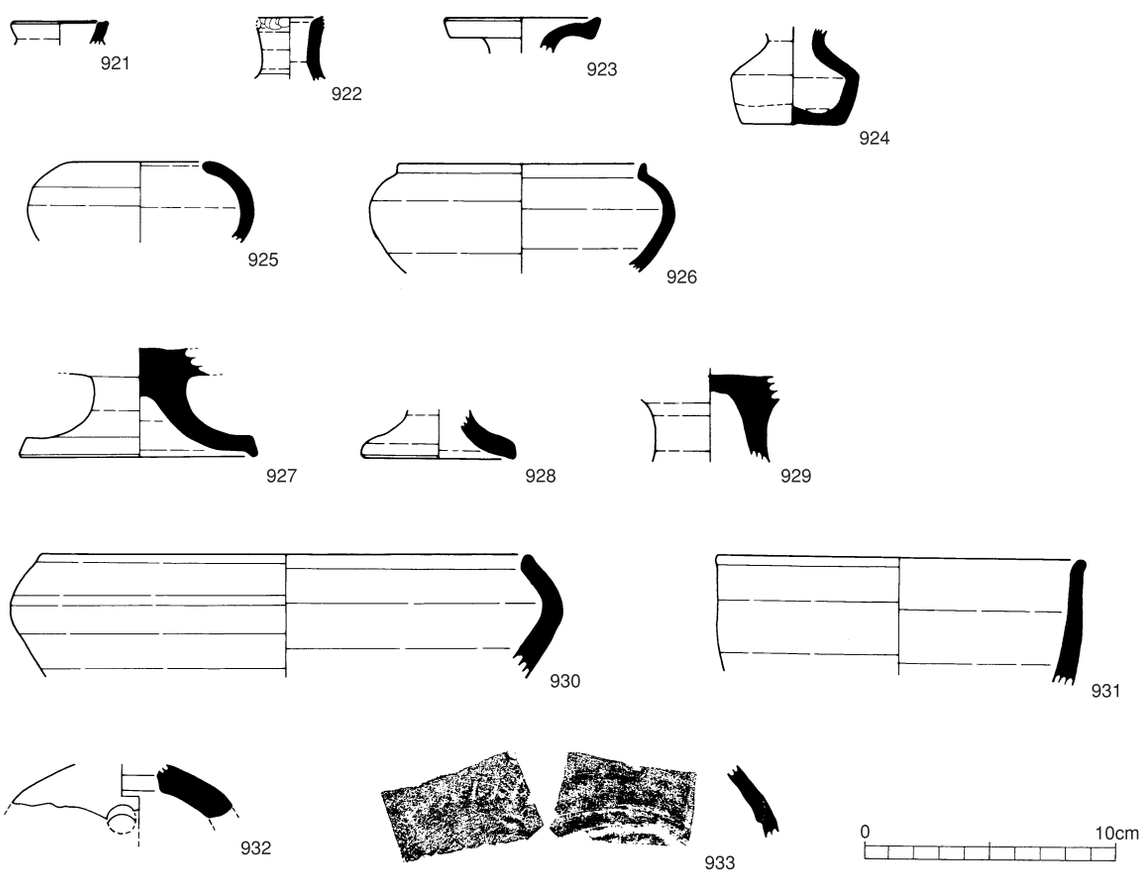
転用硯（第161図　936～第163図　967）

蓋・坏・皿の内面や・壺・甕の破片を利用した転用硯は多く出土しており，遺物包含層出土のもので合計74点みられた。そのうち32点を図化した。（第38，39表）

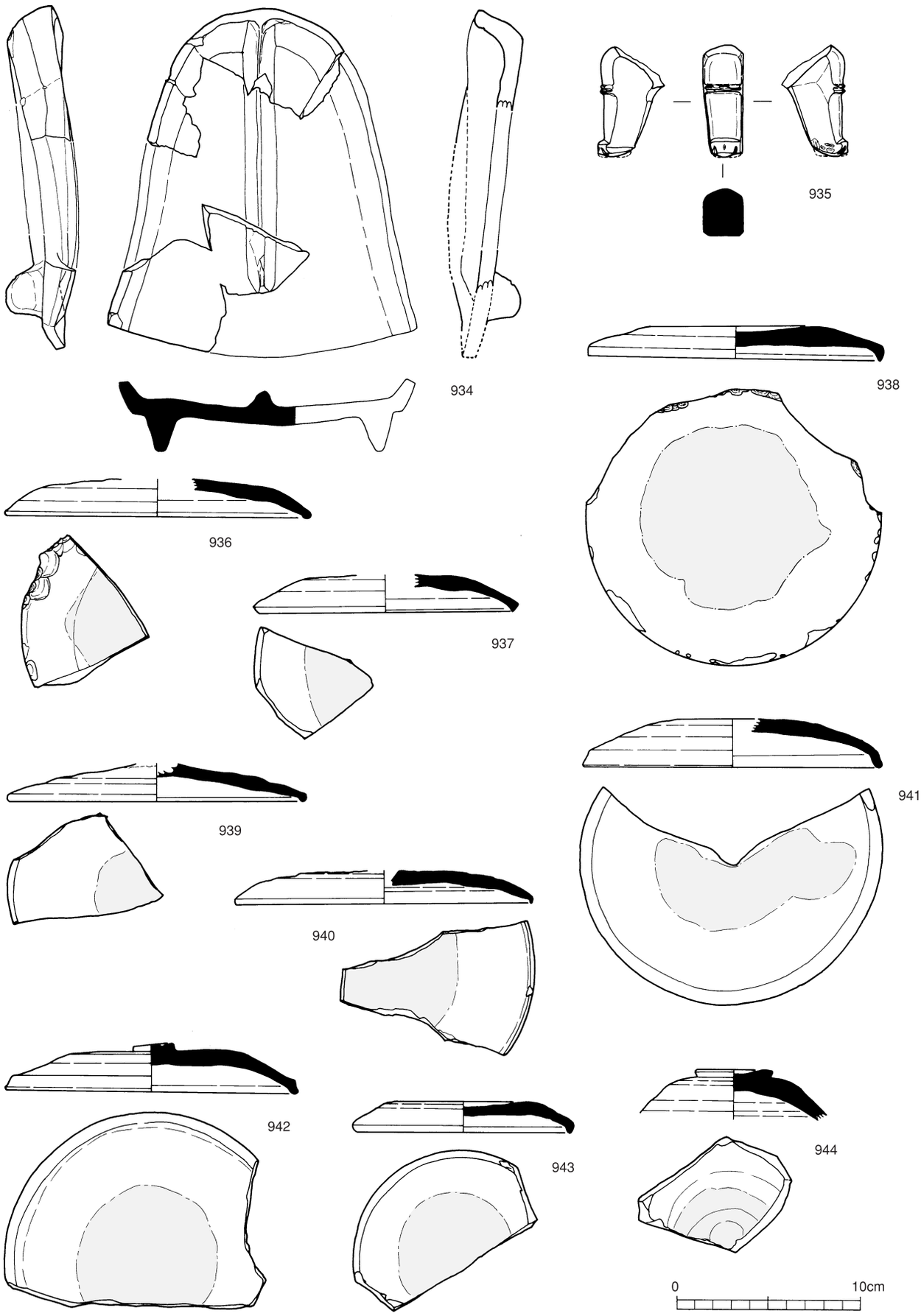
936～944は蓋の転用硯であり，計29点出土した。つまみがないもの（938など）や，つまみをもつもの（942など）がみられるが，いずれも使用面は光沢をもつ。

945～959は8世紀代の高台付坏や皿，そして壺の底部（959）を利用したものであり，計20点みられた。このうち945・946・947・952・959は体部に小さく打ち欠き整形した痕跡がみられる。952は口縁部が一部残り，ほぼ全体が残る底面だけわずかに残し，全体を丁寧に打ち欠き整形している。957は完形品であり，底部内面が磨られている。

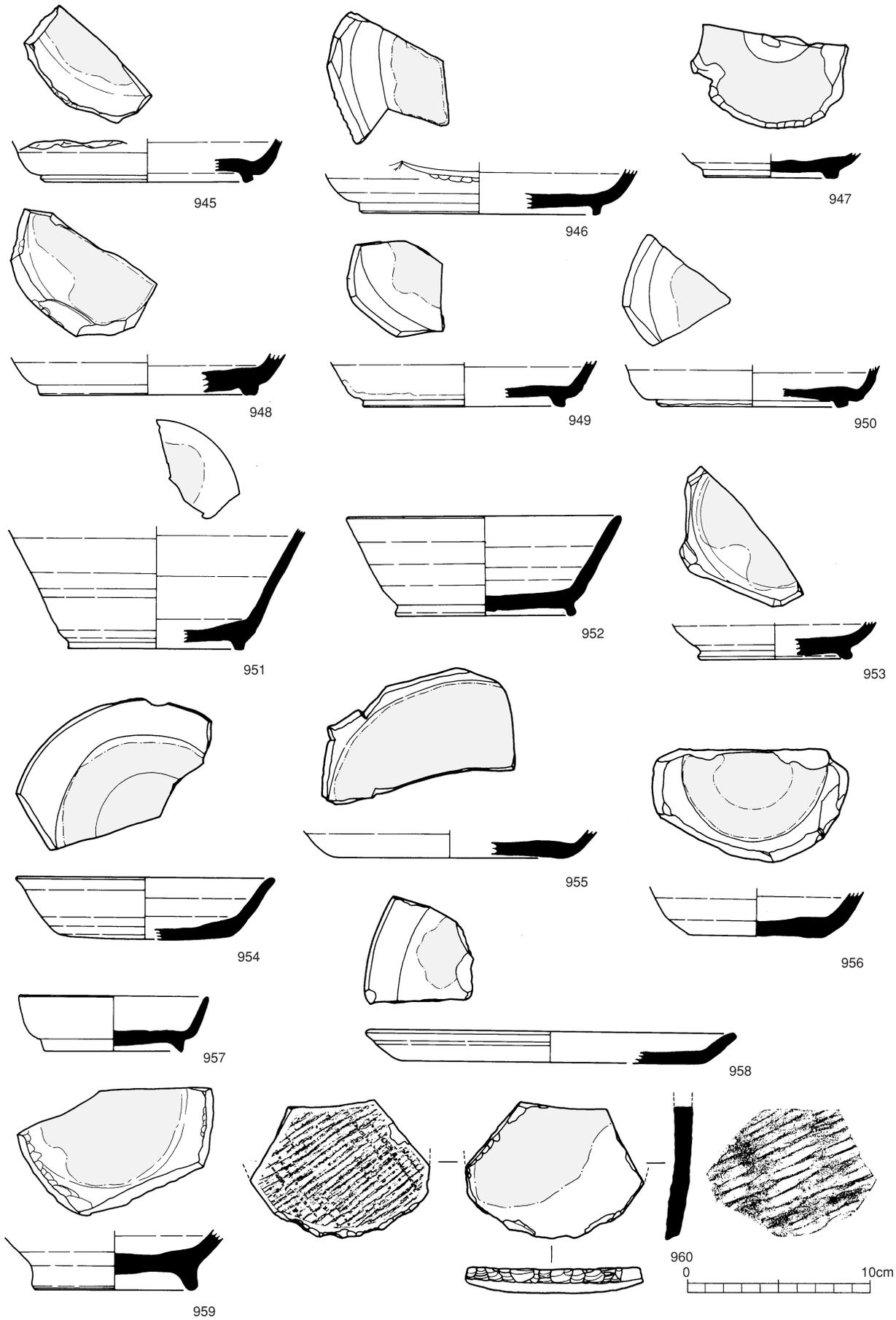
960～967は甕の胴部片を転用したものであり，猿面硯とも呼ばれるものである。計25点出土した。このうち960・961・962は周縁を丁寧に細かく打ち欠き整形したものである。いずれも使用面は平行文当て具痕や同心円当て具痕がみられ，それが使用により光沢をもつ。



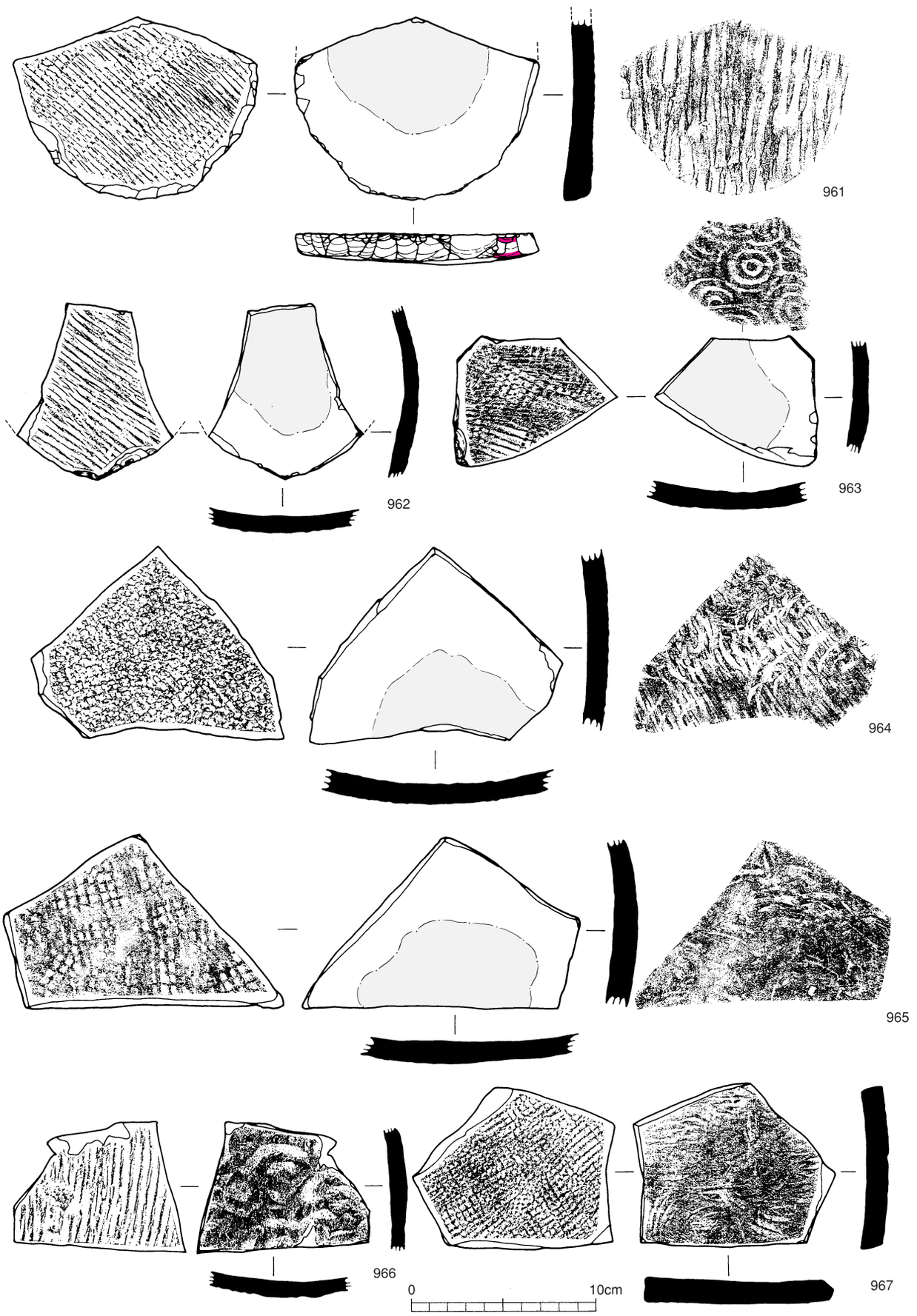
第160図　古代の遺物32（須恵器　小型壺他）



第161図　古代の遺物33（風字硯　転用硯①）



第162図　古代の遺物34（転用硯②）



第163図　古代の遺物35（転用硯③）

第30表　古代遺物観察表6（土師器①）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面・底部	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
128	361	須恵器		9.5	P55		12.7									
129	362	土師器	坏	7.5	Ⅲ	14.4			手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/4	1870			
	363	土師器	坏	7.5	Ⅲ	15.0			手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/3	2693			
	364	土師器	坏	9.5	Ⅲ	15.0			手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/5	2913			
	365	土師器	坏	9.5			14.4		手持ちヘラケズリ	ヨコナデ		1/6	2418			
	366	土師器	坏	7.5		13.0			手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ		3/4	1600	1970		
130	367	土師器	坏	9	Ⅲ	15.8	11.8	3.3	ケズリ	ヘラミガキ		1/6	4459			
	368	土師器	坏	6.5	Ⅲ		11.6		磨耗・(底)ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ヘラミガキ			109			
	369	土師器	坏	14	Ⅲ		7.2		回転ヘラケズリ	ヘラミガキ			435			
	370	土師器	坏	7.5	Ⅲ		10.0		磨耗	磨耗			1019			
	371	土師器	坏	10	Ⅲ		12.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ			5515			
	372	土師器	高台付坏	9.5		19.4	14.0	5.4	丁寧なヘラミガキ	丁寧なヘラミガキ		1/3	4387			
	373	土師器	高台付坏	8		17.4	11.2	5.1	ナデ	ナデ		1/6	4896			
	374	土師器	高台付坏	9.5		16.4	14.0	5.0	磨耗	ナデ		1/4	2475	2476		
	375	土師器	高台付坏	9			12.4		磨耗・ミガキ	磨耗・ミガキ			3528			
	376	土師器	高台付坏	9.5			12.9		磨耗	ヘラミガキ			2830			
	377	土師器	高台付坏	15	Ⅲ		11.4		磨耗・ヘラミガキ	ヘラミガキ			886			
	378	土師器	高台付坏	7	Ⅲ		11.4		ヘラミガキ・磨耗	ヘラミガキ			1569			
	379	土師器	高台付坏	5	Ⅲ		11.2		ミガキ	ミガキ			1267			
	380	土師器	高台付坏	9			10.6		磨耗	磨耗			3899			
	381	土師器	高台付坏	9.5			11.0		磨耗	磨耗			2895			
131	382	土師器	坏	15	Ⅱ	13.6	9.2	4.0	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		2/3	1595			
	383	土師器	坏	9	Ⅲ	13.2	8.3	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ		2/3	4457			
	384	土師器	坏	15	Ⅲ	13.2	9.4	3.0	ﾖｺﾅﾃﾞ・(底)磨耗	ヨコナデ		1/2	9			
	385	土師器	坏	6.5	西カﾍﾞ	12.7	8.7	4.3	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/2	4			
	386	土師器	坏	10	Ⅲ	13.1	7.3	4.55	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		2/3	1923			
	387	土師器	坏	9	Ⅲ	13.4	8.1	4.4	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		2/3	4033	6285		
	388	土師器	坏	9.5	Ⅲ	13.3	8.2	4.15	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/2	2266			
	389	土師器	坏	9	Ⅲ	13.3	8.0	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ		4/5	4032			
	390	土師器	坏	9	Ⅲ	16.6	8.5	5.3	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/6	3078			
	391	土師器	坏	10	Ⅲ	12.65	7.0	4.25	ヨコナデ	ヨコナデ		5/6	2857			
	392	土師器	坏	10	Ⅲ	13.8	7.9	3.9	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/6	5221			
	393	土師器	坏	10	Ⅲ	13.4	8.3	5.0	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ	ヘラの刻線	完形	1823			
	394	土師器	坏	9	Ⅲ	12.6	7.6	3.7	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	6298			
	395	土師器	坏	11	Ⅲ	12.8	8.8	3.8	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/6	76			
	396	土師器	坏	15	Ⅲ	13.4	8.0	4.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	1199			
	397	土師器	坏	9	Ⅲ		8.2		ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ	ヨコナデ			2226			
	398	土師器	坏	9	Ⅲ	12.5	7.8	3.7	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	4457			
	399	土師器	坏	7.5	Ⅲ	13.4	7.5	4.1	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/3	738			
	400	土師器	坏			14.5	8.8	5.0	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/5				
	401	土師器	坏	6.5	Ⅲ	13.0	7.2	5.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		2/3	1539			
	402	土師器	坏	7.5	Ⅲ	12.8	7.0	4.25	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	655			
	403	土師器	坏	15	Ⅲ	13.6	10.0	3.7	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/4	1055			
	404	土師器	坏	10	Ⅲ	13.9	7.5	4.1	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/4	2392			
	405	土師器	坏	6	Ⅱb	13.4	7.1	4.15	ヨコナデ	ヨコナデ		2/3	452			
	406	土師器	坏	7.5	Ⅲ	12.7	6.4	3.75	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/4	1903			
	407	土師器	坏		Ⅲ	12.4	6.2	4.6	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	1222			
	408	土師器	坏	12	Ⅲ	12.2	7.4	4.6	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	151			
	409	土師器	坏	9.5	Ⅱb	13.6	7.1	3.6	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/3	751			
	410	土師器	坏	12	Ⅲ	11.8	7.7	3.7	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ	内面にスス付着	5/6	475			
132	411	土師器	坏	7	Ⅲ	11.8	6.3	4.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/3	1203			
	412	土師器	坏	6		13.1	7.0	5.1	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/2				
	413	土師器	坏	6.5	Ⅲ	12.8	6.9	5.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/8	1539			
	414	土師器	坏	6	Ⅱb	12.7	6.0	3.6	ﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ			1/4	445			
	415	土師器	坏	8	Ⅲ		7.55		ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			1792			
	416	土師器	坏	7.5	Ⅲ		7.4		ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ	ヨコナデ			742	1762		
	417	土師器	坏	9.5	Ⅲ	12.8	7.2	4.7	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	2580			
	418	土師器	坏	6.5	Ⅲ	12.7	6.8	4.3	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/8	1515			
	419	土師器	坏	6.5	Ⅱb		8.4		ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			921			
	420	土師器	坏	10	Ⅲ	13.1	6.8	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	1731			
	421	土師器	坏	6	Ⅱb	12.9	5.8	4.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/3	451			
	422	土師器	坏	10	Ⅲ	12.8	5.9	4.1	ﾖｺﾅﾃﾞ・切り離し不明その後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/3	4706			
	423	土師器	坏	12	Ⅲ	12.9	6.2	4.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/2	345	257		
	424	土師器	坏	6.5	Ⅱb	13.2	6.8	3.9	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/3	826			
	425	土師器	坏	9	Ⅲ	12.0	7.1	3.9	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		4/5	2687	6304	6332	
	426	土師器	坏	7.5	Ⅲ	12.7	6.6	4.1	ﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ			1/2	688			
	427	土師器	坏	9.5	Ⅱb	13.1	5.2	4.9	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		4/5	327			
	428	土師器	坏	6.5	Ⅲ	12.5	6.4	4.3	ﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ナデ		1/3	1652			
	429	土師器	坏	12	Ⅲ	12.9	6.0	4.1	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		2/3	374			
	430	土師器	坏	7	Ⅲ	13.0	6.0	4.3	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/3	1219	1212		
	431	土師器	坏	10	Ⅲ	13.2	7.0	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	1145			
	432	土師器	坏	10	Ⅲ	12.8	7.4	3.5	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・回転ヘラ切り後ﾅﾃﾞ	ヨコナデ		1/4	2224			

第31表　古代遺物観察表7（土師器②）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面・底部	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
	433	土師器	坏	9.5	Ⅲ	13.5	8.0	4.45	回転ヘラ後ナデ			1/6	1846			
	434	土師器	坏	7.5	Ⅲ	13.4	7.6	3.6				1/6	1927			
	435	土師器	坏	10	Ⅲ		7.0		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ		1/4	7394			
	436	土師器	坏	15	Ⅲ	11.6	6.6	4.1			粘土付着	1/3	1178			
	437	土師器	坏	6T	Ⅲ		7.2		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			239			
132	438	土師器	坏	10	Ⅲ		6.4		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ			6314			
	439	土師器	坏	7.5	Ⅲ		6.8		回転ヘラ切り				684			
	440	土師器	坏	9	Ⅲ		6.6		ナデ・回転ヘラ後ナデ				2225			
	441	土師器	坏	7.5	Ⅲ		6.7		ヨコナデ・ナデ・回転ヘラ・ナデ	ヨコナデ			1705			
	442	土師器	坏	10	Ⅲ		6.3		ヨコナデ	ヨコナデ			6102			
	443	土師器	坏	9	Ⅲ	16.0	8.2	6.85	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		3/4	6295			
	444	土師器	坏	6	Ⅱb	12.4	6.0	4.2	ヨコナデ・回転ヘラ後ナデ	ヨコナデ		1/3	271	274	324	
	445	土師器	坏	10	Ⅲ	12.7	5.8	4.3	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/3	4314	4315		
	446	土師器	坏	12	Ⅳ	1.9	6.0	4.1	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	66			
	447	土師器	坏	12	Ⅲ	13.0	5.4	5.05	ヨコナデ・ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/6	125			
	448	土師器	坏	15	Ⅲ	12.6	7.4	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	209			
	449	土師器	坏	9.5	Ⅲ	11.3	6.6	4.35	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/3	1476			
	450	土師器	坏	9.5	Ⅱb	11.8	5.0	4.1	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	751			
	451	土師器	坏	15	Ⅲ	11.5	4.6	4.2	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	1542			
	452	土師器	坏	8	Ⅲ	10.9	5.8	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	1703			
	453	土師器	坏	6.5	Ⅱb	12.4	5.4	3.45	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	548			
	454	土師器	坏	7	Ⅲ	11.4	5.4	3.75	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		2/3	1141			
	455	土師器	坏	7	Ⅲ	11.4	6.5	4.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	469	470		
	456	土師器	坏	6.5	Ⅱb	11.3	5.8	3.5	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		完形	454			
	457	土師器	坏	6.5	Ⅱb	11.0	5.2	3.2	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		2/3	825			
	458	土師器	坏	8	Ⅲ	10.8	6.0	3.7	ヨコナデ・静止ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	1702			
	459	土師器	坏	6.5	Ⅱb	11.8	6.0	3.45	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	694			
	460	土師器	坏	6.5	Ⅱb	11.1	5.6	3.5	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/1	370			
	461	土師器	坏	6.5	Ⅱb	10.9	5.4		ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		2/3	548			
	462	土師器	坏	8	Ⅲ	10.8	5.6	3.6	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		完形	1701			
	463	土師器	坏	7	Ⅲ	11.45	5.85	4.45	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/2	1150			
133	464	土師器	坏	7	Ⅱb	11.2	5.8	3.4	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		4/5	392	Ⅲ746		
	465	土師器	坏	8	Ⅲ	11.2	7.2	3.95	回転ヘラ後ナデ	ヨコナデ		5/6	2430			
	466	土師器	坏	9	Ⅲ	10.6	5.2	3.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		5/6	5602			
	467	土師器	坏	9.5	Ⅱb	10.6	5.6	3.7	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	271			
	468	土師器	坏	7.5	Ⅲ	11.3	5.4	3.4	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	1754	1822		
	469	土師器	坏	6	Ⅱb	10.0	5.0	3.8	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		3/4	379			
	470	土師器	坏	9.5	Ⅱb	11.4	5.6	3.7	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	727	730		
	471	土師器	坏	7	Ⅱb	10.35	5.1	3.45	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		完形	336			
	472	土師器	坏	9.5	Ⅱb	10.2	5.0	3.7	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/3	59			
	473	土師器	坏	6.5	Ⅲ	10.8	5.5	3.35	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/5	1654			
	474	土師器	坏	7	Ⅱb	11.3	5.7	3.0	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	54			
	475	土師器	坏	6.5	Ⅲ	10.3	5.9	3.7	ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/3	1327			
	476	土師器	坏	7		10.9	5.8	3.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	639	660		
	477	土師器	坏	7	Ⅱb	11.2	6.0	3.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/2	388			
	478	土師器	坏	9	Ⅲ	10.0	5.6	2.8	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/2	6083			
	479	土師器	坏	9.5	Ⅱb	10.0	5.0	3.7	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	内面にスス付着	1/3	225			
	480	土師器	坏	15	Ⅲ		3.8		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ		1/4	125	521		
	481	土師器	坏	9	Ⅲ	9.7	6.4	3.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		1/3	5693			
	482	土師器	坏	9	Ⅲ	9.4	5.2	3.0	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		完形	5601			
	483	土師器	坏	9	Ⅲ	10.0	5.5	3.1	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/3	5604	9カク		
	484	土師器	円板状高台坏	7.5	Ⅲ	12.2	6.9	4.2	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ		完形	2098			
	485	土師器	円板状高台坏	12	Ⅲ	12.1	6.3	5.1	ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	ナデ		1/6	390			
	486	土師器	円板状高台坏	8	Ⅲ	11.3	6.7	3.95	ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ・工具ヘラ状	ヨコナデ		1/6	5362			
	487	土師器	円板状高台坏	7.5	Ⅲ		7.0		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			678			
	488	土師器	円板状高台坏	7	Ⅱb		6.4		ヨコナデ	ヨコナデ			66			
	489	土師器	円板状高台坏	10	Ⅲ		6.6		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ	内面にスス付着		964			
	490	土師器	円板状高台坏	9	Ⅲ		6.4		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			6039			
	491	土師器	円板状高台坏	12	Ⅲ		6.7		ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ・ナデ	ヨコナデ			210			
	492	土師器	円板状高台坏	7.5	Ⅲ		7.0		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			632	1478		
	493	土師器	円板状高台坏	7.5	Ⅲ		7.5		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			307			
134	494	土師器	円板状高台坏	12	Ⅲ		6.5		ヨコナデ・回転ヘラ切り後ナデ・ナデ	ヨコナデ			－			
	495	土師器	円板状高台坏	10	Ⅲ		6.5		ナデ・回転ヘラ	ナデ			81	82	84	
	496	土師器	充実高台坏	15	Ⅲ	10.5	5.25	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ		4/5	81	514		
	497	土師器	充実高台坏	8	Ⅲ	11.8	5.7	4.7	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	1017			
	498	土師器	充実高台坏	14	Ⅲ	12.15	5.1	5.95	ヨコナデ	ヨコナデ	底面ヘラ記号	1/3	231			
	499	土師器	充実高台坏	8	Ⅲ	11.3	5.7	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ		1/5	1397	1837		
	500	土師器	充実高台坏	6	Ⅱ	12.5	6.1	5.4	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	304	485		
	501	土師器	充実高台坏	14	Ⅲ		6.1		ヨコナデ・静止ヘラ	ヨコナデ			300			
	502	土師器	充実高台坏	6.5	Ⅱb		6.0		ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ			749			
	503	土師器	充実高台坏	6	Ⅱb		5.9		ヨコナデ・回転ヘラ切り後横方向の工具ナデ	ヨコナデ			200			
	504	土師器	充実高台坏	6	Ⅱb		5.8		ヨコナデ	ヨコナデ	底部ヘラ記号		292			

第32表　古代遺物観察表8（土師器③）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考	残存率	注記番号			
									外面・底部	内面						
	505	土師器	充実高台坏	6	Ⅱb		5.7		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			306			
	506	土師器	充実高台坏	15	Ⅲ		5.65		ヨコナデ	ヨコナデ	底部ヘラ記号		743			
	507	土師器	充実高台坏	15	Ⅲ		4.6		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ	底部ヘラ記号		1002			
	508	土師器	充実高台坏	14	Ⅲ		5.2		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			228			
	509	土師器	充実高台坏				5.0		ヨコナデ・回転ヘラ後ナデ	ヨコナデ						
	510	土師器	充実高台坏	15	Ⅲ		5.2		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			98			
	511	土師器	充実高台坏	14T	Ⅲ		6.4		ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ			55			
	512	土師器	充実高台坏	9.5	Ⅱb		6.1		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			34			
134	513	土師器	充実高台坏	9.5	Ⅱb		5.4		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			552			
	514	土師器	充実高台坏	15	Ⅲ		5.4		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			72			
	515	土師器	充実高台坏	9.5	Ⅱb		5.9		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			301	733		
	516	土師器	充実高台坏	12			6.0		ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ			－			
	517	土師器	充実高台坏	14	Ⅲ		6.0		ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ			295			
	518	土師器	充実高台坏	7.5	Ⅲ		6.0		ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ			519			
	519	土師器	充実高台坏	8	Ⅲ		6.0		ヨコナデ	ヨコナデ			2991			
	520	土師器	充実高台坏	8	Ⅲ		4.9		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			1851			
	521	土師器	充実高台坏	6.5	Ⅱb		5.2		ハケメ・回転ヘラ切り後静止ヘラ	ヨコナデ			844			
	522	土師器	埦	6.5	Ⅲ	17.4	8.6	8.3	ケズリ	ミガキ		1/3	1950			
	523	土師器	埦	8	Ⅲ	17.8	7.8	9.15	指ナデ・回転工具ナデ	ヨコナデ		1/3	1035			
	524	土師器	埦	10	Ⅲ	17.4	8.7	5.5	磨耗	ヨコナデ		1/6	4683			
	525	土師器	埦	12	Ⅲ	13.6	7.7	5.5	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	121			
	526	土師器	埦	8	Ⅲ	13.0	7.6	6.15	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	1704			
	527	土師器	埦	7.5	Ⅲ	13.1	8.8	5.9	ヨコナデ	ヨコナデ		3/4	794	1102		
	528	土師器	埦	12		14.8	7.8	6.05	ヨコナデ	ヨコナデ		2/3	250			
	529	土師器	埦	12	Ⅲ	14.4	7.9	6.1	ヨコナデ	ヨコナデ		2/3	128	357	376	
	530	土師器	埦	12	Ⅲ	14.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ		7/8	217	255	256	
	531	土師器	埦	7.5	Ⅲ	13.2	7.0	6.85	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	677	1239		
135	532	土師器	埦	8	Ⅲ	13.8	8.0	5.75	ヨコナデ	ヨコナデ		3/4	603			
	533	土師器	埦	6.5	Ⅲ	14.6	8.0	6.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	2204			
	534	土師器	埦	12	Ⅲ	14.7	7.2	6.25	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	252	254	373	428
	535	土師器	埦	7	Ⅱb	13.6	7.4	5.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	196			
	536	土師器	埦	6	Ⅲ	12.8	7.7	5.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	771			
	537	土師器	埦	6	Ⅲ	11.4	7.1	5.85	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	732			
	538	土師器	埦	9.5	Ⅱb		6.8		ヨコナデ	ナデ	桃高台		365			
	539	土師器	埦	9.5	Ⅱb		8.9		ヨコナデ	ヨコナデ	桃高台		372			
	540	土師器	埦	9.5	Ⅲ		9.0		磨耗	ヨコナデ	底面に刻書		1625			
	541	土師器	埦	10	Ⅲ		6.4		磨耗	磨耗	焼成後の穴		2143			
	542	土師器	埦	9.5	Ⅲ		8.1		ヨコナデ	ナデ	焼成前の穴		1102			
	543	土師器	埦	10	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	磨耗			2536			
	544	土師器	埦	12	Ⅲ		7.5		磨耗	磨耗			285			
	545	土師器	埦	7.5	Ⅲ		8.6		磨耗	磨耗			1928			
	546	土師器	埦	9.5	Ⅲ		7.8		磨耗	磨耗			492	1577		
	547	土師器	埦	7ﾍﾞﾙﾄ	Ⅲa		7.0		磨耗	磨耗			2708			
	548	土師器	埦	10	Ⅲ		7.1		ヨコナデ	見込みは放射状にヘラミガキ			1905			
	549	土師器	埦	7.5	Ⅲ		8.4		ヨコナデ	ヨコナデ			1134			
	550	土師器	埦	10	Ⅲ		7.0		磨耗	ヨコナデ			3546			
	551	土師器	埦	7.5	Ⅲ		6.8		磨耗	ヨコナデ			1528			
	552	土師器	埦	8	Ⅲ		7.0		ヨコナデ	ヨコナデ	内面にスス付着		533			
	553	土師器	埦	7.5	Ⅲ		8.4		ヨコナデ	ヨコナデ			1752			
	554	土師器	埦	8	Ⅲ		7.8		ヨコナデ	ヨコナデ			980			
	555	土師器	埦	10	Ⅲ		7.65		ヨコナデ	ヨコナデ			4312			
	556	土師器	埦	6	Ⅲ		8.5		ヨコナデ	ヨコナデ			1387			
	557	土師器	埦	7.5	Ⅲ		7.72		ヨコナデ	磨耗			1830			
136	558	土師器	埦	7.5	Ⅲ		7.2		ヨコナデ	ヨコナデ			856			
	559	土師器	埦	14	Ⅲ		8.6		ヨコナデ	ヨコナデ			174			
	560	土師器	埦	12	Ⅲ		7.1		ヨコナデ	ヨコナデ			205			
	561	土師器	埦	9	Ⅲ		8.3		磨耗	磨耗			4828			
	562	土師器	埦	15	Ⅲ		7.2		ヨコナデ	ヨコナデ			123			
	563	土師器	埦	15	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ			974			
	564	土師器	埦	9	Ⅲ		8.2		ヨコナデ	ヨコナデ			1281			
	565	土師器	埦	12	Ⅲ		6.8		磨耗	磨耗			30			
	566	土師器	埦	12	Ⅲ		7.1		ヨコナデ	ヨコナデ			826			
	567	土師器	埦	6.5	Ⅲ		8.5		磨耗	ヨコナデ			1471			
	568	土師器	埦	9	Ⅲ		8.6		ヨコナデ	ヨコナデ			1591			
	569	土師器	埦	7.5	Ⅲ		8.2		ヨコナデ	ヨコナデ			698			
	570	土師器	埦	10	Ⅲ		8.8		ヨコナデ	ヨコナデ			1475			
	571	土師器	埦	7			8.3		ヨコナデ	ヨコナデ			701			
	572	土師器	埦	9.5	Ⅲ		9.15		ヨコナデ	ヨコナデ			1089			
	573	土師器	埦	9	Ⅲ		8.1		磨耗	磨耗			4876			
	574	土師器	蓋	9.5	Ⅲ	19.2			磨耗	磨耗		1/3	1949			
137	575	土師器	蓋	8	Ⅲ	20.8			磨耗	磨耗		1/6	3820			
	576	土師器	蓋	7	Ⅲ	14.8			ヨコナデ	ヘラミガキ		1/3	1495	1796		

第33表　古代遺物観察表9（土師器④）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
	577	土師器	蓋	7.5	Ⅲ	14.9		3.9	磨耗	磨耗		1/8	1869			
	578	土師器	蓋	6.5	Ⅱb	17.6		2.85	天井回転ヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ		2/3	954			
	579	土師器	蓋	6.5	Ⅲ	18.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ		1/6	2512			
	580	土師器	蓋	7	東カベ	15.7			天井回転ヘラケズリ・下ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	3588			
	581	土師器	蓋	9	Ⅲ				磨耗	磨耗			1615			
	582	土師器	蓋	9.5	Ⅲ				ヘラミガキ	磨耗			1225			
	583	土師器	蓋	7	Ⅱb				磨耗	磨耗			119			
	584	土師器	蓋	11	Ⅲ				回転工具ナデ	ナデ			51			
	585	土師器	蓋	6.5	Ⅲ	16.0							1161			
	586	土師器	蓋	6.5	Ⅱb				ヨコナデ	ヘラミガキ			397			
	587	土師器	蓋	15	Ⅲ	13.9			磨耗	磨耗		1/6	846			
	588	土師器	蓋	7.5	Ⅲ	19.0		3.6	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	1797	1803		
	589	土師器	蓋	10		17.6	8.0	4.0	ナデ	ナデ		1/3	6771			
137	590	土師器	皿	6.5	Ⅲ	18.8	13.0	1.9	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ		1/4	1508			
	591	土師器	皿	6.5	Ⅲ	16.6	13.6	2.0	ヨコナデ・沈線	ヨコナデ		1/4	1301			
	592	土師器	皿	10	Ⅲ	16.8	12.2	1.7	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		1/4	6247			
	593	土師器	皿	6.5	Ⅲ	15.6	12.7	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	1314			
	594	土師器	皿	6.5	Ⅲ	16.5	13.9	1.8	ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	1670			
	595	土師器	皿	9	Ⅲ		11.4		回転ヘラ切り				4979	5027		
	596	土師器	皿	9	Ⅲ		10.0		ヨコナデ・回転ヘラ	ヨコナデ			6298			
	597	土師器	皿	6.5	Ⅲ		12.0		ヨコナデ	ヨコナデ			110			
	598	土師器	皿	7	Ⅲ	19.3	6.4	3.4	ヨコナデ	工具ナデ		1/4	1286			
	599	土師器	皿	10	Ⅲ		9.2		ヨコナデ	ヨコナデ			5963	5962	5157	3055
	600	土師器	皿	3	Ⅲ	15.1	8.4	4.6	下回転ヘラケズリとヨコナデ	ヨコナデ		1/4	746			
	601	土師器	皿	8	Ⅲ		6.8		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			2373			
	602	土師器	皿	7.5	Ⅲ	10.0	6.7	1.6	磨耗・回転ヘラ切り	磨耗			1024			
	603	土師器	皿	9	Ⅲ	8.9	6.0	1.7	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ		完形	1151			
	604	土師器	高台付皿	7.5	Ⅲ	15.5			ヨコナデ	ヨコナデ		完形	267			
	605	土師器	高台付皿	7.5	Ⅲ	15.5			ヨコナデ	ヨコナデ		3/4	267			
	606	土師器	高台付皿	6.5	Ⅱb				ヨコナデ	ヨコナデ			177			
	607	土師器	高台付皿	7	Ⅲ	13.2	7.6	4.0	ヨコナデ	ナデ		3/4	1221			
	608	土師器	高台付皿	12	Ⅲ	12.8			ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	309			
	609	土師器	高台付皿	14	Ⅲ		6.9		ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	171			
138	610	土師器	高台付皿	8	Ⅲ		8.4		ヨコナデ	ヨコナデ			2759			
	611	土師器	高台付皿	15	Ⅲ	12.4			ヨコナデ	ナデ		1/4	68			
	612	土師器	高台付皿	7	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			1467			
	613	土師器	高台付皿	8	Ⅲ	12.2	9.6	5.1	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	3548			
	614	土師器	高台付皿	15	Ⅲ	11.0	6.4	3.05	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	945			
	615	土師器	高台付皿	8	Ⅲ	11.6	5.8	2.1	ヨコナデ	ヨコナデ		1/2	4181			
	616	土師器	高台付皿	6.5	Ⅱb	10.6	7.1	2.55	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	748			
	617	土師器	内黒　坏	15	Ⅲ	17.8	6.7	6.05	磨耗・回転ヘラ	ヘラミガキ		1/8	808			
	618	土師器	内黒　坏	6	Ⅱb		8.4		回転ヘラミガキ	ミガキ			107			
	619	土師器	内黒　坏	9.5	Ⅲ		9.2		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヘラミガキ			867	1221	1441	
	620	土師器	内黒　坏	10	Ⅲ		7.0		底面ミガキ後ミガキ・回転ヘラミガキ	ヘラミガキ			3004	4234		
	621	土師器	内黒　坏	6.5	Ⅲ		7.2		磨耗・ヨコナデ	ヘラミガキ			1322			
	622	土師器	内黒　坏	6.5	Ⅲ		8.2		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヘラミガキ			1125			
	623	土師器	内黒　坏	9.5	Ⅲ	16.1	7.0	4.85	ヨコナデ	磨耗		1/4	958			
	624	土師器	内黒　坏	11.5	表		8.0		後ヘラミガキ	ヘラミガキ						
	625	土師器	内黒　坏	12	Ⅲ		5.6		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヘラミガキ			46			
	626	土師器	内黒　坏	10	Ⅲ	15.5	7.1	5.6	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヘラミガキ		1/4	6280			
	627	土師器	内黒　坏	7	Ⅱb	15.3	8.0	4.85	ヨコナデ・回転ヘラ	ヘラミガキ		1/4	269	436		
	628	土師器	内黒　坏	12	Ⅲ		6.5		ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ			355			
	629	土師器	内黒　皿	6.5	Ⅲ				ヨコナデ	ヘラミガキ			1215	6.5Ⅲ 2685		
	630	土師器	内黒　皿	15			5.5		磨耗	ヘラミガキ			982			
139	631	土師器	内黒坏か埦	12	Ⅲ	15.5			ヨコナデ	ヘラミガキ		1/3	245			
	632	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ	13.8	6.8	5.3	ヨコナデ	ヘラミガキ		3/4	2035	4852	4857	
	633	土師器	内黒　埦	6.5	Ⅲ	14.2	7.75	5.75	ヨコナデ	ヘラミガキ		3/4	1540			
	634	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ	14.4	7.7	5.8	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/6	112			
	635	土師器	内黒　埦	7.5	Ⅲ	13.5	7.2	5.6	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/8	1650			
	636	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ	14.9	7.2	6.5	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/2	253	264	375	
	637	土師器	内黒　埦	6.5	西カベ	13.5	7.45	5.95	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/6	1			
	638	土師器	内黒　埦	6.5	Ⅲ	12.6	6.2	6.2	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/3	1623	1857		
	639	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ	13.4	7.0	6.1	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/2	2287	2288	7409	
	640	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ		6.2		ヨコナデ	磨耗	赤高台		2288	12Ⅲ 1288		
	641	土師器	内黒　埦	6.5	Ⅱb		7.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ			198	Ⅲ1031		
	642	土師器	内黒　埦	9	Ⅲ	11.4	6.2	3.7	ヨコナデ	ヘラミガキ		1/2	6335			
	643	土師器	内黒　埦	9	Ⅲ	15.5	7.2		ヨコナデ	ヘラミガキ	赤高台	1/6	5651			
	644	土師器	内黒　埦	9.5	Ⅲ		7.3		ヨコナデ	ヘラミガキ			－			
	645	土師器	内黒　埦	7.5	Ⅲ		7.6		ヨコナデ	ヘラミガキ			2530			
	646	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ		7.0		ヨコナデ	ヘラミガキ			311			
140	647	土師器	内黒　埦	6.5	Ⅲ		9.6		ヨコナデ	ヘラミガキ			2096			
	648	土師器	内黒　埦	6.5	Ⅱb		8.4		磨耗・ヨコナデ	磨耗			963			

第34表　古代遺物観察表10（土師器⑤）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
	649	土師器	内黒　埦	12.5	Ⅲ		7.95		ヨコナデ	ヘラミガキ			24			
	650	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ		7.8		ヨコナデ	ヘラミガキ			242			
	651	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ		8.5		ヨコナデ	ヘラケズリ			4614			
	652	土師器	内黒　埦	7.5	Ⅲ		7.2		ヨコナデ	ヘラミガキ			588	602		
	653	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ				ヨコナデ	ヘラミガキ			714			
	654	土師器	内黒　埦	7	Ⅲ		7.6		ヨコナデ	ヘラミガキ・磨耗			583			
	655	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ		7.2		ヨコナデ	ヘラミガキ						
	656	土師器	内黒　埦	9.5	Ⅲ		6.6		ヨコナデ	ヘラミガキ			799			
	657	土師器	内黒　埦	8	Ⅲ		6.9		ヨコナデ	ヘラミガキ	モミ痕付		1955			
	658	土師器	内黒　埦	7.5	Ⅲ		8.0		磨耗	ヘラミガキ			1257			
	659	土師器	内黒　埦	9.5	Ⅲ		8.6		ヨコナデ	ヘラミガキ			1516			
	660	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ		7.9		ヨコナデ	磨耗			99			
	661	土師器	内黒　埦	9.5	Ⅲ		7.8		ヨコナデ	ヘラミガキ			1412			
	662	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ		7.3		ヨコナデ	ヘラミガキ			113			
	663	土師器	内黒　埦	9	Ⅲ		8.6			ヘラケズリ			6092			
140	664	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ		7.5		ヨコナデ	ヘラミガキ			6070			
	665	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ				ヨコナデ・磨耗	ヘラミガキ			584			
	666	土師器	内黒　埦	10	Ⅲ		6.5		ヨコナデ	ヘラミガキ・磨耗			1270			
	667	土師器	内黒　埦	7.5	Ⅲ		6.9		ヨコナデ	磨耗			795			
	668	土師器	内黒　埦	9.5	Ⅲ		5.8		磨耗・ヨコナデ	ヘラミガキ			8			
	669	土師器	内黒　埦	12	Ⅲ		7.0		ヨコナデ	ヘラミガキ			92			
	670	土師器	内黒　埦	9	Ⅲ		8.5		ヨコナデ	ヘラミガキ			6439			
	671	土師器	内黒　埦	9	Ⅲ		6.2		ヨコナデ	磨耗			4812			
	672	土師器	内黒　埦	4T	Ⅲ		5.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ			113	592		
	673	土師器	内黒　Ⅲ	10	Ⅲ	13.0	7.0	3.3	磨耗	ヘラミガキ・磨耗			3242			
	674	土師器	内黒　Ⅲ	12	Ⅲ		6.0		ヨコナデ	ヘラミガキ			262			
	675	土師器	黒色　埦	12	Ⅲ		8.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ			925			
	676	土師器	黒色　埦	7	Ⅱb		8.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ			49			
	677	土師器	黒色　埦	6.5	Ⅱb		8.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ			885			
	678	土師器	黒色　埦	13T	Ⅲ		6.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ			287			
	679	土師器	不明	6.5	Ⅲ				ミガキ	ミガキ			1158	7-Ⅱb		
	680	土師器	黒色　Ⅲ？	7	Ⅱb	24.2			ヘラミガキ	ヘラミガキ			375			
	681	土師器	内朱　坏	15	Ⅲ		5.6		ナデ				1000			
	682	土師器	内朱　坏	9.5	Ⅱb		6.0		ヨコナデ	ヨコナデ			458			
	683	土師器	両朱　坏	10	Ⅲ		6.6		磨耗・ヨコナデ	ヘラミガキ			3??			
	684	土師器	両朱　坏	9	Ⅲ		7.2		磨耗	ヘラミガキ			2189			
	685	土師器	両朱　坏	6	Ⅲ		5.7		磨耗	ヘラミガキ			1180			
	686	土師器	両朱　坏	10	Ⅲ		6.6		磨耗	ヘラミガキ			1880			
	687	土師器	内朱　埦	12	Ⅲ	14.0	8.0	6.2	ヨコナデ	磨耗	内面に布目痕	1/4	172	132		
	688	土師器	内朱　埦	8	Ⅲ		8.4		ナデ	ミガキ			2159	2259		
141	689	土師器	内朱　埦	7.5	Ⅲ	14.4			ヨコナデ	部分ヘラミガキ		1/4	518	1194		
	690	土師器	内朱　埦	6	Ⅱb				ヨコナデ	ヘラミガキ			223			
	691	土師器	内朱　埦	9	Ⅲ		8.3		ヨコナデ	ヘラミガキ			6001			
	692	土師器	内朱　埦	7	Ⅱb	15.2	9.4	7.1	ヨコナデ	ヘラミガキ・磨耗		1/4	120	7Ⅲ	H16	
	693	土師器	内朱　埦	7.5	Ⅲ				ヨコナデ	ヘラミガキ			1668			
	694	土師器	内朱　埦	7.5	Ⅱb	14.5	7.8	4.9	ヨコナデ	磨耗		1/6	8423			
	695	土師器	内朱　Ⅲ	10	Ⅲ		9.0			ヘラミガキ			2608			
	696	土師器	両朱　Ⅲ	10	Ⅲ		8.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ			5051			
	697	土師器	両朱　Ⅲ	10	Ⅲ		11.0			ヘラミガキ			－			
	698	土師器	甕	10	Ⅱ	16.4			ナデ・タタキ	ヘラケズリ		1/4	6055			
	699	土師器	甕	10	Ⅲ	16.6				ヘラケズリ		1/6	6649			
	700	土師器	甕	9.5	Ⅲ	17.0			ナデ	ヘラケズリ・工具痕		1/4	1820			
	701	土師器	甕	9.5	Ⅲ	17.1			ナデ	ヘラケズリ		1/3	2632			
	702	土師器	甕	15	Ⅲ	21.4			ハケメ	ヘラケズリ		1/4	778			
	703	土師器	甕	7	Ⅲ	26.6			ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ		1/5	499			
142	704	土師器	甕	10	遺物集石	15.2			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ		1/2	6754			
	705	土師器	甕	9.5	Ⅲ	18.4			横方向のハケメ	ヘラケズリ		1/6	1495			
	706	土師器	甕	6.5	西カベ	17.6			ハケメ	磨耗		1/4	26			
	707	土師器	甕	6.5	Ⅲ	17.1			ハケメ	ヘラケズリ		1/4	1392			
	708	土師器	甕	7.5	Ⅲ	16.8			ナデ・ハケメ	ヘラケズリ・ナデ		1/6	281			
	709	土師器	甕	7	Ⅲ	14.9			ナデ・ハケメ	ナデ・ケズリ		1/6	2102			
	710	土師器	甕	9	Ⅲ	14.0			磨耗	下ヘラケズリ		1/6	6965			
	711	土師器	甕	9.5	Ⅲ	15.6		14.7	磨耗	ヘラケズリ		1/3	1819	2613	2614	1921
	712	土師器	甕	9.5	Ⅲ	20.0			上ヨコナデ・下磨耗	ヘラケズリ		1/4	1424			
	713	土師器	甕	9	Ⅲ	23.0			ハケメ	ヘラケズリ・ハケメ		1/1	6307			
	714	土師器	甕	8	Ⅲ	19.8			横方向ハケメ	磨耗		1/4	2760			
143	715	土師器	甕	12	Ⅲ	19.0			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	283			
	716	土師器	甕	7.5	Ⅲ	18.4			ハケメ	ヘラケズリ・ヨコナデ		1/6	1392			
	717	土師器	甕	9.5	Ⅲ	20.0			ナデ・下ハケメ	ヘラケズリ		1/3	1152			
	718	土師器	甕	9	Ⅲ	22.0			ハケメ横方向	ケズリ・横方向		1/4	6173	6209		
	719	土師器	甕	9	Ⅲ	23.6			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ		1/6	1317	3786		
	720	土師器	甕	9.5	Ⅲ	22.8			ヘラケズリ	磨耗・ハケメ		1/4	1821			

第35表　古代遺物観察表11（土師器⑥）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
143	721	土師器	甕	9.5	Ⅲ	26.7			ハケメ	ケズリ		1/4	1228	1329		
	722	土師器	甕	9	Ⅲ	25.7			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ		1/6	3823			
	723	土師器	甕	7	Ⅲ	25.5			ハケメ	ハケメ・ヘラケズリ・磨耗		1/6	1697			
144	724	土師器	甕	9.5	Ⅲ	30.8			ハケメをけすナデ	ナデ・ヘラケズリ		1/6	1263			
	725	土師器	甕	7	Ⅲ	33.8			磨耗	ヘラケズリ		1/6	910			
	726	土師器	甕	12.5	Ⅲ	28.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラケズリ		1/6	34			
	727	土師器	甕	9.5	Ⅲ	26.6			ハケメ	ヘラケズリ		1/6	1259			
	728	土師器	甕	12	Ⅲ	26.0			ナデ	ナデ・ケズリ		1/6	63			
	729	土師器	甕	7	Ⅲ	25.8			ヨコのハケメ	ヨコのハケメ		1/6	878			
	730	土師器	甕	6.5	Ⅲ	28.8			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ		1/3	1142			
	731	土師器	甕	9	Ⅲ				ハケメ	ヘラケズリ		1/4	6291			
	732	土師器	甕	6.5	Ⅲ	26.2			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ		1/6	1385			
	733	土師器	甕	9	Ⅲ	25.5			ハケメの後ナデ消し	ヘラケズリの後ナデ		1/6	4032			
145	734	土師器	甕	12	Ⅲ	27.0			ハケメ	ヘラケズリ		1/6				
	735	土師器	甕	7.5	Ⅲ	27.6			ハケメ	ヘラケズリ？		1/6	712			
	736	土師器	甕	9.5	Ⅲ	29.4			ハケメ	ハケメ・ナデ・ヘラケズリ		1/6	895			
	737	土師器	甕	6.5	Ⅲ	27.6			ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ハケメヘラケズリ		1/6	3331			
	738	土師器	甕	6.5	Ⅲ	29.9			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ		1/6	1027	1481		
	739	土師器	甕	9.5	Ⅱb	27.2			ハケメ	ヘラケズリ		1/3	765			
	740	土師器	甕	7.5	Ⅲ	31.3			ハケメ・ヨコナデ	ヘラミガキ・ヨコナデ		1/6	1246			
	741	土師器	甕	10	Ⅲ	32.2			磨耗	ケズリ		1/6	4378	4563		
146	742	土師器	鍋	6	Ⅲ	22.0			上ヨコナデ・下ナデ	ヨコナデ		1/6	768			
	743	土師器	鍋	9.5	Ⅱb	20.6			ヨコナデ	磨耗		1/6	671			
	744	土師器	鍋	8	Ⅲ	25.6			ヘラケズリ	ハケメ		1/6	2164	2260		
	745	土師器	鍋	10	Ⅲ	25.8			ハケメ	ケズリ		1/6	4806			
	746	土師器	鍋	13T	Ⅲ	23.9			下ナデ・上工具ナデ	下ヘラケズリ・上指ナデ		1/8	79	81		
	747	土師器	鍋	7	Ⅲ	23.2			ハケメ・ナデ	ヘラケズリ		1/8	1524			
	748	土師器	鍋	12	Ⅲ				ハケメ・上ナデ	ハケメ・ナデ・下ヘラケズリ	スス付着	1/3	75	76		
	749	土師器	鍋	12	Ⅲ	23.8			タタキ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	スス付着	1/6	111			
	750	土師器	鍋	6.5	西カヘ'				ハケメ・ナデ	ナデ	スス付着	1/8	8			
	751	土師器	鍋	7	Ⅲ	31.3			下ハケメ・上ナデ	下ヘラケズリ	スス付着	1/6	523			
	752	土師器	鍋	6	Ⅱb				下ハケメ・上ナデ	ナデ		1/6	290	291		
147	753	土師器	鉢	10	Ⅲ	28.6	18.1	15.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/5	3295			
	754	土師器	鉢	8	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	1122			
	755	土師器	鉢	9.5	Ⅲ				ヨコナデ	ヘラケズリ		1/6	1928			
	756	土師器	鉢	9.5	Ⅲ	28.0			ナデ・ヨコナデ	ヘラケズリ		1/6	2909			
	757	土師器	鉢	7	Ⅲ	29.0			ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ		1/6	1186	H7 715		
	758	土師器	鉢	6.5	Ⅱb	19.9			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	915			
	759	土師器	鉢	7	Ⅲ	19.85			ナデ・ヨコナデ	ヘラケズリ		1/6	1744			
	760	土師器	鉢	6.5	Ⅲ	19.9			磨耗	磨耗		1/6	1768			
	761	土師器	鉢	12	Ⅲ		12.2		ナデ	ナデ			150	171	174	
148	762	土師器	鉢	8	Ⅲ	28.0	20.4	13.8	ヨコナデ	ヨコナデ	高台付	1/3	3227	3643		
	763	土師器	鉢(内黒)	7	Ⅲ				タタキ	磨耗	高台付		1239	828	809	822
	764	土師器	鉢	11	Ⅲ				ナデ	指痕	高台付モミ痕		88	12Ⅲ 967		
	765	土師器	鉢(内黒)	10	Ⅲ				ヨコナデ	ヘラミガキ	高台付		1795			
	766	土師器	鉢	9.5	Ⅲ		14.9				高台付		1094			
	767	土師器	鉢	7	Ⅲ		11.8		磨耗	ナデ	高台付		2088			
	768	土師器	鉢(内朱)	6.5	Ⅲ		9.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	高台付		1556			
	769	土師器	鉢	9.5	Ⅱb		14.8		ヨコナデ	ヨコナデ			646			
	770	土師器	鉢	10	Ⅲ		12.6		ヨコナデ	ヨコナデ			923			
	771	土師器	鉢	6.5	Ⅱb		15.2		ヨコナデ	ヨコナデ			356			
	772	土師器	鉢	10	Ⅲ		12.8		ヨコナデ	ヨコナデ			3166			
	773	土師器	鉢	10	Ⅲ		10.8		ハケメ	ナデ			134	453		
	774	土師器	鉢	12	Ⅲ		10.7			圧痕			545			
	775	土師器	鉢	6.5	Ⅲ		6.8		工具ナデ	ヨコナデ			2545			
	776	土師器	鉢	6.5	Ⅱb		7.0		工具ナデ	ヨコナデ			424			
149	777	土師器	甑	9	Ⅲ	21.2			ヨコナデ	ヘラケズリ			1358			
	778	土師器	甑	9.5	Ⅲ	28.2			部分工具ナデ・ナデ	工具ナデ・工具ケズリ状	把手剥落痕		913	2615	2637	2618
	779	土師器	甑	9.5	Ⅲ	44.9			磨耗	磨耗			1879			
	780	土師器	甑	9	Ⅲ	28.3			磨耗	ヘラケズリ			3457			
	781	土師器	甑	10	Ⅲ	27.0			ヨコナデ	磨耗			2574			
	782	土師器	甑	9.5	Ⅲ	27.0			ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ			792			
	783	土師器	甑	10	Ⅲ	24.4			ヨコナデ	ヨコナデ			4168			
	784	土師器	甑	9.5	Ⅱb		14.4		磨耗	ヘラケズリ	蒸気孔		215			
150	785	土師器	把手	9.5	Ⅲ				ナデ	ヘラケズリ			1879			
	786	土師器	把手	5					ナデ	ヘラケズリ			1422			
	787	土師器	把手	9.5	Ⅲ				ナデ				2633			
	788	土師器	把手	10	Ⅲ				ナデ	ヘラケズリ			3995			
	789	土師器	把手	9.5	Ⅲ				ナデ				2601			
	790	土師器	把手	9	Ⅲ				ナデ				6241			
	791	土師器	把手	9	Ⅲ				ナデ				6248			
	792	土師器	把手	5					ナデ				1422			

第36表　古代遺物観察表12（土師器⑦・須恵器①）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整		備考	残存率	注記番号			
									外面	内面						
150	793	土師器	把手	8	Ⅲ				ハケメ				2255			
	794	土師器	把手付甕	9	Ⅲ				ナデ	ヘラケズリ			4409	4410	6332	
151	795	土師器	カマド形土器	7	Ⅲ				ハケメ				1664			
	796	土師器	カマド形土器	8	Ⅲ					ヘラケズリ			539			
	797	土師器	カマド形土器	6.5	Ⅱb					ナデ			623			
	798	土師器	カマド形土器	9.5	Ⅲ					指ナデ			831			
	799	土師器	カマド形土器	9	Ⅲ				ハケメ	指痕・ケズリ			499			
	800	土師器	カマド形土器	12	Ⅲ					ケズリ			447			
	801	土師器	カマド形土器	6.5	Ⅱb					ケズリ			315	717		
	802	土師器	カマド形土器	6.5	Ⅱb								180			
152	803	土師器	カマド形土器	6.5	Ⅲ				ハケメ	ヘラケズリ			1042			
	804	土師器	カマド形土器	12	Ⅲ	42.7			ハケメ	ヘラケズリ			278			
	805	土師器	カマド形土器	9	Ⅲ								3290			
	806	土師器	カマド形土器	9.5	Ⅲ				ケズリ	指頭痕			1870			
	807	土師器	カマド形土器	12	ミゾ					ケズリ			594			
	808	土師器	カマド形土器	9.5	Ⅲ								1819			
	809	土師器	カマド形土器	10	Ⅲ				ケズリ				3047			
	810	土師器	カマド形土器	12	Ⅲ				タタキメ				108			
	811	土師器	カマド形土器	11	Ⅲ				ハケメ				58			
153	812	土師器	小型壺	9.5	Ⅲ	9.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ			3464			
	813	土師器	小型壺	7.5	Ⅲ	8.2			ヨコナデ	ヨコナデ			274			
	814	土師器	小型壺	6	Ⅱb	8.0			ナデ	ナデ	穴あり		188			
	815	土師器	小型壺	10	Ⅲ		4.4		ヨコナデ	ヨコナデ			2180			
	816	土師器	小型壺	10	Ⅲ		5.6		ヘラミガキ・下ケズリ	ヨコナデ			2585			
	817	土師器	小型壺	9	Ⅲ		8.2		ヨコナデ	ヨコナデ			5734			
	818	土師器	高杯	9.5	Ⅲ				磨耗	磨耗			2479			
	819	土師器	壺	12	Ⅲ				ナデ	ナデ			798			
	820	土師器	タタキを有する甕	14	Ⅲ	31.8			タタキ	ヘラケズリ			209			
	821	土師器	穿孔のある土器	6.5	Ⅱb		4.8		ヨコナデ	ヨコナデ			607			
	822	土師器	刻書土器	7	埋土F		9.6			ナデ	底面に線刻		3109			
	823	土師器	穿孔のある土器品	9	Ⅲ				ナデ	ナデ			2534			
	824	土師器	様状土製品	6.5	Ⅲ				ナデ							
	825	土師器	メンコ形土製品	5	Ⅳ				ハケメ	ナデ			221			
	826	土師器	土錘	13	Ⅲ											
	827	土師器	スプーン	8	Ⅲ				ナデ				2524			
154	828	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅲ	19.2	13.6	11.1	ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	1875			
	829	須恵器	高台付坏	7	Ⅲ		10.8		ヨコナデ	ヨコナデ	底面ナデ		1531	7.5Ⅲ		
	830	須恵器	高台付坏	9	Ⅲ	15.0	11.2	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	2958			
	831	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅲ	14.6	11.0	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	2965			
	832	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅲ	13.6	8.7	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	2604			
	833	須恵器	高台付坏	7	Ⅲ		10.7		ヨコナデ	ヨコナデ			561			
	834	須恵器	高台付坏	9	Ⅲ		10.3		ヨコナデ	ヨコナデ	底面ナデ		5047			
	835	須恵器	高台付坏	7	Ⅲ		10.0		ヨコナデ	ヨコナデ			1525			
	836	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅲ		10.5		ヨコナデ	ヨコナデ	底面ナデ		2502			
	837	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅲ		9.7		ヨコナデ	ヨコナデ			1006			
	838	須恵器	高台付坏	9	Ⅲ		9.8		ヨコナデ	ヨコナデ			2215			
	839	須恵器	高台付坏	6.5	Ⅲ		6.8		ヨコナデ	ヨコナデ	底面ナデ		1824	7-1312		
	840	須恵器	高台付坏	10	Ⅲ		9.5		ヨコナデ	ヨコナデ			1424	2617	6092	
	841	須恵器	高台付坏	10	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ			4443	4904		
	842	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ			1855	2561		
	843	須恵器	高台付坏	9.5	Ⅱb		6.6		ヨコナデ	ヨコナデ			-			
	844	須恵器	高台付坏	10	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ	底面ナデ		6150	6167		
	845	須恵器	坏	8	Ⅲ	13.2	7.8	2.75	ヨコナデ	ヨコナデ	底面回転ヘラケズリ	1/8	2916			
	846	須恵器	坏	9	Ⅲ	15.4	11.4	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	底面回転ヘラケズリ	1/8	2070			
	847	須恵器	坏	9.5	Ⅲ	13.8	8.0	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ	底面回転ヘラケズリ		1842			
	848	須恵器	坏	10	Ⅲ	14.8	9.2	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/10	4627			
	849	須恵器	坏	4	Ⅲ	12.8	7.4	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ			246			
	850	須恵器	坏	9	Ⅲ	11.8	8.4	4.15		底部に線刻	転用硯	3/4	2298	3747		
	851	須恵器	坏	10	Ⅲ		7.6		ヨコナデ	ヨコナデ			2703	5387		
	852	須恵器	坏	7	Ⅲ		6.7		ヨコナデ	ヨコナデ	ひだすき，回転ヘラ切り		1221			
	853	須恵器	坏	11	Ⅲ	12.1	7.0	2.85	ヨコナデ	ヨコナデ			8			
	854	須恵器	埦	7.5	Ⅲ	16.2			ヨコナデ	ヨコナデ			591			
	855	須恵器	埦	10	Ⅲ	17.8			ヨコナデ	ヨコナデ			5499	5502		
	856	須恵器	埦	7.5	Ⅲ	13.0			ヨコナデ	ヨコナデ			652			
	857	須恵器	埦	4	Ⅲ		6.7		ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		70			
155	858	須恵器	蓋	6	Ⅱb	16.9			ヨコナデ	ヨコナデ		1/12				
	859	須恵器	蓋	9	Ⅲ	15.0			ヨコナデ	ヨコナデ		1/12	1677			
	860	須恵器	蓋	9	Ⅲ	15.0			ヨコナデ	ヨコナデ		1/12				
	861	須恵器	蓋	6.5	Ⅲ	17.1		2.4	回転ヘラケズリ	ナデ		4/5	1899			
	862	須恵器	蓋	6.5	Ⅲ	18.6			回転ヘラケズリ	ナデ		1/2	107			
	863	須恵器	蓋	6.5	Ⅲ	14.6			回転ヘラケズリ	ナデ		1/1	1538			
	864	須恵器	蓋	9	Ⅲ	16.3			回転ヘラケズリ	ナデ		1/2	4772			

第37表　古代遺物観察表13（須恵器②）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
	865	須恵器	蓋	7	Ⅲ	14.2			ナデ	ナデ		1/2	1364	1494	Ⅱb2809	
	866	須恵器	蓋	9	Ⅲ	21.8				ヨコナデ	自然釉	1/10	3564			
	867	須恵器	蓋	9.5	Ⅲ	19.0			ヨコナデ	ナデ		1/3	1291	1857	10-6193	10-4416
	868	須恵器	蓋	6.5	Ⅱb				ヨコナデ	ヨコナデ			667			
	869	須恵器	蓋	10	Ⅲ	11.0			回転ヘラケズリ	ナデ	沈線による波状文	1/4	648	2962	4110	4134
155	870	須恵器	皿		Ⅲ	20.2	22.0	16.0	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3				
	871	須恵器	皿	7	Ⅱb	18.2	15.0	2.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	298	Ⅲ1064		
	872	須恵器	皿	6.5	西カヘ	17.0	1.8	14.3	ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	18			
	873	須恵器	皿	10	Ⅲ	16.9	14.0	2.7	ヨコナデ	ヨコナデ		1/10	3433	4629		
	874	須恵器	皿	7	Ⅲ	14.7	10.9	2.95	ヨコナデ	ヨコナデ		1/10	1669			
	875	須恵器	皿	9	Ⅲ	14.6	11.9	23.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ		1/2	6573			
	876	須恵器	皿	9.5	Ⅲ		8.6		ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	1227			
	877	須恵器	甕	9.5	Ⅲ	17.2		41.8	平行文タタキ	平行・同心円当て具痕		1/4	318	1266	2636	2649
	878	須恵器	甕	9.5/10	Ⅱb/Ⅲ	18.6			格子目タタキ	同心円当て具痕		1/3	200	2570	4273	4456
156	879	須恵器	甕	8	Ⅲ	23.2			平行文タタキ	同心円当て具痕		1/4	3526			
	880	須恵器	甕	7.5	Ⅲ	22.1			平行文タタキ	同心円当て具痕		1/2	1345	1829		
	881	須恵器	甕	8	Ⅲ	23.3			格子目タタキ	同心円当て具痕		1/5	1893			
	882	須恵器	甕	8	Ⅲ	21.5			格子目タタキ	同心円当て具痕		1/5	2406			
	883	須恵器	甕	9.5	Ⅲ	21.8			ナデ	同心円当て具痕		1/5	－			
	884	須恵器	甕	7	Ⅳ	20.9			平行文タタキ	ナデ		1/3	3209			
	885	須恵器	甕	10	Ⅲ	20.3			平行文タタキ	同心円当て具痕		1/3	3951			
157	886	須恵器	甕	10	Ⅲ	20.6			格子目タタキ	同心円当て具痕		1/4	2315	2570		
	887	須恵器	甕	14	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ	櫛描波状文		549			
	888	須恵器	甕	9.5	Ⅱb/Ⅲ	46.6			ヨコナデ	ヨコナデ	櫛描波状文	1/5	155	1126		
	889	須恵器	鉢	3	Ⅲ	32.5			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	790			
	890	須恵器	鉢	8	Ⅲ	22.8	12.6	11.2	ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	4881			
	891	須恵器	壺	6.5	Ⅱb	7.5			ヨコナデ	ヨコナデ		1/5	545			
	892	須恵器	壺	9.5	Ⅲ	10.9			ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	2639			
	893	須恵器	壺	7ベ	Ⅲa	13.0			ヨコナデ	ヨコナデ		1/6	2721			
	894	須恵器	壺	7.5	Ⅲ	14.7			ヨコナデ	ヨコナデ		1/3	1359	1364		
	895	須恵器	壺	10	Ⅲ	15.3			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4	969			
	896	須恵器	壺	8	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			2429	3748		
	897	須恵器	壺	8	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			1635			
158	898	須恵器	壺	9	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			3652			
	899	須恵器	壺	14	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			448			
	900	須恵器	壺	12	Ⅲ				平行文タタキ	指頭痕・ナデ	四耳壺		354	736		
	901	須恵器	壺	14	Ⅲ		11.2		平行文タタキ				34	519		
	902	須恵器	壺	9.5	土				格子目タタキ	ナデ			6927			
	903	須恵器	壺	9.5	Ⅲ				平行文タタキ	ナデ			1051			
	904	須恵器	壺	9.5	Ⅱb				平行文タタキ	ナデ			759			
	905	須恵器	壺	6.5	Ⅱb				格子目タタキ	ナデ			959			
	906	須恵器	壺	8	Ⅲ		13.0		タタキ	ナデ			3661			
	907	須恵器	壺	12	Ⅲ		13.0		平行文タタキ後ヨコナデ	ナデ			692	11.5表		
	908	須恵器	壺	12	Ⅲ		13.0		平行文タタキ後ヨコナデ	ナデ			187			
	909	須恵器	壺	7.5	Ⅱb		11.2		格子目タタキ	ナデ			105	Ⅲ968		
	910	須恵器	壺	9	Ⅲ		13.2		平行文タタキ	ナデ	焼成不良・灰白色		4854			
	911	須恵器	壺	8	Ⅲ		10.9		格子目タタキ	工具ナデ			613			
	912	須恵器	壺	5	Ⅲ		8.0		ヨコナデ	ナデ			1422			
159	913	須恵器	壺	11.5	Ⅰ		6.0		ヨコナデ	ヨコナデ	底面ヘラ記号あり					
	914	須恵器	壺	8	Ⅲ		7.7		ヘラケズリ	ヨコナデ			1869			
	915	須恵器	長頸壺頸部	9.5	H13				ナデ	ヨコナデ			3813			
	916	須恵器	壺	9	Ⅱ				ヘラケズリ	ヨコナデ			488			
	917	須恵器	壺	7	Ⅳ				㊤ヘラケズリ ㊦ヨコナデ	ヨコナデ			2481	1883		
	918	須恵器	壺	14	Ⅲ				ヘラケズリ	同心円当て具痕			435			
	919	須恵器	壺	6.5	Ⅱb		10.8		ヨコナデ		底部内面同心円当て具痕		248			
	920	須恵器	壺	7	Ⅳ		5.9		回転ヘラケズリ	ヨコナデ	上から突き痕		2316			
	921	須恵器	水差し	7	Ⅲ	3.9			ヨコナデ	ヨコナデ		1/3				
	922	須恵器	水差し	10	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ	口は細かく打ち欠き使用している	1/3	5170			
	923	須恵器	水差し	10	Ⅲ	6.2			ヨコナデ	ヨコナデ		1/4				
	924	須恵器	水差し	7.5	Ⅲ		4.0		ヨコナデ	ヨコナデ			1534	7ベⅢa2745		
	925	須恵器	小型丸底壺	9.5	Ⅱ	5.2			ナデ	ナデ		1/8	1590			
	926	須恵器	小型丸底壺	14	Ⅲ	10.0			回転ヘラケズリ	ヨコナデ		1/6	535			
160	927	須恵器	高杯	9.5	Ⅲ		9.5		ヨコナデ	ヨコナデ			4742			
	928	須恵器	高杯	10	Ⅲ		6.2		ヨコナデ	ヨコナデ			2293			
	929	須恵器	高杯	14	Ⅲ				ヨコナデ	ヨコナデ			624			
	930	須恵器	鉄鉢	9.5	Ⅲ	19.4			ヨコナデ	ヨコナデ			788			
	931	須恵器	鉄鉢	7	Ⅲ	8.5			ヨコナデ	ヨコナデ		1/10	1387			
	932	須恵器	甕	12	Ⅲ				ナデ	ナデ		1/8				
	933	須恵器	横瓶	11	Ⅲ					ヨコナデ	横瓶か					
	934	須恵器	風字硯	7/8	Ⅲ				ケズリ・ナデ	ナデ			299	6T213	535	
161	935	須恵器	獣脚(硯)	6T	Ⅲ				ナデ		獣脚硯(脚部)		260			
	936	須恵器	転用硯(蓋)	6.5	Ⅲ	15.5			ヨコナデ	ヨコナデ	打ち欠き整形		1176			

第38表　古代遺物観察表14（須恵器③転用硯）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		口径(cm)	底径(cm)(高台径)	器高(cm)	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号			
161	937	須恵器	転用硯(蓋)	9	Ⅲ	14.4			ヨコナデ	ヨコナデ			1343			
	938	須恵器	転用硯(蓋)	6.5	Ⅲ	16.0		1.8	ヨコナデ	ヨコナデ	打ち欠き整形		3748			
	939	須恵器	転用硯(蓋)	6	Ⅱb	16.2			ヨコナデ	ヨコナデ			6			
	940	須恵器	転用硯(蓋)	6.5	Ⅱb	16.2			ヨコナデ	ヨコナデ			732			
	941	須恵器	転用硯(蓋)	6	Ⅲ	11.2			回転ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ		795			
	942	須恵器	転用硯(蓋)	9	Ⅲ	16.0			回転ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ		3830			
	943	須恵器	転用硯(蓋)	9	Ⅲ	12.0			回転ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ		2706			
	944	須恵器	転用硯(蓋)	10	Ⅲ				回転ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ		1562			
162	945	須恵器	転用硯(高台付坏)	8	Ⅲ		12.2		ヨコナデ	ヨコナデ	打ち欠き整形		2427			
	946	須恵器	転用硯(高台付坏)	15	Ⅲ		13.2		回転ヘラケズリ	ナデ	打ち欠き整形		849			
	947	須恵器	転用硯(高台付坏)	9.5	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ	打ち欠き整形		1363			
	948	須恵器	転用硯(高台付坏)	9	Ⅲ		11.1		ヨコナデ	ヨコナデ			174			
	949	須恵器	転用硯(高台付坏)	6.5	Ⅱb		11.1		ヨコナデ	ヨコナデ			755			
	950	須恵器	転用硯(高台付坏)	7	Ⅲ		8.5		ヨコナデ	ヨコナデ			746			
	951	須恵器	転用硯(高台付坏)	10	Ⅲ		9.6		ヨコナデ	ヨコナデ			4321			
	952	須恵器	転用硯(高台付坏)	9.5/10	Ⅲ	15.1	9.8	5.4	ヨコナデ	ヨコナデ			1439	4440		
	953	須恵器	転用硯(高台付坏)	6.5	Ⅱb		8.4		ヨコナデ	ヨコナデ			638			
	954	須恵器	転用硯(坏)	10	Ⅲ	14.2	9.6	3.35	ヨコナデ	ヨコナデ・回転ヘラケズリ			2581			
	955	須恵器	転用硯(坏)	7	Ⅲ		12.6		ヨコナデ	ヨコナデ			1466			
	956	須恵器	転用硯(坏)	7.5	Ⅲ		7.4		ヨコナデ	ヨコナデ			954			
	957	須恵器	転用硯(坏)	15	Ⅰ	10.3	7.6	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ			1591			
	958	須恵器	転用硯(皿)	10	Ⅲ	20.2	16.6	1.7					3816			
	959	須恵器	転用硯(埦)	8	Ⅲ		9.1		ヨコナデ	ヨコナデ			3674			
	960	須恵器	転用硯(甕)	5	Ⅲ				格子目タタキ	平行当て具痕	猿面硯		1422			
163	961	須恵器	転用硯(甕)	6.5	Ⅲ				格子目タタキ	平行当て具痕	猿面硯・朱色付着		1388			
	962	須恵器	転用硯(甕)	5	Ⅳ				平行文タタキ	当て具痕・ナデ	打ち欠き整形		1339			
	963	須恵器	転用硯(甕)	9.5	Ⅲ				格子目タタキ	同心円当て具痕	打ち欠き整形		1394			
	964	須恵器	転用硯(甕)	7	Ⅲc				格子目タタキ	同心円当て具痕	黒い墨付着		3070			
	965	須恵器	転用硯(甕)	7.5	Ⅲ				格子目タタキ	同心円当て具痕	黒い墨付着		1028			
	966	須恵器	転用硯(甕)	8	Ⅲ				平行文タタキ	同心円当て具痕			698	749		
	967	須恵器	転用硯(甕)	7.5	Ⅲ				格子目タタキ	同心円当て具痕			868			

第39表　古代遺物観察表15（未実測転用硯）

取上番号	種類	器種	出土区・層		調整 外面	調整 内面	備考
1180	転用硯	蓋	9.0	Ⅲ			輪状つまみ
220	転用硯	蓋	7.5	Ⅱb			偏平つまみ
1009	転用硯	蓋	6.5	Ⅱb			偏平つまみ
4209	転用硯	蓋	9.5	深堀	天井部回転ヘラケズリ		偏平つまみ
1322	転用硯	蓋	9.5	Ⅱ			偏平つまみ
706	転用硯	蓋	12.0	Ⅲ			つまみ剥落痕あり
	転用硯	蓋	9.5	Ⅱb			つまみ剥落痕あり
995	転用硯	蓋	6.5	Ⅱb			
2403	転用硯	蓋	9.0	Ⅲ			
2161	転用硯	蓋	9.0	Ⅲ			
1119	転用硯	蓋	15.0	Ⅲ			
	転用硯	蓋	6.5	Ⅳ	天井部回転ヘラケズリ		
3240	転用硯	蓋	10.0	Ⅲ			
341	転用硯	蓋	15.0	Ⅲ			
2043	転用硯	蓋	7.5	Ⅲ			
439	転用硯	蓋	7.5	Ⅲ	天井部回転ヘラケズリ		天井部回転ヘラケズリ
1491	転用硯	蓋	9.5	Ⅲ			
1116	転用硯	蓋	15.0	Ⅲ	天井部回転ヘラケズリ		
4285	転用硯	蓋	10.0	Ⅲ			
88	転用硯	蓋	15.0	Ⅲ			
425	転用硯	坏	15.0	Ⅲ	ヨコナデ	ヨコナデ	
428	転用硯	坏	6.0	Ⅱb	ヨコナデ	ヨコナデ	
1184	転用硯	高台付坏	7.0	Ⅲ	ヨコナデ	ヨコナデ	
568	転用硯	高台付坏	7.0	Ⅲ	ヨコナデ	ヨコナデ	
507	転用硯	高台付坏	15.0	Ⅲ	ヨコナデ	ヨコナデ	
1397	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
995	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
727	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
2869	転用硯	甕	10.0	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
585	転用硯	甕	5.0	Ⅳ	格子タタキ	格子状当て具痕	
1168	転用硯	甕	7.0	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
511	転用硯	甕	14.0	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
1799	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	平行タタキ	同心円当て具痕	
1818	転用硯	甕	6.5	Ⅲ	平行タタキ	平行文当て具痕	
1432	転用硯	甕	5.0	Ⅳ	平行タタキ	同心円当て具痕	
1710	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
810	転用硯	甕	8.0	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	1759と接合
257	転用硯	甕	9.5	Ⅱb	格子タタキ	同心円当て具痕	
357	転用硯	甕	14.0	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	側面を研磨
2711	転用硯	甕	8.0	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	
1044	転用硯	甕	7.5	Ⅲ	格子タタキ	同心円当て具痕	1616・1724(2コ)

３　緑釉陶器（第164図　968～990）

緑釉陶器は，調査区全体から合計で23点出土した。古代の包含層であるⅢ層から大部分が出土し，Ｋ９～10区にやや集中が見られる。古代の遺物全体から比べると少量であるが，古代を代表する指標遺物であり，県内での出土数量も少なく，調査面積も狭いことから，非常に多くの出土点数であると言える。完形品の出土はなく，小破片で器種の不明なものも多いが，埦，皿，盤，三足盤，壺，合子など多彩なものが出土している。

生産地は，京都系，長門系，近江系に大別される。各産地別の大まかな特徴は以下の通りである。

京都系・・・土師質の胎土に淡黄緑色の施釉であり，削り出し高台を有する。ミガキ調整を施すものが多い。釉層が薄く，ハケむらも見られる。独特な花文を描くものもある。

長門系・・・軟質で土師質の胎土に淡緑色の施釉であり，貼付高台を有する。胎土は白色で，粉状になるものも多く，釉の剥落が目立つ。釉の色むらが無く均質で等厚である。

近江系・・・須恵質の胎土に濃緑色の施釉であり，貼付高台を有する。輪高台が多く，断面は方形ないし三角形である。回転ナデ，ケズリ調整を施し，ヘラミガキは見られない。

出土品の半数は京都系であり，国分寺に近いことから，中央との盛んな交流が推測される。時期的には9～11世紀初頭までと幅広いが，9～10世紀頃のものが主流である。

出土した23点は全て図化した。この項では器種ごとにまとめ，器種不明なものは産地ごとにまとめた。緑釉陶器の調査区別の出土状況については，第171図に示した。併せて遺構内出土のものについても，この項で取り扱った。

埦（第164図　968～974）

968，969は，京都系の埦である。968は，6号住居跡から出土した底部が低い削り出しの高台であり，畳付は内側を斜めに削り，一部に熔着が見られる。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり，上位でわずかに屈曲し稜が巡る。口唇部は丸く仕上げ，やや外反する。淡黄色の釉を全面施釉後，高台内を掻き取り，外面下位にケズリ調整痕が筋状に巡っている。969は，口縁端部が小さく外反するもので，口唇部を丸く仕上げ，内外面に細かいケズリ調整を施している。

970～972は，長門系の埦である。970は，口縁端部がわずかに外反するもので，外面屈曲部にケズリ調整痕が凹みとなって残る。971は外反が乏しく，端部外面が幅広の凹線状に凹む。972は，円盤状の高台を貼り付けたもので，切り離しは糸切りと思われるが，回転ヘラケズリ調整により痕跡は残らず，内面に沈線状の凹みが巡っている。淡緑色の釉が全面施釉され，摩耗により一部剥落している。

973，974は，近江系の埦である。973は口縁部が直口し，口唇部外側が尖り気味である。974は，やや高めの貼付輪高台を持つ底部であり，K15区の３号住居跡の埋土中より出土したものである。裾部で外反し接地面の外側が尖り気味に張り出している。内部底面にヘラケズリ調整を施す。須恵質の精良な胎土に濃緑の釉を施し，全体的に丁寧な作りである。

皿（第164図　975～977）

975～977は皿であり，975は長門系，976，977は京都系と思われる。975は，やや内湾する体部上位が口縁端部で強く外反するもので，口唇部は垂れ気味に尖っている。胎土は粗めで砂粒が混り，淡黄緑色の釉を施しているが内面の剥離が激しい。976は，６号住居跡から出土した削り出しによ

る蛇の目釉高台を呈する底部である。内面に直接重ね焼きによる目跡が残る。施釉が薄く，高台内は無釉であり，畳付部の釉は掻き取られている。977は，輪高台を呈する底部である。高台外側を斜めに削り，畳付部の釉を掻き取っている。高台内は無釉であり，ケズリ調整痕が明瞭に残る。内面に重ね焼きによる目跡が三日月状に残る。

盤（第164図　978）

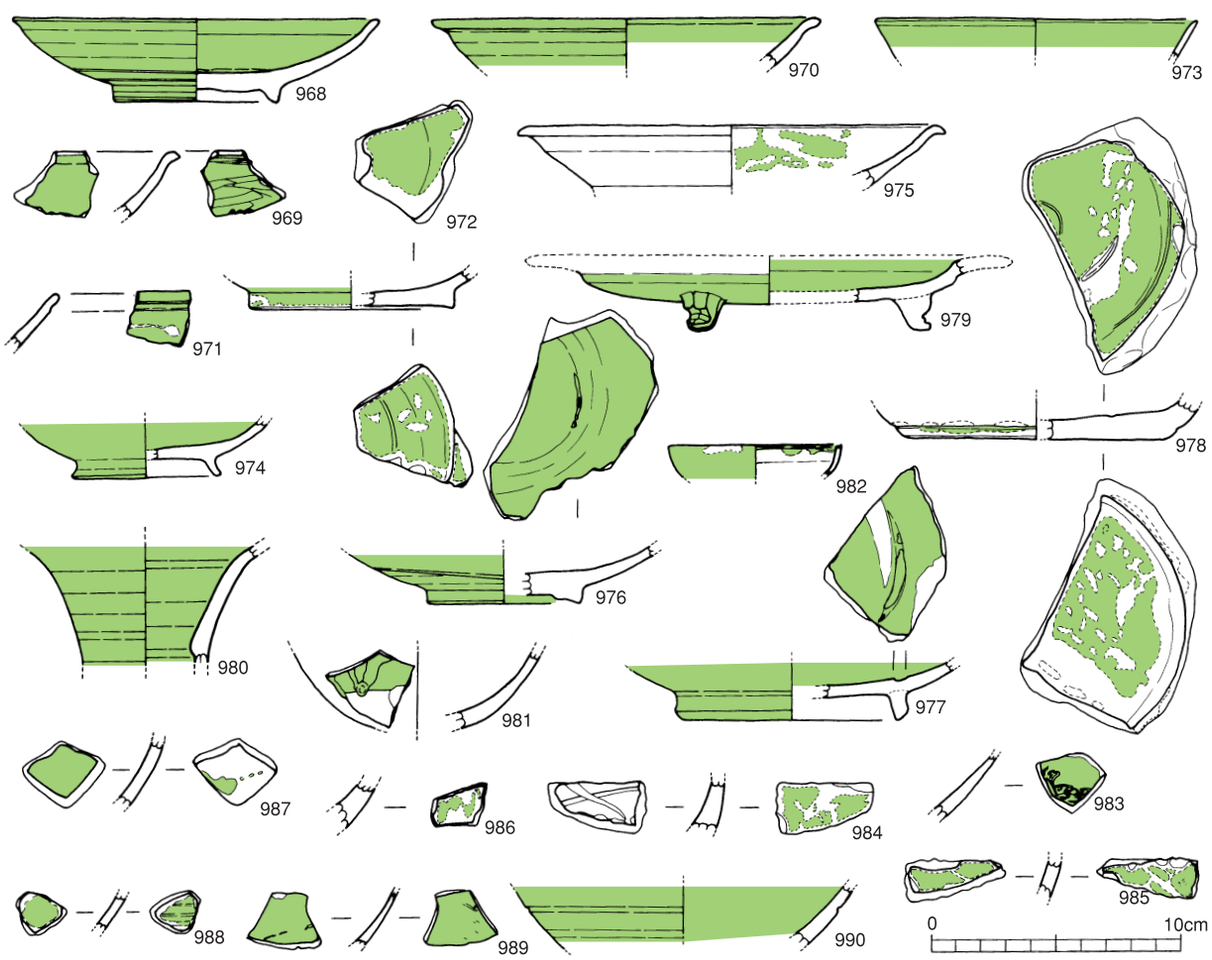
978は高台状の平底で，底径が11.2cmと大きい皿形を呈することから盤として取り扱った。底部のみの出土のため全体器形は不明であるが，底部と胴部の境目に大きな段を持ち，内湾しながら立ち上がるもので，摩滅が激しく釉はほとんど残らない。

三足盤（第164図　979）

979は，短めの獣足状の足を付けた底部であり，皿状を呈するものに三足を付けた三足盤の底部である。底部のみの出土のため全体器形は不明であるが，体部に段を持ち，口縁端部が短く外へ水平に引き出される，狭縁段皿を呈すると思われる。獣足状の足は，ヘラで面取成形されている。三足盤の生産量は少なく，生産されたものも灰釉陶器が主体であり，緑釉陶器は極めて少ないことから貴重な資料である。

壺（第164図　980，981）

980は，強く締まった頸部から口縁部へ向かって大きく外反する壺状の頸部である。外面は回転横ナデを施し，丁寧に仕上げている。胴部形態は不明であるが，境目内側に大きな段を有し，広口



第164図　古代の遺物36（緑釉陶器）

の水注，水瓶の可能性もある。施釉は薄く，淡黄緑色である。981は，袋状を呈する底部であり，内面及び外面下位は無釉である。緑色の施釉に濃緑色の釉垂れが残る。中世の可能性もある。

合子（第164図　982）

982は，半球形の胴部に口縁部に直立気味な蓋受けを作り出した合子の坏部である。内面は無釉であり，外面に淡青白色の釉である。受け部に緑色の釉が一部付着している。

その他（第164図　983～990）

983～990は，器種不明なもので，胴部の一部であると思われる。

983～986は，京都系のもので，精製された胎土に黄緑釉を施すものである。983は，内面に花文が描かれており，上位の釉は摩滅して剥げ落ちている。984，986は，内面は無釉であり，回転ケズリ調整痕が筋状に巡っている。

987，988は，長門系のものであり，軟質な白色胎土に釉が施されている。987の釉色は淡緑色であるが，器面の摩耗が激しく外面の釉がほぼ摩滅している。988は，両面に緑色の釉を施しているが，内面の釉には気泡が含まれている。

989，990は，須恵質の灰色胎土に施釉したものである。989は，淡緑色の薄い釉が全面に掛かり，内面に回転ナデ調整痕が残る。990は，深緑色の釉であり，外面に回転ヘラケズリ調整痕が筋状に巡り，沈線状に凹む。

第40表　古代遺物観察表15（緑釉陶器）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	部位	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	備　考	出土区・層		注記番号
164図	968	緑釉陶器	埦	口～底	灰	淡黄緑	－	良好	14.8	6.8	3.3	京都	畳付に溶着、高台内釉剥ぎ	9.5 10	H6 Ⅲ	2230 297
	969	緑釉陶器	埦	口縁部	灰白	淡黄緑	－	良好	－	－	－	京都	ケズリ調整痕	13	Ⅲ上	―
	970	緑釉陶器	埦	口縁部	灰白	黄緑	－	やや軟	15.6	－	－	長門		14	Ⅲ	366
	971	緑釉陶器	埦	口縁部	白	淡黄緑	－	良好	－	－	－	長門		10	Ⅲ	637
	972	緑釉陶器	埦	底部	白	黄緑	－	良好	－	8.2	－	長門		12	Ⅲ	148
	973	緑釉陶器	埦	口縁部	灰	濃緑	－	堅緻	13.0	－	－	近江		3	Ⅲ	766
	974	緑釉陶器	埦	底部	暗灰	緑	－	堅緻	－	6.0	－	近江		15	H3 Ⅲ	6781 186
	975	緑釉陶器	皿	口縁部	白	黄緑	－	良好	17.2	－	－	長門	施釉(部分剥離)	5	Ⅳ	498
	976	緑釉陶器	皿	底部	灰	淡黄緑 高台内赤橙	高台内	堅緻	－	6.2	－	京都	目痕、釉剥ぎ、蛇の目高台	9.5	H6	2254
	977	緑釉陶器	皿	底部	灰白	淡黄緑 白	高台内	不良	－	9.2	－	京都	カマ道具痕、釉剥ぎ	8	Ⅲ	3888
	978	緑釉陶器	盤	底部	白	淡黄緑	－	軟	－	11.2	－	京都	施釉剥離	7	Ⅲ	1156
	979	緑釉陶器	三足盤	胴～底	灰	黄緑	－	良好	－	14.8	－	京都	脚アリ	10	Ⅲ	1053 2198
	980	緑釉陶器	壺	頸部	灰白	淡黄緑	－	良好	－	－	－	長門		10	Ⅲ	263 1342
	981	緑釉陶器	壺	底部	灰	緑	下部	良好	－	(10.0)	－	中国?	自然釉、釉垂れ	11	Ⅲ	―
	982	緑釉陶器	合子	口縁部	茶褐	淡青白	内面	良好	7.0	－	－	京都?	釉垂れ	12	ミゾ	―
	983	緑釉陶器		胴部	灰白	淡緑	－	良好	－	－	－	京都	花文	9.5	Ⅲ	832
	984	緑釉陶器		胴部	灰白	黄緑	内面	良好	－	－	－	京都	ロクロ目	16	4T	―
	985	緑釉陶器		胴部	灰白	黄緑	－	良好	－	－	－	京都		11	P	―
	986	緑釉陶器		胴部	白	淡黄緑	－	やや軟	－	－	－	長門	施釉(一部残存)	10	土	8
	986	緑釉陶器		胴部	灰	淡緑灰	－	良好	－	－	－	近江		3	Ⅲ	55
	987	緑釉陶器		胴部	白	黄緑	－	良好	－	－	－	長門		15	Ⅲ	一括
	988	緑釉陶器		胴部	白	淡黄緑	－	やや軟	－	－	－	長門	ナデ	2	Ⅱ	100
	990	緑釉陶器		胴部	灰	緑	－	良好	－	－	－	近江	ロクロ目	6.5	Ⅱb	一括

４　越州窯系青磁（第165･166図　991～1047）

越州窯系青磁は，K6～10区を中心に，調査区全体から合計で86点出土した。緑釉陶器と同様に，古代を代表する指標遺物であり，県内での出土数量も少ないことから，多くの出土点数であると言える。完形品の出土はなく，碗型のものが大部分を占め，大碗，坏，皿なども出土した。出土した86点中56点について図化した。また，越州窯系青磁の調査区別の出土状況については，第171図に示した。併せて遺構内出土のものについても，この項で取り扱った。

ここでは器種ごとに取り扱うが，越州窯系青磁の分類基準については，大宰府陶磁器分類に従ってⅠ～Ⅲ類に大別した。各類の主な特徴は以下の通りである。

Ⅰ類‥‥精製された胎土に全面施釉を行い，高台畳付きの釉を削り目跡が付くもの。

Ⅱ類‥‥胎土が粗く黒色粒子の斑点が入り，部分施釉で発色が悪くむらが多いもの。

Ⅲ類‥‥精製された胎土に全面施釉で，高い高台を持ち畳付内に目跡が付くもの。底部内面に彫り文様を施すものもある。

碗　(第165.166図　991～1036)

991～1014は，碗のⅠ類の口縁部であり，精良な胎土に発色の良い釉を施すものである。

991～1006は，胴部下位でわずかに膨らみ，直線的に開く直口の碗である。全面に釉が掛かり，口唇部を丸く仕上げている。991は，口縁部外面にわずかに稜が残る。992は，口唇部へ向かって先細りし，外面下位に削り調整の凹みが残る。993は，口唇部外側が内傾し尖り気味である。外面下位に工具痕の凹みが筋状に残り，釉薬への貫入が顕著である。994は，胎土中に細かい砂粒が混ざる。995，996は，外面にハケメ調整痕が明瞭に残る。997は，外面の施釉に細かい気泡が見られる。1000は，外面に横ナデ調整による凸凹があり，口唇部は外反気味である。1001は，器壁が薄く，小型の碗であると思われる。1002は，内外面に小さな凸凹が巡っており，二次焼成を受け釉が鈍い明黄褐色化し，一部釉落している。1003は，胴部がやや内湾気味に立ち上がる。1005は，焼成が不十分であり発色が悪い。

1007～1020は，輪高台の底部からほぼ直線的に立ち上がり，口縁端部がわずかに外反するものである。1007は，輪高台端部の外側を斜めに削っている。胴部は緩やかに立ち上がり，口唇部は外反気味である。外面下位の器面調整が粗く，底部との境目に段を持つ。底部内面に細長い目跡が環状に付いている。高台外面に工具による凹みが残る。1008～1012は，口縁端部が小さく外反する端反碗の口縁部である。全体的に焼成が悪く，発色が悪い。1008，1011は，肥厚で口唇部を丸く仕上げている。1009，1010は，口唇部外側を尖らせ，先細りである。1012は，口縁端部を肥厚させ外反するもので，内外面との回転横ナデ調整を施している。

1013，1014は，口縁部が内湾するものである。1013は，緩やかに立ち上がり口縁部で強く内湾する。先細りであり，口唇部を丸く仕上げている。1014は，口縁部がわずかに内湾するもので，口唇部を肥厚させ口唇内側に稜をもつものである。

1015～1017，1021はⅡ類であり，黒色斑点を含む粗い胎土に，発色の悪いむらのある釉を掛けたものである。1015は，口唇部内側が反り尖った口縁部を呈する碗である。釉が粗く，剥離が激しい。1016，1017は，外面の胴部下位に施釉を行わないもので，釉が粗く黒色斑点が見られる。1021は，施釉にむらがあり，発色の濃淡が筋状になる。

1018～1020は，外面にヘラ描き押圧縦線を持つものである。1018は，器壁が上位へ向かって内湾しながら薄くなり，外面に幅広の押圧縦線文が残る。全面に灰オリーブ色の釉が掛かる。1019は，外面の発色が弱い。1020は，押圧縦線文が細くて浅い。

1022～1033はⅠ類の底部であり，蛇の目高台，輪高台，平底を呈するものがある。

1022は，蛇の目高台をもつ底部である。底部内面に重ね焼きの目跡が無く，全面施釉後，畳付部分の釉を削り取っている。高台は削り出しの低いもので，畳付に窯道具の溶着が見られる。

1023～1025は，やや幅の狭い蛇の目高台を持つものである。1023は，直線的に大きく立ち上がるもので，底部内外面に目跡があり，胴部下位以下は無釉である。1024は，底部内面に目跡が残り，別個体の一部が溶着している。1025は，焼成が不十分で釉の剥離が見られるが，底部内外面に楕円形の目跡が環状に残る。畳付の釉が削り取られ，胴部下位に沈線が巡る。

1026～1029は，輪高台を呈するものである。1026は，全面施釉後畳付の釉を削る底部内面に目跡を残すが，溶着のため一部剥離し凹みとなっている。1027は，やや高めの輪高台であり，低部内外面に楕円形の目跡が残る。1029は，削り出しによる低い輪高台で胴部との境目を深く削り込み凹んでいる。胴部下位以下は無釉であり，高台畳付けに楕円形の目跡が残る。

1030は，粗く削りだした蛇の目高台を持ち，直線的に開く胴部との境が不明瞭なものである。底部内面に目跡はなく，高台畳付に目跡が残る。二次焼成を受け釉薬が無くなっている。

1031～1033は平底を呈するものである。1031は，器壁が薄く，底部上位に段を作り，高台状に仕上げ，内面と外面最下部の斜行部に目跡を持つものである。外面下位以下は無釉である。

1032は，外面最下部の斜行部以下は無釉である。底面のヘラ切り離し痕は未調整であり，凸凹している。1033は上げ気味の平底を持つもので，斜行部にヘラ削り痕が粗く残る。内面に平坦面を持ち，別個体の一部が溶着している。胴部中位以下は無釉で，指ナデ調整を施している。

1034～1036は，Ⅱ類の底部であり，胎土中に黒色砂粒を含み，上げ底気味の円盤状高台を持つものである。円盤状高台の切り離し痕は丁寧にナデ消されている。1034は，化粧掛けを行い施釉しており，高台以下は無釉であるが，発色が悪く気泡が混ざる。1035，1036は，胎土が粗く，胎土中や器面全体に黒色斑点が多数残る。外面中位以下は無釉であり，指ナデ調整を施す。同一個体の可能性がある。

大碗(第166図　1037～1042)

1037～1042は，碗よりも一回り大型のもので，口径20㎝前後のものを大碗とした。

1037は，直口する大碗の口縁部である。外面に横ナデ調整による凸凹がわずかに残る。

1038は，底面を浅く斜めに削り高台を作り出した輪高台の底部である。全面施釉後に畳付の釉を削り取っている。内外面に細長い目跡が，環状に残っている。

1039～1041は，外面に押圧縦線文を描き入れたものである。底部は輪高台を呈し，底部内面に平坦面を持つ。底部から膨らみを持ちながら直線的に立ち上がり，口縁部がわずかに外反する。1039は，肥厚した底部を持ち，高台断面は方形である。ヘラ削り調整の後で，丁寧な指ナデ調整を施したものである。二次焼成を受けたと思われ，施釉は全て消失している。1040は，幅広で深い押圧縦線文を施したもので，押圧による凸が内面の縦方向に見られる。1041は，やや細めの輪高台を呈し，明オリーブ色の釉が全面に掛けられている。

1042は，底部外面周囲と底部中央を浅く削って肥厚な高台としたものであり，胴部が直線的に広がる。口縁部形態は不明である。

坏(第116図　1043～1044)

1043は，平底で，底形8.2㎝の坏の底部である。底部のみのため全体器形は不明である。全面施釉後，底面の釉を拭き取っている。内面に目跡はなく，底面に楕円形の目跡が環状に残る。

1044は，口縁端部に2つに分かれた花形を造り，胴部外面に押圧縦線文を施した坏の口縁部である。口縁端部はわずかに外反し，口唇部を丸く仕上げている。先端の釉は一部剥離している。

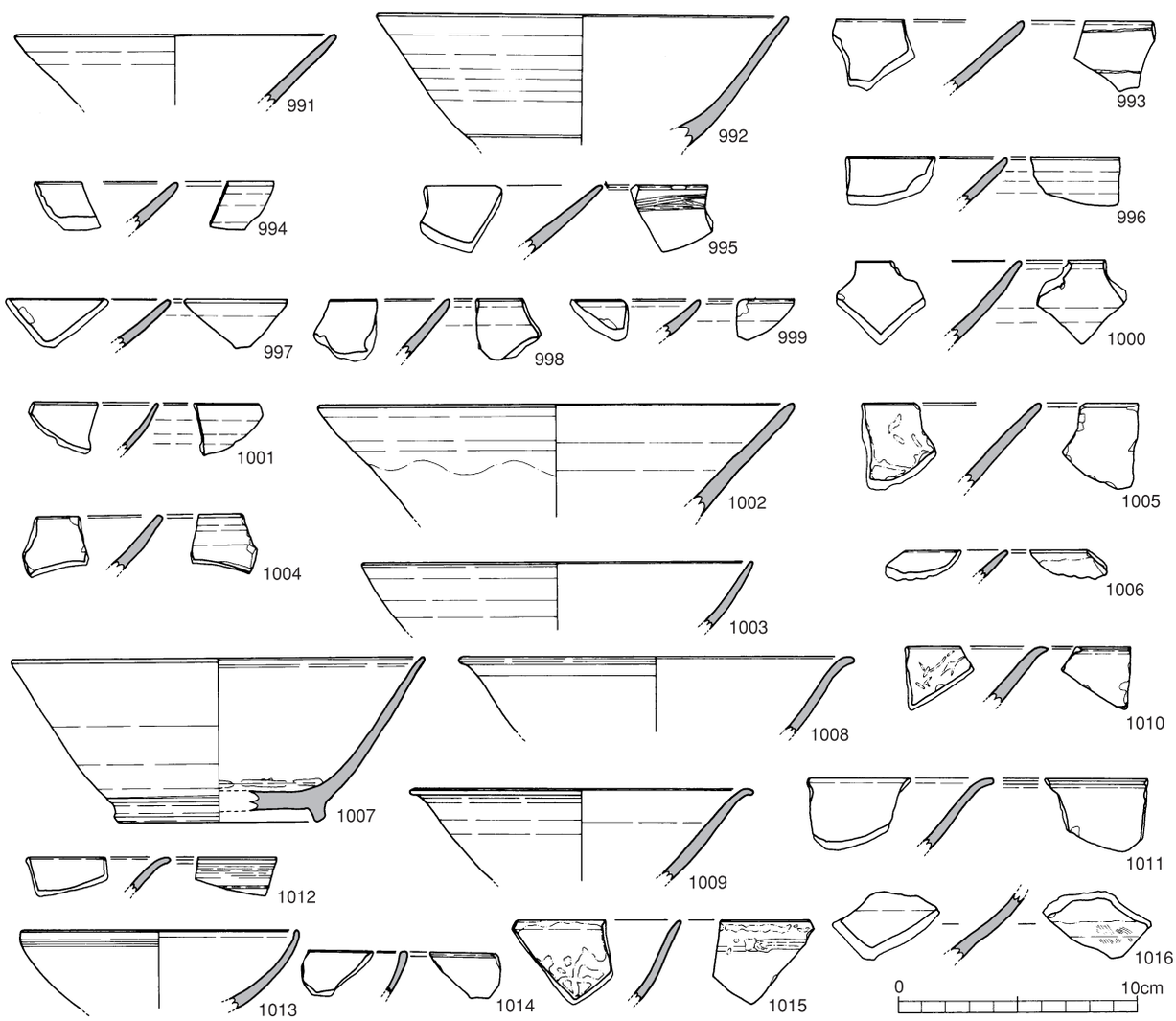
皿(第116図　1045～1046)

1045は，口縁端部が外反し，口唇部をわずかに凹まして花形に造る皿である。口縁部外側を垂れ気味に尖らせ，口唇部断面形態は方形を呈する。

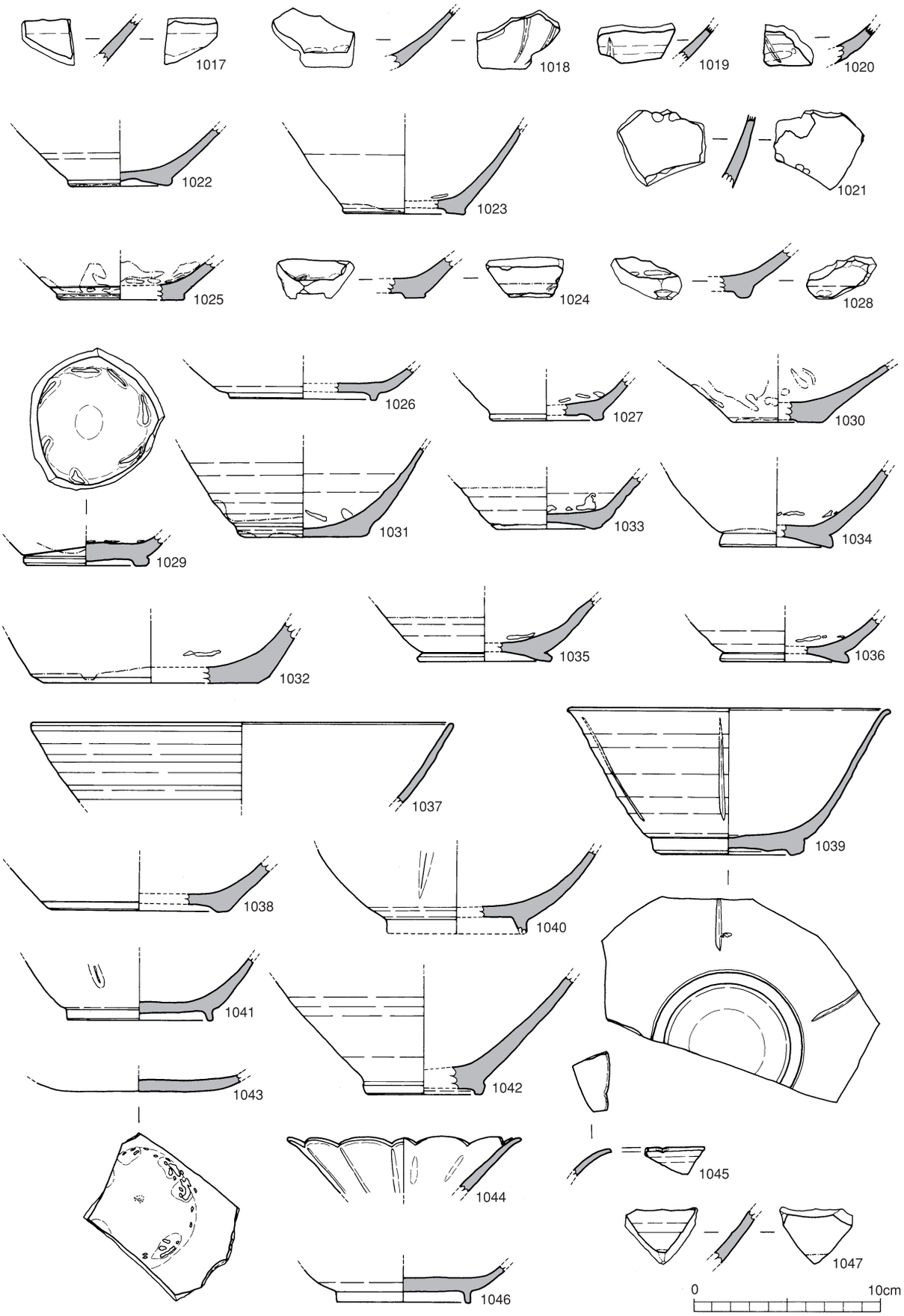
1046は，低く狭い輪高台を持つ皿の底部である。内面は広い平坦面を持ち，胴部は緩やかに立ち上がる。全面施釉後，高台畳付の釉を削り取り，目跡が残る。内面に目跡は見られない。

壺(第166図　1047)

1047は，袋状を呈した壺の底部近くであり，下位は無釉である。内面に回転横ナデ調整痕が凹みとなって残る。細砂を多く含むなど胎土は粗く，釉の発色も弱い。



第 165 図　古代の遺物 37（越州窯系青磁①）



第 166 図　古代の遺物 38（越州窯系青磁②）

第41表　古代遺物観察表17（越州窯系青磁）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	部位	分類	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	貫入	発色	法量(cm) 口径	底径	器高	備考	出土区・層		注記番号
165図	991	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	灰オリーブ	無	良	無	有	13.4	－	－		9.5	Ⅲ Ⅱb	1357 342
	992	越州窯青磁	碗	口～胴	Ⅰ-1	灰白	灰オリーブ	無	良	有	有	17.2	－	－		8	Ⅲ	1798
	993	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	灰オリーブ	無	堅緻	有	有	－	－	－	工具痕による沈線	14	Ⅲ	17
	994	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	灰オリーブ	無	良	有	有	－	－	－		7.5	Ⅲ	1523
	995	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	オリーブ灰	無	良	無	有	－	－	－	ハケメ	9.5	Ⅲ	1132
	996	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰	灰オリーブ	無	良	有	有	－	－	－		12	Ⅲ	154
	997	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	淡黄	灰オリーブ	無	良	有	有	－	－	－		14T	Ⅲ	254
	998	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰	オリーブ黄	無	良	無	有	－	－	－		10	Ⅲ	953
	999	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	オリーブ黄	無	良	無	有	－	－	－		10	Ⅲ	－
	1000	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰	オリーブ黄	無	良	有	弱	－	－	－		9	Ⅲ	4963
	1001	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	オリーブ黄	無	良	無	有	－	－	－		6.5	Ⅲ	1441
	1002	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰	明黄褐	無	良	無	無	20.1	－	－		9.5	Ⅲ	1110
	1003	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰	オリーブ黄	無	良	無	無	16.4	－	－		7	Ⅱb	23
	1004	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	オリーブ黄	無	良	有	弱	－	－	－		9.5	Ⅱb	－
	1005	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰	オリーブ黄	無	やや良	無	無	－	－	－	釉薬剥離	7	Ⅲ	1397
	1006	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-1	灰白	灰オリーブ	無	良	無	弱	－	－	－	釉薬剥離	10	Ⅱ	－
	1007	越州窯青磁	碗	口～底	Ⅰ-2ウ	灰白	オリーブ黄	無	良	無	有	17.2	8.8	7.8	輪状高台 畳付釉削り	6.5	Ⅱb　Ⅲ	365 1304
	1008	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-2	灰白	オリーブ黄	無	良	無	弱	16.6	－	－		9.5	Ⅱb	80
	1009	越州窯青磁	碗	口～胴	Ⅰ-2	灰	灰オリーブ	無	良	無	弱	14.4	－	－	ろくろ目	6	Ⅱb	282
	1010	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-2	灰黄	オリーブ黄	無	やや良	無	弱	－	－	－	釉剥離	9拡	Ⅲ	－
	1011	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-2	灰白	オリーブ黄	無	良	無	弱	－	－	－		10	Ⅲ	4365
	1012	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-2	灰白	灰オリーブ	無	良	無	弱	－	－	－	ろくろ目	6.5	Ⅱb	458
	1013	越州窯青磁	碗	口～胴	Ⅰ-3	灰白	灰オリーブ	無	良	無	有	10.6	－	－		7	Ⅱb	2539
	1014	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅰ-3	灰白	オリーブ灰	無	良	無	有	－	－	－		14	Ⅲ	100
	1015	越州窯青磁	碗	口縁部	Ⅱ-2c	灰	黄緑 浅黄	無	やや良	有	無	－	－	－	剥離	5	Ⅳ	915
	1016	越州窯青磁	碗	胴部	Ⅱ	灰	灰オリーブ	胴部下位	やや良	有	有	－	－	－		－	Ⅲ	782
166図	1017	越州窯青磁	碗	胴部	Ⅱ	灰白	暗オリーブ	胴部下位	良	有	有	－	－	－		9	Ⅲ	6081
	1018	越州窯青磁	碗	胴部	－	灰	オリーブ灰	無	良	無	弱	－	－	－	目跡アリ 押圧縦線文	14	Ⅲ	543
	1019	越州窯青磁	碗	胴部	－	灰	灰オリーブ	無	良	無	(内)有 (外)無	－	－	－	押圧縦線文	7.5	Ⅲ	788
	1020	越州窯青磁	碗	胴部	－	灰白	灰オリーブ	無	良	有	有	－	－	－	ろくろ目 押圧縦線文	14	Ⅲ	456
	1021	越州窯青磁	碗	胴部	－	灰白	灰オリーブ	無	良	有	有	－	－	－		12	P	978
	1022	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-1a	灰白	灰オリーブ	無	良	有	有	－	5.6	－	高台畳付釉剥ぎ 窯道具溶着、底部(蛇ノ目)	6.5 7.5	Ⅱb	580 213
	1023	越州窯青磁	碗	胴～底	Ⅰ-1b(2)	灰	灰オリーブ	高台畳付内	良	無	有	－	7.1	－	目跡（楕円） 底部（蛇ノ目）	7.5	Ⅱb	76
	1024	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-1b(2)	灰白	浅黄	底部付近以下	やや良	無	弱	－	－	－	目跡（楕円） 底部（蛇ノ目）	12	－	－
	1025	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-1a	灰	灰黄	無	良	無	無	－	7.2	－	釉剥離、目跡（楕円） 底部釉削り、目跡	15	Ⅲ	1286
	1026	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-2ア	灰白	浅黄	無	良	無	弱	－	8.0	－	高台内目跡(筋状)、畳付 釉削り（粗い）、底部(輪状)	9	Ⅲ	261
	1027	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-2aア	灰	暗オリーブ	無	良	有	有	－	6.4	－	目跡（楕円）、畳付釉 削り取り、底部（輪状）	8	Ⅲ	742
	1028	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-2イ	灰黄	暗オリーブ	無	やや良	無	弱	－	－	－	目跡、畳付釉削り 底部（輪状高台）	4T	Ⅲ	124
	1029	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-2ウ	灰	灰オリーブ	胴部下位以下	良	無	有	－	6.7	－	目跡（筋状） 底部（輪状高台）	12	Ⅲ	588
	1030	越州窯青磁	碗	胴～底	Ⅰ-3	灰白 淡黄	灰黄	無	やや良	無	無	－	4.8	－	ほぼ剥離 底部（蛇ノ目高台）	7 8	Ⅱb Ⅲ	100 426
	1031	越州窯青磁	碗	胴～底	Ⅰ-5	灰 にぶい橙	灰オリーブ	胴部下位以下	良	無	弱	－	7.4	－	少砂混、目跡 平底	6.5	Ⅱb	960 981
	1032	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-5	灰白 浅黄橙	オリーブ黄	胴部下位以下	良	無	弱	－	11.6	－	目跡、斜行部に目跡 底部ヘラ削り	13	Ⅲ上	－
	1033	越州窯青磁	碗	底部	Ⅰ-5	灰 赤灰色	オリーブ黄	胴部中位以下	良	無	弱	－	5.4	－	少砂混、目跡 上げ底気味の平底	11.5	表	－
	1034	越州窯青磁	碗	底部	Ⅱ	灰 (黒斑点)	明黄褐	胴部下位以下	良	無	有	－	6.4	－	砂混り、目跡（筋状） 上げ底気味の円盤状高台	13	Ⅲ上	－
	1035	越州窯青磁	碗	底部	Ⅱ	灰	オリーブ	胴部下位以下	やや良	有	有	－	7.2	－	目跡（筋状） 円盤状高台	15	－	－
	1036	越州窯青磁	碗	底部	Ⅱ	灰黄	オリーブ	胴部中位以下	良	有	有	－	7.2	－	目跡（筋状） 円盤状高台	14T	Ⅲ	19 28
	1037	越州窯青磁	大碗	口縁部	Ⅰ-2	灰白	灰オリーブ	無	良	有	有	23.6	－	－	凸凹アリ	9.5	Ⅲ	1167
	1038	越州窯青磁	大碗	底部	Ⅰ-1b	灰白	オリーブ黄	無	良	無	弱	－	9.6	－	畳付釉削り、輪状高台 高台外面斜め削り	6.5	Ⅱb	533
	1039	越州窯青磁	大碗	口～底	Ⅰ-2bアA	灰白	釉消失	無	良	－	－	18.2	8.4	8.2	目跡、押圧縦線文 二次焼成により釉消失	8	Ⅲ	4896
	1040	越州窯青磁	大碗	胴～底	Ⅰ-2bアA	灰黄	灰オリーブ	無	良	有	有	－	7.6	－	押圧縦線文（外面） 底部（輪状高台）	9	Ⅲ	6438
	1041	越州窯青磁	大碗	底部	Ⅰ-2bアA	灰白	明オリーブ	無	良	無	有	－	7.8	－	細砂混、底部（輪状高台） 外圧押線文（外・胴）	14	Ⅲ	422
	1042	越州窯青磁	大碗	胴～底	Ⅰ-2aウ	淡黄	灰オリーブ	無	良	有	有	－	6.6	－	底部（輪状）	9.5	Ⅱb	624
	1043	越州窯青磁	坏	底部	Ⅰ-1	灰白	暗オリーブ	無	良	無	有	－	8.2	－	釉フキトリ跡（浅黄） 底部外面釉フキトリ跡、目跡	9.5	Ⅲ	857
	1044	越州窯青磁	坏	口縁部	Ⅰ-2A	灰白	灰オリーブ	無	良	無	有	12.6	－	－	口縁部（輪花） 押圧縦線文	14	Ⅲ	224
	1045	越州窯青磁	皿	口縁部	Ⅱ	灰白	灰オリーブ	無	良	無	有	－	－	－	口縁部（輪花）	7	Ⅲ	652
	1046	越州窯青磁	皿	底部	Ⅰ-2	浅黄	灰オリーブ	無	良	無	有	－	7.2	－	畳付釉削り 底部（輪高台）	7	Ⅲ	1093
	1047	越州窯青磁	壺？	胴部	－	灰	オリーブ黄	胴部下位以下	やや良	無	弱	－	－	－	砂粒混、ろくろ目 底部釉垂れ痕	9.5 9	Ⅱb Ⅲ	766 137

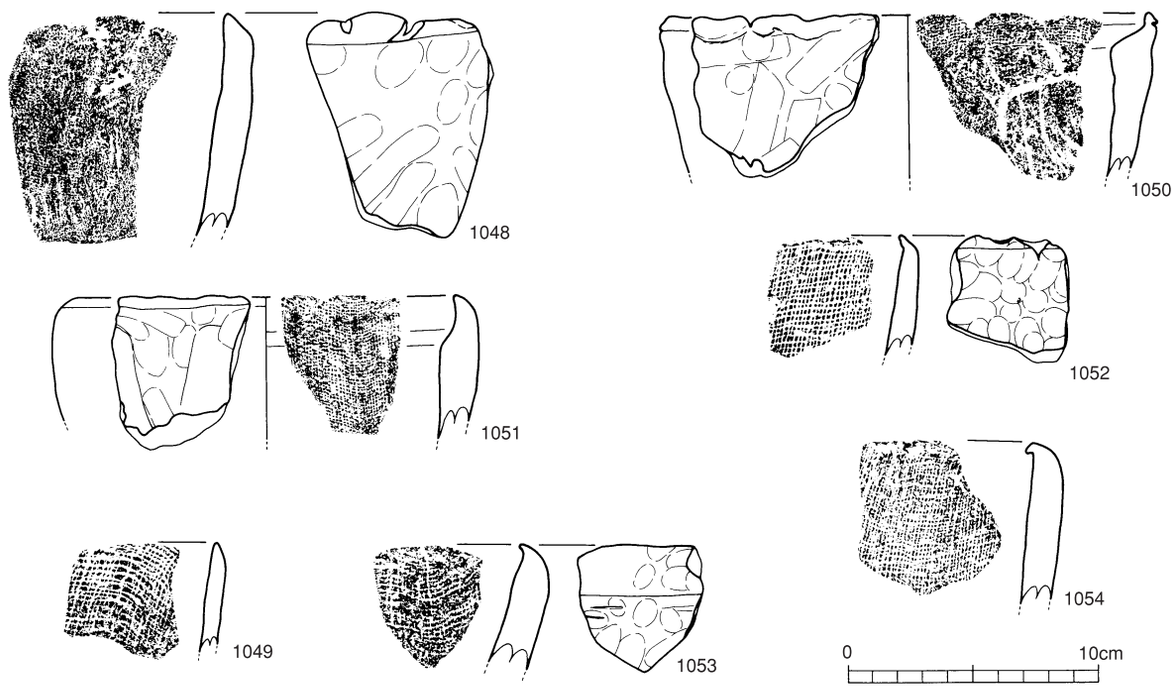
5　焼塩土器（第167図　1048～1054）

焼塩土器は，K6.5～7.5区を中心に出土した。出土総数は19点中７点を図化した。いずれも，胎土中に小石を含む砂粒が多量に混ざり，外面に指圧痕の多いナデ調整が施し表面が凸凹しているなど粗雑な作りである。焼成が弱く軟質であり，色調は赤橙色である。内面全体に細かい目を持つ布圧痕が明瞭に残る。器壁が厚く，先細りの口縁部を呈し，口縁部のみのため全体形は不明であるが，やや開き気味の直線的な口縁部を持つ鉢型を呈すると考えられる。

1048，1049は，直線的な口縁部であり，外面が内傾し尖った口縁部を作り出している。

1050，1051は，口縁部内側に段を持つもので，内面が外反し口縁部を作り出している。

1052～1054は，口縁部内側がわずかに突出し，内湾気味の張り出しを持つものである。



第167図　古代の遺物39（焼塩土器）

第42表　古代遺物観察表18（焼塩土器）

挿図番号	遺物番号	種類	部位	胎土	調整 内	調整 外	色調	焼成	法量（cm）口径	法量（cm）底径	法量（cm）器高	備　考	出土区・層	注記番号
167図	1048	焼塩土器	口縁部	粗（細砂混）	布圧痕	ナ　デ（指圧痕）	(内)赤橙 (外)明赤橙	軟質	—	—	—		6.5 Ⅱb	236
	1049	焼塩土器	口縁部	粗（砂粒多混）	布圧痕	マメツ	(内)赤橙 (外)黄橙	軟質	—	—	—	小石(5㎜)含む	6.5 Ⅱb	331
	1050	焼塩土器	口縁部	粗（砂粒多混）	布圧痕	ナデ（指圧痕）	(内)赤橙 (外)黄橙	軟質	20.0	—	—	小石(8㎜)含む	7.5 Ⅲ	1189
	1051	焼塩土器	口縁部	粗（砂粒多混）	布圧痕	ナデ（煤付着）	(内)橙 (外)黄橙	軟質	16.4	—	—	小石(6㎜)含む	7.5 Ⅲ	2818
	1052	焼塩土器	口縁部	やや粗（砂粒混）	布圧痕	ナデ（指圧痕）	(内)赤橙 (外)黄橙	軟質	—	—	—	小石含む	6.5 Ⅱb	367
	1053	焼塩土器	口縁部	粗（砂粒多混）	布圧痕	ナデ（指圧痕）	(内)淡橙 (外)赤橙	軟質	—	—	—	小石含む	7.0 Ⅲ	—
	1054	焼塩土器	口縁部	粗（砂粒混）	布圧痕	マメツ	(内)赤橙 (外)橙	軟質	—	—	—		6.5 Ⅱb	177

６　土錘（第168～170図　1055～1147）

土錘は，円筒状を呈する粘土の長軸方向に孔を穿った管状土錘と，棒状の粘土の両端に孔を穿った双孔棒状土錘に大別される。Ｋ６～８区における管状土錘，双孔棒状土錘の出土状況については，第171図のとおりである。

管状土錘（第168図　1055～1111）

管状土錘は，Ｋ６～８区を中心に多数出土した。平面形は中央部が膨らむ長円形あるいは楕円形を呈し，長軸の中心部に穿孔し管状に仕上げている。大きさや形態の違いによりⅠ～ Ⅷ類に分類される。Ⅰ～Ⅲ類は，最大長が約６～７㎝，最大幅1.5～2.5㎝の大型，Ⅳ～ Ⅵ・ Ⅷ類は，最大長が約４～６㎝の中型， Ⅶ類は最大長が約３㎝前後と小型のものである。出土総数108点中，57点を図化した。孔は胴部断面中心に穿ち，断面円形であり，平均0.5㎝でほぼ同規模である。

Ⅰ類　（第168図　1055～1060）

Ⅰ類は，平均で最大長7.3㎝，最大幅2.3㎝，重量33.9ｇの大型のものである。胴部中央が膨らみ両端がわずかにすぼまるもの（1055～1058）と，平面断面が隅丸の方形に近いもの（1059，1060）がある。端部は丁寧に面取され，色調は鈍い橙色である。

Ⅱ類　（第168図　1061～1069）

Ⅱ類は，形態はⅠ類とほぼ同じであるが，最大径が２㎝前後，重量が20.9ｇと細くなるものである。胎土が粗く，石英，角閃石などの砂粒が多く含まれ，色調は浅黄橙色である。

Ⅲ類　（第168図　1070～1080）

Ⅲ類は，全長はⅠ・Ⅱ類とほぼ同じであるが，最大径は２㎝弱と細く，端部の締まりがない管玉状を呈する。欠損品も多く，端部は面取りが施され色調は浅黄橙色である。

Ⅳ類　（第168図　1081～1084）

Ⅳ類は，平均で最大長5.5㎝，最大幅1.9㎝，重量17ｇの中型のものである。端部は丁寧に面取され，色調は鈍い橙色である。胴部は膨らみを持ち，端部が緩やかに締まるもので，平面断面が形の整った長円形を呈する。端部に明瞭な面取りは見られない。

Ⅴ類　（第168図　1085～1094）

Ⅴ類は，形態はⅣ類と同じであるが，全長が約４㎝前後，重量約9.3ｇとやや小さなものである。精良な胎土を用い，丁寧にナデ調整を施すものが多い。端部は尖り気味である。

Ⅵ類　（第168図　1095～1098）

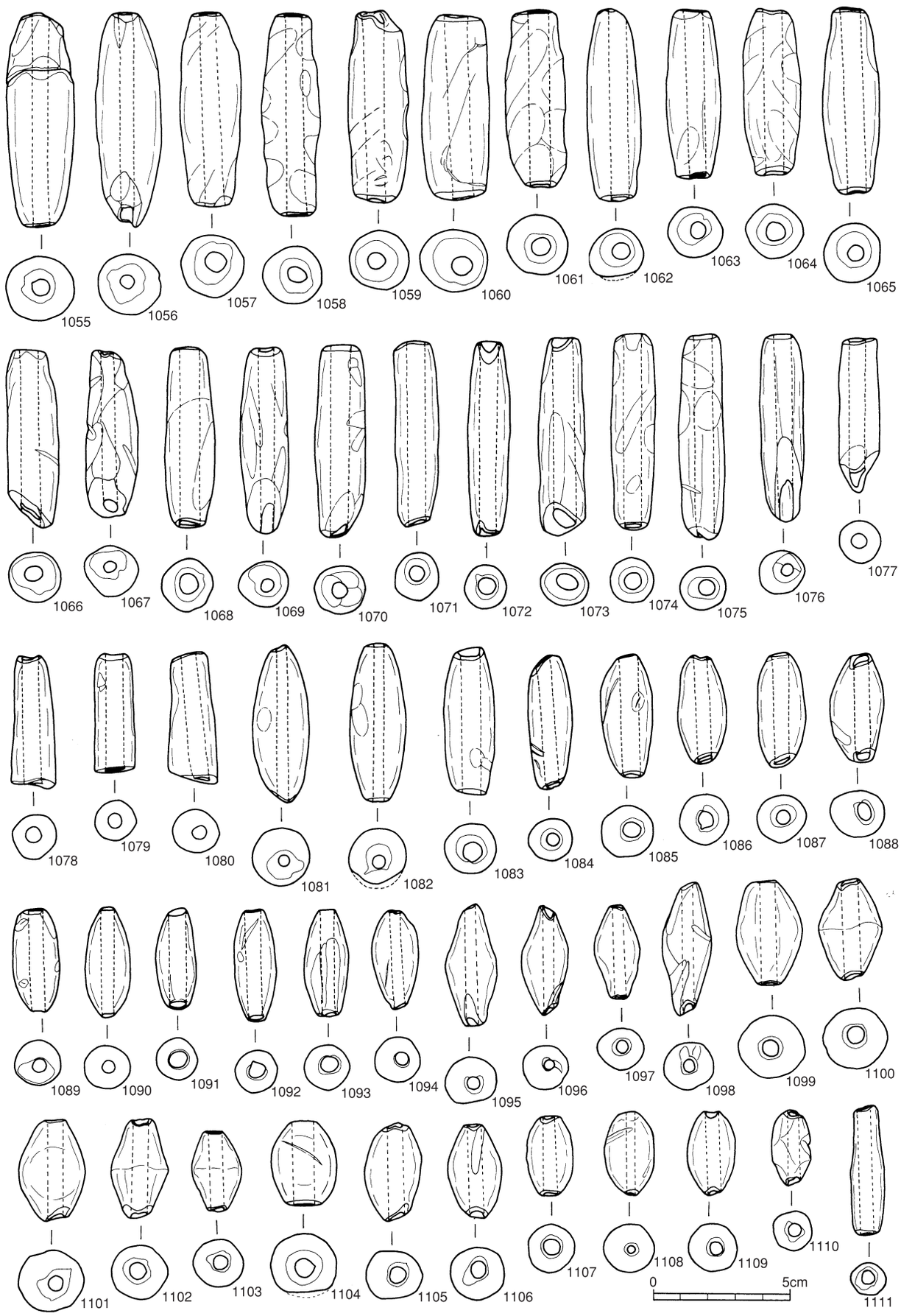
Ⅵ類は，胴部中央に張りを持ち，端部へ向かってやや凹みながら直線的に締まる平面断面が菱形状を呈するものである。端部は摘み出しながら作られており，両端とも尖っている。

Ⅶ類　（第168図　1099～1110）

Ⅶ類は，平均で最大長3.3㎝，最大幅2.0㎝，重量9.9ｇの小型のものである。平面断面が菱形状（1099～1103），球形（1104），長円形（1105～1110）のものに分けられる。1104は，端部が面取りされている。1107は，焼成を受け黒斑が残る。

Ⅷ類　（第168図　1111）

Ⅷ類は，最大径と端部の径が約1.2㎝と差がほとんど無く，細長い管玉状を呈するものである。胴部中央にわずかな段を持ち，上位は下位よりやや細くなっている。



第168図　古代の遺物40（管状土錘）

第43表　古代遺物観察表19（管状土錘）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区・層		分類	胎土	焼成	色調	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	残存率	孔径(cm)	備考	注記番号
168図	1055	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅰ	密	良好	橙	7.8	2.5	37.8	完形	0.6		1653
	1056	管状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅰ	細砂混	良好	橙	7.8	2.4	36.7	完形	0.5		563
	1057	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅰ	やや精良	良好	橙	7.1	2.3	32.9	完形	0.7		1116
	1058	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅰ	やや精良	良好	橙	7.4	2.2	29.4	完形	0.6		1301
	1059	管状土錘	K7	焼土1	Ⅰ	精良	良好	橙	7.0	2.2	30.9	完形	0.6		1857
	1060	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅰ	やや精良	良好	橙	6.7	2.5	35.8	完形	0.7		1198
	1061	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅱ	砂粒混	良好	黄橙	6.5	2.3	27.2	完形	0.7		574
	1062	管状土錘	K7	Ⅳ	Ⅱ	砂粒多混	やや軟	にぶい橙	7.0	2.0	19.5	2/3	0.6		2232
	1063	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅱ	砂粒混	やや軟	淡橙	6.2	2.0	20.3	完形	0.5		803
	1064	管状土錘	K8	Ⅲ	Ⅱ	密	良好	橙	6.1	2.1	23.1	完形	0.7		3179
	1065	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅱ	細粒混	良好	浅黄橙	6.8	2.1	24.8	完形	0.6		1233
	1066	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅱ	砂粒混	軟	灰白	(6.5)	1.9	(20.3)	4/5	0.6		1829
	1067	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅱ	密	良好	浅黄橙	6.0	2.0	15.5	完形	0.4		1338
	1068	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅱ	砂粒多混	良好	浅黄橙	6.6	1.9	20.6	完形	0.7		1003
	1069	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅱ	密	やや軟	浅黄橙	6.8	1.8	(16.6)	一部欠	0.4		377
	1070	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	細粒混	良好	浅黄橙	7.0	1.9	20.4	完形	0.5		1381
	1071	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	砂粒混	良好	淡橙	6.8	1.6	15.5	完形	0.5		1831
	1072	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	密	良好	黄橙	7.1	1.6	14.3	完形	0.6		1098
	1073	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	密	良好	黄橙	7.2	1.8	15.7	完形	0.5		376
	1074	管状土錘	K7	Ⅲa	Ⅲ	砂粒混	良好	淡黄橙	7.1	1.7	14.8	完形	0.6		2683
	1075	管状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅲ	細粒混	良好	黄橙	7.5	1.7	16.3	完形	0.5		531
	1076	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅲ	密	良好	黄橙	(6.9)	1.6	(12.9)	3/4	0.4		628
	1077	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	砂粒混	良好	淡黄橙	(5.6)	1.5	(10.8)	2/3	0.6		1233
	1078	管状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅲ	密	良好	黄橙	(4.8)	1.6	(10.5)	1/2	0.5		233
	1079	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	密	良好	黄橙	(4.3)	1.5	(8.91)	1/2	0.5		1048
	1080	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅲ	細砂少混	良好	橙	(4.8)	1.8	(11.6)	1/2	0.5		680
	1081	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅳ	細粒混	良好	淡黄橙	5.8	2.1	20.8	完形	0.4		657
	1082	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅳ	砂粒混	やや軟	暗黄褐色	5.8	2.1	(19.1)	2/3	0.4		1154
	1083	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅳ	砂粒混	良好	浅黄橙	5.4	1.9	17.0	完形	0.7		934
	1084	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅳ	細粒混	良好	灰白	4.9	1.6	11.0	完形	0.5		1194
	1085	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅴ	密	良好	灰白	4.5	1.9	12.5	完形	0.6		300
	1086	管状土錘	K7.5	Ⅱb	Ⅴ	砂粒混	良好	淡橙	4.0	1.8	11.9	完形	0.5		17
	1087	管状土錘	K7	焼土	Ⅴ	細砂混	良好	浅黄橙	4.2	1.8	11.1	完形	0.5		1844
	1088	管状土錘	K7	Ⅳ	Ⅴ	やや精良	やや軟	灰白	4.0	2.0	11.0	完形	0.4		
	1089	管状土錘	K6.5	Ⅳ	Ⅴ	密	良好	褐灰	3.8	1.7	(8.1)	一部欠	0.5		3387
	1090	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅴ	やや精良	良好	灰白	4.0	1.7	8.0	完形	0.5		873
	1091	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅴ	やや精良	良好	淡橙	3.7	1.5	6.5	完形	0.6		
	1092	管状土錘	K9.5	10H	Ⅴ	密	良好	灰白	4.1	1.6	7.2	完形	0.5		3537
	1093	管状土錘	K10	Ⅲ	Ⅴ	密	良好	灰白	3.9	1.7	8.6	完形	0.6		2468
	1094	管状土錘		排土	Ⅴ	細砂混	やや軟	浅黄橙	3.6	1.7	7.6	完形	0.4		
	1095	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅵ	密	良好	黄橙	4.5	1.9	9.1	完形	0.4		1991
	1096	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅵ	密	良好	黄橙	3.9	1.7	7.3	完形	0.3		1352
	1097	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅵ	細砂混	良好	灰黄	3.5	1.7	5.9	完形	0.4		544
	1098	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅵ	密	良好	淡黄橙	4.7	1.8	9.9	完形	0.3		815
	1099	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅶ	砂粒混	良好	黄褐	3.8	2.5	15.3	完形	0.5		1015
	1100	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅶ	細砂混	良好	黄橙	3.6	2.4	12.4	完形	0.6		1051
	1101	管状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅶ	密	良好	淡橙	3.6	2.5	15.5	完形	0.5		2537
	1102	管状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅶ	砂粒混	良好	浅黄橙	3.1	2.4	14.1	完形	0.6		470
	1103	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅶ	密	良好	浅黄橙	3.6	2.1	8.9	完形	0.5		1192
	1104	管状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅶ	細砂混	良好	浅黄橙	2.9	1.9	6.8	完形	0.7		1267
	1105	管状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅶ	細砂混	良好	にぶい橙	3.6	2.1	9.4	完形	0.6		863
	1106	管状土錘	K7	Ⅱb	Ⅶ	砂粒混	良好	黄褐	3.5	2.0	9.9	完形	0.5		199
	1107	管状土錘	K7	Ⅲ	Ⅶ	砂粒混	良好	灰白/黒	2.9	1.7	6.7	完形	0.6		1017
	1108	管状土錘	K7	34H	Ⅶ	やや精良	やや軟	灰白	3.1	1.9	8.1	完形	0.2		3112
	1109	管状土錘	K13	Ⅲ	Ⅶ	細砂混	良好	黄褐	3.1	1.8	8.3	完形	0.4	5T	27
	1110	管状土錘	K5	表土	Ⅶ	密	やや軟	褐灰	2.8	1.5	3.8	完形	0.4		
	1111	管状土錘		排土	Ⅷ	精良	良好	褐灰	4.6	1.3	5.5	完形	0.4		

双孔棒状土錘　（第169，170図　1112～1137）

棒状粘土の両端に穿孔を持つ双孔棒状土錘は，K6.5～7.5区で集中して出土している。これまでの出土例は，破損品が多かったのに対して，本遺跡では出土総数41点中，完形品が15点であり，非常に残存率が高い。いずれも胴部断面はほぼ円形であり，最大長は約６～８㎝，穿孔は直径が約0.5㎝である。両端は面取りがされ，丁寧なナデ調整により仕上げている。穿孔部分は，網漁による使用のため角が取れ丸みを帯びている。

図化したのは26点であり，形態の違いによりⅠ～ Ⅵ類に分類される。

Ⅰ類　（第169図　1112～1114）

Ⅰ類は，幅がほぼ同じ断面円形の棒状であり，両端は水平な隅丸の平坦面を持つものである。全体にナデ調整を施し，丁寧に仕上げる。色調は淡い橙色である。

Ⅱ類　（第169図　1115～1120）

Ⅱ類の形態はⅠ類とほぼ同じであるが，全体の調整が手捏ね風の作りである。両端の平面は丸みを持ち，傾いている。色調は灰白色系が多い。1115は，端部上面に穿孔と平行する溝がある。1117は，胴部にケズリ調整痕が残り，上面に穿孔と直交する溝を持つ。

Ⅲ類　（第169図　1121～1123）

Ⅲ類は，外面に明瞭な縦方向のケズリ調整を施し，仕上げたものである。端部は水平な平坦面であり，稜は角張っている。最大長平均は，6.6㎝とやや短めである。

Ⅳ類　（第169図　1124～1126）

Ⅳ類は，両端を外へ張り出すほど指で押して平らにし，孔を穿つものである。端部の断面形は楕円形を呈する。1124は，胴部中央に横位の工具痕が0.3㎝間隔で８本残る。1125は，両端の平坦面に穿孔と直交する溝を持つ。1126は，焼成を受け黒褐色化している。

Ⅴ類　（第169，170図　1127～1135）

Ⅴ類は，最大径が1.8㎝と細いもので，両端をわずかに指で押して平らにし，孔を穿つものであり，端部に張り出しはない。精良な胎土を用い，全体にナデ調整を施し，角を丸く仕上げるなど丁寧な作りである。胎土に灰白色と橙色の縞模様が見られるものが多い。1134，1135は，両端の平坦面に溝がある。

Ⅵ類　（第170図　1136，1137）

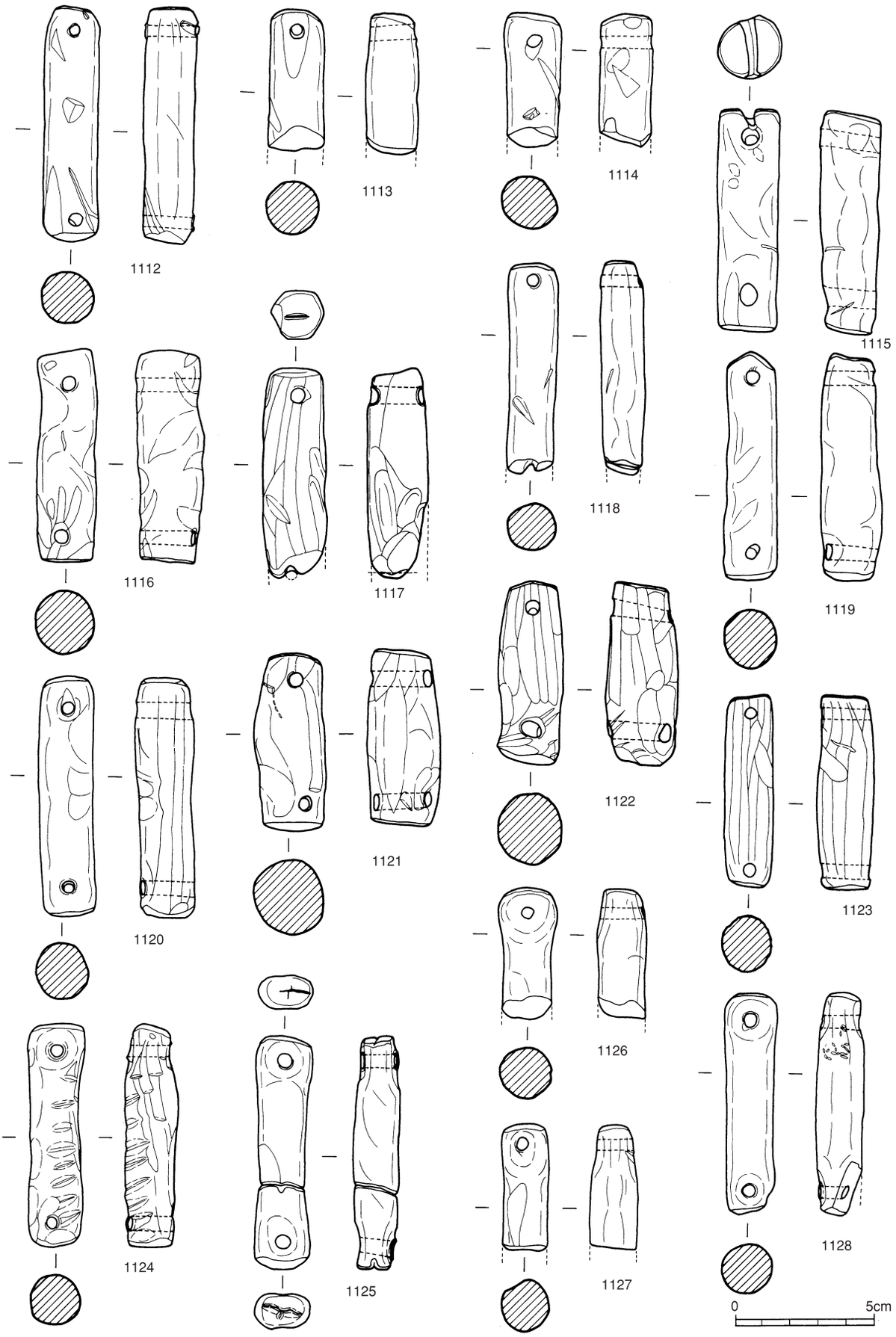
Ⅵ類は，胴部中央に最大径があり，両端部が緩やかに締まり，尖り気味のものである。指圧による平坦面は持たない。断面形は長円形を呈し，管状土錘を思わせる形状である。

７　紡錘車　（第170図　1138～1147）

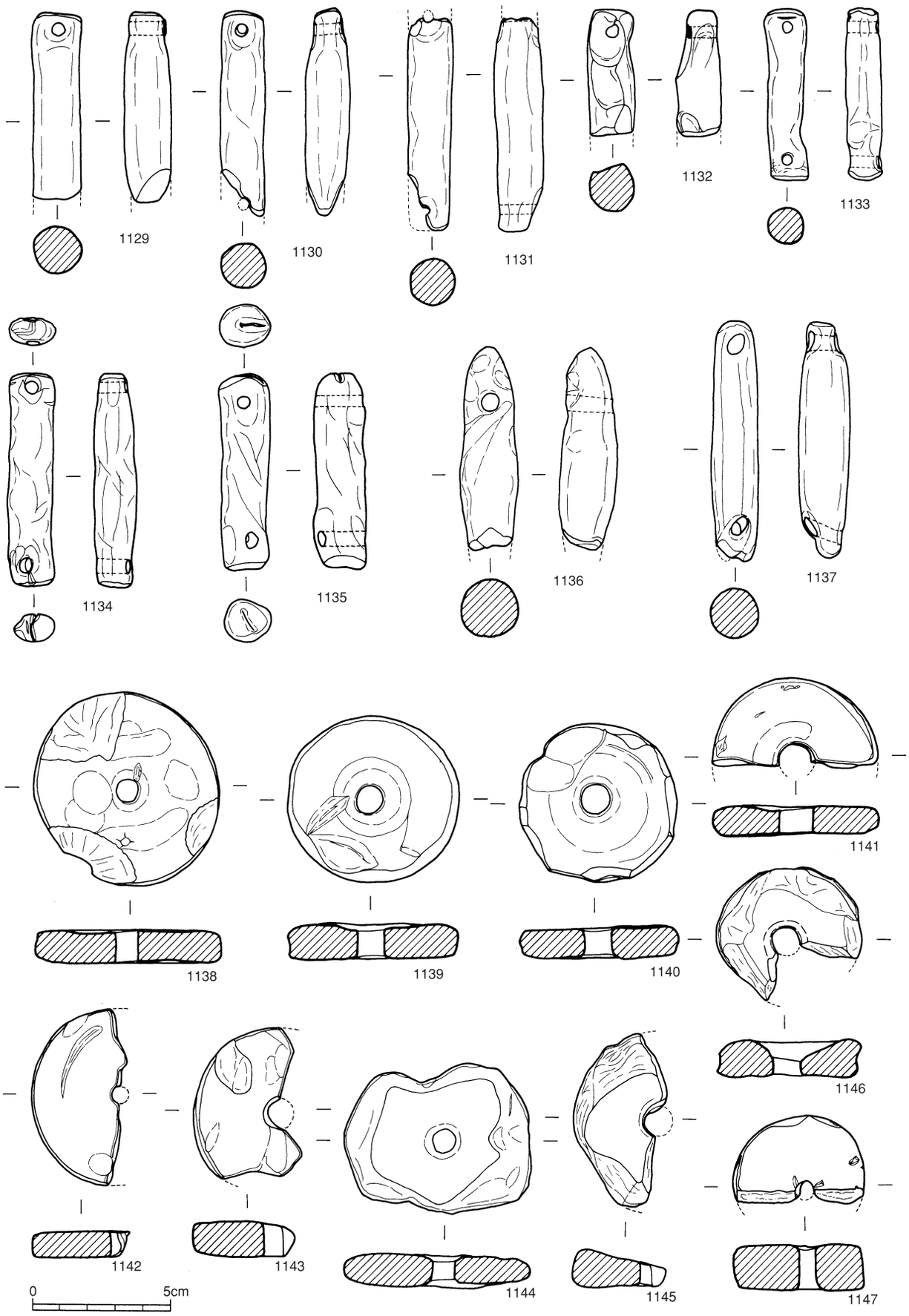
1138～1147は紡錘車であり，Ｋ６～12区内で11点出土し，そのうち10点を図化した。破損品が多く，完形品は４個である。いずれも土師器坏の胴部を取り除き，平たい円盤状をした底面の中心に孔を穿つ。底部に回転ヘラ切りによる切り離し痕が認められる。

図化したものの底部直径平均値は，最大径5.7㎝，最大厚1.4㎝，完形品の重量平均は40.8ｇであり，穿孔の孔径は0.9㎝である。（一部復元予想値を含む）

1138～1143は，厚みの一定したもので，縁部を丁寧に削り取り，稜を丸く仕上げるなど丁寧に



第169図　古代の遺物41（双孔棒状土錘①）



第170図　古代の遺物42（双孔棒状土錘②，紡錘車）

作り上げている。平坦面を磨り潰しながら調整し，表面の凸凹をある程度消している。1138は，最大径7.0cm，重量54.7ｇと最大のもので，穿孔の角が残っている。1140の上面は平たく仕上げているが，縁の仕上げがやや粗く，胴部が一部残っている。

1144～1146は，中央部が凹んだ底面を利用したもので，縁部は未調整であり，打ち砕いた胴部の一部が残り凸凹している。1140は器面が摩滅し，一部欠損している。

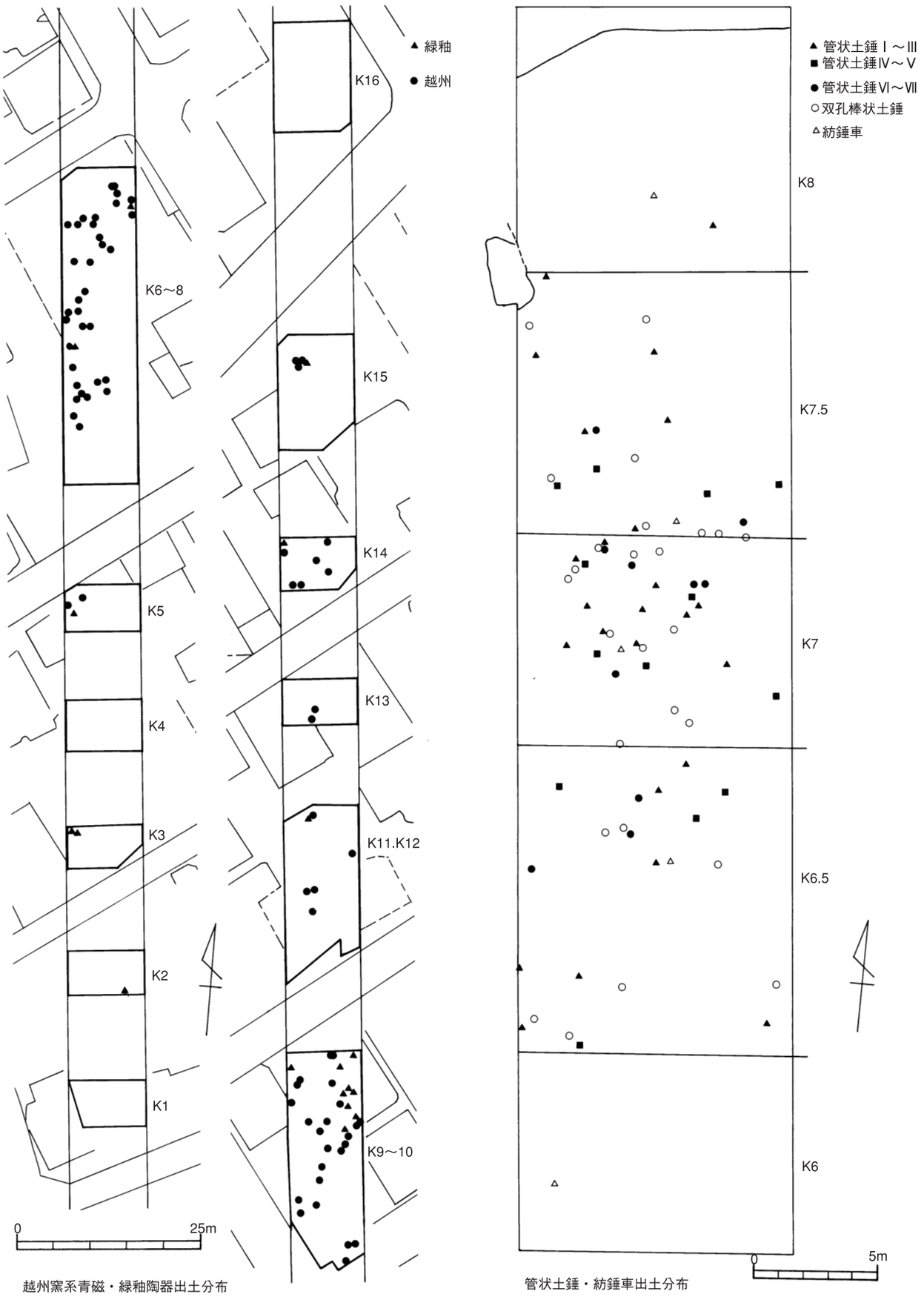
1147は，器壁が厚く孔径が小さいもので，厚みや胎土から古墳時代の可能性がある。

第44表　古代遺物観察表20（双孔棒状土錘）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区・層		分類	胎土	焼成	色調	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	残存率	備　考	注記番号
170図	1112	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅰ	密	良好	橙	8.4	2.0	37.4	完形		543
	1113	双孔棒状土錘	K7	焼土	Ⅰ	細砂混	良好	淡橙	(5.0)	2.0	(21.0)	1/2		1846
	1114	双孔棒状土錘	K7	Ⅲc	Ⅰ	砂粒少混	良好	淡橙	(4.8)	2.1	(20.0)	1/2		3058
	1115	双孔棒状土錘	K7	Ⅲ	Ⅱ	密	良好	灰白	8.0	2.2	39.8	完形	溝アリ	1437
	1116	双孔棒状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅱ	細砂混	良好	淡橙	7.6	2.1	39.5	完形		1902
	1117	双孔棒状土錘	K7	Ⅱb	Ⅱ	やや密	やや軟	灰白	(7 5)	2 3	(31 1)	4/5	溝アリ、ケズリ痕	246
	1118	双孔棒状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅱ	やや精良	良好	浅黄橙	(7:6)	1:8	(24:0)	4/5		2073
	1119	双孔棒状土錘	K7	Ⅲ	Ⅱ	やや精良	良好	灰白	8.2	1.95	34.1	完形		975
	1120	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅱ	密	良好	灰白	8.6	1.95	34.6	完形		414
	1121	双孔棒状土錘	K7	焼土	Ⅲ	砂粒少混	良好	灰白	6.4	2.55	37.2	完形	ケズリ痕アリ	1836
	1122	双孔棒状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅲ	細砂混	良好	にぶい橙	6.6	2.3	36.2	完形	ケズリ痕アリ	1010
	1123	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅲ	砂粒混	良好	浅黄橙	6.9	1.75	24.8	完形	ケズリ痕アリ	1319
	1124	双孔棒状土錘	K7	Ⅱb	Ⅳ	やや精良	良好	橙	8.0	2.1	30.7	完形	工具痕アリ	141
	1125	双孔棒状土錘	K7	Ⅲa	Ⅳ	密	良好	橙	8.3	2.0	30.4	完形	2630接合、溝アリ	2628
	1126	双孔棒状土錘	K7	Ⅲb	Ⅳ	砂粒混	やや粗	黒褐色	(4·8)	2·1	(18·6)	1/2	スス付着	2800
	1127	双孔棒状土錘	K7.5	Ⅲ	Ⅴ	細砂混	良好	褐色	(4.5)	1.65	(13.8)	1/2		1712
	1128	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅴ	密	良好	黄橙	7.9	1.9	25.2	完形		891
	1129	双孔棒状土錘	K7	Ⅲ	Ⅴ	砂粒混	良好	灰白＋橙	6.8	1.8	21.1	2/3		637
	1130	双孔棒状土錘	K7	Ⅱb	Ⅴ	密	良好	灰白＋黄橙	7.2	1.6	16.4	4/5		302
	1131	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅴ	砂粒少混	良好	灰白＋橙	(7.6)	1.6	(19.8)	3/4		553
	1132	双孔棒状土錘	K7	Ⅱb	Ⅴ	砂粒混	良好	灰白＋橙	(4.5)	1.65	(12.6)	1/2		224
	1133	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅱb	Ⅴ	密	良好	黄橙	6.2	1.55	11.8	完形		727
	1134	双孔棒状土錘	K7	H34	Ⅴ	密	良好	灰白＋黄橙	7.7	1.65	18.1	完形	埋土e、溝アリ	3082
	1135	双孔棒状土錘	K7	H34	Ⅴ	細砂混	良好	灰白＋橙	7.0	1.8	22.2	完形	埋土g	3145
	1136	双孔棒状土錘	K6.5	Ⅲ	Ⅵ	細砂混	良好	灰白	(7.2)	2.1	(25.2)	4/5		1048
	1137	双孔棒状土錘	K7	H34	Ⅵ	やや精良	良好	灰白	8.6	1.8	21.6	完形	埋土e	3077

第45表　古代遺物観察表21（紡錘車）

挿図番号	遺物番号	器　種	出土区・層		胎土	焼成	色　調	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存率	備　考	注記番号
170図	1138	紡錘車	K12	Ⅲ	砂粒混	堅緻	明褐色	7.0	1.2	0.8	54.7	完形		423
	1139	紡錘車	K8	Ⅲ	赤色粒混	良好	浅黄橙	6.2	1.3	1.0	43.4	完形		2281
	1140	紡錘車	K6	Ⅱb	密	やや軟	浅黄橙	5.7	1.2	1.1	30.8	完形		561
	1141	紡錘車	K6.5	Ⅲ	細粒混	良好	橙	(6.1)	(1.2)	1.2	(22.6)	1/2		1336
	1142	紡錘車	K12	Ⅲ	精良	良好	灰白	(5.4)	1.0	(0.6)	(21.7)	1/2		286
	1143	紡錘車	K9	Ⅲ	密	やや軟	橙	(4.0)	1.3	(0.9)	(22.3)	1/3		591
	1144	紡錘車	K9	Ⅲ	砂粒混	やや軟	浅黄橙	6.8	1.2	0.9	34.7	完形		1055
	1145	紡錘車	K10	Ⅲ	粗	軟	浅黄橙	(6.3)	1.3	(1.0)	(19.7)	1/2		467
	1146	紡錘車	K7.5	Ⅲ	赤色粒混	良好	橙	(5.3)	1.5	(1.0)	(19.8)	1/2		923
	1147	紡錘車	K7	Ⅲ	砂粒混	良好	明赤褐	(4.7)	1.7	(0.6)	(28.7)	1/2		1520



第171図　緑釉，越州窯青磁他　出土分布図

８．瓦

Ⅲ層遺物包含層からは瓦が多量に出土している。瓦の大部分は平瓦及び丸瓦の破片であり，ここで図化したものはそのわずか一部にも満たない。

軒丸瓦（第 172 図 1148 ～ 1150）

多量の瓦のなかでわずか３点のみ軒丸瓦であった。1148 は狭長な細弁 27 葉の内区と，13 個ほどの珠文をめぐらした外区とからなる。中房の蓮子は中央に一つとその周囲に６個の配置である。薩摩国分寺跡出土資料の分類ではⅢ式となっている。1149 は半分欠損しているものの，狭長な細弁や珠文など 1148 と同様と推定される。なお 1149 は上部外面に縄目タタキが残っている。

1150 はかなり凹む単弁と考えられるものである。破損している部分が多いが，珠文はなく，先の分類によるとⅣｂ式と推定される。これも 1149 と同様に，外面上部全体に縄目タタキが観察されるものである。

軒平瓦（第 172 図 1151）

1151 は中央を細線で分け，その上下に同様に細線で鋸歯状文を並列したものである。前記した薩摩国分寺跡出土軒平瓦の分類ではⅤ式に相当すると思われる。凸面は縄目タタキ，凹面には布目痕が残る。

丸瓦（第 173 図）

1152 ～ 1156 は丸瓦である。このうち 1152・1153 は無段の行基式瓦であり，その他は破損品であるため明確ではない。凸面には斜格子タタキや縄目タタキが認められるが，1152 は大部分をナデ消している。凹面はいずれも布目痕が残る。

平瓦（第 174 図）

1157 ～ 1160 は平瓦である。1157・1158 の凸面は斜格子タタキであり，1157 はその後板目状の痕跡が付いている。1159・1160 の凸面は縄目タタキである。いずれも残存する縁辺にはヘラ状工具による面が認められ，凹面は布目痕が残る。

９．鉄器・鉄製品

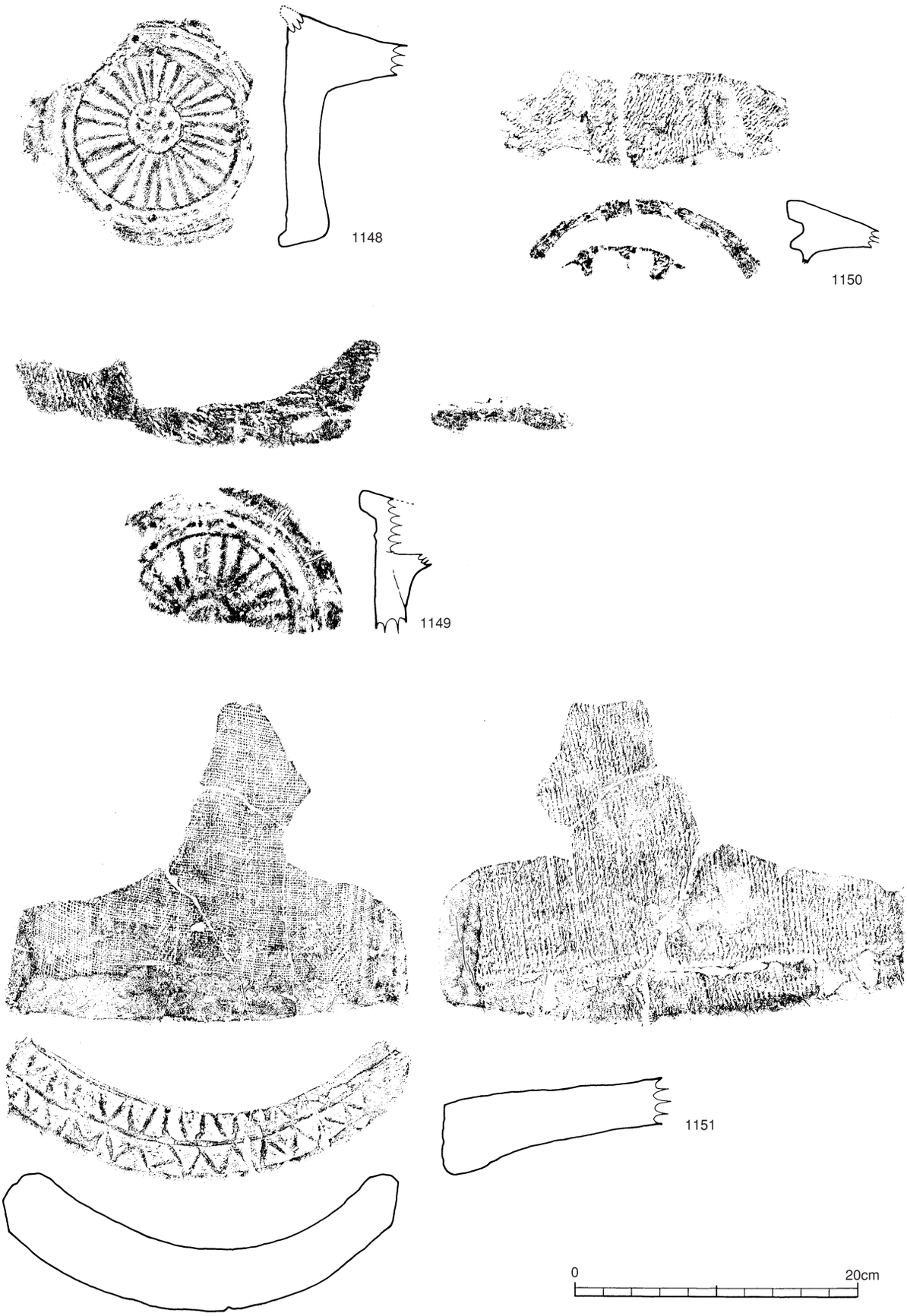
包含層及び遺構内から出土した鉄器及び鉄製品については，遺構内出土のものを除き，その時期については判別できない点もある。Ⅲ層は古代の遺物包含層であるが，一部弥生時代及び中世の土器や陶器も認められることより，鉄器等も古墳時代から中世までの時期のものが混在していると思われる。ただし剣や鉄鏃については型式学的に古墳時代に該当するものは，古墳時代の時期で取り扱った。

刀子（第 175 図 1161 ～ 1165）

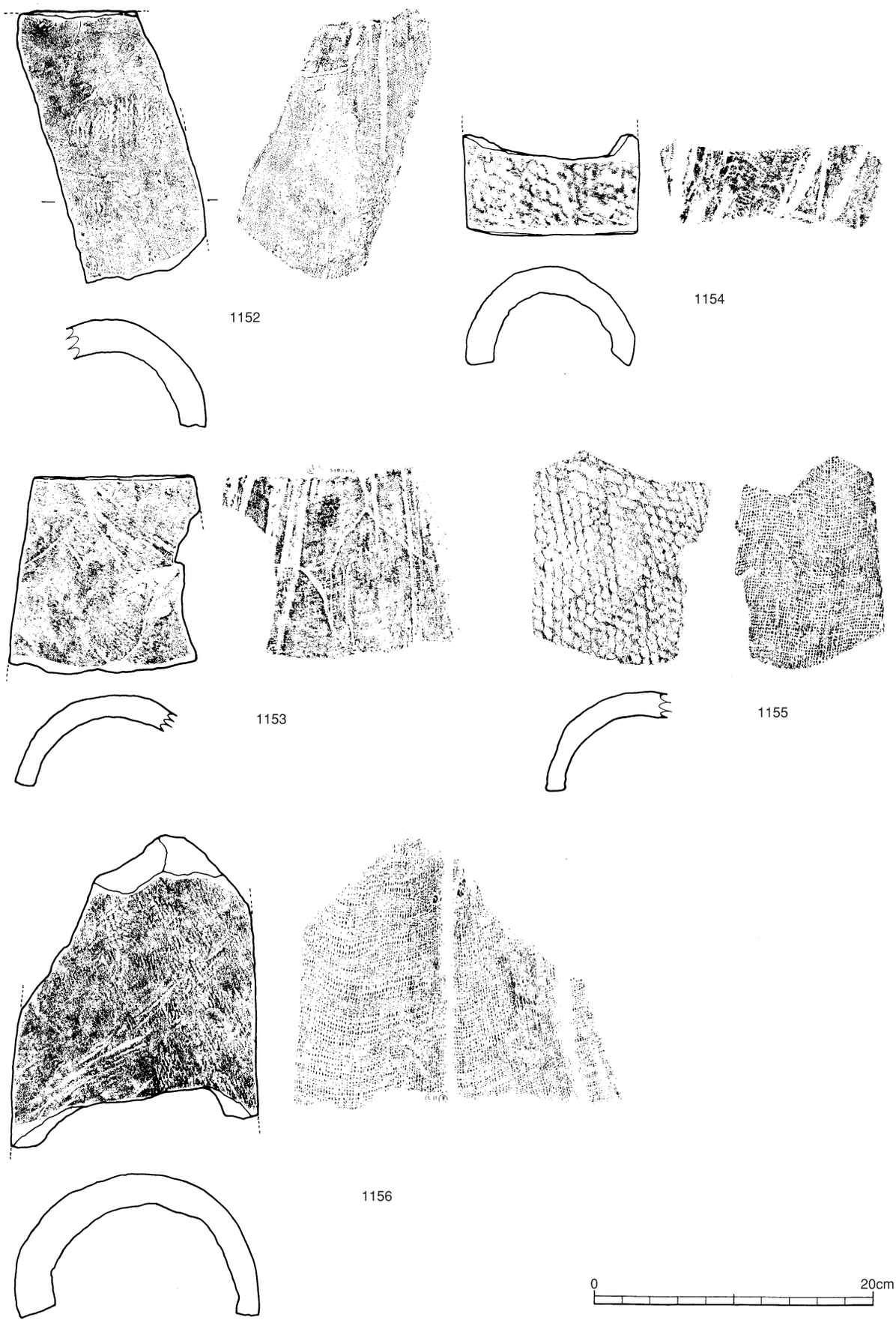
1161 はほぼ完形品であり全長 13.4 ㎝を測る。大型竪穴状遺構から出土した。茎部は 5.5 ㎝と長い。茎部に一部木質部が残存する。1162 は身部のみである。1163 は身部先端と茎部端部を欠損する。1164 は身部の研ぎ減りが著しいものか。1165 は身部の先端の可能性をもつと考え刃子としたが，槍鉋の可能性も考えられる。

鎌（第 175 図 1166）

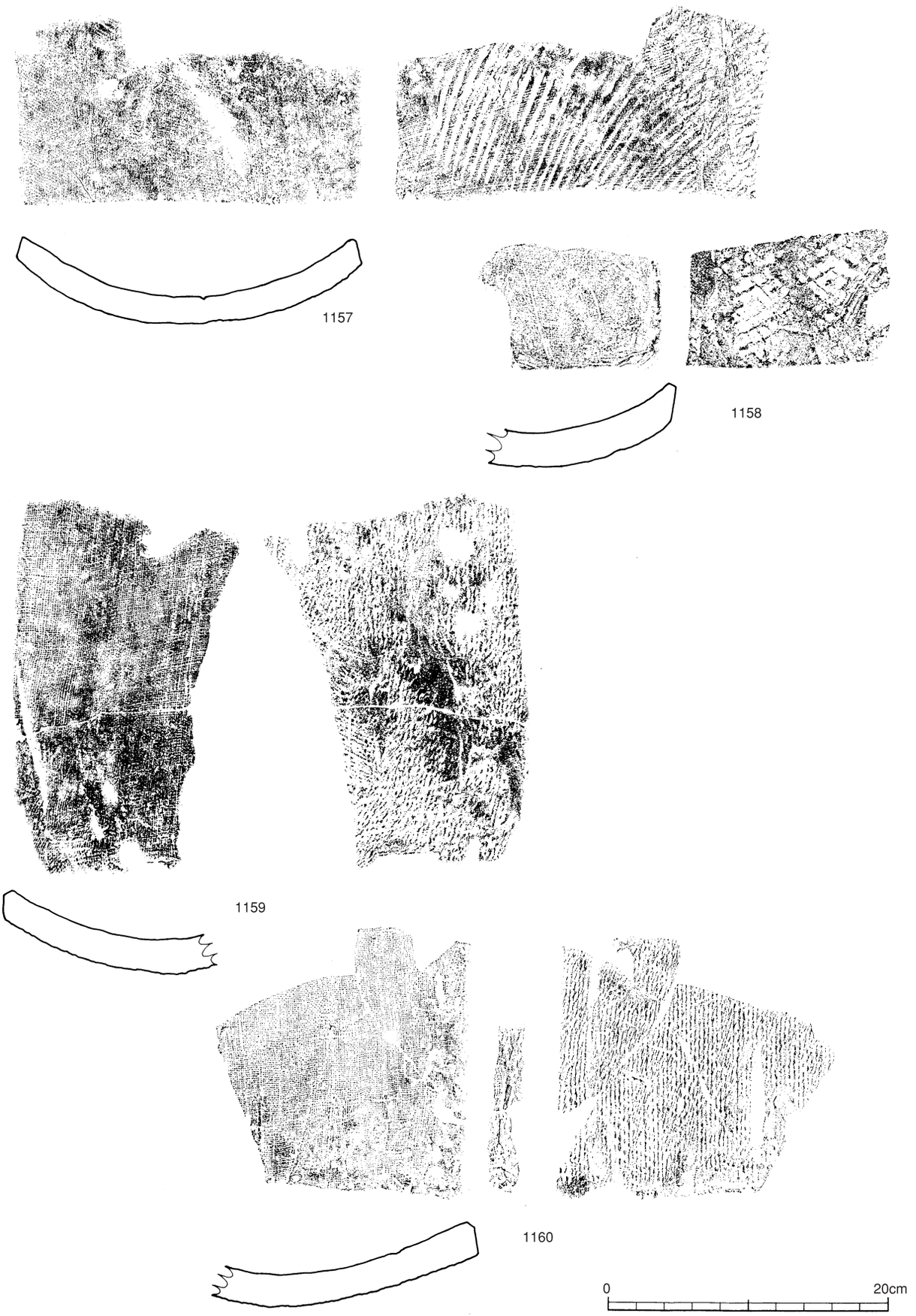
1166 は６号住居跡から出土した。右側部分と刃部を欠損するが，両端を内側に折り曲げる手鎌と思われる。図の左側に折り曲げが認められる。



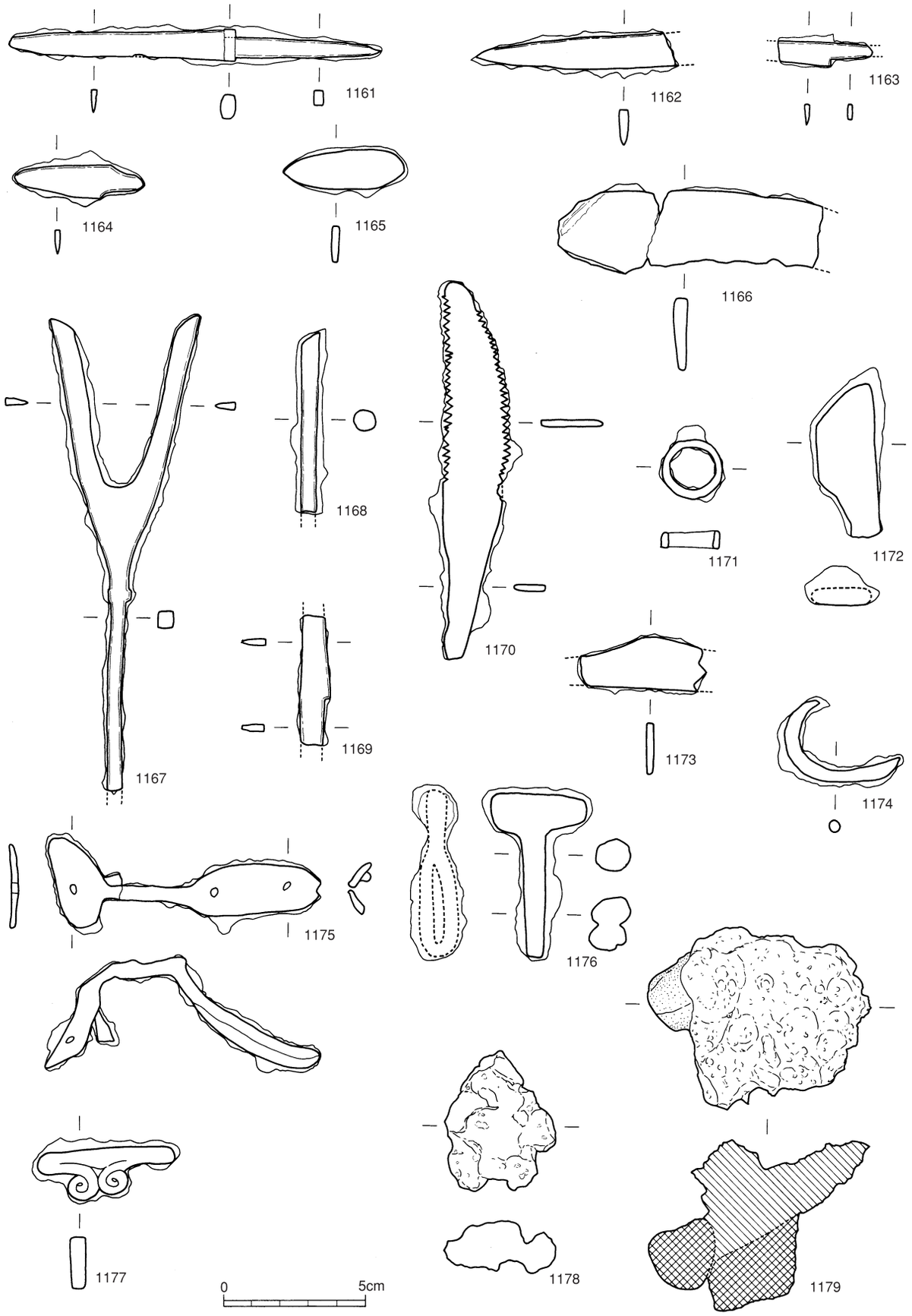
第172図　古代の遺物43（軒丸瓦，軒平瓦）



第173図　古代の遺物44（丸瓦）



第174図　古代の遺物45（平瓦）



第175図　古代の遺物46（鉄器，鉄製品他）

鉄鏃（第 175 図 1167 ～ 1169）

1167 は雁又鏃であり身部内側に刃部が形成される。茎は先端を欠損するものの断面四角形を呈している。1168 は身部の先端部であり，刃部の鋭利な面は先端の斜刃となると思われる。断面は図のようにほぼ円形を呈する。1169 は偏平な板状を呈するものであり，鉄鏃の一部と考えられる。身部先端と茎部の大部分を欠損する。

不明な鉄製品（1170 ～ 1174）

1170 は先端の両側が鋸歯状になるもので，柄の部分と推定される基部は平坦となる。1171 は指輪状を呈するものである。1172・1173 は刀子状の形態を呈するが，刀子とは考えられず，1174 は半円状に曲がるものである。1173 は 7 号住居跡から出土した。

金具等の装飾品（1175 ～ 1177）

1175 は長楕円形と楕円形を呈する部分が断面四角形のコの字状に連なるものである。各凸面部には孔がみられる。1176 は T 字状になるもので下は曲げられている。1177 は装飾品の一部かと思われるもので，張出部は X 線によると各々逆方向に曲げられている。

鉄滓（1178 ～ 1179）

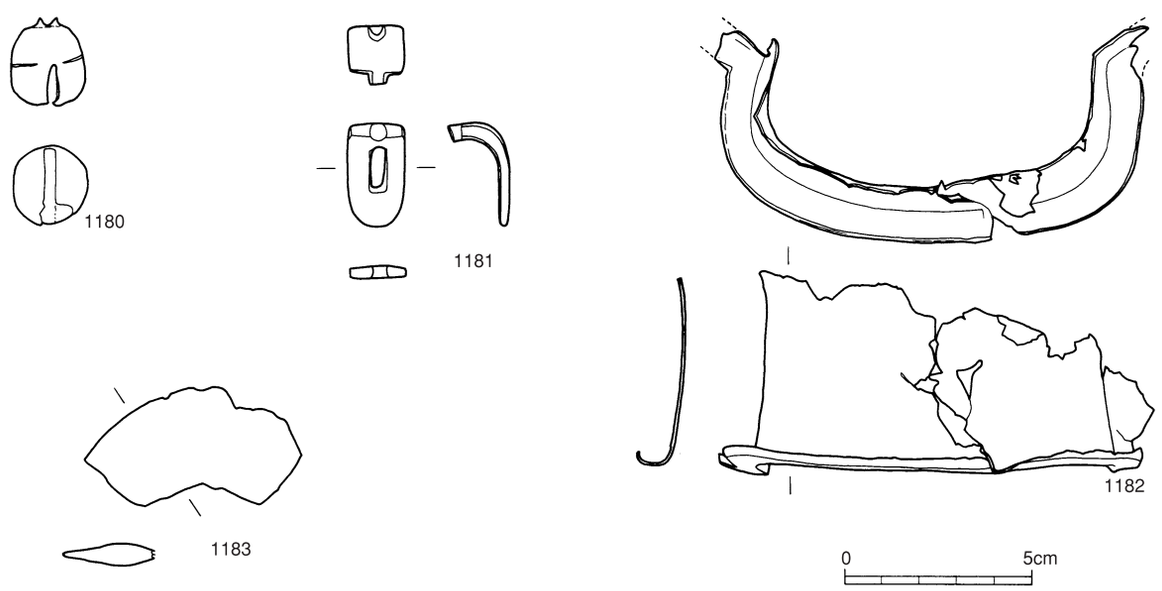
K 6 ～ 8 においては鉄滓が少なからず出土した。ただし包含層中の出土であり，一ヶ所にまとまって出土していない。1178・1179 はいずれも埦形滓であり，1179 は下面に 5 ～ 8 ㎝程度の礫が付着している。

10. 青銅製品（第 176 図 1180 ～ 1183）

1180 は鈴である。

1181 はくの字に曲がる部分であり，広い面の先端は丸くなり中央には細長い孔がある。他方は凸状となる。1182 は何らかの容器状を呈するもので，残存部分は隅丸方形状となる。平坦に近い接地面から屈曲して上方に垂直に伸びる。器壁は薄い。接地面端部もわずかに屈曲する。

1183 は平板状を呈するものであり，断面はレンズ状となる。



第176図　古代の遺物47（銅製品）

第46表　古代遺物観察表21（瓦）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区・層		調整		厚さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考	注記番号
						外面	内面					
172図	1148	瓦	軒丸	9.5	13H	珠文	細弁文	6.6	1.1	0.8		3772
	1149	瓦	軒丸	8.0	Ⅲ	縄目タタキ	細弁文	6.1	3.8	1.6		5391
	1150	瓦	軒丸	15.0	Ⅲ	縄目タタキ	タタキ	11.1	0.7	0.7		923
	1151	瓦	軒平	12.0	Ⅲ	縄目タタキ	布目痕	4.6	1.2	0.5		408
173図	1152	瓦	丸	10.0	20H	斜格子タタキ	布目痕	13.4	1.3	0.4		7271
	1153	瓦	丸	10.0	Ⅲ	縄目タタキ	布目痕	3.4	1.2	0.3		
	1154	瓦	丸	12.0		縄目タタキ	布目痕	7.3	1.5	0.5		
	1155	瓦	丸	9.5	Ⅲ	縄目タタキ	布目痕	4.7	1.4	0.3		1186
	1156	瓦	丸	4.0	Ⅲ	縄目タタキ	布目痕	13.3	2.4	0.3		699
174図	1157	瓦	平	9.5	6H	斜格子タタキ	布目痕	9.5	2.5	0.3	板目	1756
	1158	瓦	平	5.0	Ⅳ	斜格子タタキ	布目痕	16.3	1.3	0.8		562
	1159	瓦	平	7.5	Ⅳ	縄目タタキ	布目痕	4.4	1.6	0.3		3891
	1160	瓦	平	6.5	Ⅱb	縄目タタキ	布目痕	2.7	1.8	0.3		725

第47表　古代鉄器・鉄製品観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	全長（cm）	刃部長（cm）	茎長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考	注記番号
175図	1161	刀子	10.0	20H	13.4	7.6	5.5	1.05	0.4	3個接合	7271
	1162	刀子	12.0		7.3			1.15	0.3	先端部欠損	
	1163	刀子	10.0	Ⅲ	3.4			0.80	0.18	先端部欠損	
	1164	刀子	9.5	Ⅲ	4.6			1.15	0.18		1186
	1165	槍鉋？	7.5	Ⅳ	4.25			1.40	0.2		3891
	1166	鎌	9.5	6H	9.3			2.80	0.4	取付部屈曲，2個接合	1756
	1167	鏃	15.0	Ⅲ	16.9	9.7		5.20	0.2	雁又鏃，頸部欠損	923
	1168	鏃	9.5	13H	6.3			0.50	0.7	長頸片刃鏃？断面方形	3772
	1169	鏃	12.0	Ⅲ	4.6			1.00	0.18		408
	1170	鎌	4.0	Ⅲ	13.3	7.7		2.20	0.2	鋸歯状刃部	699
	1171	不明　鉄製品	6.5	Ⅱb	2.1			2.05	0.2	リング状	725
	1172	不明　鉄製品	5.0	Ⅳ	5.3			2.00	0.5		910
	1173	不明　鉄製品	9.5	7H	4.6			1.80	0.2	ヘラ状	3024
	1174	鉄製品	7.5	Ⅲ	4.1			0.50	0.3	釣り針状	一括
	1175	鉄製品	7.5	Ⅲ	9.7			1.70	0.2	？	1626
	1176	馬具？	8.0	Ⅲ	5.7			3.40	1.3		5391
	1177	鉄製品	7.0	Ⅲ	4.8			1.75	0.5	うずまき状の装飾	1354
	1178	鉄滓	7.0	16H	4.9			3.90	1.7		662
	1179	鉄滓	5.0		11.6			9.30	5.2	石熔着	1422

第48表　古代遺物観察表24（銅製品）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	全長（cm）	刃部長（cm）	茎長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考	注記番号
176図	1180	銅製鈴	9.5	Ⅲ	2.3			2.1	2.00		4350
	1181	銅製品	9T	Ⅲ	2.75			1.5	0.45		16
	1182	銅製品			11.3			5.6	0.08		
	1183	銅製品	7.5	Ⅲ	5.8			2.65	0.55		1151

11　古代の石器・石製品

ここでは主に砥石及び砥石様製品そして軽石製品・玉類を取り上げている。当然のことながら砥石は縄文時代も利用され，また弥生時代の磨製石鏃や石庖丁製作にも利用されている。そして石器の研磨のみだけでなく，鉄器などの研ぎにも使用されることにより，弥生時代・古墳時代・古代・中世と砥石は現代まで利用されており，厳密な時期の区別は困難な点が多い。

砥石（第177図1184～第179図1223）

包含層から出土した砥石は総計67点であり，使用による形態変化や残存度の違いなど考慮する必要があるが，ここでは石材や使用部位・使用面の状況等により５類に区別できる。

１類…小型で板状を呈し，表裏両面及び両側面に使用面があるもの。

1184～1188は凝灰岩及び粒子の細かい砂岩製で，表裏両面に平坦な使用面があり，金属用の砥石と考えられるものである。

２類…穿孔のあるもの。

1189･1190は穿孔が施され，紐が通されていたものと考えられる。1189は方柱状，1190は板状で形態は異なるが，平坦な使用面からいずれも金属用と考えられる。

３類…中型の大きさで２面以上利用され方柱状を呈しているもの。

1191～1205はほぼ柱状を呈し，複数の面に使用痕跡が認められるものである。いずれも平坦な使用面であり金属用と推定される。1196は端部に元の大きさが残り，中央付近は極端な差が出るほど使用されている。このうち1193･1194･1201･1202赤色混じりの木目様のシマがはいった天草砥石と呼ばれるものである。ほかは細粒砂岩である。

４類…比較的に大型で偏平もしくは板状を呈し，主に一面が使用されているもの。

1206～1217は偏平板状を呈する比較的大型のものである。使用されている面は1207･1209･1212が表裏両面とも使用されているが他は一面のみである。また1209の研ぎ面は中央付近がわずかに凹面を呈し，他は平坦となる。石材は１点を除き全て同一であり，小さい金雲母が混在する細粒砂岩である。つまり，1214のみ金雲母を含まない細粒砂岩である。

５類…平坦な砥石状の光沢面をもつが，砥石というより他の石器の一部である可能性があるもの。

1218～1223のうち，1218は平坦な砥石状の光沢面の両側は丸みを持ち，磨製石斧状であり，1219の側面は凹面状の研ぎ面を有する。1220･1222の平坦面は金属様の光沢面をもつ。1221･1223は石皿の一部の可能性もある。

偏平で研磨面を有する石器（第179図1224・1225）

1224･1225はいずれも粘板岩製で，表裏両面に平坦な研磨面をもつ。側面には裁断と推定される斜位の擦痕が残る。

手持砥石（1226～1228）

1226･1228は長軸の両端に小さい平坦な磨面が多面体状に形成されているものであり，手持砥石と考えられる。1226は側縁の凸部も細長い面状に使用面が残り，1228は側面も両端と同様に多面体状の磨面が形成されている。1227は棒状礫が使用され，長軸の片側先端に平坦な磨面が認められるものである。また側面には1226と同様に縦方向に長く幅2～3㎜程度磨面が数条確認できる。これも手持で何らかの石製道具などを研磨した手持砥石と考えられる。

溝状の研磨面をもつ石製品（第179図1229･1230）

1229･1230は片側平坦面の中央に溝状の凹研磨面を有するものである。1229は片面は丸みを有し反対面は凹む。両側縁には横方向に磨られU字状の溝が複数形成されている。1230は一端は板状四角形の断面であるが，欠損部の方は研磨により楕円形状となる。

一部に研磨面をもつ石製品（1231・1232）

1231は偏平礫の一部に研磨が施されたものである。研磨は片側平坦面と片側縁に観察される。1232はノコ状の研磨痕が一部に認められ，側縁には磨り切り切断の痕跡が認められる。

石器未製品（1233・1234）

1233はカマボコ状の断面を呈し，両側面には著しい研磨面を有し，底面は剥離により整形され両側縁は敲打により整えられている。底面には部分的に研磨も認められる。棒状石斧の未製品と考えられる。1234は偏平礫の片面に丁寧な研磨が施されたものであり，縁辺は面取りされて研磨が行われている。いわゆるバカ庖丁の未製品の可能性が考えられる。

その他の砥石状石製品（1235～1238）

1235～1237は砥石様の平坦な砥石面をもち，突端の一部に敲打痕が認められるものである。1237は砥石様の平坦な磨面と突端及び片側縁辺に敲打痕が残るものである。1238は砥石として利用された片側の研ぎ面をもち，周縁は粗い剥離により円形に加工された，メンコ形の石製品である。

軽石製品（第180図1239～1242）

遺物包含層より少なからず出土しているが，ここでは確実に人為的と考えられる穿孔のあるもののみ図化した。

1239は最大長約18cm，厚みは７cmを超す大型のもので，ノミ状の先端が平坦な鋭い工具により穿孔されているものである。1240～1242は小型品であり，1240はV字状の穿孔，1242は外径の大きい穿孔，1241は針状の細い穿孔が施されている。

石製丸鞆（1243・1244）

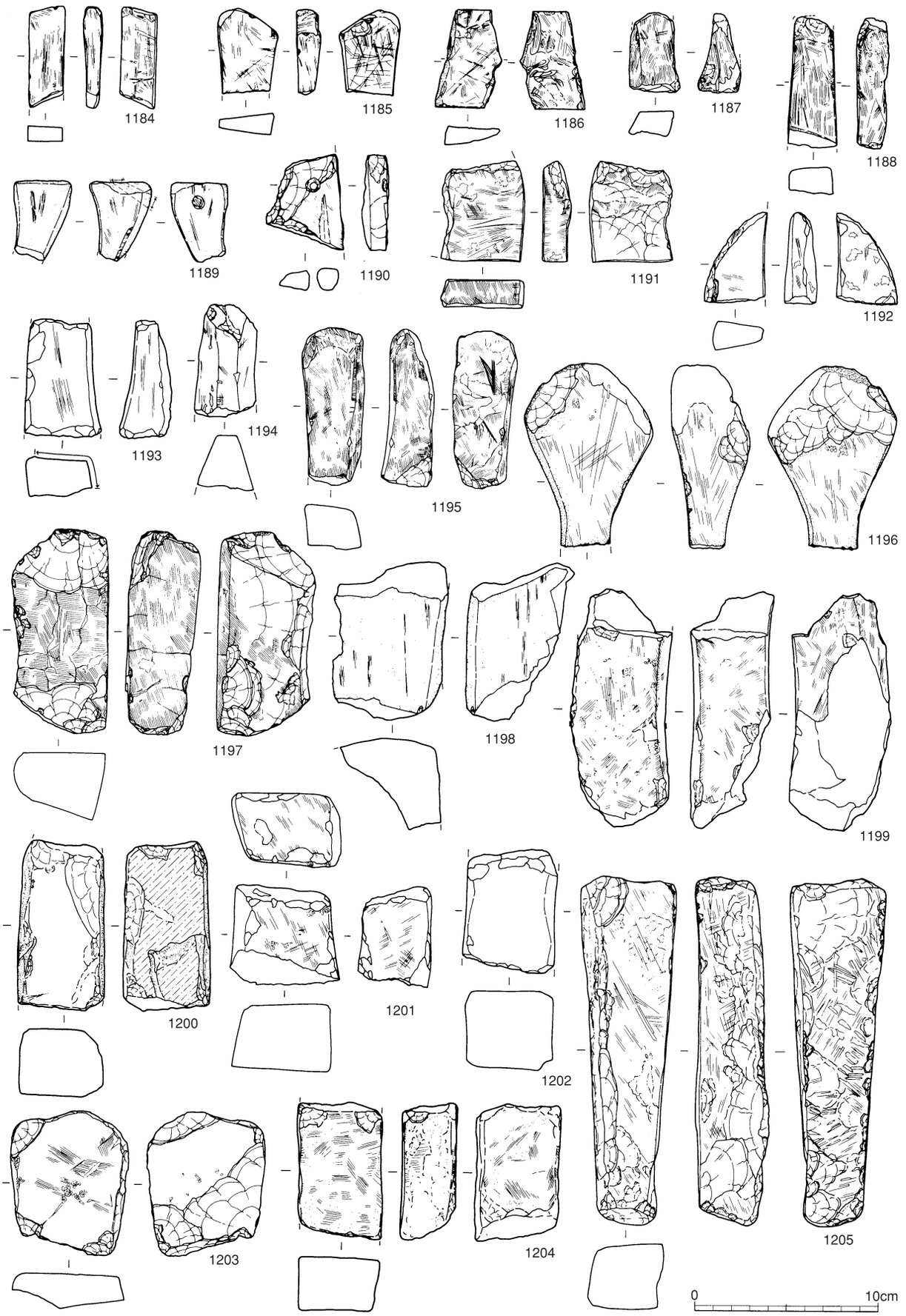
２点出土した。いずれも石帯丸鞆である。1243は黒色頁岩製で表面と側面は光沢するほど研磨されている。1244は緑色に白色のしまがはいる蛇紋岩と推定される石材である。いずれも裏面には３ヵ所の潜り穴が施されている。1244は完形で横幅32㎜，縦28㎜，厚さ５㎜を測る。1243は推定横幅45㎜程度，厚さ８㎜と比較的大きい。1244は現在いかんながら紛失している。

玉類（1245～1248）

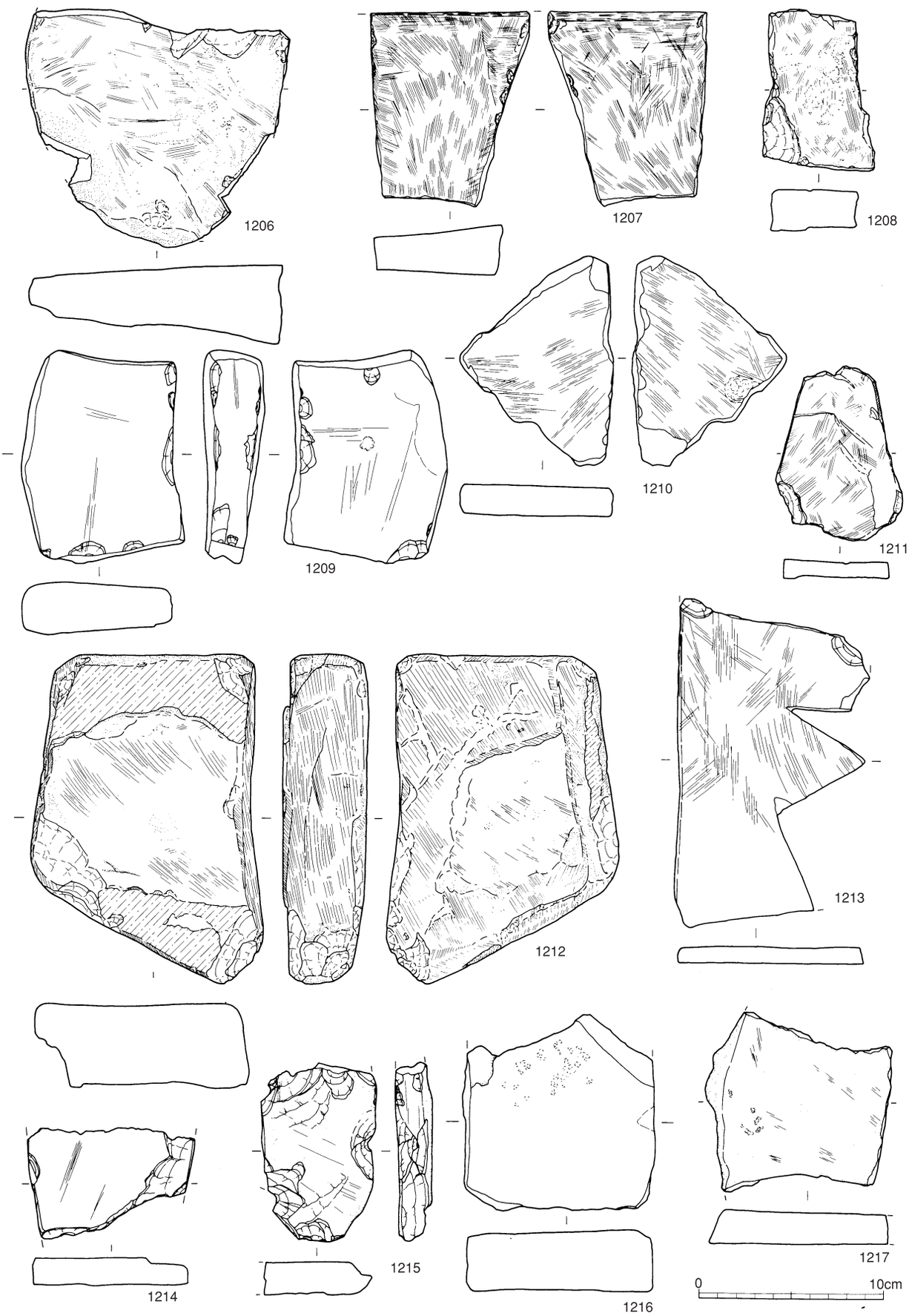
1245は光沢のある緑色を呈しており肉眼でヒスイと考えられるものである。裏面には竹管状のものによる穿孔失敗の痕跡が残る。1246もヒスイ製の可能性があるもので，突端部に溝が施されている。穿孔は片側からで欠損面も研磨された痕がある。1247は輝緑凝灰岩製と思われる丸玉である。1248は青緑色のガラス製小玉である。

玉製作の剥片（1249～1251）

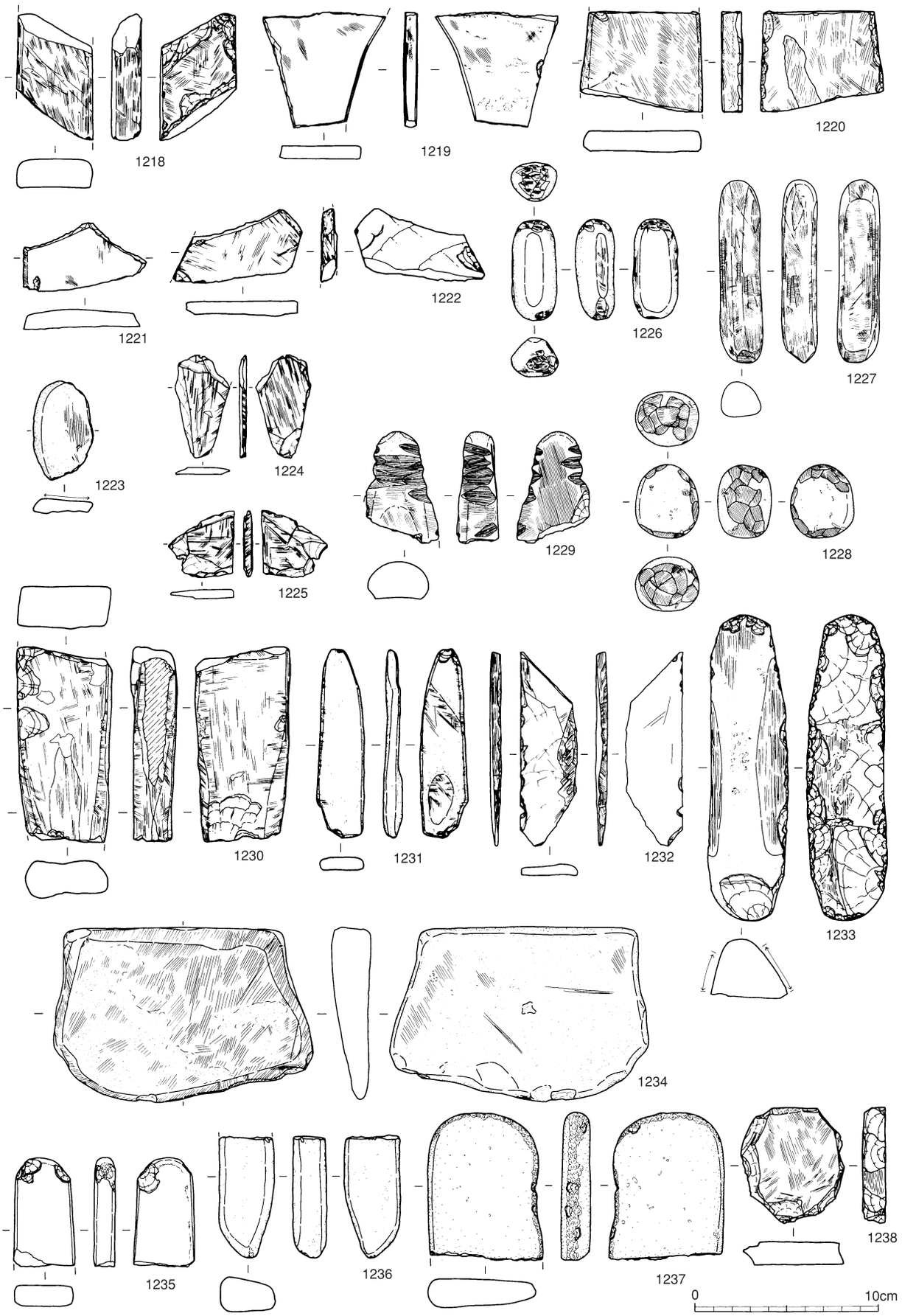
1249は赤い光沢のあるいわゆる赤玉石とされる鉄石英，1250は光沢のある緑色の蛇紋岩の剥片である。これらは玉作りに関連する剥片と考えられる。1251は緑色の碧玉と推定できる剥片であり，サイコロ状に調整されており，角の部分には敲打の痕が多く認められる。



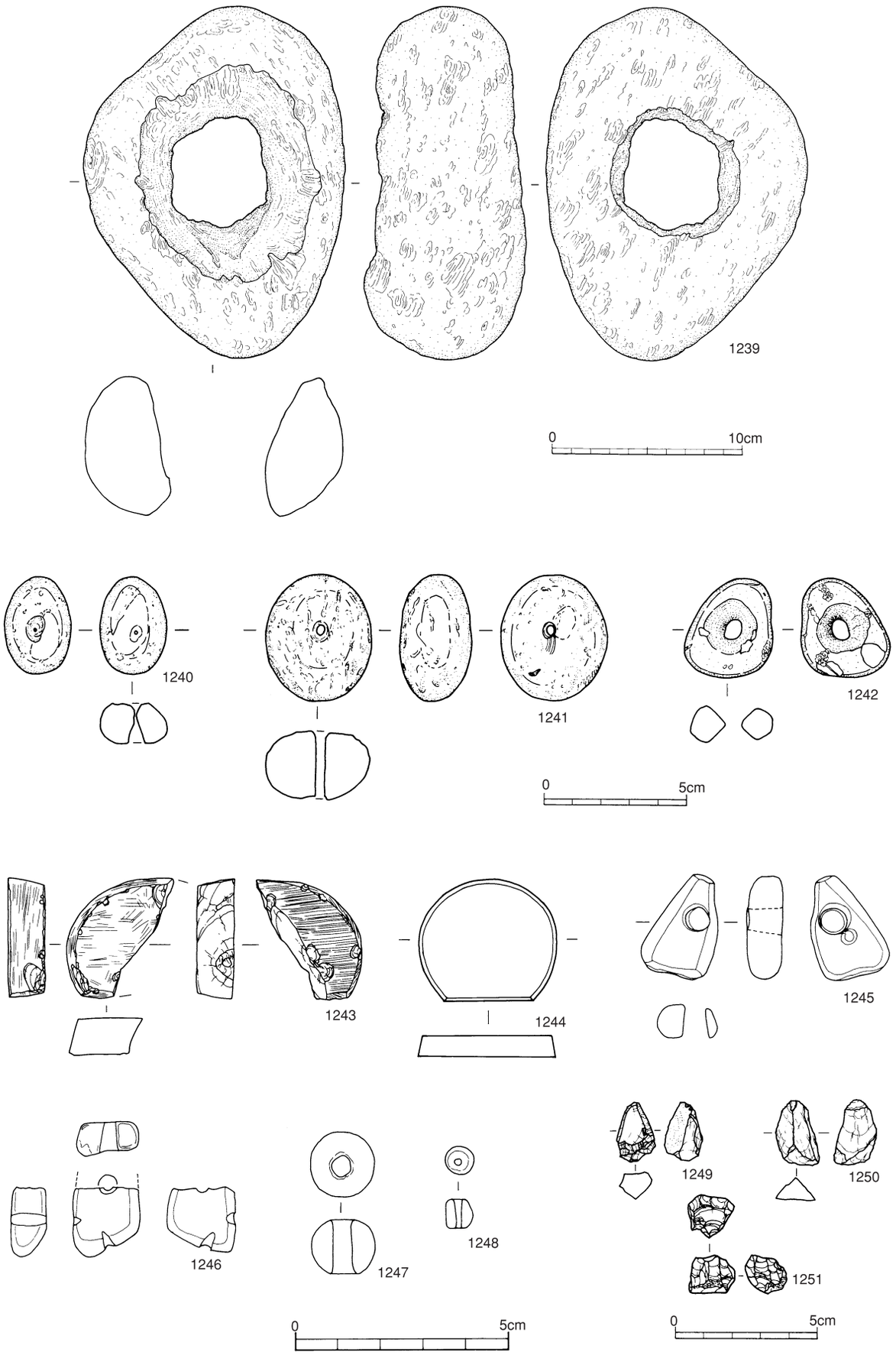
第177図　古代の遺物48（砥石①）



第178図　古代の遺物49（砥石②）



第179図　古代の遺物50（砥石③）



第180図　古代の遺物51（軽石製品，玉類）

第49表　出土石器一覧表（3）

挿図番号	番号	器　種	出土区・層	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号
177	1184	砥石	7.5 Ⅲ	凝灰岩	5.45	1.95	1.05	16.57	671
	1185	砥石	7.5 Ⅱb	凝灰岩	4.60	3.20	1.03	22.62	74
	1186	砥石	5 表	凝灰岩	5.30	3.55	1.00	22.13	
	1187	砥石	9.5 Ⅲ	砂岩	4.30	2.75	2.30	24.90	1414
	1188	砥石	14T Ⅲ	砂岩	7.10	2.65	1.75	50.79	359
	1189	穴あき砥石	6.5 Ⅲ	砂岩(天草砥)	4.30	3.15	3.30	53.40	1172
	1190	穴あき砥石	6.5 Ⅲ	砂岩	5.10	4.70	1.35	33.80	1970
	1191	砥石	7.5 Ⅲ	砂岩	5.45	4.50	1.50	64.81	6082
	1192	砥石	10 Ⅲ	砂岩	4.90	3.35	1.75	29.98	5046
	1193	砥石	14 Ⅱ	砂岩(天草砥)	6.45	4.20	2.60	84.36	
	1194	砥石	9 Ⅲ	砂岩(天草砥)	6.05	3.30	2.90	69.71	5682
	1195	砥石	7.5 Ⅲ	砂岩	805.00	3.45	2.70	108.78	309
	1196	砥石	7 Pg	砂岩	10.00	6.90	4.10	280.86	3429
	1197	砥石	7.5 Ⅲ	凝灰岩	11.00	5.20	4.75	258.77	2733
	1198	砥石	12 Ⅲ	砂岩	8.60	6.25	5.15	288.47	509
	1199	砥石	2 Ⅲ	砂岩	12.90	5.40	4.25	299.70	52
	1200	砥石	12 P	砂岩	9.20	4.75	3.55	281.65	991
	1201	砥石	9 Ⅲ	砂岩(天草砥)	5.40	5.95	3.85	180.97	632
	1202	砥石	9.5 Ⅱb	砂岩(天草砥)	6.60	5.10	4.25	209.57	550
	1203	砥石	7.5 Ⅲ	砂岩	7.80	6.40	1.85	121.59	626
	1204	砥石	10 Ⅲ	砂岩	7.35	4.65	3.00	192.36	1906
	1205	砥石	6.5 Ⅱb	砂岩	18.85	5.20	4.00	547.50	517
178	1206	砥石	5 マザリ	砂岩	12.90	14.35	4.20	940.00	1422
	1207	砥石	7.5 Ⅲ	砂岩	10.55	8.65	2.65	400.00	2787
	1208	砥石	5	砂岩	8.70	6.00	2.20	187.48	1422
	1209	砥石	7 Ⅲ	砂岩	11.50	8.85	3.30	500.00	1191
	1210	砥石	12 P	砂岩	17.75	12.60	4.60	131.00	967
	1211	砥石	7.5 Ⅲ	砂岩	11.35	8.30	1.65	211.44	2676
	1212	砥石	5 Ⅳ	砂岩	9.40	6.85	1.05	92.51	720
	1213	砥石	7 Ⅳ	砂岩	17.75	10.55	0.85	280.09	3521・3409
	1214	砥石	10 Ⅲ	砂岩	7.00	9.05	1.50	112.03	6200
	1215	砥石	9.5 H13	砂岩	9.70	6.25	1.95	162.60	4138
	1216	砥石	9.5 H6	砂岩	10.65	10.50	3.35	632.50	2188
	1217	砥石	15 ピット	砂岩	9.80	10.20	1.80	289.42	1460
179	1218	砥石	9.5 Ⅲ	頁岩	6.85	4.20	1.65	69.08	1171
	1219	砥石	6 Ⅴ	砂岩	6.20	6.70	0.70	44.86	1750
	1220	砥石	5 Ⅲ	砂岩	5.45	6.70	1.15	81.69	1198
	1221	砥石	9 Ⅲ	砂岩	3.70	6.70	0.95	31.65	4793
	1222	砥石	7.5 H34	頁岩	3.95	7.05	0.85	26.97	3980
	1223	砥石	15 Ⅲ	安山岩	5.30	3.25	0.90	16.06	1135
	1224	研磨がある製品	表	粘板岩	5.60	3.00	0.40	7.78	
	1225	研磨がある製品	表	粘板岩	3.60	3.60	0.5	8.11	
	1226	手持砥石	10 Ⅲ	安山岩	5.40	2.50	2.10	42.76	2284
	1227	手持砥石	6.5 Ⅲ	頁岩	9.95	2.35	1.95	84.06	2516
	1228	手持砥石	9 Ⅲ	砂岩	4.00	3.45	2.95	49.39	1901
	1229	加工のある砥石	8 Ⅳ	砂岩	6.05	3.95	2.20	54.51	5641
	1230	加工のある砥石	6T Ⅲ	砂岩	10.60	5.15	2.45	227.91	419
	1231	研磨加工製品	8 Ⅲ	凝灰岩	10.25	2.60	1.05	28.59	2986
	1232	研磨製品	3 Ⅲ	凝灰岩	10.60	3.05	0.65	24.99	660
	1233	石斧未製品	6 Ⅱb	頁岩	16.60	4.40	3.20	25.00	444
	1234	バカ庖丁未製品	5 Ⅳ	砂岩	14.15	9.50	2.15	447.50	772
	1235	砥石状製品	8 Ⅲ	砂岩	5.90	3.35	1.15	44.37	4815
	1236	砥石状製品	9 Ⅲ	砂岩	6.65	3.05	1.85	67.88	1521
	1237	砥石状製品	6.5 Ⅲ	安山岩	8.00	6.35	1.60	143.35	2650
	1238	石製円板	9.5 Ⅱb	砂岩	6.25	5.65	1.20	74.57	447
	1239	軽石製品		軽石	18.45	13.85	8.50	400.00	
	1240	軽石製品	9.5 H7	軽石	3.45	2.40	1.55	3.27	4101
	1241	軽石製品	10 H20	軽石	4.50	3.75	2.55	12.24	7176
	1242	軽石製品	8 Ⅲ	軽石	3.45	3.15	1.30	3.63	4880
	1243	石帯(丸鞆)	8 Ⅲ	黒色頁岩	2.85	2.50	0.80	7.03	147
	1244	石帯(丸鞆)		蛇紋岩	3.20	2.80	0.50		
	1245	玉	10 Ⅲ	ヒスイ	2.50	1.80	0.80	6.28	
	1246	玉	8 Ⅳ	ヒスイ	1.60	1.45	0.70	4.20	6005
	1247	丸玉	8 Ⅲ	緑色凝灰岩	1.50	1.45	1.25	4.04	3592
	1248	ガラス玉	8 Ⅲ	ガラス	0.60	0.70	0.65	0.35	
	1249	玉未製品	14 Ⅲ	蛇紋岩	2.10	1.40	1.00	2.44	725
	1250	玉未製品	12 Ⅲ	赤玉石	2.25	1.50	0.75	2.59	
	1251	玉未製品	6.5 表	ヘキ玉	1.6	1.5	1.3	3.14	

第Ⅷ章　中世の遺構と遺物

中世の遺構は，調査区のほぼ中央にＫ７～11区を中心に，掘立柱建物跡，配石遺構，土坑，畠跡などが，遺物包含層であるⅡb層下面より検出された。

出土遺物は，土師器，瓦質土器などの土器や，樺万丈窯系須恵器，中国陶器などの陶器，白磁，青磁などの磁器，羽口，取瓶などの土製品，滑石製品などの石器が調査区全体から広く出土している。割合的には，遺構検出地帯よりも，やや南側（Ｋ３～５区）から多く出土している。

第１節　検出遺構（第181～183 図　1～3）

中世の遺構と考えられるものは，「第183図，中世の遺構分布図」に示したように掘立柱建物跡１棟，配石遺構１基，土坑・ピット１基，畠跡１枚が検出された。いずれも，遺物包含層であるⅡb層下面より検出されたものが中心である。

遺構内からの出土遺物は少なく，白磁や滑石製品など遺構内出土遺物については，「第２節出土遺物」の項で他の遺物と一緒に取り扱った。

１　中世の掘立柱建物跡（第181図）

Ｋ７区で，畠跡の南側に隣接するように検出された。建物の規模は２間×３間であり，一部撹乱部分もあり定かでないが９個のピットからなり，主軸は略南北方向である。桁行は約3.13m，梁行は約3.51mであり，柱間寸法は2.17m前後でほぼ等間隔である。床面積はおよそ21.2㎡であり，長方形の建物である。ピットは円形または楕円形を呈し，平均して径0.2×0.21m，深さ0.32mであり，ほぼ同規模である。柱の径は，残存部分がなく，柱痕跡も見あたらないことから不明であるが，ピット底径とほぼ同規模のものと思われ，廃棄時に抜き取られた可能性も考えられる。

ピット中の埋土は，中世の遺物包含層であるⅡb層の明褐色土であり，埋土中より白磁碗の口縁部（第185図33）が１点出土したが，その他に出土遺物は確認されなかった。

なお，掘立柱建物跡の建物規模，ピット形状などは，第50表に示した。

第50表　中世の掘立柱建物跡計測表

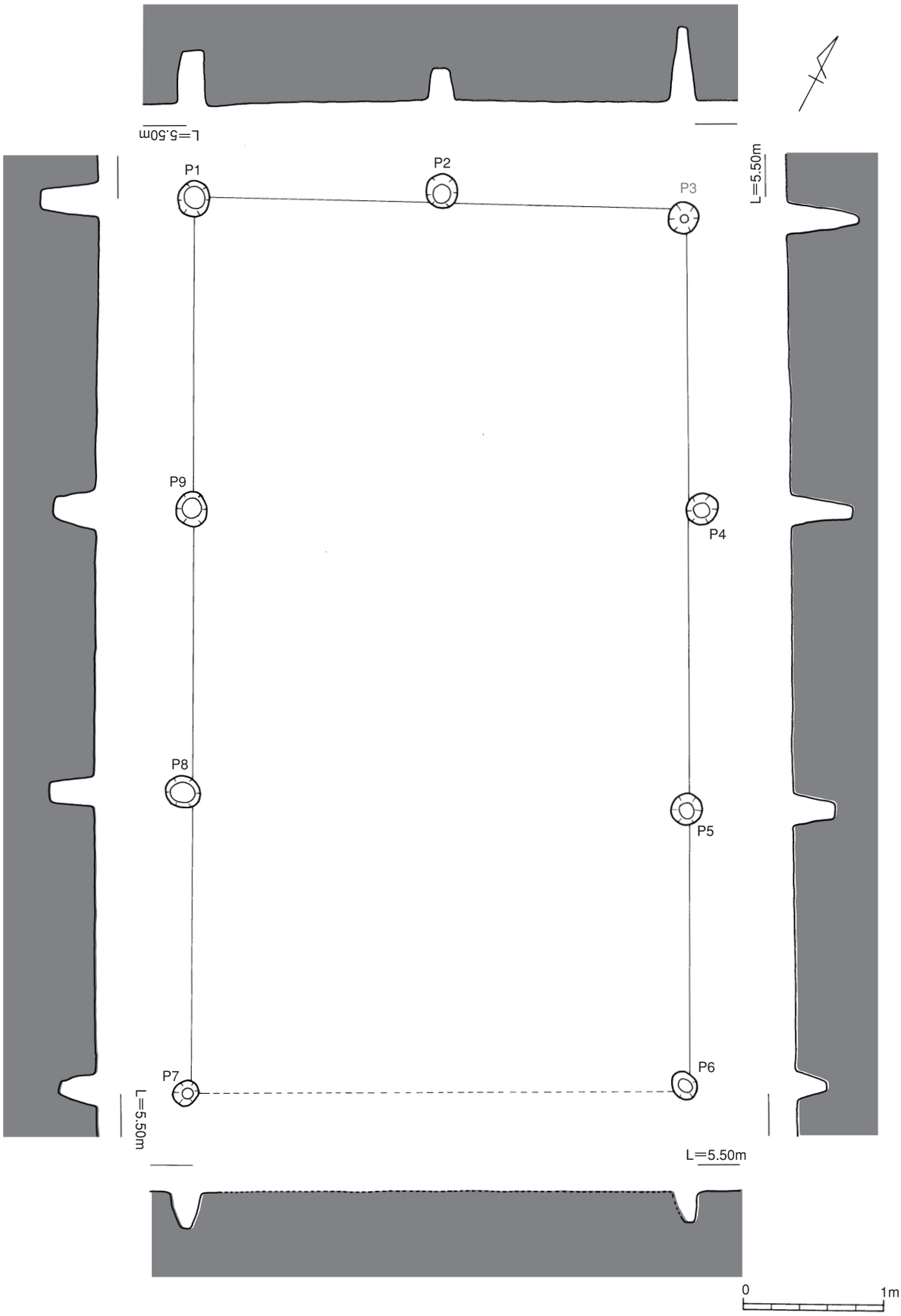
主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)		梁行柱間(m)
南北 N-29°-W	P1-P7 3．18	P1-P3 3．48	P1-P9 2．20	P3-P4 2．06	P1-P2 1．76
	P3-P6 3．08	P7-P6 3．54	P9-P8 2．62	P4-P5 2．12	P2-P3 1．74
			P8-P7 2．12	P5-P6 1．94	

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5
長径(cm)	20	24	20	23	23
短径(cm)	23	22	22	21	22
深さ(cm)	37	22	52	44	30

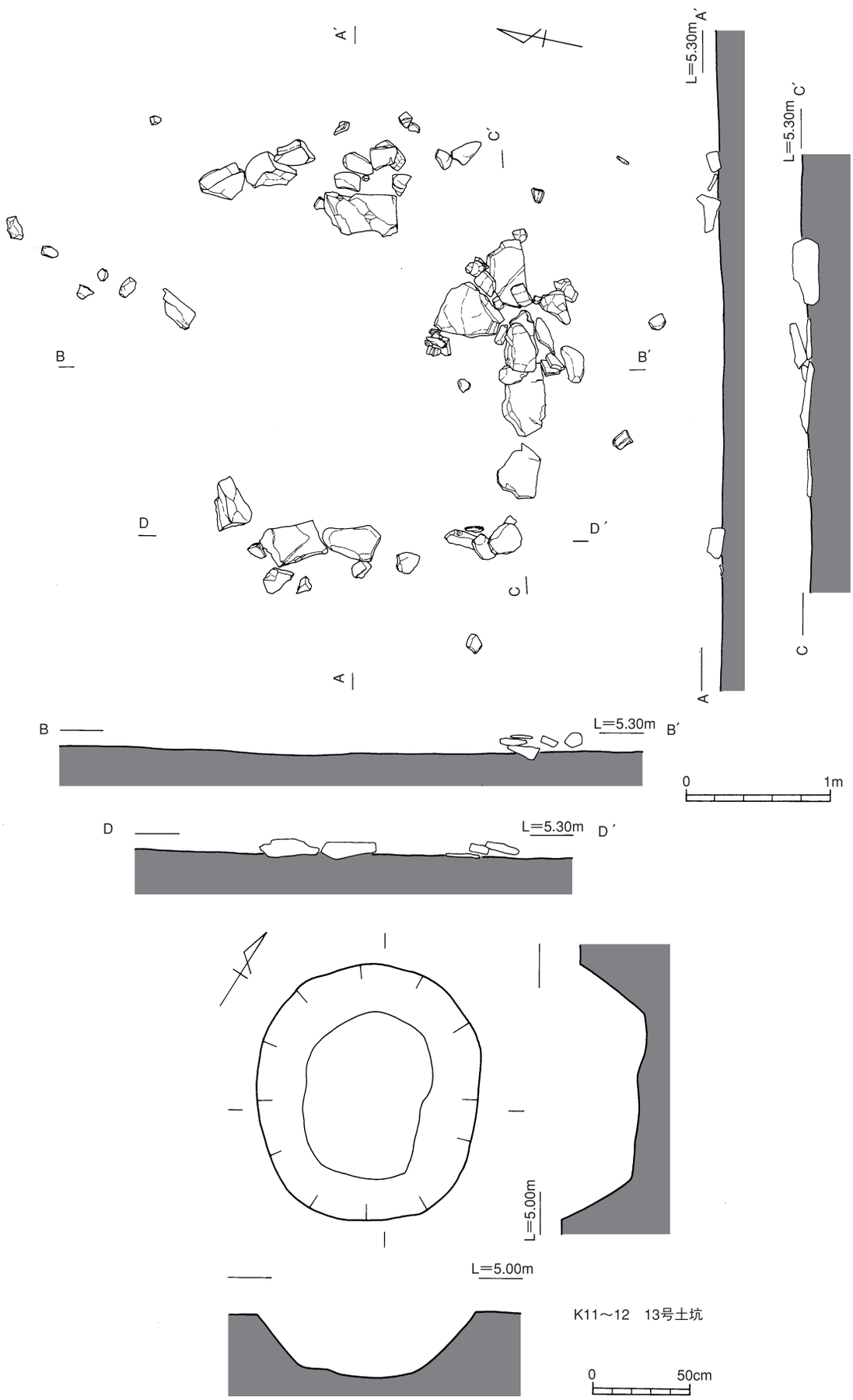
ピットNo.	P6	P7	P8	P9
長径(cm)	20	19	25	25
短径(cm)	18	17	23	22
深さ(cm)	22	26	32	30

２　配石遺構（第182図）

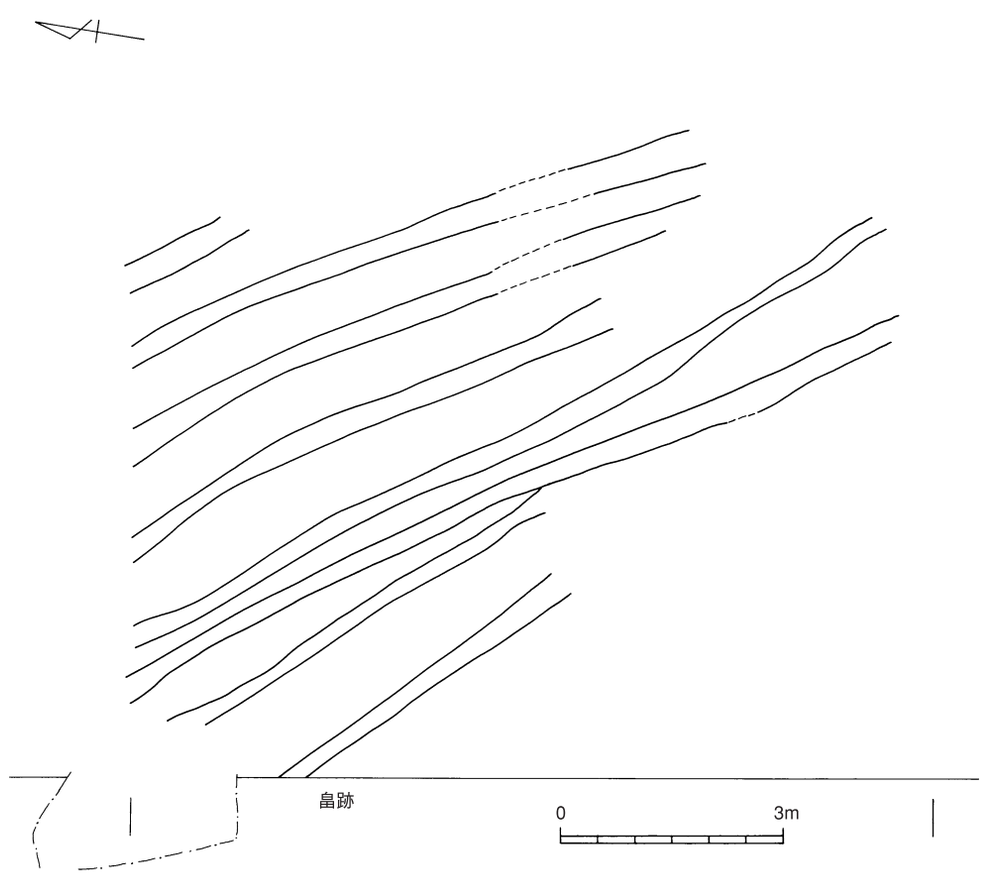
K9.5区で検出された。径42×26㎝，厚さ12㎝程度の比較的大型な平たい角礫から，径25×14㎝，厚さ4㎝程度の小さめの角礫などを直線的に並べたものである。平面形は長方形を呈し，遺構の規模は，南北約3.0m，東西約3.5mである。北東部分に石の移動が見られ，直線的に伸びるように見

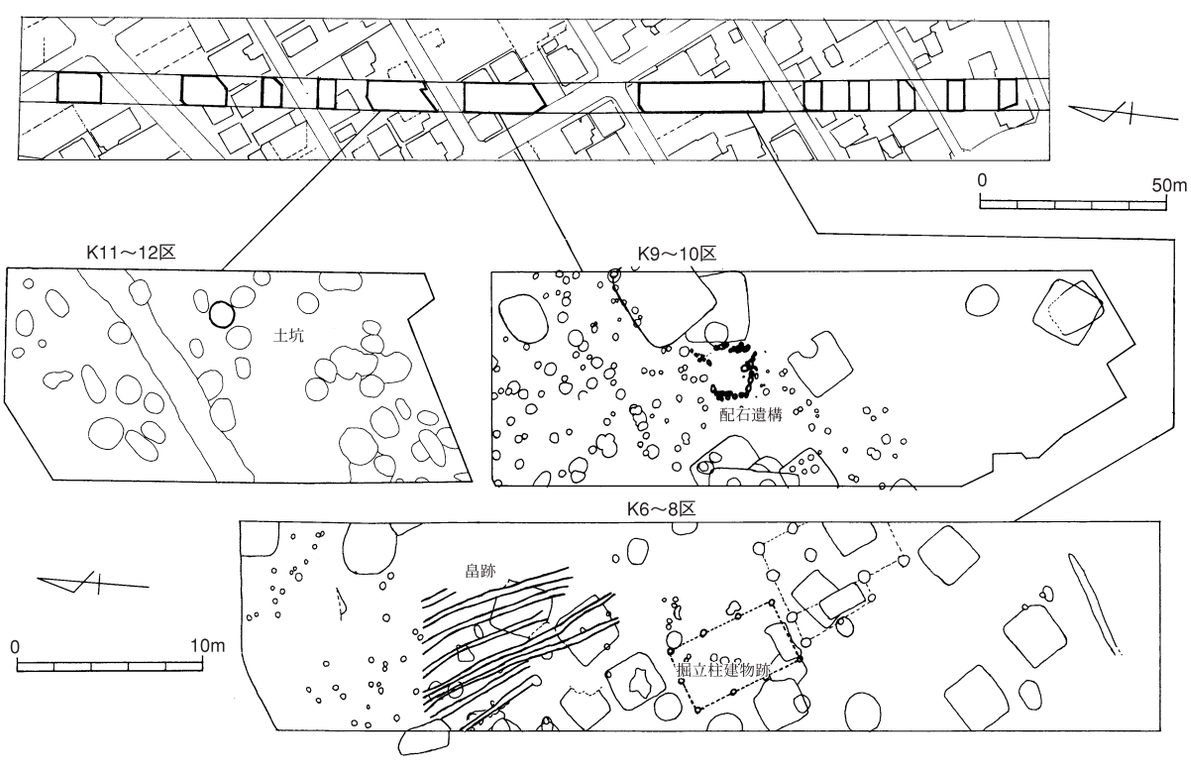


第181図　中世の遺構1（掘立柱建物跡）



第182図　中世の遺構2（配石遺構，土坑）





第183図　中世の遺構3（畠跡）　中世の遺構配置図

えるが，遺構内に現代の撹乱部分があるなど，その後の堆積状況により動いたものと推察される。遺構内に掘り込みはなく，意図的に方形になるよう大小の礫を並べていることから，何らかの建物の基礎部分にあたる礎石の可能性も考えられる。

３　畠跡（第183図）

K7.5区で検出された。Ｋ７区で検出された掘立柱建物跡の北側に隣接している。近世以後に削平された部分も見られるが，畝の形状から調査区外へ大きく広がると思われる。検出された面積は，約87.6㎡で，畝溝幅が約25㎝，畝間は約70㎝間隔で8条である。長さは検出状況が異なるが，1.8～11.6ｍである。埋土中より遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡と隣接していることから，関連が推察される。

４　土坑（第182図）

K11～12区で検出された。この調査区では，大きめの土坑が39基集中して検出され，時期的にも古墳～近世まで混在している。土坑の規模は，長径1.32ｍ，短径1.16ｍ，深さ0.33ｍの円形を呈し，埋土中より白磁碗の口縁部（第185図28）が出土した。

第２節　出土遺物（第184～186図　1～75）

中世の遺物は，遺物包含層であるⅡb層を主として数多く出土した。一部は，Ⅲ層の古墳～古代にかけての遺物と混じり合った状態で出土するものも少なくなかった。

出土した遺物は，土師器，瓦質土器，須恵器などの土器や，天目埦などの中世陶器や中国陶器などの陶器類，白磁，青磁，青白磁などの磁器類，取瓶，羽口などの土製品，滑石製品などと多彩である。

１　土器　（第184図 1～23）

中世の土器は，調査区全体の南側を中心に出土した。出土したものはほとんどが土師器であるが，やや硬質な瓦器や，須恵器なども含まれている。

土師器　（第184図　1～9）

中世の土師器と思われるものは，Ｋ３～５区を中心に出土し，中心となるのは皿である。出土したもののうち９点についてのみ図化した。

１～９は，土師器皿であり，底面の切り離しはいずれも糸切りである。浅黄橙色の精良な胎土を用い，胎土中に赤色砂粒が多く混じる。１，２は，底径が８～９㎝と大きめの皿であり，底面からやや直線的に立ち上がり，口唇部を丸く仕上げている。外面はヨコナデ調整を施し，底部と胴部の境目にわずかな凹みを持つ。１は，口径16.4㎝，底径9.5㎝，器高3.5㎝である。２は，上部が欠損しているが１とほぼ同じ器形と思われ，外面に黒斑が大きく見られる。

３は，内湾しながら立ち上がるもので，低い充実気味の底面はわずかに張り出している。内面は中央が凹んだ球形状を呈している。内外面ともヨコナデ調整を施す。

４～９は，底径が５～７㎝，器高0.9～1.4㎝程度の小皿である。精製された胎土を用い，ヨコナ

デ調整で仕上げている。４は内面が灰褐色化し，灯明皿として使用された可能性がある。８は，底面の切り離し部分に張り出しが残る。

瓦器（第184図　10､11）

10，11は，瓦器埦の口縁部である。精製された灰白色で硬質の胎土を用い，外面にナデ調整，内面にヘラミガキ調整を施している。口唇部を丸く仕上げ，外反せず直口する。10は外面にヨコナデ調整による稜が残る。内面は幅約３㎜の太めのヘラミガキを施し，ミガキの隙間は見られない。11は，器面が摩滅しており，表面に空洞が見られる。

須恵器（第184図　12～19）

須恵器は，出土総数12点中８点を図化した。器種は，甕，鉢，片口，捏鉢などで，全体的に低温焼成であり，胎土は瓦質に近い灰白色である。

12～14は甕である。12は，玉縁状を呈した口縁部で内外面ともナデ調整を施す。鉢の可能性もある。13，14は，内面にハケメ調整，外面に格子目状のタタキ調整を施す。16は，内面に櫛状工具による条痕が残る擂鉢である。17は，口縁部の一部を下方へ曲げ注口とした片口で，下位に縦方向のハケメ調整痕が残る。18は捏鉢の底部であり，内外面ともハケメ調整痕を丁寧にナデ消している。12～14，16～19は，樺万丈窯系の須恵器である。

15は，外面に鋸歯状のタタキ痕が残るものである。

陶器（第184図　20～23）

陶器は，調査区南側全体で出土している。出土した遺物は，国内で製作された中世陶器と，貿易により中国から輸入された中国陶器に大別される。

天目埦（第184図 20）

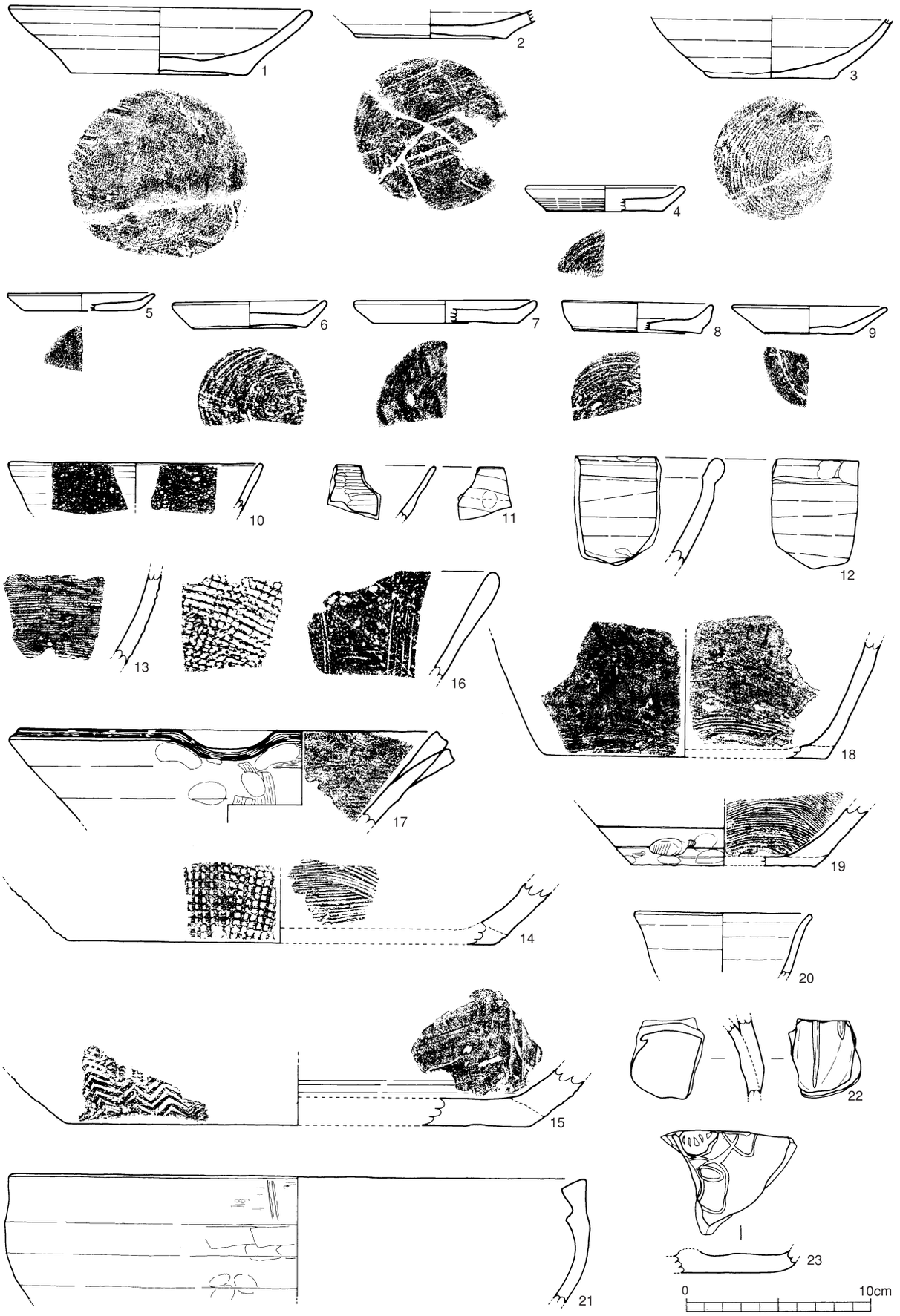
天目埦は，Ｋ２～３区，Ｋ８～９区で５点出土し，その中で１点について図化した。

20は，やや直線的に開く胴部が口縁部でわずかに外反する埦であり，口唇部を丸く仕上げている。全体に黒褐色の釉が掛かり，口縁部周辺は明緑灰色である。口唇部の釉は剥ぎ取られている。釉の発色が悪く，表面に細かい気泡が浮き出ている。口縁部のみの出土のため全体型は不明である。図化しなかったものもほぼ同程度の器形であると思われる。

中国陶器（第184図　21～23）

貿易により輸入された中国陶器も，数多く出土している。総点数は42点であり，調査区の中央から南側にかけてやや集中が見られる。その中から３点について図化した。

21～23は，中国陶器である。21は，内湾しながら立ち上がり，口縁部が直口する鉢である。口唇部を肥厚させ平坦面を作り出し，内面に大きめの段を持つ。全体に褐釉が掛かるが，発色が弱い。胎土に白色砂粒を多く含み，外面にも浮き出ている。22は，外面に黒釉を施釉した取手であり，部分的な出土のため全体器形は不明であるが，水柱の取手であると思われる。取手中央に縦方向の沈線が２条施され，内面は無釉である。23は，内面に花文が描かれた盤である。花文の中心に粘土貼り付けにより凸部を作り出し立体的に仕上げている。淡茶白色の胎土に暗黄褐色の釉が内面に掛かり，南方系産の可能性があると考えられる。



第184図　中世の遺物1（土師器・須恵器他）

第51表　中世の遺物観察表1（土師器・須恵器他）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	部位	胎土	調整 内	調整 外	色調	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層	注記番号
184図	1	土師器	皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り底	黄橙	良好	16.4	9.5	3.5	ほぼ完形	11T Ⅲ	586
	2	土師器	皿	胴～底	精製された胎土	ヨコナデ 工具ナデ	ヨコナデ 糸切り底	(内) 灰白 (外) 浅黄橙	良好	－	8.6	－	黒班あり	11T Ⅲ	586
	3	土師器	皿	胴～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ 工具ナデ	ヨコナデ 糸切り底	(内) 灰白 (外) 浅黄橙	良好	－	6.7	－	2／3個体	3 Ⅲ	486 556
	4	土師器	小皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り底	灰褐	良好	8.6	6.4	1.4	1／4個体	4 Ⅲ	858
	5	土師器	小皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り底	にぶい黄橙	良好	6.8	5.0	0.9	1／4個体	11T Ⅲ	450
	6	土師器	小皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り底	(内) 灰白 (外) 明赤褐	良好	8.3	6.0	1.4	2／3個体	4 Ⅲ	872
	7	土師器	小皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 糸切り底	浅黄橙	良好	9.9	7.8	0.9	1／3個体	4 Ⅲ	921
	8	土師器	小皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り底	(内) 灰白 (外) 明赤褐	良好	8.2	7.0	1.4	1／4個体	4 Ⅲ	670
	9	土師器	小皿	口～底	精製された胎土（砂粒少混）	ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り底	浅黄橙	良好	8.2	4.6	1.2	1／4個体	3 Ⅲ	768
	10	瓦	埦	口縁部	灰泊（砂粒混）	ヨコナデ	ヘラミガキ	(内) 灰白 (外) 暗灰	良好	13.8	－	－	表面に空洞	4 Ⅲ	783
	11	瓦	埦	口縁部	浅黄（細砂混）	ヨコナデ（指圧痕）	ヘラミガキ	(内) 黒灰 (外) 灰	良好	－	－	－	―	11T Ⅲ	384
	12	須恵器	甕	口縁部	灰（砂粒混）	ナデ	ナデ	灰白	良好	20.0	－	1.6	樺万丈窯系	4 Ⅲ	630
	13	須恵器	甕	胴部	灰・灰白の互層（細砂多混）	ハケ目	タタキ（格子目）	灰	良好	－	－	1.5	樺万丈窯系	5 ―	1422
	14	須恵器	甕	底部	黒・灰白の互層（細粒）	ハケ目	タタキ →ナデ	(内) 灰白 (外) 灰	良好	－	23.0	－	樺万丈窯系	4 Ⅲ	308
	15	須恵器	甕	底部	黒・灰白の互層（砂粒多混）	ナデ	タタキ（鋸歯状）	(内) 灰白 (外) 灰	良好	－	25.0	－	ヘラ削り調整痕 小石を含む	5 Ⅳ	1477
	16	須恵器	擂鉢	口縁部	灰白（砂粒混）	ナデ（櫛目条痕）	ナデ	灰白	やや良	－	－	－	樺万丈窯系	5	1422
	17	須恵器	片口	口縁部	灰泊（砂粒混）	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	灰	良好	23.6	－	－	樺万丈窯系 指圧痕	3 Ⅲ	396
	18	須恵器	捏鉢	底部	灰・灰白の互層（砂粒多混）	ハケ目 ナデ	ハケ目 →ナデ	灰	良好	－	15.4	－	樺万丈窯系 小石含む	5	1422
	19	須恵器	鉢	底部	黒・灰白の互層（細粒）	ハケ目	ナデ	(内) 灰白 (外) 灰	良好	－	10.0	－	樺万丈窯系 底面剥離	2 Ⅱ	
	20	陶	埦	口～胴	灰褐（細砂混）	ナデ（施釉）	ナデ（施釉）	黒褐 明緑白	やや良	9.6	－	－	天目埦 口唇部釉剥ぎ	11T Ⅲ	59
	21	中国陶器	鉢 Ⅰ-2b	口縁部	暗紫灰（白砂粒多混）	ナデ（施釉）	ナデ（施釉）	(内) 淡黄 (外) 灰黄	良好	31.2	－	－	褐釉 発色・貫入なし	12 Ⅲ	783
	22	中国陶器	水注 Ⅴ	取手	灰褐（白細砂混）	ナデ	ナデ（施釉）	(内) 茶褐 (外) 暗茶褐	良好	－	－	－	黒釉 発色弱・貫入有	9.5 2b	一括
	23	中国陶器	盤 Ⅱ-1b	口縁部	淡茶白（やや精良）	ナデ（施釉）	ナデ	(内) 暗黄褐 (外) 茶白	良好	－	－	－	内面に花文	12 Ⅲ	741

2　磁器　（第185図　24～65）

磁器は，白磁，青白磁，青磁に分けられる。調査区全体から出土しているが，K２～５区とK８～10区，K12～14区にやや集中が見られる。それぞれの項では，器種ごとに説明を行う。また，分類については，太宰府土器型式に基づき行った。

白磁　（第185図　24～44）

白磁は，全調査区で117点出土し，21点について図化し，器種は，碗，小碗，皿などである。

碗　（第185図　24～39）

24は，碗の蛇の目高台を持つ底部であり，精良な乳黄灰色の胎土に，表面が滑らかな乳白色の釉が掛かるもので，体部下位から高台にかけて無釉である。８～９世紀のものと思われる。

25，26は，口縁部周辺に横ナデ調整を施した玉縁口縁である。25は，内湾する体部外面中位に，工具痕が２条沈線状に巡っている。黄白色の釉が全体に掛かり，口縁部外面に釉垂れが見られる。26は，釉の発色が弱く表面に細かい凹凸が残る。

25～29は，肉厚な玉縁口縁を持ち，削り出しの浅い幅広な高台を呈するものである。25，28は，

口縁部外面に明瞭な段を持つ肉厚な玉縁口縁であり，釉の発色が弱く表面がざらついている。29は，厚めに施釉され発色が良く滑らかである。30～32は，削り出しの浅い肥厚な底部で，体部外面下位以下は無釉である。30は，高台内面を斜めに浅く削る。黄灰色の粗い胎土であり，外面に無数の小空洞が見られる。31は，メンコの可能性も考えられる。32は，やや精良な胎土で，高台断面は方形に近い。32は，高台内面に広い平坦面を持ち，周辺が大きく凹み段を持つ。灰白色の胎土は粗く，表面に空洞や凹凸が残る。体部外面下位に工具痕が縞模様状に残っている。

33，34は，細く高い高台を持ち，胴部下位で膨らみ口縁部へ向かって延びるもので，口縁端部は小さく屈曲するものである。33は，わずかに外反し，口唇部が尖るもので，口縁上部を水平にしている。体部中位内面に短い櫛目で花文が描かれ，外面に細長い空洞が数カ所残る。34は，体部外面下位まで掛けられた灰白色の釉が，高台部分まで一部掛かっている。

35は，やや小さめの断面方形の高台で，高台内に段を持つ。高台外面の一部まで釉が掛かり，高台内面見込みに青灰色の文様が描かれる。

36～38は，内面見込みの釉を環状に掻き取った，蛇の目釉剥ぎの残る底部である。36は，灰白色の胎土に黄白色の釉が高台外面近くまで掛かるもので，一部畳付部まで釉垂れしている。釉剥ぎ部分に熔着が残る。37は，高台の削り調整が粗く，表面に凹凸が残る。見込みに段は持たない。38は，明褐灰色の胎土に灰白色の施釉で，見込みに段を持つ。蛇の目釉剥ぎ部には，重ね焼きによる別個体の釉が付着している。

小碗（第185図　40､41）

40，41は，体部が丸く腰が張り，口縁部が外側に大きく屈曲する小碗の口縁部である。灰白色の硬質の胎土に白色の施釉で，表面が光沢を持ち滑らかであるなど上質な仕上がりである。

皿（第185図　39､42､43）

39は，精製された胎土に精白色の釉が掛かる皿であり，やや外反する口縁部周辺の釉を施釉後掻き取り，口縁部を口禿げとしたものである。

42は，体部下位に丸みを持ち直線的に延びる直口皿の口縁部である。体部外面にヘラ削り調整痕が明瞭に残り，下位以下は無釉である。43は，やや上げ底状の平底を呈する皿の底部であり，胴部と底部の境目が明確である。内面に環状の凹みと見込み中央に芭蕉文が描かれる。

水注（第185図　44）

44は，全体型は不明であるが，膨らみのある胴部が頸部で締まり，口縁部がやや外反する水注の口縁部であると思われるもので，幅広の取手が貼り付けられている。胎土は微細な黒色粒を含んでいる。全面に浅黄色の釉が掛かるが，内面は口縁部付近のみの施釉である。

青白磁（第185図　45～47）

青白磁は，全調査区で出土した12点中３点について図化し，碗，壺，合子などがある。45～47は，灰白な胎土に明青灰色の釉が掛かる青白磁である。45は，大きく開いた体部が，下部で屈曲し直線的に立ち上がる碗であり，外面に明瞭な稜を持つ。屈曲部内面に段を持ち，外面に細い圏線が１条巡る。46は，底面中央が凹む碁笥底を呈する壺の底部である。明緑灰色の厚めの釉が掛かるが，体部下位以下と内面は無釉である。内面に回転ケズリ調整の痕が残り，釉が垂れて付着している。47は合子の蓋の一部と思われるもので，上面に花文が浮き彫りされている。

青磁　（第185図　48～65）

青磁は，全調査区で182点出土した。器種は，碗，坏，皿，壺などである。さらに，青磁は龍泉窯系青磁と同安窯系青磁，初期高麗青磁に大きく分け，各種別ごとにまとめた。

龍泉窯系青磁　（第185図　48～60）

龍泉窯系青磁は，全調査区で出土した158点中13点について図化した。

碗　（第185図　48～57）

48，49は，高台断面がほぼ方形で，内部のケズリが浅く肉厚な底部である。高台外面まで施釉を行い，高台内は無釉である。48は，青緑色の釉が掛かり，釉の一部が高台畳付から内面にまで垂れている。49は，浅黄色の釉が掛かり，内面見込みに楕円形の目跡が残る。

50は，直口する肉厚な口縁部で，内面上位に沈線が１条巡り，中位に片彫蓮花文を有する。

51，52は，内面に片彫りによる草花文と櫛目文が描かれたものである。51は，口縁部でわずかに外反する。52は，内面の体部との境目に段を持つ。

53，54は，体部外面に鎬蓮弁文を持つもので，弁の中心は稜を呈する。53は，やや反り気味の口縁部であり，施釉が厚い。54は，口縁部を肥厚させ，明緑灰色の施釉に気泡が混じる。

55は，全面施釉後高台畳付けの釉を拭き取ったもので，高台内に窯道具の熔着が残る。

56は，高台内面見込みに「人月」の文字を印刻した厚みのある底部である。

57は，高台径が小さく，高台断面が先細りで，高台内見込みに草花文を施したものである。

坏　（第185図　58）

58は，高台が先細りし尖る坏の底部で，高台内が無釉であり，高台外面に凹みが巡る。内面に幅広の沈線が環状に巡り，高台内に回転ケズリ調整痕が筋状に残る。

皿　（第185図　59）

59は，口縁部が外反する皿の口縁部である。内外面に草花文が施されている。

壺　（第185図　60）

60は，袋状をした壺の胴部と思われるもので，内面は無釉であり，筋状の調整痕が残る。

同安窯系青磁　（第186図　61～64）

同安窯系青磁は，全調査区で出土した24点中４点について図化した。

碗　（第185図　61～63）

61，62は，逆台形状の高台を持ち，内湾しながら立ち上がる碗であり，体部下位以下は無釉である。61は，内面に片彫りの草花文とジグザグ状の点描文，外面に細めの櫛目文を施す。62は，高台内面の見込みと体部との境目に段を有する底部であり，胎土が粗く，空洞が目立つ。

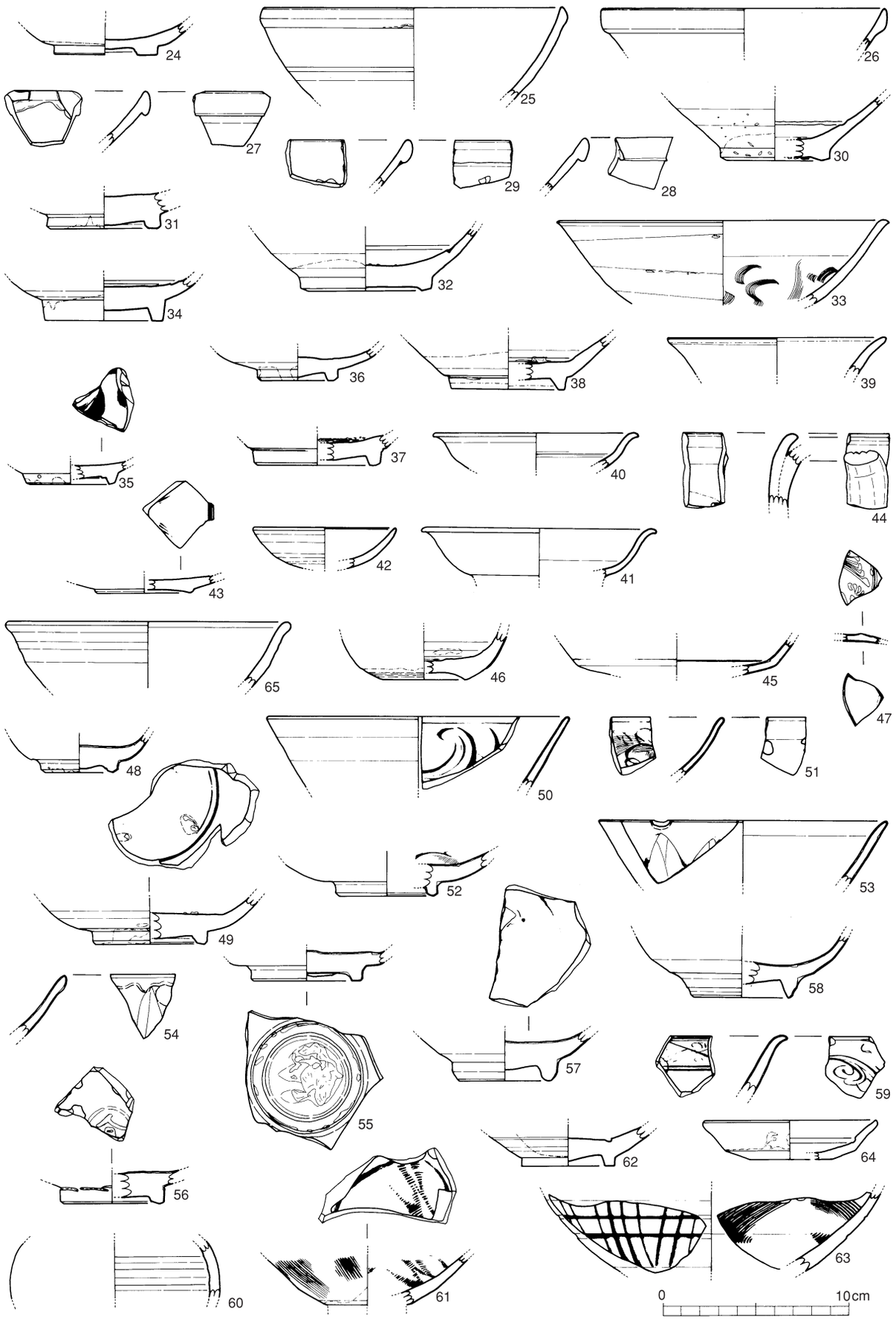
63は，内面に櫛状工具による花文，外面に片彫りの篦状工具による沈線を施している。

皿　（第185図　64）

64は，口縁部外側が内傾し尖り気味の皿である。外面中位で屈曲し，内側見込みと体部の境目に段を持つ。浅黄色の釉が掛かり，外面中位以下は無釉である。

初期高麗青磁　（第185図　65）

65は，灰色の胎土に不鮮明で光沢のない灰緑色の釉が掛かる初期高麗青磁の碗である。口縁部がわずかに外反し，肥厚である。外面に横ナデ調整の凹凸が残る。



第185図　中世の遺物2（磁器）

第52表　中世の遺物観察表2（磁器）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	部位	分類	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	貫入	発色	法量(cm) 口径	底径	器高	備考	出土区・層		注記番号
185図	24	白磁	碗	底部	Ⅰ-2	乳黄灰色	乳白	高台、胴部下位以下	良	無	有	－	5.6	－	蛇の目高台	9.5	H6	1786 2057
	25	白磁	碗	口縁部	Ⅱ-1	灰白（細砂混）	黄白	無	良	無	有	16.6	－	－	玉縁	3	Ⅲ	382
	26	白磁	碗	口縁部	Ⅱ-5	灰白（黒粒混）	黄白	無	良	無	弱	15.4	－	－	玉縁	11T	Ⅲ	261
	27	白磁	碗	口縁部	Ⅳ	黄白（砂粒混）	灰白	無	やや良	有	弱	－	－	－	玉縁	12	－	－
	28	白磁	碗	口縁部	Ⅳ	黄白（砂粒混）	灰白	無	やや良	有	弱	－	－	－	玉縁	12	P	1003
	29	白磁	碗	口縁部	Ⅳ	灰白（細砂混）	緑白	無	良	無	有	－	－	－	玉縁	3	Ⅲ	162
	30	白磁	碗	底部	Ⅳ-1a	黄灰（砂粒混）小空洞アリ	灰白	胴部下位以下	やや良	有	弱	－	5.9	－	輪高台 削り浅い	12	Ⅱb	766
	31	白磁	碗	底部	Ⅳ-1a	灰白（細砂混）	灰白	高台畳付～内	やや良	無	弱	－	6.2	－	釉に気泡	4 5	Ⅲ	196 1422
	32	白磁	碗	底部	Ⅳ-1b	灰白（細粒混）空洞アリ	浅黄白	胴部下位以下	良	無	有	－	7.1	－	沈線 輪高台	11.5	表	－
	33	白磁	碗	口縁部	Ⅴ-4b	灰白（細砂混）	灰黄	無	良	無	有	18.0	－	－	空洞（外面） 花文（短い櫛目）	3 4	Ⅲ	341 819
	34	白磁	碗	底部	Ⅴ-1a	灰白（細砂混）	灰白	胴部下位以下	良	無	有	－	6.4	－	見込み段	5	－	1422
	35	白磁	碗	底部	Ⅵ-2b	浅黄灰（細砂混）	黄白	高台外以下	やや良	有	弱	－	4.8	－	一部釉垂れ 内面見込（花文）	13	Ⅲ上	－
	36	白磁	碗	底部	Ⅷ-1	灰白（砂粒混）空洞アリ	黄白	胴部下位以下	良	有	弱	－	4.4	－	見込（蛇の目釉剥ぎ） 一部釉垂れ	2	Ⅲ	37 59
	37	白磁	碗	底部	Ⅷ-1	灰白（砂粒混）削り調整痕	灰白	胴部下位以下	良	無	有	－	6.8	－	見込蛇の目釉剥ぎ 他個体の釉溶着痕	4	Ⅲ	170
	38	白磁	碗	底部	Ⅷ-3	明褐灰（砂粒混）空洞アリ	灰白	胴部下位以下	やや良	有	無	－	6.2	－	蛇の目釉剥ぎ、畳付釉付着 別個体の釉溶着痕	4	Ⅲ	641
	39	白磁	皿	口縁部	Ⅸ	灰白（細砂混）	青白	無	良	有	有	11.8	－	－	口禿げ	11T	Ⅲ	572
	40	白磁	小碗	口縁部	ⅩⅣa	白（細砂混）	灰白	無	良	無	有	11.1	－	－	中位に圏線 口縁部外反	6.5	Ⅱb	861
	41	白磁	小碗	口～胴	ⅩⅣa	灰白（細砂混）	白	無	良	無	有	12.7	7.2	－	口縁部外反	14T	Ⅲ	336
	42	白磁	皿	口～胴	Ⅵ-1b	黄白（細砂混）	白	胴部下位以下	良	有	有	7.8	－	－		1	Ⅲ	－
	43	白磁	皿	底部	Ⅶ-2b	灰白（砂粒混）	黄白	底部下面	良	有	有	－	5.0	－	蕉葉文（見込）	3	Ⅲ	794
	44	白磁	水注	口縁取っ手	－	灰（黒粒含）	浅黄	頸部以上	良	有	弱	－	－	－		8	Ⅲ	811
	45	青白磁	碗	胴部	－	灰白（細砂混）	明青灰	無	良	無	有	－	－	－	沈線	11T	Ⅲ	473
	46	青白磁	壺	底部（碁笥底）	－	灰白（砂粒混）	明緑灰	内面胴部下位以下	良	無	有	－	4.5	－	釉液垂れ痕（内面）	12	Ⅲ	785
	47	青白磁	合子	蓋	－	灰白（細砂混）	明青灰	外面端部	良	無	有	－	－	－	花文（外面）	3	Ⅲ	－
	48	龍泉窯系青磁	碗	底部	Ⅲ-1A	灰白	青緑	高台内	良	有	有	－	4.2	－		5	－	1422
	49	龍泉窯系青磁	碗	底部	Ⅰ-1a	灰白	オリーブ灰浅黄	畳付～高台内	やや良	無	弱	－	6.2	－	見込（目跡、刻線）	5	Ⅲ	1162
	50	龍泉窯系青磁	碗	口～胴	Ⅰ-2a	灰白	灰オリーブ	無	良	無	有	16.4	－	－	片彫蓮花文（内）	4	Ⅲ	340
	51	龍泉窯系青磁	碗	口縁部	Ⅰ-3a	灰白	オリーブ	無	良	有	有	－	－	－	雲文+櫛目（内）	11	Ⅲ	225
	52	龍泉窯系青磁	碗	底部	Ⅰ-3a	灰白	オリーブ	無	良	有	有	－	5.6	－	雲文+櫛目（内）	3	Ⅲ	438
	53	龍泉窯系青磁	碗	口～胴	Ⅱ-b	灰白	青緑	無	良	無	有	15.6	－	－	鎬蓮弁文	9.5	Ⅱb	103
	54	龍泉窯系青磁	碗	口縁部	Ⅱ-b	浅黄	明緑灰	無	良	有	弱	－	－	－	鎬蓮弁文（外）	14	Ⅲ	150
	55	龍泉窯系青磁	碗	底部	Ⅱ	灰	オリーブ灰	無	良	有	有	－	6.0	－	目跡、窯道具熔着 畳付釉ふきとり	2	Ⅱ	－
	56	龍泉窯系青磁	碗	底部	Ⅱ	灰	オリーブ黄	高台内	やや良	有	有	－	6.2	－	文字印刻「人月」（見込文様） 高台内削り出し跡	5	表	－
	57	龍泉窯系青磁	碗	底部	Ⅲ	灰白（黒斑点含）	明黄緑	高台内	良	有	有	－	5.7	－	蓮弁文（内面見込） 畳目（釉掻き取り）	14	Ⅱ	129
	58	龍泉窯系青磁	坏	胴～底	Ⅲ-1a	灰白（砂粒混）	灰オリーブ	高台内	良	有	有	－	5.5	－	高台内ろくろ目	14	Ⅲ	120
	59	龍泉窯系青磁	皿	口縁部	－	灰白	浅黄緑	無	良	有	有	－	－	－	草花文(内･外面)	12	Ⅲ	276
	60	龍泉窯系青磁	壺	胴部	－	灰（細砂混）	灰オリーブ	無	良	無	有	－	－	－	ろくろ目	3	Ⅲ	780
	61	同安窯系青磁	碗	胴部	Ⅰ-1b	灰白（細砂混）	灰オリーブ	胴部下位以下	良	無	有	－	－	－	ジグザグ状の点描文 櫛目文（細い）	4	Ⅲ	360
	62	同安窯系青磁	碗	底部	Ⅰ	灰白（砂粒混、やや粗）	オリーブ灰	胴部下位以下	良	有	有	－	5.1	－		13	上	－
	63	同安窯系青磁	碗	胴部	Ⅲ-1b	灰（砂粒含）	オリーブ黄	無	良	有	有	－	－	－	櫛状工具による花文 櫛目文（幅広）	5	－	1422
	64	同安窯系青磁	皿	口～底	Ⅰ-1a	灰白（細砂混）	浅黄	胴部下位以下	良	有	有	9.4	4.4	2.1		3	Ⅲ	723
	65	初期高麗青磁	碗	口縁部	Ⅲ-2A	淡灰（細砂混）	灰緑	無	やや良	有	弱	15.4	－	－		9.5	Ⅱb	－

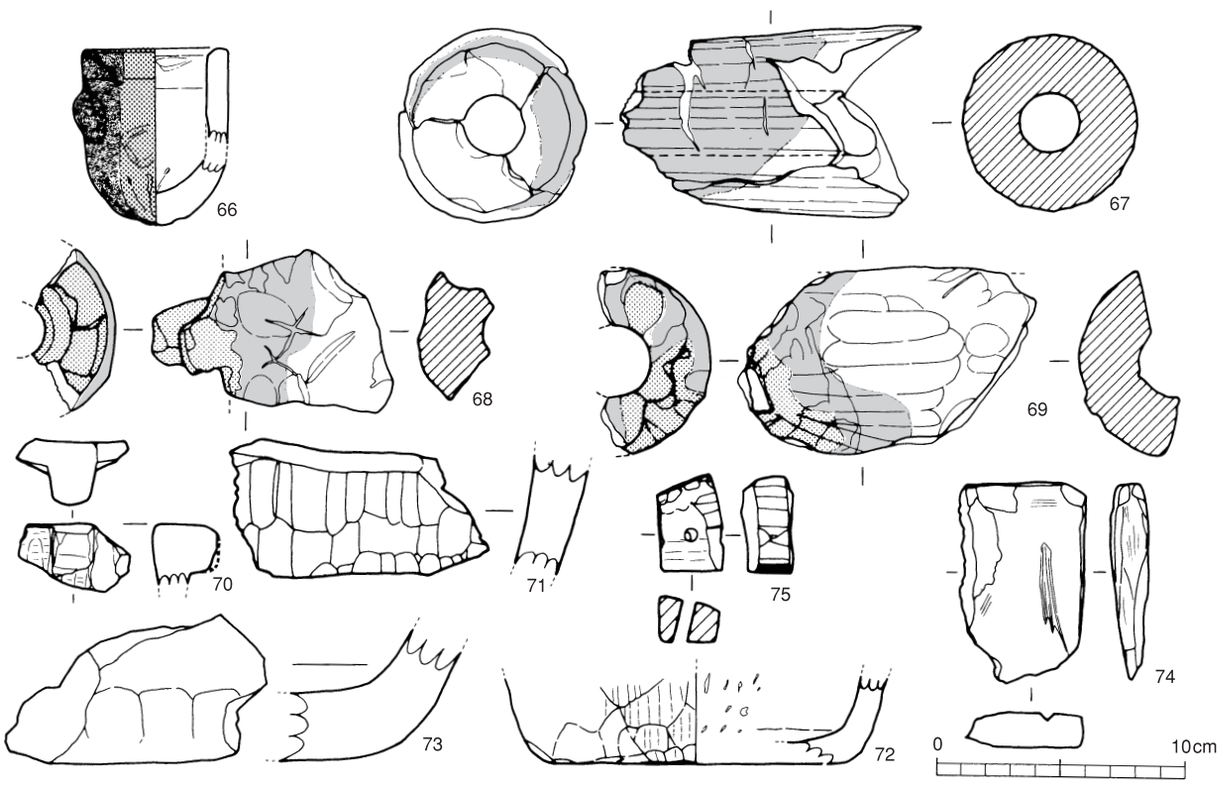
３　土製品・滑石製品　（第186図　66～75）

土製品は，取瓶，羽口などであり，Ｋ５～８区で５点，Ｋ９～10区で８点の計13点出土した。

66は取瓶である。溶融した金属を溶鉱炉から取り出す，または鋳型へ流し込む際に垂れて付着したと思われる金属が外面全体を覆い，光沢を持つ飴色の黒色と赤褐色２色に変色している。

羽口は，67～69の３点図化した。取付部の外面が熱作用を受け黒色化し，一部ガラス質が熔着している。砂粒の混ざる粗めの胎土で，直径約７cmとほぼ同規模である。

滑石製品は，出土した39点中６点について図化した。70～73は，滑石製石鍋の破片であり，内外面ともケズリ調整を施し，外面に調整痕が明瞭に残る。74，75は，石鍋片の破断面をケズリ直し，再加工した転用品であると思われる。75は，中央に直径6.0㎜の穿孔を有する。



第186図　中世の遺物3（土製品・滑石製品）

第53表　中世の遺物観察表3（土製品・滑石製品）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	部位	胎土	調整 内	調整 外	色調	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層	注記番号
186図	66	土製品	取瓶	口～底	青灰・黄褐（小空洞あり）	ナデ（金属粉）	ナデ（自然釉）	(内) オリーブ灰 (外) 紫黒・赤褐	良好	5.9	2.6	－	外面に自然釉による光沢有り	5 表土	一括
	67	土製品	羽口	円筒型	やや粗	ナデ	ナデ	赤橙 黒褐	良好（軟質）	7.5	2.4	12.0	スス付着	6.5 西壁	22（３個）
	68	土製品	羽口	１／２	やや粗（細砂混）	ナデ	ナデ（指圧痕）	灰白 白	やや良（軟質）	7.6	2.2	9.1	スス・ガラス質付着	9.5 Ⅲ	1305
	69	土製品	羽口	１／３	粗（砂粒混）	ナデ	ナデ（スス付着）	浅黄橙 灰黒	やや良（軟質）	7.4	2.8	12.1	スス・ガラス質付着 小石を含む	10 Ⅲ	1743
	70	滑石製品	鍋	口縁部	－	ケズリ 研磨	ケズリ	灰白	（最大長）2.5	（最大幅）4.5	（最大厚）2.6	－	12 －	－
	71	滑石製品	鍋	胴部	－	ケズリ	ケズリ	灰白	（最大長）4.7	（最大幅）9.6	（最大厚）2.3	－	9.5 Ⅱb	194
	72	滑石製品	鍋	底部	－	ケズリ	ケズリ	(内) 灰白 (外) 黒褐	（最大長）3.3	（最大幅）11.8	（最大厚）1.2	－	12 Ⅲ	551
	73	滑石製品	鍋	底部	－	ケズリ	ケズリ	(内) 灰白 (外) 黒褐	（最大長）5.8	（最大幅）10.5	（最大厚）2.6	煤付着	9 Ⅱ	237
	74	滑石製品	加工品	－	－	ケズリ面　４面		灰白	（最大長）7.9	（最大幅）5.1	（最大厚）1.5	石鍋片の転用	5 Ⅳ	60
	75	滑石製品	加工品	－	－	ケズリ面　２面		灰白	（最大長）3.7	（最大幅）2.6	（最大厚）2.1	石鍋片の転用 穿孔あり	7 掘立建物	P４



第187図　中世の遺物出土分布図

第Ⅸ章　近世の遺構と遺物

近世の遺構は，Ｋ６～８区に方形竪穴状遺構，井戸状遺構，K11～13区に土坑と溝状遺構が，遺物包含層であるⅡ層下面より検出された。

出土遺物は，陶器，磁器，瓦，窯道具，羽口，鉄製品などが，調査区全体から広く出土している。

第１節　検出遺構（第188，189図　１～５,10 ）

近世の遺構と考えられるものは，第189図の遺構分布図に示したように，方形竪穴状遺構２基，井戸状遺構３基，溝状遺構１条，土坑３基の計９基が検出された。

遺構内からは，染付碗，陶器の埦，鉢，羽口，庖丁が出土しており，遺構内遺物の総数は６点である。時期的に異なる遺物も多く含まれていたが，何らかの原因で流れ込んだものと思われる。

遺構内出土遺物については，この項で遺構と同時に紹介する。

１　方形竪穴状遺構（第188図　１，10）

K6.5区で２基検出された。井戸状遺構群の東側に位置し，方形竪穴状遺構１号の形状は，長径3.9m，短径1.2mの長方形を呈し，主軸の方位は北西－南東である。方形竪穴状遺構２号の形状は，長径2.3m，短径0.9mの長方形を呈し，主軸の方位は北東－南西である。１号と２号との距離は2.2mと近く，主軸が直角方向に向いていることから何らかの関連があると推察される。１号は比較的検出状態が良かったが，２号は撹乱があり床面などの検出ができなかった。

方形竪穴状遺構１号は，検出面からの深さが0.4mであり，床面は平坦で硬化面を持つ。床面に計６個のピットが約0.9m間隔で規則的に配置され，左右で掘り方が異なり，片側の３個は二段掘りである。ピットの大きさは，小ピットが長径18.1cm，短径14.0cm，深さ65.2cm，大ピットが長径29.1cm，短径25.6cm，深さ63.3cmで，中位に段を持つ。柱を持つ建物の可能性もあるが，詳細は不明であり，ここでは方形竪穴状遺構として取り扱った。

出土遺物は羽口と鉄製利器である。１は胎土中に小石や磁器片を含む粗いもので，硬質であり，外面に細かいものと粗めのナデ調整痕の２通りが明瞭に残る。先端は熱により変形し，ガラス質の付着が見られる。10は，長さ24.5cm，幅3.5cmの長方形を呈した鉄製利器である。断面形態は細長い三角形であり，片方に刃部を持つ刃物であると思われる。中子と先端部は欠損している。

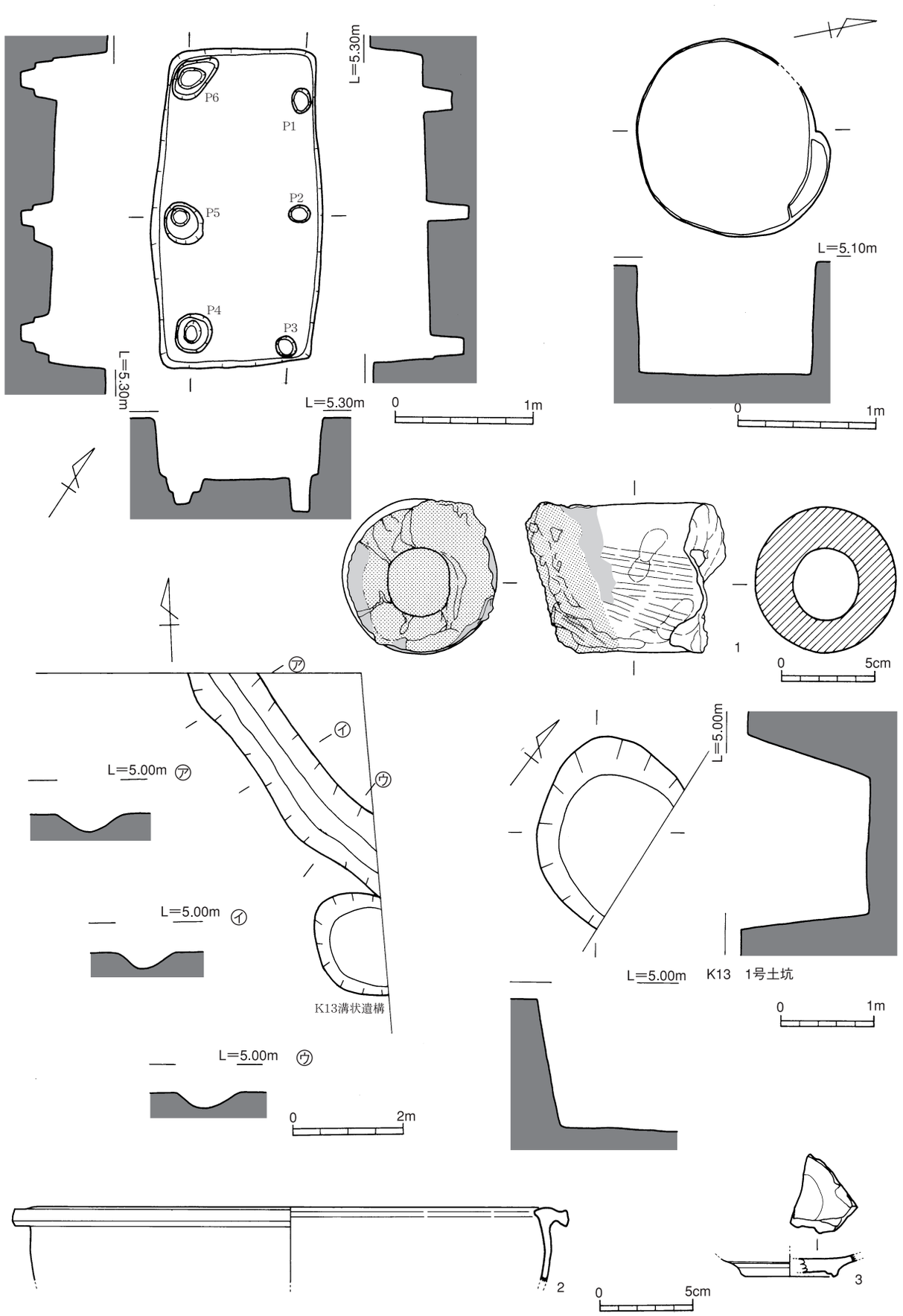
井戸状遺構（第188図）

K6.5～７区で３基検出された。方形竪穴状遺構の西側に位置し，東側壁側に沿って並んで検出された。井戸状遺構１号の形状は，長径1.4m，短径1.3mの円形を呈し，検出面からの深さは0.8mである。２号，３号とも多少大きさは異なるが，同一形状を呈する。

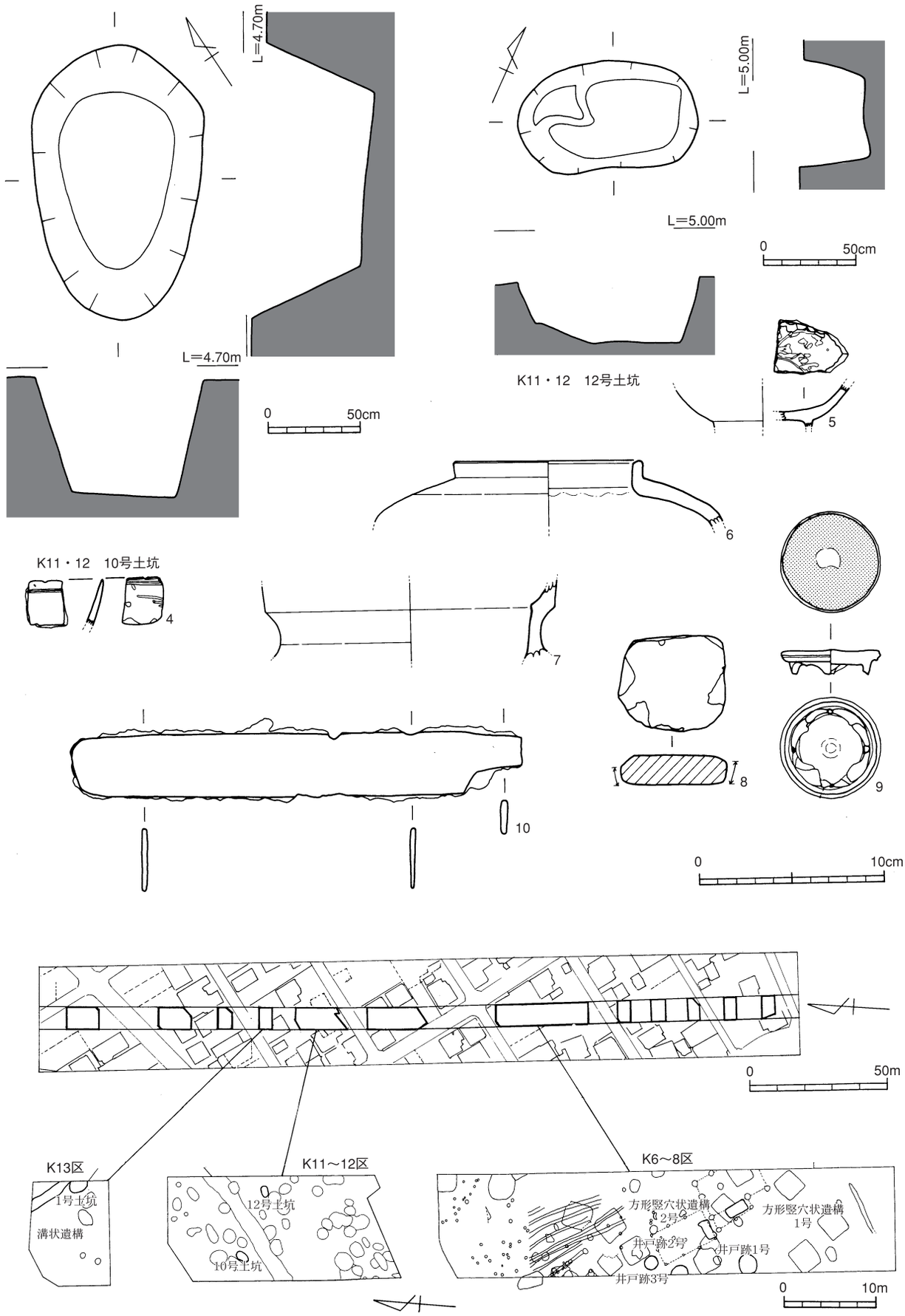
２　溝状遺構（第188図　２）

近世の溝と考えられる遺構は，K13区の1号土坑に近接するように検出された。方位は，略北西－南東であり，K13調査区北東部分の角を横切るように位置する。検出された長さは6.1m，幅が約2.0m，深さ約0.1mであり，断面形態は東側が浅い逆三角形，西側がレンズ状を呈し，南東から北西方向へ向かって緩やかに傾斜している。

出土遺物は，陶器の鉢の口縁部である。２は全面に褐釉の掛かるもので，膨らみを持つ胴部が口



第188図　近世の遺構と遺物1（方形竪穴状遺構，井戸跡）



第189図　近世の遺構と遺物2（土坑）　近世の遺構配置図

縁部で大きく屈曲し，垂れ気味に外反する。内側が張り出し，口唇部は面取りされている。口縁部上面に楕円形の貝目が残る。

土坑（第188，189図　３～５）

近世の土坑と考えられるものは，K11～13区で３基検出された。

K11～12区の10号土坑は，長径1.5m，短径0.9m，深さ64.5cmの楕円形，底面は平坦である。12号土坑の北側に位置する。埋土中より染付碗の口縁部が出土した。４は直口する碗であり，精良な胎土に透明釉が掛かる。口縁部外面に太めの圏線が１条巡り，外面上位には草花文が描かれる。

K11～12区の12号土坑は，長径0.9m，短径0.6m，深さ34.5cmの楕円形，底面は上げ底気味で，西側に段を持つ。10号土坑の南側に位置する。埋土中より染付碗の底部が出土した。５は，砂粒混じりの粗い胎土であり，内面見込みに細い黒線と淡青緑色を組み合わせた花文が描かれる。

K13区の１号土坑は，東側が調査区外へ延びるもので，検出された部分は，長径0.9m，短径0.7m，深さ67.5cmであり，全体型は不明であるが，円形または楕円形を呈すると思われる。底面は平坦である。埋土中より陶器碗の底部が出土した。３は，淡黄色の精良な胎土に釉が掛かり，底部内面見込みに文様が描かれる。高台内は，無釉である。

第２節　出土遺物（第189図　６～10）

近世の遺物は，全調査区から広く出土しているが，ここでは５点について図化した。

６は，張りのある胴部が頸部で強く締まり，短い口縁部が直立する壺である。口唇部を丸く仕上げ，内外面ともヨコナデ調整を施す。外面と口縁部内面に灰黄褐色の施釉を行う。

７は，体部形態は不明であるが，頸部で緩やかに締まり口縁部が外反した後直口気味に延びるもので，砂粒の多く混じる胎土の瓦質陶器に近いことから，火鉢の頸部の可能性がある。

８は，近世瓦片の周辺を擦り，長径5.1cm，短径5.8cm，厚さ1.6cmの方形に仕上げたもので，稜が摩耗して丸く成っていることから，メンコなどの遊具として使用されたと思われる。

９は，窯道具のハマである。全体で４個出土している内１個について図化した。完形品であり，直径5.4cmの円形をした盤に切高台が付くものである。上面はほぼ平坦であるが，中心部がわずかに隆起し，中心部を除く上面全体に熔着防止のためのアルミナが塗られている。

第54表　近世の遺物観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	部位	胎土	調整 内	調整 外	色調	焼成	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	備考	出土区・層		注記番号
188図	1	土製品	羽口	円筒型	粗（砂粒混）	ナデ	ハケ目・ナデ（指圧痕）	灰泊黒	良好（硬質）	3.2～3.6	7.2～7.8	10.8	スス・ガラス質付着 小石・磁器片含む	6.5	近世遺構	一括
	2	陶器	鉢	口縁部	灰白と白の互層（細砂混）	ヨコナデ	ヨコナデ	暗オリーブ	良好	30.0	－	－	口唇部に貝目	13	溝3	一括
	3	陶器	埦	底部	淡黄（精良な胎土）	文様（見込み）	圏線1条	淡黄	良好	－	5.1	－	白色釉 高台内無釉	13	土1	1
189図	4	磁器	碗	口縁部	灰白色精良	轆轤目	圏線1条 草花文	青白	良好	－	－	－	透明釉 無釉箇所あり	12	P	974
	5	磁器	碗	底部	灰白（細砂混）	花文	ヨコナデ	白	良好	－	5.3	－	貫入あり 高台欠損	12	P	1042
	6	陶器	壺	口縁部	灰（砂粒混）	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	灰黄褐	良好	10.8	－	－	工具痕あり	9.5	土2	3989
	7	陶器	鉢	頸部	浅黄橙（砂粒多混）	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	黒褐	良好	－	－	－		6.5	Ⅲ	1036
	8	瓦	メンコ	完形	粗（砂粒多混）	ナデ	ナデ	暗灰黒褐	良好	（長）5.1	（幅）5.8	（厚）1.6	周辺を擦る（4面）	9.5		
	9	窯道具	ハマ	完形	灰白色精良	ナデ（轆轤目）	ナデ（轆轤目）	浅黄白	良好	（上径）5.4	（下径）4.2	1.3	切高台形　磁器 上面にアルミナ付着	5	Ⅳ	701
	10	鉄製品	鉄製利器	刃部	－	－	－	暗茶褐色	－	（長）24.5	（幅）3，5	（厚）0.4	表面に木片付着	6.5	近世遺構	－

第Ⅹ章　分析・同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

大島遺跡出土種実の種類

１．試料

試料は，第55表に示した４遺構より出土した種実遺体で，プラスチックケース12点に収められている。同一試料名が記された試料は一括する。

２．分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，種実や炭化材などの植物遺体を抽出する。種実遺体を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994），日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等との比較から，種類の同定・計数をおこなう。砕片を含み数字以上の個体数が推定される種類は，表中に「数字＋（プラス）」と示した。同定後の種実遺体等は種類毎にビンに詰め，乾燥剤を入れ保存する。

３．結果

結果を第55表に示す。種実遺体の状態は比較的良好である。木本１種類（モモ），草本３種類（アワ－ヒエ，コムギを含むムギ類，イネ科）の種実が同定されたほか，炭化材，不明炭化物（木材組織が認められない，部位・種類共に不明の炭化物を示す），昆虫遺骸の破片，不明物質が検出された。以下に同定された種実遺体の形態的特徴などを，木本，草本の順に記す。

＜木本＞

・モモ（Prunus parsica Batsch）　　バラ科サクラ属

核（内果皮）の完形，半分が検出された。広楕円形でやや偏平，先端部はやや尖る。内果皮は厚く硬く，表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり，全体として粗いしわ状に見える。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。一方の側面に縫合線が発達し，縫合線に沿って半分に割れている個体がみられる。K7区深掘り層から検出されたモモは，灰褐色。完形個体は長さ27㎜，幅16㎜，厚さ11㎜。半分個体は長さ23㎜，幅17.5㎜程度。K9～10区P114層から検出された個体は完全に炭化しており，黒色。長さ17㎜，幅13㎜程度。

＜草本＞

・アワ－ヒエ（Setaria itarica Beauv.-Echinochloa crus-galli Beauv.）　　イネ科

胚乳が検出された。完全に炭化しており，黒色。広楕円体でやや偏平。径1.5㎜程度。背面は丸みがあり，腹面は平ら。基部に胚の凹みがある。表面はやや平滑。遺存状態が悪く内外穎を欠損するため，種までの同定は不可能であった。

・コムギ（Triticum aestivum L.）　　イネ科コムギ属

胚乳が検出された。完全に炭化しており，黒色。楕円形で全体的に丸みを帯びている。長さ3㎜，径2㎜程度。腹面には１本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり，丸く窪む。表面はやや平滑。

・ムギ類

胚乳が検出された。完全に炭化しており，黒色。紡錘状長楕円形で先端部は尖り，基部は丸い。長さ5㎜，幅3.5㎜，厚さ3㎜程度。腹面は１本のやや太く深い縦溝があり，背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。オオムギ属オオムギ（Hordeum valgale L.）に似るが，頂部を欠損し遺存状態が悪いため，ムギ類にとどめた。

・イネ科（Gramineae）

穎が検出された。淡褐色，狭卵形でやや偏平。長さ2㎜，幅1㎜程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。

４．考察

大島遺跡から出土した種実遺体には，栽培植物が認められた。モモ，アワ，コムギは，古くから栽培のために持ち込まれた渡来種である（南木，1991）。モモは，中国からの渡来種とされ，観賞用の他，果実や核の中にある仁（種子）などが食用，薬用等に広く利用される。穀類のアワ－ヒエ，コムギを含むムギ類は，胚乳が食用とされる。本遺跡からの穀類の検出も，そのような事例であろう。

このように，栽培植物が全て炭化した状態で，遺構から出土した状況を考慮すると，本遺跡近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用していたものが火熱を受け，残存したものと推定される。なお，イネ科は集落周辺の明るく開けた場所に生育していたに由来すると思われるが，低湿地遺跡など特別な場合を除けば，炭化していない限り種子は残らないといってよく，解析に関しては炭化種子以外を除外して考えた方が妥当だという意見もある（吉崎，1992）。今回検出されたイネ科の穎は，炭化がみられず遺存状態が良好であることから，遺構が埋没する過程で混入した後代のものであると考えられるので，今回の解析からは除外する。

引用文献

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

南木睦彦，1991，栽培植物，古墳時代の研究４　生産と流通Ⅰ，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編，雄山閣，165-174.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑.東北大学出版会，642p.

吉崎昌一，1992，古代雑穀の検出.考古学ジャーナル，355，ニューサイエンス社，2-14.

第55表　大島遺跡出土種実同定結果

試料名			種類名		モモ		アワーヒエ	コムギ	ムギ類	イネ科	炭化材	不明炭化物	昆虫遺骸	不明物質
			部位	核			胚乳	胚乳	胚乳	穎				
			状態	完形	半分	半分・炭化	炭化	炭化	炭化					
1,2	地点No.一括	K区深堀り層		1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
3	地点No.一括	K9−10区P114層		−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
	K6.5	37H炭化物		−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−
5	K7.5	32H 6(土)		−	−	−	−	−	1	−	60+	11	−	−
	K7.5	32H 7(土)		−	−	−	−	−	−	−	30+	2	−	−
4	K7.5	32H 8(土)		−	−	−	−	1	−	1	45+	10+	−	−
	K8	土坑1　弥生時代		−	−	−	−	−	−	−	48+	−	−	−
	K8Ⅲ	1841		−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
	K8Ⅲ	2740(3)		−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
6	K10	かめ(土)		−	−	−	1		−	−	−	−	−	1

数字＋：破片を含み数字以上の個体数が推定される種類を示す。

図版　種実遺体



1. モモ核（地点 No. 一括；K7 区深堀り層）　2. モモ核（地点 No. 一括；K7 区深堀り層）
3. モモ核（地点 No. 一括；K9 ～ 10 区 P114 層）　4. コムギ 胚乳（K7.5；32H 8（土））
5. ムギ類　胚乳（K7.5；32H 6（土））　6. アワーヒエ 胚乳（K10；かめ（土））

第Ⅺ章　調査のまとめ

大島遺跡の調査の結果，Ⅱｂ層から中世～近世，Ⅲ層から古代，Ⅳ層から弥生の遺物が大量に出土した。また，縄文時代晩期の土器もⅣ層を主として調査区全体から広く出土した。このことから，本遺跡は縄文時代晩期から近世まで続く複合遺跡であることが明らかとなった。また，各時代の包含層からは，遺物のみでなく竪穴住居跡，土坑墓，掘立柱建物跡など様々な遺構も検出された。

縄文時代の土器は，一部後期に属すると考えられるものも混じるが，大部分が晩期の黒川式土器である。石鏃などの石器も含め出土量は弥生時代，古代と比べると少なく集中も見られないが，自然堤防上の微高地である本遺跡周辺に生活の基盤が形成されつつあると考えられる。

中世の遺物は，畠跡と掘立柱建物跡が隣接するＫ７区周辺の南側に位置するＫ２～５区に集中が見られる。(第 187 図）特にＫ３区北西側に集中しているが，住居などの遺構は発掘調査時には検出されず，明らかにすることができなかった。しかし，遺物の出土分布状況から調査区外に広がる可能性が非常に高く，周辺に何らかの遺構の存在が推測されるので今後の調査に期待したい。

以下，弥生時代，古墳時代，古代の遺構・遺物について検討を行いまとめとする。

第１節　弥生時代について

本遺跡の中心となる古代と並び，数多くの充実した調査成果を提供したのが弥生時代であった。

調査開始前は，薩摩国分寺から約1.5㎞しか離れておらず川内川沿いという立地から古代の遺物が大量に出土することは予測されたが，その下層から約3,000点の遺物が出土し，20基以上の遺構が検出されるとは想像もしておらず，私たちの予測を大幅に超えるものであった。

ここでは，弥生時代の成果を，遺構，土器，石庖丁に分けて整理する。

１　検出遺構

弥生時代の遺構と考えられるものは，竪穴住居跡９軒，溝状遺構１条，土坑・ピット 11 基，弥生土器集中区１基の計 22 基である。確認された遺構は，Ｋ６区～Ｋ９区に集中しており（第 60 図），出土遺物の出土量の割合（第 56 表）から考えて，弥生時代の生活の中心がそこにあったと推測される。しかし，調査範囲は遺跡全体のごくわずかであり，第Ⅴ章でも述べたようにⅢ層とⅣ層の判別が非常に難しく，一部古代の遺物と混在した状態での集中出土が続いたため土器集中区のように検出しきれなかった遺構もあると思われる。従って，弥生時代の中心となる地域がどのように広がるかは不明であり今後の調査成果を待ちたい。

竪穴住居跡は，16 号住居以外は向きが南北方向からやや東へ傾いており，おおむね同じ方向を向いていると言える。また，ほとんどの住居跡の規模は一辺が約 2.7 ｍの方形であり，検出面も標高 5.1 ～ 5.2 ｍでほぼ同じであり，重なりも見られないことから同一時期に建てられた可能性もあるが，出土土器の様相から大きく２つのグループに分けられる。(第 56 表）第１グループは，15 号，19 号，27 号，30 号，35 号であり，松木薗式土器を含む弥生時代後期初頭～中頃の住居跡群である。甕では口縁部がくの字状に強く外反するもので，口縁部内側がわずかに張り出すか稜を持っており，壺では屈曲の強い広口壺や瀬戸内系の凹線文土器などが含まれる。第２グループは，16 号，26 号，28 号，32 号であり，中津野式土器を含む弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡群である。甕では，

屈曲の弱いくの字上口縁を呈し頸部の締まりが弱く，壺ではナデ肩で卵形を呈した丸底のものなどが含まれる。特に 32 号住居跡は，調査区外へ広がるため一部のみの調査にもかかわらず，出土点数 22 点中 15 点がほぼ完形での出土である。また，器種も多彩で，甕 12 点，大甕１点，壺４点，鉢４点，蓋１点であり，弥生時代終末から古墳時代初頭へと続く中で器種が豊富になっていくことを裏付ける貴重な住居内一括資料である。

溝状遺構からは，口縁部に断面三角形の刻目突帯文を持つ甕と口縁部にやや厚めの断面三角突帯を持つものが出土している。前者は高橋Ⅱ式土器であり，後者は入来Ⅰ式土器であると考えられる。同時期の遺物は溝状遺構周辺で多く出土している。また，充実した平底の脚台も出土していることから，弥生時代前期末～中期初頭にかけての溝と言えよう。

土器集中区は掘り込みを明確に検出できなかったが，土器の出土状況や接合関係からその存在が考えられる（第30図）。出土遺物の多くは接合資料が多く，完形に近い状態の甕が多く出土している。これらは胴部上位に張りを持ち，明瞭な稜を口縁部内側に持ち強く外反するくの字口縁であることから松木薗式土器の一群であり，後期前半～中頃の遺構であろうと考えられる。もう一方は，内側に張り出しを持ち，上面がわずかに凹む薄手の甕の口縁部が４点出土している。これらは黒髪式土器の流れを持つものである。他にわずかに底面が凹む充実した甕の底部，屈曲の強い上面の凹む大甕の口縁部，鋤先状口縁の壺も黒髪式系統の遺物である。また，須玖式系土器と思われる朱線が描かれた広口壺の口縁部も出土している。埋土状況の前後関係が不明確であり小破片も多いことから流れ込みの可能性もあるが，同一場所に弥生時代中期の遺構が存在していた可能性も否定できないであろう。

第56表　遺構別弥生土器出土状況一覧表

大島遺跡	甕　形　土　器										壺　形　土　器									
遺構名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
１５号竪穴住居跡									2											1
１６号竪穴住居跡									1	1										1
１９号竪穴住居跡							2												1	
２６号竪穴住居跡								2		2						1				
２７号竪穴住居跡								1	2											
２８号竪穴住居跡									1	2										
３０号竪穴住居跡						1			1							1	1			
３２号竪穴住居跡									1	11										4
３５号竪穴住居跡							1	2	3	1										
溝　状　遺　構	1	2																		
土　坑・ピット									1	1										
土 器 集 中 区	1			1		3	1	3	7				1		1		1			

２　出土土器

弥生時代の土器は，Ⅳ層を中心として一部Ⅲ層の遺物と混ざりながら多量に出土している。弥生時代前期～終末期のものまでの土器が，調査区全域から出土した（第11・12表）。出土量から見るとＫ６～Ｋ９区に集中しており，弥生時代前期，中期，後期，終末と分けて時期ごとに遺物量を比較すると，やや後期～終末期の値が高い。このことから，本遺跡で弥生時代後期～終末期の中心となっていたのはＫ６～９区周辺であると思われる。また，包含層遺物の出土分布をまとめた結果

（第60・61図），弥生時代前期の溝状遺構周辺に前期～中期初頭の遺物が集中している。このことから，Ｋ６区周辺に遺構の存在が推測される。弥生時代中期に当たる遺物は，K6.5～7.5区に多く出土している。集中と言えるほどではないが，K6.5～7.5区付近に近隣地域に住居群の可能性が考えられる。これらの結果より，Ｋ６区周辺からＫ９区方面へ多少の居住域移動があったか，あるいは住居域の広がりが考えられる。このように，早くから自然堤防としての微高地が形成されたＫ６～９区周辺で，弥生時代を通しての生活文化圏が形成されていたと推測される。

本遺跡の出土土器を各時期ごとに分類してまとめたものが，第190図である。甕を中心に分類したが，弥生時代後期～終末期にかけては遺構内出土のものが多いのに比べて，弥生時代中期に関しては包含層出土が中心となるので他器種との前後関係が不明瞭である。したがって大まかな時期区分で掲載した。

甕の分類で見ると，弥生時代前期の断面三角形の刻目突帯を貼り付けた高橋式（Ｉａ・Ｉｂ類），肥厚した口縁部を持つ弥生時代中期前半の入来Ⅰ式（Ⅱ類），入来Ⅱ式土器（Ⅲ類）が出土している。Ⅳ類は，口縁部内側に尖り気味の張り出しを持ち，上面が平坦である。これは，入来式と黒髪式両方の特徴を併せ持つものである。Ⅴ類は内側の張り出しがより強くなり，上面の凹みが顕著になっていく。これは黒髪Ⅱ式の特徴が良く出ているものであり，Ⅴ類の中には在地のものではない丹塗りの甕も含まれている。その反面，山ノ口式の出土は二叉状口縁の土器片などわずかしか見られなかった。 Ⅵ類，Ⅶ類は，強く外反し，内側の張り出しもわずかに残ることから，弥生時代後期の松木薗式の中でも黒髪式の様相が強いものであり，影響を受けたと見られる。これにより，肥後地方の影響を受け黒髪式→松木薗式へと変化していったことが裏付けられた。その後，松木薗式（ Ⅷ・ Ⅸ類），弥生時代終末期の中津野式（Ⅹ類）へ続き古墳時代へと至る。

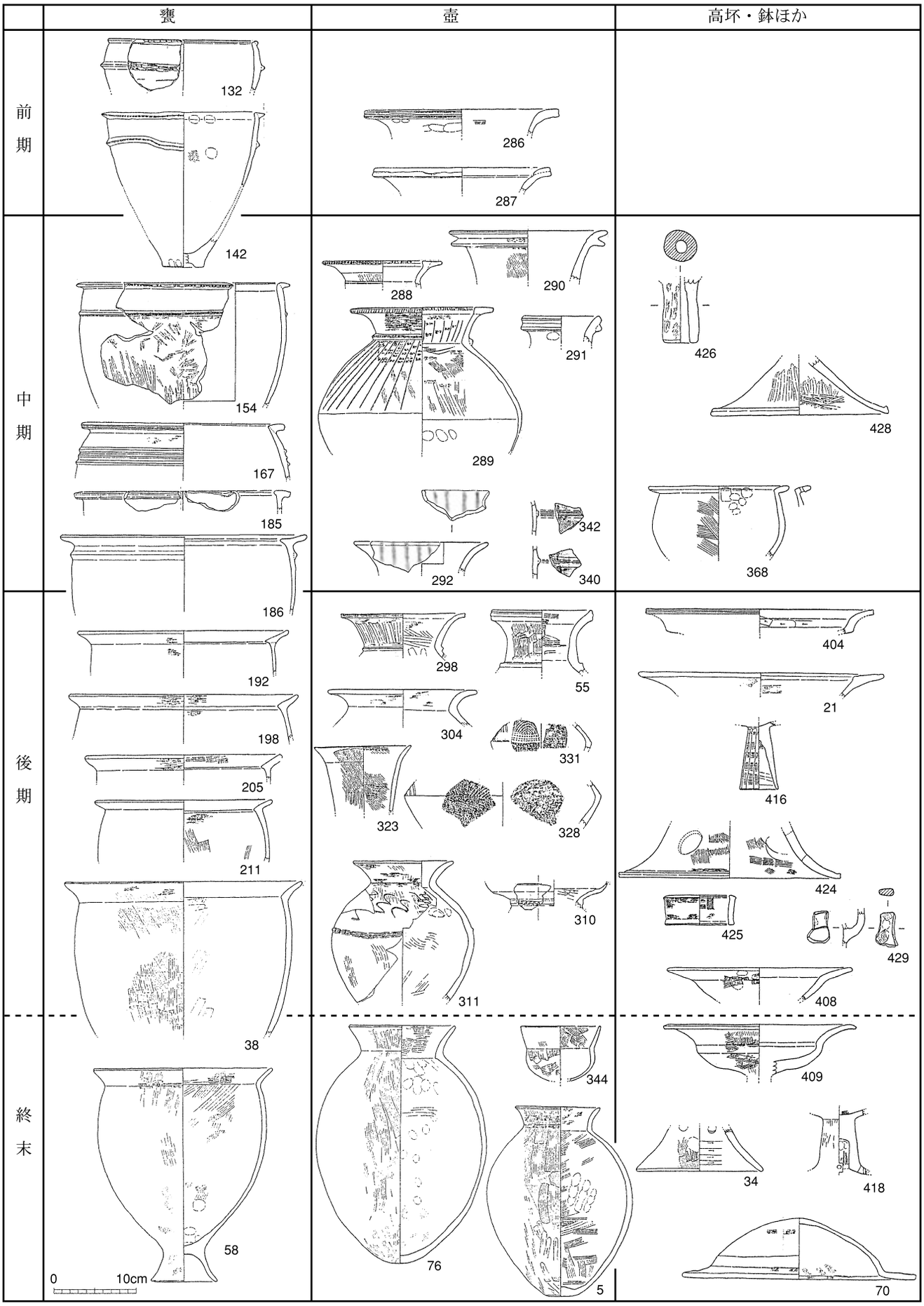
甕以外には大甕，壺，高坏，鉢，器台，蓋，小型土器，ジョッキ型土器など多彩な器種が出土した。中でも黒髪式と考えられる壺，大甕，高坏，広口壺や外面全面に丹塗りを施した土器片，免田式の長頸壺の出土により，九州西部地方との活発な交流が推察される。また，瀬戸内系の凹線文土器の出土により，より広範囲な交流も想像できよう。

今回は時間的制約もあり本遺跡内の遺物の検討にとどまったが，これからの薩摩半島西部地域の弥生土器編年を考えるうえで，貴重な資料である。

このように本遺跡周辺は，自然堤防が形成された縄文時代晩期頃から人々が定住し始め，古代の国府・国分寺の設置されるよりはるか以前の弥生時代に川薩地方の中心地として繁栄し，他地域と活発な交流が行われていたと考えられる。（平木場秀男）

３　石庖丁の光沢斑分布について

石庖丁は14点出土しており，その内５点にパッチ（水滴）状の光沢斑を確認した。光沢が観察できる石庖丁とそうでないものが存在することや，発生のメカニズム，分布図の解釈は現段階では研究史を前提とした解釈や仮説実験による考察の域を超えない。観察結果は様々な使用の段階と埋蔵環境を経た結果であり，残された痕跡には複雑な使用が起因すると考えられる。接触により形成された光沢部分が変化無く残存し観察できている部分もあるだろうし，研ぎ直しや特殊な使用，埋蔵されていた環境による影響を受けた可能性もある。以上のように現段階では使用方法の推定や対象



第190図　大島遺跡出土弥生土器一覧

物などに課題が残されているが，ここでは金属顕微鏡を使用して観察された結果をもとに光沢斑の分布図を作成した（第191図）。

観察は落射照明付き金属顕微鏡（Nikon ECLIPSE L150）を使用し，100～200倍の倍率で約2.5㎜メッシュごとに観察しながら，光沢斑分布図を作成した。パッチ状の光沢斑は大きさや密度に違いがあるが，強弱の差を定量化できないため今回の観察では光沢斑の有無で分布図を作成している。石庖丁は刃部が形成されていない面を主要面とし，５点中４点は両面に刃部を形成していた。

462（頁岩）

主要面（右図）は全体的に広く光沢を確認したが，右上部と下縁の一部には確認できなかった。非主要面（左図）は上半分に光沢を確認した。全体的に下半分に削痕があり，光沢との相関を示唆するようにも見える。刃部に光沢は確認できなかった。

460（頁岩）

両面とも左側と右穿孔部の右側に光沢斑が確認された。両面とも刃部には光沢が確認できなかった。

458（頁岩）

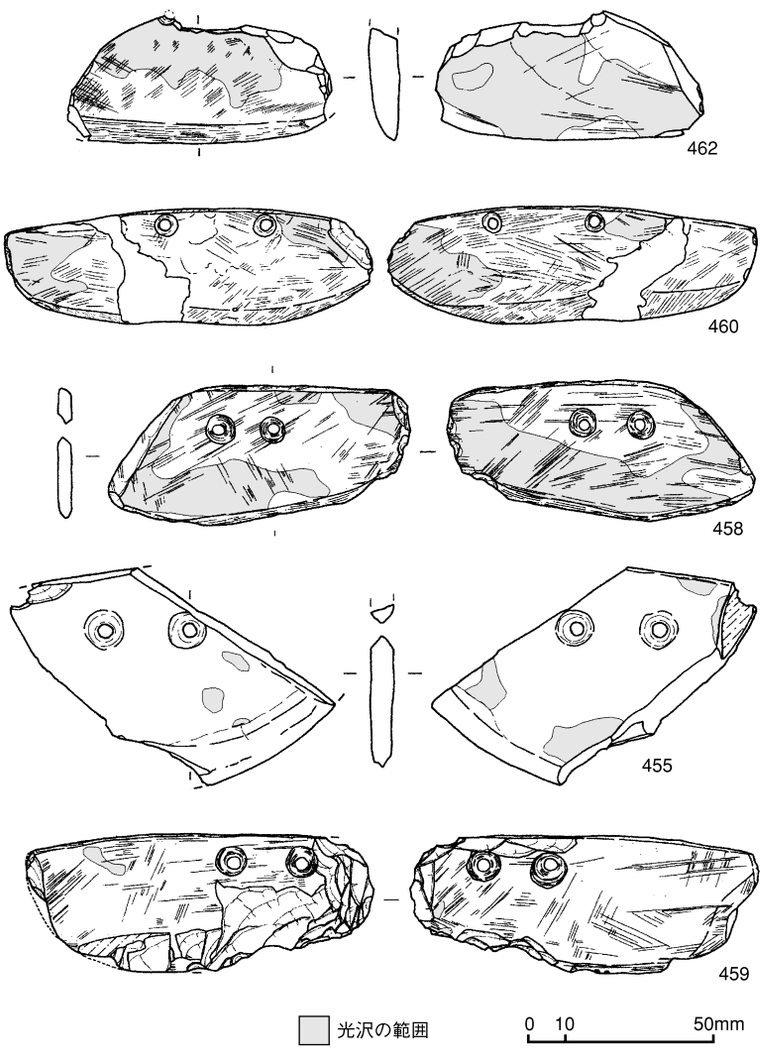
主に穿孔部周辺以外に広く光沢斑が確認された。No462，460と同様刃部に光沢は見られない。

455（硬質砂岩）

部分的に光沢斑が観察されたが，刃部には確認できなかった。

459（粘板岩）

両面とも部分的に光沢斑を確認した。（永濵功治）



第191図　石庖丁光沢斑分布図

第２節　古墳時代について

古墳時代の遺構及び遺物は，前後の時期の弥生時代や古代と比較すると少ないものであった。しかし，土坑墓２基と完形須恵器４点がはいった土坑は特筆すべきものであった。

土坑墓１は大刀１，短刀１，短剣２，鉄鏃８本，須恵器坏身１点を副葬品として有するものであった。大刀は６世紀後半特有の鐔をもち，また鎺本穴が施された特徴的なものであり，一方鉄鏃

は頸部に独立逆刺が片側につくという一般的には５世紀と判断される柳葉形鉄鏃であった。共伴した須恵器坏身は，受け部からの立ち上がりが短く内傾し，底部に回転ヘラケズリがみられることよりＴＫ43の新相ないしＴＫ209段階に位置づけられ６世紀後半頃の時期と判断される。

また，土坑墓２は2点の耳環を副葬品とするものであった。ただし他に共伴する土師器や須恵器の出土が無く，時期の特定は困難であるが耳環の存在から6世紀後半から7世紀前半と判断される。

このような土坑墓の存在は，川内市の横岡墳墓群において板石積石室墓とともに土坑墓も確認されており，石室墓から土坑墓への交代という重要な社会的変化とその意義については，西健一郎氏により検討・指摘されて（西　1996）いる。本遺跡の土坑墓は，これまで明確でなかった南九州薩摩地域における該期の墓制について新たな知見をもたらすものであり，今後の古墳時代研究にとって貴重な類例となろう。

土坑１からは高杯蓋２点，坏蓋１点，坏身１点がほぼ完形の状態で出土した。蓋はいずれも天井部と口縁部の境にシャープな稜があり，天井部全体に回転ヘラケズリが施されていた。坏身も同様であり底部に回転ヘラケズリが施され，受け部からの立ち上がりはほぼ直に近いものであった。これらの特徴から５世紀後半のものと推定される。包含層から出土した𤭯もこの時期のものと思われる。熊本大学の杉井健氏と鹿児島大学の橋本達也氏によると，これらの須恵器はＴＫ23に該当すると教示を受けた。

包含層からの出土遺物で特記すべきものが，把手付きの甕である。器面にタタキ痕が残っているのが特徴であり，須恵器の手法によるものと判断される。同様の手法による把手付き甑も認められた。第111図275は大型竪穴状遺構から出土したものであり，古代の遺構のなかで取り扱っているが，つつぬけタイプの蒸気孔で器面には斜格子状のタタキが残り，把手付甕と同様に須恵器の技法で作られ焼成された赤焼土器である。また南九州では類例のない鐔付の羽釜も出土しており，先の把手付蓋や把手付き甑と同様６世紀頃のものと杉井氏に教示を受けた。

調査区域は遺跡全体のなかでわずかにトレンチ状の少ない面積であり，周囲にはまだ多くの土坑墓や土坑などが存在している可能性が高い。

第３節　古代について

１　住居跡について

古代の住居跡として検出されたものは総計23軒であった。ただし，遺物包含層と遺構埋土が極めて類似していたことから，見逃した可能性も否定できない。また検出できた住居跡もこのような埋土の状況から，かなり下位の面で検出しており，検出面からの深さはわずかな浅いものであった。そのため住居跡出土の遺物は床面直上のものが多く，各々の住居跡の時期を反映しているといえる。

古代の住居跡は全て方形もしくは隅丸方形を呈していた。住居跡内の柱穴は残念ながら全く検出できなかった。

これまで県内で検出されている奈良～平安時代の住居跡は，熊本県以北で検出されるものと異なり，造りつけのカマドがないのが普通である。

しかし，今回の調査で県内では初めてカマド付きの住居跡が２軒検出された。カマドはいずれも

通常の平均的な構築方法である黄褐色粘土を使用して構築したものである。このようなカマド付き住居跡の存在は，南九州ではこれまで類例がないことより，この集落が鹿児島の在地的なものではなく，例えば後述する肥後から来た集団などのように他地域から移住してきた人々の存在を考慮する必要がでてくる。カマドをもつ住居跡は８号住居跡と33号住居跡であり，33号住居跡の遺物はほとんど少なく時期を特定できないが，８号住居跡の出土遺物は高台付坏や蓋など８世紀代のものであり，これらは奈良時代に位置づけられよう。ただし，全ての住居跡がカマド付きではなく，わずか２軒のみ（今回の検出結果）であることからこの集落を形成した集団の構成や集落の性格が伺える可能性がある。しかし，遺跡全体の調査ではないため集落全体の割合は不明なことより慎重な扱いが必要とされる。

ところで，住居跡が検出されたのはＫ６～８とＫ９～10の区域及びＫ15であり，Ｋ11からＫ14までの区域で住居跡は検出されず，そのかわりに多数の土坑群と溝状遺構が検出されている。この区域に所在する土坑群については，その性格を全てについて断定し得なかったが，一部のものについては形態的に墓の可能性も想定される。また，時期は異なるものの刀や剣を副葬した古墳時代の土坑墓がその区域の中間に位置するＫ13で検出されており，その時期から古代まで墓域として区別されていた可能性も考える必要があろう。

２　遺構と出土遺物

土師器を中心とする出土遺物は，遺物包含層から多量に出土したのみでなく，住居跡などの遺構から一括性の高い遺物の出土がみられた。このような遺構からの出土遺物群については，土師器坏・埦・甕などの口径・底径・器高など法量や器形などの形態から時期的な変遷がうかがえる。

坏の時期的な変遷についてはこれまでの研究により，口径の大きなものから小さいものへの変化や，体部が直線的なものから内湾あるいは丸みをもつものへ，また底径は大きく側面観が箱形を呈するものから底径が小さくなるもの等の変化が知られている。（山本1988.1990.1997　森田1977　横田･森田1976）

鹿児島県内出土の土師器については中村和美により，遺構一括出土例を中心として，また火山灰の利用と広域流通品との共伴などから編年が提示されている（中村　1994・1997）。しかし，これまで８世紀代の資料が乏しい現状であった。

今回，大島遺跡から出土した土師器坏については法量及び形態から11類に区分した。１類は底面が手持ちヘラケズリ，２類は体部全体の調整がヘラミガキ，３類は高台付坏と技術や形態等が異なる。７類は特殊な器形である。そして４類から５類，６類，８類，９類としだいに口径が小さくなり，同様に底径も小さくなる。また10類は円板状高台を有するもので，11類は充実高台と呼ばれるものである。円板状高台と充実高台を有するものは一般的に埦として区分されるが，ここでは輪高台をもたないものとして坏で取り扱っている。

また埦については４類に区分し，皿や高台付皿についても数類に区分できた。

遺構出土土師器を概観すると，第192図のように13号住居跡出土のものは底部に手持ちヘラケズリを施した１類坏が主体である。このような須恵器の製作技法による坏の類例の出土はこれまで県内では認められず，また８世紀以降の形態ではないことより，７世紀末の可能性がある。

11号住居跡の坏は口径及び底径とも大きい高台付坏であり，須恵器の高台付坏を模した形態であり８世紀に比定されよう。

３号住居跡の土師器坏は口径と底径が大きい坏５類が主体であり９世紀代が考えられる。

10号住居跡と６号住居跡は口径・底径が大きい坏５類と底径が比較的小さくなる坏６類からなり，共伴する埦は体部が直線的な深いものと内部が内湾して口径が比較的大きいものがある。このような坏と埦の組み合わせから９世紀後半に位置づけられる。

土師器集積土坑については，10類とした円板状高台と11類とした充実高台がみられ，また輪高台の埦は体部が丸みをもち，高台は「ハ」の字状に開くものである。このような坏と埦の共伴例は市ノ原遺跡に認められるものであり，９世紀末から10世紀初頭の時期に位置づけられる。

５号住居跡では９類の坏とした口径の小さいものが主体であり，同様の小さい口径の内黒土師器埦が共伴している。また口径が同じ程度の輪高台の皿と充実高台の皿も共伴している。このような口径が小さく体部が内湾する坏と内黒土師器は，鍛冶屋馬場遺跡遺構一括資料でも認められるものと共通しており，10世紀後半に位置づけられよう。

また，出土した須恵器については８世紀代の高台付坏などが多く出土したことが特徴といえる。さらに県内では出土例の少ない７世紀末の特徴的な小さなかえしを有する坏蓋も認められた。

県内における須恵器窯には，本遺跡に近い位置に８世紀代前半の鶴峯窯が所在している。出土した高台付坏には鶴峯窯出土と類似するものも認められた。この高台形態などの特徴は「萩尾型」にも近いと思われる。網田龍生氏は宇城の須恵器工人との関連を指摘している。また出土した須恵器には肥後の荒尾産に類似するものも多く認められているが，それは県内の中岳山麓窯跡群のものとも特徴が類似するため判別は困難である。今後胎土分析などが必要である。

このように検出された住居跡などの遺構は，その中から出土した一括性の高い遺物より，７世紀末から10世紀後半に至る時期のものであり，集落はかなり長い期間にわたり形成されたものであると判断される。また出土遺物において，これまで県内で出土例の少ない７世紀末や８世紀代の一括資料が多く認められたことは，今後の南九州の古代研究にとって大きな成果と言える。

今回調査された部分は遺跡全体から見るとかなり狭い面積であったが，それでも遺跡が長期間にわたり集落が形成されていたことが理解されよう。

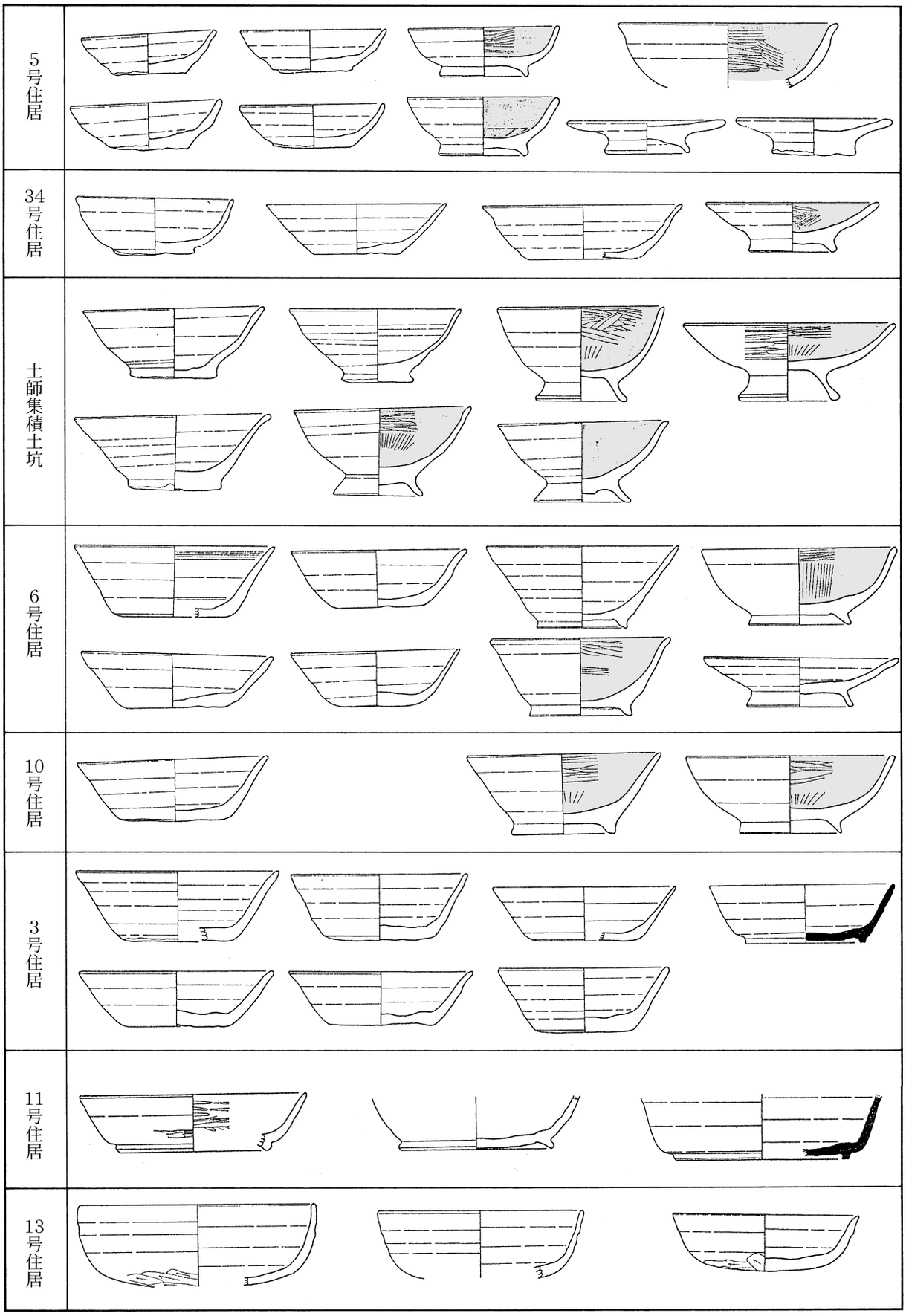
３　異色高台埦について

出土した土師器埦のなかで高台部分のみ色調が異なる特徴的な土師器が認められた。これは体部とは異なる粘土を高台部分に使用することにより，焼成後に発色が違う独特な効果を狙ったものであろう。ただし，高台の色を変えた埦が通常の埦と機能や目的が異なるとは思われない。

本遺跡での出土例では赤褐色の高台（赤高台）と白色の高台（白高台）そして中間的な黄白色の高台（桃高台）という大きく三種類の異色高台埦が確認できた。赤高台については焼成により赤褐色を発色することより，鉄分の多い粘土を別に用意して高台部分を作成した可能性も考えられる。

第87図95と96は６号住居跡から出土した内黒埦の赤高台と白高台であり，共伴して出土した。いずれも底部近くのみであるが，住居跡出土の多くの坏・埦などからこの住居跡は９世紀後半に位置づけられるものであり，その時期これらの異色高台は同時存在していたことになる。

また包含層からは赤高台や白高台のみでなく，赤色と白色の中間色である桃色の異色高台埦も認



第192図　古代遺構出土一括資料（S＝¼）

められている。この桃高台埦は，これまで異色高台埦として知られている内黒土器ではなく，また高台の形態も各々大きく異なっている。

このような異色高台埦については，近年調査報告がなされた川内市計志加里遺跡，加治木町高井田遺跡，姶良町小倉畑遺跡などで赤高台埦が相次いで認められたことにより，一部の注目を受けている。

赤高台埦については，上記の各遺跡などでわずか数点の極めて少ない出土であったが，菱刈町内の最近調査された大峰遺跡で95のような資料が多数出土している事例が発見された。ここでは内黒の赤高台埦のみの出土であり，他の白高台や桃高台などの異色高台埦は認められていない。このことより赤高台については，現在の菱刈町内の遺跡付近を中心とする当時の集団により作られた可能性が高いと思われる。しかし，643の赤高台は色調が橙色であり，高台の形状も異なることから別の生産地のものと思われる。また白高台や桃高台などの異色高台埦についても，薩摩もしくは大隅の別の集落により製作され，大島遺跡に運ばれた可能性が高い。この赤高台が多くの遺跡で出土している事実は，律令期にあっても各地で規格化されたものだけが生産されるのではなく，各々の集落において個性的な高台の埦が作られた状況が確認でき重要である。同時に，当時の人々の動きや物流を示すものとして貴重である。９世紀後半において塩・魚貝類など海浜の集落から山間部の集落への物流が存在していたと思われるが，それに対応するように，多くの逆の物流も推察される。すなわち異色高台埦は当時各集落から人や物の動きが存在することを実証する意味で貴重なものと評価できる。本遺跡で異色高台のうち赤高台や白高台そして桃高台など多様なものが出土したことは，大島遺跡が各地の集落から物流や人々の往来など当時多く，各地の集落から集中する性格であったことを裏付けるものと言える。

４　特殊遺物からみた大島遺跡古代の性格

本遺跡では通常の一般的な遺跡では出土数が極めて少ない越州窯系青磁や緑釉陶器が多量に出土した。緑釉陶器は合計23点出土しており，京都系，長門系，近江系のものが認められ，そのうち半数は京都系であった。また器種には埦・皿・盤のみでなく，三足盤・壺・合子など多彩であった。越州窯系青磁も計86点とかなり多く出土し，碗が主体であり他に坏・皿・壺なども認められた。それのみでなく，本県での初出土となった帯金具の石帯も２点出土した。いずれも丸鞆であり，裏面には３ヶ所の潜り穴が認められるものであった。

さらに希少なものとして，風字二面硯があげられる。風字硯はこれまで県内においては薩摩国府跡で破片が１点と，高山町波見遺跡から１点出土しており，また吹上町永吉では土師質の風字硯が出土している。

また関連するものとして，８世紀代の高台付坏や坏蓋・甕などを使用した多数の転用硯と須恵器の水差しも出土した。１遺跡のわずかな調査面積に対して88点の転用硯の出土は驚くばかりである。これらの遺物は県内の一般の遺跡ではほとんど出土しないか，あるいは極めて出土数の少ない特殊なものであり，本遺跡の性格を考えるうえで重要である。

大島遺跡は薩摩国府・国分寺とも距離的に近く，また上記したような特殊な遺物が多く認められることから，薩摩国府や国分寺と関連の深い人々が居住した集落であると位置づけられる。

ただし，本遺跡の集落の形成はすでに弥生時代終末から認められており，その後には古墳時代後

半の６世紀後半の各種の遺物や墓も存在し，集落は継続していたと思われる。さらにこの時期の九州には類例が少ない鐔付き羽釜の出土は畿内地域との関係を考えるうえで示唆的である。つまり本遺跡において古代集落の形成は，弥生時代終末から古墳時代集落の延長線上にある。大島遺跡は古代において高城郡に属しており，ここに国府が置かれる要因の一つは地理的なものだけでない可能性も考えられる。

いずれにしても，大島遺跡は特殊遺物の多様性から単なる集落のみでなく，国府・国分寺と関連する官衛施設の存在も予想され，残存部の保存と重要な遺跡として今後の確認調査が望まれる。

蛇足ではあるが文献史学の研究では，『和名類聚抄』から高城郡６郷のうち合志，飽田，宇土，託万の４郷は肥後郡名に一致していることから，中村明蔵氏や永山修一氏らにより肥後から移民が移住させられたと考えられている。本遺跡で検出された県内では珍しい古代のカマド付住居跡の存在は，それを裏付ける一つの考古資料と言えよう。（宮田栄二）

参考文献

網田龍生　1994　「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ
網田龍生　2001　「九州における須恵器の製作技法とその転換」『古代の土器研究会第６回シンポジウム発表要旨』
網田龍生　2003　「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『考古学研究室創設30周年記念論文集　先史学・考古学論究』Ⅳ
池田榮史　1996　「Ⅱ　南九州（熊本，宮崎，鹿児島，沖縄）」『須恵器集成図録』５　雄山閣出版
池畑耕一　1978　「隼人の漁撈生活」『隼人文化』５
稲田孝司　1978　「忌の竈と王権」『考古学研究』25－１
臼杵　勲　1984　「鍼本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』31－２
宇土市教育委員会　2001　『考古－石ノ瀬遺跡－』新宇土市史基礎資料（９）
岡本武憲　1991　「日向における古代末の土器－宮崎学園都市遺跡群を中心として－」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ
鹿児島県教育委員会　1983　『成岡遺跡･西ノ平･上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
鹿児島県教育委員会　1985　『外川江遺跡･横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30)
鹿児島県教育委員会　1985　『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003　『楠元・城下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（57）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002　『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（39）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003　『前畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（56）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003　『高井田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（35）
鹿児島市教育委員会　1996　『北麓遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(21)
鹿児島市教育委員会　2000　『不動寺遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(25)
清田純一　1991　「肥後における弥生時代遺跡の一様相」『交流の考古学　肥後考古』８
草原孝典　2003　「岡山県下における緑釉陶器共伴の土器様相」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅦ
熊本県教育委員会　1980　『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財報告 (48)
熊本県教育委員会　1983　『梅ノ木遺跡』熊本県文化財報告 (62)
熊本県教育委員会　1986　『神水遺跡Ⅱ」熊本県文化財報告 (82)
五島美術館（編）　1998　『日本の三彩と緑釉』
古代の土器研究会　2003　『古代の土器研究　平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－』
齋藤孝正　2000　『日本の美術』409　越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器
佐藤浩司　2003　「西国における墨書土器の様相－北部九州を中心として－」『古代官衙・集落と墨書土器－墨書土器の機能と性格をめぐって－』　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
杉井　健　1999　「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』
杉井　健　2003　『朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究』平成12～14年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ２）研究成果報告書

角田文衛（編）　1986　『新修国分寺の研究　第5巻下　西海道』　吉川弘文館
全国大学博物館学講座協議会西日本部会（編）　2002　『博物館実習マニュアル』　芙蓉書房出版
太宰府市教育委員会（編）　2000　『大宰府条坊跡』XV
太宰府市史編集委員会（編）　1992　『太宰府市史』考古資料編
巽淳一郎　1985　『日本の美術』235　陶磁（原始・古代編）
坪根伸也　1991　「南九州における櫛描文の系譜」『交流の考古学　肥後考古』８
中世土器研究会（編）　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』
東郷町教育委員会　1986　『五社遺跡』東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書１
内藤政恒　1967　「硯の需要と二面硯に関する研究序説」『日本考古学選集』25
中島恒次郎・城戸康利　1994　「薩摩国から来た食器－太宰府条坊跡第89次調査出土資料－」『中近世土器の基礎研究』X
中園　聡　1996　「弥生時代中期土器様式の併行関係」『史淵』133
中園　聡　1997　「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』９
中園　聡　1998　「丹塗精製器種群盛行の背景とその性格－東アジアの中の須玖Ⅱ式土器－」『人類史研究』10
中園　聡　2004　『九州弥生文化の特質』
中村和美　1994　「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』　X
中村和美　1997　「鹿児島における古代の在地土器」『鹿児島考古』31
中村耕治　1986　「弥生時代－櫛描文土器・瀬戸内系土器のありかたと時期について－」『鹿児島考古』20
中村直子　1987　「成川式土器再考」『鹿大考古』６
中村直子　1988　「免田式土器考」『人類史研究』７
中村直子　1991　「南九州地域における弥生土器の編年研究に関する問題」『南九州地域における原始・古代研究の諸様相に関する総合的研究』
中村直子　1993　「中津野式に表れる地域色」『鹿児島考古』27
中村直子　1999　「鹿児島県出土の高坏の分類」『大河』７
永山修一　2002　「鹿児島県の平安時代研究について」『隼人文化研究会・蝦夷研究会合同例会発表要旨』
楢崎彰一　1976　『三彩・緑釉』日本のやきもの１
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　1983　『埋蔵文化財ニュース』41
西　健一郎　1983　「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』12
西　健一郎　1996　「川内市における古墳時代墳墓について」『大河』第6号
西谷　正　1997　「九州出土の銙帯・石帯地名表」『人類史研究』９
谷頭遺跡調査団･西原村教育委員会　1978　『谷頭遺跡調査報告』
林　麻穂　1998　「免田式土器の編年と性格に関する再検討」『人類史研究』10
藤尾慎一郎　1993　「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』27
本田道輝　1982　「松木薗遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』14
本田道輝　1984　「松木薗１号住居址出土土器とその意義」『鹿大史学』32
本田道輝　1993　「鹿児島県下の弥生後期土器」『鹿児島考古』27
本田道輝　1999　「松木薗０式土器，その後」『鹿児島考古』33
三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館　1990　『第９回三重県埋蔵文化財展　緑釉陶器の流れ』
美濃口雅朗　1994　「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X
免田町教育委員会　1996　『本目遺跡』免田町文化財調査報告２
村上　隆　2002　「古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察」『奈文研紀要』
八代市教育委員会　1988　『下堀切遺跡Ⅰ』八代市文化財調査報告３
山本信夫　1988　「太宰府における古代末から中世の土器・陶磁器－10～12世紀の資料－」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
山本信夫・山村信榮　1997　「中世食器の地域性－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告－』71
横田賢次郎　1983　「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館研究論集』９
横田賢次郎・森田勉　1976　「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』２
和田晴吾　1979　「１土錘・石錘」『弥生文化の研究』５

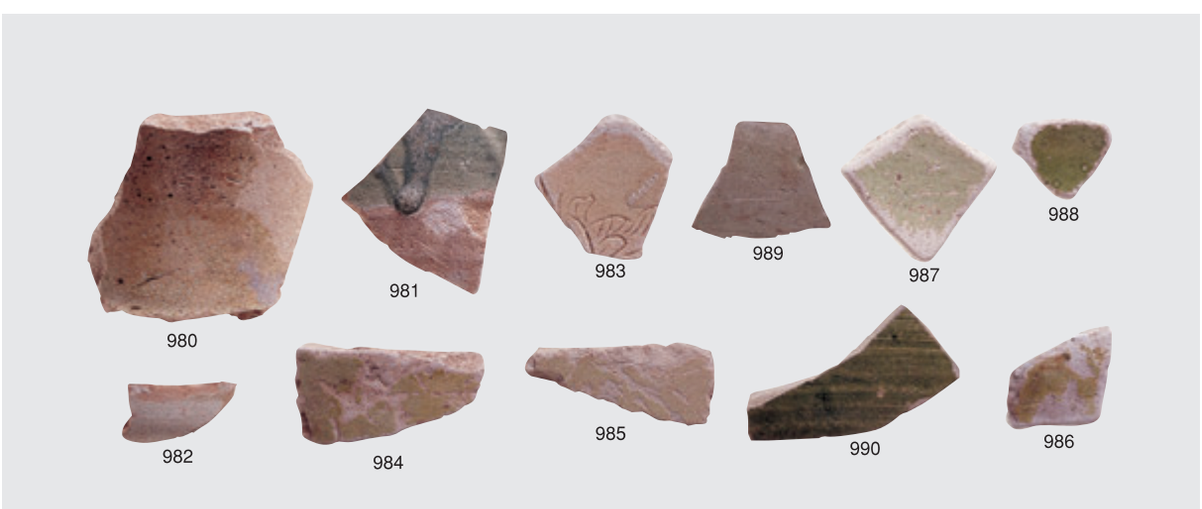


古代の土師器（異色高台）



石製丸鞆





緑釉陶器


991
992
993
1005
995
1002
997
1003
1013
996
1004
1019
1008
1011
1009
1012
1010
1018
1021
1015
1016
1020
1017
1007


1031
1034
1041
1039

越州窯系青磁　1


1028
1024
1023
1025
1022
1026
1027
1032
1029
1030
1033
1037
1045
1036
1042
1047
1040
1043
1044

越州窯系青磁　２

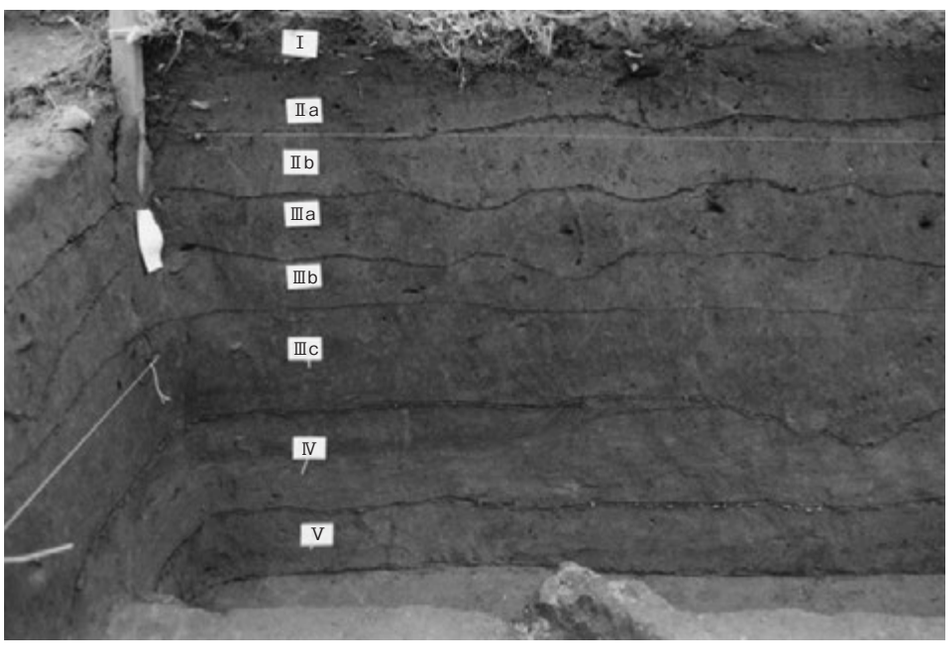
図版1



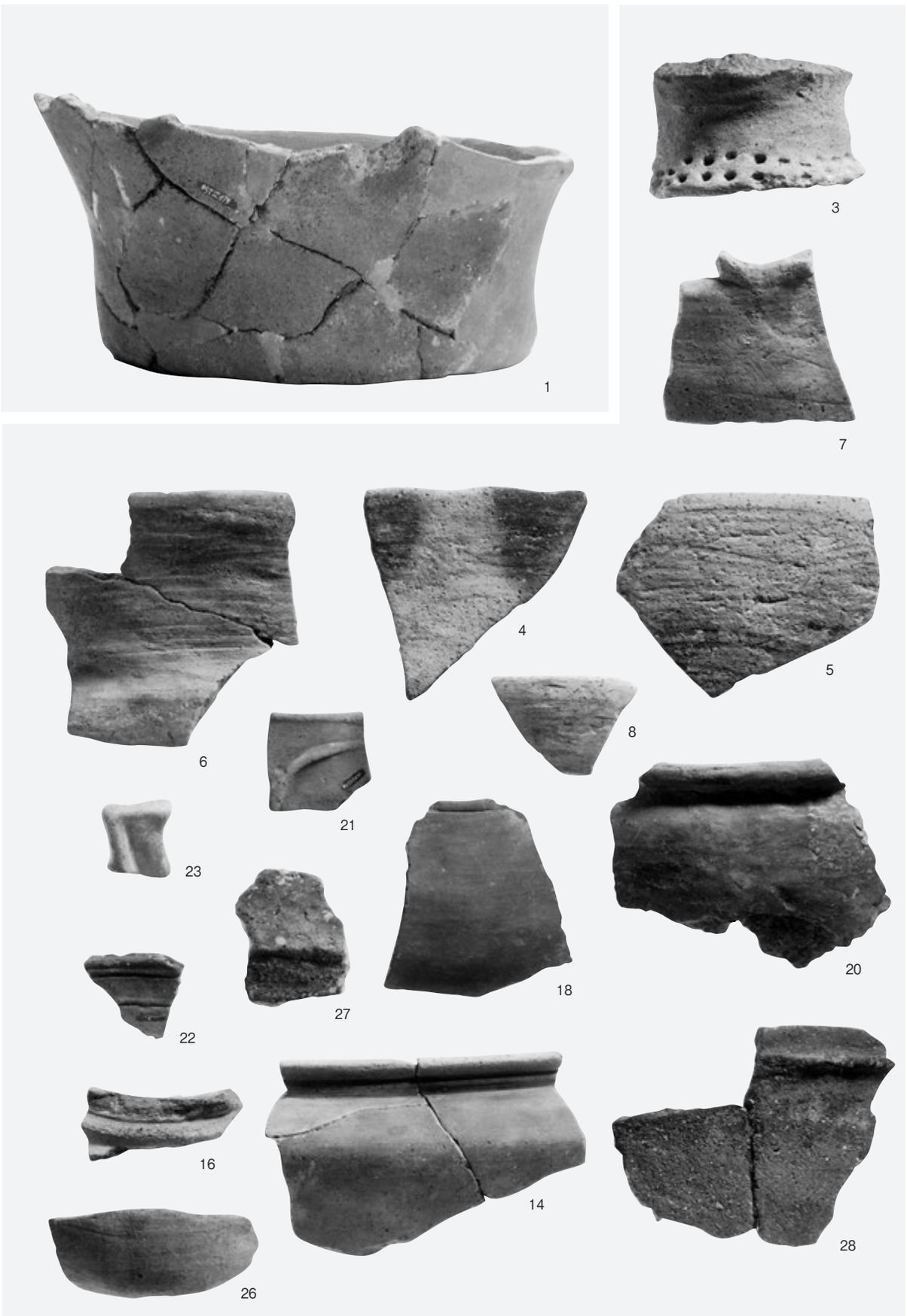
調査風景
（K6～8調査区）



調査風景
（K9～10調査区）



土層
（K6～8調査区）



縄文時代の土器



弥生時代
15・16号竪穴住居跡
検出状況



弥生時代
16号竪穴住居跡
遺物出土状況



弥生時代
19号竪穴住居跡
完掘状況



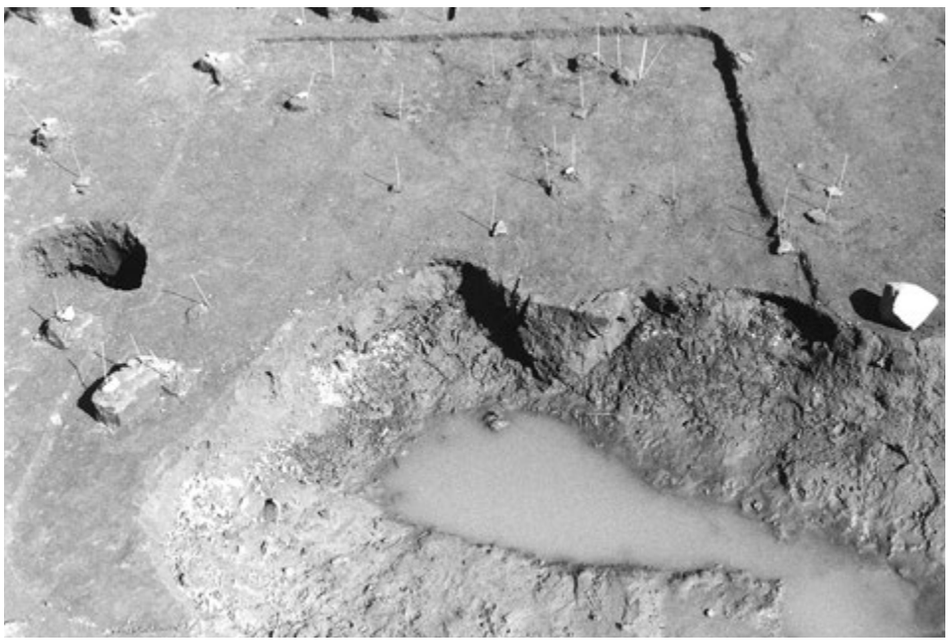
弥生時代
26号竪穴住居跡
遺物出土状況



弥生時代
27号竪穴住居跡
完掘状況



弥生時代
28号竪穴住居跡
遺物出土状況



弥生時代
30号竪穴住居跡
遺物出土状況



弥生時代
32号竪穴住居跡
遺物出土状況



弥生時代
32号竪穴住居跡
完掘状況



弥生時代
35号竪穴住居跡
遺物出土状況1



弥生時代
35号竪穴住居跡
遺物出土状況2



弥生土器集中区
遺物出土状況1



弥生土器集中区
遺物出土状況2

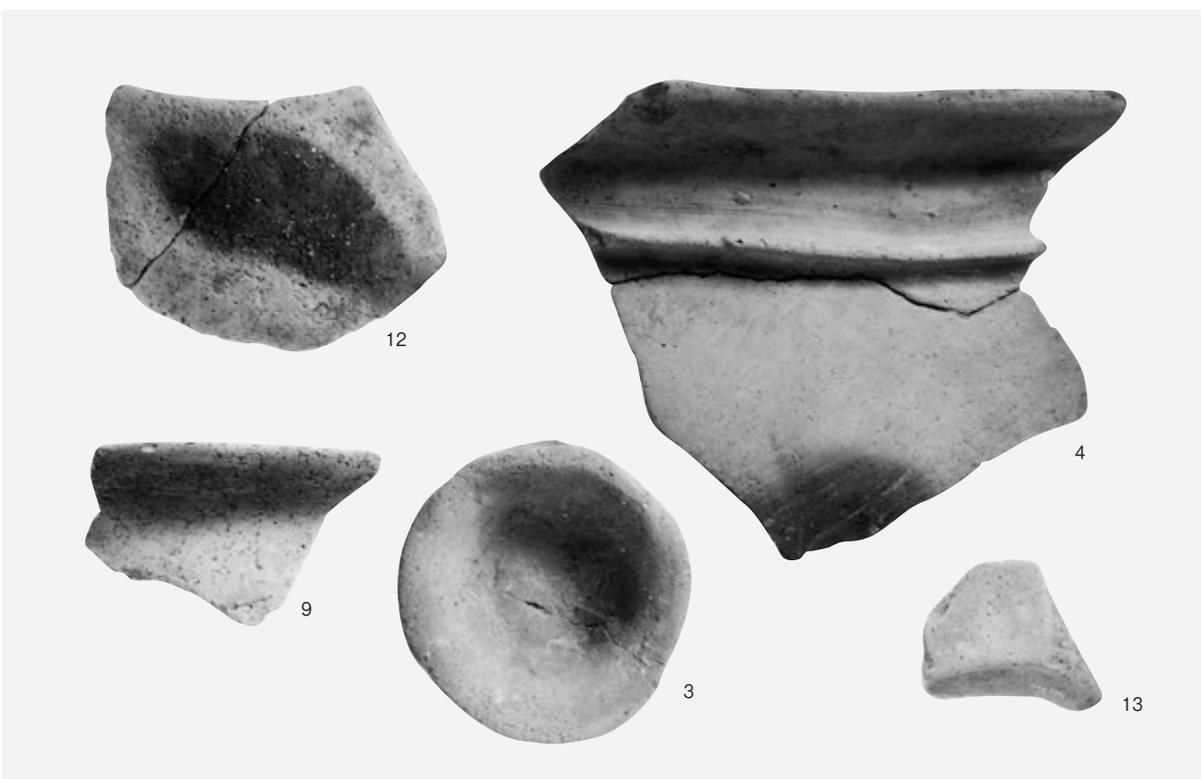


弥生土器（壺）
出土状況

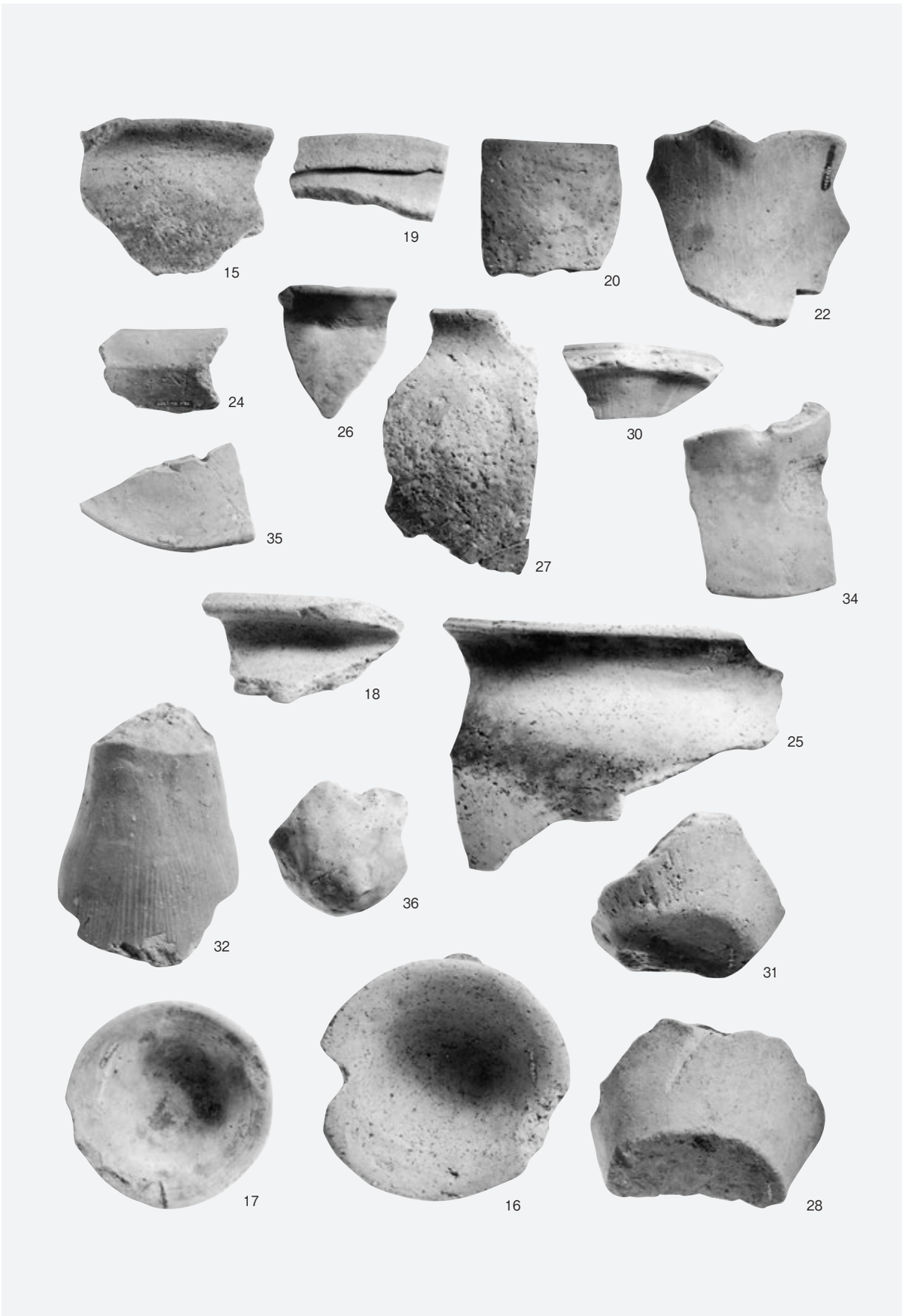


石庖丁出土状況

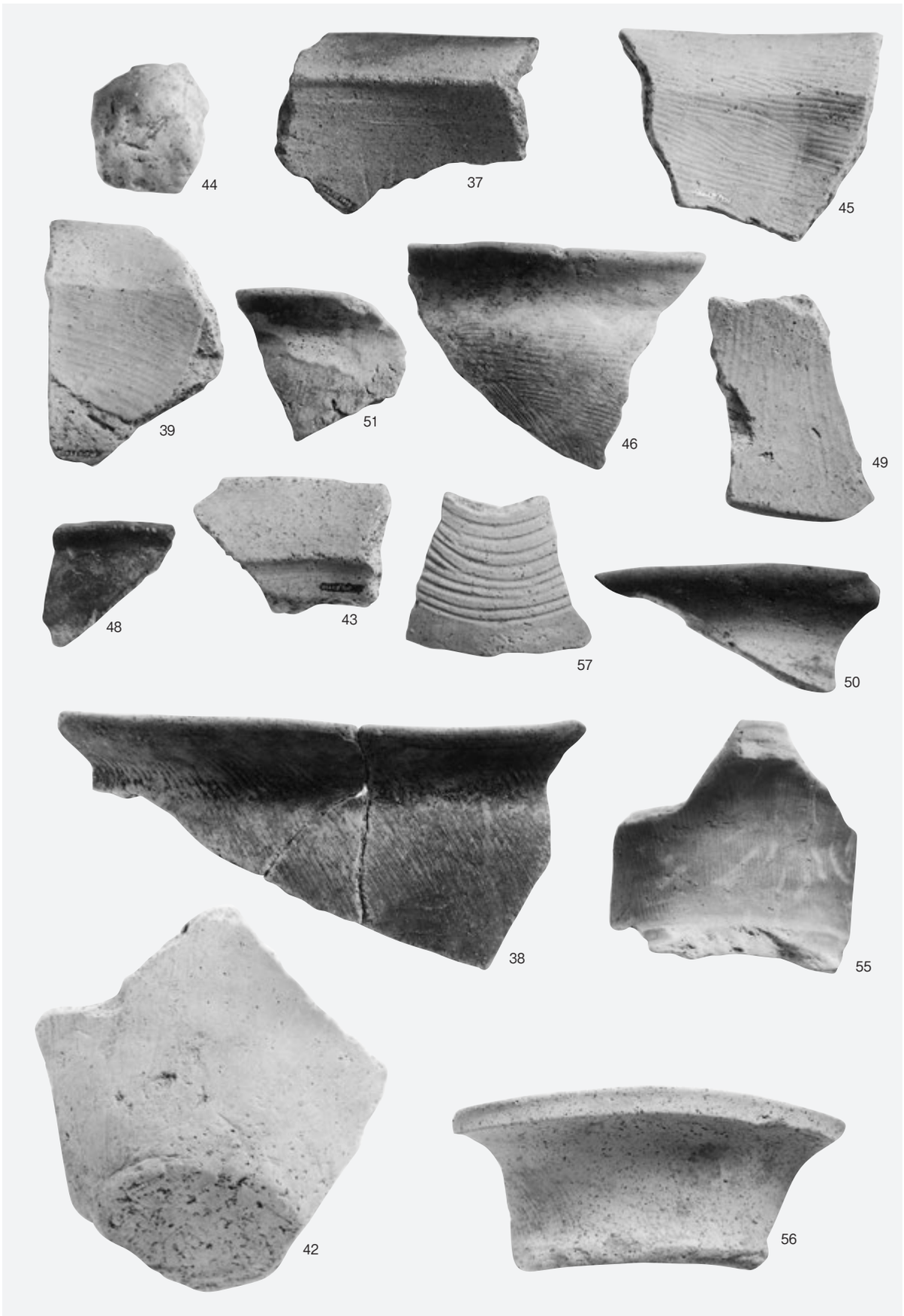




弥生時代の土器1（15・16号住居跡）



弥生時代の土器2（19・26号住居跡）



弥生時代の土器3（27・28・30号住居跡）



58



60

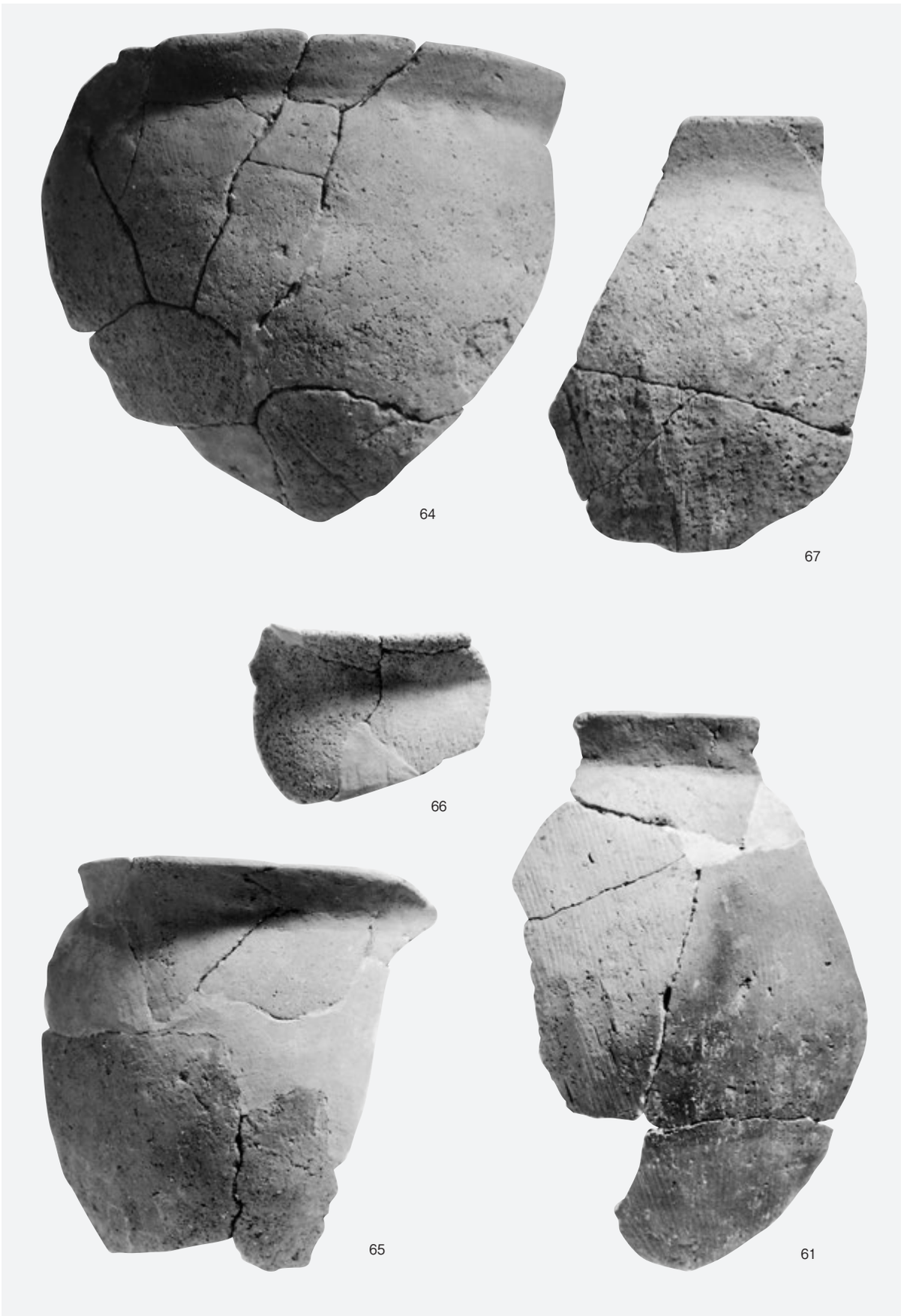


59



62

弥生時代の土器4（32号住居跡①）



弥生時代の土器5（32号住居跡②）















弥生時代の土器6（32号住居跡③）



弥生時代の土器7（32号住居跡④）



76



78

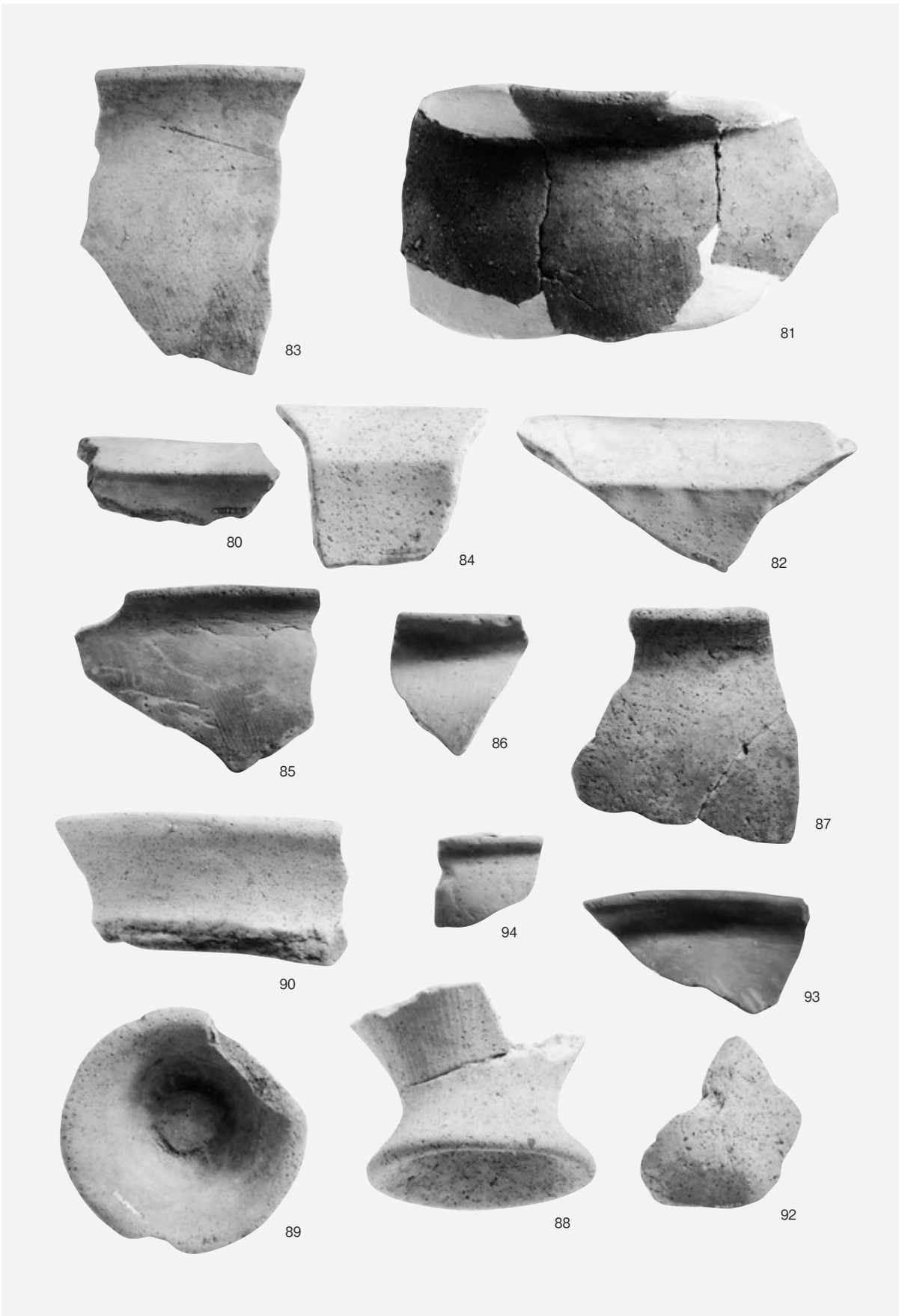


77



79

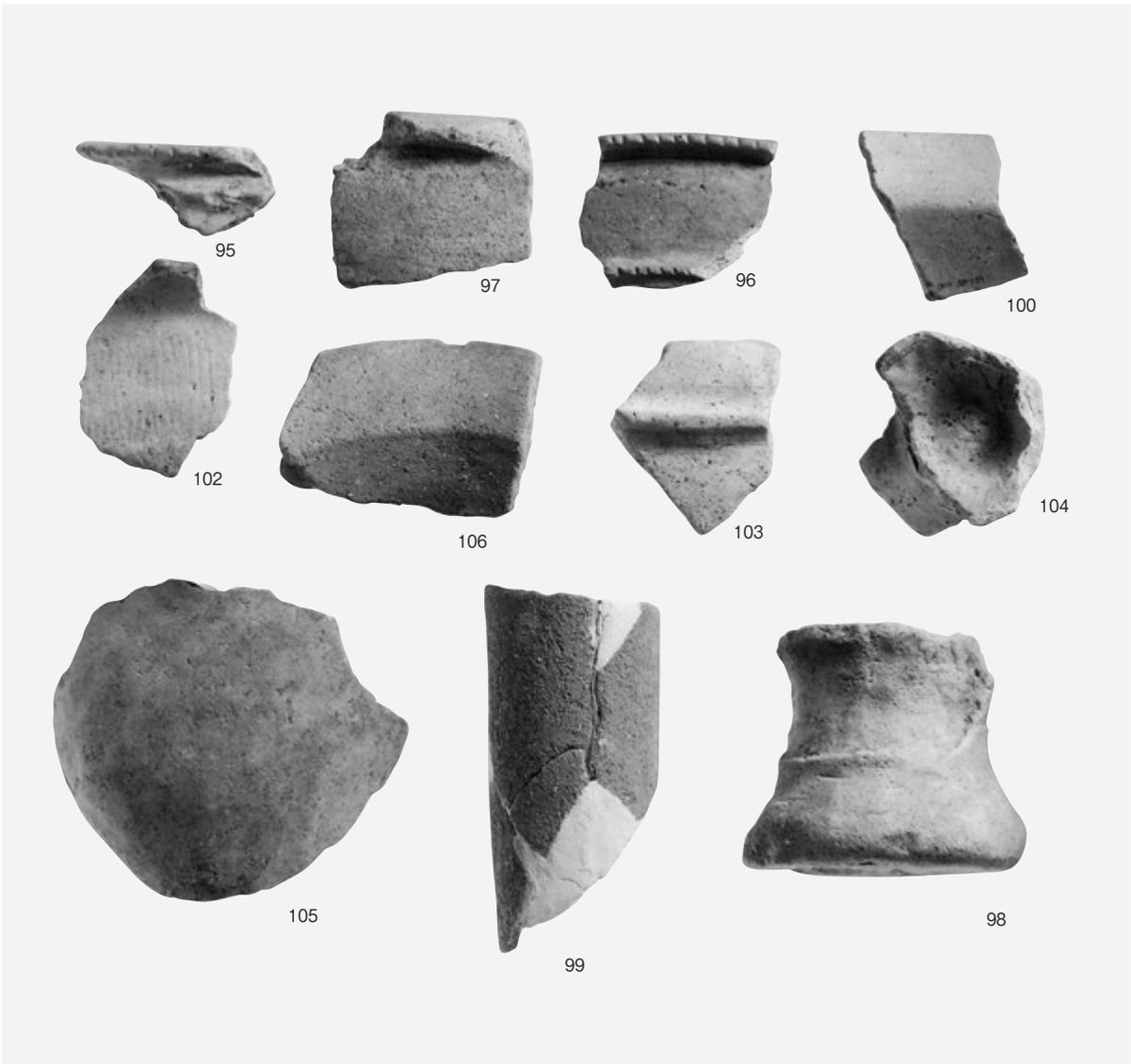
弥生時代の土器8（32号住居跡⑤）



弥生時代の土器9（35号住居跡①）

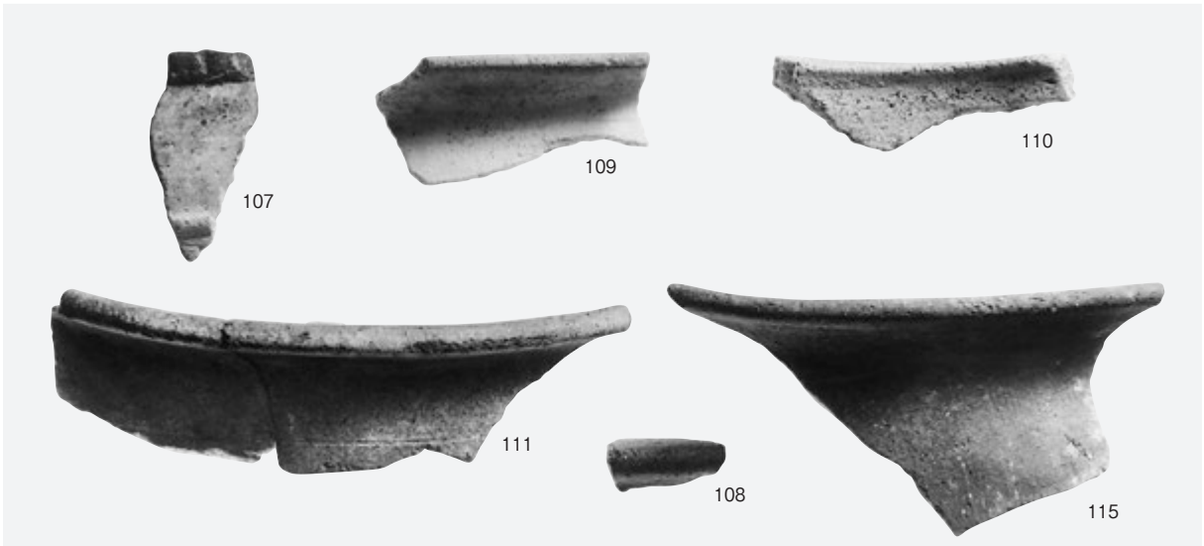


弥生時代の土器10（35号住居跡②）





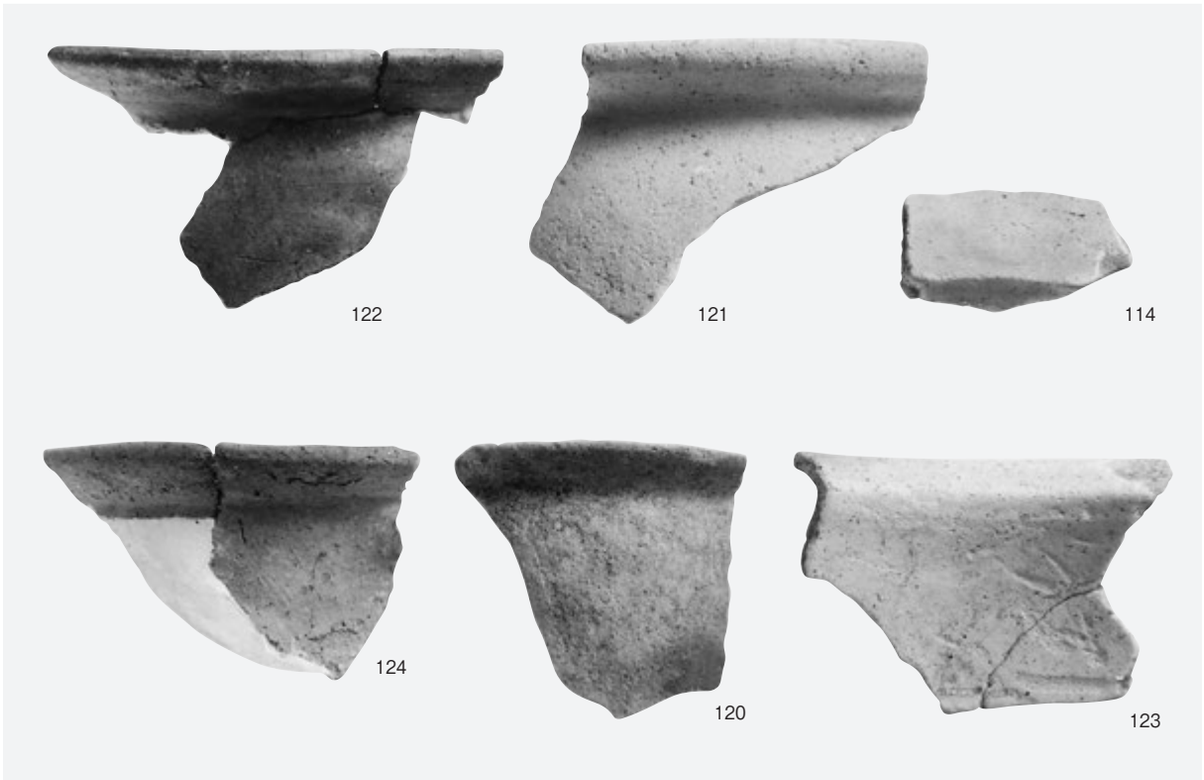
弥生時代の土器11（溝状遺構，土坑）





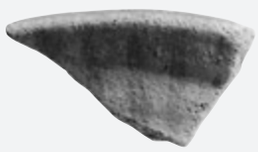


弥生時代の土器12（土器集中区①）





弥生時代の土器13（土器集中区②）



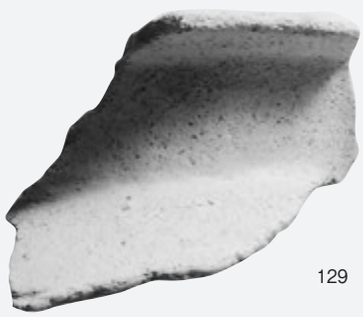
128



125



118



129

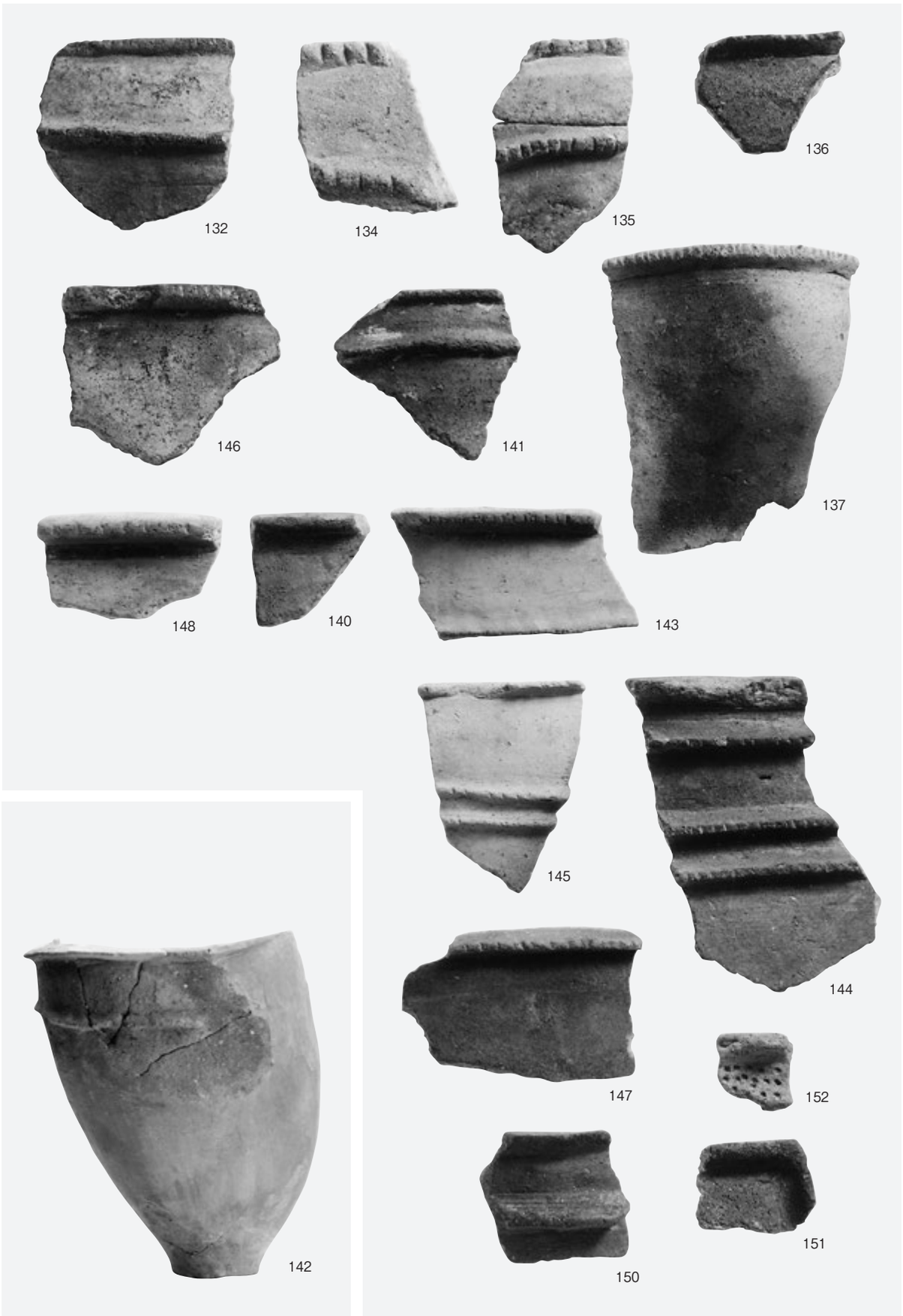


119

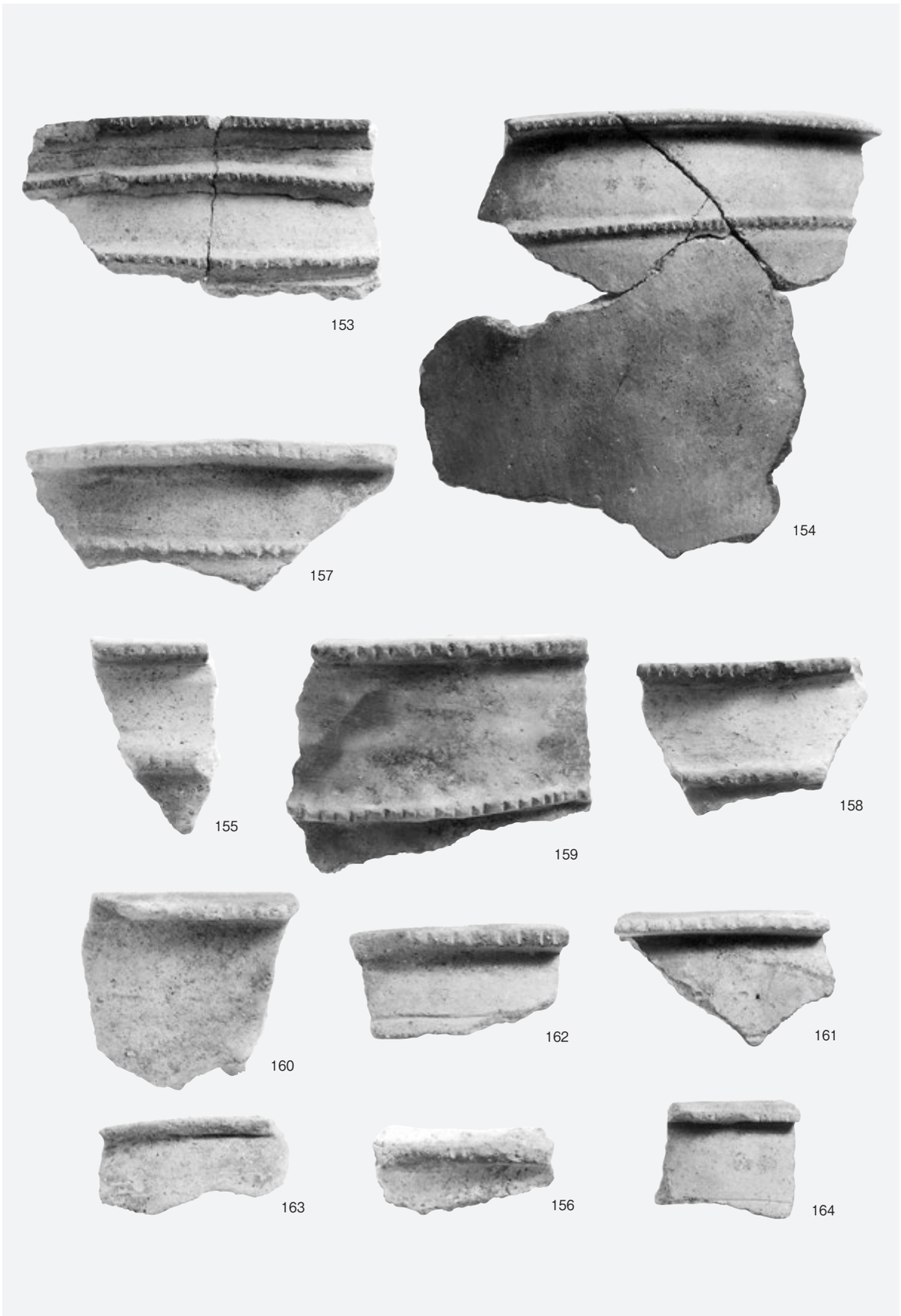


126

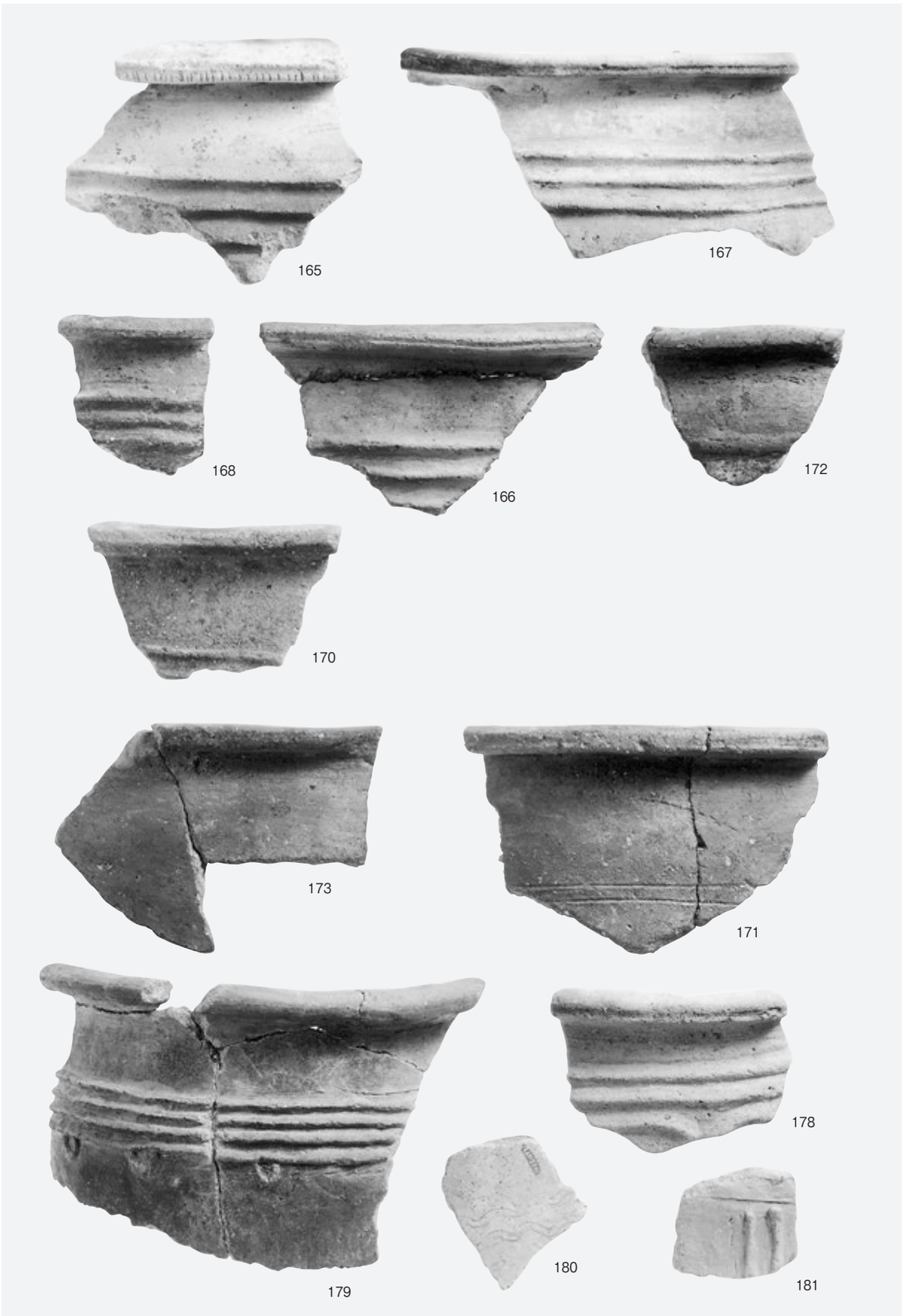
弥生時代の土器14（土器集中区③）



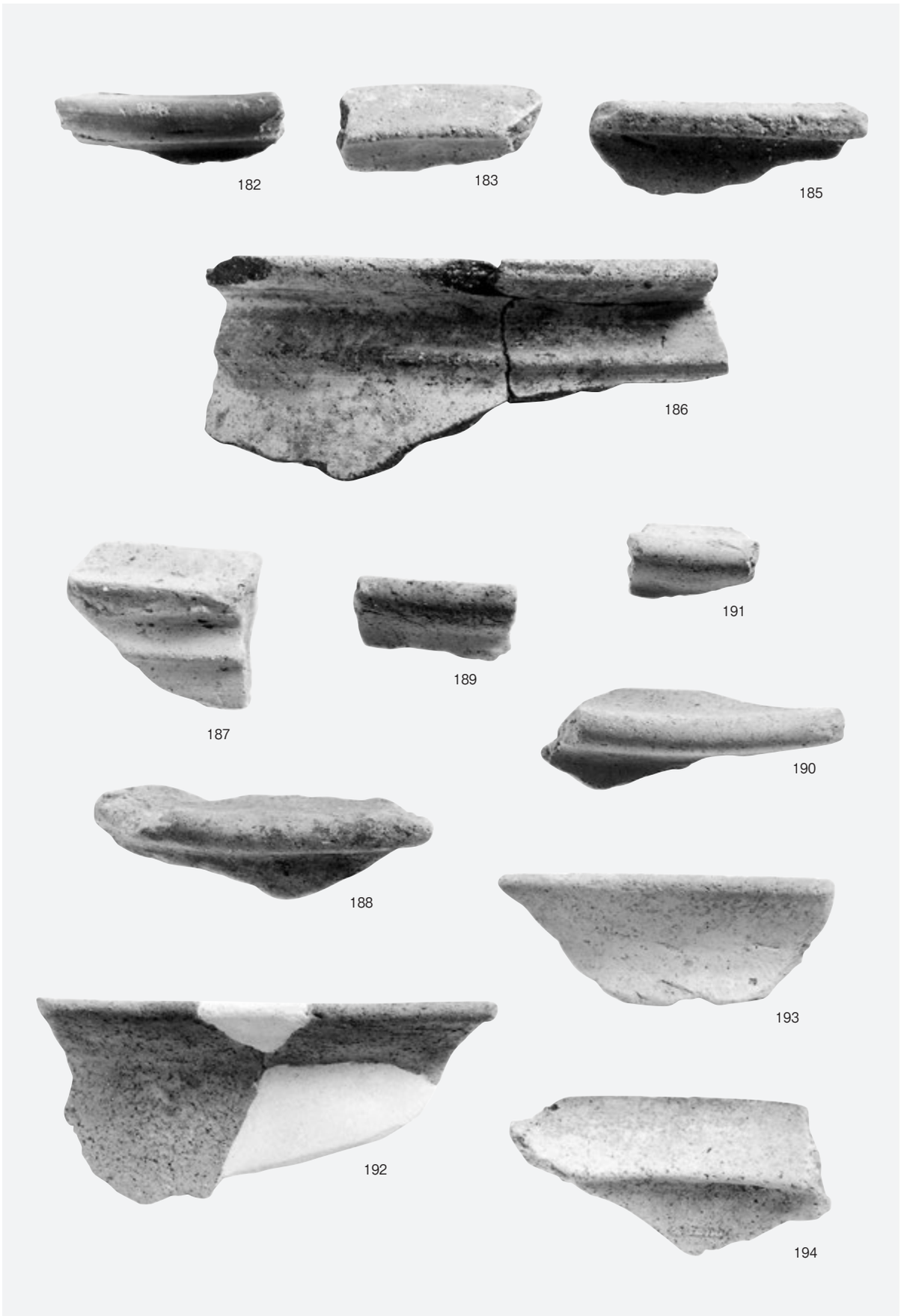
弥生時代の土器15（甕Ｉａ・Ｉｂ類）



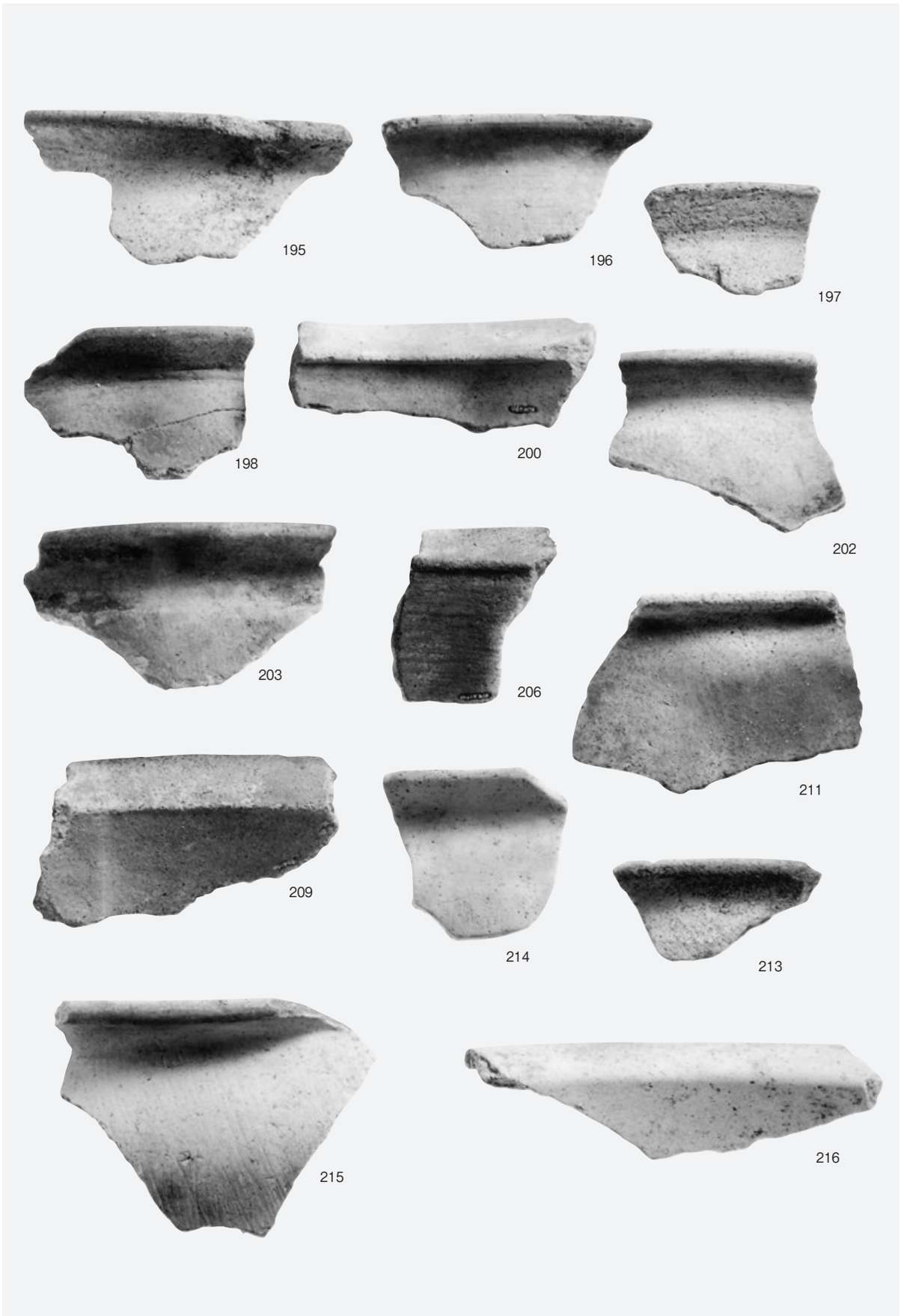
弥生時代の土器16（甕Ⅱ類）



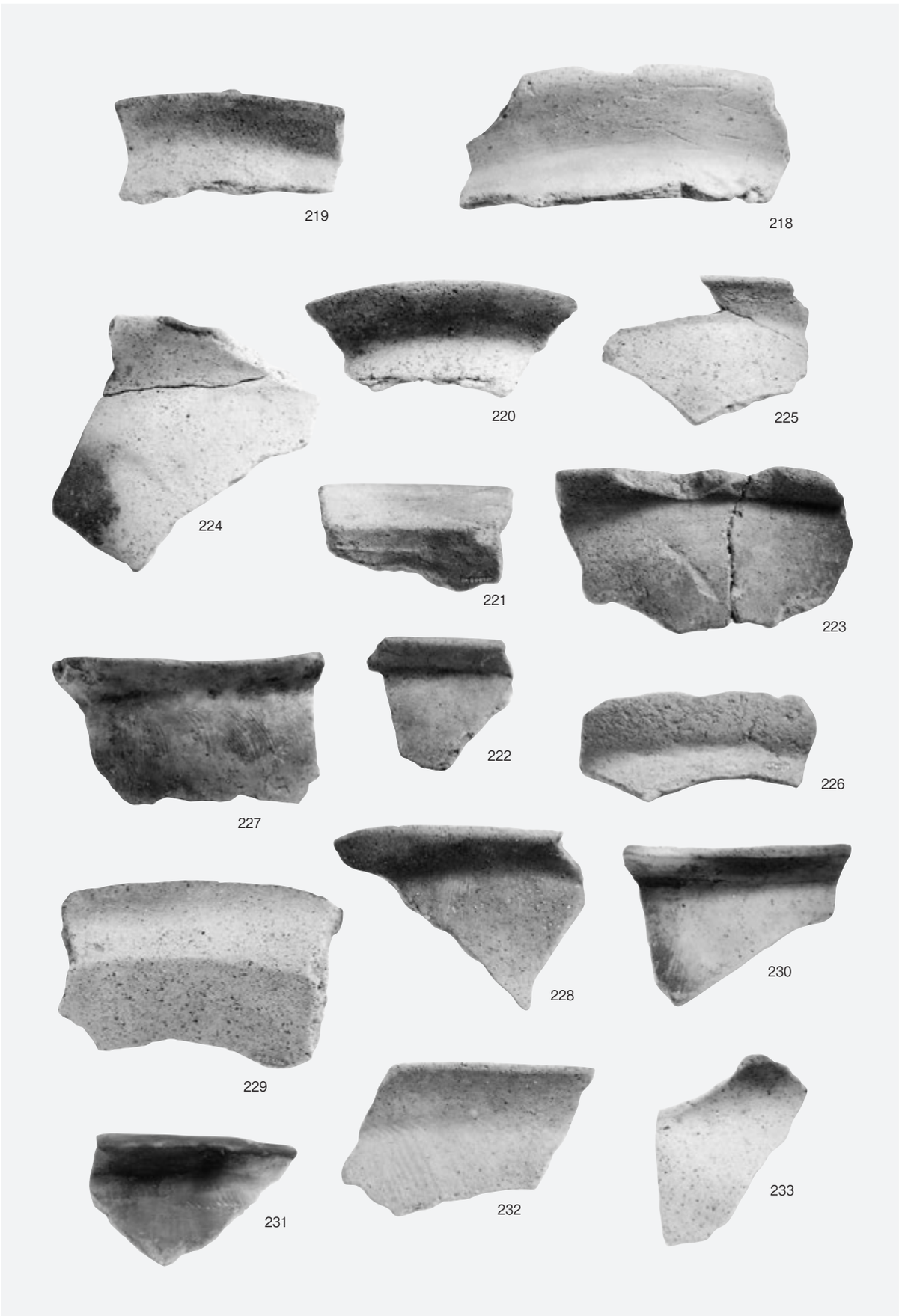
弥生時代の土器17（甕Ⅲ類）



弥生時代の土器18（甕Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類）

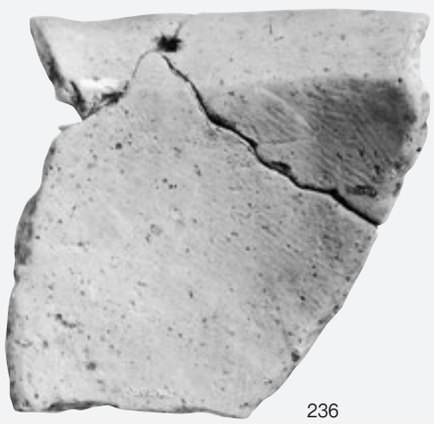


弥生時代の土器19（甕Ⅶ・Ⅷ類）



弥生時代の土器20（甕Ⅸ類）

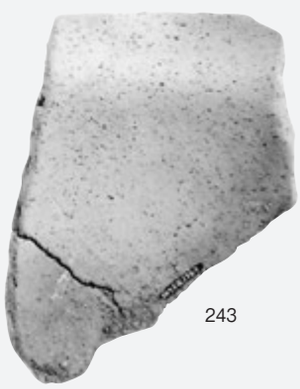

234

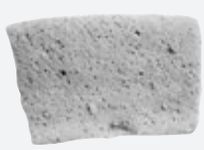

236


238


239

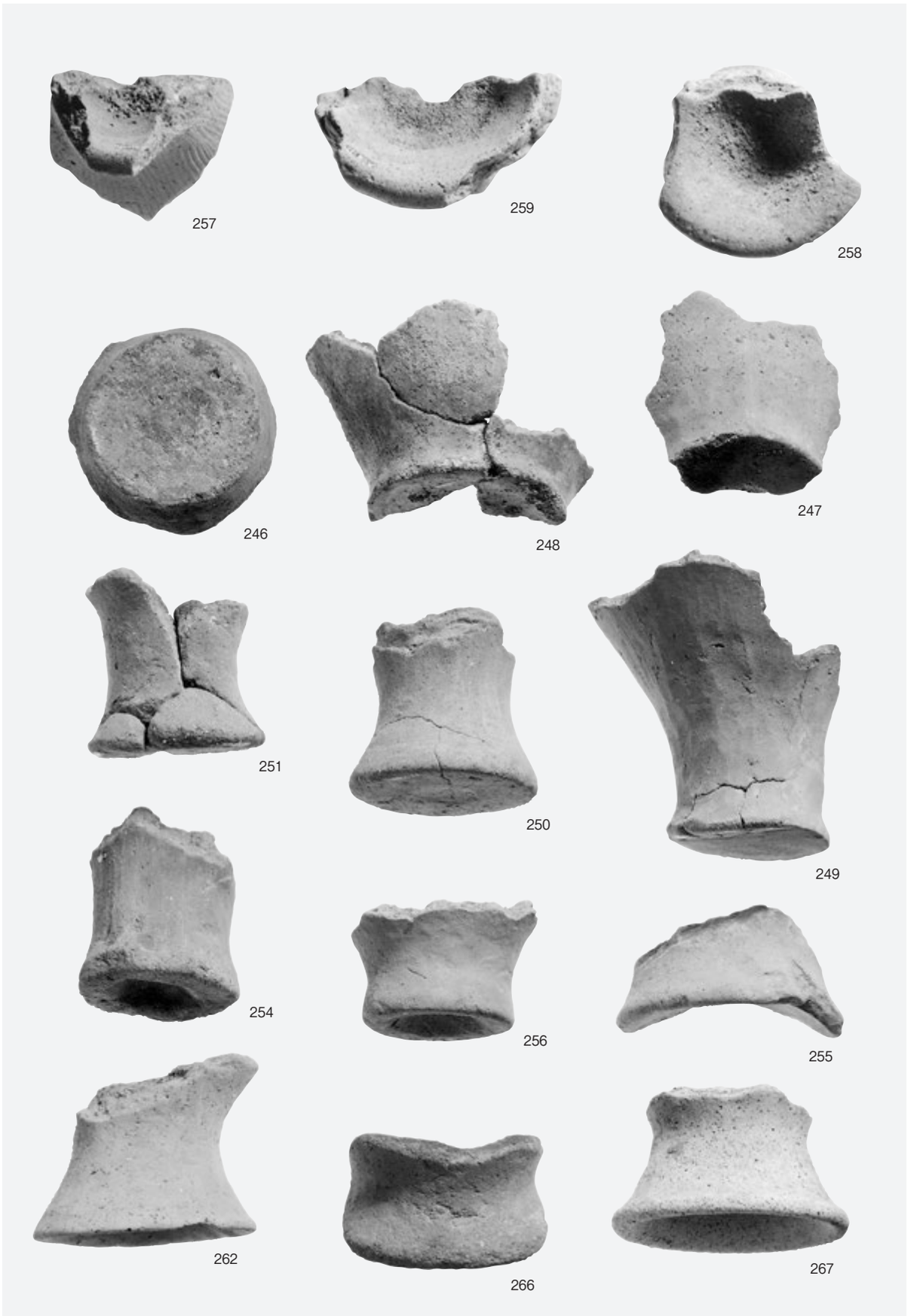

240


243


245


244

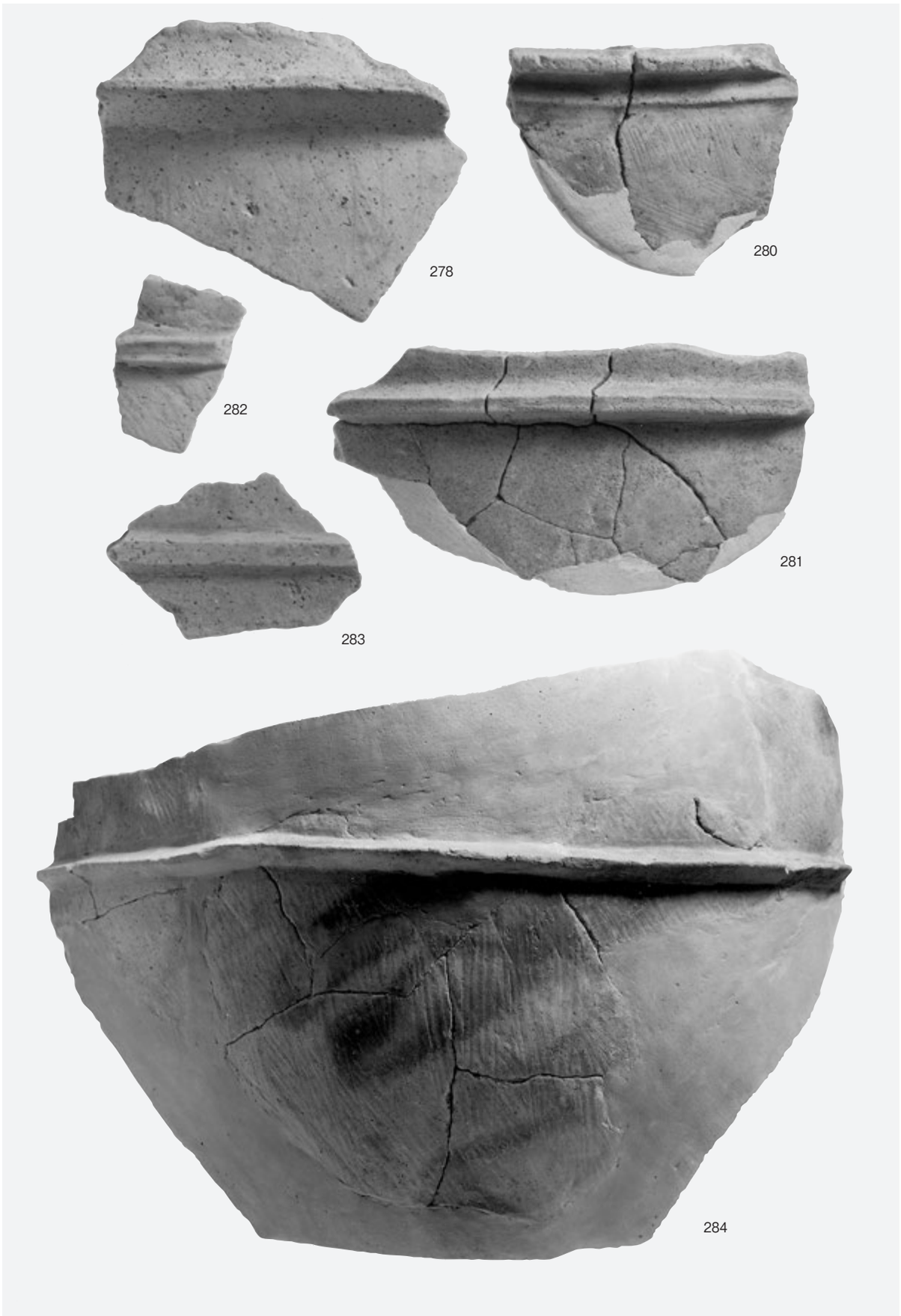
弥生時代の土器21（甕Ⅹ・Ⅺ類）



弥生時代の土器22（甕　底部）



弥生時代の土器23（大甕　口縁部）



弥生時代の土器24（大甕　胴部）

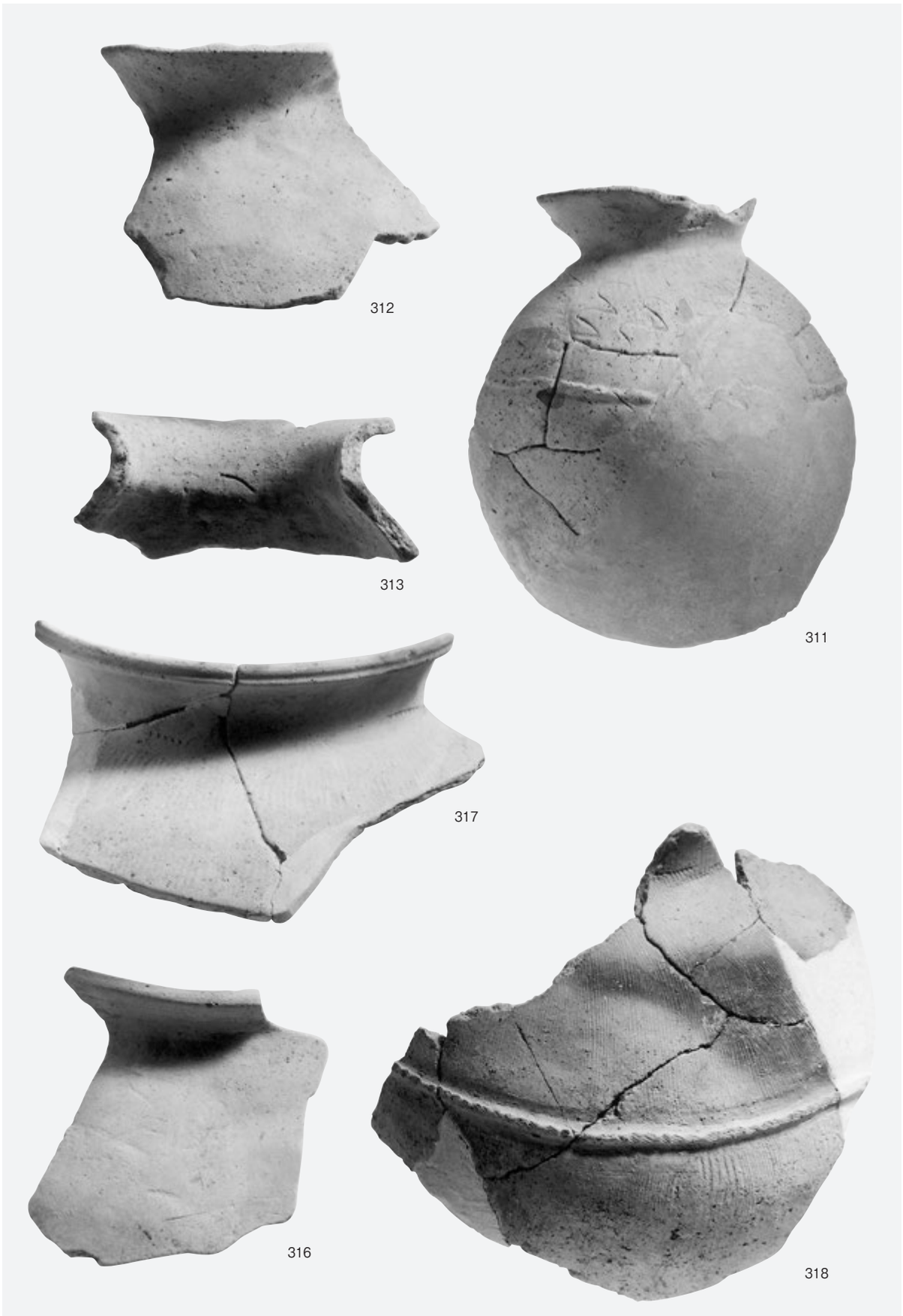


弥生時代の土器25（壺Ⅰ～Ⅶa類）

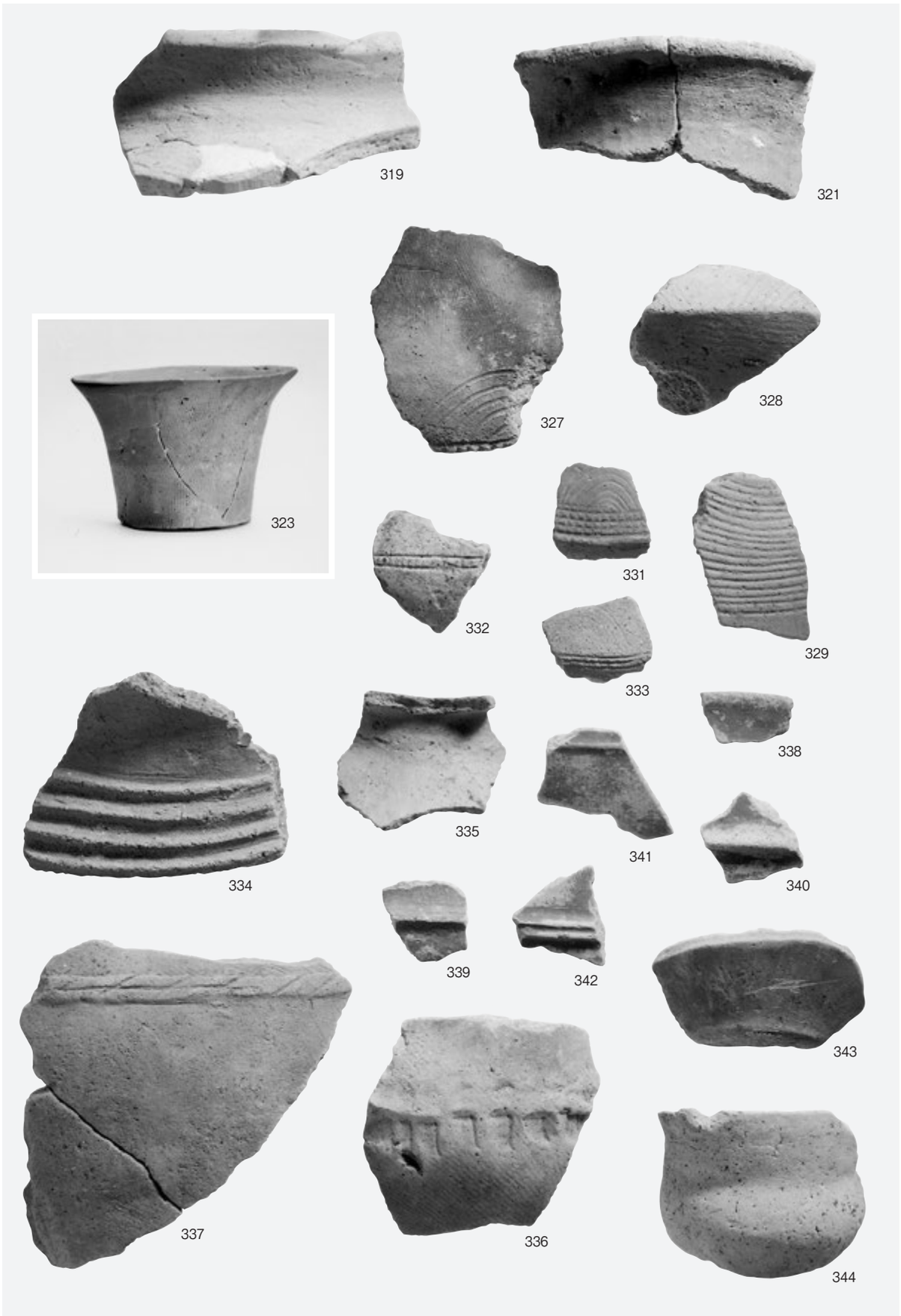




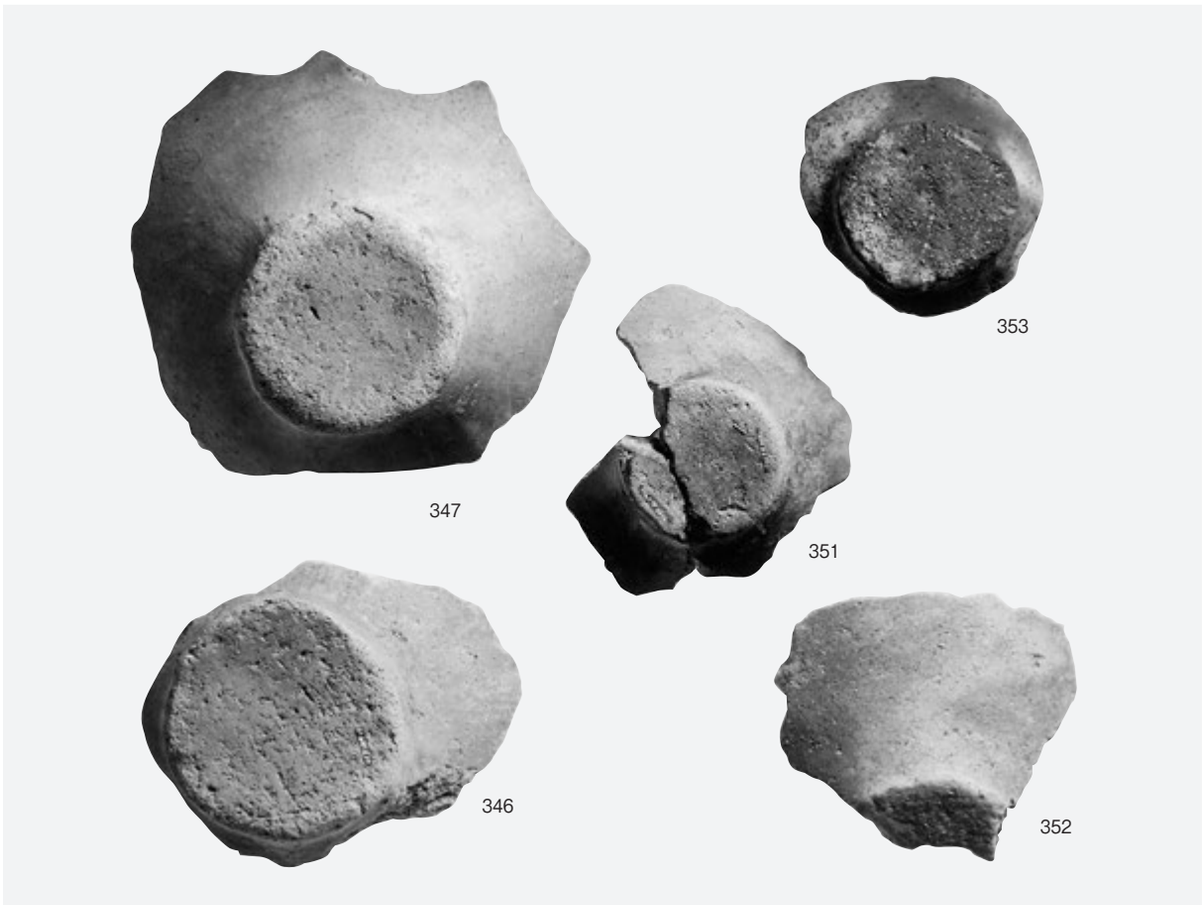
弥生時代の土器26（壺Ⅷb・Ⅸ類）



弥生時代の土器27（壺Xa）

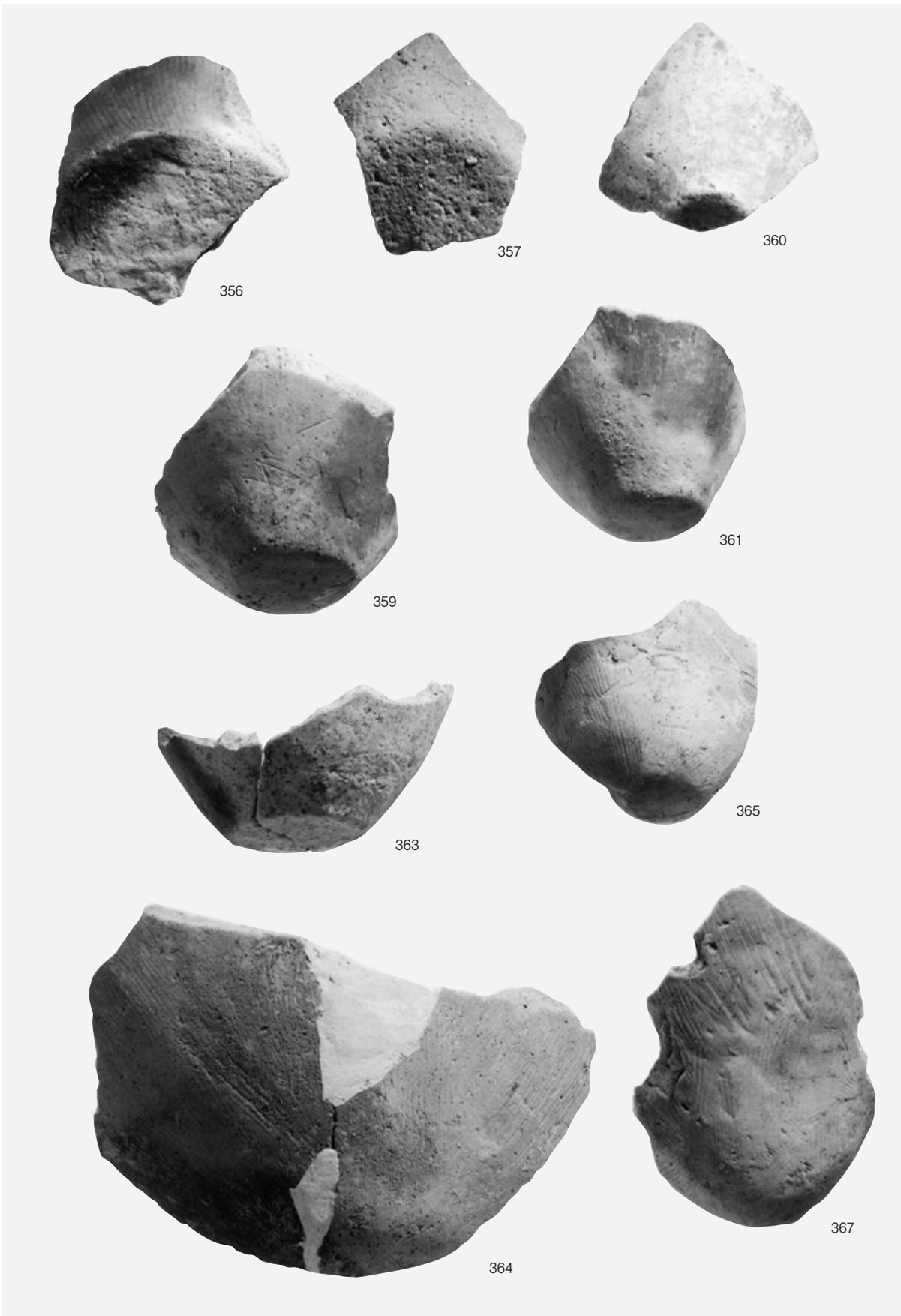


弥生時代の土器28（壺Ⅹb～Ⅻ類）

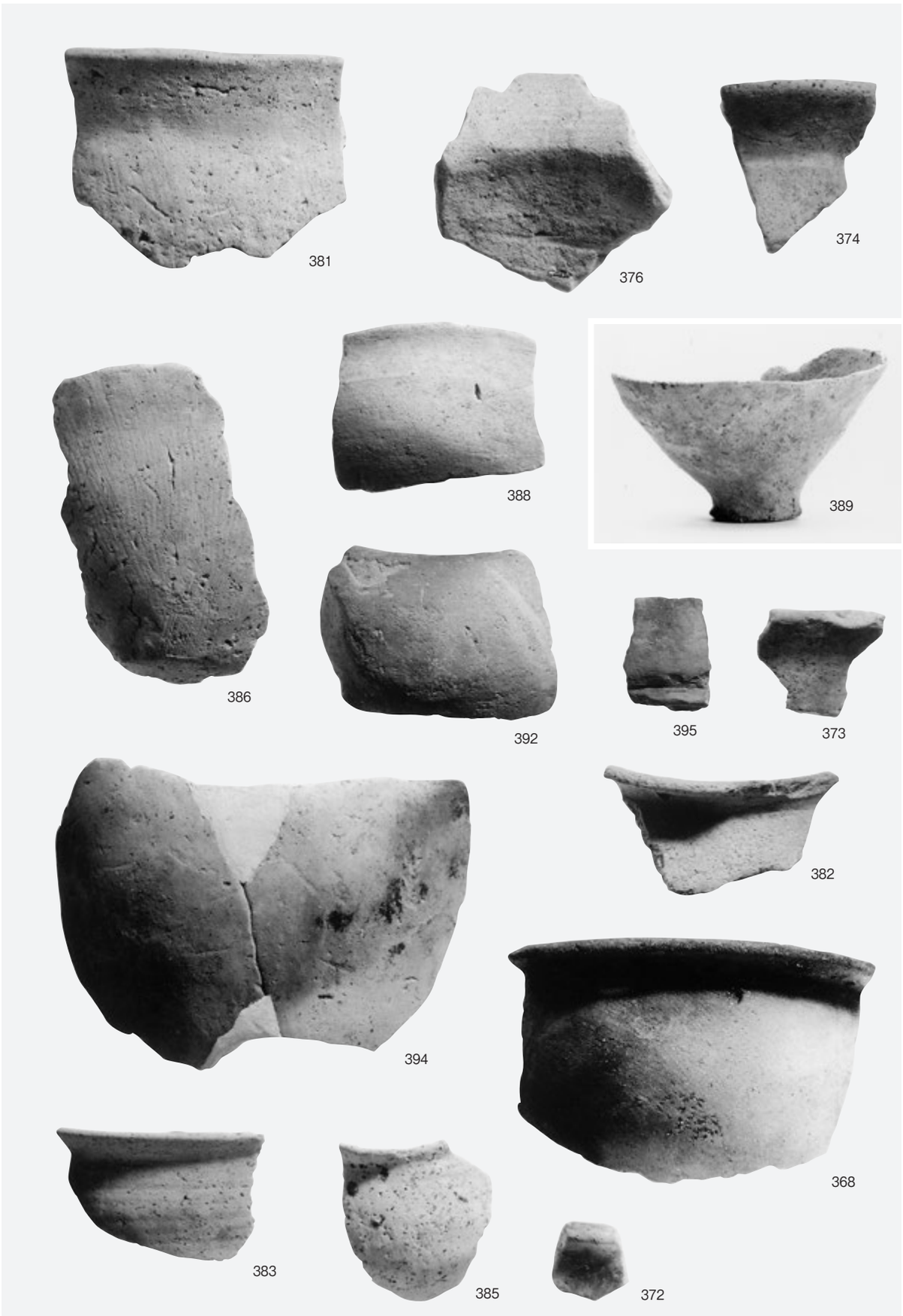




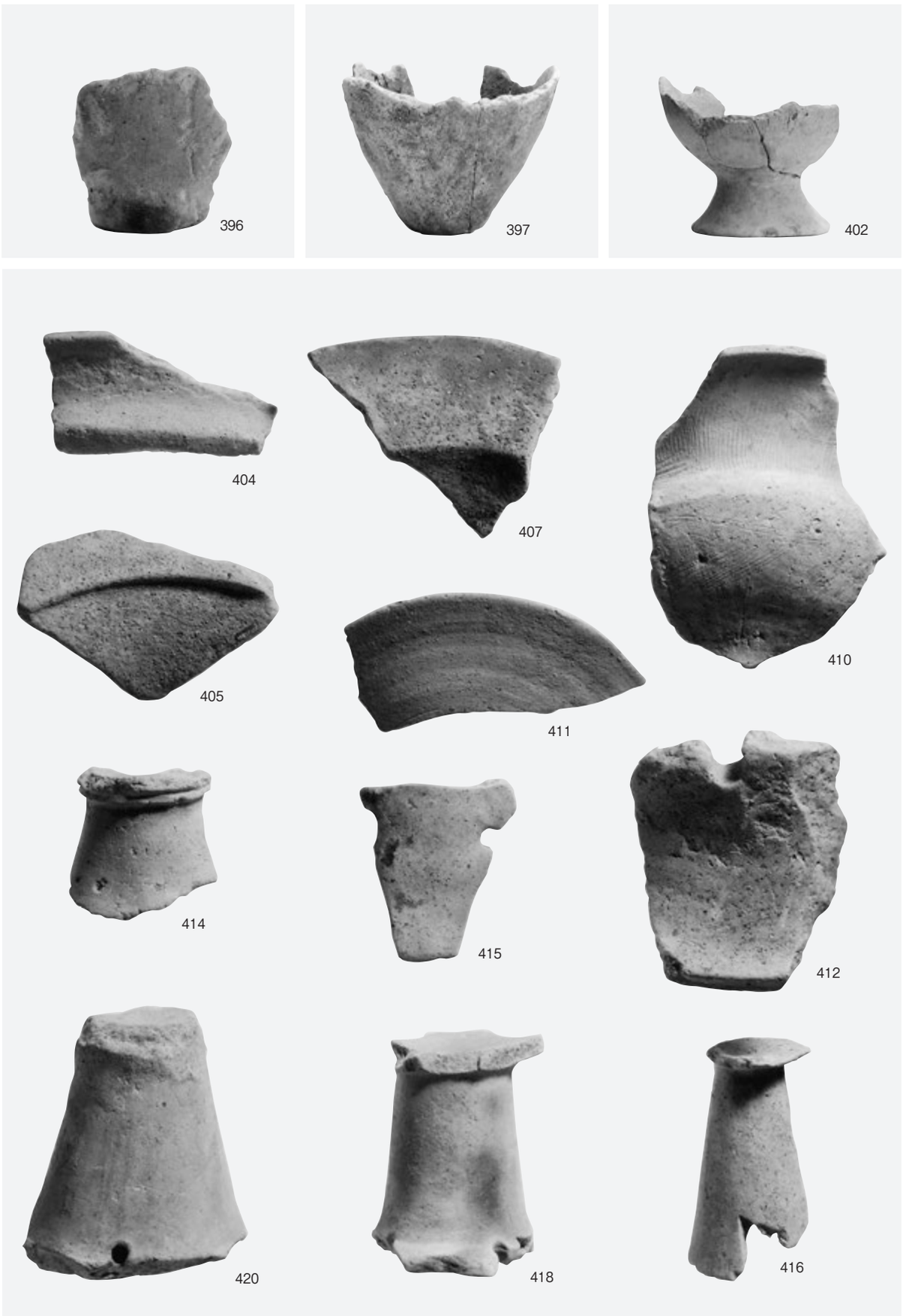
弥生時代の土器29（壺　底部①）



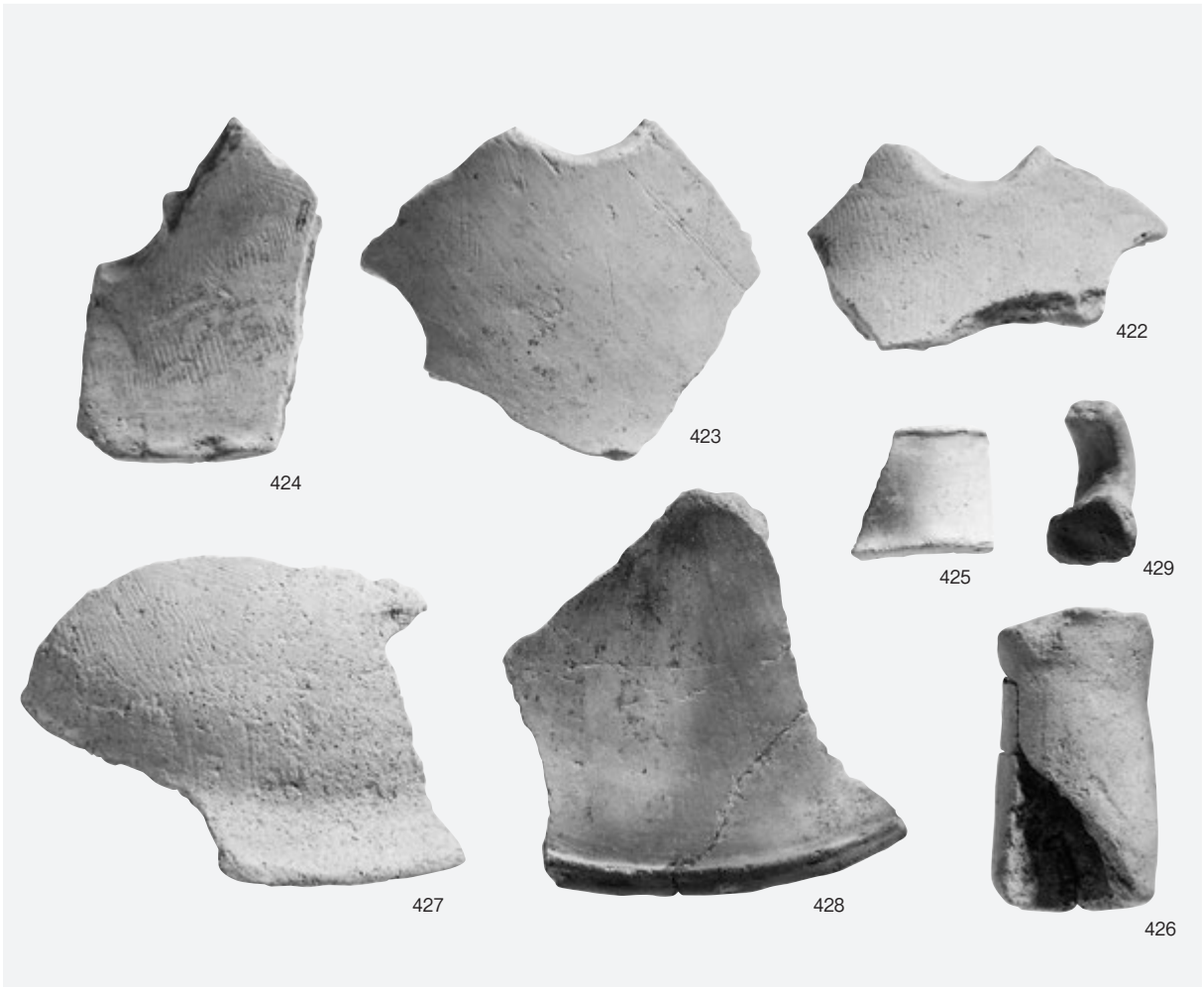
弥生時代の土器30（壺　底部②）



弥生時代の土器31（鉢　口縁部）

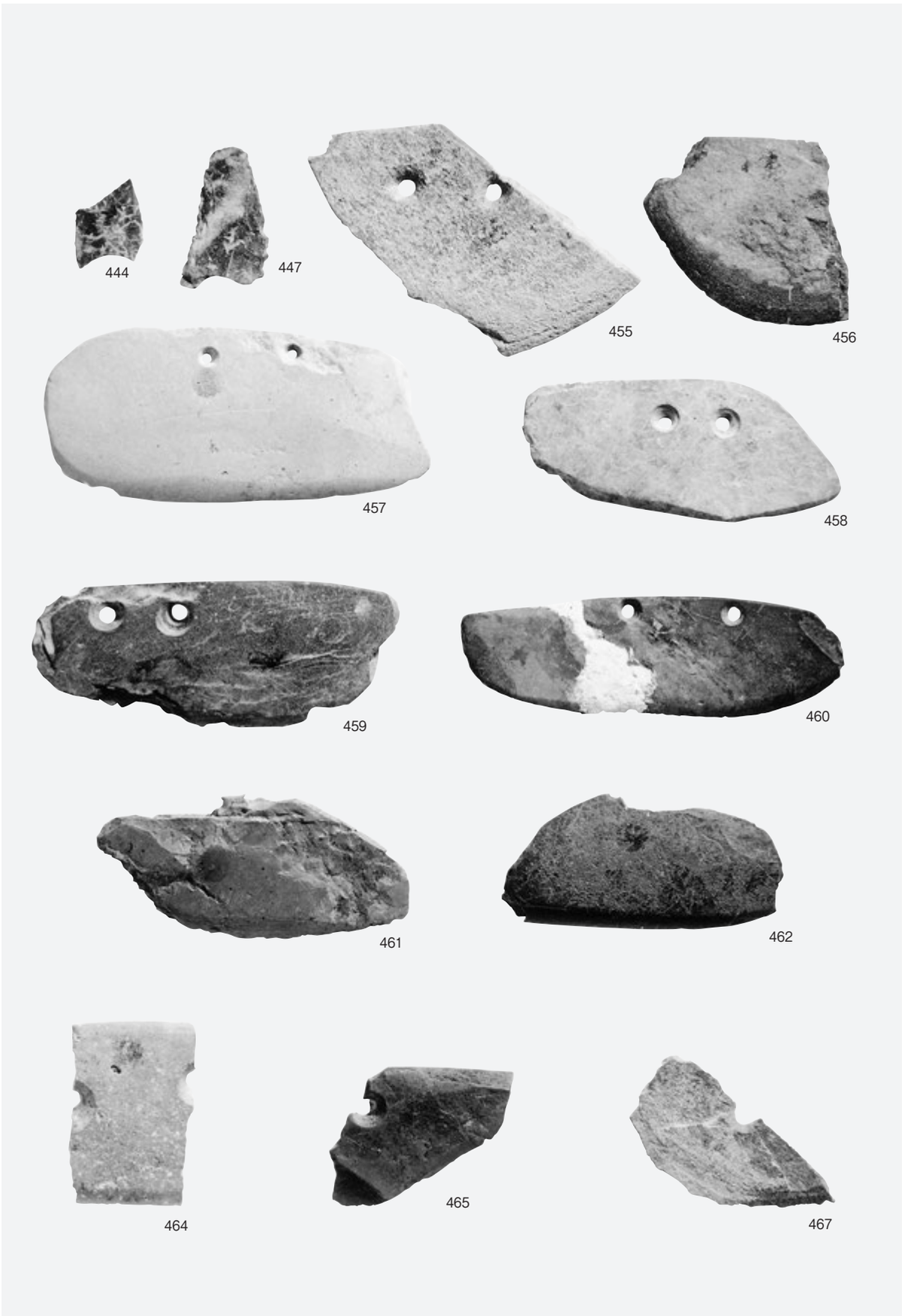


弥生時代の土器32（鉢　底部，高坏）





弥生時代の土器33（器台，蓋，小型土器）

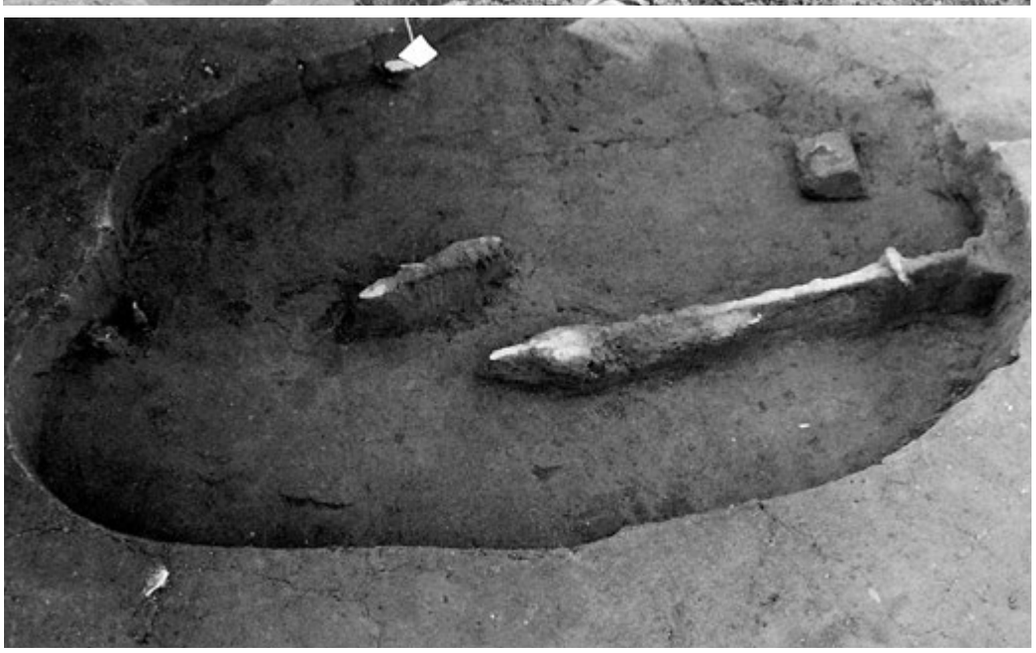


弥生時代の石器（磨製石鏃，石庖丁）

図版42



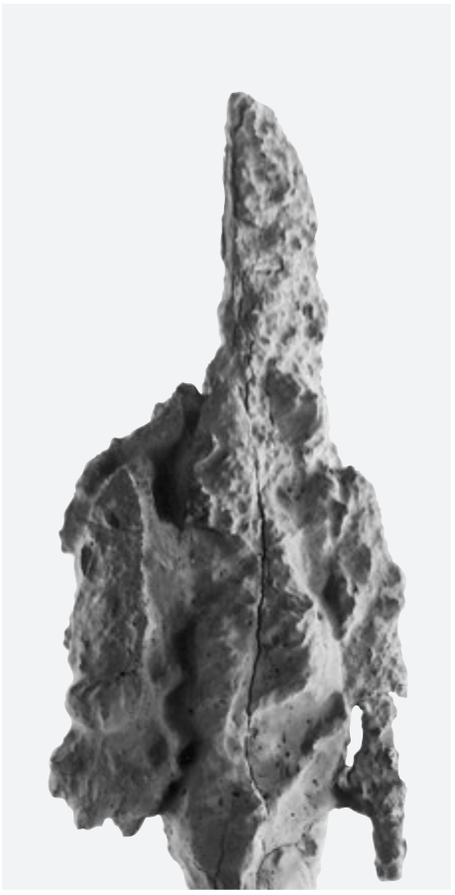
古墳時代　土坑墓1

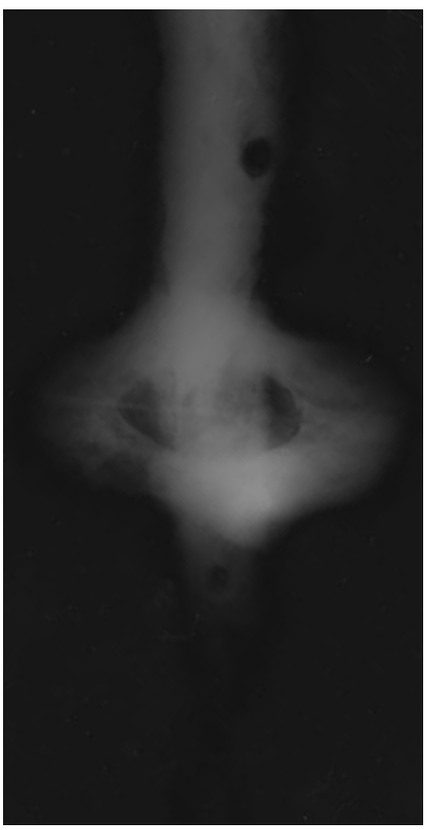


古墳時代　土坑墓1
遺物出土状況



古墳時代　土坑墓2
耳環出土状況









古墳時代の遺物1（土坑墓1の太刀・剣・鏃）


13


15


14




16


17


18


28


19


39

古墳時代の遺物2（土坑墓1，土坑墓2，土坑）



古墳時代の遺物3（剣・鏃）



古墳時代の遺物4（土師器）

図版47



K6～8区
古代調査状況



古代　5号住居跡
調査風景

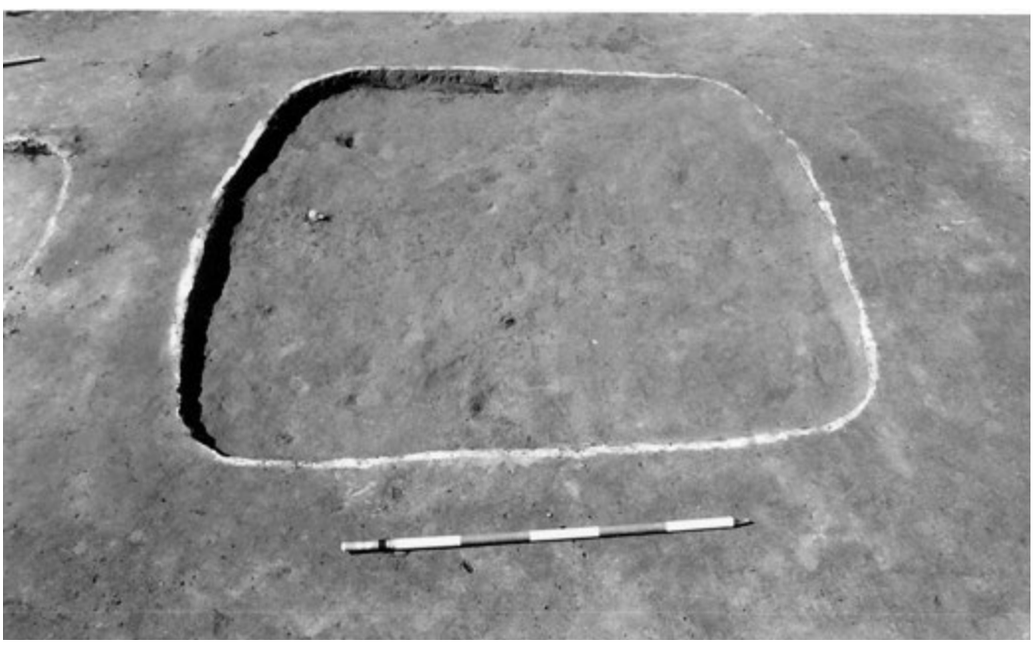


K11～12区
古代土坑調査風景

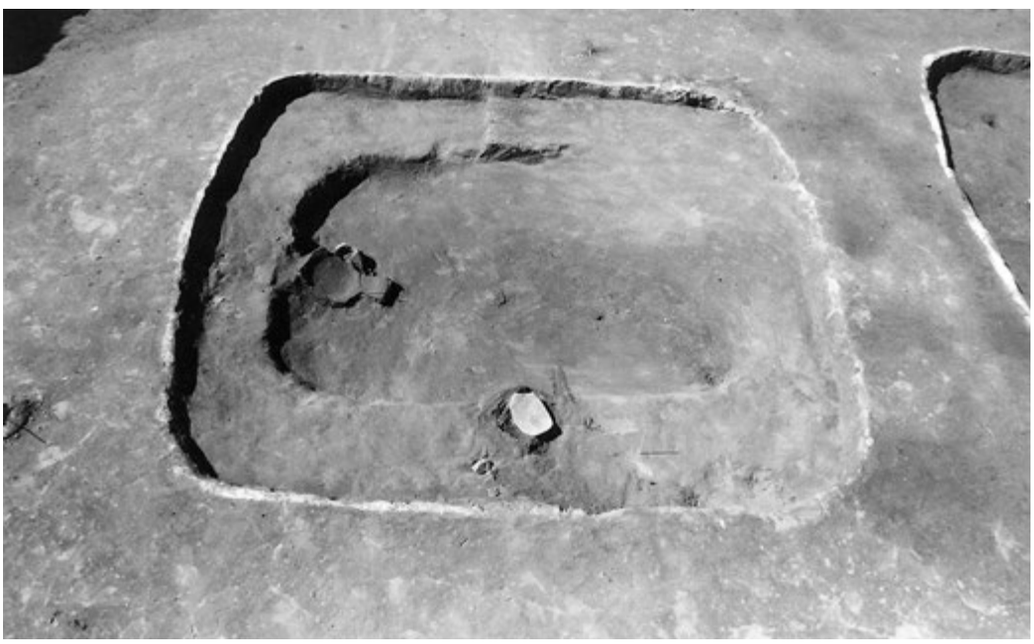
図版48



Ｋ15区　古代住居跡
検出状況

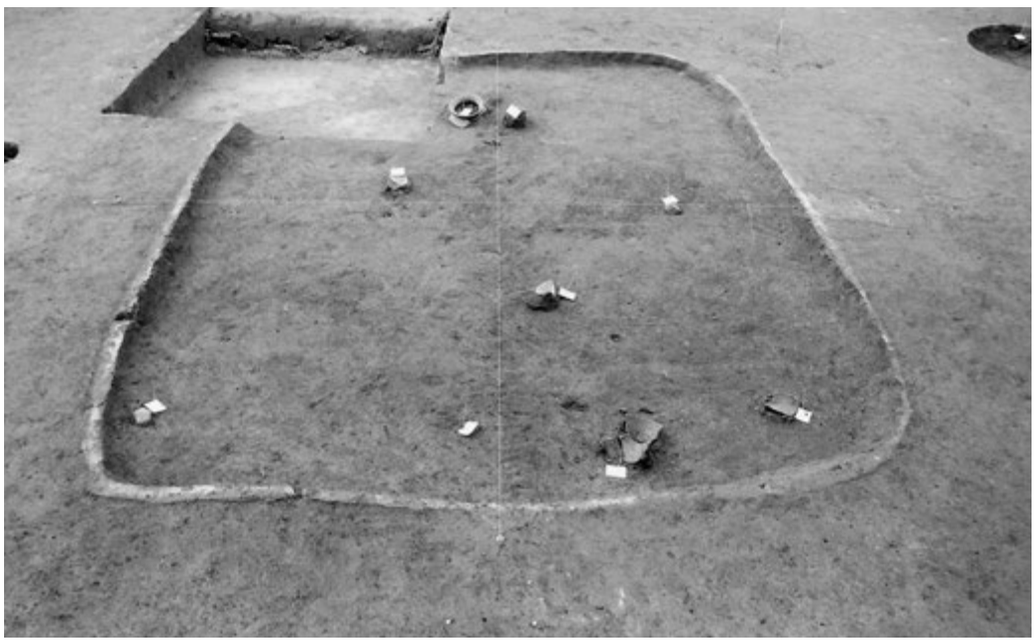


古代　1号住居跡



古代　2号住居跡

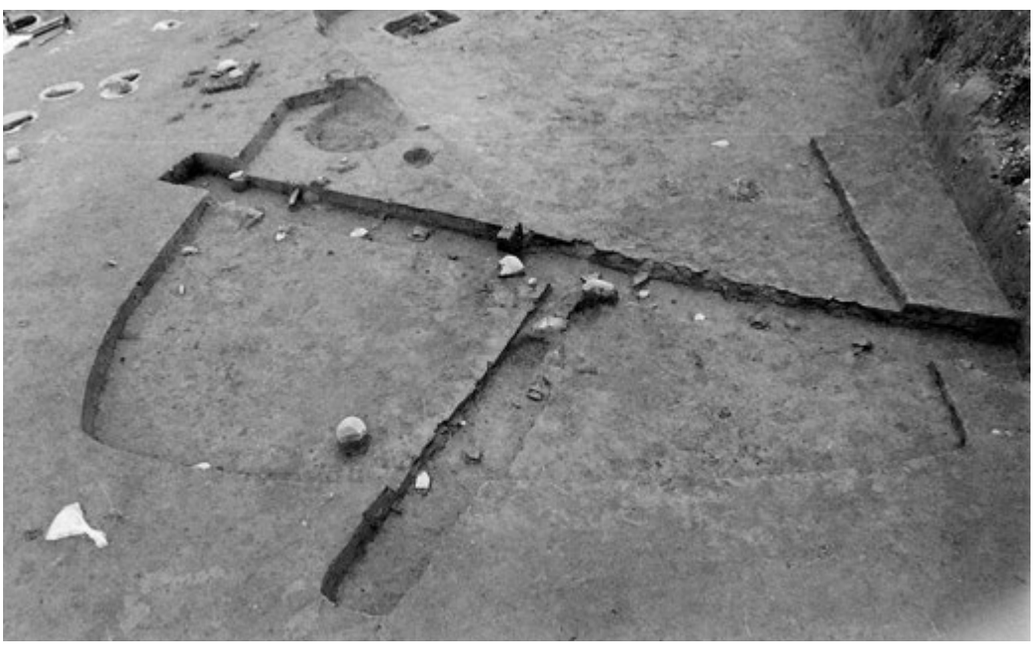
図版49



古代　3号住居跡



古代　6号住居跡

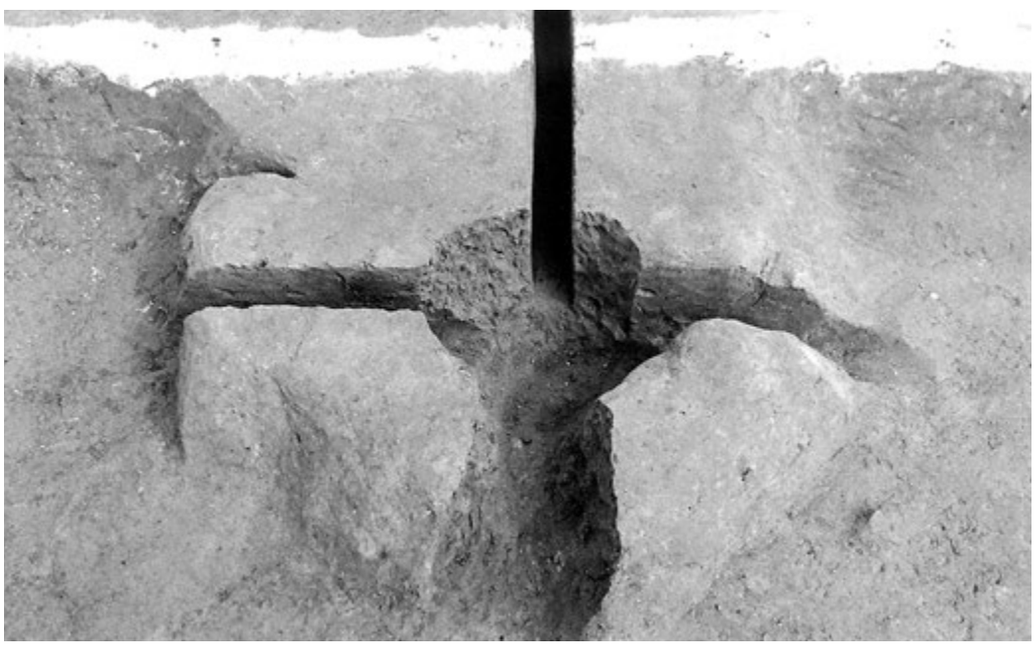


古代　10号住居跡

図版50



古代　6号，8号，10号住居跡
（奥から6号・10号
手前　8号）



古代　8号住居跡
カマド跡

図版51



古代　5号住居跡



古代　12号住居跡



古代　7号住居跡

図版52



古代　11号住居跡

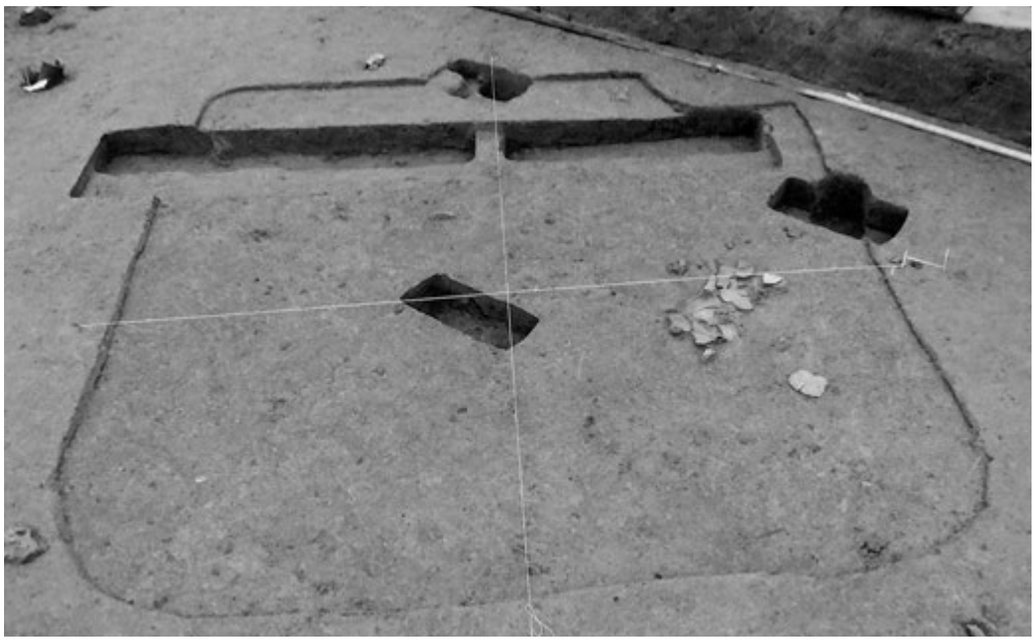


古代　11，13号住居跡



古代
7号,11号,13号,21号住居跡

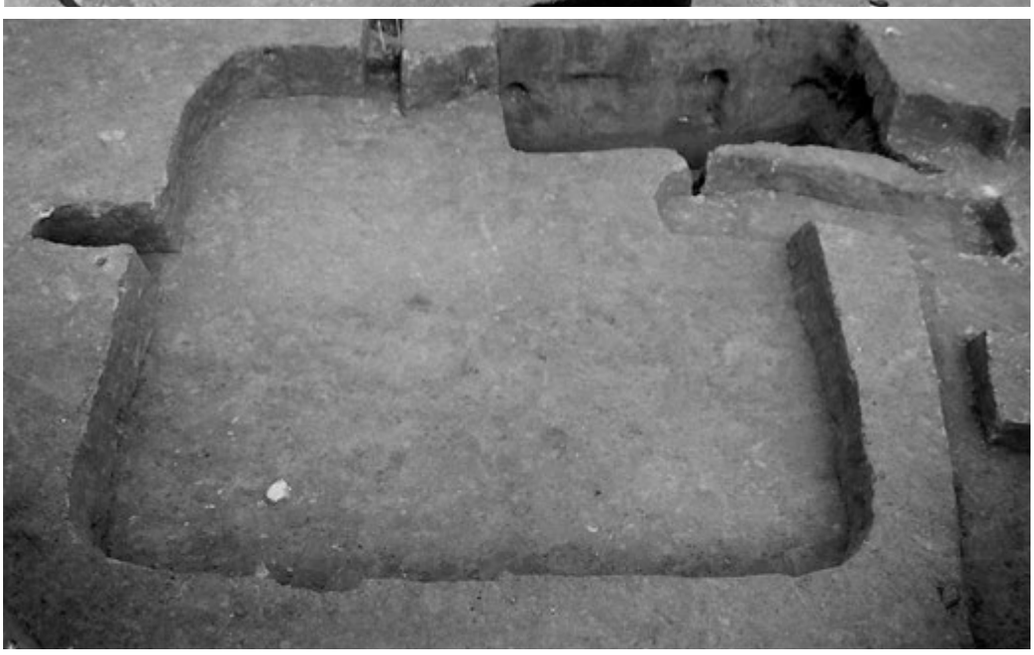
図版53



古代　31号住居跡



古代　34号住居跡



古代　29号住居跡

図版54



古代　33号住居跡



古代　33号住居跡
のカマド

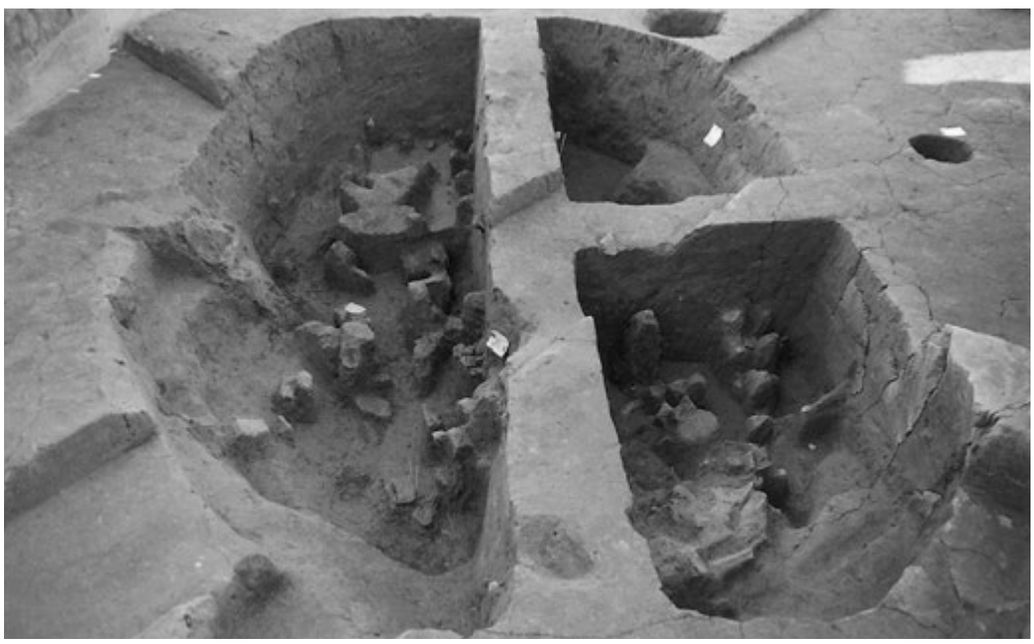


古代　37号住居跡

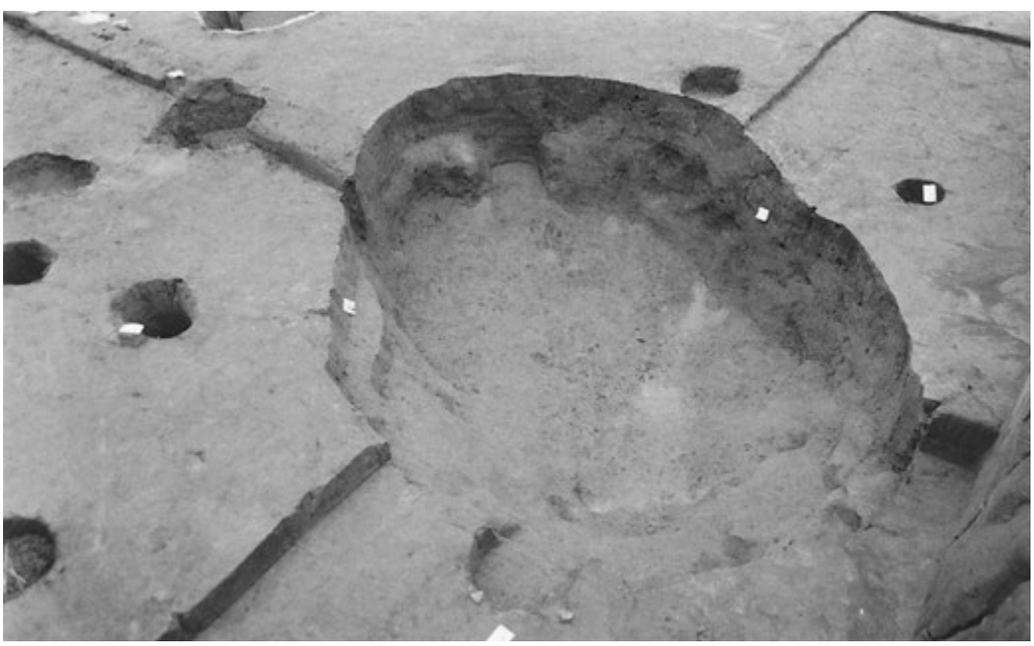
図版55



古代　掘立柱建物跡



古代
大型竪穴状遺構
調査状況



古代
大型竪穴状遺構
完掘状況

図版56



K9区
古代　土師器集積土坑



K9.5区　古代　土坑1



K9.5区　古代　土坑2

図版57



K10区
古代　土坑5検出状況



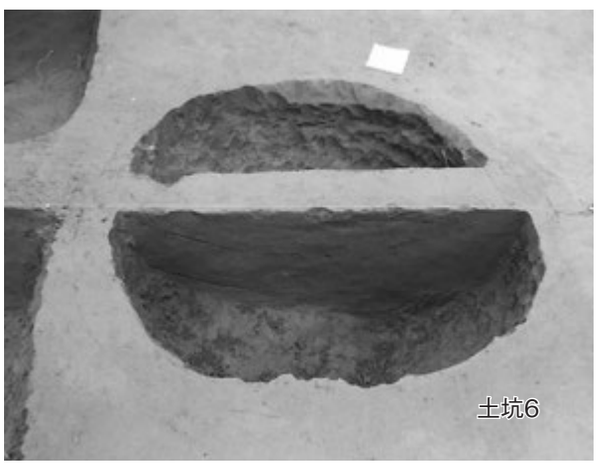
K12区
古代　土坑検出状況



K11～12区
古代　土坑検出状況



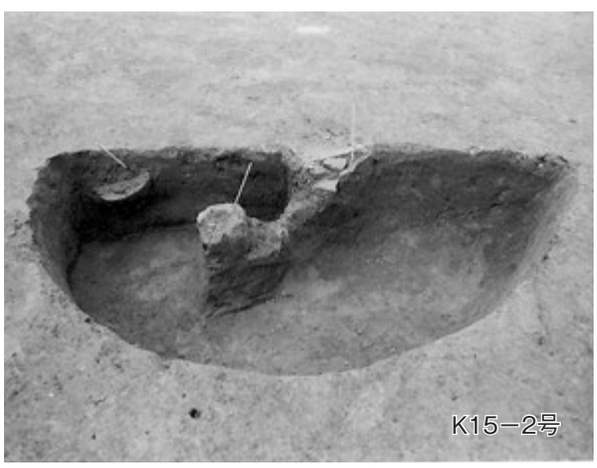














K11～12区，K15区　古代　土坑検出状況

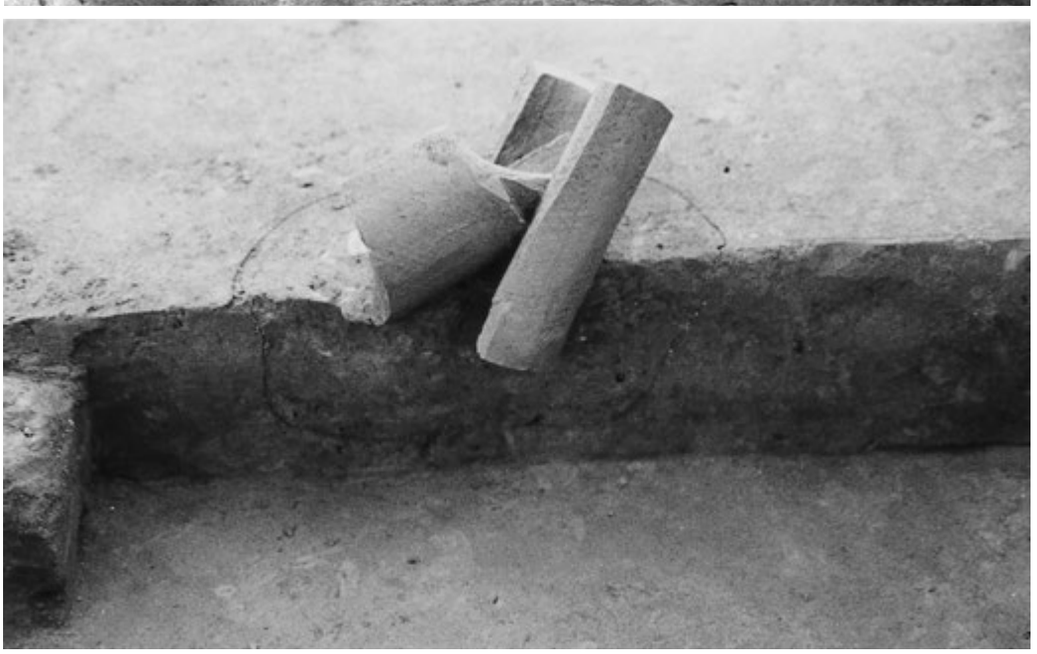
図版59



K6～8区
古代　土坑2



K6～8区
古代　土坑3



K6～8区
古代　土坑10



K16区
古代　溝状遺構



K14区
古代　溝状遺構



K12区
古代　溝状遺構

図版61



古代
焼土1検出状況



古代
焼土2検出状況



古代
焼土2調査状況

図版62



古代3号住居跡　須恵器



K10区　古代の土師器



K9区　古代の土師器



古代　風字二面硯
出土状況



古代1号，2号，3号，6号住居跡の出土遺物


75


80


83


84


86


91


95


96

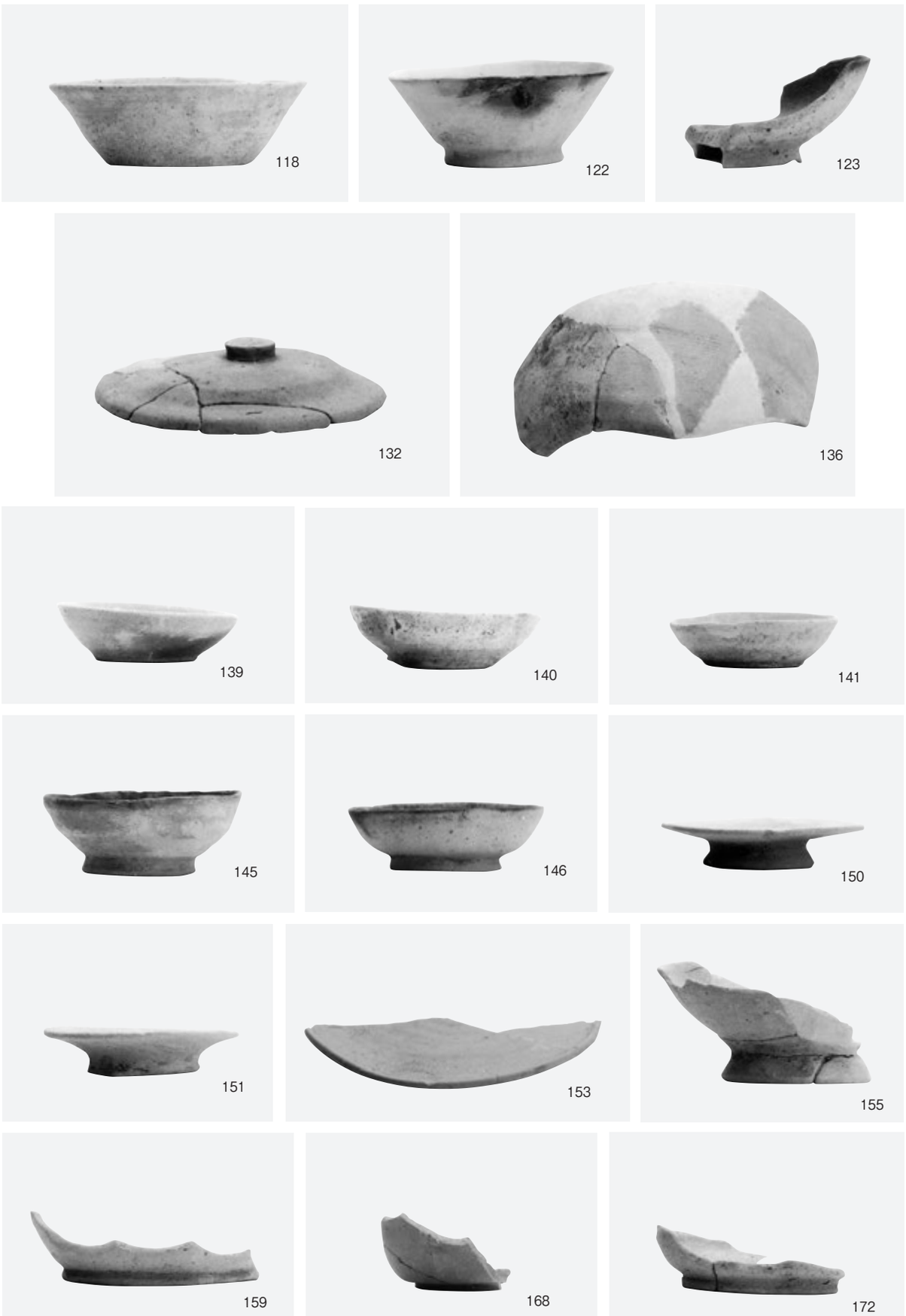

81


98


117


106

古代　6号住居跡の出土遺物



古代10号，8号，5号，12号，11号，7号住居跡の出土遺物


182


196


204

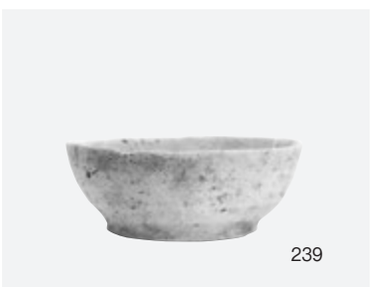

206


227


228


232


234


239


242


254


257


218

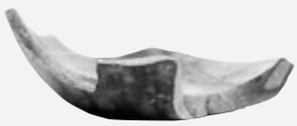

230


266

古代21号．13号，31号，34号，24号，25号住居跡と大型竪穴状遺構の出土遺物


275


282


283


286


287


288


289


290

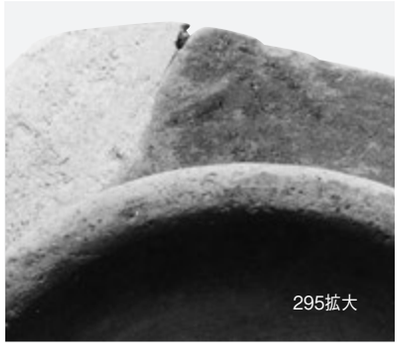

291


292


293


294


295


295拡大


296

古代　大型竪穴状遺構と土師器集積土坑の出土遺物


297


302


303


305


311


318


331


309




317


329


340

K9～10区，K1～6区，K6～8区，K11～12区　古代土坑出土遺物


362


363


366


372


373


374


382


383


384

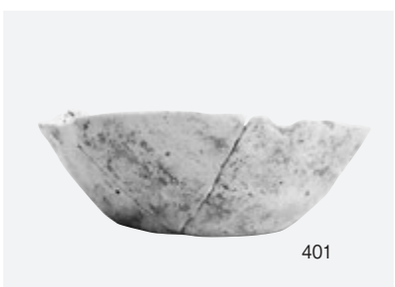

385


387


389


391

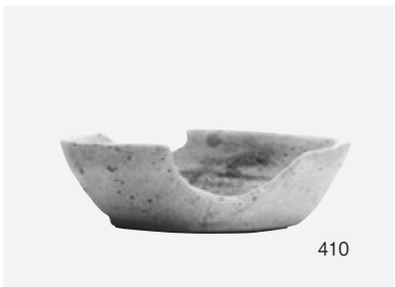

393


401


405

古代の土師器1（坏1類～5類）


408


410


411

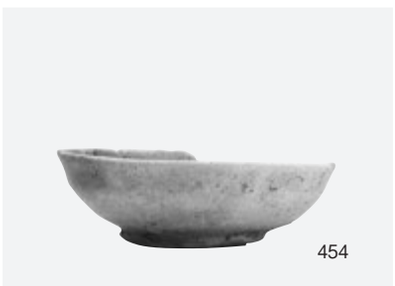

425


427


429


443


451


454


456


462


464

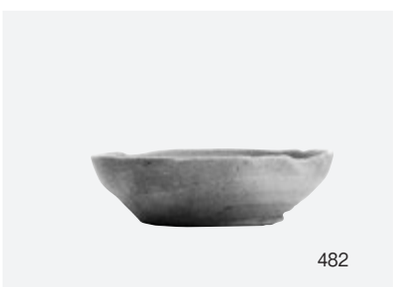

465


466


469


471


474


482

古代の土師器2（坏5類～9類）


484


486


493


496


498

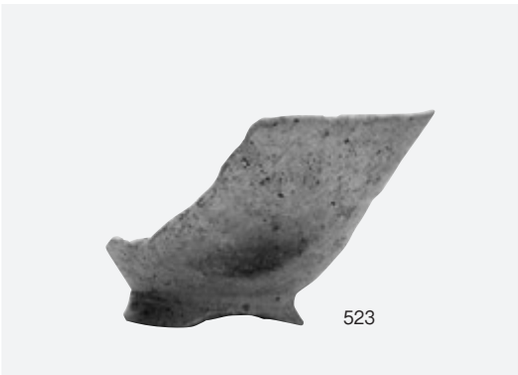

499


500


501


502


522


523


526


527

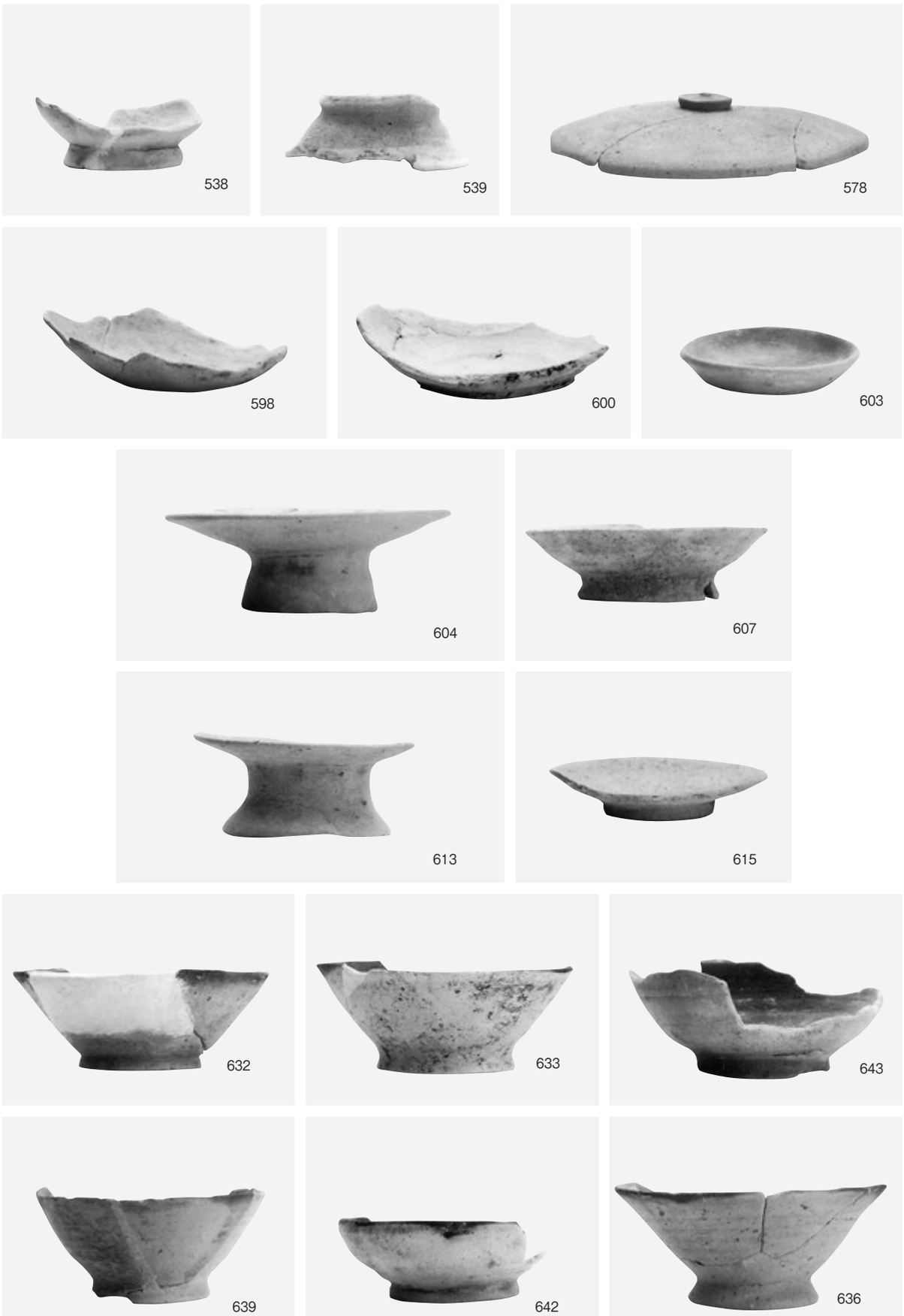

528


531


532


534

古代の土師器3（坏10類～11類と碗1類～4類）



古代の土師器4（高台埦・蓋・皿・高台付皿・内黒土師器）


692


694


711


713


761


763


850


852


861


863

古代の土師器5（内朱埦・甕・鉢・須恵器蓋）


869


875


890

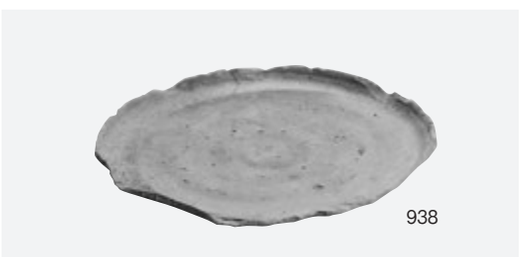

877

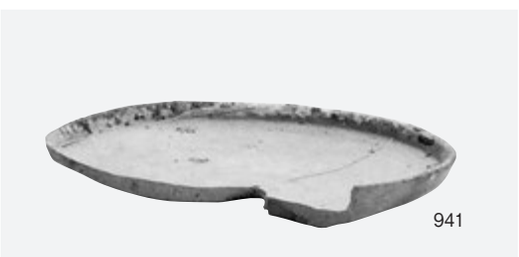
古代の須恵器1（ヘラ描き蓋・皿・甕・鉢）

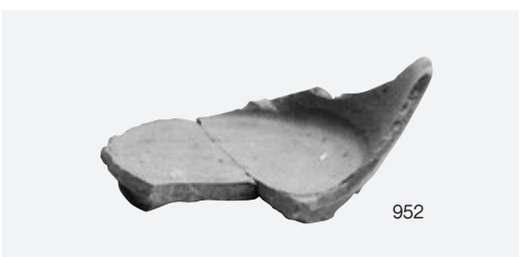

901


909


923


938


941


952

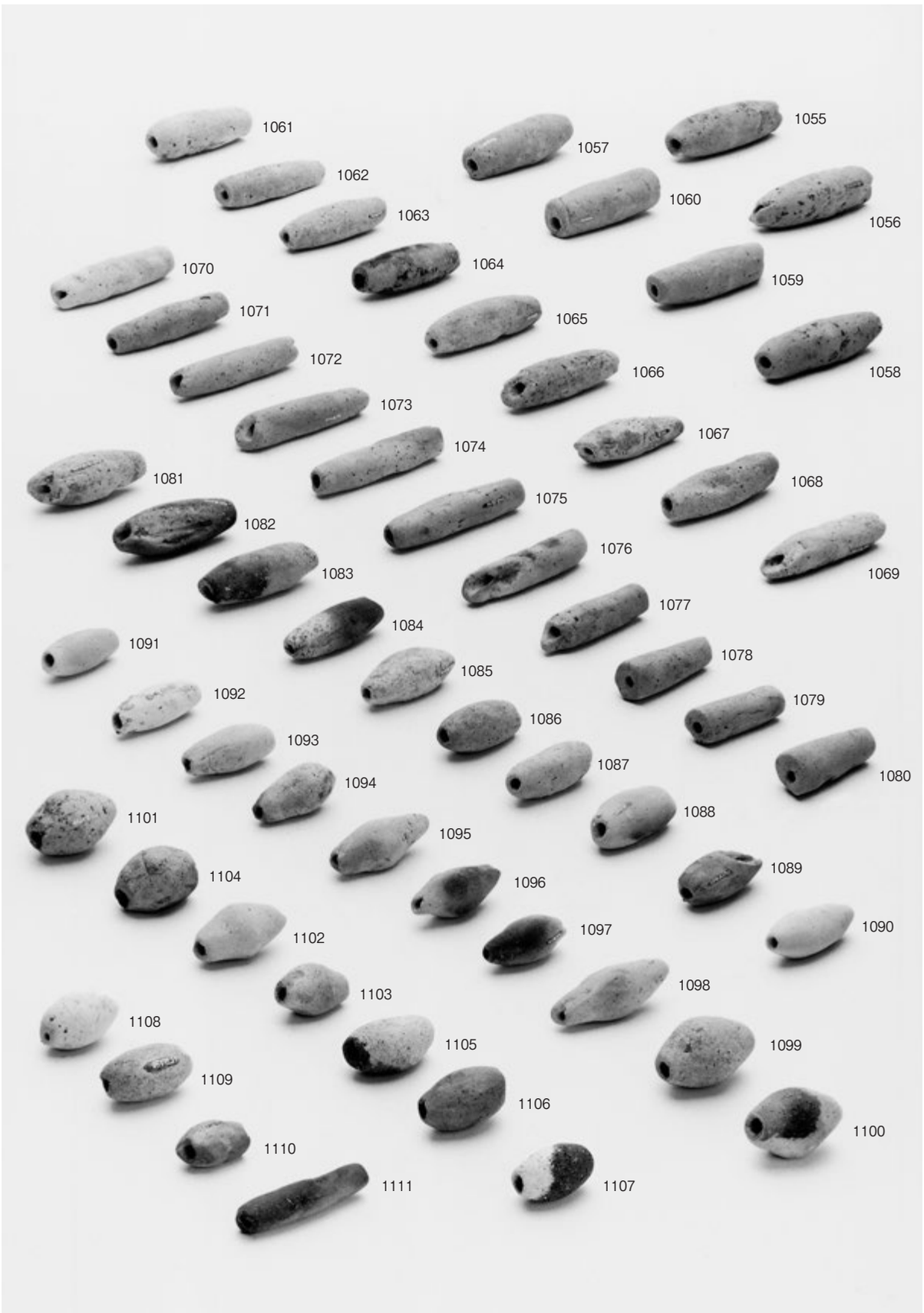

957


961 960 964

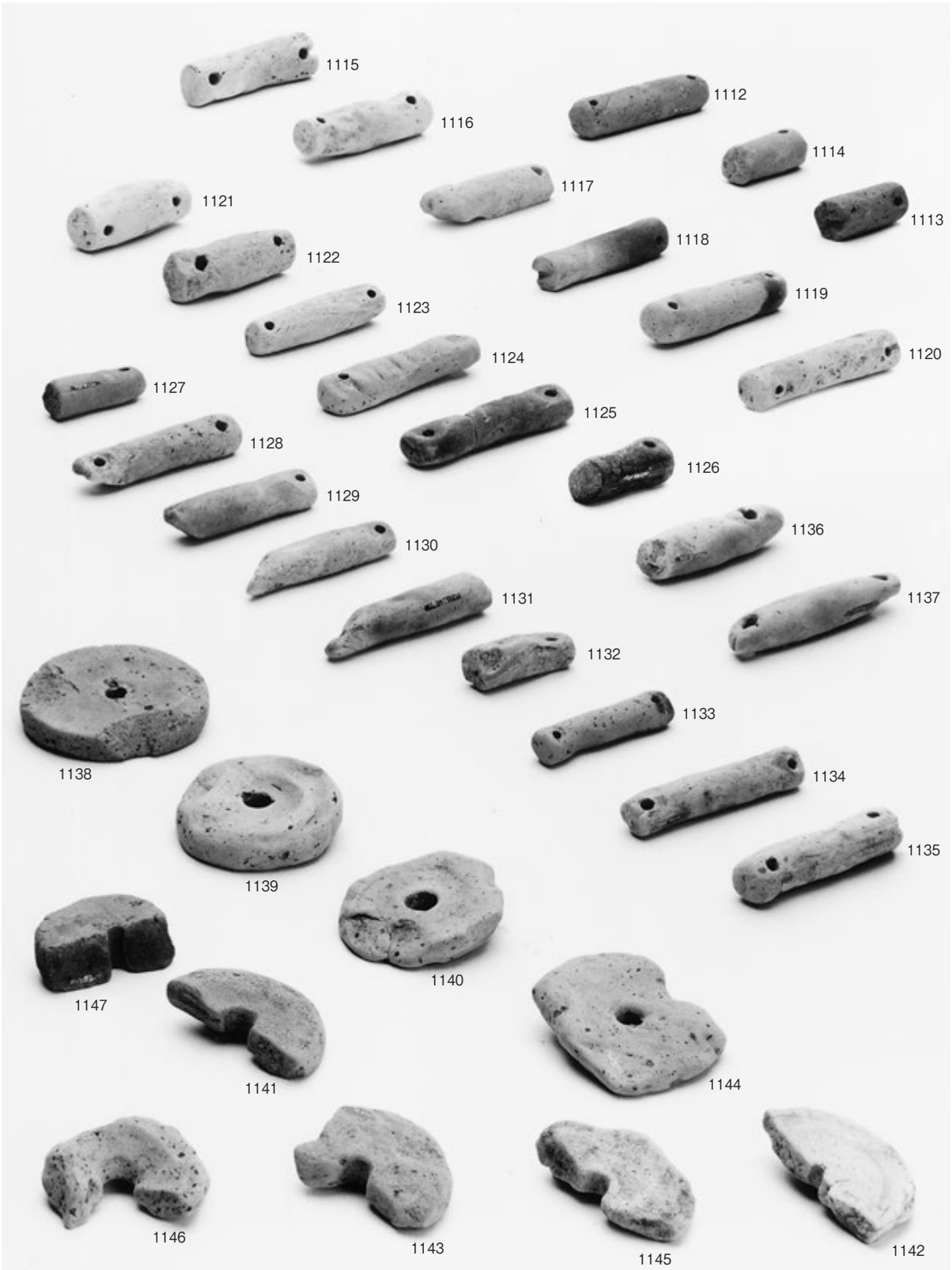

934


935

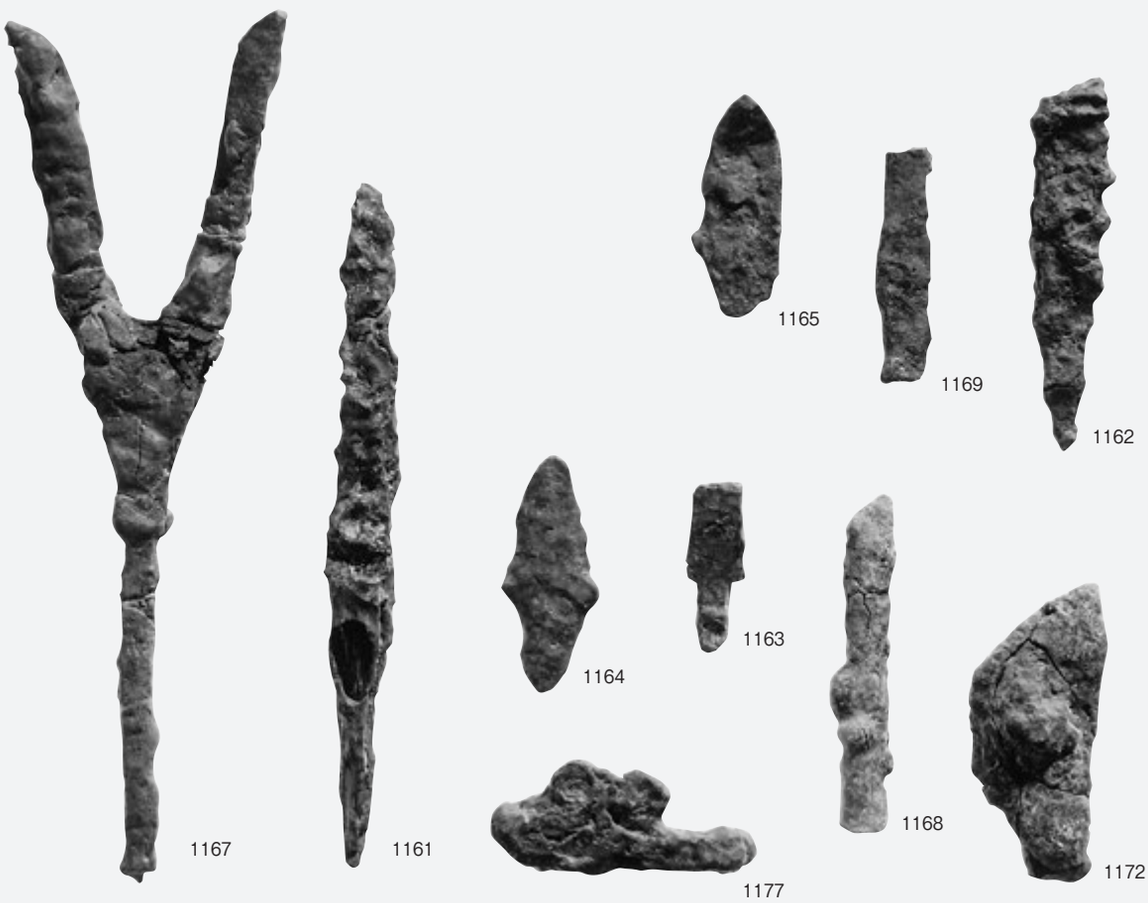
古代の須恵器2（壺・水差し・風字二面硯，獣脚及び転用硯）


1061
1057
1055
1062
1060
1063
1056
1070
1064
1059
1071
1065
1072
1066
1058
1073
1067
1074
1081
1068
1075
1082
1076
1083
1069
1077
1084
1091
1078
1085
1092
1079
1086
1093
1087
1080
1094
1101
1088
1095
1104
1089
1096
1102
1097
1090
1103
1098
1108
1105
1099
1109
1106
1100
1110
1111
1107

古代の土製品（管状土錘）



古代の土製品2（双孔棒状土錘・紡錘車）



上　古代の鉄器・鉄製品





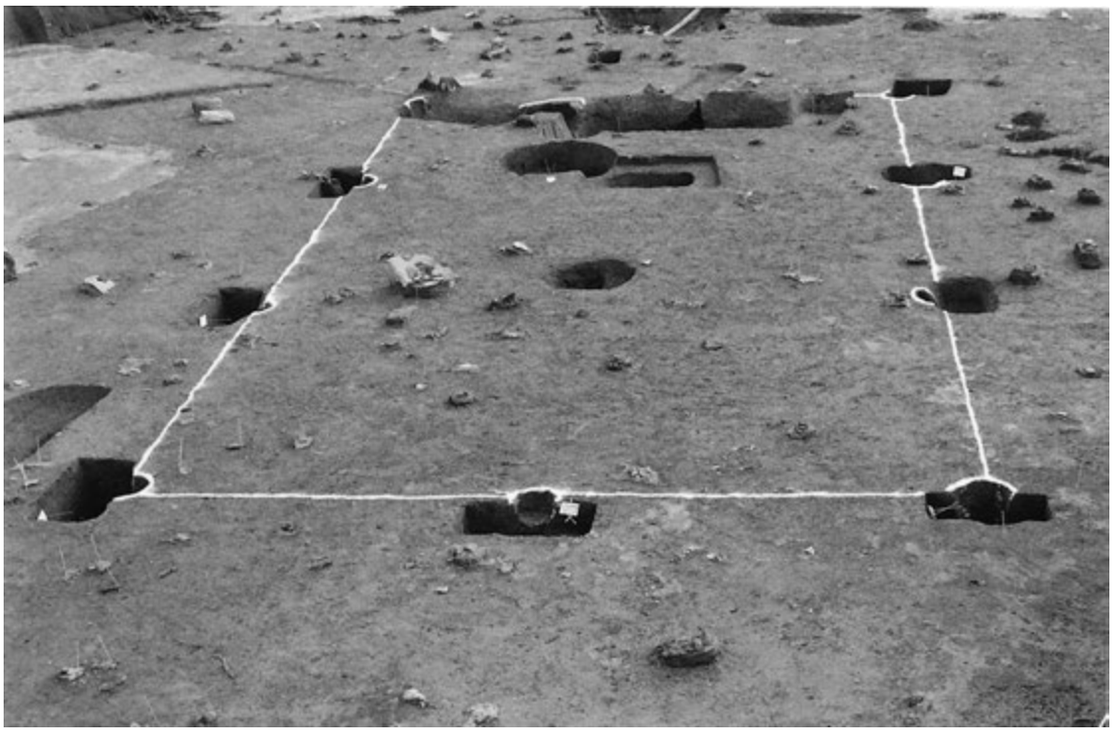




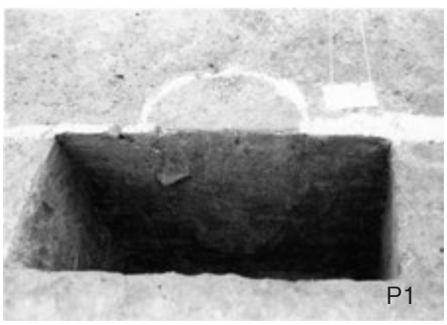


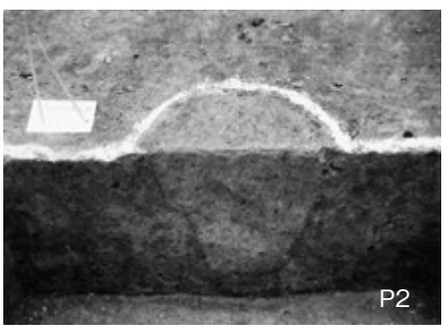


下　古代の石製品・玉類

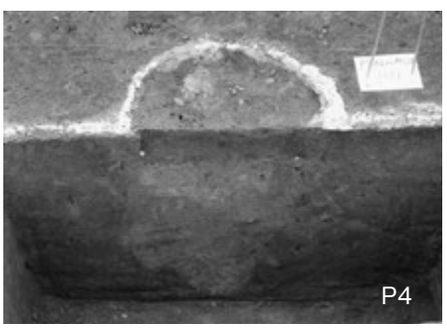


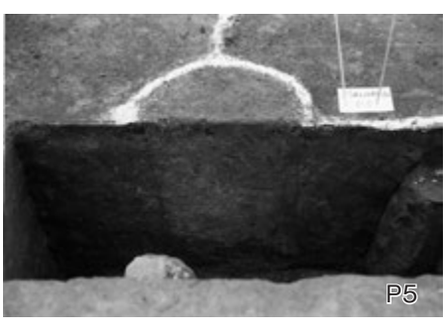
中世掘立柱建物跡

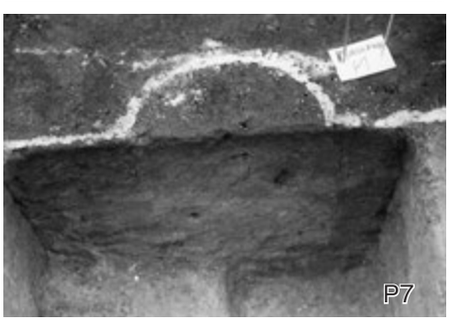












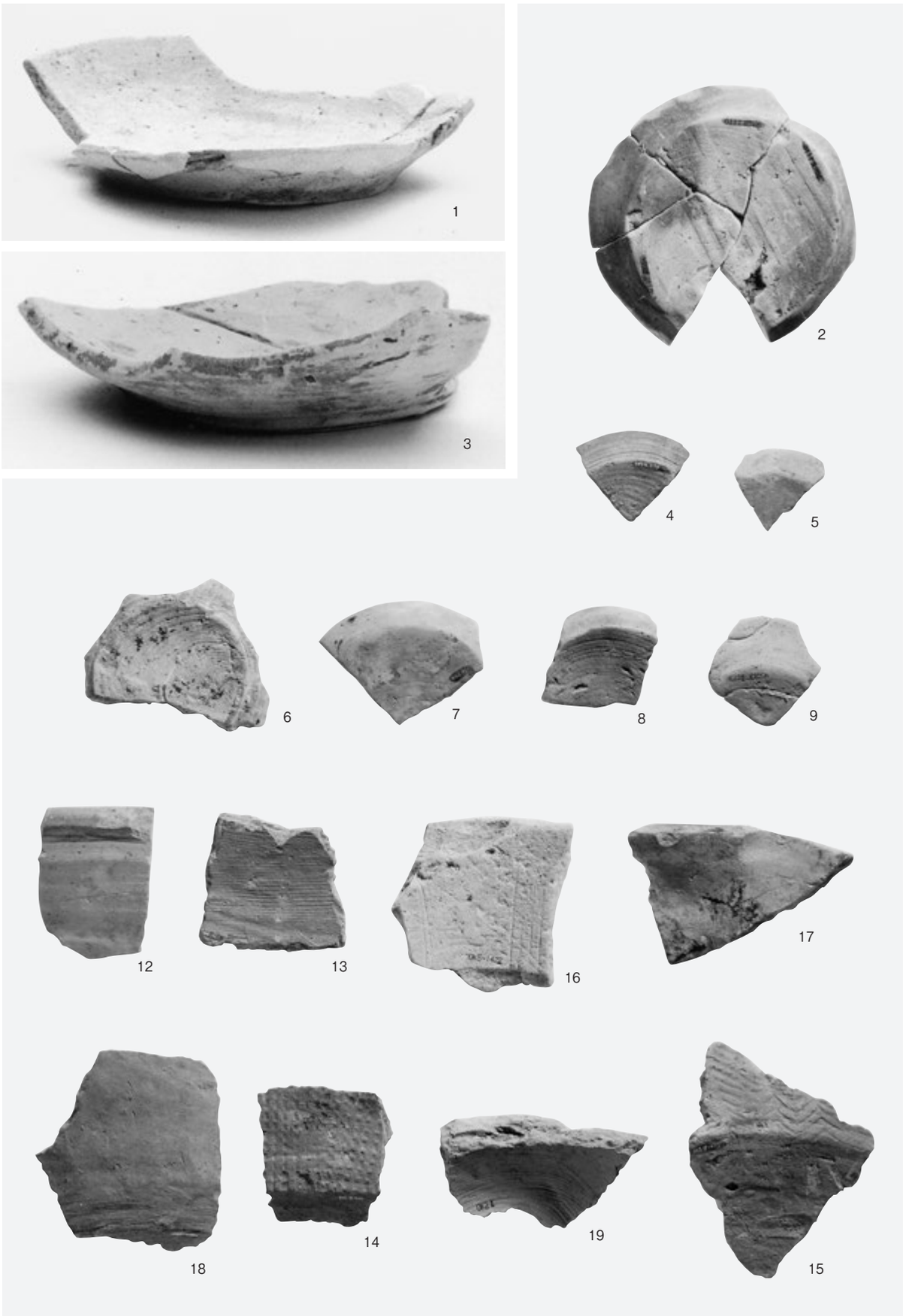
中世掘立柱建物跡ピット



中世の配石遺構



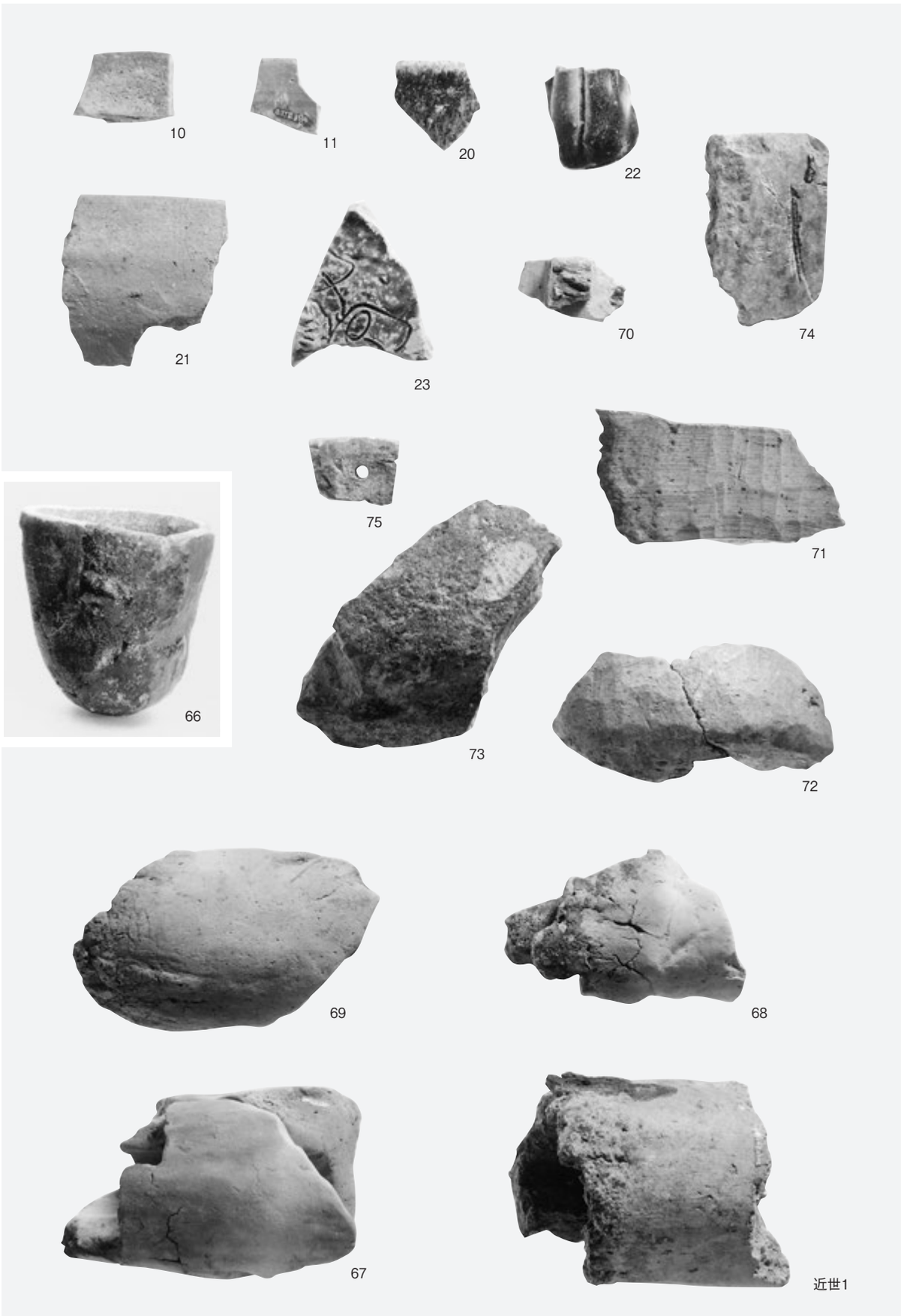
中世の畠跡



中世の遺物1（土師器・須恵器）



中世の遺物2（白磁・青白磁・青磁）



中世の遺物3（瓦器・土製品・滑石製品他）



近世の遺構　方形竪穴状遺構



大島遺跡調査区遠景

あ と が き

発掘調査初年度に，調査予定地の現況を把握しようと川内へ向かった。そこで，私たちが目の当たりにした光景は，新幹線建設予定地に建ち並ぶ住宅街や交通量の多い道路，作物の植えられた田畑であった。発掘調査まであと約１ヶ月という時期に目にするには，あまりにも厳しい現実であった。それでも，全長３㎞余りの確認調査を行うために，空き地や収穫の終わった畑，移転したばかりの住居跡など，わずかな隙間を見つけてはトレンチ設定ロープをハンマーで打ち込んだ。調査が始まると，作業員の移動距離が長く，交通量の多い道路を歩かなければならなかったり，歩道のすぐ横が調査区のため転落や進入の防止，側溝の泥上げ，重機の移動した道路の掃除，近隣住民の方とのコミュニケーションなど市街地ならではの問題が数多く発生した。また，トイレやテントの設置場所にも事欠くことが多かったことなどが，昨日のことのように思い出される。

大島遺跡の発掘調査は，計志加里遺跡，京田遺跡，川内川を挟んだ鍛冶屋馬場遺跡，15㎞離れた前畑遺跡と同時進行の時期があり，集中して調査する余裕がなかったけれども，貴重な遺物が数多く出土し県内でも極めて重要な遺跡であることから，ここに調査報告書を刊行できることは，発掘調査・整理作業に携わった者として大変感慨深いことであり，これからも誇りに思いたい。

多くの汗を流して発掘作業に従事して下さった地元の作業員，報告書作成のために努力して下さった整理作業員さんをはじめ，川内市教育委員会ならびに鉄道建設公団，開発公社，JVの関係各位の方々に厚くお礼を申し上げます。

（文化財主事　平木場秀男）

○発掘作業員（確認・本調査　平成11・12年度）

有村兼美・今村みどり・上場加代子・大迫涼子・柿田昭朗・上拾石伊津・上拾石克巳・上村成人・
川島四男・川原千代・吉川マリ・吉川ミヨ・木原スミ子・柊平幸伸・串木秀利・久保山　和・
黒木シイ子・黒木二治・桑原田堅蔵・小山和雄・迫口　薫・佐多　清・敷根俊英・高桑　茂・
高桑ミツエ・田島タツエ・田代典康・田中レイ子・田畑清己・田畑龍己・遠矢タケ・徳留公樹・
中尾芙美子・中島文夫・西園キヨ子・橋口昌子・橋口正義・橋元ヨリ・花木国哺・原田義一・
坊下光弘・堀之内　誠・松下ケイ子・丸目孝志・満田正明・宮下ミチ子・牟田尚子・桃原春江・
森　康憲・森園六男・山口一夫・山﨑絹子・山本敏江・吉川九州男・吉野喜久子

○整理作業員（平成15年度）

浅山順子・池田小百合・新徳より子・橋口　恵・畠山めぐみ・花田直美・本多直子・牧野田洋子・
松村郁美・宮坂多美子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査報告書（XIII）

大島遺跡

2005年3月

発行者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461
鹿児島県国分市上之段1175番地1
印　刷　和田印刷株式会社
〒891-0122
鹿児島県鹿児島市南栄三丁目1番
TEL（099）268-6221　FAX（099）268-6210